

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（4）

一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書（Ⅶ）

榎崎 B 遺跡

1993年 3 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



細石器文化の石斧



細石器文化の礫群



縄文時代晩期の土器



土層断面

序 文

鹿児島県教育委員会では、昭和54年度から一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴い、遺跡の確認調査および緊急発掘調査を実施しています。

この報告書は、平成元年度から平成3年度にかけて緊急全面発掘調査を実施した榎崎B遺跡の記録です。

この遺跡からは、旧石器時代、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代の各時期の遺物・遺構が発見されました。

なかでも、旧石器時代の礫群やピット群及び縄文時代晩期の土坑などの遺構や、縄文時代晩期の多量の土器などは、今後の研究に大いに役立つものと期待しています。

本報告書が南九州の歴史解明の一助となるとともに、文化財保護のために一役を担うことができれば幸いです。

終わりに、この発掘調査に御協力くださった建設省九州建設局大隅工事事務所や関係者の方々ならびに地元の皆様に感謝いたします。

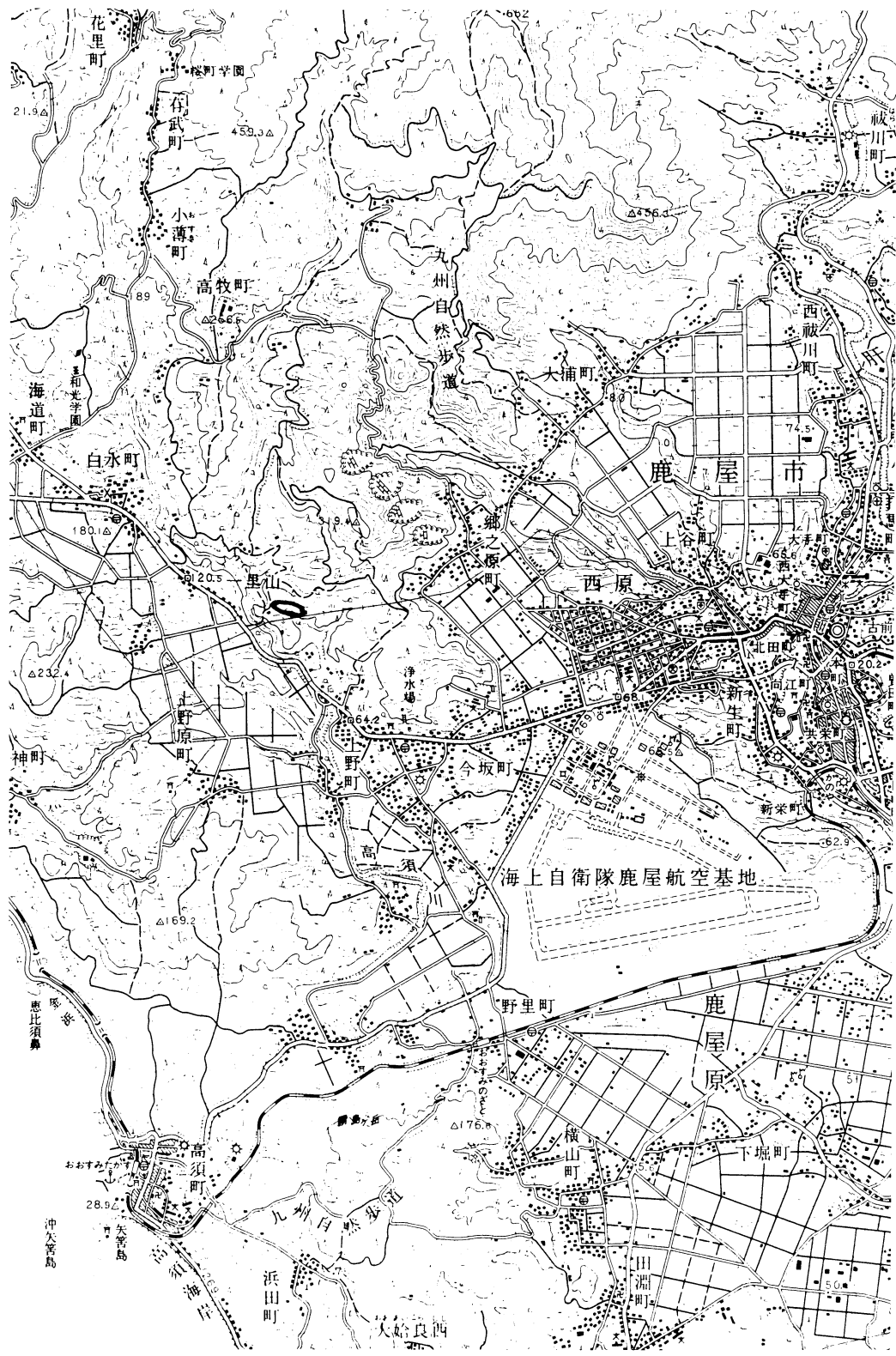
平成5年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 大久保 忠 昭

報告書抄録

フリガナ	エノキザキ					
書名	榎崎B遺跡					
副書名	国道220号鹿屋バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
巻次	Ⅶ					
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書					
シリーズ番号	4					
編著者名	井ノ上秀文, 宮田栄二, 熊崎明恵					
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター					
所在地	鹿児島県始良郡始良町平松6252					
発行年月日	1993年3月31日					
フリガナ	エノキザキ					
所収遺跡名	榎崎B遺跡					
フリガナ	カノヤシゴウノハラチョウエノキザキ					
所在地	鹿屋市郷之原町榎崎					
調査期間	19891204～19900323, 19900423～19910327, 19910416～19910610					
調査面積	8,200m ²					
調査原因	国道220号鹿屋バイパス建設					
出土遺物・遺構等	主な時代	主な遺構	主な時代	主な遺物	出土量	特記
	旧石器	ピット 21 礫群 9	旧石器	細石刃, 細石刃核, 磨製石斧, 削器等	バンケース 20箱	
	縄文早期	集石 35	縄文早期	石坂式土器, 塞ノ 神式土器, 石鏃, 石斧等	バンケース 100箱	
	縄文晩期	土坑 51 集石 2	縄文晩期	黒川式土器, 石鏃, 石斧, 磨石, 石皿 等	バンケース 150箱	
	奈良～ 平安	竪穴住居跡 1 掘立柱建物跡 3 溝状遺構 古道跡	古墳	成川式土器等	バンケース 20箱	
不明		奈良～ 平安	土師器, 須恵器, 刀子土錘等	バンケース 50箱		



橿崎B遺跡の位置

例 言

1. 本報告書は、一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う白水地区の榎崎B遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は鹿児島県鹿屋市郷之原町榎崎に所在し、県遺跡台帳の鹿屋市12-182に該当する。
3. 発掘調査は、建設省九州建設局大隅工事事務所からの受託事業として鹿児島県教育委員会が実施した。
4. 発掘調査は、平成元年度から平成3年度にかけて実施し、整理作業は平成4年度に実施した。
5. 本書の遺物番号は文化層毎に付している。遺物番号は本文、挿図、図版と一致する。
6. 挿図の縮尺は各図毎に示している。
7. 石器の石材については鹿児島大学法文学部助教授森脇広氏に鑑定していただいた。プラント・オパールについては宮崎大学農学部教授藤原宏志氏に、 C^{14} による年代測定はパリノ・サーヴェイ(株)に、礫群の土壌分析は名古屋工業技術試験所の渡辺栄次氏に依頼した。
8. 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
9. 現地調査に関する実測および写真撮影は、それぞれの調査担当者で行った。
本書の執筆分担は次の通りである。
第Ⅰ、Ⅵ章第1, 2, 3節1, 第Ⅸ章2(1), (2)……………井ノ上秀文
第Ⅲ, Ⅳ章第1, 2節1, 3第3節, 第Ⅴ章第1, 2, 3節2,
第Ⅵ章第3節2, 第Ⅸ章1, 2(2), 3(3)……………宮田 栄二
第Ⅳ章第2節2……………青崎 和憲
第Ⅴ章第3節1, 第Ⅶ, Ⅷ, 第Ⅸ章2(1), 4, 5……………熊崎 明恵
なお、第Ⅱ章は県埋蔵文化財発掘調査報告書(64)『西丸尾遺跡』の「位置と環境を」を加筆して掲載した。
10. 遺物の写真撮影は井ノ上秀文、宮田栄二、熊崎明恵が行った。
11. 本書の編集は鹿児島県立埋蔵文化財センターで行い、井ノ上秀文が担当した。

目 次

序 文	
例 言	
第 I 章 調査の経過	
第 1 節 調査に至るまでの経過	1
第 2 節 調査の組織	1
第 3 節 調査の概要と経過	4
第 II 章 位置と環境	
第 1 節 地理的環境	7
第 2 節 歴史的環境	8
第 III 章 遺跡の層位	17
第 IV 章 細石器文化の調査	
第 1 節 調査の概要	19
第 2 節 遺構	
1. 礫群	19
2. ピット群	25
3. 遺物の集中 (ブロック)	29
第 3 節 出土遺物	30
第 V 章 縄文時代早期の調査	
第 1 節 調査の概要	56
第 2 節 集石遺構	56
第 3 節 出土遺物	
1. 土器	73
2. 石器	92
第 VI 章 縄文時代晩期の調査	
第 1 節 調査の概要	106
第 2 節 遺構	
1. 土坑	106
2. 集石遺構	128
第 3 節 出土遺物	
1. 土器	129
2. 石器	195

第Ⅶ章 古墳時代の調査	
第1節 調査の概要	218
第2節 出土遺物	218
第Ⅷ章 奈良・平安時代の調査	
第1節 調査の概要	224
第2節 遺構	
1. 竪穴住居跡	224
2. 掘立柱建物跡	227
3. 溝状遺構及び古道	230
第3節 出土遺物	231
第Ⅸ章 調査のまとめ	248
第Ⅹ章 分析	
1 榎崎B遺跡におけるプラント・オパール分析結果について	259
2 礫群土壌分析（加熱について）	262
3 榎崎B遺跡 ¹⁴ C年代測定	267
4 榎崎B遺跡出土土器に付着した赤色顔料について	268

挿図目次

第1図	確認調査第3地点 トレンチ配置図 ……………	4	第29図	Ⅶ層出土石器(13) (ナイフ形石器, 台形石器) ……………	50
第2図	周辺の地形分類図と 縄文晩期の遺跡 ……………	7	第30図	集石1～3号 ……………	58
第3図	鹿屋バイパス関係の遺跡 ……	11	第31図	集石4～10号 ……………	59
第4図	周辺の遺跡 ……………	12	第32図	集石11, 13, 14号 ……………	60
第5図	調査区と周辺の地形 ……………	15	第33図	集石12号 ……………	61
第6図	基本土層柱状模式図 ……………	17	第34図	集石15～17号 ……………	62
第7図	各地点の土層 ……………	18	第35図	集石18～21号 ……………	63
第8図	細石器文化の遺構配置図 ……	21	第36図	集石22～26号 ……………	64
第9図	礫群(1) ……………	23	第37図	集石27～29号 ……………	65
第10図	礫群(2) ……………	24	第38図	集石30～32, 35号 ……………	66
第11図	礫群の礫重量組成 ……………	24	第39図	集石33号 ……………	67
第12図	細石器文化のピット A群 ……	27	第40図	集石34号 ……………	69
第13図	細石器文化のピット B群 ピット群全体図 ……………	28	第41図	集石重量組成(1) ……………	71
第14図	細石刃, 細石刃核出土分布 ……	31	第42図	集石重量組成(2) ……………	72
第15図	Ⅶ層出土石器(1) (細石刃①) ……	34	第43図	早期の土器分布図 ……………	75
第16図	Ⅶ層出土石器(2) (細石刃②) ……	35	第44図	早期の土器出土状況 ……………	76
第17図	細石刃計測グラフ……………	35	第45図	V層出土土器(1) (Ⅰ類) ……	77
第18図	Ⅶ層出土石器(3) (細石刃核①) ……	37	第46図	V層出土土器(2) (Ⅱa, Ⅱb類) 78	
第19図	Ⅶ層出土石器(4) (細石刃核②) ……	38	第47図	V層出土土器(3) (Ⅱc類) ……	79
第20図	Ⅶ層出土石器(5) (細石刃核③) ……	39	第48図	V層出土土器(4) (Ⅱ類胴部) ……	80
第21図	Ⅶ層出土石器(6) (細石刃核④) ……	40	第49図	V層出土土器(5) (Ⅱ類胴部) ……	81
第22図	ㄥ(7) (細石刃核⑤, 調整剥片) ……	41	第50図	V層出土土器(6) (Ⅱ類底部) ……	82
第23図	ㄥ(8) (削器, 使用痕剥片) ……	42	第51図	V層出土土器(7) (Ⅲa, Ⅲc類) 83	
第24図	その他の石器出土分布図 ……	43	第52図	V層出土土器(8) (Ⅲ類胴部Ⅳ類) 84	
第25図	Ⅶ層出土石器(9) (磨製石斧) ……	46	第53図	V層出土土器(9) (Ⅴ, Ⅵ, Ⅶ類) 85	
第26図	ㄥ(10) (礫器, 磨石, 敲石) ……	47	第54図	V層出土土器(10) (その他) ……	86
第27図	Ⅶ層出土石器(11) (石核①) ……	48	第55図	V層出土土器(11) (その他) ……	87
第28図	Ⅶ層出土石器(12) (石核②) ……	49	第56図	集石及び集石周辺出土土器(1) ……	88
			第57図	集石及び集石周辺出土土器(2) ……	89
			第58図	V層出土石器(1) (石鏃) ……	92

第59図	V層出土石器(2) (石斧, 礫器①)	95	第94図	Ⅲ層出土土器(3) (A類) ……	139
第60図	V層出土石器(3) (礫器②) ……	96	第95図	Ⅲ層出土土器(4) (B類) ……	140
第61図	V層出土石器(4) (礫器③) ……	97	第96図	Ⅲ層出土土器(5) (B類) ……	141
第62図	V層出土石器(5) (礫器④) ……	98	第97図	Ⅲ層出土土器(6) (B類) ……	142
第63図	V層出土石器(6) (礫器⑤) ……	99	第98図	Ⅲ層出土土器(7) (B, C類) ……	143
第64図	V層出土石器(7) (磨石・敲石①)	100	第99図	Ⅲ層出土土器(8) (C類) ……	144
第65図	V層出土石器(8) (磨石・敲石②)	101	第100図	Ⅲ層出土土器(9) (C類) ……	145
第66図	V層出土石器(9) (石皿) ……	102	第101図	Ⅲ層出土土器(10) (C類) ……	146
第67図	縄文時代早期の石器出土分布図 ……	103	第102図	Ⅲ層出土土器(11) (C類) ……	147
第68図	晩期の遺物出土状況 ……	106	第103図	Ⅲ層出土土器(12) (C類) ……	148
第69図	土坑1～6号 ……	109	第104図	Ⅲ層出土土器(13) (C類) ……	149
第70図	土坑7～9号 ……	110	第105図	Ⅲ層出土土器(14) (C類) ……	150
第71図	土坑10～15号 ……	111	第106図	Ⅲ層出土土器(15) (C類) ……	151
第72図	土坑16～22号 ……	112	第107図	Ⅲ層出土土器(16) (C, D類) ……	152
第73図	土坑23～28号 ……	113	第108図	Ⅲ層出土土器(17) (D類) ……	153
第74図	土坑29～34号 ……	114	第109図	Ⅲ層出土土器(18) (D類) ……	154
第75図	土坑35～40号 ……	115	第110図	Ⅲ層出土土器(19) (E類) ……	155
第76図	土坑41～45号 ……	116	第111図	Ⅲ層出土土器(20) ……	156
第77図	土坑46～51号 ……	117	第112図	Ⅲ層出土土器(21)	
第78図	土坑34, 35号遺物接合図 ……	118		(F類, 底部) ……	157
第79図	土坑内出土土器(1) ……	120	第113図	Ⅲ層出土土器(22) (底部) ……	158
第80図	土坑内出土土器(2) ……	121	第114図	Ⅲ層出土土器(23) (底部) ……	159
第81図	土坑内出土土器(3) ……	122	第115図	Ⅲ層出土土器(24) (G, H類) ……	160
第82図	土坑内出土土器(4) ……	123	第116図	Ⅲ層出土土器(25) (H類) ……	161
第83図	土坑内出土土器(5) ……	125	第117図	Ⅲ層出土土器(26) (H類) ……	162
第84図	土坑内出土石器(1) ……	126	第118図	Ⅲ層出土土器(27) (H類) ……	163
第85図	土坑内出土石器(2) ……	127	第119図	Ⅲ層出土土器(28) (H類) ……	164
第86図	集石遺構 ……	128	第120図	Ⅲ層出土土器(29) (H類) ……	165
第87図	Ⅲ層出土土器分布図(1) ……	132	第121図	Ⅲ層出土土器(30) (H類) ……	166
第88図	Ⅲ層出土土器分布図(2) ……	133	第122図	Ⅲ層出土土器(31) (H類) ……	167
第89図	Ⅲ層出土土器分布図(3) ……	134	第123図	Ⅲ層出土土器(32) (H類) ……	168
第90図	Ⅲ層出土土器分布図(4) ……	135	第124図	Ⅲ層出土土器(33) (H類) ……	169
第91図	Ⅲ層出土土器分布図(5) ……	136	第125図	Ⅲ層出土土器(34) (H類) ……	170
第92図	Ⅲ層出土土器(1) (A類) ……	137	第126図	Ⅲ層出土土器(35) (H類) ……	171
第93図	Ⅲ層出土土器(2) (A類) ……	138	第127図	Ⅲ層出土土器(36) (H類) ……	172

第128図	Ⅲ層出土土器(37) (H類) ……	173	第152図	Ⅲ層出土石器(7) (打製石斧③) ……	206
第129図	Ⅲ層出土土器(38) (H類) ……	174	第153図	Ⅲ層出土石器(8) (横刃形石器, 他) ……	207
第130図	Ⅲ層出土土器(39) (H類, 底部) ……	175	第154図	Ⅲ層出土石器(9) (礫器) ……	208
第131図	Ⅲ層出土土器(40) (I, J, K類) ……	176	第155図	Ⅲ層出土石器(10) (磨石・敲石①) ……	210
第132図	Ⅲ層出土土器(41) (K類) ……	177	第156図	Ⅲ層出土石器(11) (磨石・敲石②) ……	211
第133図	Ⅲ層出土土器(42) (K類) ……	178	第157図	Ⅲ層出土石器(12) (石皿) ……	212
第134図	Ⅲ層出土土器(43) (L類) ……	179	第158図	Ⅲ層出土軽石製品 ……	213
第135図	Ⅲ層出土土器(44) (L類) ……	180	第159図	Ⅲ層出土土製品, 石製品 ……	214
第136図	Ⅲ層出土土器(45) (L類) ……	181	第160図	古墳時代の土器出土状況 ……	219
第137図	Ⅲ層出土土器(46) (L類) ……	182	第161図	古墳時代の土器実測図(1) ……	220
第138図	Ⅲ層出土土器(47) (M類) ……	183	第162図	古墳時代の土器実測図(2) ……	221
第139図	Ⅲ層出土土器(48) (M類) ……	184	第163図	古墳時代の土器実測図(3) ……	222
第140図	Ⅲ層出土土器(49) (M, N, O類) ……	185	第164図	奈良・平安時代 遺構配置図 ……	225
第141図	Ⅲ層出土土器(50) (P, Q, R, S, T類) ……	186	第165図	竪穴住居跡 ……	226
第142図	Ⅲ層出土土器(51) (T類) ……	187	第166図	竪穴住居跡出土遺物 ……	226
第143図	Ⅲ層出土土器(52) (T, U, V類) ……	188	第167図	掘立柱建物跡 1, 2 ……	228
第144図	Ⅲ層出土石器分布図(1) ……	197	第168図	掘立柱建物跡 3, 4 ……	229
第145図	Ⅲ層出土石器分布図(2) ……	198	第169図	溝状遺構, 古道 ……	230
第146図	Ⅲ層出土石器(1) (石鏃) ……	199	第170図	土師器(1) ……	234
第147図	Ⅲ層出土石器(2) (磨製石鏃, 他) ……	200	第171図	土師器(2) ……	235
第148図	Ⅲ層出土石器(3) (異形石器, 他) ……	201	第172図	土師器(3) ……	236
第149図	Ⅲ層出土石器(4) (磨製石斧) ……	203	第173図	土師器(4) ……	237
第150図	Ⅲ層出土石器(5) (打製石斧①) ……	204	第174図	土師器(5) ……	238
第151図	Ⅲ層出土石器(6) (打製石斧②) ……	205	第175図	須恵器(1) ……	242
			第176図	須恵器(2) ……	243
			第177図	須恵器(3) ……	244
			第178図	須恵器(4) ……	245
			第179図	その他の遺物 ……	247

表 目 次

第1表	周辺の遺跡地名表(1)	13	第18表	土坑一覧表	119
第2表	周辺の遺跡地名表(2)	14	第19表	土坑出土土器観察表	124
第3表	細石器文化ピット一覧	26	第20表	土坑出土石器計測表	125
第4表	細石刃計測表(1)	51	第21表	Ⅲ層出土土器観察表(1)	189
第5表	細石刃計測表(2)	52	第22表	Ⅲ層出土土器観察表(2)	190
第6表	細石刃計測表(3)	53	第23表	Ⅲ層出土土器観察表(3)	191
第7表	細石刃計測表(4)	54	第24表	Ⅲ層出土土器観察表(4)	192
第8表	細石刃核計測表	54	第25表	Ⅲ層出土土器観察表(5)	193
第9表	その他の石器計測表	55	第26表	Ⅲ層出土土器観察表(6)	194
第10表	縄文時代早期集石一覧	57	第27表	縄文時代晚期石器組成表	195
第11表	V層出土土器観察表(1)	89	第28表	Ⅲ層出土石器計測表(1)	215
第12表	V層出土土器観察表(2)	90	第29表	Ⅲ層出土石器計測表(2)	216
第13表	V層出土土器観察表(3)	91	第30表	Ⅲ層出土石器計測表(3)	217
第14表	集石及び集石周辺 出土土器観察表	91	第31表	土製品、石製品観察表	217
第15表	V層出土石器計測表(1)	104	第32表	古墳時代の土器観察表	223
第16表	V層出土石器計測表(2)	105	第33表	土師器観察表(1)	239
第17表	未実測礫器計測表	105	第34表	土師器観察表(2)	240
			第35表	須恵器観察表	246

付 図 目 次

付図1	遺跡の土層(1)	付図4	V層地形図及び集石配置図
付図2	遺跡の土層(2)	付図5	Ⅲ層遺構配置図
付図3	Ⅵ層地形図及び遺物分布図		

図版目次

図版 1	遺跡遠景・近景	269	図版31	土坑(1)	299
図版 2	土層	270	図版32	土坑(2)	300
図版 3	礫群・ピット検出状況	271	図版33	土坑(3)	301
図版 4	ピット(1)	272	図版34	土坑(4)	302
図版 5	ピット(2)	273	図版35	土坑(5)	303
図版 6	ピット(3)	274	図版36	土坑(6)・集石	304
図版 7	礫群 1～8号	275	図版37	土坑出土土器(1)	305
図版 8	礫群 9号・細石刃(1)	276	図版38	土坑出土土器(2)	306
図版 9	細石刃(2)・細石刃核(1)	277	図版39	土坑出土土器(3)	307
図版10	細石刃核(2)	278	図版40	土坑出土土器(4)	308
図版11	細石刃核(3)・調整剥片	279	図版41	土坑出土土器(5)	309
図版12	石斧	280	図版42	土坑出土石器	310
図版13	礫器・敲石	281	図版43	Ⅲ層出土土器(1)	311
図版14	石核・ナイフ形石器・ 台形石器	282	図版44	Ⅲ層出土土器(2)	312
図版15	V層調査風景・ 遺物出土状況	283	図版45	Ⅲ層出土土器(3)	313
図版16	集石(1)	284	図版46	Ⅲ層出土土器(4)	314
図版17	集石(2)	285	図版47	Ⅲ層出土土器(5)	315
図版18	集石(3)	286	図版48	Ⅲ層出土土器(6)	316
図版19	V層出土土器(1)	287	図版49	Ⅲ層出土土器(7)	317
図版20	V層出土土器(2)	288	図版50	Ⅲ層出土土器(8)	318
図版21	V層出土土器(3)	289	図版51	Ⅲ層出土土器(9)	319
図版22	V層出土土器(4)	290	図版52	Ⅲ層出土土器(10)	320
図版23	V層出土土器(5)	291	図版53	Ⅲ層出土土器(11)	321
図版24	V層出土土器(6)	292	図版54	Ⅲ層出土土器(12)	322
図版25	V層出土石器(1)	293	図版55	Ⅲ層出土土器(13)	323
図版26	V層出土石器(2)	294	図版56	Ⅲ層出土土器(14)	324
図版27	V層出土石器(3)	295	図版57	Ⅲ層出土土器(15)	325
図版28	V層出土石器(4)	296	図版58	Ⅲ層出土土器(16)	326
図版29	V層出土石器(5)	297	図版59	Ⅲ層出土土器(17)	327
図版30	Ⅲ層遺物出土状況	298	図版60	Ⅲ層出土土器(18)	328
			図版61	Ⅲ層出土土器(19)	329
			図版62	Ⅲ層出土土器(20)	330

図版63	Ⅲ層出土土器(21)	……………	331	図版83	奈良・平安時代の 掘立柱建物跡	……………	351
図版64	Ⅲ層出土土器(22)	……………	332	図版84	竪穴住居跡の出土遺物	……………	352
図版65	Ⅲ層出土土器(23)	……………	333	図版85	奈良・平安時代の 出土遺物(1)	……………	353
図版66	Ⅲ層出土土器(24)	……………	334	図版86	奈良・平安時代の 出土遺物(2)	……………	354
図版67	Ⅲ層出土土器(25)	……………	335	図版87	奈良・平安時代の 出土遺物(3)	……………	355
図版68	Ⅲ層出土土器(26)	……………	336	図版88	奈良・平安時代の 出土遺物(4)	……………	356
図版69	Ⅲ層出土土器(27)	……………	337	図版89	奈良・平安時代の 出土遺物(5)	……………	357
図版70	Ⅲ層出土土器(28)	……………	338	図版90	奈良・平安時代の 出土遺物(6)	……………	358
図版71	Ⅲ層出土土器(29)	……………	339	図版91	土壌採取状況・遺跡見学会	…	359
図版72	Ⅲ層出土土器(30)	……………	340	図版92	赤色顔料のSEM像と X線スペクトル図	……………	360
図版73	Ⅲ層出土石器(1)	……………	341				
図版74	Ⅲ層出土石器(2)	……………	342				
図版75	Ⅲ層出土石器(3)	……………	343				
図版76	Ⅲ層出土石器(4)	……………	344				
図版77	Ⅲ層出土石器(5)	……………	345				
図版78	Ⅲ層出土石器(6)	……………	346				
図版79	Ⅲ層出土石器(7)	……………	347				
図版80	古墳時代の土器(1)	……………	348				
図版81	古墳時代の土器(2)	……………	349				
図版82	奈良・平安時代の 竪穴住居跡	……………	350				

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

昭和53年、建設省九州地方建設局は、一般国道220号鹿屋バイパスの建設を計画し、鹿児島県教育委員会に計画地内の文化財の有無について照会した。

鹿児島県教育委員会は、計画路線内の笠野原～祓川地区については昭和54年度に、大浦・郷ノ原地区については昭和59年度に分布調査を実施した。その結果、発見された遺跡については建設省九州地方建設局大隅工事事務所の委託を受け、県教育委員会によって発掘調査が実施された。

工事計画内の第2工区（白水地区）については、昭和62年1月に分布調査を実施し、遺物の散布地を確認した。その後、昭和62年8月～10月に確認調査が実施され、第3地点（榎崎B遺跡）は旧石器時代から奈良・平安時代にかけての遺跡であり、なかでも縄文早期及び晩期については大遺跡の存在が想定された。

そこで建設省大隅工事事務所と鹿児島県知事との間で発掘調査にかかわる委託契約が結ばれ、工事着手前に発掘調査が実施されることになった。

確認調査は昭和62年8月31日～昭和62年10月30日の間実施した。発掘調査は平成元年度は平成元年12月4日～平成2年3月23日の間実施し、平成2年度は平成2年4月23日～平成3年3月27日の間実施し、平成3年度は平成3年4月16日～平成3年6月10日の間実施した。

整理及び報告書作成作業は平成4年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。

第2節 調査の組織

【昭和62年度（確認調査）】

調査主体者	鹿児島県教育委員会	教育長	濱里 忠宣
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課長	吉井 浩一
調査企画者	〃	課長補佐	川畑 栄造
	〃	主任文化財研究員 兼埋蔵文化財係長	立園多賀生
調査事務担当者	〃	主幹兼企画助成係長	濱松 巖
	〃	主査	京田 秀允
	〃	主事	川畑由起子
調査担当者	〃	文化財研究員	旭 慶男
	〃	主査	牛ノ濱 修

【平成元年度】

調査主体者	鹿児島県教育委員会	教育長	濱里 忠宣
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課長	吉井 浩一

調査企画者	鹿児島県教育庁文化課	課長補佐	奥園 義則
	〃	主任文化財研究員 兼埋蔵文化財係長	吉元 正幸
調査事務担当者	〃	企画助成係長	京田 秀允
	〃	主 査	平山 章
	〃	主 事	末永 郁代
調査担当者	〃	主 査	新東 晃一
	〃	文化財調査員	関 一之

【平成2年度】

調査主体者	鹿児島県教育委員会	教 育 長	大田 務
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課 長	吉井 浩一
調査企画者	〃	課長補佐	濱松 巖
	〃	主任文化財研究員 兼埋蔵文化財係長	吉元 正幸
調査事務担当者	〃	主幹兼企画助成係長	濱崎 琢也
	〃	主 査	平山 章
	〃	主 事	末永 郁代
調査担当者	〃	主 査	青崎 和憲
	〃	主 事	宮田 栄二
	〃	文化財研究員	大久保浩二
	〃	文化財調査員	関 一之
	〃	〃	藤崎周太郎
	〃	〃	熊崎 明恵
調査指導者	文化庁記念物課文化財調査官		岡村 道雄
	鹿児島県文化財保護審議会委員		河口 貞徳
	宮崎大学農学部	教 授	藤原 宏志
	別府大学文学部	教 授	橘 昌信
	鹿児島大学法文学部	教 授	上村 俊雄
	〃	助 教 授	森脇 広
	〃	助 手	本田 道輝

【平成3年度】

調査主体者	鹿児島県教育委員会	教 育 長	大田 務
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課 長	向山 勝貞
調査企画者	〃	課長補佐	濱松 巖

	鹿児島県教育庁文化課	主任文化財研究員 兼埋蔵文化財係長	吉元 正幸
調査事務担当者	〃	主幹兼企画助成係長	濱崎 琢也
	〃	主 査	枇杷 雄二
	〃	主 事	新屋敷由美子
調査担当者	〃	主 査	青崎 和憲
	〃	主 事	宮田 栄二
	〃	文化財調査員	吉内 素子
調査指導者	鹿児島県文化財保護審議会委員		河口 貞徳
【平成4年度（整理・報告書作成作業）】			
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	大久保忠昭
調査企画者	〃	次長兼総務課長	水口 俊雄
	〃	主任文化財主事 兼調査課長	戸崎 勝洋
調査担当者	〃	文化財主事	井ノ上秀文
	〃	〃	宮田 栄二
	〃	文化財研究員	熊崎 明恵
調査事務担当者	〃	主 査	下園 勝一
	〃	主 事	中村 和代
調査指導者	鹿児島県文化財保護審議会委員		河口 貞徳
	岡山大学文学部	教 授	稲田 孝司
	鹿児島大学法文学部	教 授	上村 俊雄
	鹿児島大学法文学部	助 教 授	森脇 広
	鹿児島大学法文学部	助 手	本田 道輝
	東海大学文学部	助 教 授	織笠 昭
	立命館大学文学部	助 教 授	家根 祥多
	九州歴史資料館学芸二課	参事補佐	横田 義章
	福岡市教育委員会文化財整備課	鴻臚館跡調査担当主査	山崎 純男

なお、発掘調査中および整理作業中、次の方々から指導、助言をいただいた。（敬称略）

小林達雄（国学院大学）、春成秀爾、藤尾慎一郎（国立歴史民俗博物館）、田中良之（九州大学）、松永幸男、中村直子（鹿児島大学調査室）、中村明蔵（鹿児島女子短期大学）、鈴木忠司、山下秀樹（京都文化博物館）、黒坪一樹、中川和哉（京都府埋蔵文化財調査研究センター）、

小島達雄，小林裕二（群馬県埋蔵文化財調査事業団），上敷領久（東京都国分寺市教育委員会），諏訪問順（神奈川県小田原市教育委員会），堤 隆（長野県御代田町教育委員会），美濃口雅朗（熊本市教育委員会），和田好史（人吉市教育委員会），榎畑光博，矢部喜多夫（都城市教育委員会），岡元満子（鹿児島市教育委員会），山口俊博（鹿屋市教育委員会），パメラ・バンディーバ（スミソニアン研究所）

第3節 調査の概要と経過

ほぼ東西に走る計画道路のセンターガイであるNo500杭とNo505杭を基準にし，グリッドの東西ラインとし，西から1・2・3…区とした。またそれに直交して南から北へA・B・C…区とした。各グリッドの大きさは10m×10mである。

道路建設は暫定的に2車線分しか計画されていないため，南側部分の工事を行わない部分については調査を実施しなかった。ただし，取り付け道路や橋梁のアパット部分については調査を行った。

平成元年度は，遺跡の西側部分の橋梁のアパット部分と取り付け道路を含む，1～8区の調査を行った。縄文時代早期の遺物包含層までは8区まで調査を終了したが，7～8区については，旧石器時代の遺物包含層と礫群1基を確認した時点で調査を終了した。

平成2年度は7，8区の旧石器時代の遺物包含層を含めてほぼ全体の調査を行ったが，G～J-13～16区のV層（縄文早期），Ⅶ層（細石器）については，平成3年度に調査することとなった。

調査の結果，旧石器時代については，細石刃，細石刃核とともに2本の磨製石斧が出土した。また，7，8区において15個のピットを検出し，これを取り囲むように9基の礫群を確認した。

縄文時代早期については，貝殻文系の土器が出土し，遺構は35基の集石が検出されている。

縄文時代晩期については，51基の土坑と2基の集石が検出された。土器は多量の深鉢や黒色磨研の浅鉢等が出土し，石器は打製石斧の他に石鏃，石皿，磨石，敲石等が出土している。

古墳時代については成川式土器が出土しているが，量はそれほど多くない。



第1図 確認調査第3地点（榎崎B遺跡）トレンチ配置図

奈良～平安時代については土師器，須恵器が多量に出土したが遺物包含層は一部に残存しているのみであった。遺構は竪穴住居跡1基，掘立柱建物跡3基が検出された。

他に時期は明らかでないが，溝状遺構や道路状遺構が検出されている。

日誌抄

調査の経過については日誌抄により，1月ごとに略述する。

平成元年12月

4日より調査開始。F-6区Ⅲ，Ⅳ層の調査。G，H-6～8区Ⅲ，Ⅳ層の調査。

平成2年1月

G-5区Ⅳ層の調査。H-5，4区Ⅳ層の調査。G，H-6区Ⅳ，Ⅴ層の調査。I-4，5区Ⅲ，Ⅳ層の調査。

平成2年2月

F-6区，G-5，6区，H-4，5区Ⅲ層の調査。F-7，8区，H-6，7区，I-6区Ⅳ層の調査。G-5，6区，H-4，5区，I-3～6区Ⅴ層の調査。

平成2年3月

B，C-8区，D-7，8区，E-6，7区，F-5，6区，G，H-7，8区，I-7区Ⅳ層の調査。E-6区，F-5～8区，G-7，8区，H，I-5，6区，H，I-8区Ⅴ層の調査。G-7，8区南側及びG，H-8区東側にⅦ層以下の旧石器時代の遺物包含層確認のためのトレンチ設定，掘り下げ。遺物出土。

平成2年4月

23日より平成2年度の調査開始。G～I-7，8区Ⅵ，Ⅶ層の調査。H-18，H-20，H-22，G-24，I-20，G-22区に包含層の有無とその厚さを確認するためのトレンチ設定，掘り下げ。

平成2年5月

G～I-7，8区の調査。細石刃，細石刃核，局部磨製石斧等出土。礫群検出。F～I-29～34区の調査。2×3間の掘立柱建物跡検出。5月16日から西丸尾遺跡の調査開始。

平成2年6月

F～I-7～9区Ⅶ層の調査。新たに礫群1基検出。14～16日別府大学教授橘昌信先生現地指導。G～I-29～34区Ⅲ～Ⅶ層の調査。H，I-36区Ⅲ，Ⅳ層の調査。H，I-27，28区Ⅰ～Ⅲ層の調査。

平成2年7月

F～I-7～9区の調査。礫群（Ⅳ号）科学保存処理，取り上げ，実測，土壤サンプリング（Ⅱ，Ⅲ，Ⅵ，Ⅸ号）。H，I-24～29区Ⅲ層の調査。3日河口貞徳先生現地指導。

平成2年8月

G～I-7，8区Ⅶ，Ⅷ層の調査。礫群のほかにピット検出。H，I-25～28区Ⅲ層の調査。土坑検出，掘り下げ。H-28区，I-25区Ⅳ～Ⅶ層の調査。

平成2年9月

F～I-7, 8区礫群, ピット群の調査。G～I-9～13区の調査。G～I-21～24区I～III層の調査。H-25, 26区III層の調査。12日河口貞徳先生現地指導。17日文化庁記念物課文化財調査官岡村道雄先生現地指導。21日現地説明会。

平成2年10月

G～I-9～12区I～VI層の調査。H, I-23, 24区III層の調査。早期の集石, 晩期の土坑の調査。1日宮崎大学藤原宏志先生プラント・オパールのための土壌サンプル採取。

平成2年11月

G～I-9～13区III～VII層の調査。早期の集石, 晩期の土坑の調査。

平成2年12月

G～I-9～12区V～VII層の調査。塞ノ神式土器, 集石検出。細石刃核, 細石刃, 局部磨製石斧等出土。D～G-12～16区の調査。土師器, 須恵器出土。G-16区から奈良～平安時代のものと考えられる住居跡検出。中から鉄製刀子出土。晩期の土坑の調査。

平成3年1月

D～F-13～16区, F, G-15, 16区III～V層の調査。G～I-21～28区V層の調査。I-20～24区III～IV層の調査。H～J-17, 18区III層の調査。H-21, 25区IV層の調査。集石, 土坑の調査。G-16区竪穴住居跡の調査。

平成3年2月

G～I-19, 20区I～III層の調査。G, H-13～16区I, II層の調査。I-13～16区I～III層の調査。G～J-17, 18区III, IV層の調査。G, H-21～24区V層の調査。

平成3年3月

G～I-13～16区III～IV層の調査。I, J-17, 18区V層の調査。G～I-19, 20区III～V層の調査。早期の集石, 晩期の土坑の調査。27日で2年度の調査終了。

平成3年4月

16日より平成3年度の調査開始。H-13, 14区III層の調査。G～I-13, 14区V層の調査。G～J-15～16区IV, V層の調査。

平成3年5月

G～J-13～16区V層の調査。G～I-13, 14区VI層の調査。G～J-13～16区VII層の調査。VII層上面でH区が馬の背状に延び, G区及びH区へ傾斜している。

平成3年6月

G～J-13～16区VII層の調査。遺物の出土は少ない。3, 4日河口貞徳先生現地指導。10日で榎崎B遺跡の調査をすべて終了。

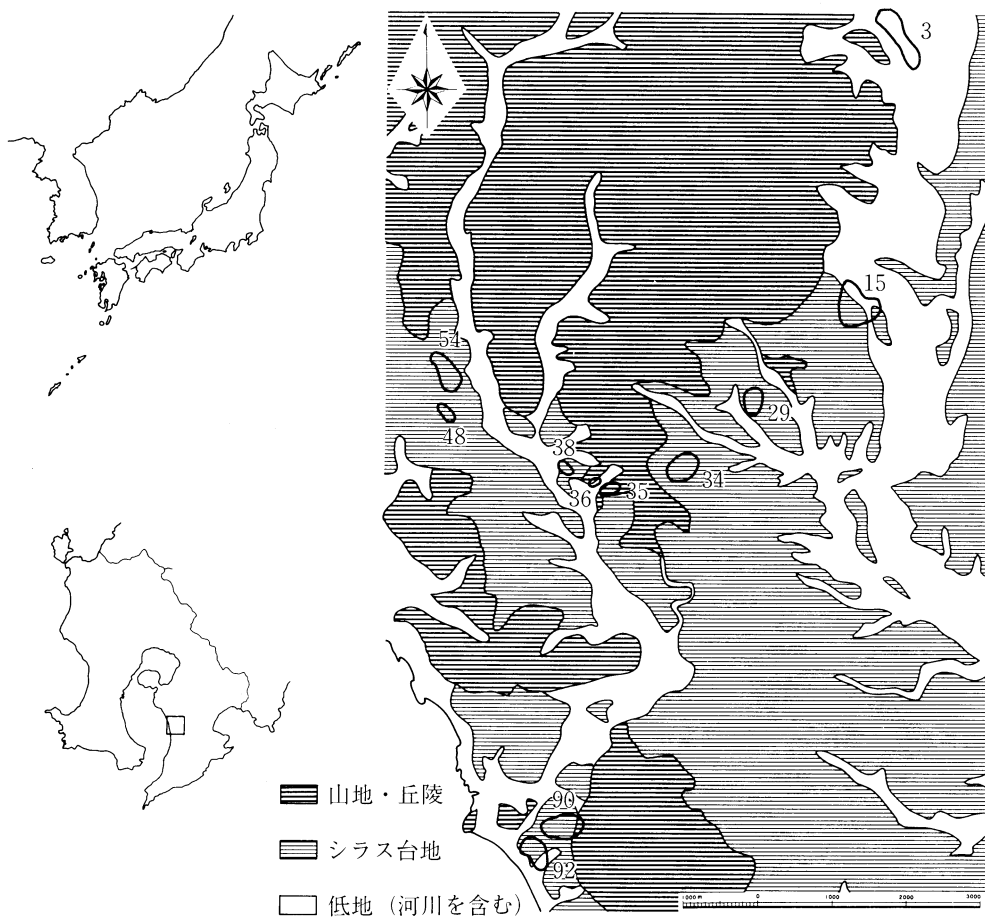
第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地理的環境

榎崎B遺跡は、鹿屋市郷之原町榎崎に所在し、高隈山系より流れる高須川左岸に広がる花岡台地と呼称される火山灰砂（シラス）台地東北端に立地する。

鹿屋市は、九州南東部の大隅半島中央部に位置し、半島の政治、経済、文化上の中心としての機能を果たしている。鹿屋市は、『和名抄』によると、始羅郡の鹿屋郷と野裏郷に比定され、地名の由来は、カヤが密生していたため、「カヤ」と呼ばれ、後に「カノヤ」に転訛したものともいわれている。市の東北部には砂質岩、泥質岩、花崗岩よりなる1000m級の高隈山系が、西南部には安山岩、溶結凝灰岩よりなる700～800m級の肝属山系が連なるが、そのほか大部分において発達したシラス台地が形成されている。西側は鹿児島湾に接している。

シラス台地は、南九州に一般的にみられる地形で、約22,000年前に始良カルデラから噴出し



第2図 周辺の地形分類図と縄文晩期の遺跡

た火砕流堆積物によるもので、生産性の低い土壌にもかかわらずサツマイモや落花生を主とする畑作地帯となっている。本地区の台地は、高須川、肝属川、串良川による開析の結果、大小さまざまなシラス台地に分断されたが特に西から鹿屋原・笠野原・永吉の三台地は大規模であることで知られる。なお、これらのシラスは数100mもの堆積があり、滞水層に達するまで数10mを要するため、本格的に畑作地帯として利用されるようになったのは、畑地灌漑事業により、ダムによる台地の灌漑が進められるようになった昭和期以降のことである。それ以前は水の供給は不便をきたし、鹿屋市の東隣りに位置する串良町の土持堀の深井戸（県指定）の例にみられるように数10mの井戸を掘り、牛を使って汲み上げるなど大変な労力が必要であったと思われる。

榎崎B遺跡が存在する郷之原町は鹿屋市の西北部に位置し、北側は高隈山系が連なり高須川により深く浸食された丘陵地帯となる。南側は高須川低地、上記の鹿屋原台地の西側に当たる浸食の進んでいない花岡台地となる。榎崎B遺跡は花岡台地の東北側縁辺に立地し、西側を高隈山系を源とする高須川が東南方向へ流れる。標高約110～122m、川との比高約30mで、急崖となる。西側300mの対岸には西丸尾遺跡が存在している。榎崎B遺跡と小谷を挟んだ東側に榎崎A遺跡が存在し、標高約106mの南側に舌状に伸びた丘陵の末端に立地する。

現在、遺跡周辺は、国立鹿屋体育大学が1981年に開校したことに伴い、市街地化が進行しつつある。

第2節 歴史的環境

鹿屋市内の遺跡は、昭和50年には18カ所を数えるのみであったが、昭和58年には83カ所と急増、現在約200カ所を数える。これらの中には、発掘調査されたものも少なくない。鹿屋市内の主な遺跡を時代を追って概観する。

旧石器時代

鹿屋市内を含めて大隅半島ではこれまでこの時代の報告が少なかったが、最近発見されつつある。榎崎A遺跡では、細石器文化期の遺物が、また西丸尾遺跡では、細石器とナイフ形石器文化の両文化層の礫群遺構と多くの遺物が検出されている。約17,000年前のP17火山灰より下位に検出されたナイフ形石器文化には、尖頭器が共伴しており、注目されている。

縄文時代

草創期の遺跡としては南町の伊敷遺跡が著名である。薩摩火山灰の下部より、隆帯文土器と石斧が検出された。西丸尾遺跡では2基の礫群と1基の配石遺構が検出され、後者は脂肪酸分析により墓の可能性が高いと分析されている。

早期になると、上楠原遺跡で前平式土器、手向山式に類似する押型文土器、塞ノ神式土器と集石が、岩之上遺跡で、石坂式・吉田式土器と集石6基が、打馬平原遺跡で、土壙6基、集石27基と、石坂式・吉田式・前平式・押型文土器・塞ノ神式土器や各種の石器が出土している。谷平遺跡では、集石2基、土壙1基、各種の土器が出土している。前畑遺跡では、多くの集石

遺構とともに平椀式土器（壺形を含む）の単純遺跡の調査がなされている。榎崎A遺跡でも集石遺構や遺物が出土している。

前期の遺物が出土した主な遺跡として、神野牧遺跡、榎田下遺跡、中ノ原遺跡、榎木原遺跡があげられる。それぞれ曾畑式土器、集石6基と轟式・曾畑式系統の土器、集石3基と轟式系統の土器、曾畑式土器が出土している。

中期に該当する遺物が出土した遺跡は今のところ発見例が少なく、県内他地域の傾向と同様であるが、榎木原遺跡、榎田下遺跡、前畑遺跡、飯盛ヶ岡遺跡等でわずかながら検出されている。

後期になると榎田下遺跡で市来式土器が、中ノ原遺跡で指宿式・市来式・西平式土器が、榎木原遺跡では、岩崎上層式・市来式土器等が出土している。昭和54年の鎮守ヶ迫遺跡の調査では、主として指宿式土器が出土している。なお、柴立遺跡・小薄遺跡は、この時期の遺跡として知られている。

晩期の遺物が出土した遺跡としては、上祓川遺跡群の丸岡・水ノ谷遺跡、宮の脇遺跡、榎木原遺跡、中ノ原遺跡、中原山野遺跡等があげられる。水ノ谷遺跡では上加世田式土器の時期に比定される6基の円形堅穴住居址や黒川式土器にとまう孔列土器の他多くの石器、土器が検出され、榎木原遺跡で入佐式・黒川式土器を、中ノ原遺跡で入佐式土器を中心として出土している。

上記のとおり、鹿屋市には縄文時代の遺跡が多数存在し、本県における重要な情報提供地域となっている。

弥生時代

水の谷遺跡、榎木原遺跡では前期から中期にかけての資料が検出されている。特に板付Ⅱ式に比定される壺や亀ノ甲式の甕、榎木原遺跡ではさらに西瀬戸内の影響を思わせる縦位突帯を持つ壺などは大隅半島における当時の状況を把握するために大切な資料である。王子遺跡は中期末から後期初頭の大集落として全国に広く知られている。中ノ丸遺跡では中期末から後期初頭にかけての堅穴住居址や円形周溝遺構が検出され、中ノ原遺跡、前畑遺跡でも本時期の遺構、遺物が検出されている。高付遺跡では中期から古墳時代にかけての河内・瀬戸内・東九州地方の影響を考えさせる資料が出土している。

古墳時代

大隅半島の志布志湾沿岸や肝属川流域は、高塚古墳や地下式横穴の本県における分布の中心地となっている。鹿屋地方では、西祓川町の円墳3基と、短甲と衝角付冑が出土した地下式横穴、野里町の円墳3基、岡泉B遺跡の円墳3基、大浦町の地下式横穴が知られる。本時代の生活遺跡としては、成川式土器を主体とした早山・宮の脇遺跡、上原遺跡、俣刈遺跡、鶴羽遺跡等が知られる。

歴史時代

平安時代の遺物が出土した遺跡として、飯盛ヶ岡遺跡、榎崎A・B遺跡、宮の脇遺跡等があげられる。宮の脇遺跡では、青銅製の帯金具が出土し古代官位制を示す貴重な資料として注目されている。中ノ原遺跡では中世から近世にかけて、中ノ丸遺跡・川ノ上遺跡では近世の遺構

遺物が検出されている。なお、南北朝から戦国時代にかけての山城が多数存在している。

一般国道220鹿屋バイパス路線内の遺跡

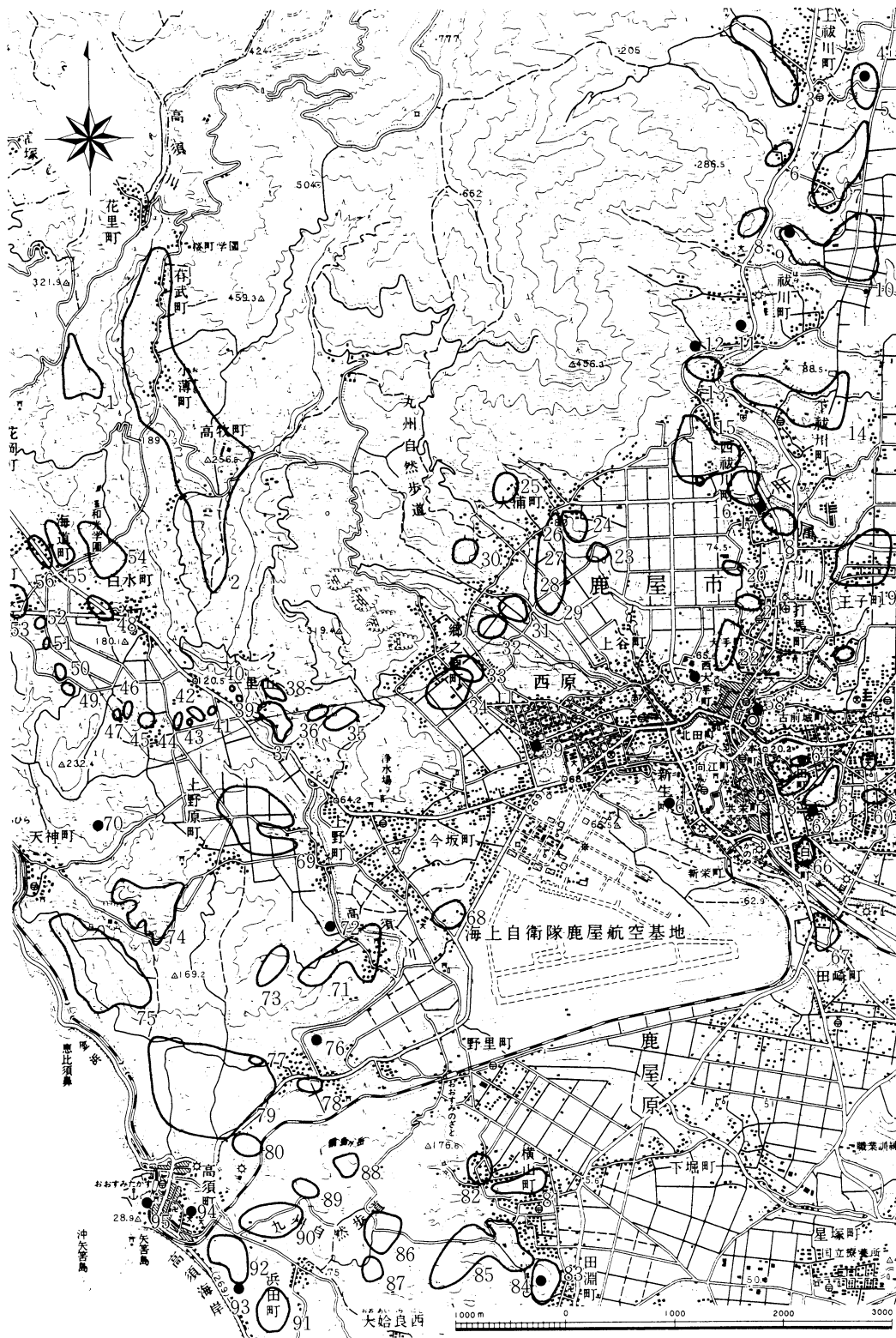
昭和53年に計画された鹿屋バイパスの建設にともない、調査は、昭和54年の第一次分布調査を皮切りに王子地区、大浦・郷之原地区、白水地区の調査を経て、平成4年6月の西丸尾B遺跡の調査まで連綿と続けられた。その結果、王子遺跡を始め次々と貴重な遺跡が調査されることとなり、鹿屋地区の歴史の解明に大きく貢献している。それらの詳細については前段に記載してあるが、各時期の遺構、遺物が検出された複合遺跡が多いことも注目されよう。なお、引き続き古江バイパスの建設が計画され分布調査も行われている。

参考文献

1. 土地分類基本調査 志布志湾地域開発地域 「鹿屋・志布志」国土調査 1971
2. 鹿屋市史
3. 「全国遺跡地図鹿屋島県」 文化庁 1975
4. 鹿屋島県埋蔵文化財調査報告書⁹⁾ 「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」 鹿屋島県教育委員会 1978
5. 鹿屋島県埋蔵文化財調査報告書¹³⁾ 「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」 鹿屋島県教育委員会 1980
6. 鹿屋島県埋蔵文化財調査報告書²³⁾ 「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」 鹿屋島県教育委員会 1982
7. 鹿屋島県埋蔵文化財調査報告書²⁵⁾ 「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」 鹿屋島県教育委員会 1983
8. 鹿屋島県埋蔵文化財発掘調査報告書²⁹⁾ 「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」 鹿屋島県教育委員会 1984
9. 鹿屋島県埋蔵文化財発掘調査報告書³⁴⁾ 一般国道220号線鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書(Ⅰ) 「王子遺跡」 鹿屋島県教育委員会 1985
10. 鹿屋島県埋蔵文化財発掘調査報告書⁴⁴⁾ 「榎木原遺跡」 鹿屋島県教育委員会 1987
11. 鹿屋島県埋蔵文化財発掘調査報告書⁴⁸⁾ 一般国道220号線鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書(Ⅱ) 「概要編・榎木原遺跡・中ノ丸遺跡・川ノ上遺跡・中ノ原遺跡(Ⅰ)」 鹿屋島県教育委員会 1989
12. 鹿屋島県埋蔵文化財発掘調査報告書⁵¹⁾ 「榎木原遺跡Ⅱ」 鹿屋島県教育委員会 1989
13. 鹿屋島県埋蔵文化財発掘調査報告書⁵²⁾ 一般国道220号線鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書(Ⅲ) 「中ノ原遺跡(Ⅱ)・中原山野遺跡・西原掩体壕跡・前畑遺跡」 鹿屋島県教育委員会 1990
14. 鹿屋島県埋蔵文化財発掘調査報告書⁵³⁾ 「榎木原遺跡Ⅲ」 鹿屋島県教育委員会 1990
15. 鹿屋島県埋蔵文化財発掘調査報告書⁶³⁾ 「榎崎A遺跡」 鹿屋島県教育委員会 1992
16. 鹿屋島県埋蔵文化財発掘調査報告書⁶⁴⁾ 「西丸尾遺跡」 鹿屋島県教育委員会 1992
17. 鹿屋市埋蔵文化財調査報告書¹⁾ 「上祇川遺跡群(上楠原・水ノ谷・丸岡遺跡)」 鹿屋市教育委員会 1984
18. 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書²⁾ 「高付遺跡」 鹿屋市教育委員会 1984
19. 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書³⁾ 「俣刈遺跡・鶴羽遺跡」 鹿屋市教育委員会 1985
20. 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書⁴⁾ 「早山遺跡・宮の脇遺跡」 鹿屋市教育委員会 1986
21. 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書⁵⁾ 「水の谷遺跡」 鹿屋市教育委員会 1986
22. 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書⁶⁾ 「岩之上遺跡」 鹿屋市教育委員会 1987
23. 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書⁷⁾ 「柿窪遺跡・城ヶ崎遺跡・大久保遺跡」 鹿屋市教育委員会 1987
24. 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書⁸⁾ 「打馬平原遺跡」 鹿屋市教育委員会 1988
25. 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書¹¹⁾ 「大畑平遺跡」 鹿屋市教育委員会 1989
26. 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書¹²⁾ 「岡泉(Ⅰ)遺跡」 鹿屋市教育委員会 1989
27. 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書¹³⁾ 「岡泉(Ⅱ)遺跡」 鹿屋市教育委員会 1989
28. 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書¹⁴⁾ 「神野牧遺跡」 鹿屋市教育委員会 1989
29. 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書¹⁵⁾ 「谷平遺跡」 鹿屋市教育委員会 1989
30. 「鹿屋郷土史」 鹿屋町教育會纂 1928
31. 鹿屋島県埋蔵文化財調査報告書³⁶⁾ 「鹿屋島県市町村別遺跡地名表」 鹿屋島県教育委員会 1985
32. 「鹿屋島県埋蔵文化財の知識」 鹿屋島県教育委員会 1986
33. 「南九州縄文研究通信No.1」 南九州縄文研究会 1987
34. 「南九州縄文研究通信No.2」 南九州縄文研究会 1989
35. 「南九州縄文通信No.3」 南九州縄文研究会 1990
36. 「南九州縄文通信No.4」 南九州縄文研究会 1991
37. 河口貞徳 日本の古代遺跡38 「鹿屋島」 保育社 1988
38. 鹿屋島県教育委員会 「相対する旧石器遺跡—鹿屋島県榎崎B遺跡・西丸尾遺跡」 季刊考古学 第34号 雄山閣 1991
39. 原口虎雄 「鹿屋島県の歴史」 県史シリーズ46 山川出版社 1973



第3図 鹿屋バイパス関係の遺跡



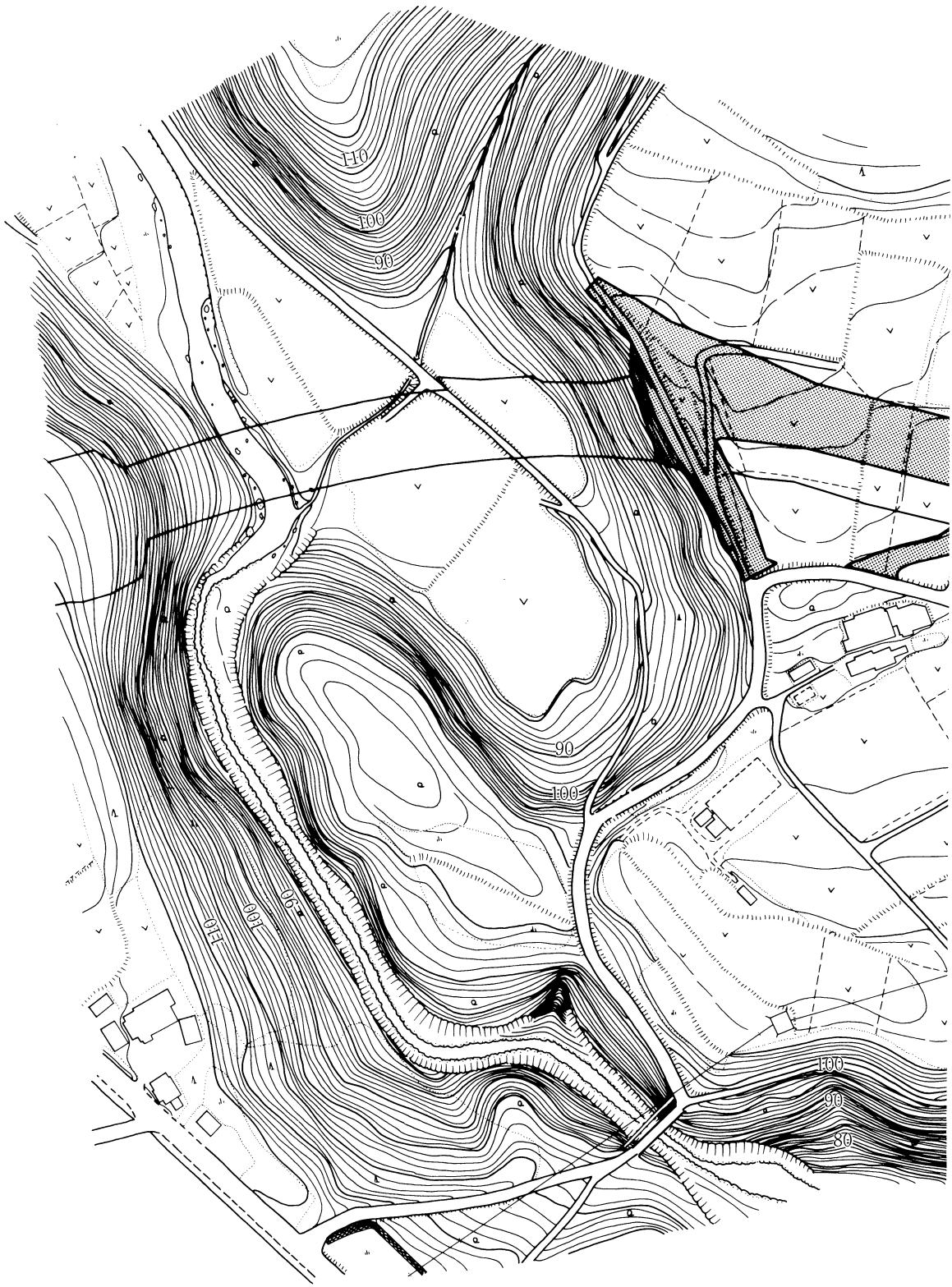
第4図 周辺の遺跡

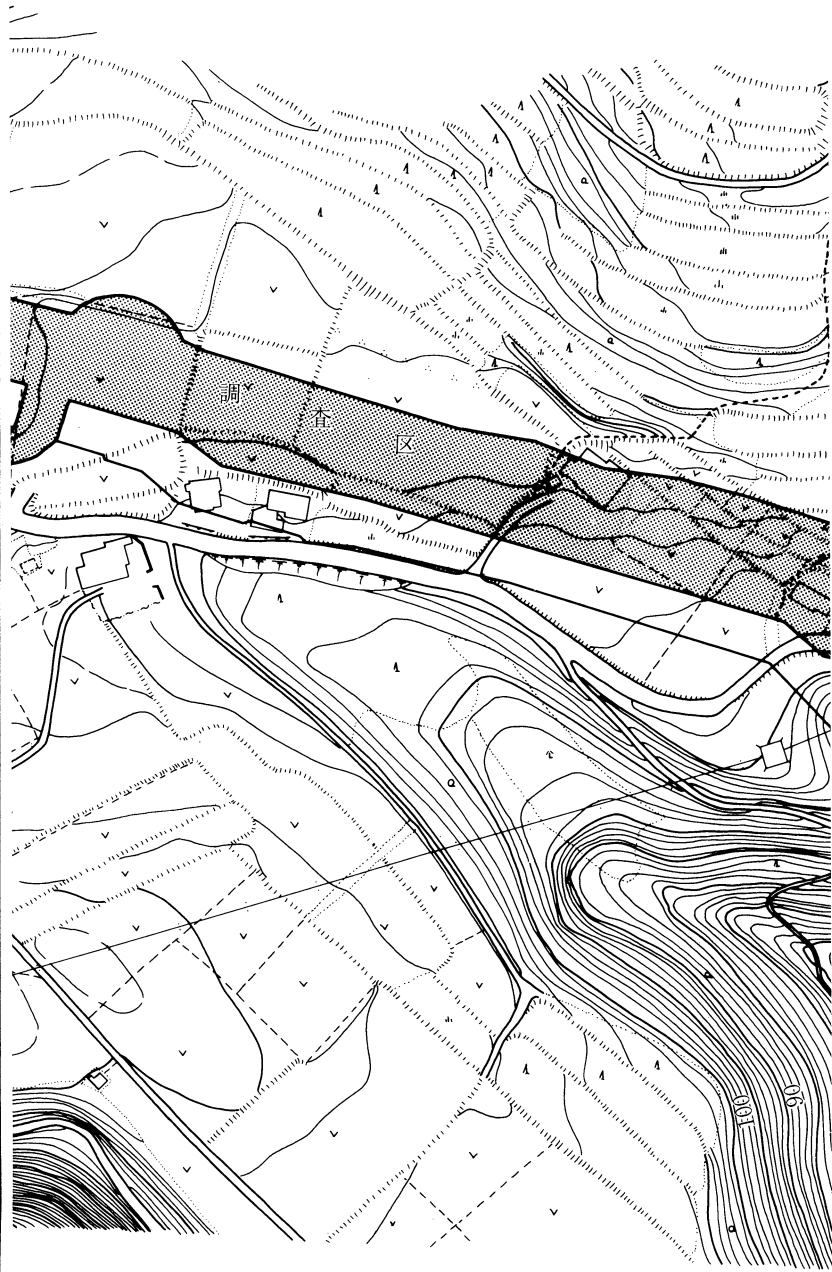
第1表 周辺の遺跡地名表(1)

No	遺跡名	所在地	時代	遺物	備考	参考文献
1	紫立	花岡町柴立	縄(後)	条痕文, メンコ, 沈線文		
2	小薄町遺跡群	小薄町, 有武町, 高牧町	縄(早・前・後)古			
3	上祓川遺跡	上祓川, 上楠原, 丸岡, 水の谷	縄(早・後・晩)弥(前・中)古・歴	土器片・石器		17
4	日ヶ城跡	上祓川町芝原日ヶ城	南北朝・戦国			21
5	楠原	上祓川町楠原	古	土器片		6
6	芝原	祓川芝原	古	土器片・黒曜石・石斧		6
7	大窪	上祓川大窪	縄(後)~古	土器片		
8	山外森	上祓川山外森	古・歴	土器片・石包丁		6
9	瀬戸城跡	祓川町瀬戸口	鎌倉・南北朝			
10	石仏頭	中祓川町石仏頭	弥・古	土器片		
11	長谷城	祓川長谷	鎌倉~戦国			
12	鹿屋一谷城跡	西祓川町一ノ谷	南北朝初期~戦国			
13	中野	祓川	弥(中)・古	土器片・石斧		
14	堀之牧遺跡群	中祓川町堀之牧	弥(中)・古	土器片		
15	神野牧	西祓川町神野牧	縄(前・後・晩)	土器片・石器・石匙		28
16	葉師堂の古墳	西祓川町下中原前	弥(後)・古	成川	円墳3基	9
17	西祓川地下式横穴	西祓川町井之上	5世紀半ば以前(推定)	短甲・衝角付胃	出土品のみ県指定 昭和41・3・31	
18	西祓川	西祓川町	縄~古	土器片		9
19	王子	王子町王子	縄・弥(中)・古	土器片	中期集落跡	9
20	打馬	打馬町	古	土器片		
21	平原古墓	打馬町平原		5基の墓石と五輪塔一基		
22	打馬平原	打馬町平原	縄(早)・弥・近	土器片・石器	近世墓2基	24
23	榎田下	大浦町榎田下	縄(前・後)			11
24	大浦	大浦町	縄(早)・古	縄文土器	地下式横穴	
25	耳取ヶ丘	大浦町耳取ヶ丘		土器片		
26	並松	大浦町並松	縄	石斧		
27	コラヶバツケ	大浦町コラヶバツケ	縄	土器片		
28	中ノ原	大浦町中ノ原	縄		大8京帝大発掘	
29	中ノ原	大浦町中ノ原	縄(前~晩)・弥(中)・中近世	土器片・石器		11, 13
30	郷之原	郷之原	縄・古	土器片・石器		
31	中ノ丸	大浦町中ノ丸	弥(中)・近世			11
32	川ノ上	大浦町松橋川ノ上	近世		供養塚2基	11
33	中原山野	郷之原町中原山野	弥(中)			13
34	前畑	郷之原町前畑	縄・弥(中)			13
35	飯盛ヶ岡	上野町飯盛ヶ岡	縄・弥・古・平		63, 元年調査	
36	榎崎A	郷之原町榎崎	旧・縄・平		63, 元年調査	15
37	高橋	上野町	弥・古	土器片		
38	榎崎B	郷之原町榎崎	旧・縄・平		2, 3年調査	
39	西丸尾	白水町西丸尾	旧・縄~平			16
40	西丸尾B	白水町西丸尾	縄(早)	前平式・下刺峯タイプの土器・敷石など	3年確認調査	
41	白水A	白水町	古・歴	土師器・成川式	古江バイパス分布	
42	萩ヶ峯A	白水町	古・歴	土師器・成川式	古江バイパス分布	
43	萩ヶ峯B	白水町	古・歴	土師器・成川式	古江バイパス分布	
44	白水B	白水町	古・歴	土師器・成川式	古江バイパス分布	
45	山ノ上A	小野原町	古・歴	土師器・成川式	古江バイパス分布	
46	山ノ上B	小野原町	古・歴	土師器・成川式	古江バイパス分布	
47	宇戸平	小野原町	縄(早)	塞ノ神式	古江バイパス分布	
48	千場	白水町	縄(晩)	土器片	古江バイパス分布	

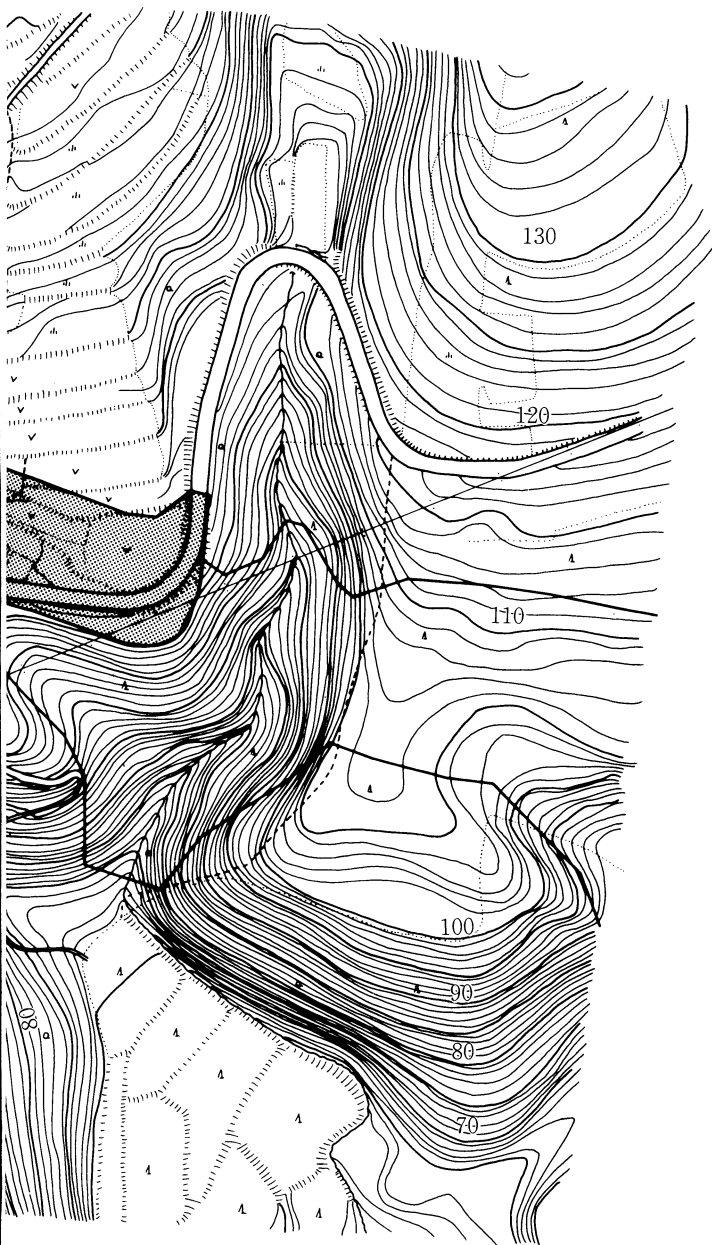
第2表 周辺の遺跡地名表(2)

No	遺跡名	所在地	時代	遺物	備考	参考文献
49	石鉢谷 A	古里町	古・歴	土師器・成川式	古江バイパス分布	
50	石鉢谷 B	古里町	古・歴	土師器・成川式	古江バイパス分布	
51	古里 A	古里町	古・歴	土師器・成川式	古江バイパス分布	
52	古里 B	古里町	古・歴	土師器・成川式	古江バイパス分布	
53	古里	古里町花園中敷地	縄(後)・弥・古	土器片		
54	俣刈	海道町俣刈迫	縄(早・後・晩)・古	成川式他		19
55	本戸口	海道町本戸口	縄(前)・古			
56	枯木ケ尾	古里町枯木ケ尾	弥・古	須恵器・成川式		
57	鹿屋城跡	北田町	鎌倉初期～南北朝			
58	古前城跡	古前城町	鎌倉中期～南北朝			
59	久恵城跡	西原町	南北朝初期～戦国			
60	寿六丁目	寿	古	土器片		
61	白崎	白崎町	古	土器片		
62	白崎城跡	白崎町	南北朝・戦国			
63	曾田	曾田町	古	土器片		
64	寿三丁目	寿	古	土器片		
65	鹿屋古城跡	新生町	南北朝初期	弥生土器	完消	
66	高付	白崎町弥生団地	弥(中)～古	土器片・石包丁		18
67	老神	田崎町老神部落	歴			
68	野里小西	野里町	縄(早・前)・古	土器片		
69	小野原	小野原町	古・歴	土器片	集落遺跡	
70	荒平城跡	天神町	南北朝・戦国			
71	大津	野里町	弥・古	土器片		
72	野里城跡	野里町	戦国			
73	大畑平	野里町	縄～古	石坂式ほか		25
74	丸岡	小野原町	古・歴	土器片・鉄滓		
75	天神	天神町	古	土器片		
76	小牧城跡	野里町岡泉	南北朝・戦国			
77	野里の古墳	野里町1826-1	古		円墳3基	
78	岡泉	野里町岡泉	縄～歴	土器片		26, 27
79	岡泉 B	野里町岡泉	弥・古	土器片	円墳3基昭和63年度調査	
80	岩之上	高須町岩之上	縄	石坂・吉田式		22
81	横山 2	横山町	古	土器片		
82	横山 1	横山町	古	土器片		
83	岡元	横山町岡元	弥・古	土器片・石斧		
84	横山城跡	横山町横山	南北朝・戦国			
85	横山 3	横山町	古	土器片		
86	谷平	横山町	縄(早)・古	土器片	住居址	29
87	松の岡	横山町松の岡	古・歴	土器片	住居址・昭和24年調査	
88	霧島ヶ丘	霧島ヶ丘公園	縄	吉田・塞ノ神A式	昭和59年度より調査	
89	キタバイ	高須町キタバイ	弥(後)・古	土器片・石器		
90	立神	高須町立神	縄(後・晩)・古・歴	土器片・青磁・石斧		
91	下西原	浜田町下西原	弥・古・歴	成川式・青磁		
92	榎木原・掛平	高須町榎木原	縄～歴	土器片	住居址	10・13・14
93	浜田城跡	浜田町	南北朝・戦国			
94	高須古城跡	高須町高須	南北朝以降			
95	高須城跡	高須町高須	南北朝・戦国			





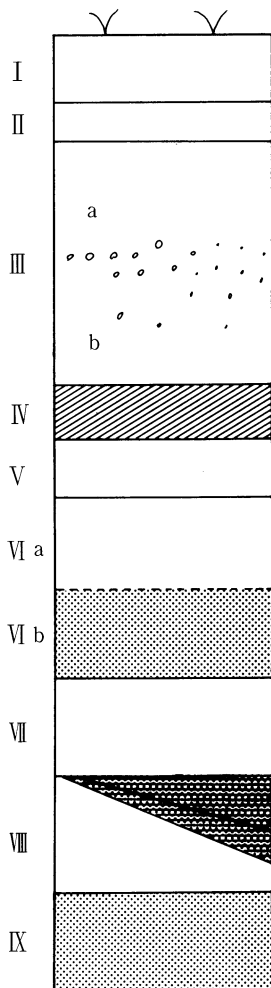
第5図 調査区と周辺の地形



第三章 遺跡の層位

遺跡は鹿屋原大地の縁辺にあたり、高隈山から伸びる丘陵末端に位置する。調査区域は東西に長く約400mの長さである。すぐ東側には比高差約30mで高須川が南流しており、急崖となっている。また西側には開折された小谷が形成されており、土層の堆積の状況にも微妙な違いがある。

遺跡の基本的な層位は以下のとおりである。



I層…表土

II層…黒色土。粘性はほとんどない。削平を受けており残存している部分は少ない。

III層…暗黄褐色土。柔らかく粘性はない。上部には開闢岳起源の紫ゴラが点在している部分もある。また下半部には池田カルデラ起源の軽石が多く混在している。上半部(III a)を中心として縄文時代晩期の遺物が多く出土した。

IV層…黄褐色土。喜界カルデラ起源のアカホヤ火山灰に対比されるもので、下部には軽石・砂粒を含む。県下各地に認められ、B P 6300年の年代が知られている。

V層…乳白色土。軟質であり粘性もある。縄文時代早期の遺物包含層である。

VI層…黒褐色土。硬く締まっており粘性もある。下半部(VI b層)には黄白色火山噴出物がみられる。これは桜島起源の薩摩火山灰と呼ばれるものでありB P 11000年の年代が知られている。

VII層…茶褐色粘土。地点により粘質の度合いが異なるが一般的に粘性は強い。場所により色調の違いがありa, bに分けられる。細石器文化の遺物包含層である。

VIII層…黒褐色硬質土。上部は黒褐色の硬い土であり、下部は軟質の明茶褐色土になる。上部には赤褐色で粒の細かい軽石粒が点在している。これは桜島起源のP 17^(注1)と推定され、B P 1万7千～8千年の年代^(注2)が測定されている。

IX層…砂礫層。ヌレシラスを基調にしたものである。

第6図 基本土層柱状模式図

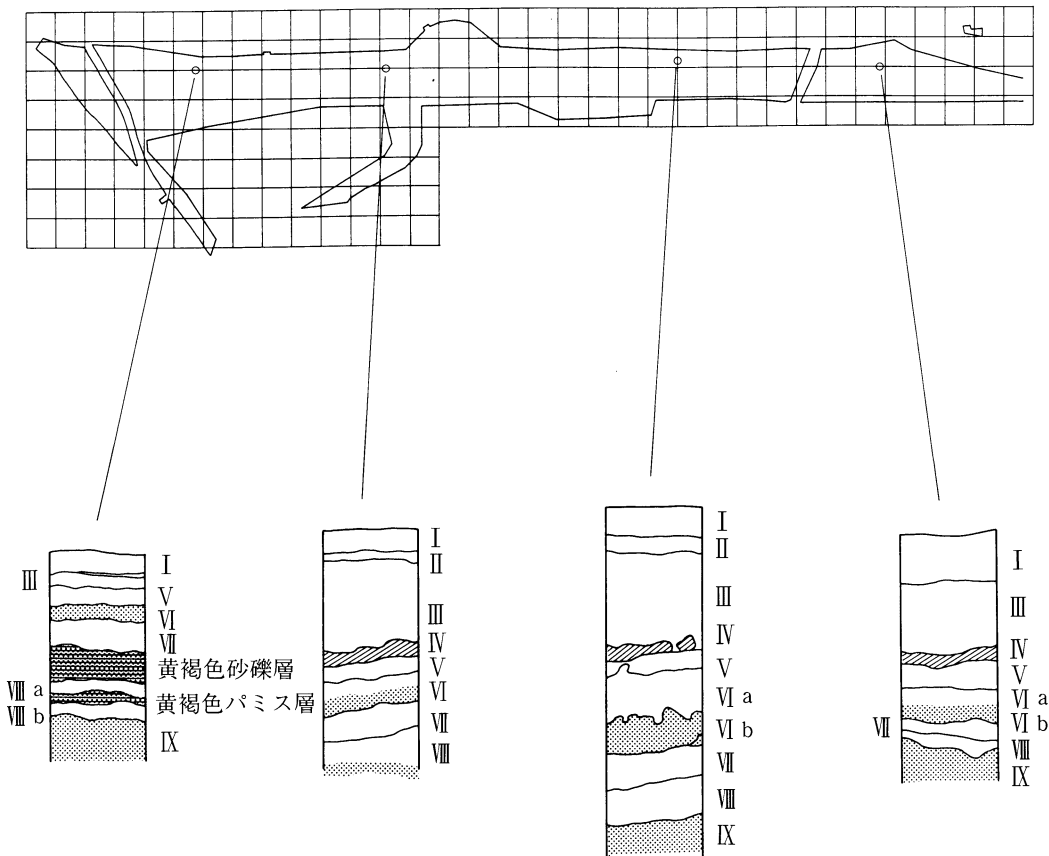
Ⅶ層とⅧ層の間には、黄色砂礫や黄褐色パミス・軽石が見られる部分がある。これは高須川に近い部分で1区から12区にかけて堆積しており、Ⅸ層の二次堆積と判断される。

またⅦ層上面も自然作用によると思われる起伏が著しいものであり、それがⅥ層の堆積により平坦化していき、Ⅲ層面ではほぼ平坦な地形となっていく。

本遺跡の層序は、高須川を隔てて相対する西丸尾遺跡の層序と基本的に同様であり、遺物包含層及び出土遺物も近似している。

注1), 成尾英仁 1992 「西丸尾遺跡の地質と火山噴出物」『西丸尾遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(64) 鹿児島県教育委員会

注2), 小林哲夫 1989 「桜島火山の初期活動と年代」『火山』第2集 Vol. 34 2 130



第7図 各地点の土層

第IV章 細石器文化の調査

第1節 調査の概要

旧石器時代細石器文化の存在は、昭和62年度の確認調査の段階において確認されていたが、その広がりには明らかではなかった。そのため縄文時代早期の調査と並行して下層確認を行った。

調査の結果、細石器文化の遺構及び遺物は調査区域の西側である6区から15区にかけて、検出された。この区域は台地の端部であり、すぐ西側には比高差約30m下に高須川が流れている。出土層はサツマ火山灰の下に位置する第Ⅶ層の茶褐色粘土層である。ただし、この層の堆積面は複雑な地形を形成している。付図3にコンタ及び遺物出土分布を示しているように、7・8区は、深い谷とは逆方向の東南方向へゆるく傾斜していき、H-9からG-10区に深い凹部が形成されている。また同様の円形の凹面はH-10区と11区の境にもみられる。さらにH-12区からH-15区にかけては馬の背状に細長い平坦部が伸びるが、その北側及び南側には谷状になる。特にI-11~13区は急傾斜の凹部となっている。出土遺物は7・8区の北側と9・10区の凹部そして11~13区の急傾斜地に多く認められ、その他の11~15区の平坦な部分は少ない。平面的な出土分布よりおおよそ3ヶ所の石器集中区域（ブロック）が識別された。出土石器には細石刃が最も多く、他にスクレイパー・細石刃核・石斧・磨石・敲石・石核などが出土している。

遺構としては9基の礫群と、ピットが集中しているピット群が検出されている。

第2節 遺 構

細石器文化の遺物が多数出土している区域は、調査域の西端部であり台地の縁辺に位置している。遺物の平板実測を随時行いながら掘り下げを進め、遺物量が少なくなった下部で礫が集中した部分が確認されたため、それを礫群として取り扱った。また礫群を残したまま周辺を掘り下げた結果、粘土層の下層である黄褐色土層上面で、粘土層の落ち込んだ直径の小さいピットが集中したピット群と考えられるものが確認できた。

1. 礫群

計9基検出された礫群は、緩く傾斜している部分に、弧状に並んで検出されている。礫は高須川に転在する砂岩・頁岩やそれらが熱変成を受けたホルンフェルスが使用されている。各礫群は明瞭な掘り込みはないものの、礫の集中度は強い。形態的には3類に分けられる。

A類…ほぼ円形に礫が集中しているもの（1. 2. 4. 5. 7号）

B類…傾斜方向に流れたように楕円形を呈し、やや散在するもの（3. 6. 9号）

C類…礫が円形の輪状に並び、囲まれた内部は礫が少ないもの（8号）

以下番号に従って説明を行う。

1号礫群

ほぼ円形に礫が集中しており、長径×短径は110×90cmである。他の礫群と同様明瞭な掘り込みは認められない。熱を受けたためと考えられる赤化したものや、破損した礫が存在してい

る。礫の大きさは径8～15cm程度である。礫の総数は62個であり、そのうち完形礫は27点で他は割れあるいは破損した礫である。

2号礫群

長径×短径は110cm×120cmと比較的規模が大きいものである。礫の大きさは1号と同様であり径8～15cm程度であるが、熱を受けたためと思われる割れやヒビが認められる礫が多い。礫の総数は112個と礫群の中では最多であるが、完形礫は36個と少なく破損した小破片が多い。これらの破損礫は多く接合している。

3号礫群

礫は比較的散在した出土状態であり、長径×短径は160cm×100cmとやや楕円形を呈する。礫の大きさは1・2号よりやや大きなものも認められるがほぼ同様である。礫の総数は59個であり、熱を受けたためと思われる割れ、ヒビのある礫が多い。完形礫は28点であり、破損礫は多く接合している。

4号礫群

長径×短径は70cm×60cmと規模は小さいものの、礫の集中度は高い。礫の総数は33個である。この礫群は切り取り持ち帰っている。

5号礫群

礫群の中で最も小さいものであり、長径×短径は50cm×40cmである。4号礫群の南西側に近接して検出された。礫の総数は12個であり、そのうち完形礫は6点で、残り半分は熱を受けたためと思われる破損礫である。

6号礫群

調査区域の最も北側に検出された。長径×短径は140cm×60cmであり長楕円形状を呈する。この付近は南側にゆるく傾斜しており、傾斜方向に長軸があることより一部の礫が流れたことが予想される。熱を受けたためと考えられる礫の赤化が多く認められる。礫の総数は44点であり、そのうち完形礫は38点と高い割合である。

7号礫群

長径×短径は130cm×85cmであり、礫の集中度は高いが傾斜地にあるため低い方へ若干散在して広がっている。礫の総数は54個で、そのうち完形礫は24点である。

8号礫群

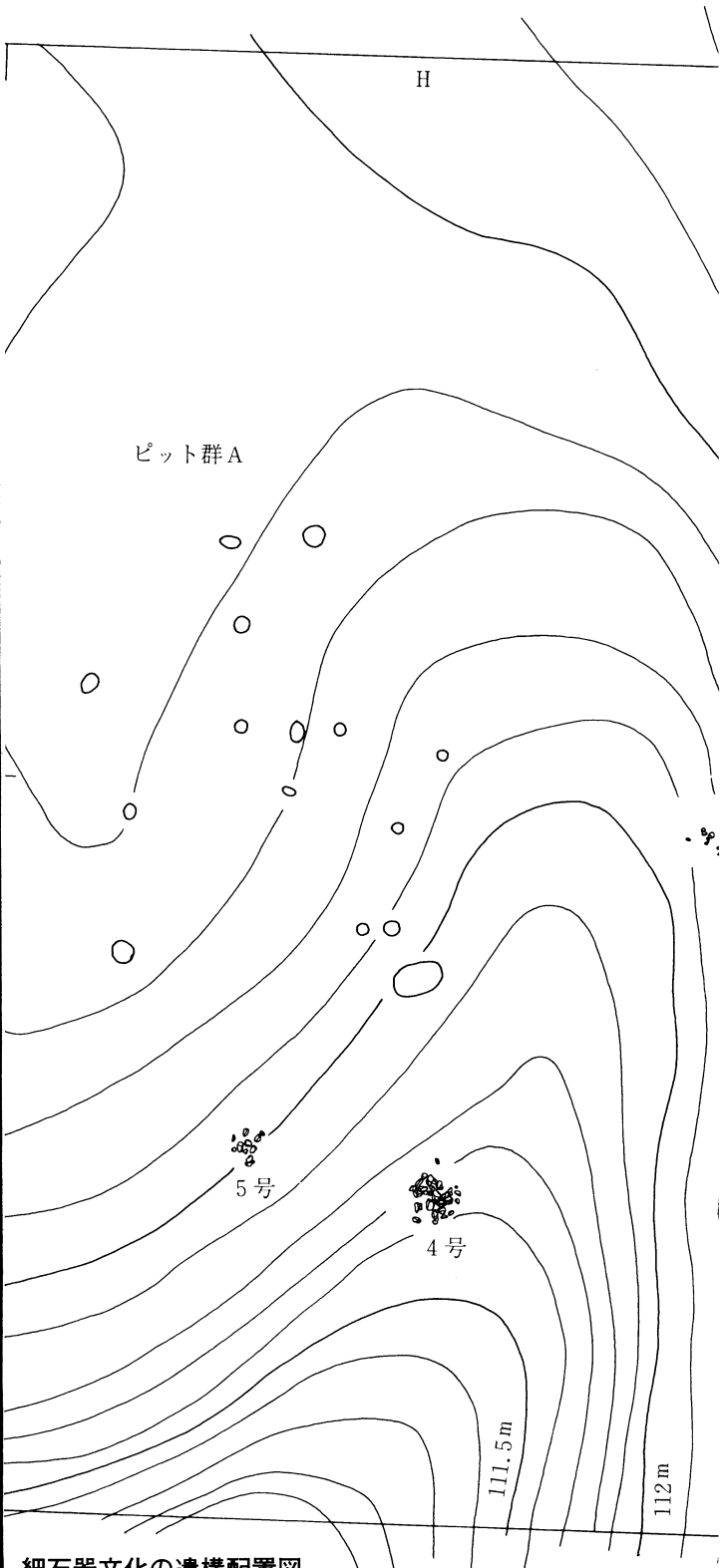
他の礫群とは形態が異なるもので、礫が円形の輪状に並び囲まれた内部は礫が少ない。長径×短径は100cm×80cmで、石囲いの部分の大きさは70cm×50cmである。礫の総数は27個で、そのうち完形礫は23点と最も多い値である。礫の重量組成でも軽い小片はない。

9号礫群

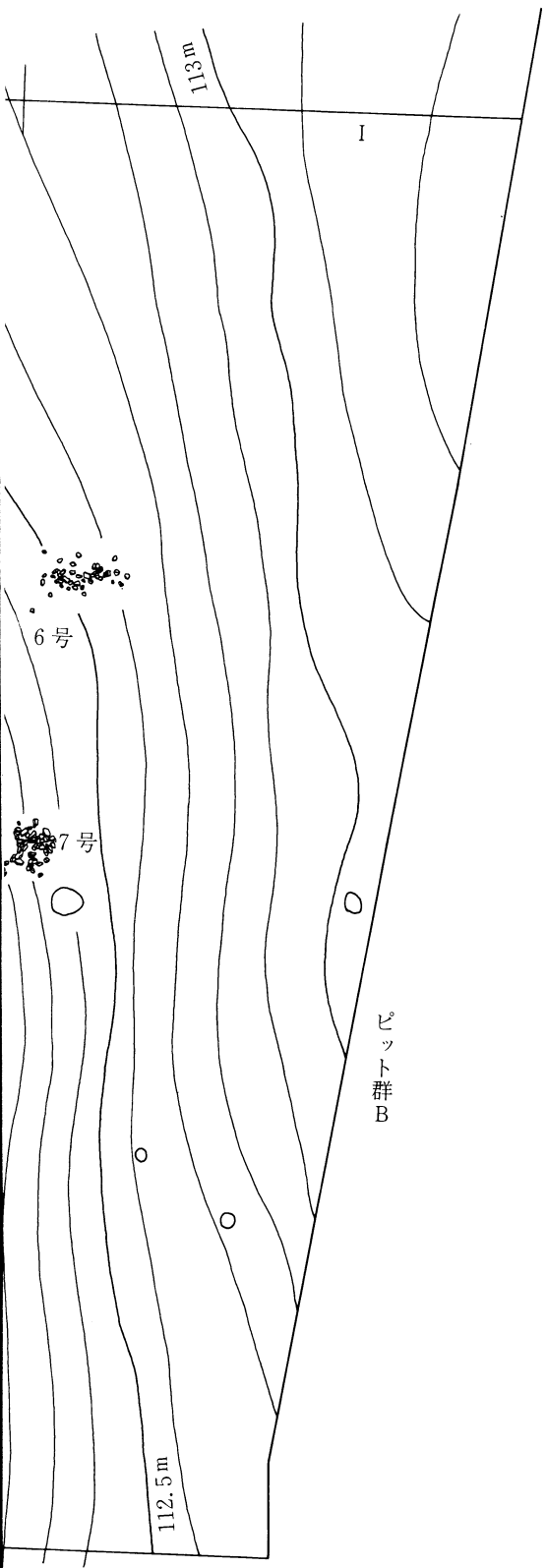
ピット群の西側に位置しており、これ一基のみ離れた位置にある。散在した礫の分布であり長径×短径は160cm×120cmである。礫の総数は41個で、熱を受けたためと思われる割れ礫が多く、完形礫は12点である。

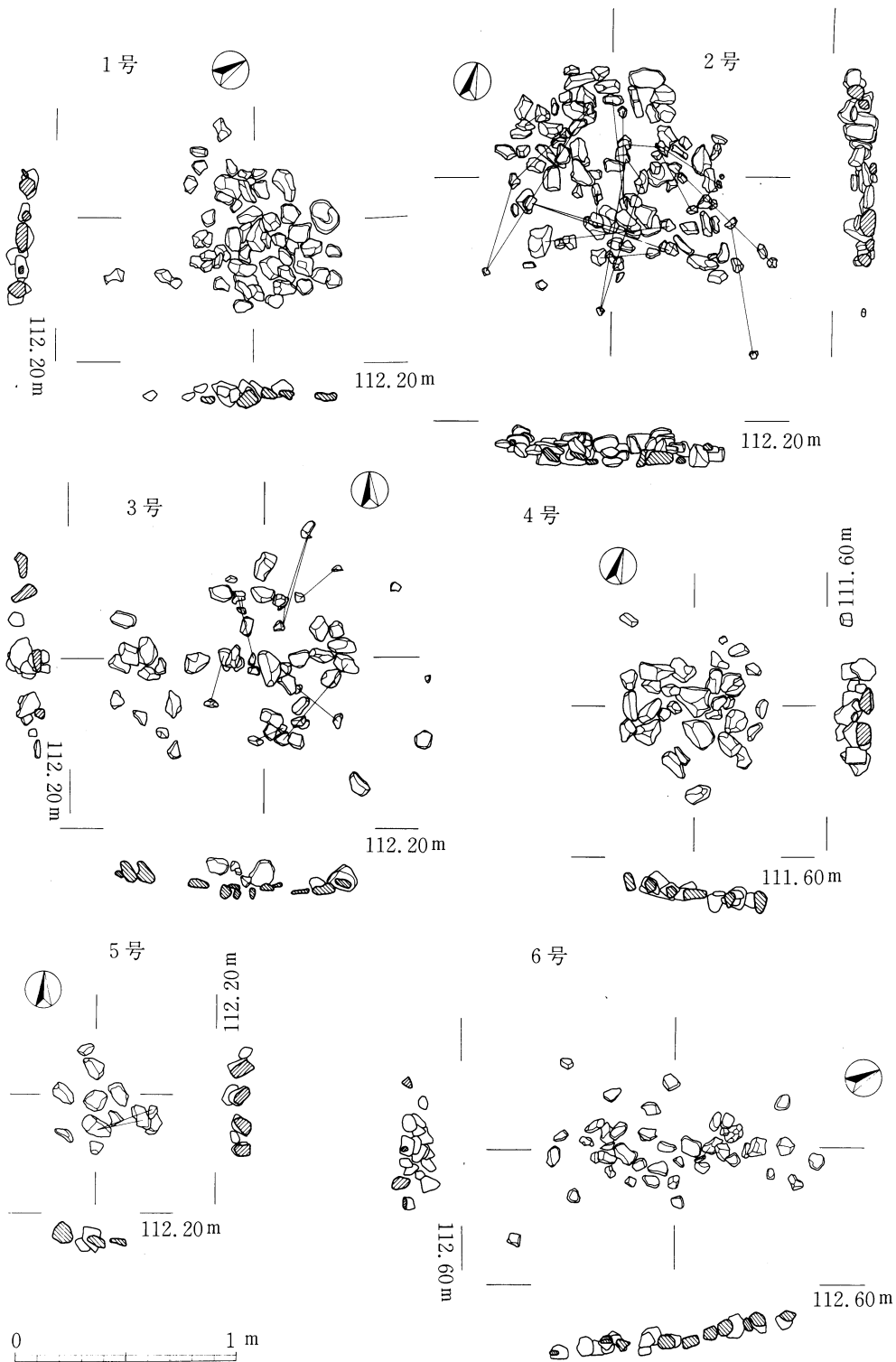


第8图

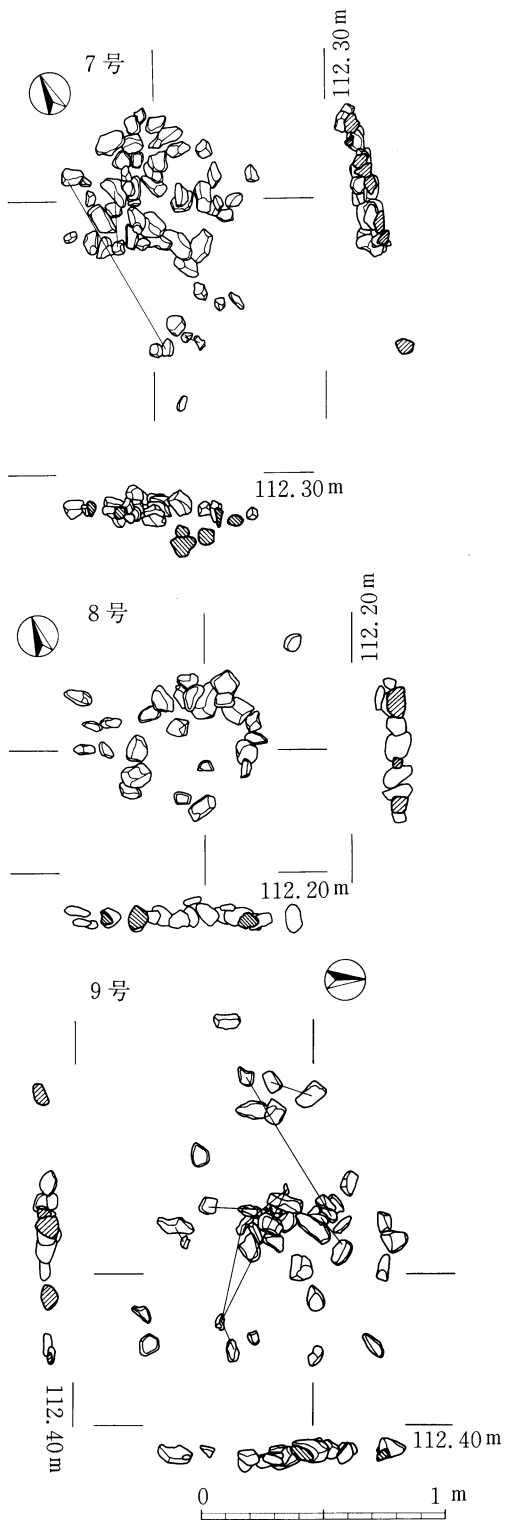


細石器文化の遺構配置図

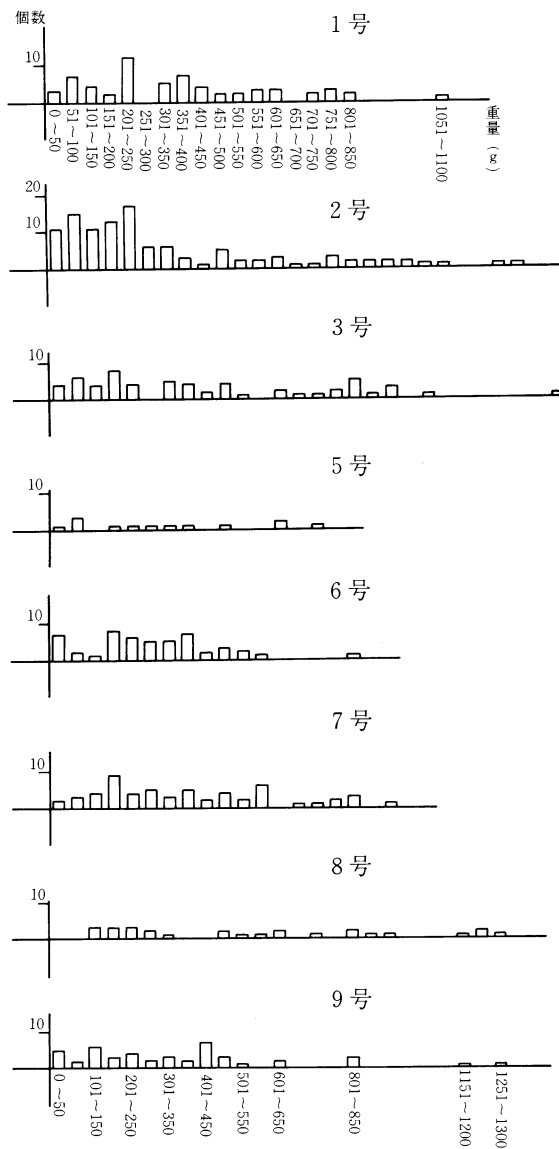




第9図 礫群(1)



第10図 群群(2)



第11図 群群の殻重量組成

2. ピット群

旧石器時代のピットは、H-7・8区を中心とする15個のピット群（以下A群）とI-8区からの4個のピット群（以下B群）を発見した。

A群はピット8（以下ピット=P）付近の比較的平坦な場所から、P7やP12の北東の方向に緩やかに傾斜している地状に位置する。B群はP17の平坦部の高位置から北東及び南東に緩やかに傾斜しながらP16やP19へとつづく傾斜面に位置する。A群とB群の位置関係は小谷の基部の凹地を挟んで約6～7mの距離に位置する。

これらのピットは、第Ⅶ層（暗茶褐色ローム層、通称チョコ層と呼ぶ旧石器遺物包含層）を剥いだ第Ⅷ層（茶褐色ローム層）面で検出したが、掘り込み面は第Ⅶ層と判断した。ピットは小型であることやピット検出面の第Ⅷ層とピット中の埋土の色調が類似していることから、ピット中の埋土の掘り出し作業過程において掘り過ぎが懸念されたので、各ピットの平面形状を確認した後、ピットの掘り方の形状や深さ、ピット中の埋土の状況等、より正確なデータを得るために半裁して確認した。

その結果、ピット中の埋土の堆積状況やピットの掘り方、壁などの境は比較的容易にとらえることが可能であった。各ピット中の埋土は第Ⅶ層を埋土とするが、なかにはピット12・13・14のように、第Ⅶ層と第Ⅷ層が混在した埋土のピットも確認した。

ピットは、検出面での平面形は円形及び楕円形を呈し、径14cm～34cm（P15は例外として）を測る。深さは浅いものでP10の6cmから最も深いP17の50cmであった。また、各ピットの掘り方の形状にはいくつかの特徴がみられた。ピットの平面径の大きさに比べ深さが浅く底面は弧状を呈すP7・10・16・19、掘り方が斜めで深さが深く底面は弧状を呈すP5・11・13・14、掘り方が垂直と斜めの組合せで底面は弧状となるP1・2・3、掘り方が垂直で底面は平坦となるP4・6・9・18、2段掘りのP6・8・9・10・12・15・16の5種類に分類してみた。


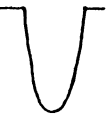
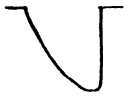
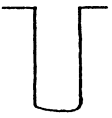
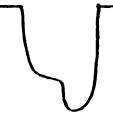
これらピットは、前述したごとくA群とB群の2つの群に別れ、A群は縦7m、横5mの範囲に15個のピットがまとまって検出された。B群は5m四方に4個のピットが検出されたがピットの配置から北側の調査範囲外に広がるものと予想される。ここではA群について述べてみたい。

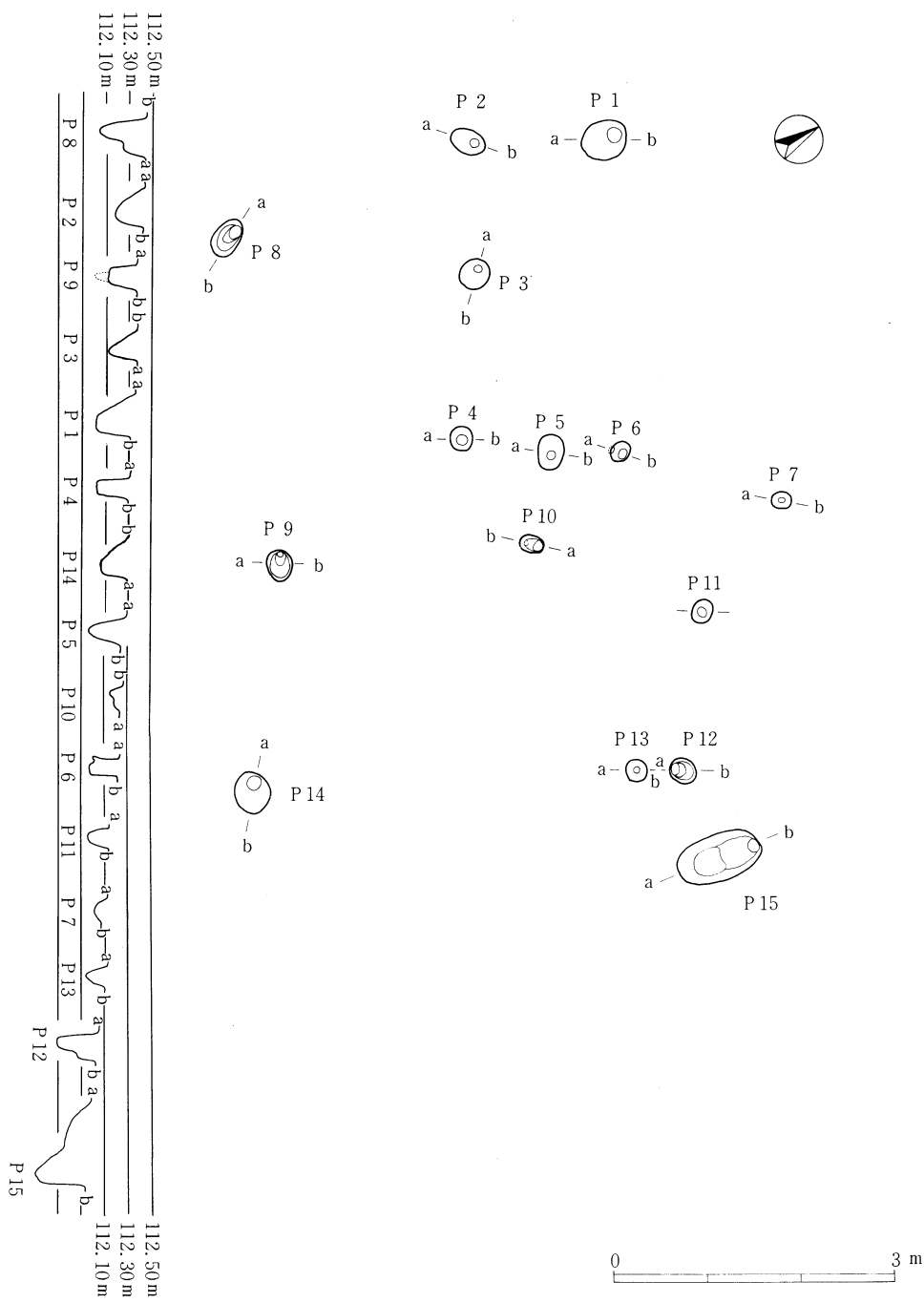
A群のピットの性格としては、他の調査区に同様なピットが発見されないことやピット中の埋土の状況、規模、深さ、掘り方の形態から人為的なものと判断し、旧石器時代の平地住居の柱穴遺構と想定している。

なお、これらピットには、いくつかのピット間について共通性が見られるものの、全体的にまとまりに欠けており、円形又は方形の建物、特に一棟の建物を想定した場合、ピットの配置に確かな関係性を見出すには根拠に乏しく、簡易な掘立柱を持つ建物遺構を想定するのが妥当と思われる。

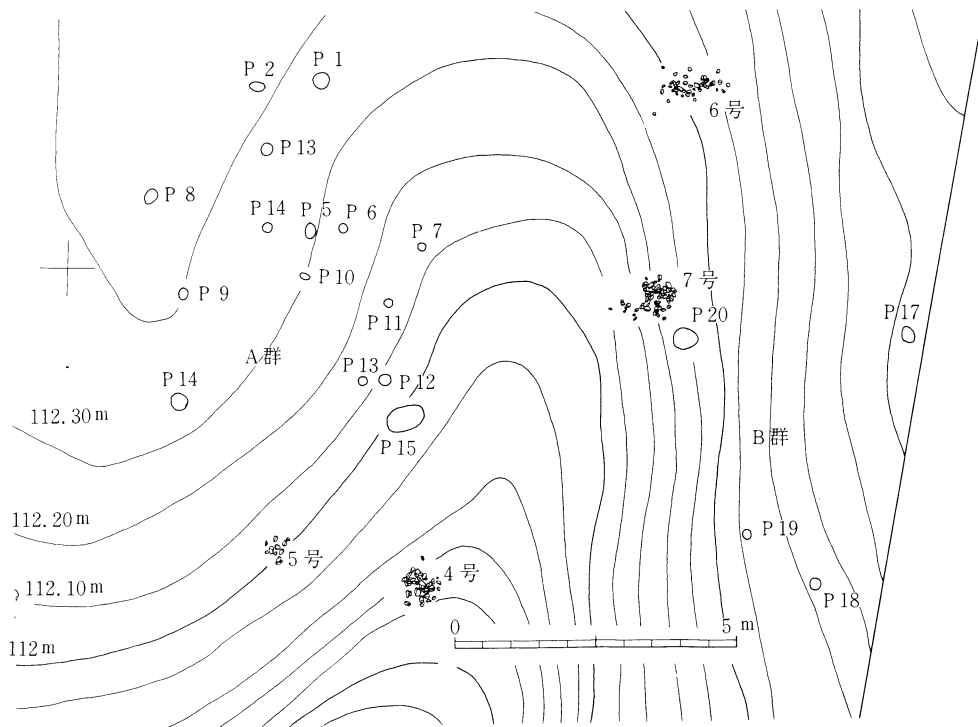
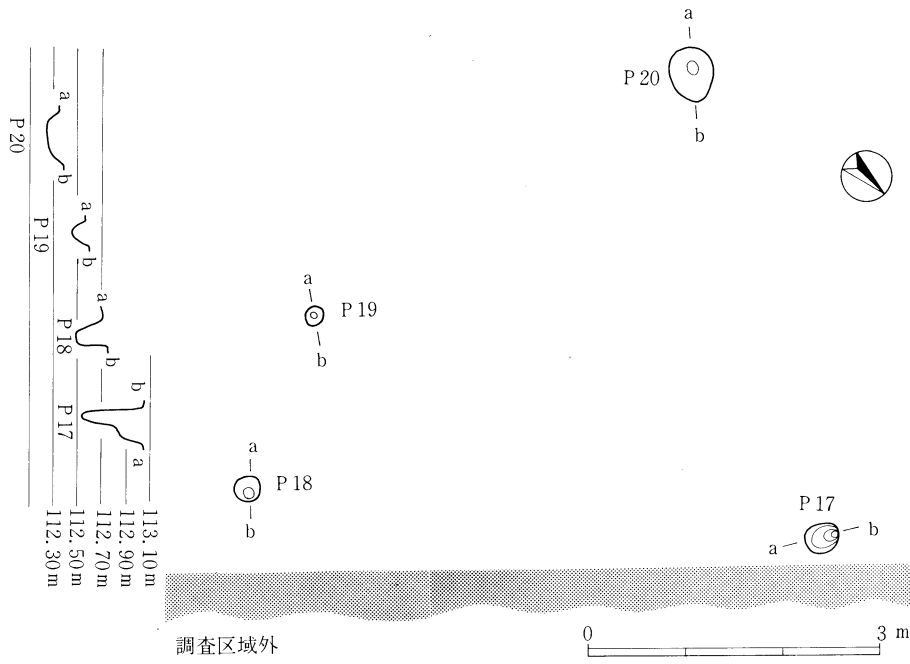
今日、旧石器時代の平地住居跡としては、「はさみ山遺跡」（大阪府）、「ガガラ遺跡」（広島県）、「椎木山遺跡」（福岡県）、「下城遺跡」（熊本県）が知られている。しかしながら、その評価についてはいくつかの問題点が指摘されている。

第3表 細石器文化ピット一覧

P i t 番号	長径× 短径 (cm)	平 面 形 状	深 さ (cm)	掘り方					
				浅 い	深 い			い	
									
				径の大きさに くらべ深さが 浅く、底面は 弧状	掘り方が斜め で深さが深く 底面は弧状	掘り方が垂直 と斜めの組合 せ、底面は弧 状	掘り方が垂直 で底面は平坦	2段掘り	
A 群	1	38×34	円形	35				
	2	32×21	楕円形	28				
	3	26×26	円形	19				
	4	21×20	円形	28				
	5	30×24	楕円形	30				
	6	18×16	円形	25, 27			
	7	16×14	円形	10				
	8	35×22	楕円形	20, 40				
	9	27×23	円形	25, 40			
	10	21×14	楕円形	6, 10
	11	21×18	円形	21				
	12	23×20	円形	18, 35				
	13	18×18	円形	19				
	14	36×30	円形	25				
	15	72×40	楕円形	24, 45				
B 群	16	45×38	楕円形	15				
	17	30×23	楕円形	20, 50				
	18	21×21	円形	25				
	19	18×17	円形	13				



第12図 細石器文化のピット A群



第13図 細石器文化のピットB群・ピット群全体図

3. 遺物の集中（ブロック）

細石器文化の遺物包含量である第Ⅶ層茶褐色粘土は、堆積している面の状態が単純な平坦面ではなく、自然作用によると考えられる円形の凹地や急傾斜を有する谷状の地形が、複雑に入り組んだ状況で堆積している。第Ⅶ層の遺物は、そういう地形に関連して谷状の区域や凹地に集まった部分や、地形とは関係なく集中した部分や逆に疎になった部分などがみられた。

遺物の平面的な分布状況から3カ所の石器群（ブロック）が識別された。北西からA・B・Cブロックと呼称する。

Aブロック

G・H・I-7・8・9区の南方向へ緩く傾斜した部分に分布するもので、H-7・8区に遺物が比較的集中した部分がみられる。ピット群及び全ての礫群を包括している。総計848点の遺物が出土しているが、南西部は遺物が点在する程度の疎であり終結に近いと思われるものの、北東部は遺物の出土状況からまだ北側へブロックが伸びているものと考えられる。石器組成は細石刃（129点）、細石刃核（19点）磨製石斧（2点）、その他磨石・敲石・礫器・石核などが出土している。使用されている石材の大部分は黒曜石であり、若干の頁岩・安山岩がある。またAブロックについては遺物分布の状況からさらに細分できうる。I-11区で6号礫群より北の部分（A1ブロック）、H-7・8区及びI-8区部分（A2ブロック）、H-9区で南西に傾斜している部分（A3ブロック）、3号及び2号礫群から東側に傾斜している部分（A4ブロック）、G-7区で9号礫群の南西部のまとまり（A5ブロック）、G-8区で1号及び8号礫群を含む部分（A6ブロック）に細分できる。各小ブロックの遺物数はA1ブロックから順に、142点、482点、94点、88点、16点、18点となっている。

ところで、G～I-8区の9区境の2m幅の部分は、周囲より遺物が少なく空白状況になっているが、この部分は初年度調査に於いて、旧石器時代遺物の確認トレンチを設定し調査したものであり、遺物が遺漏された可能性を否定できない。

Bブロック

I-11・12・13区とH-11区東側の部分で谷状に東方向へ急傾斜した地区である。遺物はその傾斜部から多く出土し、総計336点出土している。このブロックは出土状況からさらに東側の調査区域外へ広がるものと考えられる。石器組成は細石刃（9点）、細石刃核（2点）、礫器、石核などである。使用されている石材は黒曜石を主体とし、安山岩、水晶などがある。

Cブロック

G-9区南側からG-10～13区にかけてと、H-10～13区南側の部分を一括した。この中で集中する部はG-10区の凹地にかかる傾斜部である。遺物は凹地の南側に多く、Aブロックの流れ込み部とは凹地の傾斜方向が異なり明確に区分できる。11～13区は比較的散在している。出土遺物の総計は392点である。石器組成は細石刃（23点）、細石刃核（12点）、部分磨製石斧（1点）、磨石・敲石、石核などである。使用されている石材は黒曜石が主体で、他に頁岩、砂岩などがみられる。なお、このブロックの黒曜石には特殊なものが含まれている。

第3節 出土遺物

1. 石材

第Ⅶ層から出土した遺物の石材は、その大部分が黒曜石である。各石材の出土量と分布については遺物の大部分が主として黒曜石の剥片あるいは破片であり、わずかにチャートと少量の水晶や石英が認められる。また特定の礫器や磨石・敲石などに砂岩や頁岩などが使用されている程度である。

黒曜石は全て同一産地のものではなく、多種の特徴的なものが認められ、肉眼による観察では数種類に分けることができる。以下の区別は色調、風化の程度、不純物の量、ガラス光沢の度合いなどの特徴によるものである。

- ① 薄黒色あるいはアメ色を呈し、ガラス光沢は弱く不純物は極めて少ない。
- ② 黒色で透明感があり、ガラス光沢は強く不純物はほとんどない。
- ③ 青灰色を呈し風化によりガラス光沢はないものの、中はガラス光沢があり不純物はない。
- ④ 黒色で、風化が著しくガラス光沢はなく、消し炭状を呈し、不純物は少ない。
- ⑤ 薄黒色で透明度が強く、ガラス光沢も強いが不純物が多く混在する。
- ⑥ 黒色で透明感はなく、ガラス光沢が強く、不純物が多く混在する。
- ⑦ 乳白色と薄黒色がシマ状になる。ガラス光沢はあり、不純物が多い。

以下の黒曜石を肉眼的に原産地のものと比較すると、①は大口市桑ノ木津留産に類似するものの色調及び自然礫皮面の状況は若干異質であり、現在のところ特定できない。②は佐賀県腰岳産のものに類似しており、③は長崎県針尾産のものに類似している。④は独特の風化の特徴などより樋脇町上牛鼻産（もしくは市来町今木場産）と判断してよい。⑤は鹿児島市三船産に、⑥は大口市日東産に、⑦は大口市狸々産の黒曜石と推定される。ただし、これは肉眼的観察によるものであり、化学的分析による検討が必要である。

これらの黒曜石の分布についてみると、黒曜石①、⑤、⑥はほぼ全体に出土しているものの黒曜石②、③はCブロックに特徴的に分布しているようである。

2. 出土遺物

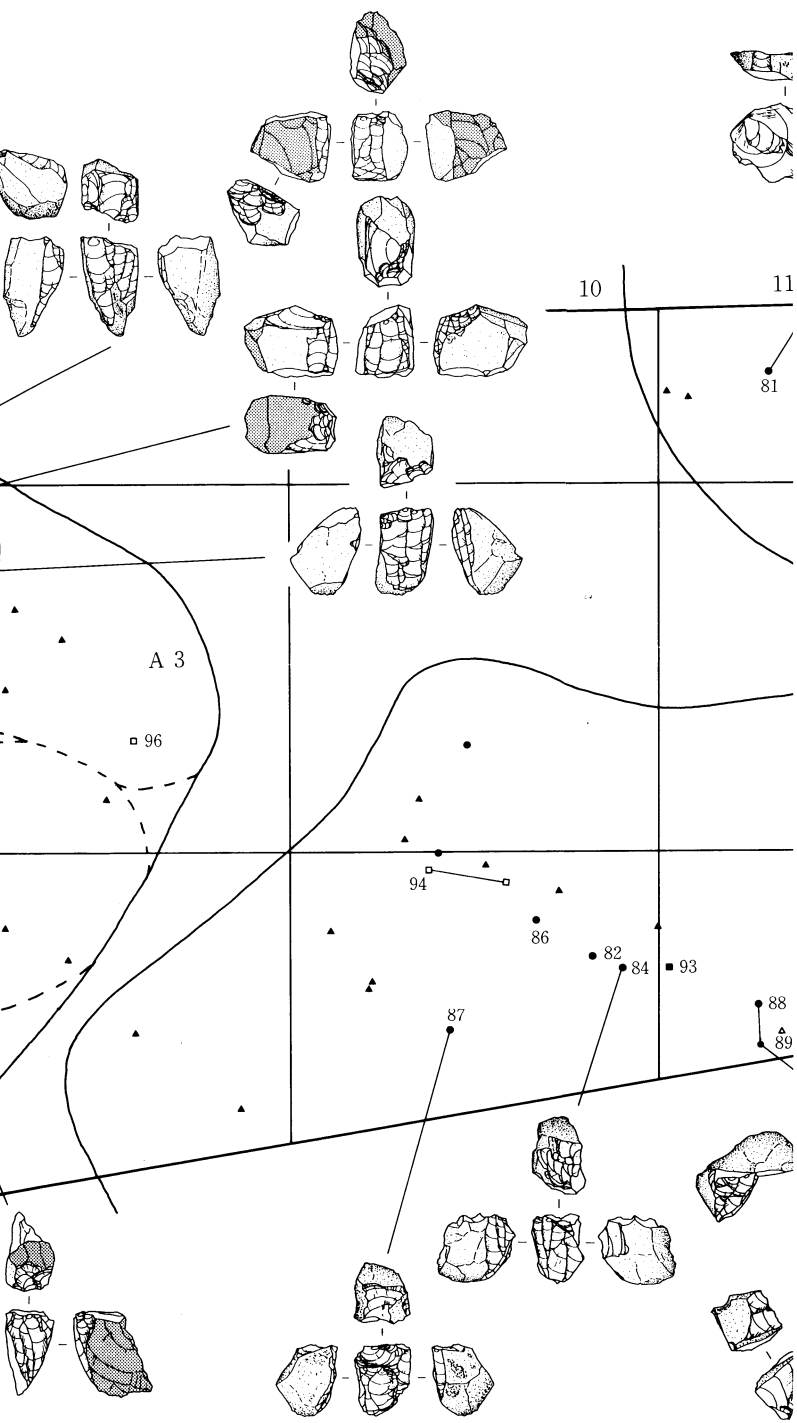
細石刃

総計162点出土した。Aブロックから129点、Bブロックから9点、Cブロックから23点出土している。出土分布は第14図に示している。各ブロックの総遺物数からの細石刃の比率は、Bブロックが2.6%、Cブロックでは5.8%であるのに対し、Aブロックでは細石刃の比率が約15%と高い。Aブロックの中でも特にA1ブロックとA4ブロックの割合が高く、各々の比率は19%、18%となり、出土遺物の約2割は細石刃となっている。

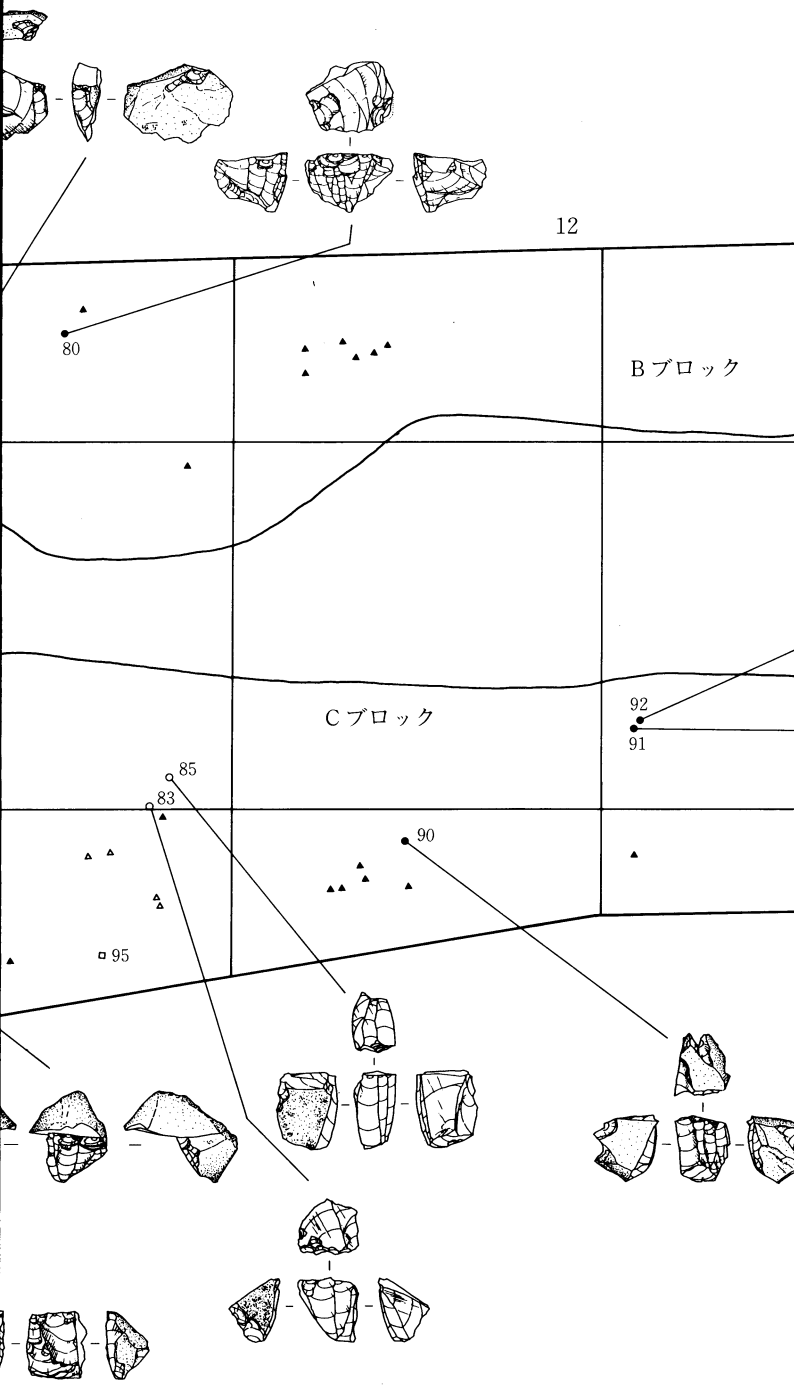
使用されている石材は1点の頁岩製を除くと、他は全て黒曜石製である。黒曜石の大部分は前述した黒曜石①であり、2点の黒曜石④と若干の黒曜石②及び③が混在している。石材とブロックの関連で注目されるのは、色調が特徴的な黒曜石③によるものがBブロックのみに認められることである。

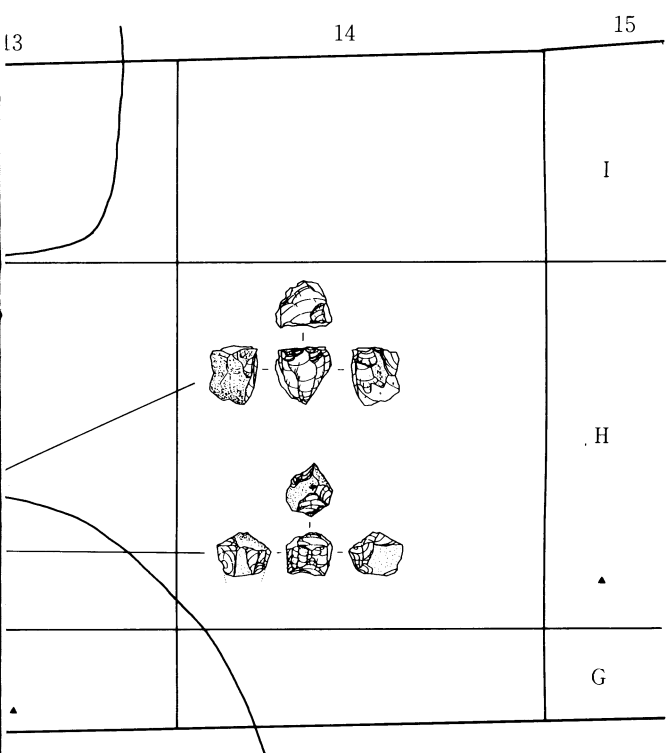


Aブロック



第14図 細石刃，細石刃核出土分布





細石刃は剥がされた状態のままの完形、打面のバルブを折り取った中尾部、先端のヒンジした部分を除去した頭中部、打点と先端を除去した中間部に分けられる。また、短くして使用するために、頭部・中間部・尾部と分割することも知られているが、除却と分割の区別は困難なため打面のあるもの、先端部のあるもの、両方ともないもので区別し、頭部、中間部、尾部に区別した。

162点の内訳は、完形18点、頭部52点、中間部53点、尾部39点であり、頭部と中間部がほぼ同数みられる。これらのうち、側縁に微細な小剥離痕が認められるものがあり、使用痕の一種として考えられる。使用痕が観察されたものは全体で計36点あり、各部位では完形3点、頭部6点、中間部20点、尾部7点に認められた。中間部のものの使用痕が多数を占めていることは、細石刃を分割して各々を使用するというより、むしろ打面及びバルブの除去、そして先端部のヒンジした部分を除去したと考えた方が、本遺跡では妥当性がある。

細石刃の長さ及び幅の計測グラフは第17図に示した。長さは8mm以上10mm以下のものと、6mm以上8mm以下のものが多く、幅は4～6mmのものが多い。使用痕の認められるものの長さは8～14mmのものが多い。

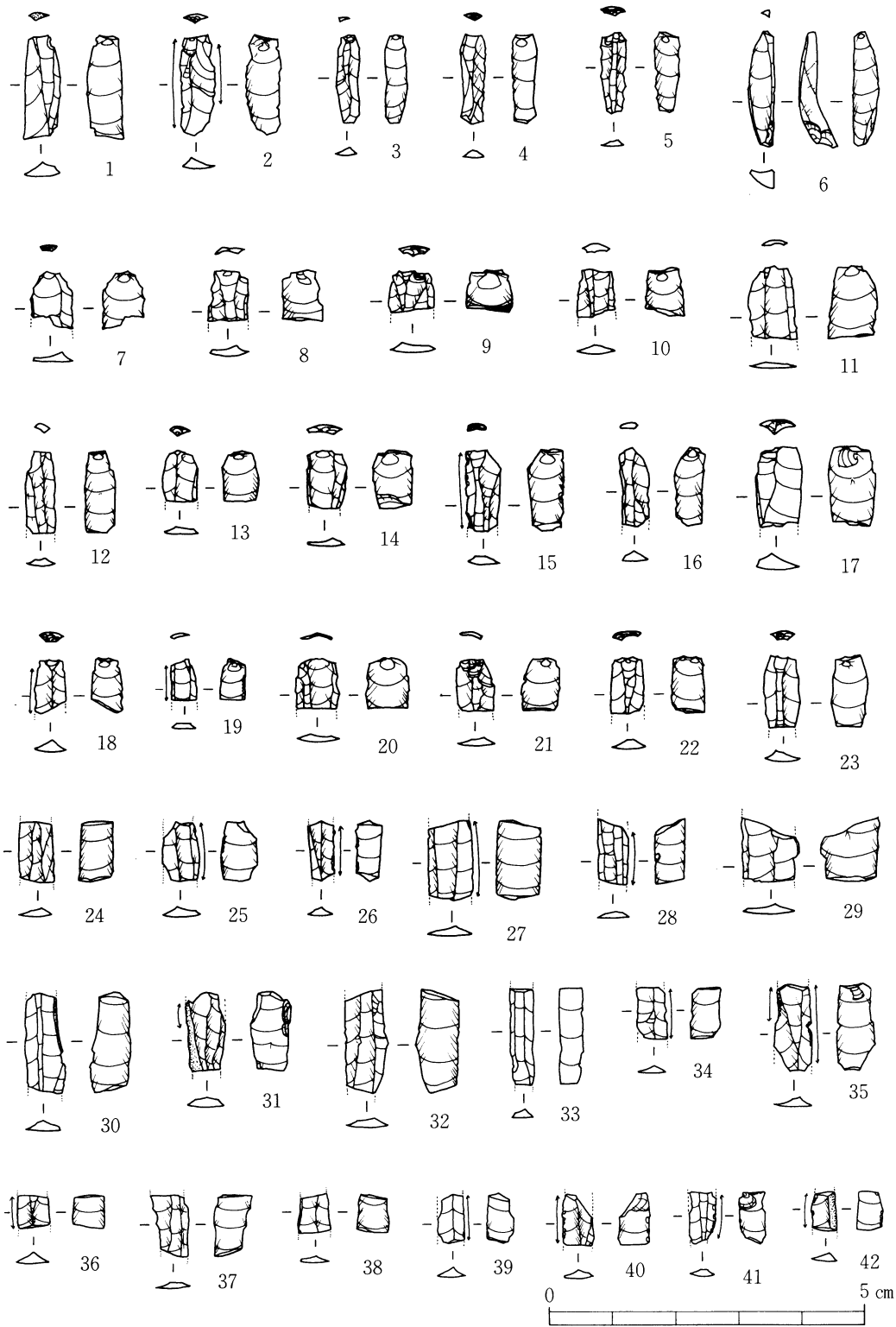
本遺跡で出土した細石刃のうち、完形品や頭部の打面が残存するものについては、頭部調整はほとんど行われていない。そのため打面近くの平面形は四角形を呈している。打面も平坦で広いものが多い。西北九州で多くみられるような頭部調整が入念に行われ、打面の平面形が半円形を呈し、点状の打面をもつものはほとんど認められない。

細石刃核

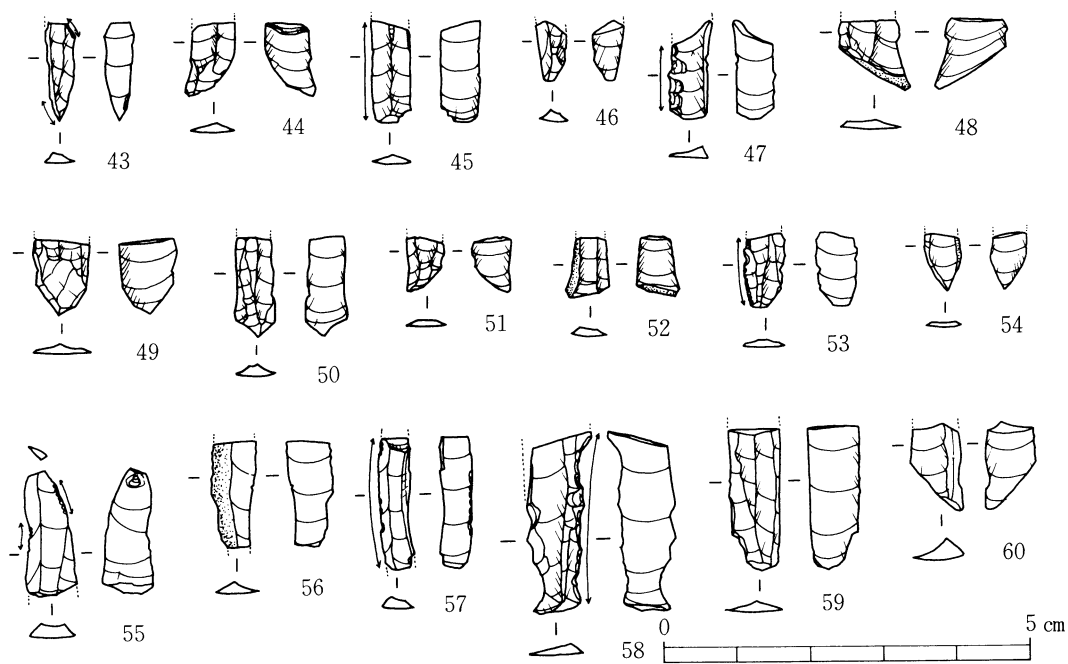
(1) Aブロック

計19点出土しており、全て黒曜石製である。出土分布は小数ずつのまとまりがみられ、各々小ブロックに対応している。61・62はA1ブロックに、77～79はA4ブロックに出土している。63～76はA2ブロックに出土しているが、その中で分布は3カ所のグループにまとまる。

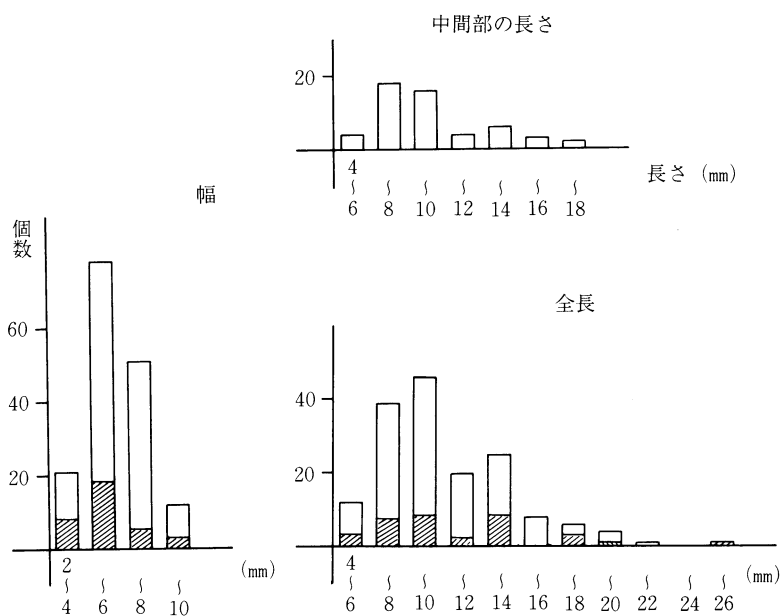
61・62は小礫を分割したもので一部に礫皮面が残る。63・65は打面からの石核整形が施されているもので、65は作業面が二面みられる。64は自然礫皮面及びローリング面（図の網かけ部分）の残る小礫の木口の部分から細石刃を剥取したものである。66～70はA2ブロックのほぼ中央部に出土したもので比較的小型のものがまとまっている。小礫を分割したと思われる平坦面が67・69の側面や68の打面にみられる。66の打面は以前の作業面と考えられ、打面転移を行ったものであろう。70は側面からの作業面再生剥片である。71～76はA2ブロックの東側に集中して出土したものである。自然礫皮面あるいはローリング面が全体に残る小礫を素材とし、石核整形等はほとんど行われていない。数回の小さな剥離で打面調整を行い、一端から細石刃を剥取している。73・75は下面に調整剥離が施されているが、73のそれは以前の打面調整である。77～79はA4ブロックで接近して出土しているものである。礫皮面及びローリング面の残る小礫を素材とし、そのまま打面調整を行い木口の部分から細石刃を剥取している。77・78は石核整形剥離はないが、79は片側側面に打面からの整形剥離が施されている。



第15圖 VII層出土石器(1) (細石刃①)



第16図 VII層出土石器(2) (細石刃②)



網部は使用痕のあるもの

第17図 細石刃計測グラフ

(2) Bブロック

西側部分に2点出土している。80は水晶を石材とし、一回の剝離で得られた平坦面を打面とし打面幅は広く、作業面長は短い。81は礫皮面の残る黒曜石の偏平な剝片を素材とし、腹面を側面として木口の部分から細石刃を剝取している。

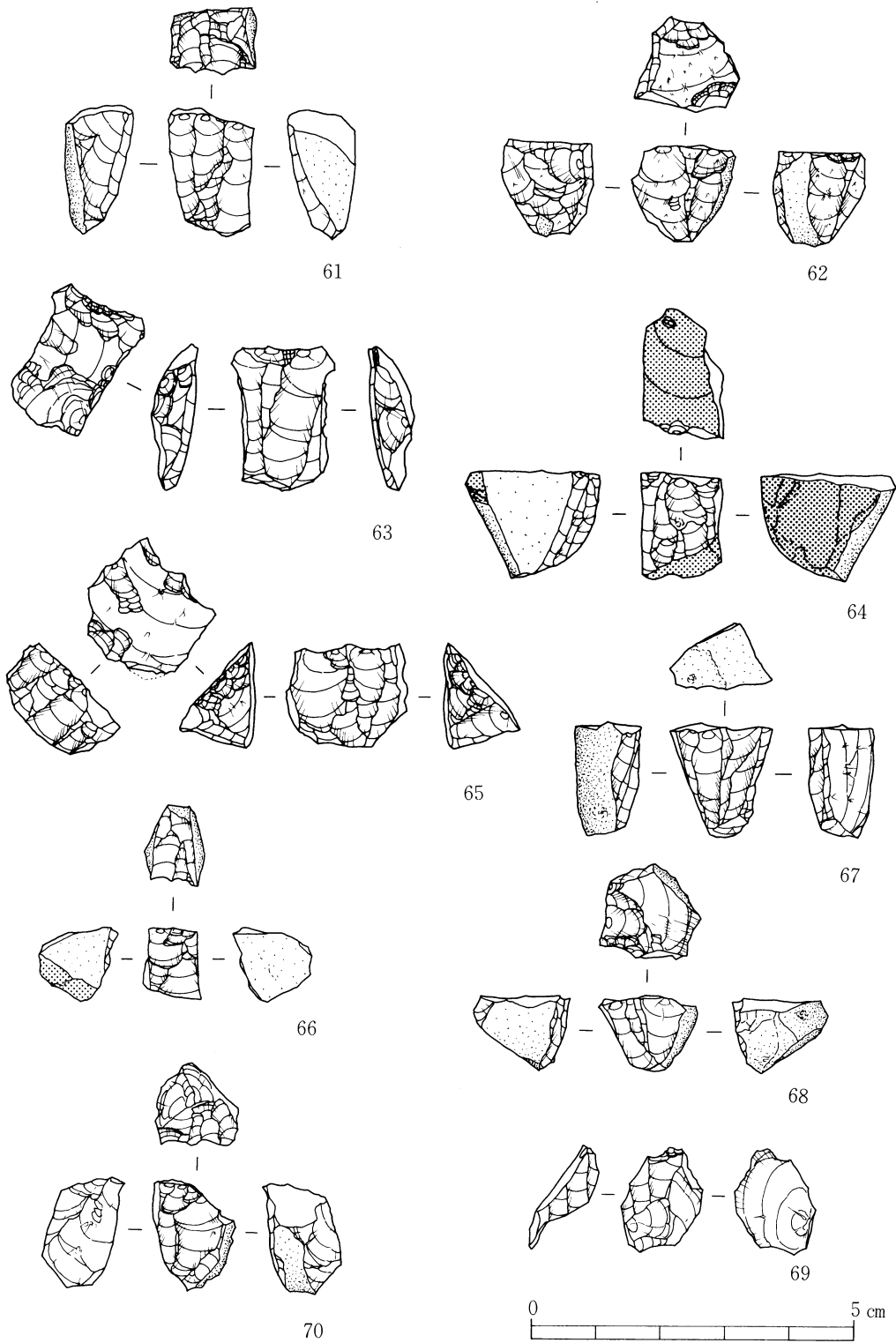
(3) Cブロック

計12点出土しており、G-10~11区に比較的集中したものと、H-11区や13区にやや離れた各々2点とG-12区の1点の分布となっている。素材は礫皮面の残る小礫を分割したものや、小礫がそのまま利用されたものがある。82は小礫を分割した平坦面が下面に残り、83には打面及び片側側面に分割された平坦面がみられる。また83には尾縁からの調整剝離が施されている。84は小礫をそのまま素材とし、木口部分から細石刃を剝取したものである。85は礫皮面の残る剝片を使用し、打面幅の狭い木口部から細石刃を剝取している。打面は以前の作業面を使用している。86は平坦な礫皮面と剝離面が側面となる板状の素材を利用したもので、打面は作業面方向からの一回の剝離で得られた平坦面であり、木口部分から細石刃を剝取している。この作業面は同様に下端からも以前使用されており、その時点の打面（現在の下面）も作業面方向からの一回の剝離で得られている。87は小礫を素材としたもので、作業面方向からの一回の剝離で得られた平坦面を打面にし、整核整形や打面調整を行わず、木口部分から細石刃を剝取したものである。これの良好な接合資料が88+89である。小礫を素材とし、作業面方向からの一回の加撃で分割し、得られた平坦面を打面にして、幅の狭い木口部の一端から細石刃を剝取している。細石刃剝取に先立ち、打面調整は全く施されていない。90・91は小礫をそのまま素材として利用したもの、92は平坦な分割面あるいは剝離面が側面及び打面にみられるものであり、打面は作業面方向からの一回の剝離により得られている。

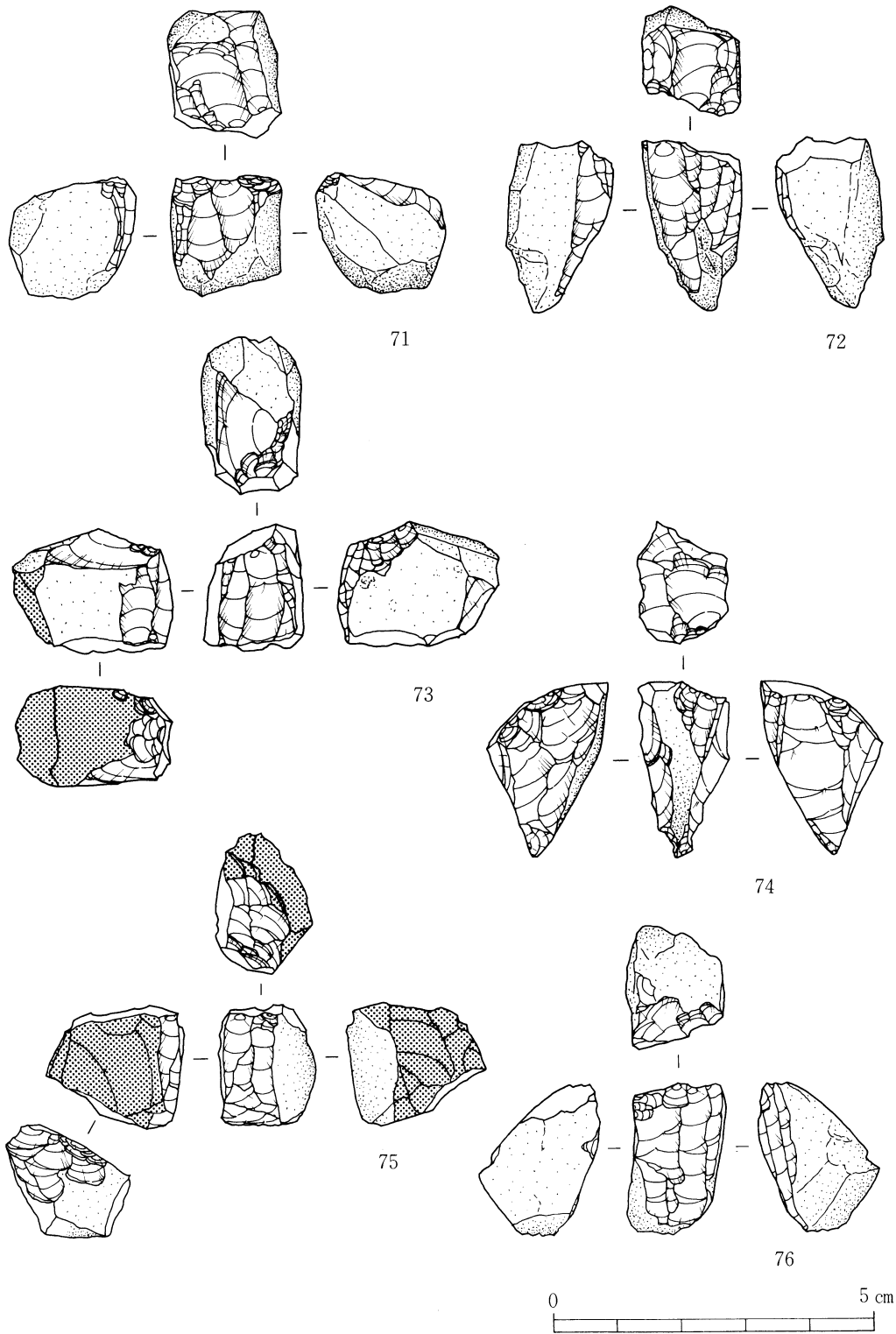
石材は全て黒曜石であるが、黒色でガラス光沢が強く、自然礫皮面が平坦な黒曜石②によると判断できるもの（82・84・87・88・90）と色調が特徴的な青灰色を呈する黒曜石③によるもの（83・85・92）が存在している。逆にAブロックに特徴的なローリング面を有する黒曜石は出土していない。

93は石核調整剝片であり、一回の加撃によって剝離されたものである。背面には数回の加撃が、腹面と同一の方向から行われ、ステップして階段状になっている。この剝片の打面には、3条の桶状剝離面がみられる。この面構成より作業面再生剝片というより、むしろ打面再生剝片と考えられる。あるいはまた85のように打面と作業面が入れ換わるような剝取も予想されるものの打面再生剝片と考えた方が妥当であろう。

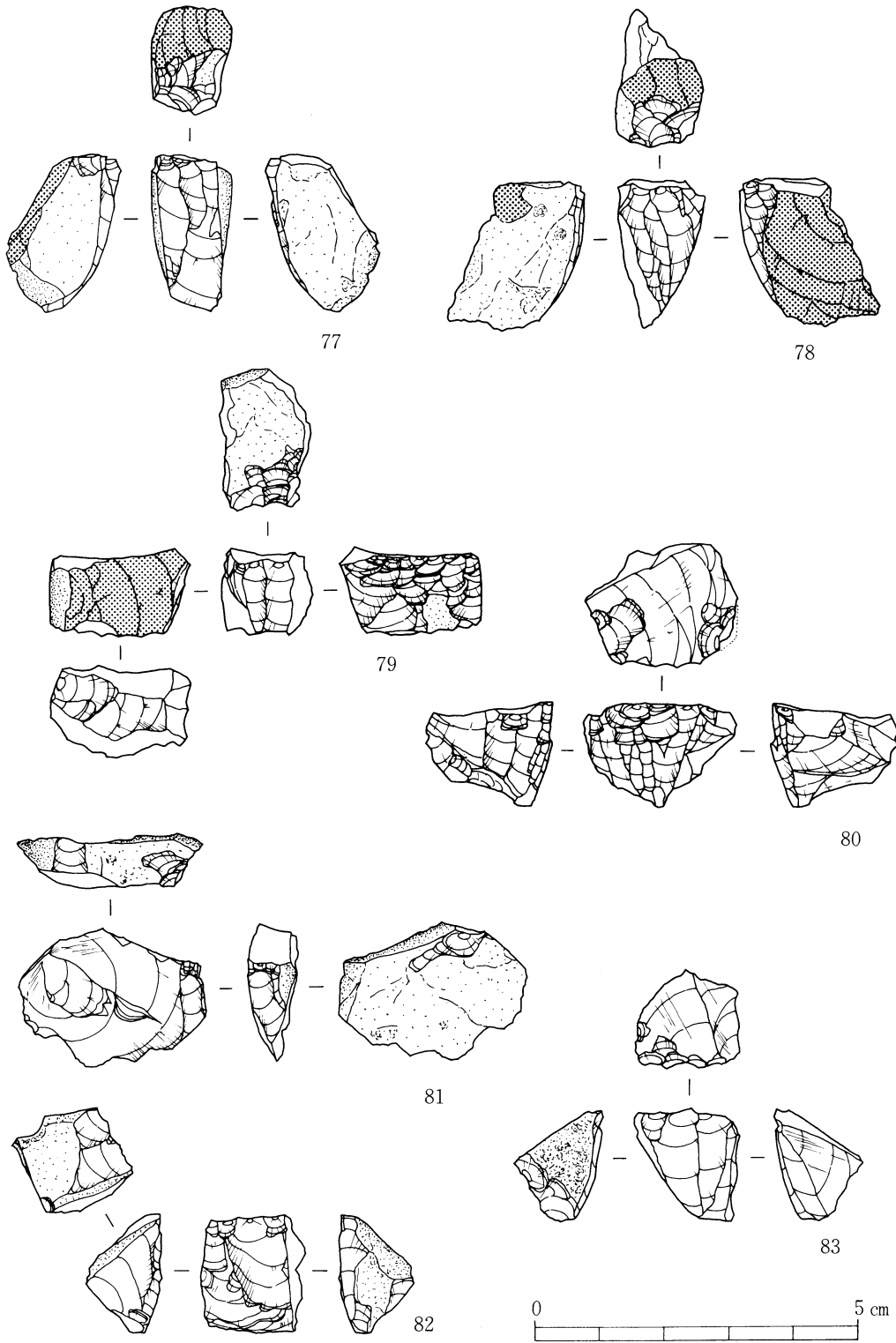
94は一部に礫皮面が残る剝片の縁辺に、主に背面に対して二次加工を行い、また腹面のバルブ部分にも二次加工が施され、全体は楕円形に整形されている。スクレイパーというより細石刃核ブランクと考えた方がいいかもしれない。95も一部に礫皮面の残る剝片の縁辺に、二次加工が認められるものである。剝離面の切り合い関係より、図のb面がc面より新しい剝離である。これもスクレイパーというより細石刃ブランク関連の調整剝片の可能性が高い。96は縁辺



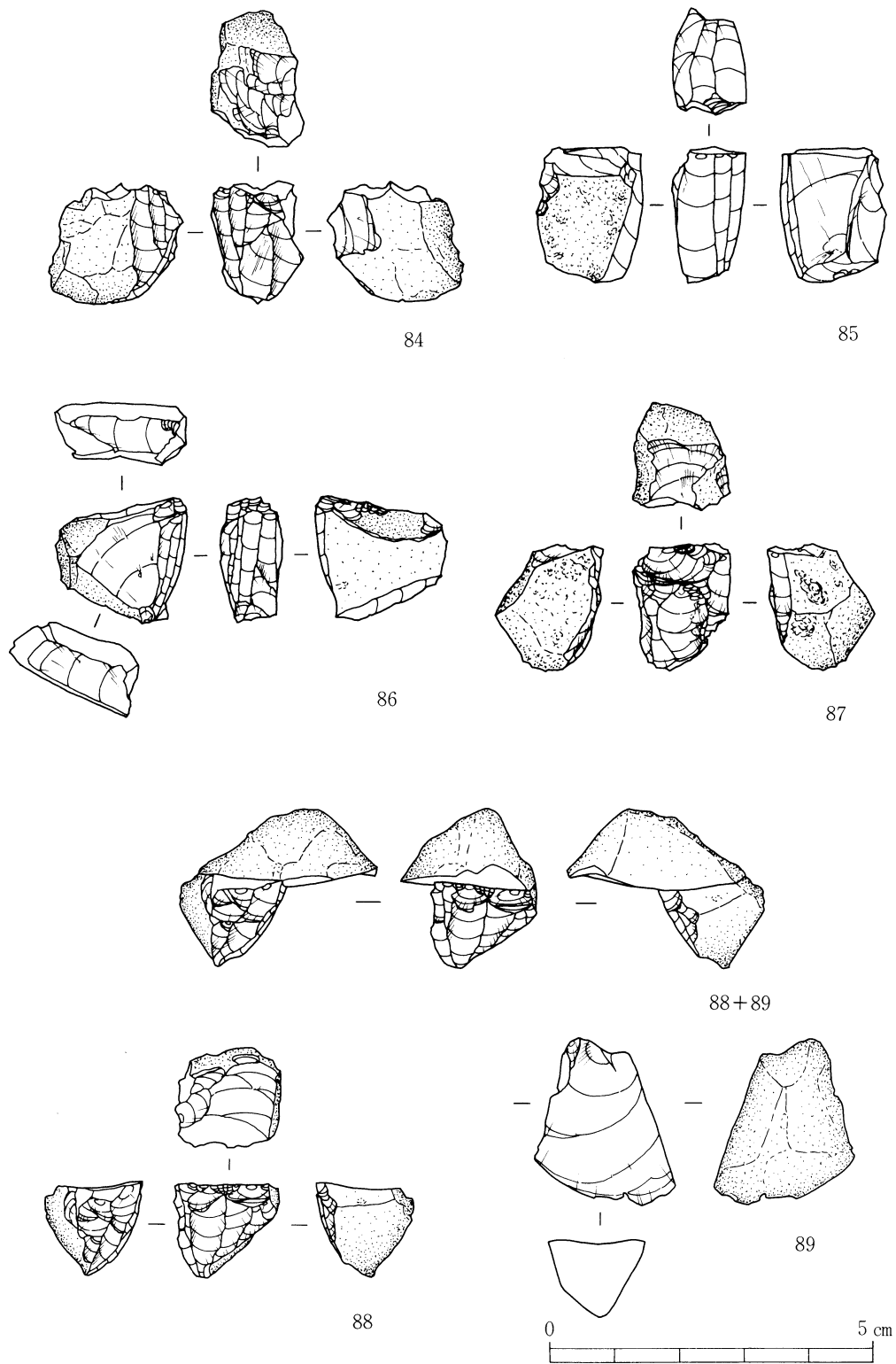
第18図 VII層出土石器(3) (細石刃核①)



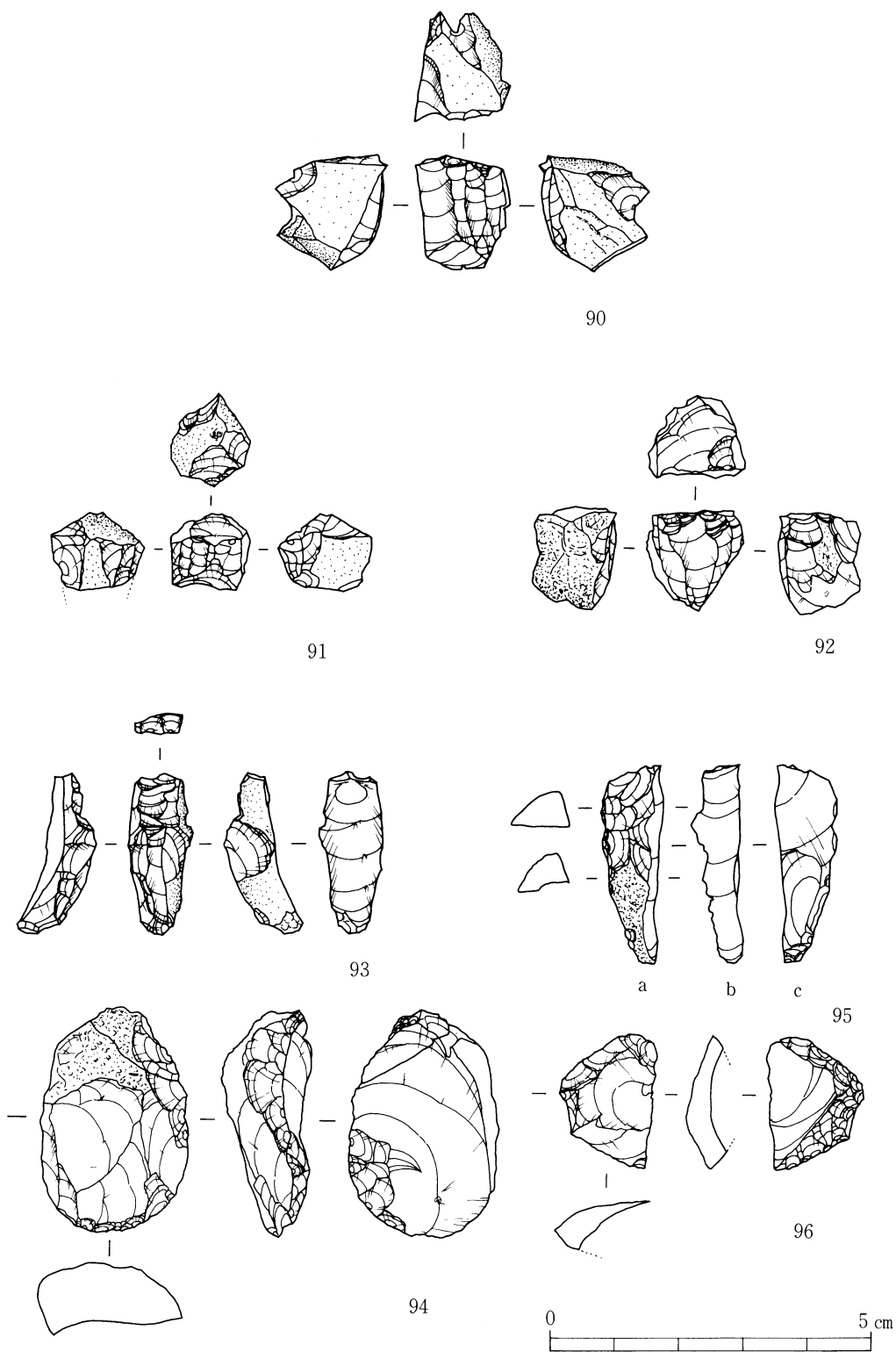
第19図 VII層出土石器(4) (細石刃核②)



第20図 VII層出土石器(5) (細石刃核③)



第21図 VII層出土石器(6) (細石刃核④)



第22圖 VII層出土石器(7) (細石刃核⑤, 調整剝片)

に二次加工が施されたものである。これも同様にブランク関連の剥片と思われる。

94・95・96の石質は黒曜石であるが、特徴的な青灰色を呈しており、83や85と同質の（あるいは同一母岩）の黒曜石③である。

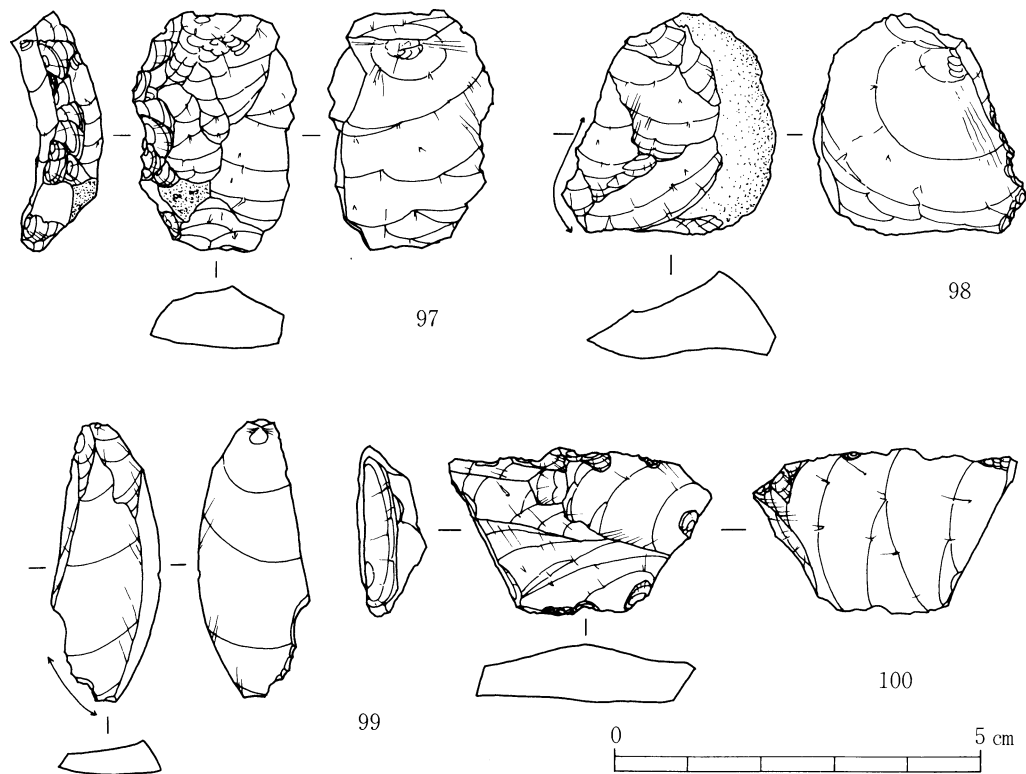
スクレイパー

二次加工により刃部が作られているもので、破片も含め5点出土している。内訳はAブロックから4点、Cブロックで1点である。出土分布は第24図に示してある。

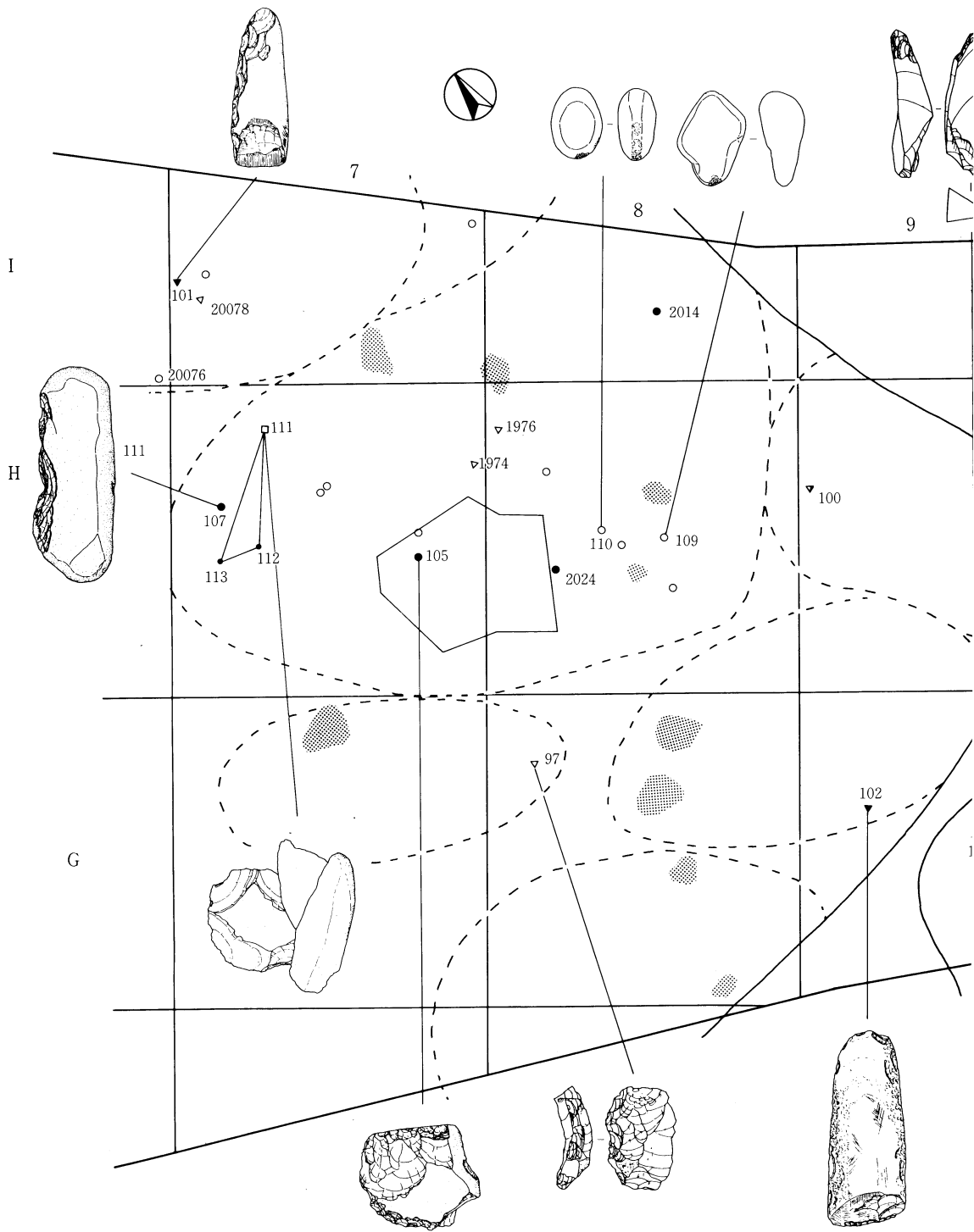
97は気泡や不純物の多い黒曜石の剥片を使用し、片側側縁に連続した二次加工を施し刃部としたものである。他方の側縁は欠損している。この他、連続した二次加工が認められスクレイパーの破片と考えられるものが4点出土している。

使用痕のある剥片

明瞭な二次加工は施されていないが、剥片の鋭利な縁辺に、使用痕と考えられる微細な小剝離痕が認められるもので、各ブロックに1点ずつの計3点出土している。98はBブロックから出土したもので、剥片の鋭利な縁辺に使用痕が認められる。99は頁岩を石材とし、鋭利な先端部に使用痕が認められる。100はAブロックから出土したもので、縦長剥片の打面部は斜めに切断されており、両側縁の鋭利な部分に使用痕が観察される。98及び100は97と同様の気泡や不純物の多い黒曜石が使用されている。

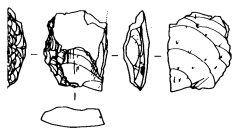


第23図 VII層出土石器(8) (削器, 使用痕剥片)





第24図 その他の石器出土分布図



12

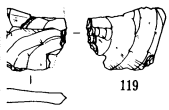
13

14

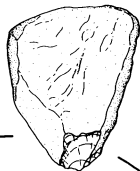
120



106



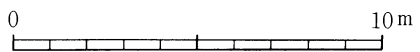
119



パー, 使用痕のある剥片

石

石器



磨製石斧

計3点出土している。Aブロックから2点、Cブロックから1点である。

101はA1ブロックから出土したものである。頁岩の礫を素材とし、粗い剥離を基部から片側側縁に施し整形している。他方の側縁は礫の直線部をそのまま利用し、刃部近くに研磨による整形が施され擦痕が認められる。整形剥離は主に片側から行われている。刃部も裏面からの大きな剥離の後、入念な研磨が施されている。刃部は片刃に仕上げられており、刃部の形状は刃部方向からみて、若干弧状になる。裏面の刃部先端には研磨痕とは異なる縦方向の使用痕が観察される。長さは約10cmと小さい。

102はA4ブロックから出土したものである。石材は頁岩であり、粗い剥離により全体が整形され、その後、敲打調整を施し整形している。刃部は研磨により101と同様に片刃に仕上げられ、刃部の形状は刃部方向からみて若干弧状になる。刃部先端には使用痕と考えられる小剥離痕がみられる。長さは約12.5cmである。

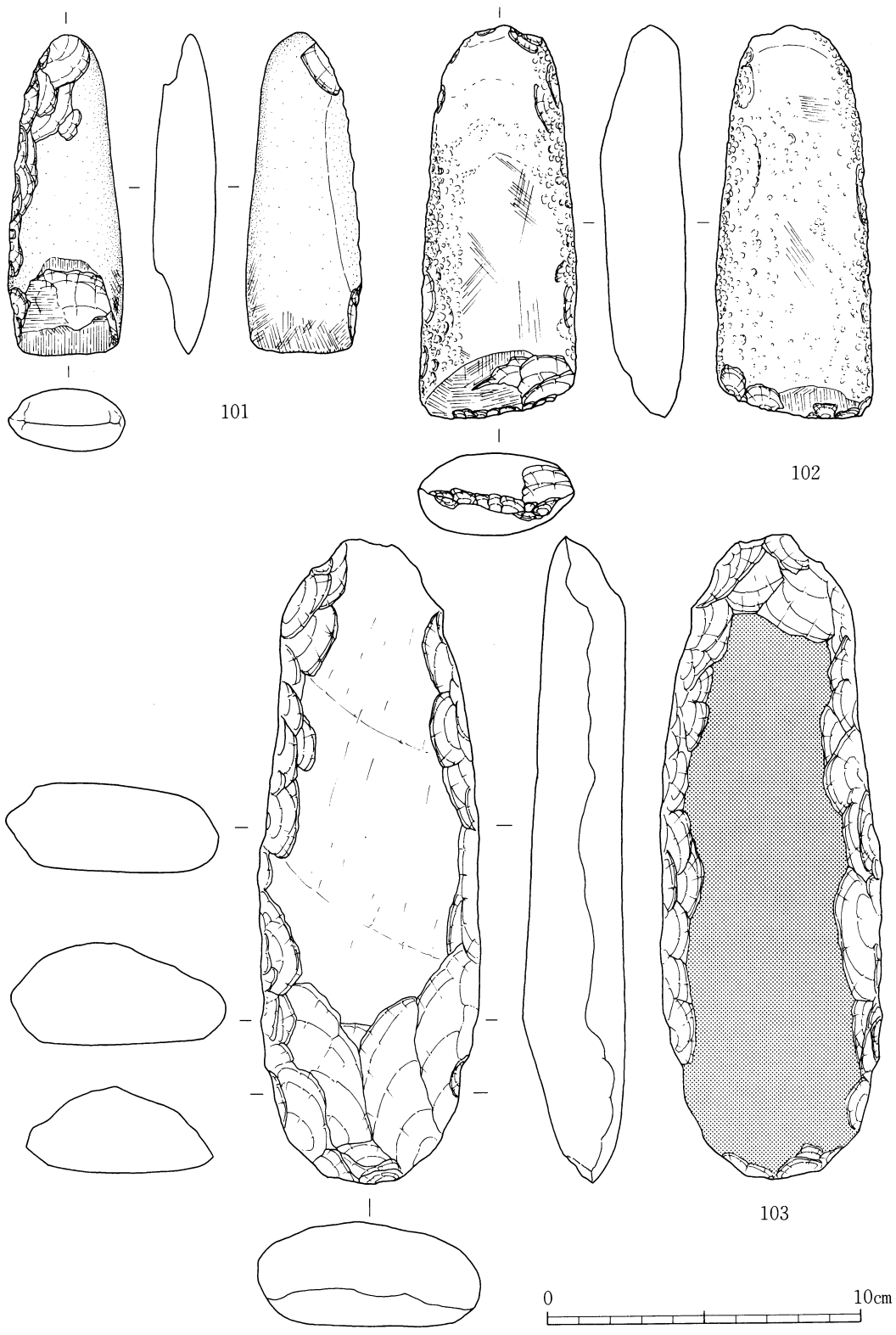
103はCブロックから出土したものである。長さは20.5cmを測る大型のもので、最大幅は刃部近くにあり7.1cmで、その部分に最大厚があり3.3cmを測る。両側縁は両面からの粗い剥離により整形され、刃部近くの最大幅がある部分にはその後敲打調整が施された痕跡が観察される。刃部は片側（裏面）からの比較的大きい剥離によって形成され、平面形が半円状に、断面形は三角形状に仕上げられている。裏面には広い平坦面を有しており、その面の状況や表面及びその他の部分と風化の程度が異なることより、研磨が施されているものと判断される。石材は黄褐色に風化している頁岩である。

礫器

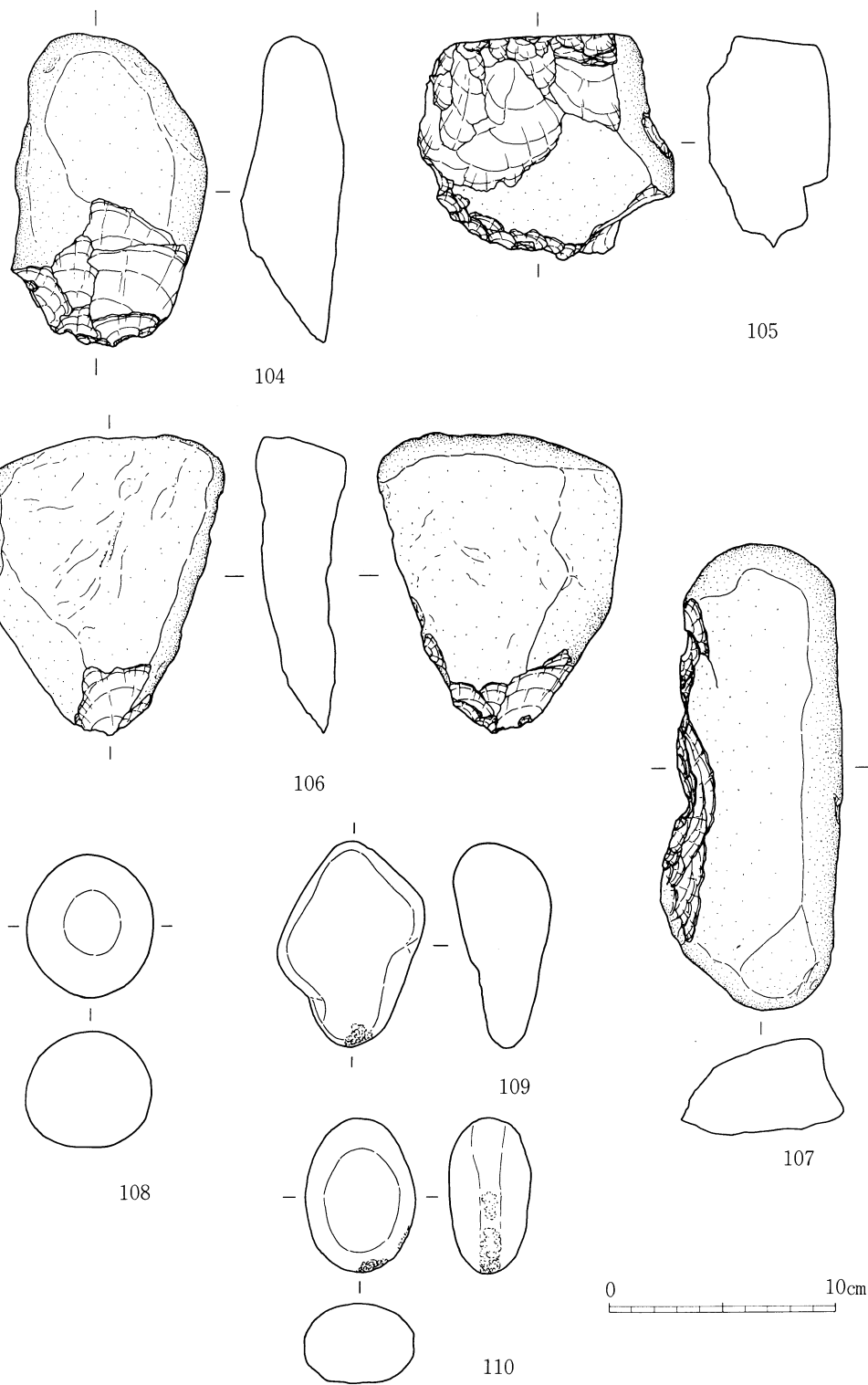
A2ブロックに4点、Bブロックに2点の計6点出土している。104は楕円形礫の長軸の一端に片側から粗い剥離を施し刃部としたものである。105は礫の半円状の縁辺に連続した粗い加工を施し刃部としている。また、表面の平坦面にも上方からの剥離が行われているが、礫器の整形というより石核の転用と考えられる。106はほぼ三角形を呈する先端部に表裏両面からの剥離が行われているものである。107は長楕円形礫の片側縁辺に、片面から粗い剥離が施されているものである。

磨石・敲石

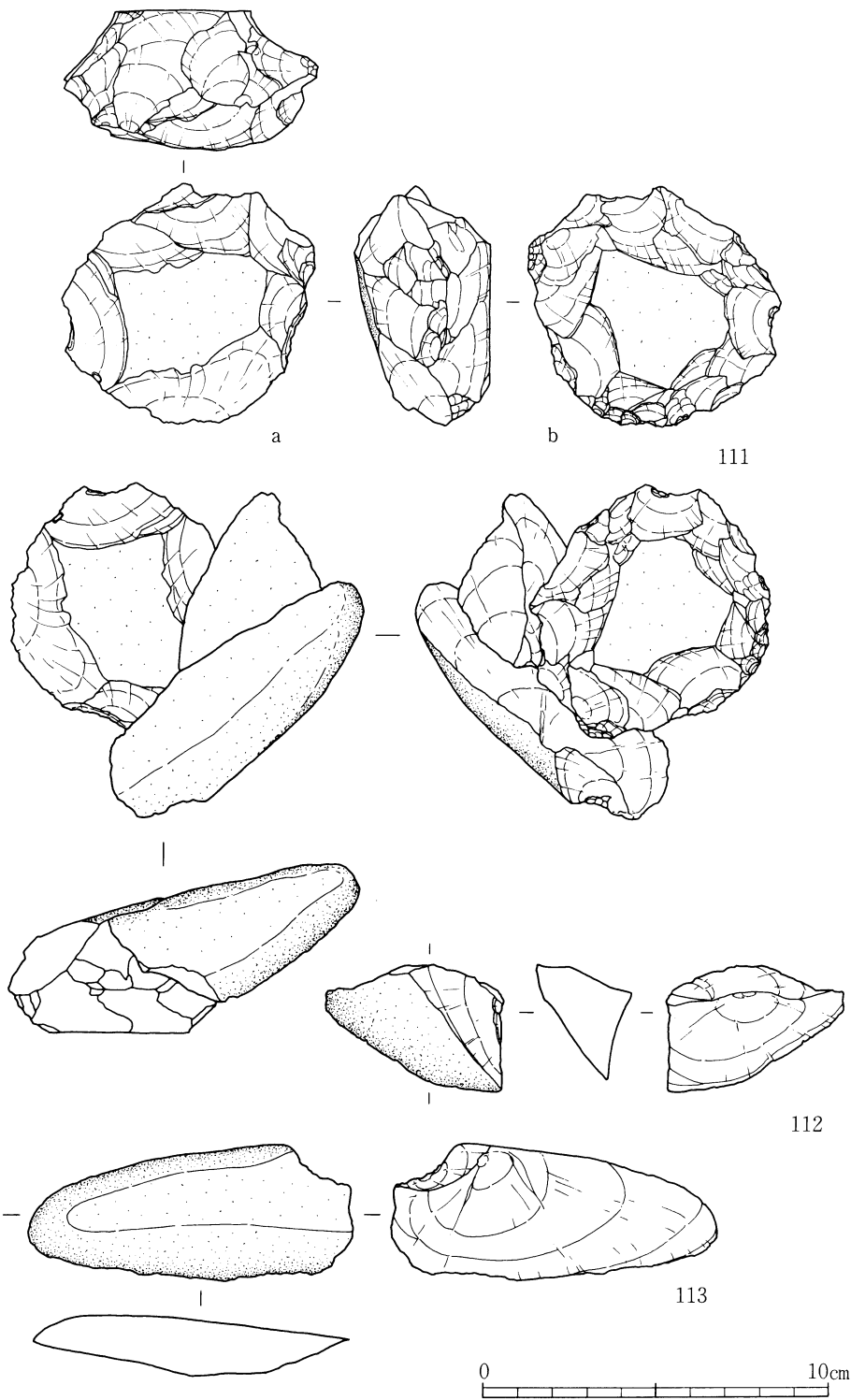
108～110は磨石あるいは敲石と考えられるものである。108は球状の円礫を利用したもので、明瞭な使用痕は認められない。109・110は一端に敲打痕が認められるもので敲石と考えられる。この他、明瞭な使用痕は確認できないが、河原から採取してきたと思われる砂岩の円礫が8点出土しており、磨石あるいは敲石として使用されたものと考えられる。A2ブロックに集中して（第24図）いる。



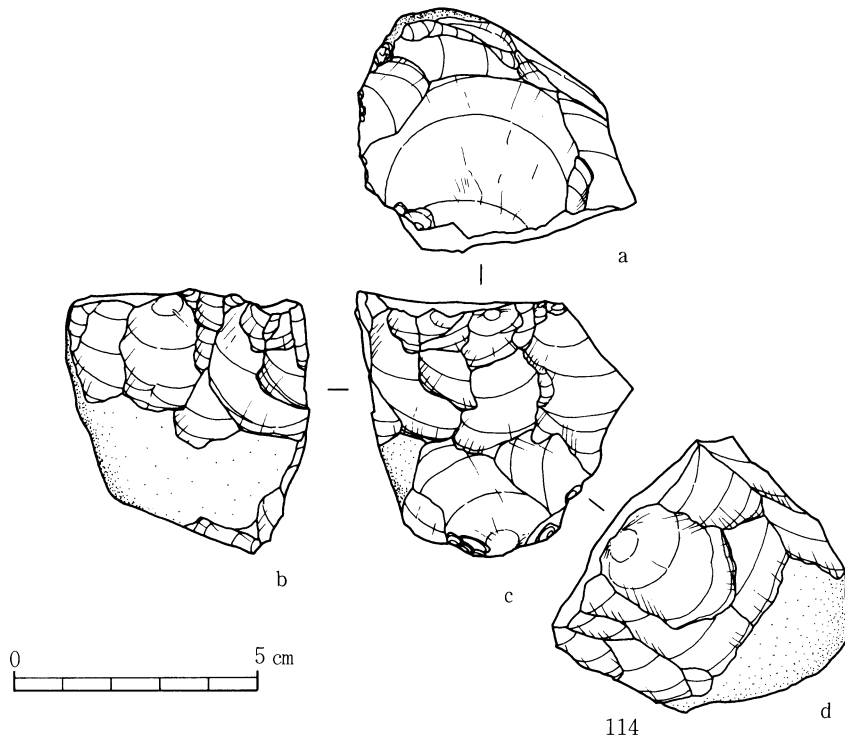
第25图 VII層出土石器(9) (磨製石斧)



第26图 VII層出土石器(10) (礫器, 磨石, 敲石)



第27图 VII層出土石器(1) (石核①)



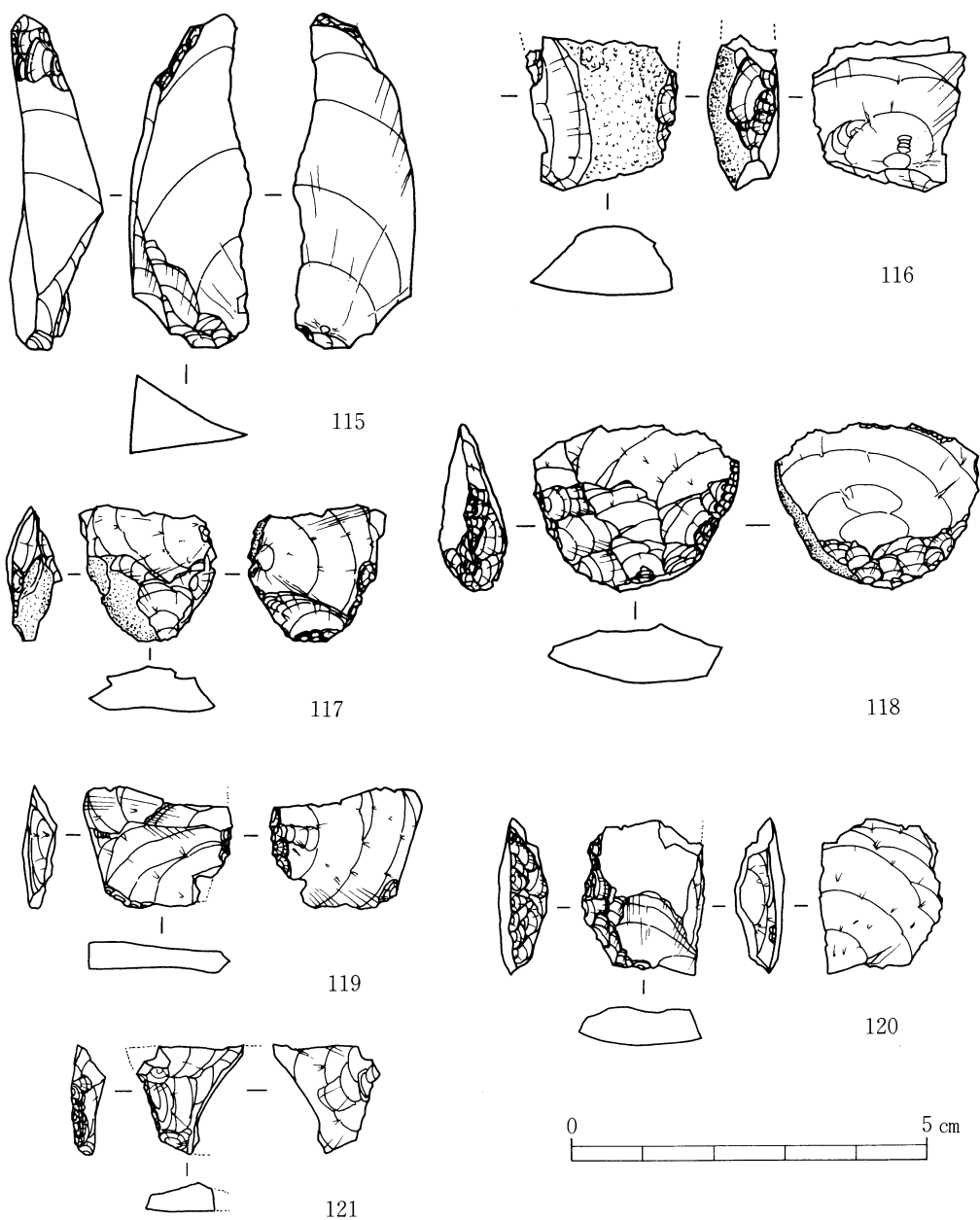
第28図 VII層出土石器(12) (石核②)

石核

111はA 2ブロックから出土した円盤形石核である。近く出土した2点の剥片と接合している。接合により素材はやや大型の扁平な円礫であることが確認できた。早い段階で113の剥片が剥離されているが、そのまへの段階で113の腹面の縁辺にみられる部位が剥離されている。次に113が剥離された平坦面を打面にして、112の打面に当たる部分が剥離されている。その剥離によって得られた平坦面を打面にして112が剥離されている。111の表面(a面)と裏面(b面)を比較すると、b面の各小剥離面にはバルブが残り、a面のものにはない。このことにより、最終的にはa面の各剥離面を打面にしてb面の各剥片(残存する剥離面)を剥いでいることが理解できる。

112及び113には二次加工や使用痕は認められず、表皮を取るための剥離と考えられ、目的剥片ではなさそうである。目的剥片は残存しない他の得られた剥片であり、何らかの形で使用されたため付近に残らなかったと考えられる。

114はa面の平坦面を打面にして、b面及びc面が剥離されている。またc面を打面にしてd面が剥離され、さらにd面を打面にしてc面の下部が剥離されている。すなわち打面を轉移しながら、石核を回転させて剥片剥離作業を進めている。部分的に表皮が残っており、頁岩の円礫が使用されている。ただし、この石材と同質(同一母岩及び同質頁岩)の剥片及び剥片は一点も出土していない。



第29図 VII層出土石器(13) (ナイフ形石器, 台形石器)

ナイフ形石器文化の遺物

整理作業段階で本遺跡から細石器文化とは異なる以前のナイフ形石器文化の遺物が確認された。これらはG-9・10区からH-11区, I-12区と帯状の分布で出土している。

ナイフ形石器

115・116はナイフ形石器である。115は頁岩の縦長剥片を使用し、先端部近くの片側に二次

第4表 細石刃計測表(1)

番号	部位	出土区	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	使用痕	注記番号
1	完形	G-7	黒曜石	1.65	0.6	1.9	0.22		1668
2	完形	H-10	〃	1.55	0.55	1.5	0.14	両側縁	18728
3	完形	H-8	〃	1.4	0.35	1.4	0.06		1365
4	完形	I-7	〃	1.4	0.4	1.7	0.10		1263
5	完形	I-7	〃	1.3	0.4	1.3	0.06		1219
6	完形	H-7	〃	1.82	0.4	2.4	0.24		1438
7	頭部	H-8	〃	0.9	0.7	1.1	0.07		1339
8	頭部	G-8	〃	0.8	0.65	1.1	0.06		1059
9	頭部	I-12	〃	0.65	0.7	2.2	0.11		19121
10	頭部	H-7	〃	0.75	0.6	1.5	0.08		1336
11	頭部	H-8	〃	1.15	0.8	1.0	0.09		1399
12	頭部	G-10	〃	1.3	0.45	1.0	0.09		18593
13	頭部	I-7	〃	1.3	0.55	1.2	0.07		1227
14	頭部	G-8	〃	0.9	0.6	1.2	0.08		1462
15	頭部	H-7	〃	1.3	0.55	1.4	0.14	片側縁	1355
16	頭部	H-7	〃	1.25	0.4	1.5	0.09		1664
17	頭部	H-8	〃	1.3	0.7	2.6	0.27		1543
18	頭部	H-8	〃	0.9	0.5	2.1	0.09	片側縁	1048
19	頭部	H-10	〃	0.7	0.4	0.9	0.04	片側縁	18931
20	頭部	H-8	〃	0.8	0.7	1.6	0.09		1349
21	頭部	H-8	〃	0.8	0.6	2.0	0.10		1308
22	頭部	I-7	〃	0.9	0.5	1.8	0.10		1905
23	頭部	G-12	〃	1.15	0.55	1.8	0.13		19030
24	中間部	G-10	〃	0.95	0.55	1.6	0.11		18704
25	中間部	G-12	〃	0.9	0.55	1.4	0.09	片側縁	19108
26	中間部	G-8	〃	1.0	0.4	1.2	0.05	片側縁	20023
27	中間部	H-7	〃	1.25	0.7	1.7	0.19	片側縁	1330
28	中間部	G-9	〃	1.0	0.4	1.3	0.07	片側縁	18637
29	中間部	H-7	〃	1.05	0.9	1.5	0.13		1648
30	中間部	H-9	〃	1.6	0.65	1.7	0.21		18357
31	中間部	I-7	〃	1.25	0.65	1.5	0.15	片側縁	1272
32	中間部	G-9	〃	1.65	0.7	1.5	0.21		18346
33	中間部	I-7	頁岩	1.5	0.4	1.4	0.10		1907
34	中間部	H-7	黒曜石	0.8	0.45	1.0	0.05	片側縁	1610
35	中間部	G-12	〃	1.4	0.6	1.6	0.15	両側縁	18415
36	中間部	G-12	〃	0.5	0.5	1.9	0.06	片側縁	19029
37	中間部	I-12	〃	0.95	0.6	1.0	0.07		19114
38	中間部	H-7	〃	0.65	0.5	1.0	0.03		1611
39	中間部	I-7	黒曜石(土牛鼻)	0.8	0.4	1.3	0.05	片側縁	1214
40	中間部	H-8	黒曜石	0.85	0.5	1.4	0.06	片側縁	1559
41	中間部	G-13	〃	0.8	0.4	1.2	0.05	片側縁	31128
42	中間部	G-12	〃	0.65	0.4	1.2	0.04	片側縁	18414
43	尾部	G-11	〃	1.35	0.4	1.5	0.08	両側部分	18537
44	尾部	G-9	〃	1.0	0.7	1.0	0.07		18307
45	尾部	H-15	〃	1.4	0.55	1.1	0.11	片側縁	31170
46	尾部	H-8	〃	0.85	0.4	1.8	0.04		1369
47	尾部	I-7	〃	1.4	0.6	1.1	0.11	片側縁	1028
48	尾部	G-8	〃	0.95	1.0	1.5	0.11		1480
49	尾部	H-9	〃	1.05	0.8	1.0	0.09		18557
50	尾部	H-7	〃	1.35	0.55	1.6	0.13		1446

第5表 細石刃計測表(2)

番号	部位	出土区	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	使用痕	注記番号
51	尾部	G-10	黒曜石	0.75	0.5	0.8	0.03		18327
52	尾部	H-9	〃	0.85	0.6	1.2	0.06		18413
53	尾部	G-10	〃	1.0	0.55	1.0	0.07	片側縁	18594
54	尾部	G-8	〃	0.7	0.5	0.9	0.03		1061
55	頭部		黒曜石(青灰色)	1.7	0.7	1.6	0.26	両側部分	18587
56	中間部		〃	1.45	0.6	2.0	0.16		18474
57	中間部		〃	1.8	0.45	1.7	0.20	片側縁辺	18484
58	尾部		〃	2.5	0.9	1.4	0.34	片側縁辺	18579
59	尾部		〃	1.95	0.7	1.8	0.26		18496
60	尾部		〃	1.2	0.7	3.0	0.20		18546
以下は未実測分である									
	完形	H-8	黒曜石	0.95	0.4	1.0	0.04		18341
	完形	H-7	〃	1.1	0.6	1.2	0.08		1937
	完形	G-7	〃	1.35	0.55	1.5	0.09	片側縁	1667
	完形	H-7	〃	1.4	0.7	2.5	0.14		1633
	完形	H-7	〃	1.3	0.55	1.5	0.19		1616
	完形	H-8	〃	1.95	0.95	1.6	0.26	片側縁	1293
	完形	H-8	〃	1.55	0.9	2.3	0.22		3955
	完形	I-11	〃	2.15	0.75	1.8	0.32		18694
	完形	G-8	〃	1.3	0.55	1.6	0.13		1484
	完形	H-8	〃	1.3	0.6	1.0	0.09		1995
	完形	G-8	〃	2.0	0.8	2.8	0.44		1006
	完形	H-8	〃	1.5	0.6	1.7	0.15		1347
	頭部	H-8	〃	1.0	0.55	1.2	0.08	片側縁	1967
	頭部	I-7	〃	1.1	0.6	1.0	0.06		1513
	頭部	H-8	〃	0.75	0.65	1.7	0.05		1297
	頭部	G-13	〃	1.05	0.8	1.7	0.13		31185
	頭部	H-7	〃	0.6	0.55	1.5	0.05		1279
	頭部	H-7	〃	0.8	0.8	1.6	0.09		1069
	頭部	H-8	〃	1.0	0.7	1.4	0.08		1595
	頭部	H-8	〃	0.8	0.65	1.6	0.08		1084
	頭部	H-7	〃	1.2	0.45	1.2	0.07		1216
	頭部	I-12	〃	1.15	0.6	1.4	0.11	片側縁	19069
	頭部	H-8	〃	0.9	0.8	1.2	0.09		1604
	頭部	I-7	〃	0.85	0.55	1.7	0.08		1915
	頭部	H-7	〃	0.9	0.6	1.8	0.08		1938
	頭部	I-11	〃	1.1	0.55	1.4	0.07		18793
	頭部	H-8	〃	0.7	0.55	1.6	0.05		1974
	頭部	H-8	〃	0.8	0.6	1.7	0.10		1598
	頭部	H-9	〃	0.8	0.6	1.8	0.11		18527
	頭部	H-9	〃	1.0	0.45	1.0	0.04		18438
	頭部	I-7	〃	1.7	0.9	1.9	0.27		1910
	頭部	G-8	〃	1.15	0.9	1.8	0.15		1481
	頭部	H-7	〃	1.0	0.7	1.6	0.09		1634
	頭部	H-8	〃	1.0	0.55	1.3	0.06		2005
	頭部	I-7	〃	0.45	0.6	1.2	0.03		1404
	頭部	G-9	〃	0.6	0.45	0.8	0.01		18617
	頭部	I-7	〃	0.9	0.4	1.8	0.06		1916
	頭部	H-7	〃	1.05	0.7	0.9	0.05		1025

第6表 細石刃計測表(3)

番号	部位	出土区	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	使用痕	注記番号
	頭部	H-9	黒曜石	0.75	0.5	1.1	0.04		18380
	頭部	H-7	〃	1.0	0.5	1.1	0.05		1415
	頭部	I-7	〃	0.8	0.5	2.3	0.09		1224
	頭部	H-8	〃	0.5	0.35	0.9	0.02		3958
	頭部	H-7	〃	0.6	0.7	1.0	0.04		1629
	頭部	I-7	〃	0.9	0.7	1.7	0.09		1606
	頭部	G-10	〃	1.4	0.8	1.9	0.21		18354
	頭部	I-11	〃	0.7	0.6	1.0	0.04		18708
	中間部	H-8	〃	0.6	0.7	1.4	0.05		1594
	中間部	H-8	〃	1.1	0.65	1.8	0.12		1583
	中間部	H-7	〃	1.0	0.5	0.8	0.05		1951
	中間部	H-8	〃	0.65	0.35	0.8	0.01		1556
	中間部	I-12	〃	0.9	0.55	1.0	0.06	片側縁	18745
	中間部	H-8	〃	0.85	0.5	2.8	0.09		1983
	中間部	H-8	〃	0.75	0.55	1.2	0.05		1312
	中間部	H-8	〃	0.8	0.7	1.9	0.09	片側縁	1341
	中間部	H-8	〃	0.7	0.55	1.6	0.06	片側縁	2013
	中間部	I-7	〃	0.95	0.65	1.4	0.10	片側縁	1909
	中間部	I-7	〃	0.85	0.6	1.0	0.06		1516
	中間部	H-7	〃	1.15	0.4	0.9	0.04		1660
	中間部	H-8	〃	0.75	0.5	1.8	0.05		1376
	中間部	H-7	〃	0.85	0.5	1.8	0.07		1632
	中間部	I-7	黒曜石(上牛鼻)	0.8	0.55	3.0	0.13		1232
	中間部	I-7	黒曜石	0.95	0.45	1.0	0.05		1246
	中間部	G-9	〃	0.9	0.4	1.4	0.04		18458
	中間部	G-8	〃	0.5	0.55	0.9	0.02		1490
	中間部	H-8	〃	0.8	0.5	0.9	0.04		1996
	中間部	H-9	〃	0.8	0.4	1.2	0.04		18411
	中間部	I-7	〃	1.3	0.65	3.0	0.29		20091
	中間部	H-7	〃	1.35	0.7	2.4	0.20	片側縁	1932
	中間部	I-7	〃	1.2	0.5	1.7	0.12		1038
	中間部	H-9	〃	0.9	0.7	2.2	0.13		18403
	中間部	G-8	〃	0.95	0.9	1.3	0.11		1058
	中間部	H-8	〃	0.65	0.5	1.6	0.05		1373
	中間部	H-9	〃	0.65	0.5	1.5	0.03		18385
	中間部	H-8	〃	0.7	0.5	1.1	0.04	片側縁	1351
	中間部	H-8	〃	0.55	0.7	3.3	0.07		1452
	中間部	H-10	〃	0.7	0.5	1.6	0.05	両側縁	18761
	中間部	H-8	〃	1.35	0.6	2.0	0.11		1304
	中間部	I-7	〃	0.7	0.65	1.0	0.03		20080
	尾部	H-7	〃	1.1	0.8	1.3	0.12		1982
	尾部	I-7	〃	0.8	0.65	1.1	0.05		1234
	尾部	H-7	〃	0.8	0.7	0.8	0.04		1592
	尾部	H-7	〃	0.9	0.7	1.0	0.06		1960
	尾部	H-8	〃	0.6	0.55	0.7	0.02		1538
	尾部	I-12	〃	0.9	0.7	2.2	0.08		19094
	尾部	H-7	〃	0.9	0.65	1.2	0.06		1333
	尾部	H-8	〃	0.7	0.5	0.6	0.02		1968
	尾部	H-11	〃	0.5	0.5	1.5	0.03		19076
	尾部	G-8	〃	1.2	0.85	1.7	0.14		3959

第7表 細石刃計測表(4)

番号	部位	出土区	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	使用痕	注記番号
	尾部	H-8	黒曜石	0.8	0.7	1.8	0.08		1342
	尾部	H-9	〃	1.1	0.75	0.9	0.06		18402
	尾部	H-8	〃	0.9	0.8	1.0	0.05		1578
	尾部	I-7	〃	0.9	0.55	1.1	0.05	片側縁	1213
	尾部	H-7	〃	1.4	0.7	0.9	0.07		1433
	尾部	H-7	〃	0.6	0.6	1.7	0.06	片側縁	3963
	尾部	H-8	〃	0.9	0.6	1.7	0.09		1977
	尾部	H-7	〃	1.1	0.9	1.9	0.21	末端部縁辺	20052
	尾部	I-11	〃	1.55	0.95	1.7	0.28		18765
	尾部	H-7	〃	1.0	0.7	1.8	0.12		1324
	尾部	I-11	〃	0.95	0.7	1.8	0.09		19111
	尾部	I-7	〃	1.05	0.5	1.3	0.08		20079
	尾部	H-7	〃	1.8	0.75	2.6	0.36		1326
	尾部	I-7	〃	1.5	1.0	3.0	0.36		1267

第8表 細石刃核計測表

番号	ブロック	出土区	石質	作業面長(cm)	打面幅(cm)	打角(度)	重量(g)	備考	注記番号
61	A 1	I-7	黒曜石	1.9	1.3	80	2.82	打面転移	1235
62	A 1	I-7	〃	1.2	1.4	90	3.46		1241
63	A 2	H-7	〃	2.1	1.4	50	2.21		20099
64	A 2	H-7	〃	1.8	1.2	70	4.86		1659
65	A 2	I-7	〃	1.6	1.5	45	3.06	打面転移	1948
66	A 2	H-7	〃	1.1	0.7	70	1.20		1618
67	A 2	H-8	〃	1.7	1.5	90	2.28		1975
68	A 2	H-8	〃	1.1	1.3	78	2.26		2003
69	A 2	H-7	〃	1.8	1.0	80	2.01		1572
70	A 2	H-8	〃				0.85	作業面再生剥片	1394
71	A 2	H-8	〃	1.5	1.4	90	7.82		1549
72	A 2	H-8	〃	2.4	1.5	85	6.25		1309
73	A 2	H-8	〃	1.5	1.0	120	9.05		1545
74	A 2	H-8	〃	1.2(2.5)	1.3	88	5.36		20100
75	A 2	H-8	〃	1.7	0.8	80	6.64		1313
76	A 2	H-8	〃	2.3	1.4	75	6.36		1542
77	A 4	G-8	〃	2.5	0.9	80	5.41		1492
78	A 4	H-8	〃	2.1	0.8+0.5	88	5.00		1477
79	A 4	G-8	〃	1.1	0.8	90	4.75		1060
80	B	I-11	水晶	1.5	1.8	65	6.52		18769
81	B	I-11	黒曜石	1.3	0.5	105	4.26		18477
82	C	G-10	〃	1.9	1.2	56	3.25		18479
83	C	H-11	黒曜石(青灰色)	1.85	1.55	55	2.58		18540
84	C	G-11	黒曜石	1.8	1.0	74	5.01		18485
85	C	H-11	黒曜石(青灰色)	2.1	0.9	94	4.35	打面転移	18539
86	C	G-10	黒曜石	2.0	0.8	73	3.89		18486
87	C	G-10	〃	2.1	1.1	75	4.21		18416
88	C	G-11	〃	1.6	1.4	71	2.97	89と接合	18536
89	C	G-11	〃	2.6	2.15	80	4.67	打面形成剥片	18545
90	C	G-12	〃	1.9	1.3	87	4.06		19066
91	C	H-13	〃	1.1	0.95	90	2.00		31123
92	C	H-13	〃	1.6	1.2	90	2.79		31122

第9表 その他の石器計測表

番号	器種	出土区	石 質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	注記番号
93	打面再生剥片	G-11	黒曜石	2.6	1.0	0.7	1.58		18481
94	ブランク	H-11	黒曜石(青灰色)	3.55	2.25	1.1	9.56		18993
95	調整剥片	G-11	〃	3.1	1.0	0.75	1.71		18473
96	調整剥片	H-9	〃	2.1	1.5	0.35	1.45		18559
97	削器	G-8	黒曜石	3.3	2.25	2.26	7.35		1063
98	使用痕ある剥片	H-10	〃	3.03	2.9	1.18	8.50		18931
99	使用痕ある剥片	H-11	頁岩	3.8	1.5	0.47	2.91		19103
100	使用痕ある剥片	H-9	黒曜石	2.32	3.55	0.95	5.97		18428
101	局部磨製石斧	G-9	頁岩	10.25	3.71	2.0	97.83		18513
102	磨製石斧	I-7	頁岩	12.58	5.05	2.65	247.16		1902
103	磨製石斧	G-9	頁岩	20.5	7.1	3.3	680.0		18900
104	礫器	I-11	頁岩	13.8	8.7	4.6	664.0		19205
105	礫器	H-7	頁岩(熱変成)	10.0	11.4	6.0	730.0		1630
106	礫器	I-13	頁岩(熱変成)	13.3	15.7	3.95	665.0		31108
107	礫器	H-7	砂岩	10.8	8.1	4.2	954.0		20087
108	磨石・敲石	G-10	砂岩	6.35	5.6	5.1	243.32		18915
109	敲石	H-8	砂岩	9.05	6.54	6.33	237.53		1384
110	敲石	H-8	砂岩	6.82	4.93	3.52	163.27		1562
111	円盤形石核	H-7	頁岩	7.35	6.99	3.95	220		20082
112	剥片	H-7	頁岩	3.65	5.15	2.2	31.12		1424
113	剥片	H-7	頁岩	3.95	9.4	1.78	70.42		1927
114	石核	G-10	頁岩	5.45	5.7	5.02	163.11		18910
115	ナイフ形石器	G-9	頁岩	4.7	1.7	1.8	7.45		18347
116	ナイフ形石器	G-10	黒曜石	2.15	2.15	1.0	4.55		18323
117	台形石器	G-10	〃	1.9	1.95	0.74	2.10		18633
118	台形石器	G-10	〃	2.35	2.88	0.93	4.84		18673
119	台形石器	H-11	〃	1.73	1.15	0.49	1.40		18986
120	台形石器	I-12	〃	2.2	1.7	1.18	2.50		19232
121	台形石器	G-10	〃	1.53	1.51	0.49	0.70		18945

加工による刃潰しを施している。116は表皮の残る剥片の片側に二次加工を行っている。

台形石器

計5点認められた。117は不定形剥片を用い、片側側縁は打面のままで他方の側縁は折断を行い基部に調整を施している。118は打面をそのまま残し、両側縁に調整剥離を施している。119は片側側縁と基部の一部に調整を行い、反対側縁は折断している。120も側縁を急傾斜のブラントニングと折断を行っている。刃部近くの背面は剥落している。121も欠損品であるが直線状の刃部と、連続した小剥離によるブラントニングが認められる。これらの台形石器の刃部には使用痕が観察される。

第V章 縄文時代早期の調査

第1節 調査の概要

縄文時代早期の遺構及び遺物は第V層から検出されている。調査区域の第V層は、全体にわたり良好に堆積していた。

出土遺物は調査区域の西側から東側まで広範囲にみられるものの、小区域に集中する部分は数ヶ所認められるが、多くは散在した状態であった。

遺物のなかで土器は数型式のものが認められ、前平式土器、吉田式土器、石坂式土器、塞ノ神式などみられた。そのなかで出土量が多く主体となるのは石坂式土器であった。石器では石鏃、磨製石鏃、石斧、礫器、磨石・敲石、石皿などが出土した。

遺構としては、集石遺構が35基第V層下部から検出された。付図4に第V層のコンタ及び集石配置を示している。第V層面は局部的にわずかな凹地や谷状の部分がみられるが、概ね東南方向に緩く傾斜している。

出土土器から判断されるように、数型式の土器は各々分布を異にしており、各々の集団がそれぞれの区域に遺物や遺構を残したことが理解できる。

第2節 集石遺構

第V層下部から計35基の集石が検出された。これらの集石は7区から34区までの広範囲にわたり認められるが、H・I-10区、G-20区、G・H・I-22~24区、H・I-27・28区に集中して検出されている。特にG・H・I-22~34区には多くの集石が近接してまとまっている。これらの集石の分布は出土遺物の分布と重なっている。出土遺物のなかでも、土器の型式別の分布とそれぞれ対比が可能であり、各土器型式の有する時間差が集石にも対応される。すなわち計35基の集石は数グループの時間差に区別できよう。ただし、個別の各集石に対応する土器型式を確定するには困難なものもある。

各々の集石の外観的な特徴や大きさは第10表に示したとおりであり、平面的な特徴から以下に分類できる。

- 1類…… 直径約1 m前後に礫が集中し、下面には直径80cm程度の円形あるいは楕円形の掘り込みが認められるもの。礫の総数は54個から、多いもので105個のものがある。礫は完形の他、火熱を受けたためと考えられる破損礫がある。(4, 5, 9, 10, 19, 23号)
- 2類…… 比較的狭い範囲で直径1 m程度かそれより狭い面積に、礫が散在して分布するもので、礫数も少ない。集石の半数がこれにあたる。
(3, 6, 7, 8, 13, 14, 16, 17, 20, 21, 22, 24, 25, 26, 28, 32, 35号)
- 3類…… 礫数は多く、集中度も強いが、下面に掘り込みが認められないもの。火熱を受けたためと思われる破損礫が多い。(1, 27, 29号)

4類…… 礫が直径約2m前後のやや広い範囲に広がって分布しているが、比較的礫がまとまっているもの。(11, 31号)

5類…… 礫が直径3～4mの比較的広い範囲に散在し、集中していないもの。礫数も比較的多い。(2, 12, 15, 18, 34号)

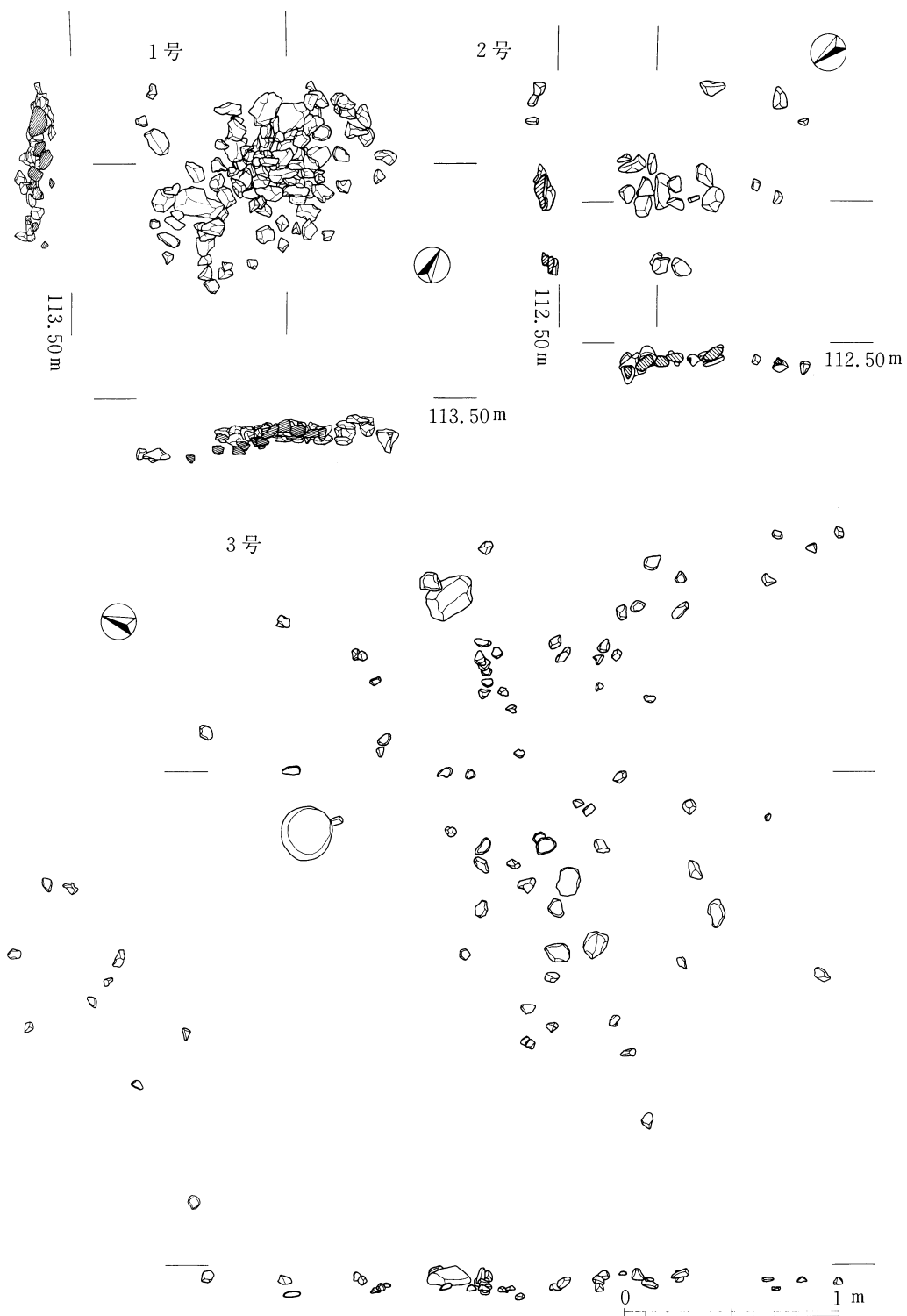
6類…… 33号集石のように、礫が長径9m程度のかなり広い範囲に散在しているもので、礫数もきわめて多い。

以上のように6類に分けられる。34号集石は広さの点では6類に区分されるものの、形態的には2類及び3類と4類が極めて近い位置に接近しているものとみなしてよい。

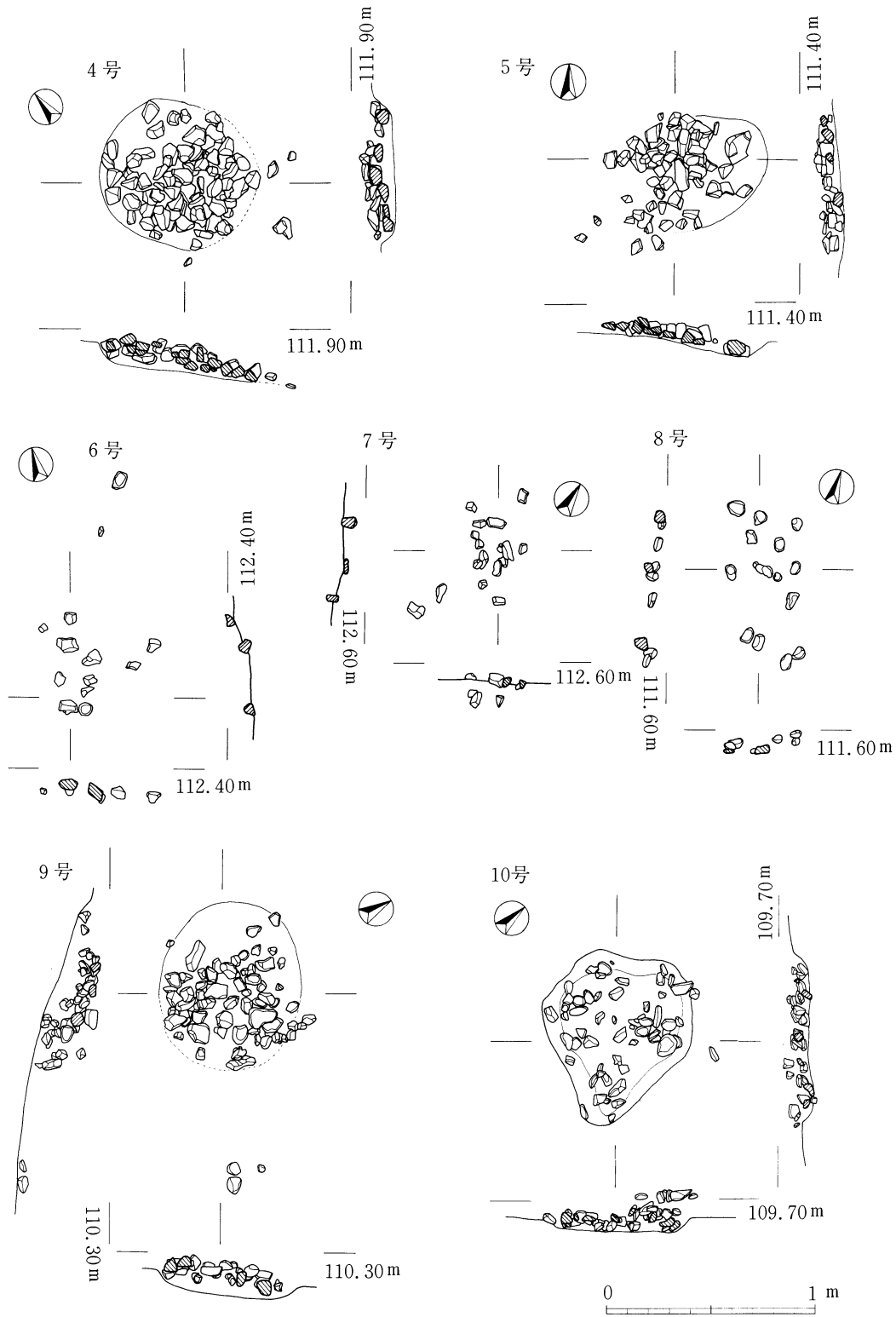
各集石の礫重量グラフは第41・42図に示している。これによると、礫の集中度は強くて平面的に類似しているものの、下部に掘り込みのある1類は100g未満の細礫が少なく200g前後まで等量であるのに対し、掘り込みのない3類及び4類の礫は100g未満の礫の比率が多い傾向にある。また、礫数の少ない2類は、各重量のものが平均しており、その分100g未満の礫比率が最も少ない。このような差は、各類の集石の性格の違いによるものと考えられる。

第10表 縄文時代早期集石一覧

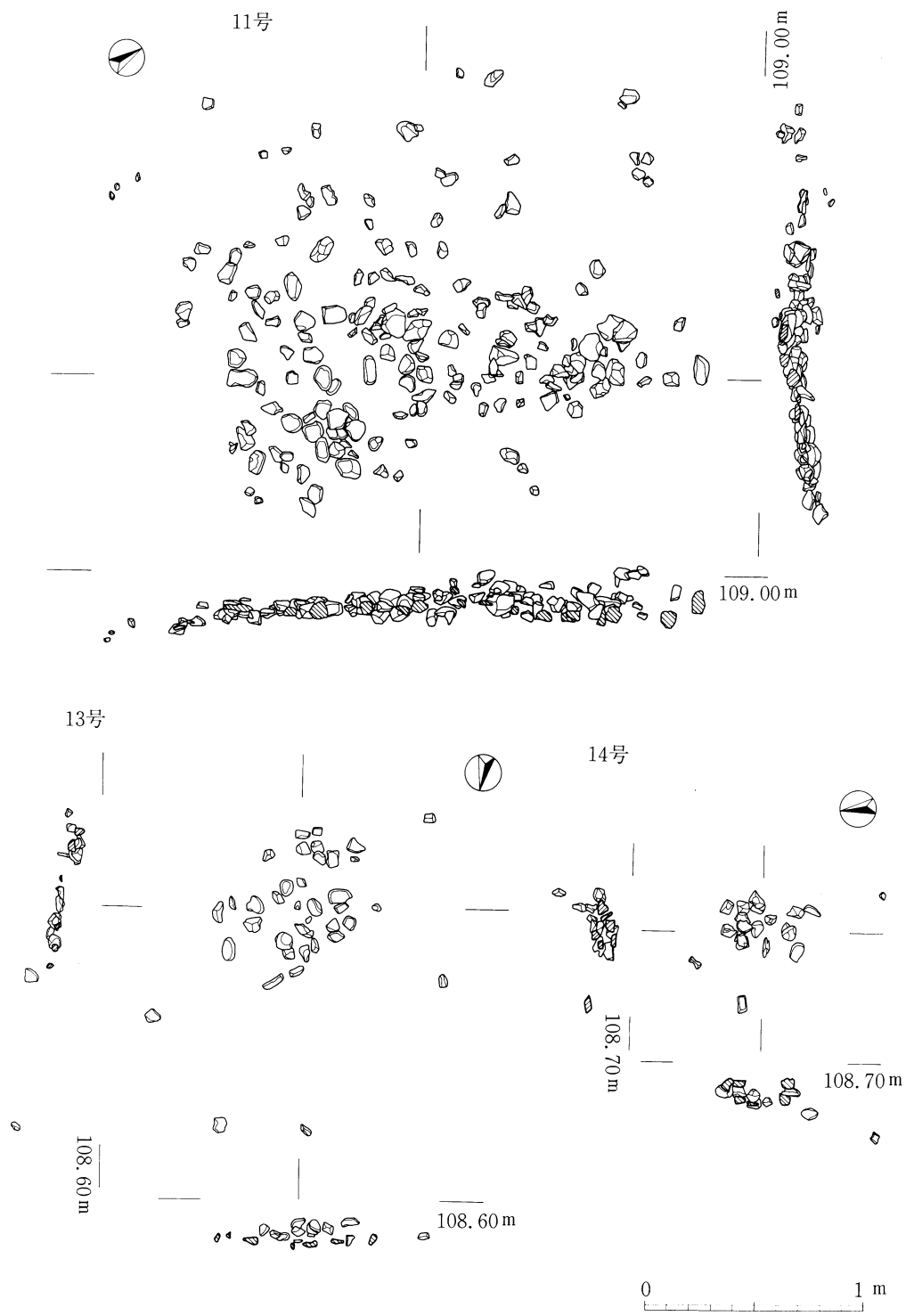
番号	検出区	長径×短径 (cm)	掘り込みの有無	掘り込みの大きさ 長径×短径×深さ	礫数	取上げ番号	備考
1	I-7	120×100			80	1	礫器1
2	G-7	440×310			81	号外	
3	G-8	100×70			22	2	
4	G-10	100×70	○	(75)×70×10	105	6	
5	H-10	100×60	○	(80)×50×10	56	5	土器1
6	H-10	120×60			14	8	
7	I-10	80×50			17	7	
8	G-13	80×40			14	31	
9	H-16	140×80	○	(80)×70×10	79	9	
10	G-20	90×80	○	80×75×10	59	29	
11	G・H-20	280×200			178	28	土器
12	G-20	420×300			117	30	
13	G-22	180×100			38	23	
14	G-22	90×40			21	24	
15	H-22	450×240			132	17	
16	H-22	140×110			38	18	
17	H-22	60×40			24	19	
18	I-22・23	290×270			87	15	礫器1
19	I-23	140×100	○	120×85×15	54	14	
20	H-23	70×65			34	21	
21	H-23	60×30			8	26	
22	G-23	30×30			5	25	
23	H-23・24	200×100	○	75×60×20	69	20	礫器1
24	H-24	100×60			20	24	
25	G-24	140×140			28	22	
26	H-24	120×40			17	16	
27	G・H-25	120×80	○	(90×80×10)	70	7	
28	H-26	50×30			13	10	磨石1
29	H-26	280×230			196	8	礫器3
30	H I-27	330×100			54	27	土器, 敲石
31	I-25・26	190×130			98	11	
32	I-26	40×30			9	13	
33	I-26・27	900×450			761	12	礫器, 磨石
34	H-29	700×340			310	3	石皿1
35	J-34	150×60			32	4	礫器1



第30図 集石1～3号

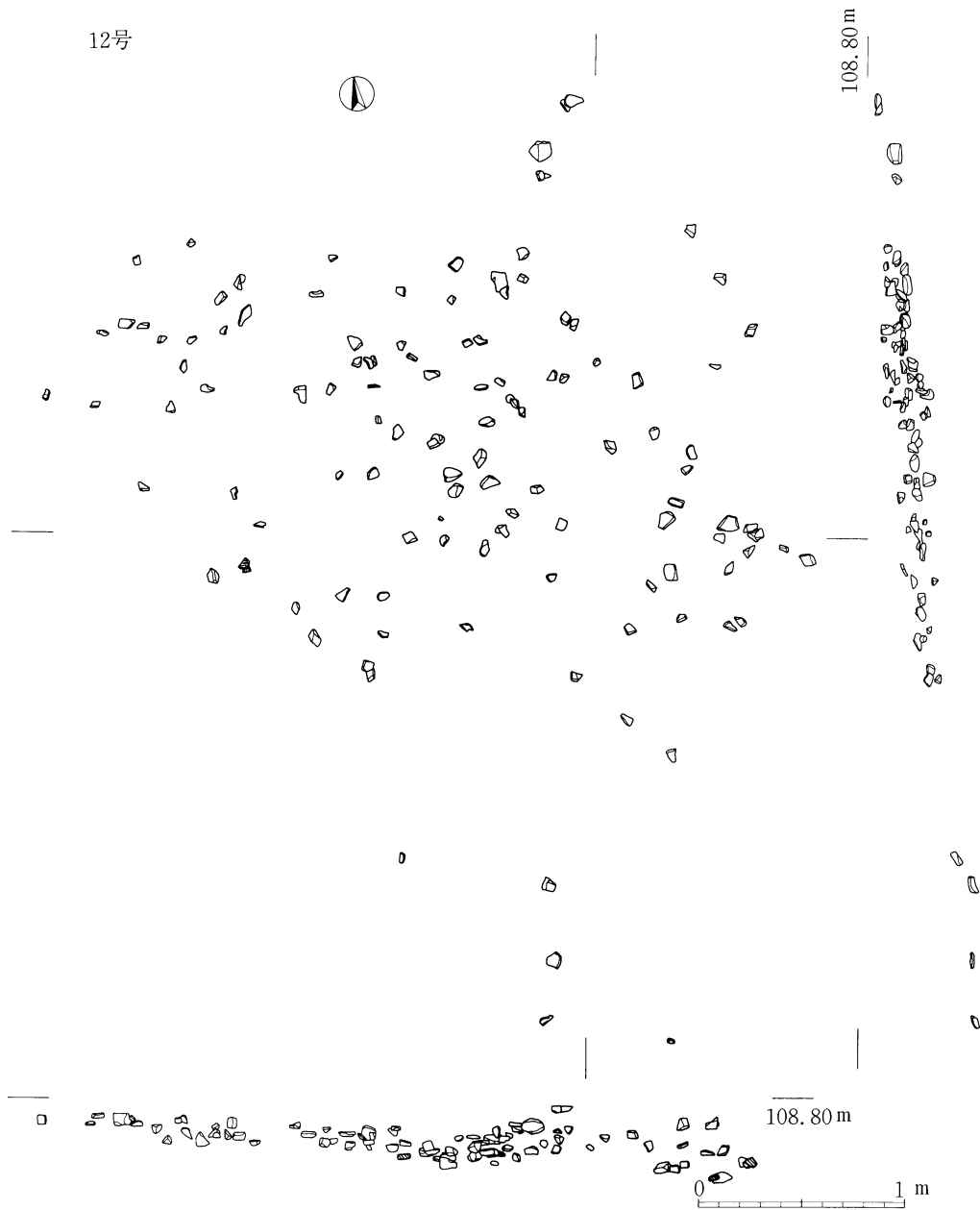


第31図 集石4~10号

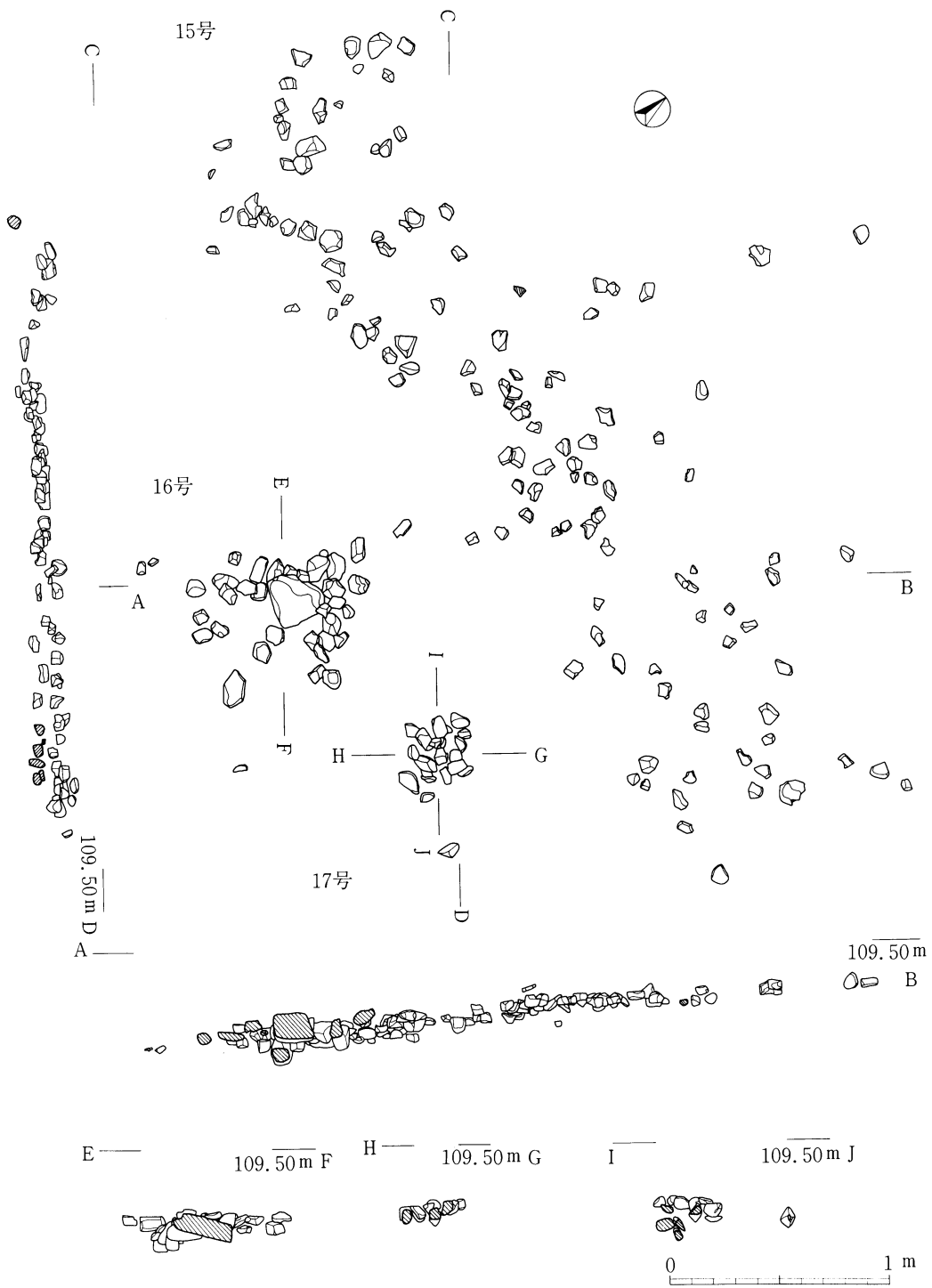


第32図 集石11, 13, 14号

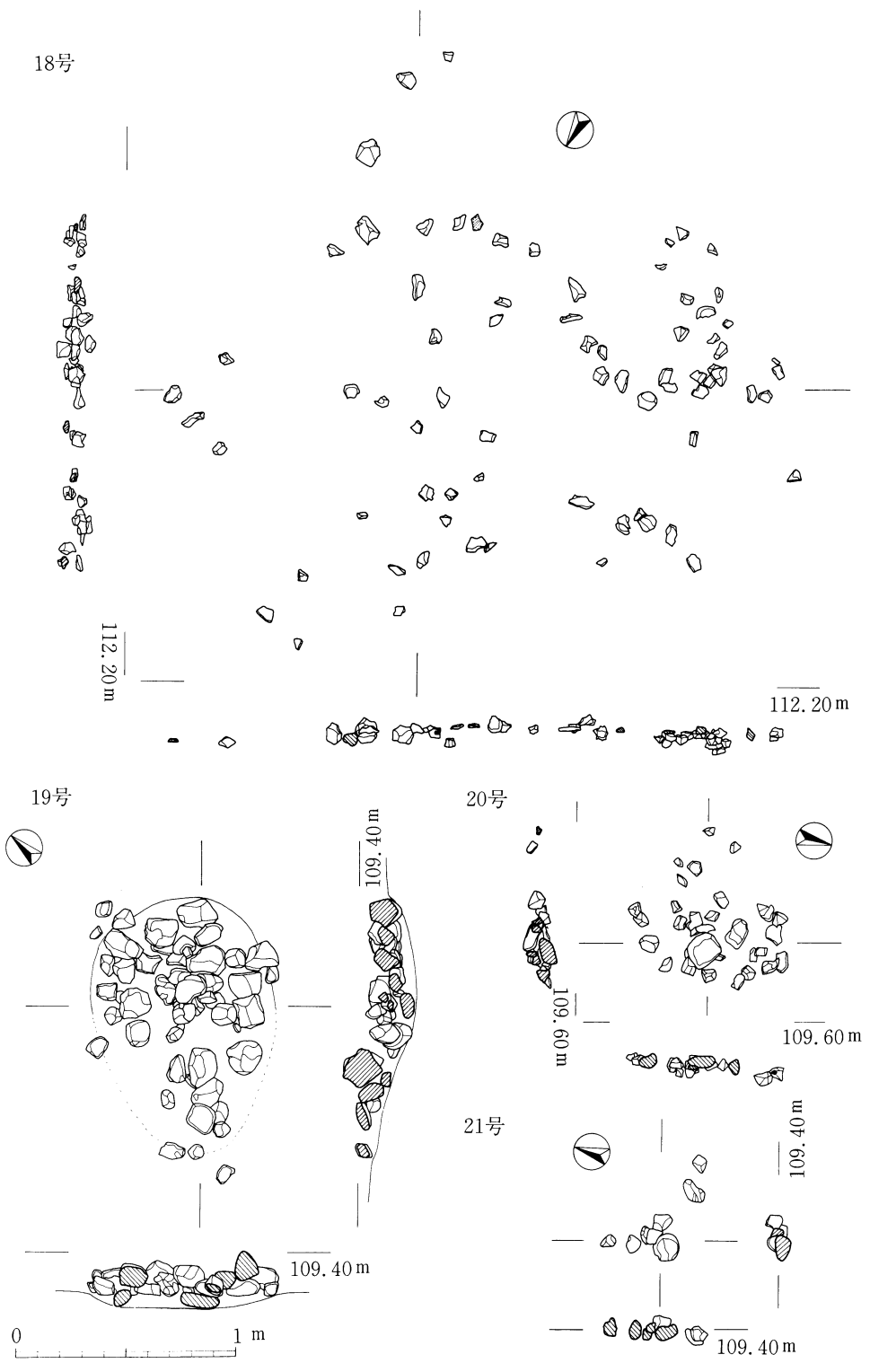
12号



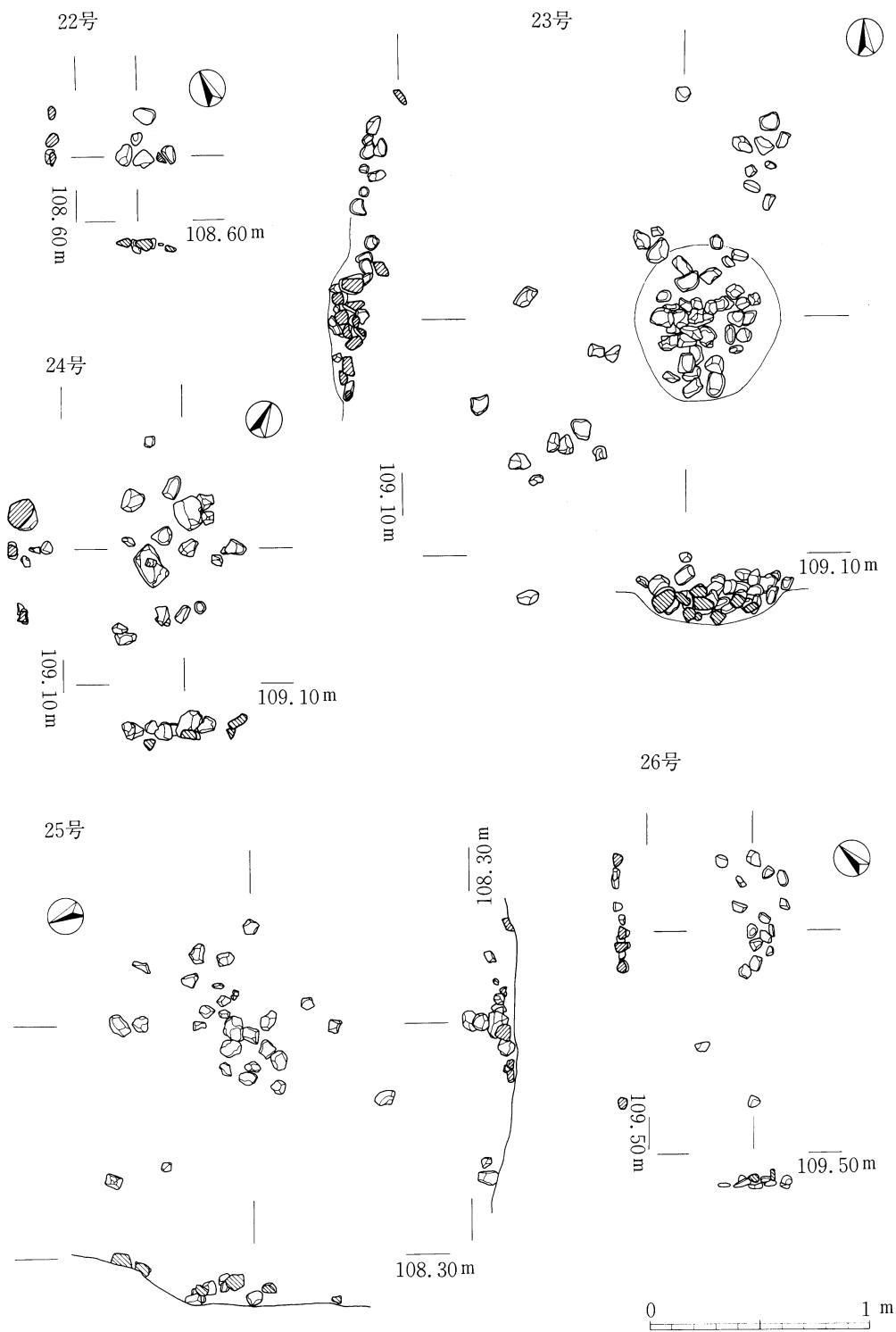
第33图 集石12号



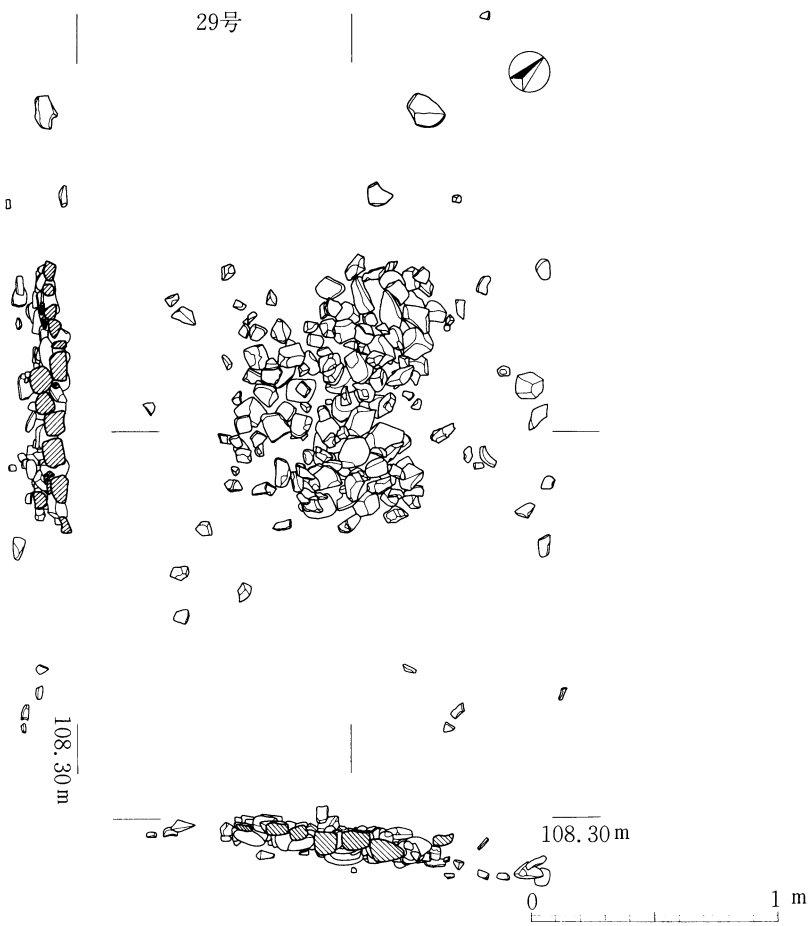
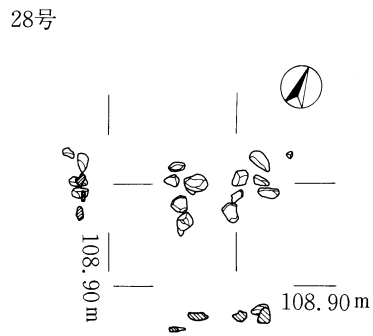
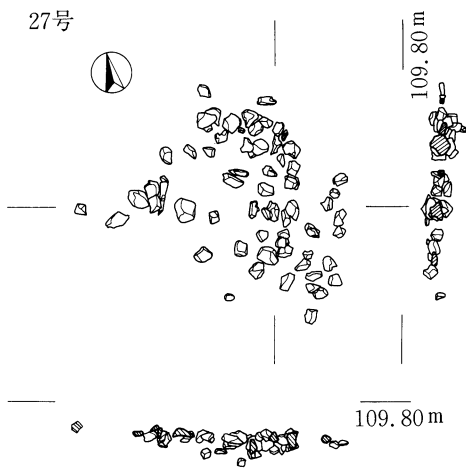
第34图 集石15~17号



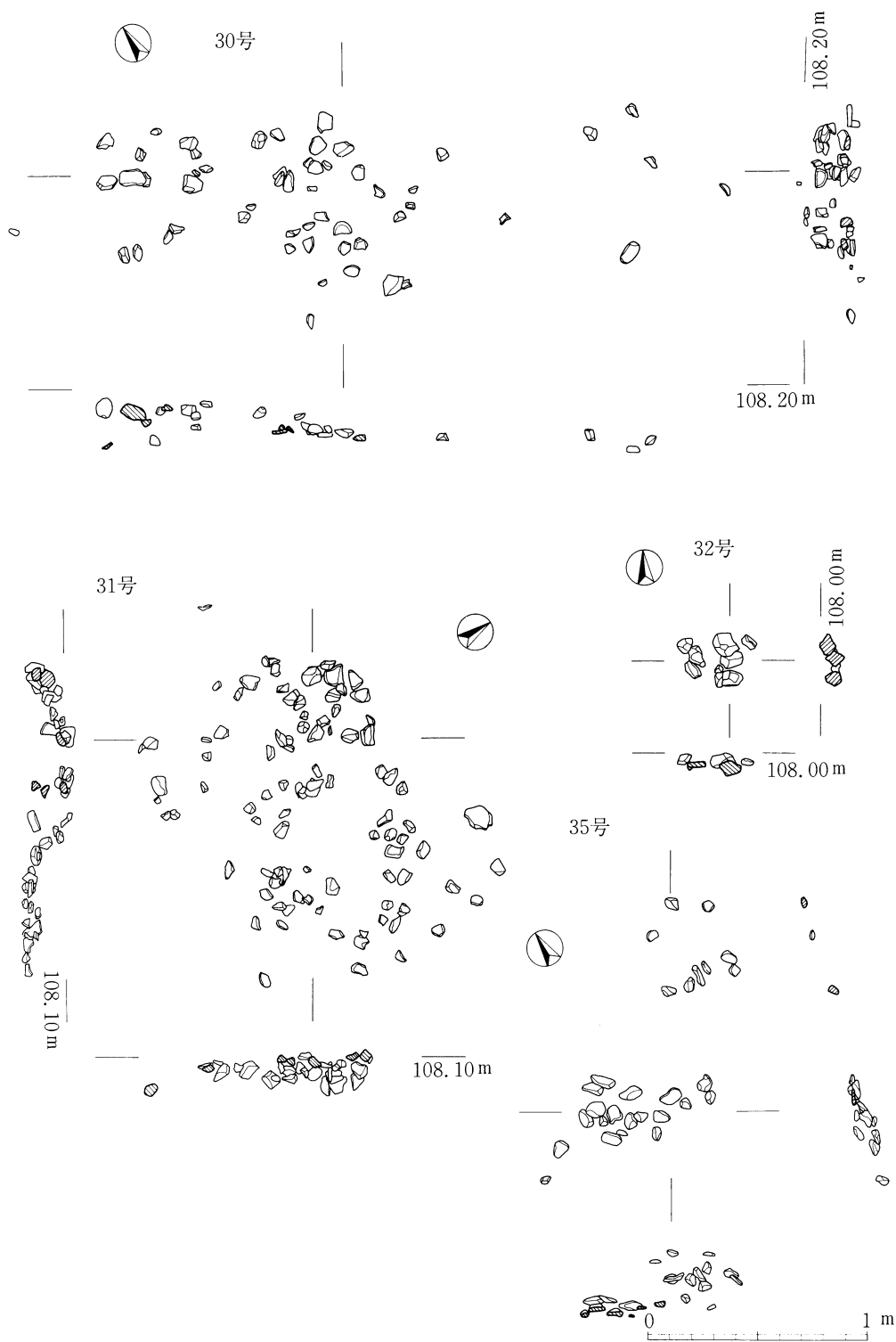
第35図 集石18~21号



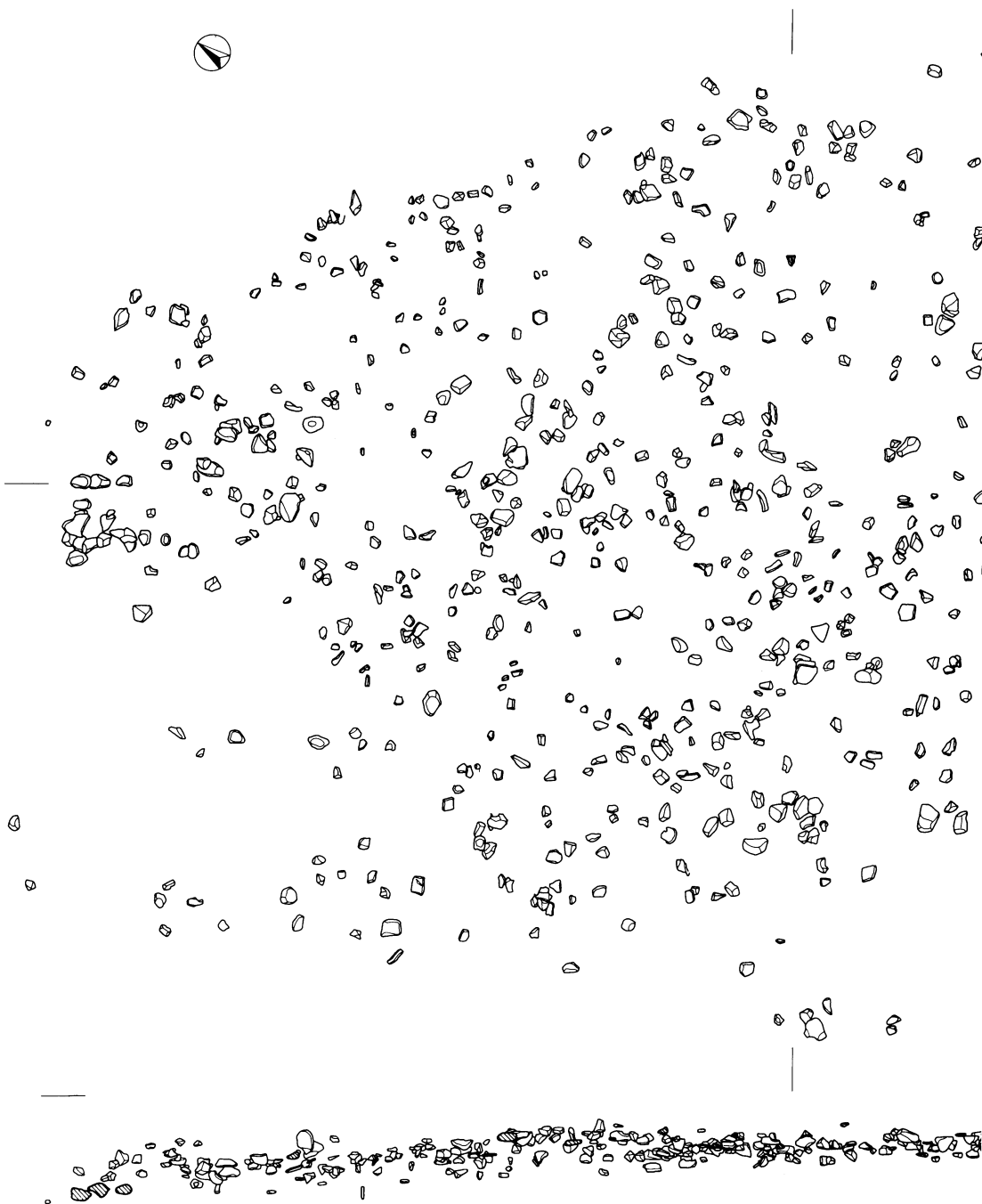
第36図 集石22~26号



第37图 集石27~29号



第38図 集石30~32, 35号



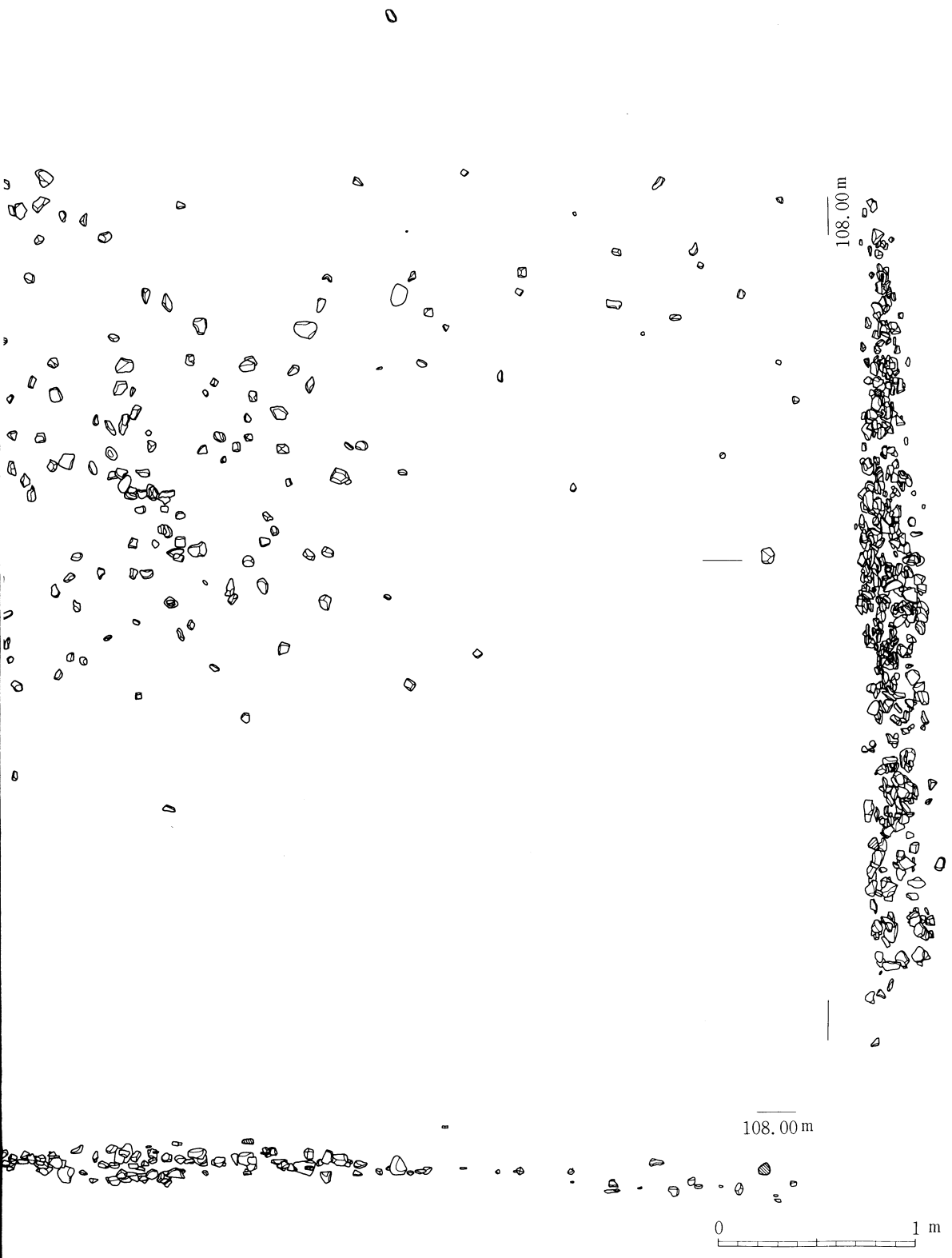
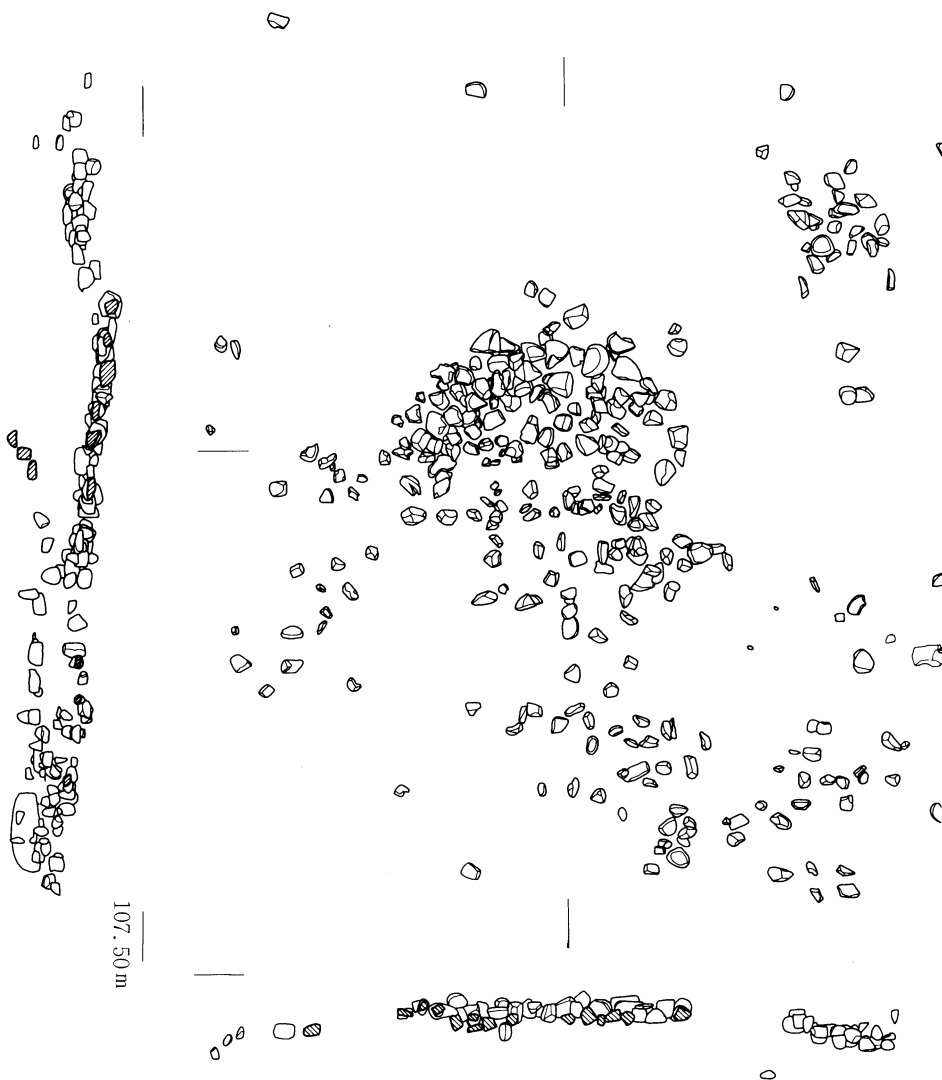


图 集石33号



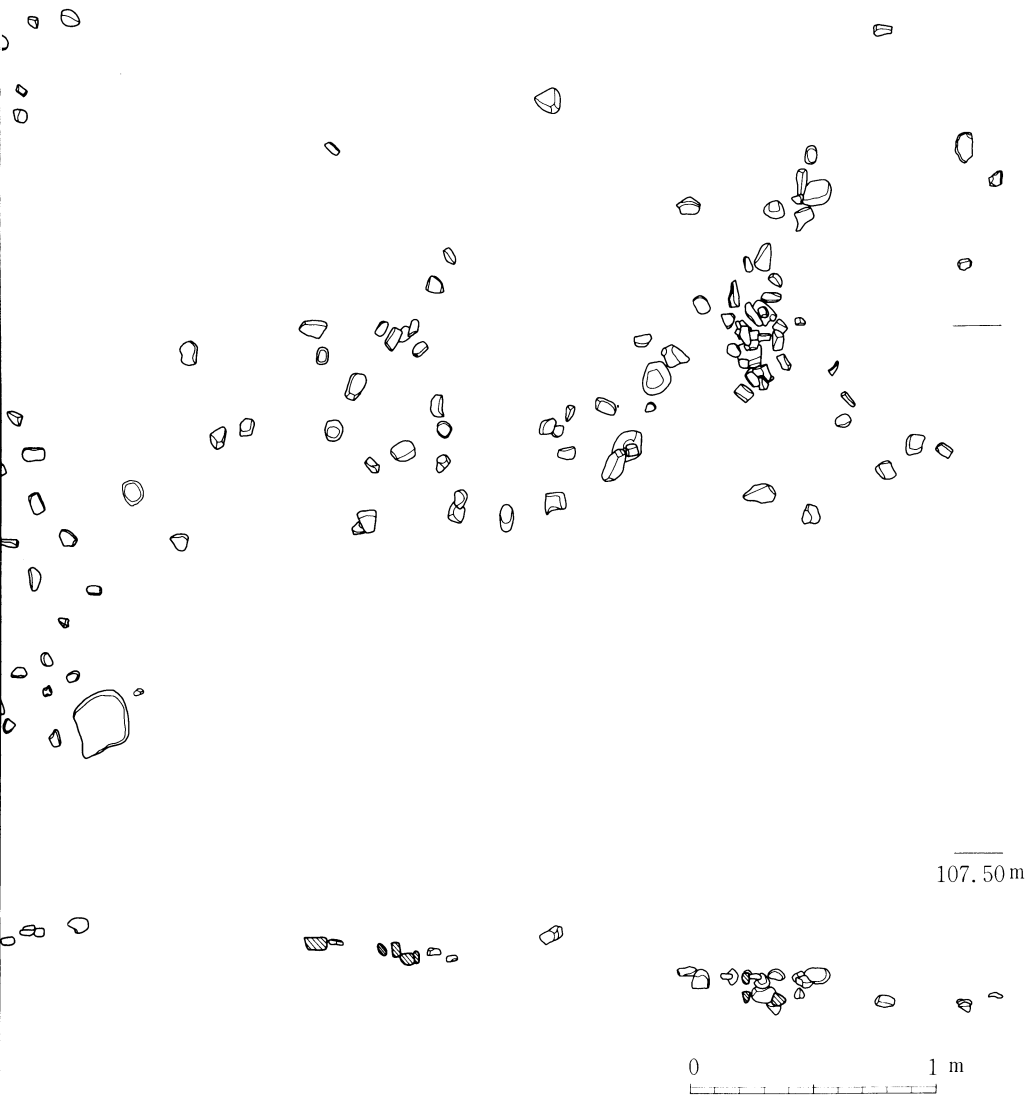
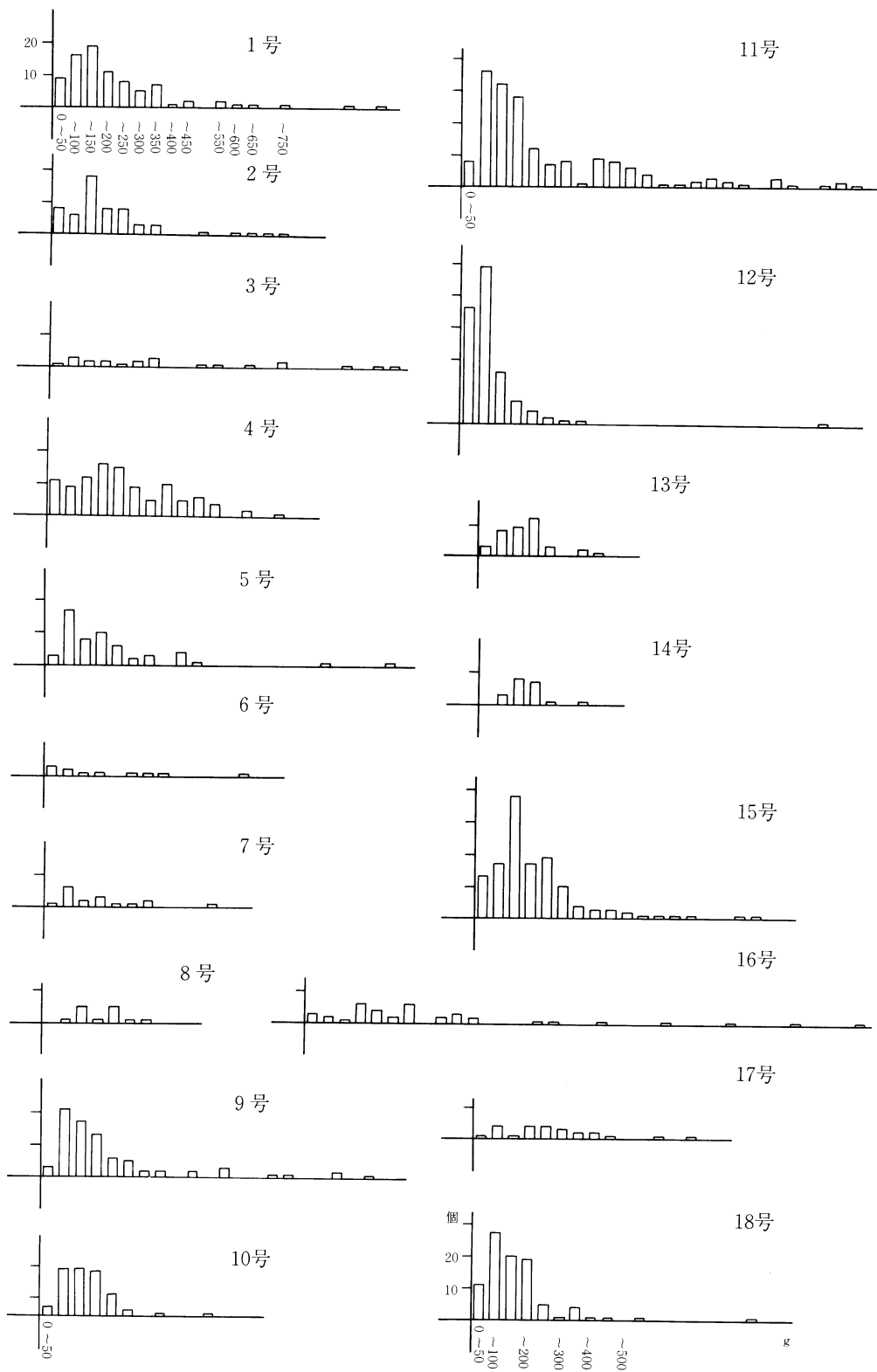
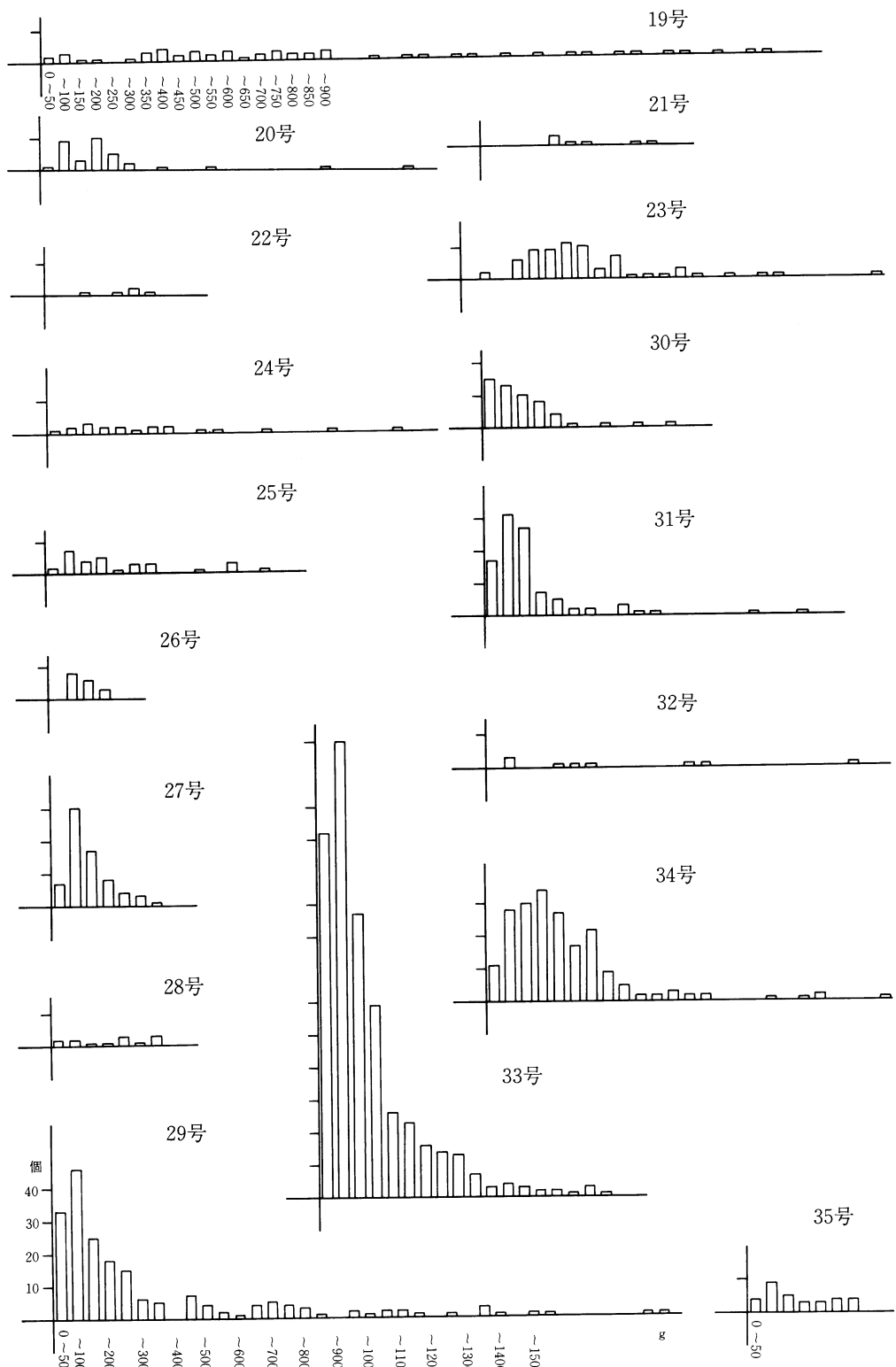


图 集石34号



第41図 集石重量組成(1)



第42図 集石重量組成(2)

第3節 出土遺物

1. 土器

V層出土の土器は、形式別にⅠ類～Ⅶ類とその他に分類した。そのうち、Ⅱ類の土器は出土量も多く、本遺跡の主体をなすものである。

Ⅰ類土器（第45図1）

Ⅰ類土器は、貝殻条痕を全面に施し、口縁部に貝殻腹縁による刻目を有する円筒土器である。1は、H-7区で集中して出土（第44図）し、完形に復元された土器である。口径16.3cm、底径11.6cm、器高29.3cmを測る。内外面に施された粗い貝殻条痕は、胴部では斜位に口縁部と底部では横位に施文され、内面の口縁部は横位に、胴部は縦位に施文されている。Ⅰ類土器は、前平式土器に比定される。

Ⅱ類土器（第46図～第50図）

Ⅱ類土器は、口縁部に貝殻腹縁による刺突文を、胴部に斜位又は綾杉文状の貝殻条痕を施す円筒土器である。口縁部の刺突文の種類により、横位のもの（Ⅱa類土器、第46図2～8）、縦位のもの（Ⅱb類土器、第46図9～11）、斜位又は綾杉文状のもの（Ⅱc類土器、第46図12～47図）に細分した。

2～6は口縁部に2条、7・8は6条の貝殻刺突が横位に施されている。8の口唇部には刻目が施されている。2は復元口径25.6cmを測り、2・6は口縁部が若干内湾する。9・10の口唇部は、9には貝殻刺突文が、10には貝殻腹縁による刺突線文が施されている。9は復元口径19cmである。11は右下がりの貝殻条痕の地文の上から、口縁部に縦位の貝殻刺突文が、胴部に貝殻刺突線文が施されている。12は復元口径21.6cmを測り、口唇部は平坦で内傾し刻目が施されている。口縁部は貝殻腹縁による刺突文が縦位に施され、その上から沈線が施されている。13は復元口径14.2cmを測り、口縁部は貝殻腹縁による刺突文が斜位に施され、瘤状の突起が貼付されている。14は復元口径27cmを測り口唇部は平坦で内傾している。口縁部は貝殻腹縁による綾杉文状の刺突文が施され、その下に2条の横位の刺突文が施されている。円形の孔は補修孔と思われるが貫通していない。15は口径24.8cmを測り、口唇部は平坦で内傾し篋状工具で細かい刻目文が施されている。口縁部は貝殻腹縁による2条の刺突文の間に傾位の刺突文が施され、胴部は貝殻条痕の地文の上から貝殻刺突線文が施されている。16～39はⅡ類土器胴部（第48、49図）である。貝殻条痕が綾杉文状に又は斜位に施されている。16は胴部下方で貝殻条痕が横位に施されており、底部に近い部分と思われる。40～49はⅡ類土器底部（第50図）である。復元底径は、40が17.6cm、44が11cm、45が13.4cm、46が8cm、47が9.6cm、48が13.8cmである。すべて平底である。40・41・44は胴部は貝殻条痕が綾杉状に底部側面は横位に施され、42・45・46は底部側面に貝殻条痕が横位に、43は縦位に施されている。48は胴部から底部側面まで貝殻条痕による格子目状の綾杉文が施されている。49は底部外面に貝殻腹縁による押引文が、底部外縁に篋状工具による刻目文が施され、吉田式土器と思われる。Ⅱ類土器は、49を除き石坂式土器に比定される。

Ⅲ類土器（第51図・第52図63）

Ⅲ類土器は、口縁部、胴部どちらも貝殻腹縁による刺突文が施されているものである。口縁部の刺突の種類から、横位に刺突されているもの（Ⅲa類土器、第51図50～52）、羽状に刺突されているもの（Ⅲc類土器、第51図53～56）に細分した。

50・51は同一個体である。貝殻腹縁による刺突文が、口縁部は横位に4条、胴部は羽状に施されている。復元口径21.2cmを測る。52は口唇部が平坦で内傾し、内側に明瞭な稜を有し断面が三角形を呈する。口縁部は貝殻腹縁による刺突文が3条施されている。53・54の口縁部は、貝殻腹縁による刺突文が羽状に施され若干内湾気味である。55・56は山形口縁を有するものである。55は山形口縁部に付く瘤状の突起部である。貝殻腹縁による刺突文が施されている。56は山形口縁部に瘤状の突起を貼付し、口縁部から胴部にかけては、貝殻腹縁による刺突文が羽状に施されている。57～63は、Ⅲ類土器胴部である。57～60は貝殻腹縁による刺突文が羽状に、61～63は横位に施されている。

Ⅳ類土器（第52図64～68）

Ⅳ類土器は、すべて同一個体である。H・I-10区、I-11区で集中して出土した。64は口縁部、65～67は胴部、68は底部である。胴部は若干膨らみ、頸部で「く」の字に屈曲してラッパ状に開いた口縁部となる。復元口径25cmを測る。口唇部は刻目を羽状に施している。口縁部から頸部にかけて平行沈線文が3条、胴部にも数条施され、また頸部から胴部にかけて捺糸文が縦位に間隔をあけて施文されている。器壁は全体的に薄い。塞ノ神A式土器に比定される。

Ⅴ類土器（第53図69・70）

69・70は、同一個体である。Ⅳ類土器と同じ付近（H-10）区から出土している。器面はナデ調整が施され無文である。69は底部に近い部分と思われる。

Ⅵ類土器（第53図71）

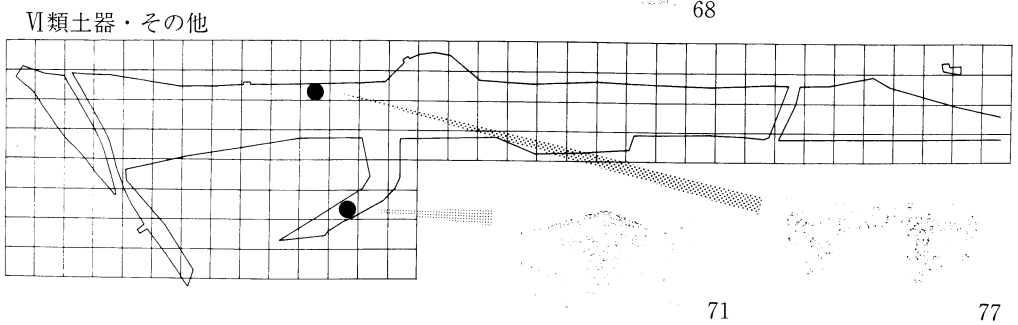
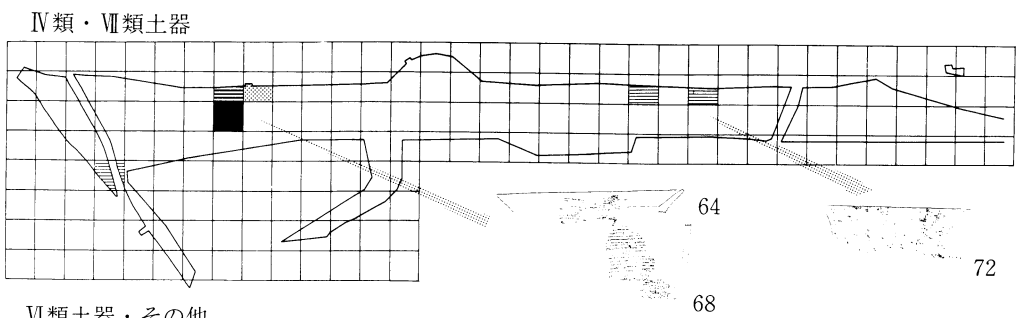
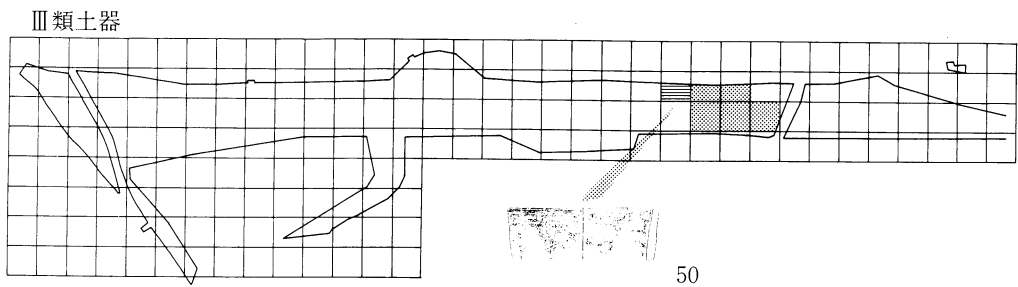
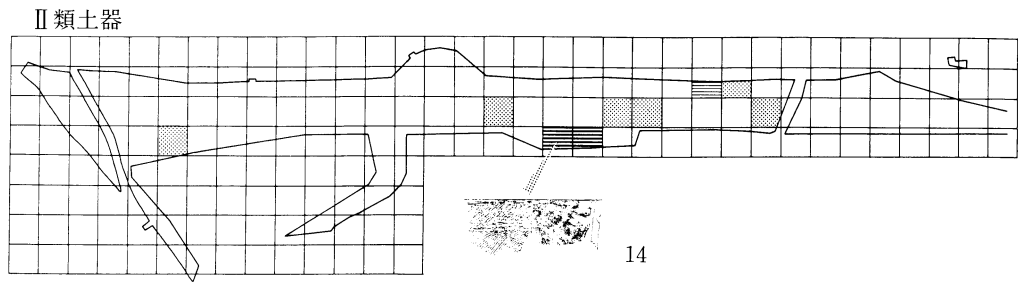
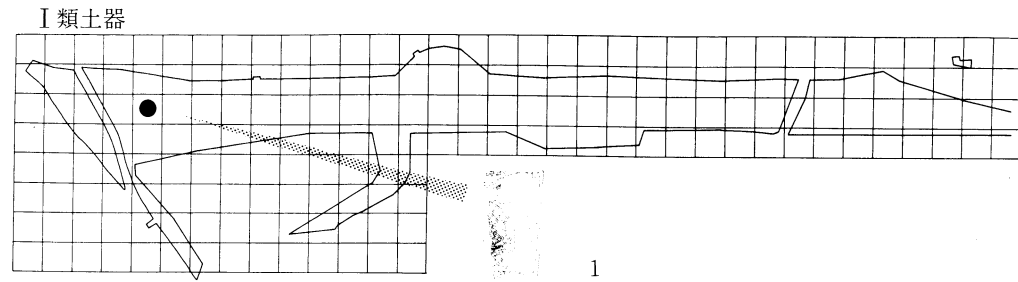
71は山形口縁を呈する土器で、口唇部外側に細い刻目が施されている。外面は波状に荒い条痕を施している。形式は不明である。

Ⅶ類土器（第53図72・73）

Ⅶ類土器は壺型土器の口縁部と思われる。72は口唇部が丸みを帯び、口縁部は篋状工具による条痕が施されている。73は口唇部が先細に仕上げられ、口縁部は外反している。ナデ調整が施され無文である。72・73とも胴部がないため文様や形態は定かではない。形式も不明である。

その他の土器（第54図・第55図）

74・77～80はI-13区より集中して出土した土器であるが、復元不可能であった。77の口縁部と78～80の胴部は同一個体であるが、これらと74の底部が同一個体であるかは不明である。74は復元底径9.8cmを測る。外面は篋状工具でナデ調整され、内面は貝殻腹縁による調整が施されており、底部付近は横位に、胴部は斜位に条痕が見られる。77～80は篋状工具で器面を丁



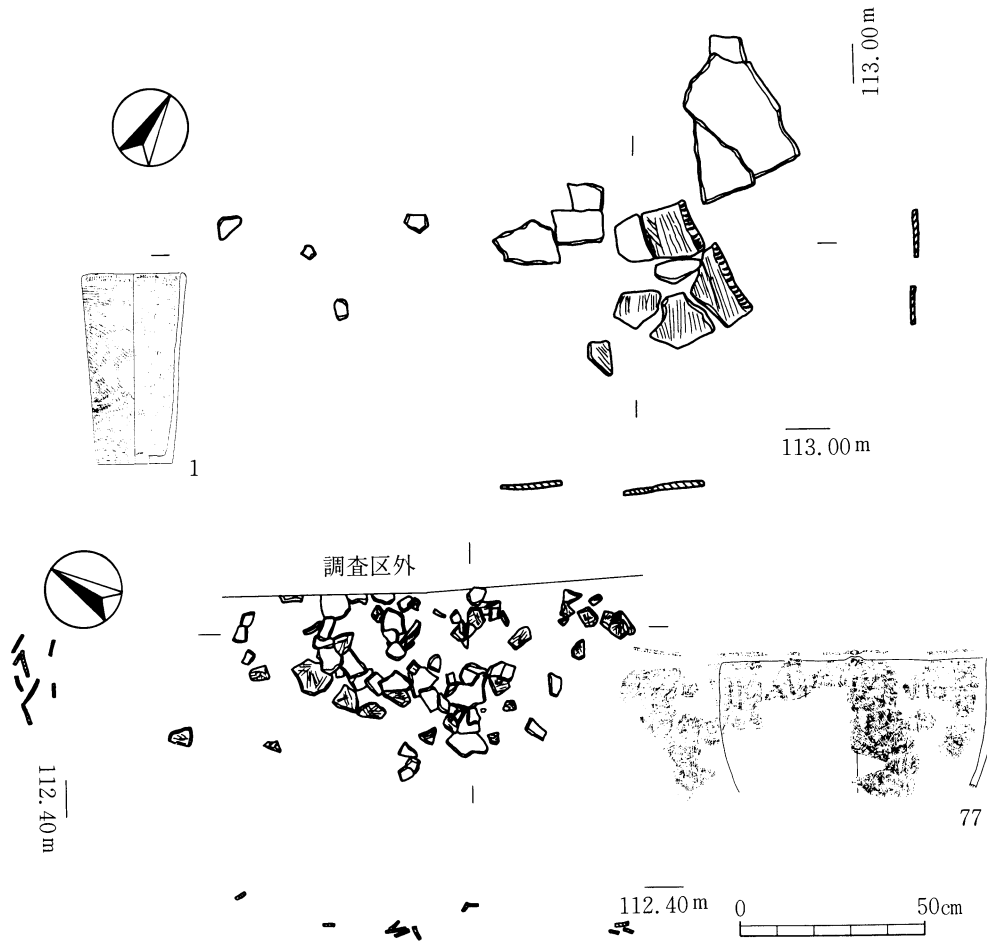
1 ~ 2
 3 ~ 4
 5 ~ 10
 30以上
 ● 1 個体分出土

第43図 早期の土器分布図

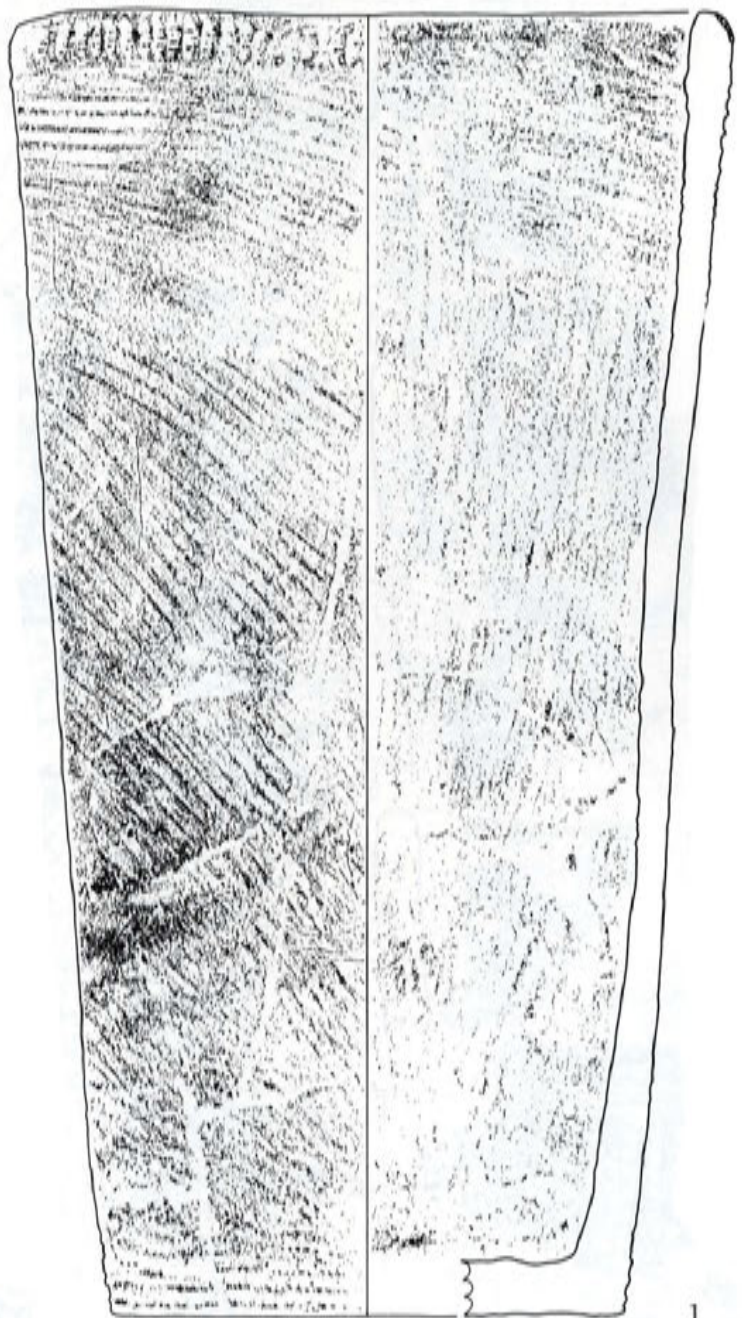
寧にナデた後、2～3条の細い沈線で縦位または斜位に文様を施し、内面はナデ調整が施されている。また77の口唇部は刻目がめぐり、1カ所もしくは一対の刻目のある瘤状突起が配されている。75・76は同一個体の可能性も考えられるが、器形は不明である。器面は貝殻条痕が横位縦位に施されている。76は上げ底の底部で、底径5.2cmを測る。これらすべての土器の形式は不明である。

集石内及び集石周辺出土の土器（第56図81～第57図106）

集石内及び集石周辺から出土した土器は、包含層内出土土器と区別して最後に取り上げた。集石内より出土した土器は、7点である。81は掘り込みのあるまとまった集石5号の角より出土した。また90・98・102・103は、平面的に散在した集石の範囲の中から出土した。90が集石30号、98・102・103が集石33号より出土している。99・101は同一個体であり、集石33号の石の下より出土している。縦位の貝殻条痕の上から貝殻腹縁による刺突線文が施された土器である。他の土器は集石周辺部からの出土である。105は角筒土器の口縁部と思われる。

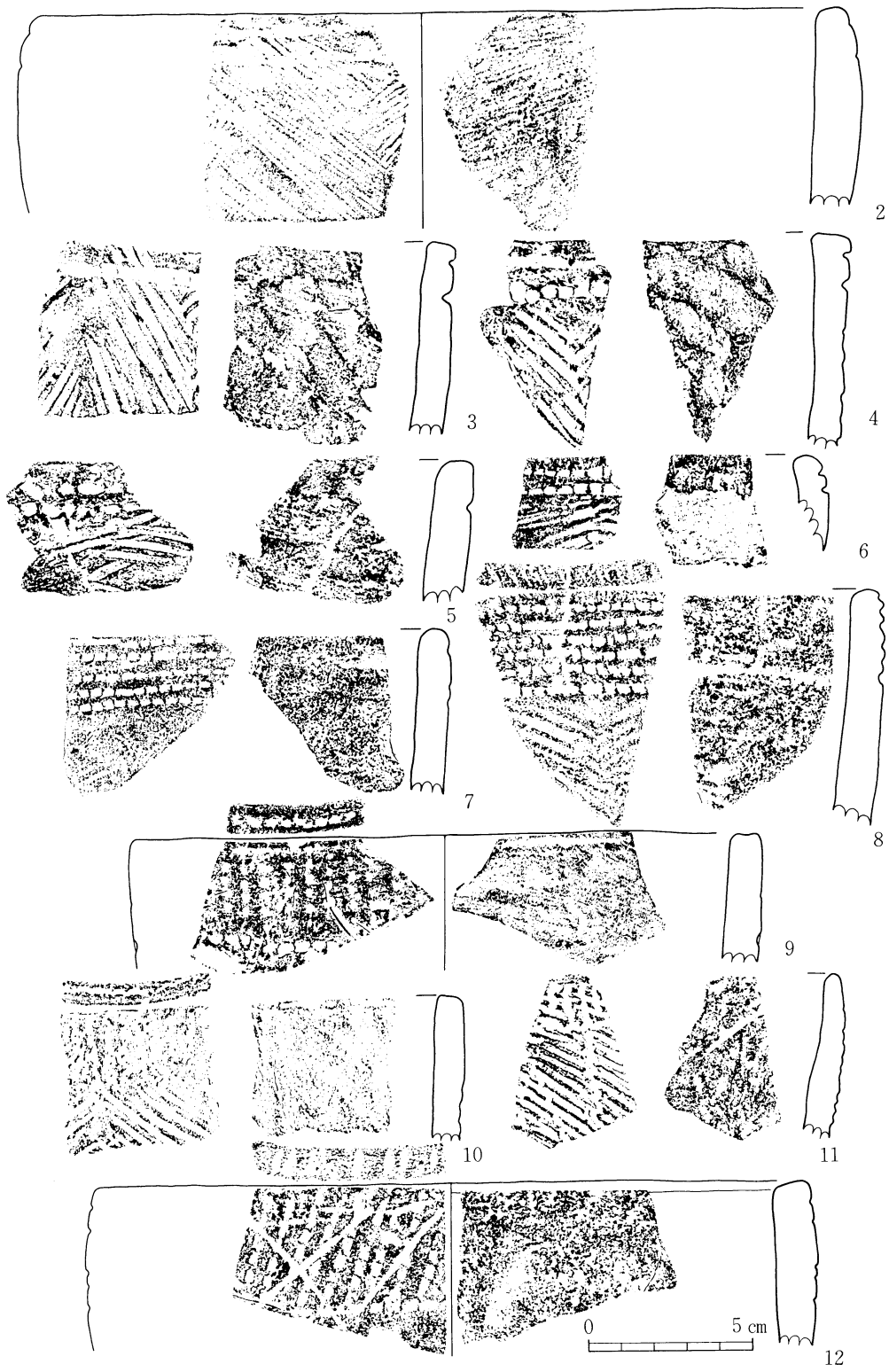


第44図 早期の土器出土状況

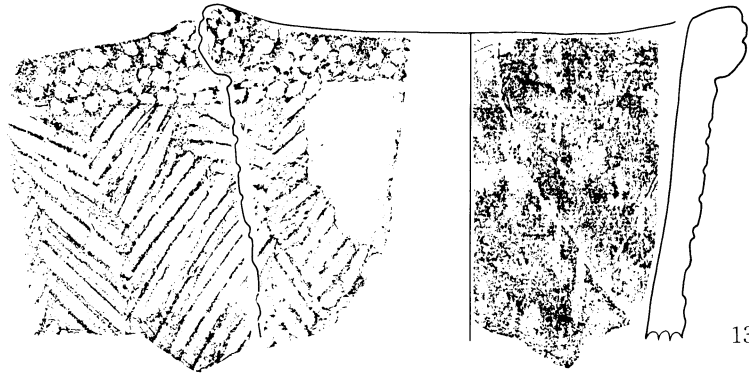


0 5 cm

第45図 V層出土土器(1) (I類)



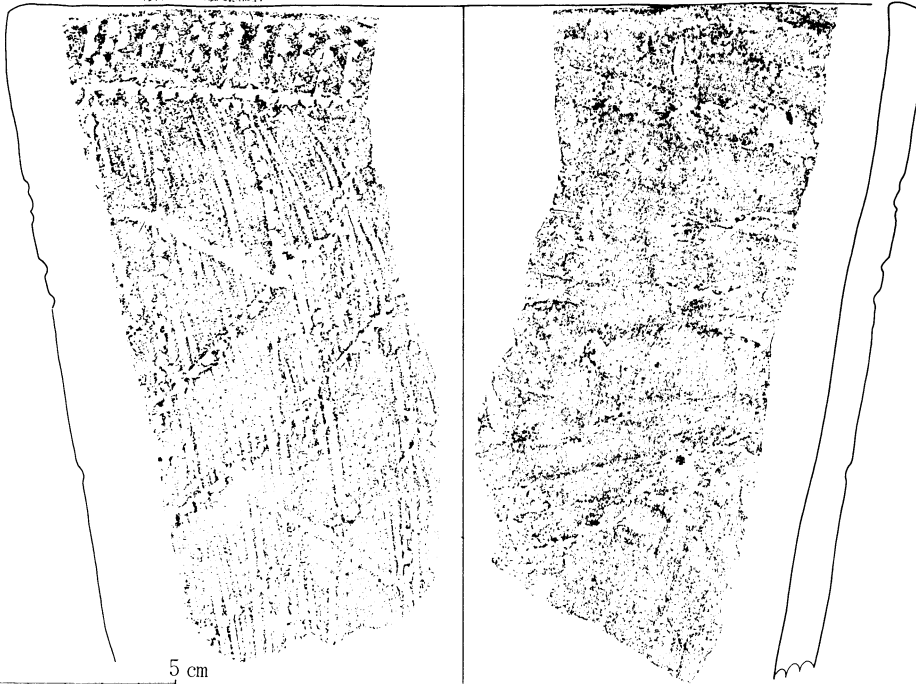
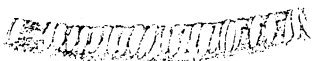
第46図 V層出土土器(2) (II a. II b類)



13

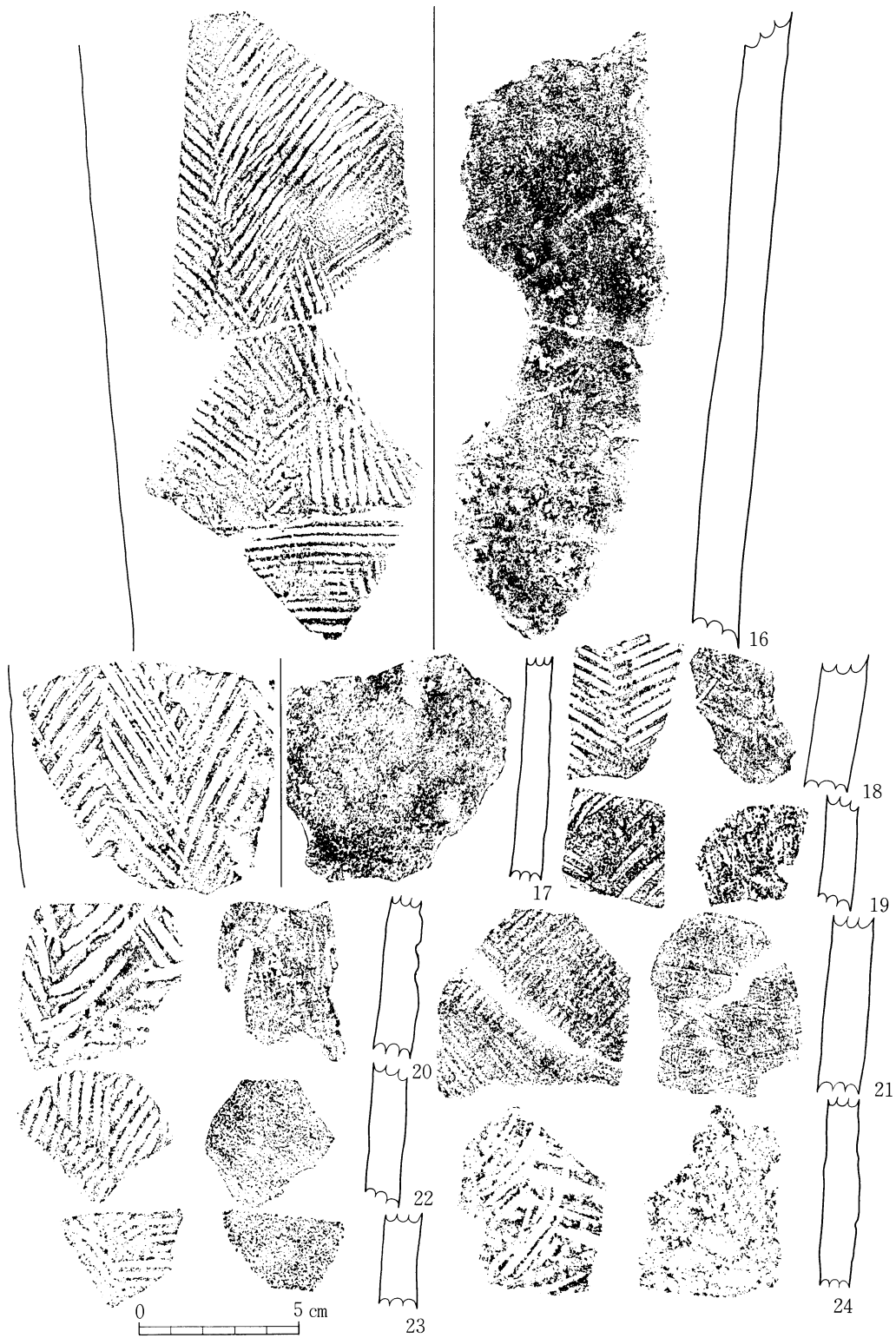


14

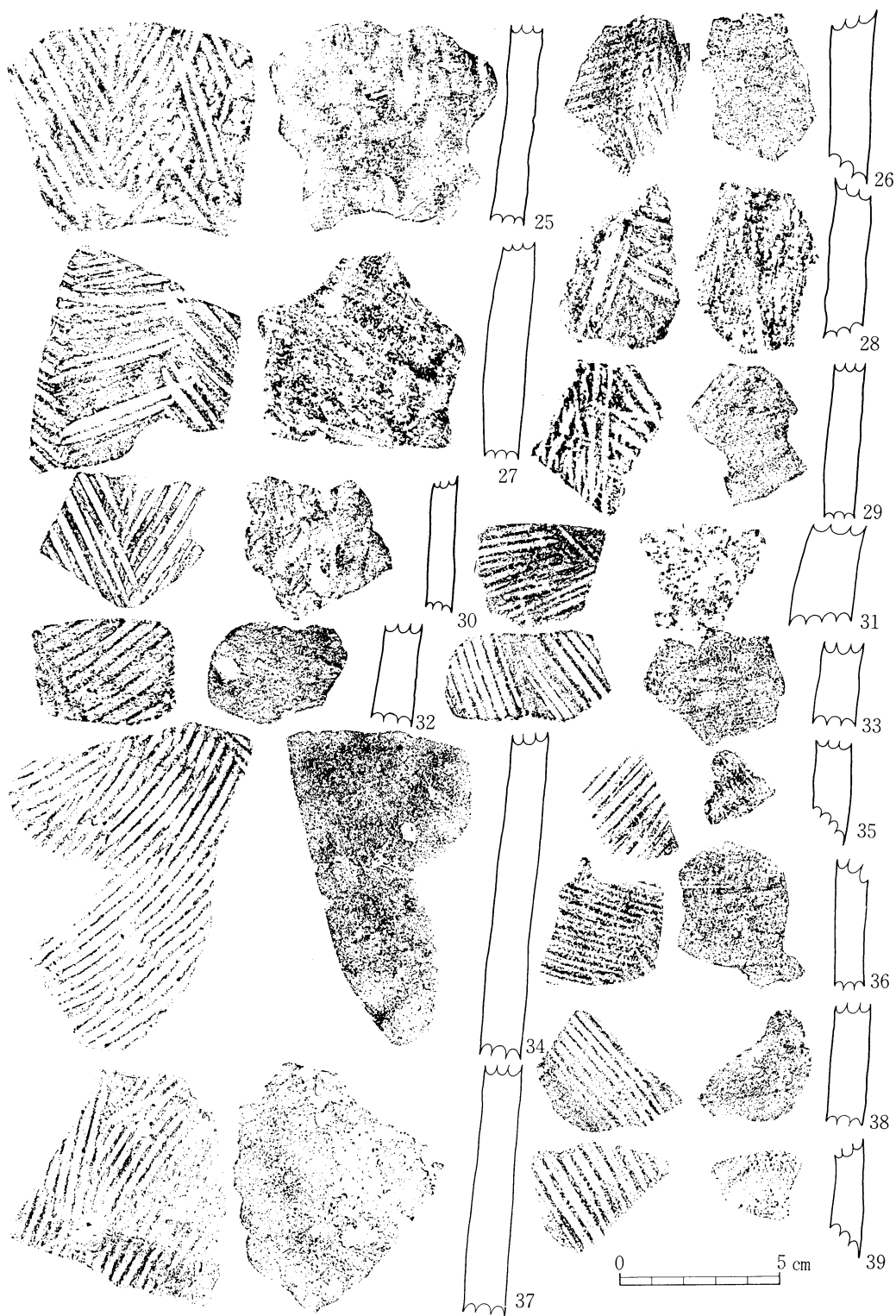


15

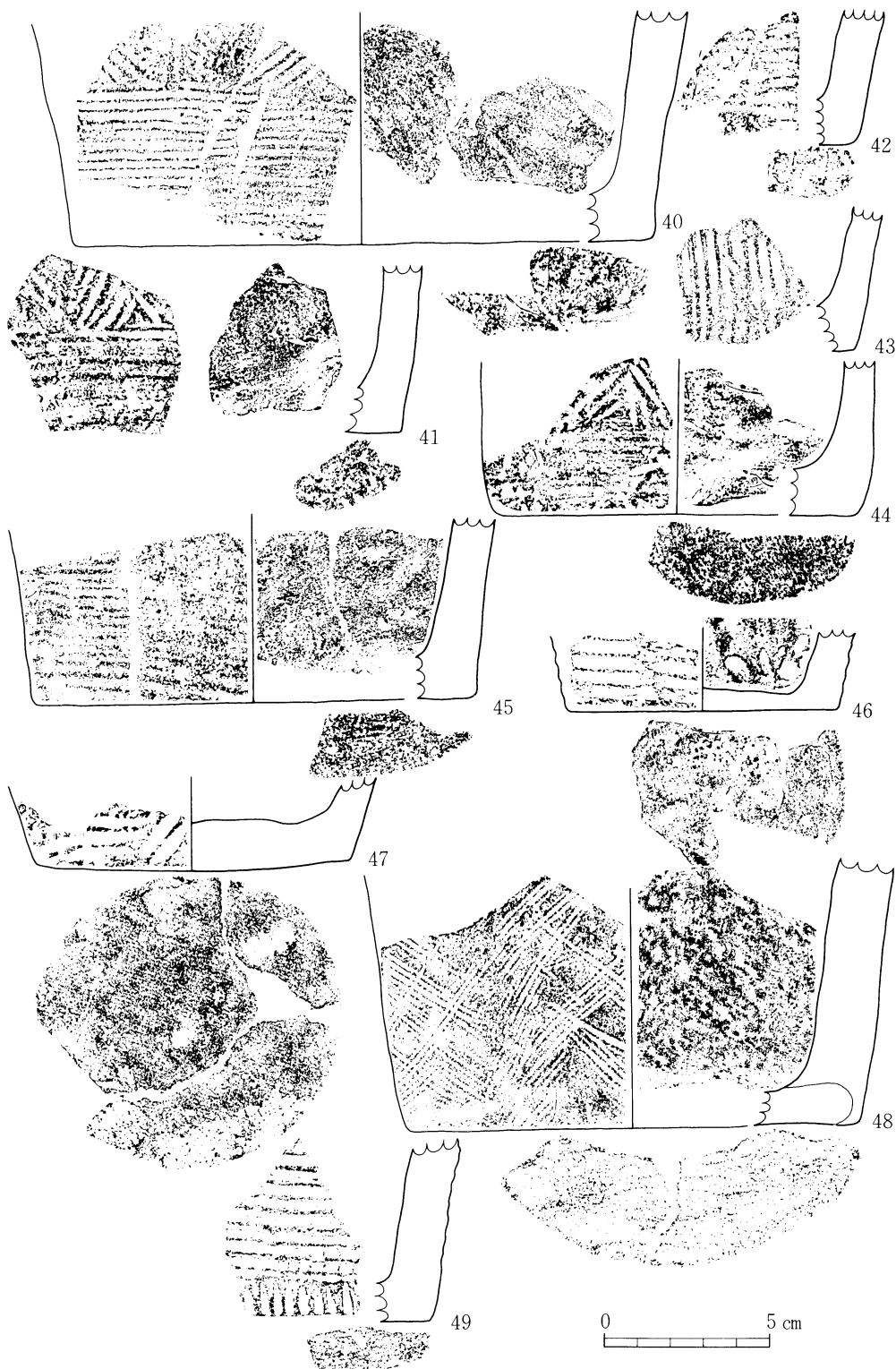
第47図 V層出土土器(3) (Ⅱc類)



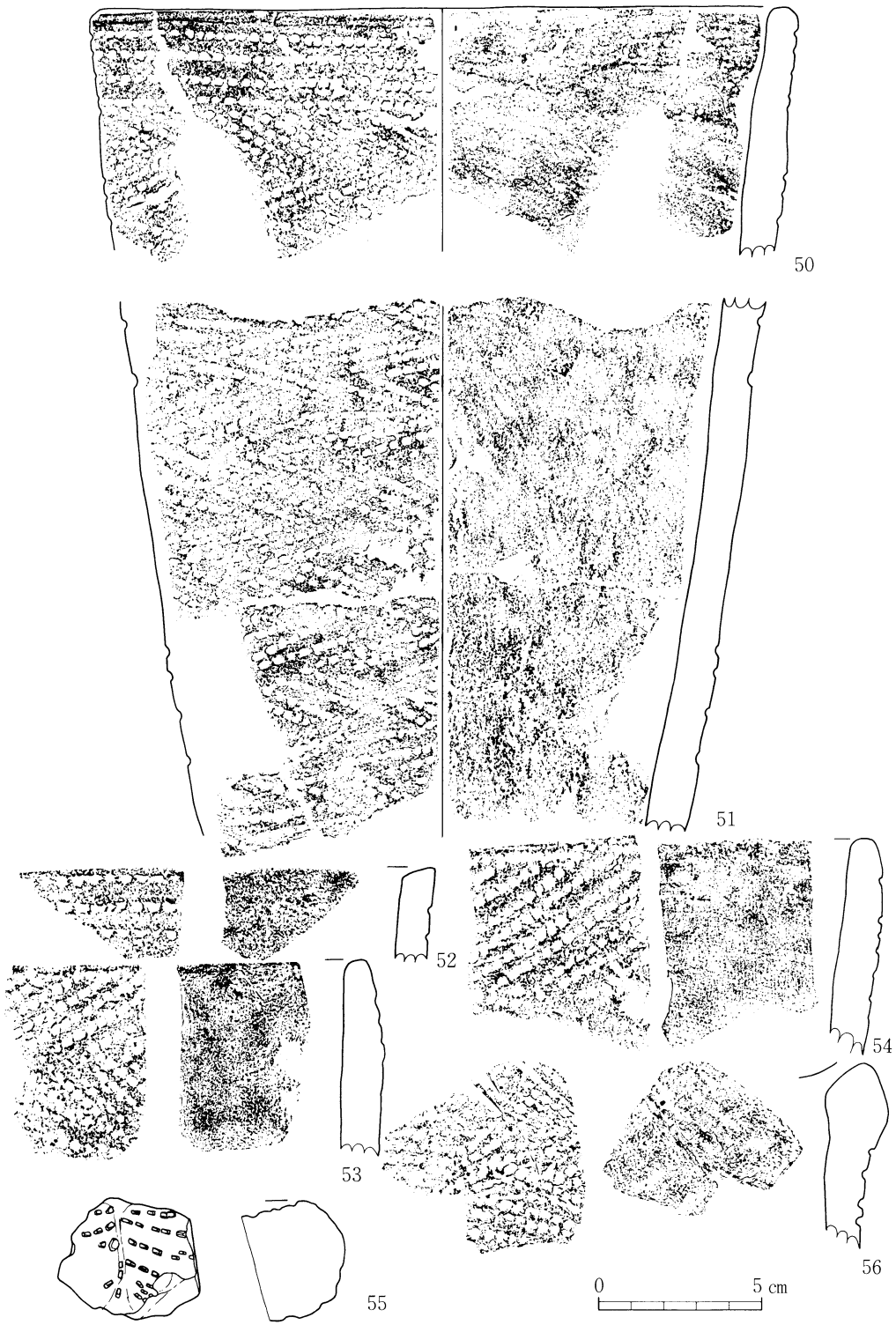
第48図 V層出土土器(4) (Ⅱ類胴部)



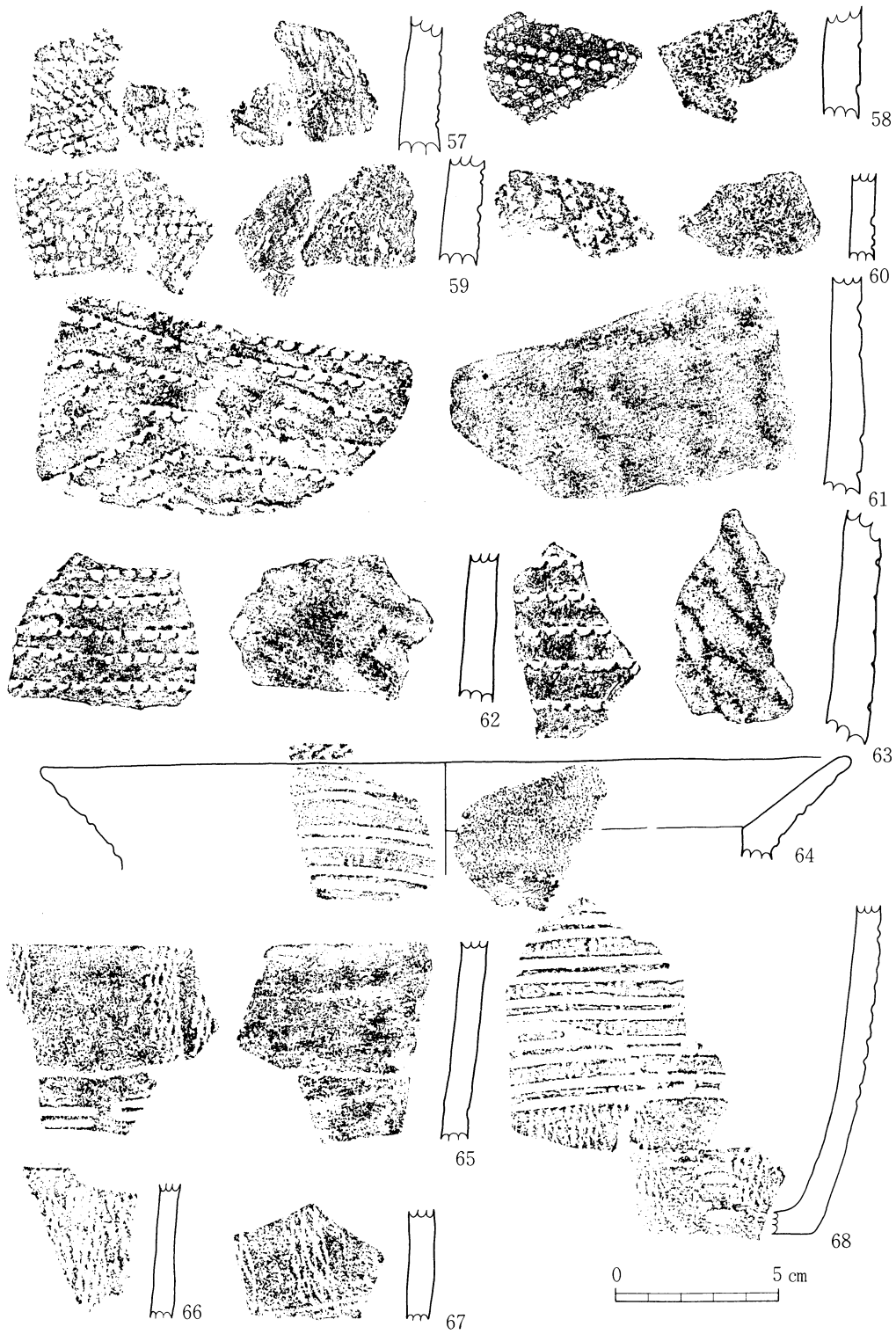
第49図 V層出土土器(5) (Ⅱ類胴部)



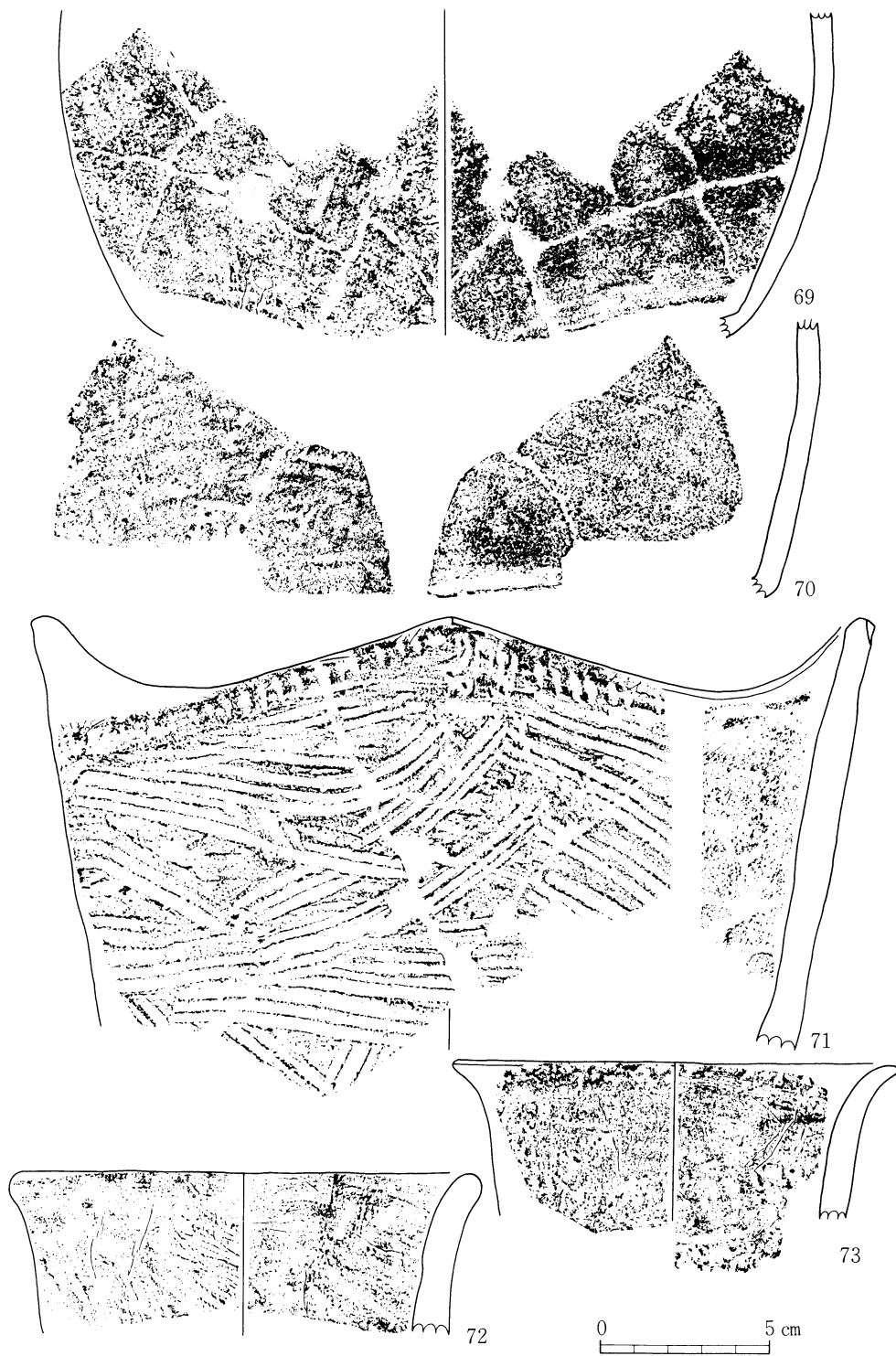
第50図 V層出土土器(6) (Ⅱ類底部)



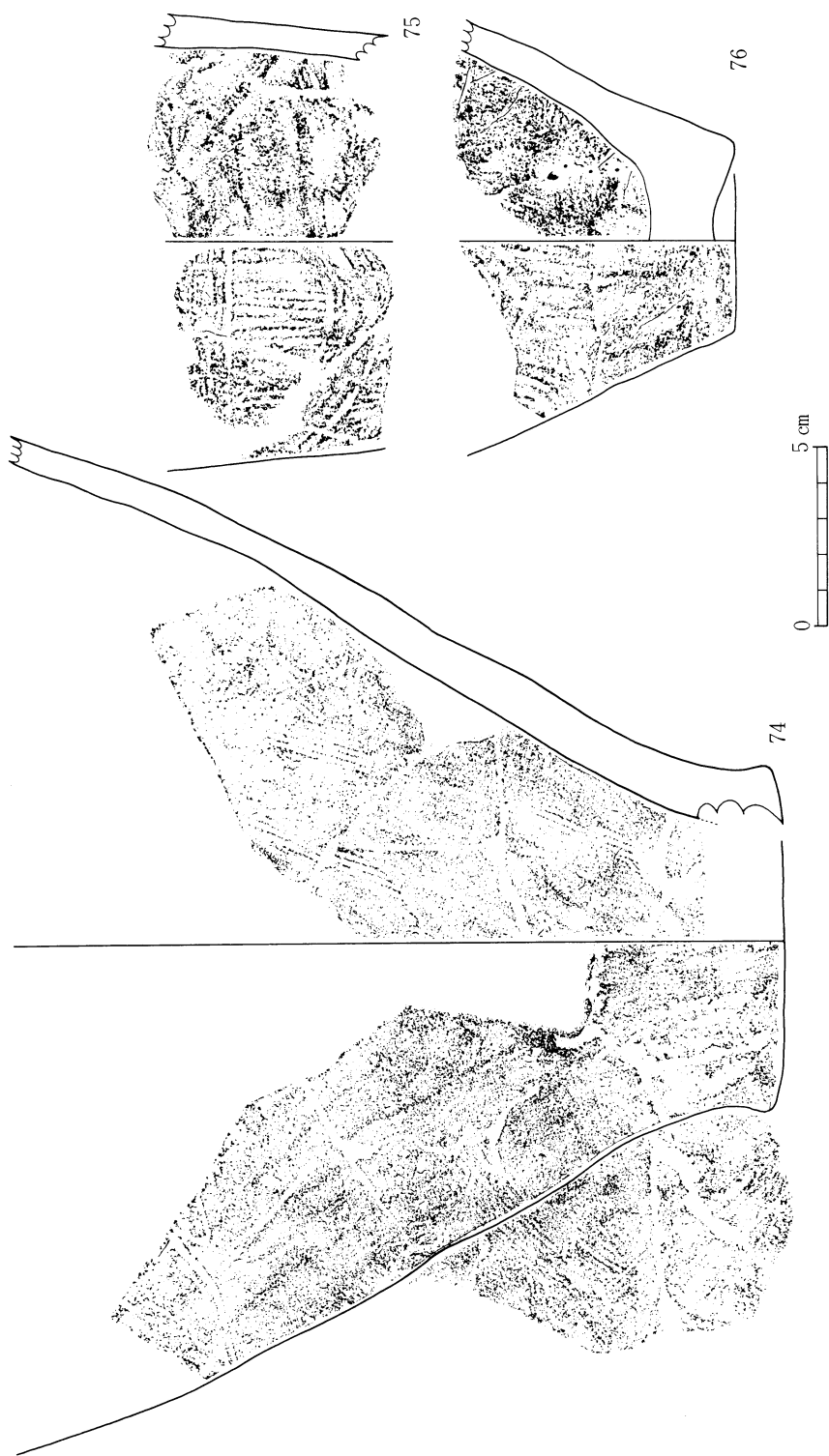
第51図 V層出土土器(7) (Ⅲ a. Ⅲ c類)



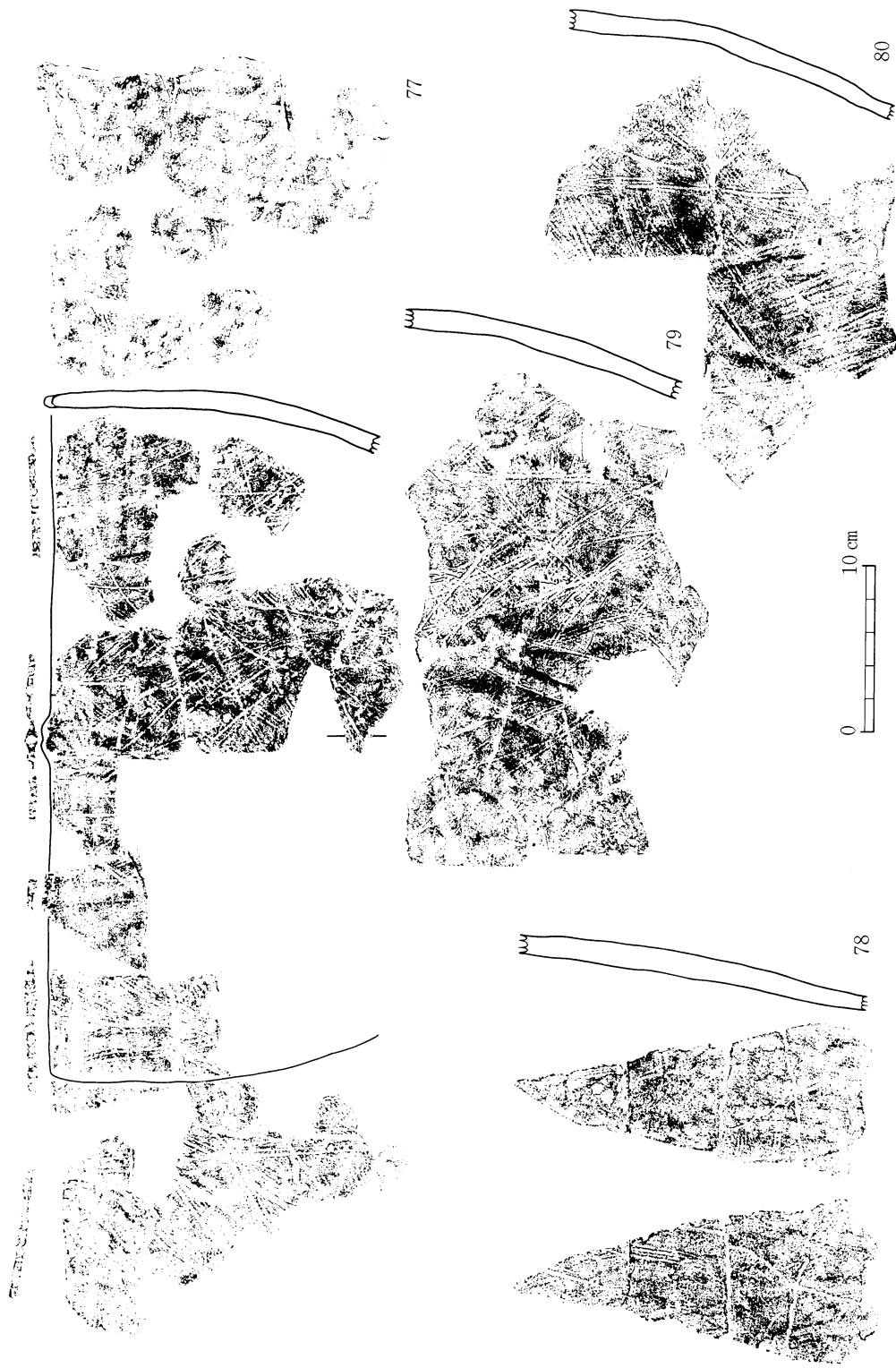
第52図 V層出土土器(8) (Ⅲ類胴部, Ⅳ類)



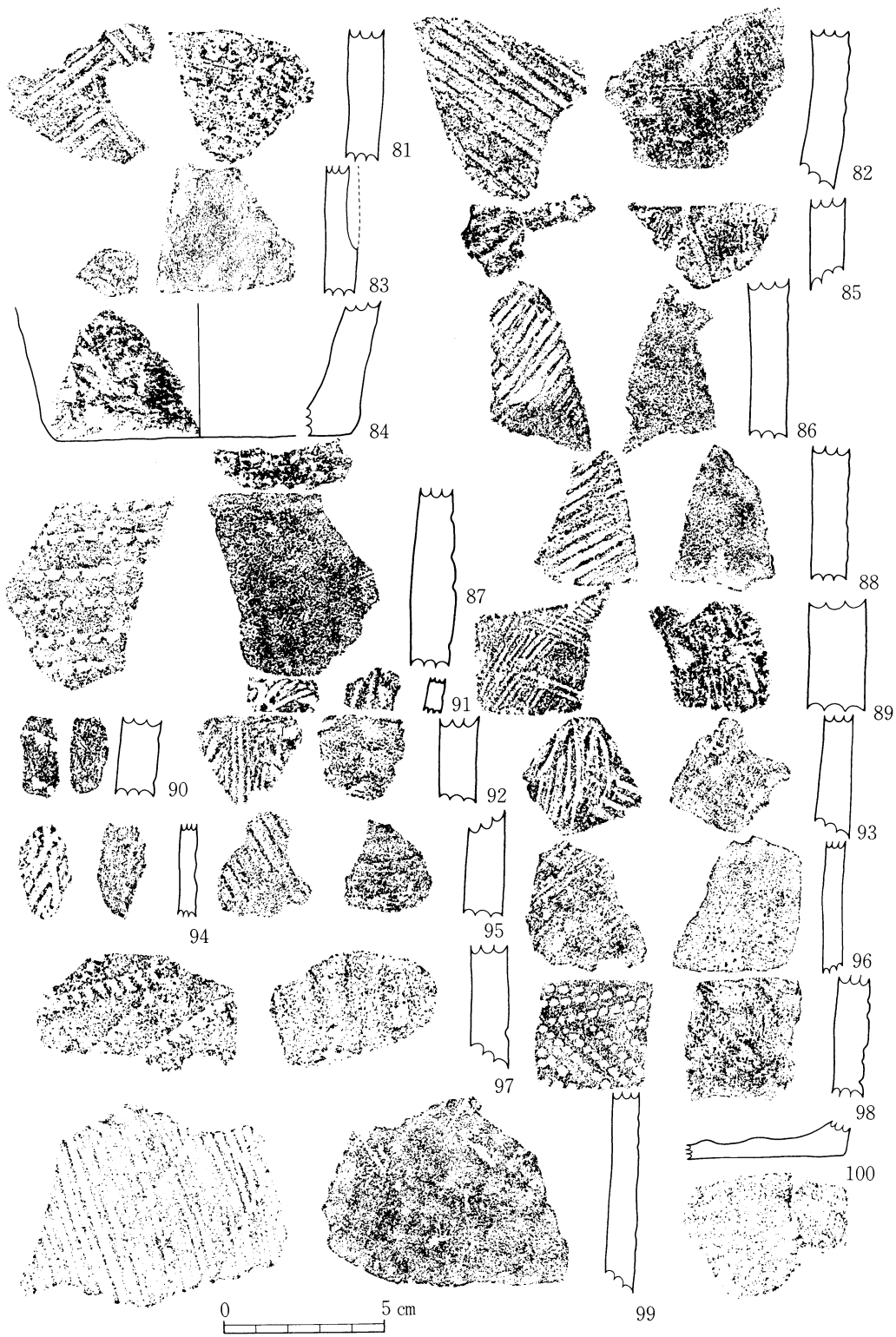
第53図 V層出土土器(9) (V. VI. VII類)



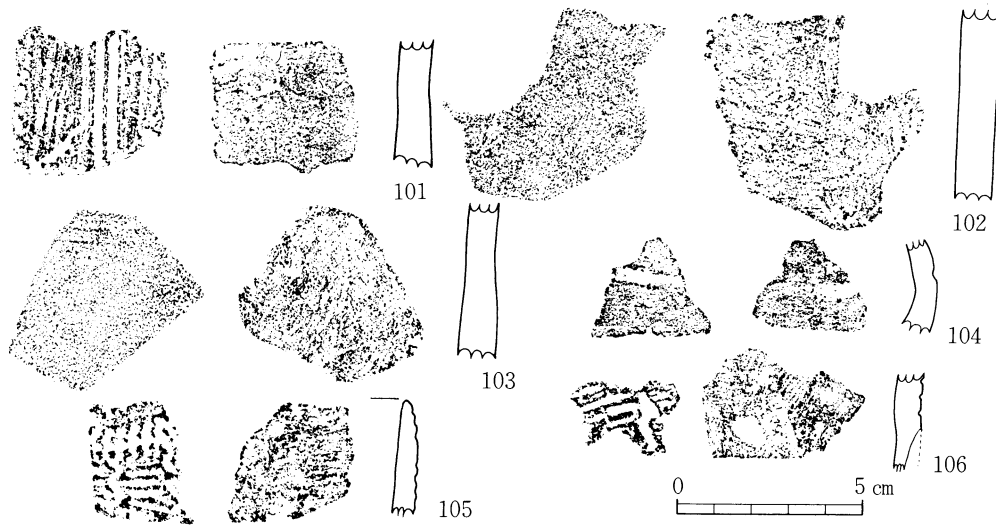
第54図 V層出土土器(10) (その他)



第55図 V層出土土器(11) (その他)



第56図 集石及び集石周辺出土土器(1)



第57図 集石及び集石周辺出土土器(2)

第11表 V層出土土器観察表(1)

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	内面調整	外面調整・文様	
第45図	1	I-26	V	石英・長石・角閃石	良好	茶褐色	貝殻条痕	貝殻条痕 貝殻腹縁刺突文	
	2	I-26	〃	〃	〃	暗茶褐色	ヘラ削り	貝殻条痕 貝殻腹縁刺突文	
	3	G-22	〃	〃 金雲母	〃	〃	〃	貝殻条痕 綾杉文 貝殻腹縁刺突文	
	4	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	5	G-21	〃	〃	〃	茶褐色	〃	〃	
	6	I-27	〃	〃	〃	〃	ナデ	貝殻条痕 貝殻腹縁刺突文	
	第46図	7	G-22	〃	〃 角閃石	〃	〃	〃	〃
		8	G-29	〃	〃	〃	暗茶褐色	〃	貝殻条痕 綾杉文 貝殻腹縁刺突文
		9	I-26	〃	〃	〃	明	〃	貝殻腹縁刺突文
		10	H-27	〃	〃	〃	茶褐色	〃	貝殻条痕 綾杉文 貝殻腹縁刺突文
		11	F-8	〃	〃 金雲母	〃	〃	〃	貝殻条痕 貝殻腹縁刺突文
		12	G-21	〃	〃 角閃石	〃	明茶褐色	〃	貝殻腹縁刺突文 沈線
第47図	13	H-22	〃	〃 金雲母	〃	暗	〃	貝殻条痕綾杉文 貝殻腹縁刺突文	
	14	〃	〃	〃 角閃石	〃	黒褐色	〃	〃	
	15	I-26	〃	〃	〃	暗茶褐色	〃	貝殻条痕 貝殻腹縁刺突文	
第48図	16	H-22	〃	〃	〃	茶褐色	〃	貝殻条痕 綾杉文	
	17	I-24	〃	〃 金雲母	〃	〃	〃	〃	
	18	〃	〃	〃 角閃石	〃	〃	〃	〃	
	19	I-29	〃	〃 金雲母	〃	暗茶褐色	〃	〃	
	20	I-23	〃	〃 角閃石	〃	淡	〃	〃	
	21	H-24	〃	〃	〃	赤	〃	〃	
	22	G-22	〃	〃	〃	灰	〃	〃	
	23	H-24	〃	〃	〃	灰褐色	〃	〃	
	24	I-29	〃	〃 金雲母	〃	茶褐色	〃	〃	

第12表 V層出土土器観察表(2)

挿入番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	内面調整	外面調整・文様	
第 49 図	25	G-22	V	石英・長石・角閃石	良好	茶褐色	ナ デ	貝殻条痕 綾杉文	
	26	H-23	〃	〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	
	27	I-27	〃	〃 金雲母	〃	茶褐色	ヘラ削り	〃	
	28	I-28	〃	〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	
	29	H-28	〃	〃 角閃石	〃	茶褐色	ナ デ	〃	
	30	I-24	〃	〃 金雲母	〃	〃	〃	〃	
	31	H-7	〃	〃 角閃石	〃	〃	〃	〃	
	32	I-25	〃	〃	〃	〃	〃	貝殻条痕	
	33	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	34	H-22	〃	〃	〃	黒褐色	〃	〃	
	35	H-24	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	36	H-28	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	37	H-22	〃	〃	〃	茶褐色	〃	〃	
	38	I-26	〃	〃	〃	赤茶褐色	〃	〃	
	39	H-24	〃	〃	〃	黒褐色	〃	〃	
	第 50 図	40	H-22	〃	〃	〃	茶褐色	〃	貝殻条痕 綾杉文
		41	G-21	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃	〃
		42	I-26	〃	〃	〃	茶褐色	〃	貝殻条痕
		43	I-25	〃	〃	〃	暗茶褐色	〃	〃
44		G-22	〃	〃	〃	茶褐色	〃	貝殻条痕 綾杉文	
45		H-21	〃	〃	〃	〃	〃	貝殻条痕	
46		H-23	〃	石英・長石・金雲母	良好	灰茶褐色	ナ デ	貝殻条痕	
47		I-20・22	〃	〃	〃	茶褐色	〃	〃	
48		I-26	〃	〃	〃	淡茶褐色	ヘラ削り・ナデ	貝殻条痕 綾杉文	
49		C-8	〃	〃	〃	茶褐色	〃	貝殻条痕 押引文 刻目	
第 51 図	50	H-26	〃	〃 角閃石	〃	〃	ナ デ	貝殻腹縁刺突 羽状文	
	51	H-25~28	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	52	I-27	〃	〃	〃	灰茶褐色	〃	貝殻腹縁刺突文	
	53	I-25	〃	〃	〃	黒褐色	〃	貝殻腹縁刺突 羽状文	
	54	H-28	〃	〃	〃	〃	〃	貝殻腹縁刺突文	
	55	I-26	〃	〃	〃	淡茶褐色	—	〃	
	56	I-27	〃	〃	〃	黒褐色	ナ デ	貝殻腹縁刺突文 羽状文	
第 52 図	57	H-27	〃	〃	〃	茶褐色	〃	〃	
	58	I-26	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	59	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	60	I-35	V	〃	〃	灰茶褐色	〃	貝殻腹縁刺突文	
	61	H-22	〃	〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	
	62	I-22	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	63	H-22	〃	〃	〃	茶褐色	〃	〃	
	64	I-11 H-10	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃	撚糸文 沈線	
	65	H-10	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	66	—	I	〃	〃	〃	〃	〃	
	67	I-10	V	〃	〃	〃	〃	〃	
	68	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	

第13表 V層出土土器観察表(3)

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	内面調整	外面調整・文様
第53 図	69	H-26	V	石英・長石・金雲母	良好	淡茶褐色	ナ デ	ナデ
	70	H-10	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	71	E-14	〃	〃 角閃石	〃	〃	〃	条痕
	72	I-24	〃	〃	〃	〃	〃	ナデ・条痕
	73	F-6	〃	〃	〃	〃	〃	ナデ
第54 図	74	I-13	〃	〃	〃	茶褐色	貝殻条痕 ナ デ	削りのあとナデ
	75	H・I-16	〃	〃	〃	淡茶褐色	ヘラ削り	条痕
	76	H-16	〃	〃	〃	〃	ナ デ	条痕か?
第55 図	77	I-13	〃	〃	〃	〃	ナ デ	条痕
	78	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	79	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	80	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

第14表 集石及び集石周辺出土土器観察表

挿図番号	遺物番号	集石番号	層	胎土	焼成	色調	内面調整	外面調整・文様	
第56 図	81	5号	V	石英・長石・金雲母	良好	茶褐色	ヘラ削り	貝殻条痕 綾杉文	
	82	6号	〃	〃 角閃石	〃	〃	ナ デ	貝殻条痕	
	83	〃	〃	〃	〃	灰茶褐色	〃	不明	
	84	〃	〃	〃 金雲母	〃	茶褐色	〃	貝殻条痕	
	85	11号	〃	〃 角閃石	〃	淡茶褐色	ヘラ削り	不明	
	86	15号	〃	〃	〃	茶褐色	ナ デ	貝殻条痕	
	87	18号	〃	〃	〃	〃	〃	貝殻腹縁刺突文	
	88	〃	〃	〃	〃	灰褐色	〃	貝殻条痕	
	89	〃	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃	貝殻条痕 綾杉文	
	90	30号	〃	〃	〃	灰褐色	〃	貝殻腹縁刺突文	
	91	33号	〃	〃	〃	淡褐色	〃	貝殻条痕 綾杉文	
	92	〃	〃	〃	〃	赤茶褐色	〃	〃	
	93	〃	〃	〃	〃	茶褐色	〃	?	
	94	〃	〃	〃	〃	灰褐色	〃	貝殻条痕・綾杉文	
	95	〃	〃	〃	〃	暗褐色	〃	貝殻条痕	
	96	〃	〃	〃	〃	灰褐色	不明	不明	
	97	〃	〃	〃	〃 金雲母	〃	淡灰褐色	ナ デ	貝殻腹縁刺突文
	98	〃	〃	〃	〃 角閃石	〃	〃	〃	貝殻腹縁刺突 綾杉文
	99	〃	〃	〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	貝殻条痕 貝殻腹縁刺突文
	100	〃	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃	〃	刻目
第57 図	101	〃	〃	〃	〃	暗茶褐色	〃	貝殻条痕 貝殻腹縁刺突文	
	102	〃	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃	貝殻条痕?	
	103	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	104	〃	〃	〃	〃	茶褐色	〃	沈線	
	105	〃	〃	〃	〃	暗茶褐色	〃	貝殻条痕文 沈線	
	106	〃	〃	〃	〃	〃	〃	貝殻腹縁刺突 貝殻条痕文、沈線	

2. 石器

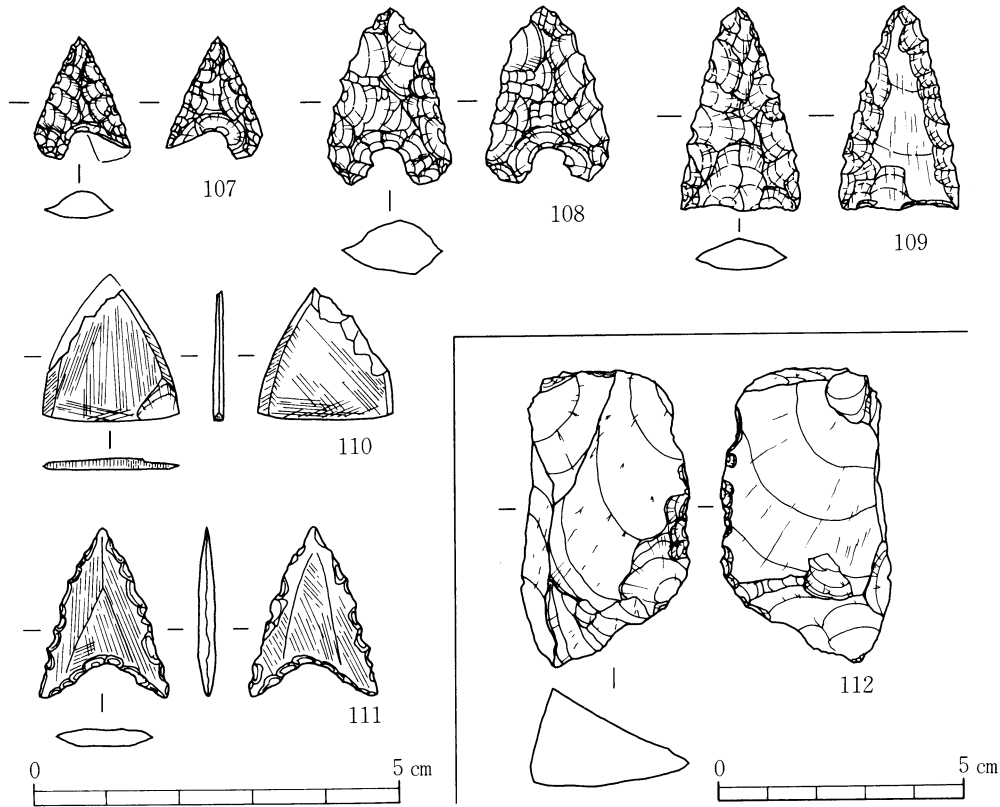
第V層から出土した石器は、石鏃・スクレイパー・石斧・磨石・敲石・石皿・礫器など総計140点認められた。これらのなかで礫器は最も多く71点出土し、全体の50.7%を占めている。また磨石・敲石類も40点と次いで多く、全体の28.6%を占めている。

打製石鏃

計6点出土している。そのうち3点図化した。基部形態は凹基及び平基であり、整形加工の剥離は比較的大きい。使用されている石材は黒曜石・チャート・頁岩である。また石鏃の未製品と思われるものが2点出土している。

磨製石鏃

2点出土した。110は全体に研磨を入念に施したもので、表裏両面は平坦にし、両側縁は幅1～2mmを研ぎ分け鋭くしている。基部は丸みをもちややふくらみ、縦方向の研磨が行われている。先端部を一部欠損しているが、推定長は約2cmとなる。111は頁岩製であり、打製石鏃の両面に研磨したものである。凹基式で鋸歯状を呈する側縁及び基部には押圧剥離による痕跡が残存している。110はG-7区から、111はH-16区から出土した。



第58図 V層出土石器(1) (石鏃)

スクレイパー

H-10区から1点出土した。112は気泡・不純物の多い黒曜石の剥片を素材にし、鋭利な片側縁辺に粗い二次加工を施し刃部としている。

磨製石斧

113は砂岩のやや厚手の剥片に粗い整形剥離を行い、縁辺は敲打による整形を施し、主に刃部付近にのみ研磨を施したものである。刃部は片刃状に近い。基部には柄の装着痕と考えられる光沢痕が認められる。他に、刃部の小破片と、基部片と思われるものが各1点ずつ出土している。

打製石斧

114は表皮の残る剥片の周縁に粗い二次加工を施したものである。115は頁岩製で整形剥離と敲打調整により丁寧な整形が行われている。刃部付近には使用による磨滅部分が残る。116も表皮の残る剥片に粗い二次加工を施したものである。他に同様の粗い二次加工と敲打調整を施したものが3点出土している。

117は棒状の偏平な礫の両端に二次加工が行われているものである。118は集石18号を構成する礫のなかの一つであり、剥片の鋭利な縁辺に粗い剥離を行い刃部としている。119は集石33号のもので、縁辺に敲打痕、一部には擦痕が認められる。120は両端に顕著な敲打痕、また片面に部分的に敲打痕、裏面には研磨痕が認められるものである。これらは敲打具の一種と考えられる。

礫器

総計71点出土し、全石器数の半数を占めている。礫器は円礫を素材とし、その縁辺の一部に片面から数回の粗い剥離が行われ刃部が形成されたもので、素材礫の形状や刃部の位置により数類に区分できる。

- 1類…… 偏平な亜円礫を使用し、長軸の一端に粗い数回の剥離を行い礫の縁辺の形状に応じた刃部が形成されている。19点出土。121～132である。刃部には使用によると思われる刃潰れが観察される。
- 2類…… 素材礫の形状は1類とほぼ同様であるが、刃部は数回の粗い剥離を行い尖頭状を呈しているものである。5点出土。133～135
- 3類…… 長さが幅の2倍以上ある棒状の偏平礫を使用し、長軸の一端に粗い剥離を行い刃部としている。全体で30点出土しており、小型のもの136～141（3 a類）と比較的大型のもの142～143（3 b類）があり、各々15点ずつ出土している。143は側縁部に敲打痕が観察される。
- 4類…… 素材礫の形状は3類とほぼ同様であるが、長軸の両端に粗い剥離痕が残るものであり、両端とも刃部として使用されている。8点出土している。144～147。144の長軸の一端は敲打使用によるものと考えられる。147は片側側縁に敲打痕が観察される。
- 5類…… 比較的大型の亜円礫を素材とし、粗い剥離により半円状の刃部を形成している。刃

部の幅が最も大きく、重量もある。7点出土した。148である。

磨石・敲石類

一つの石器に磨面及び敲打痕、あるいは敲打痕が円形に集中し凹みのあるものなど、複数の使用痕がみられるため、ここでは磨石・敲石類として取り扱った。これらの石器は使用された痕跡により次のように分けられる。

- 1類…… 平坦面に磨面のみを有するもの。149, 150。9点出土。
- 2類…… 平坦面及び側縁に磨面を有するもの。9点出土。151～153。このうち152・153は平坦面の中央部に敲打痕が集中した凹みがみられる。
- 3類…… 平坦面に磨面があり、側縁あるいは部分的に敲打痕がみられるもの。8点出土。154～157。157は、比較的大型で長楕円形を呈し、長軸の片側と片側面に著しい敲打痕がみられる。
- 4類…… 部分的に敲打痕のみがみられるもの。158, 159。13点出土している。
また、160は部分的に敲打痕がみられるのみでなく、平坦面の中央部に集中した敲打による凹みがあるものである。

この他、同様の円礫を使用し、部分的に磨面が観察されるものが2点ある。161は平坦面の中央部に、磨面があり擦痕が観察される。磨面はわずかに凹面を呈し、砥石と考えられる。

石皿

計10点出土している。平坦面が使用のため磨滅し凹んだもの162～165と磨面はあるもののほとんど凹んでいないもの166～169がある。使用されている石材は安山岩（163～165）と花崗岩（166～169）及び溶結凝灰岩（162）である。

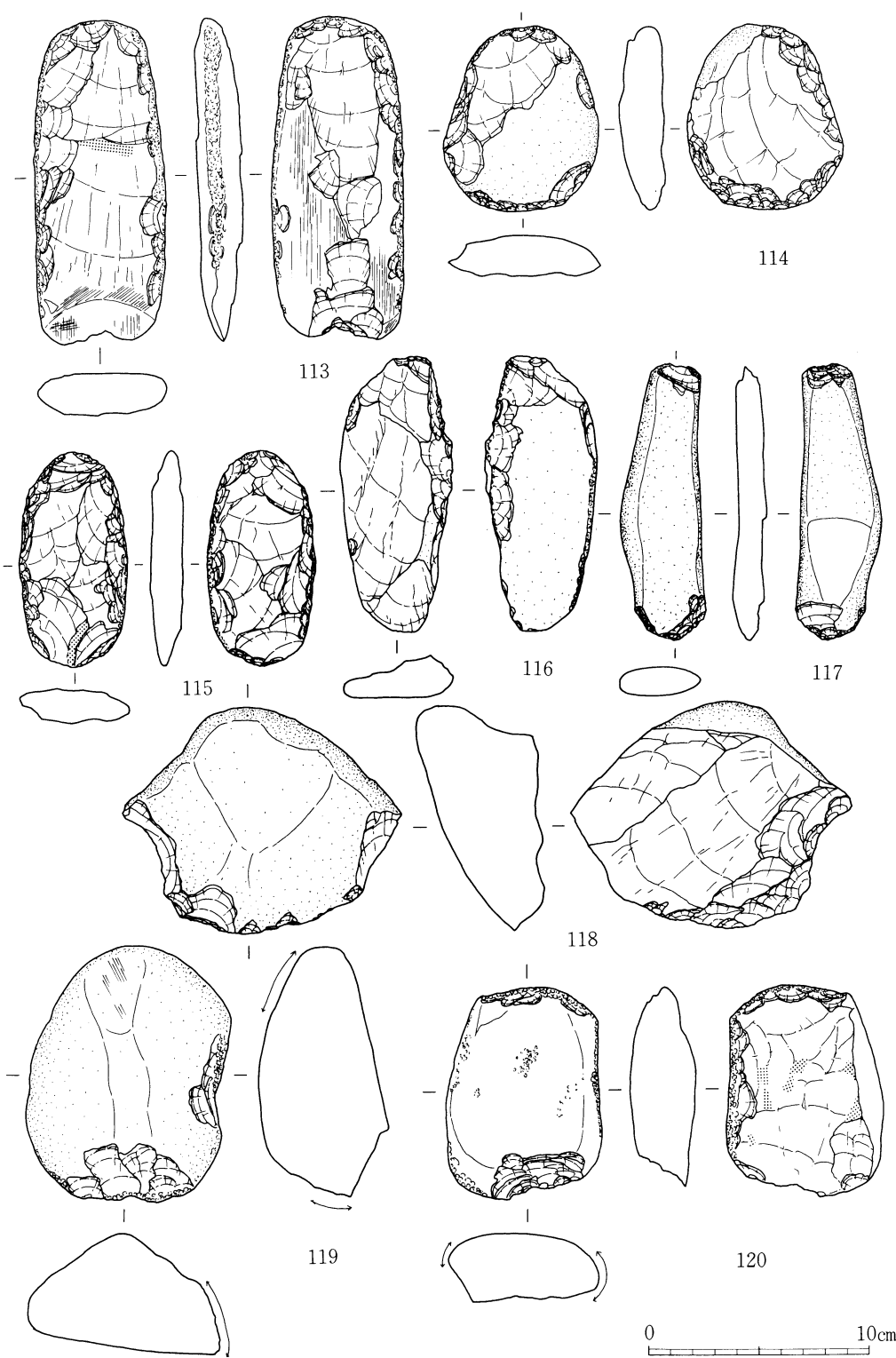
石器の出土分布（第67図）

石鏃及び石斧は出土点数が少ないため散在した分布となっている。二点出土した磨製石鏃の周辺には打製石鏃は出土していない。

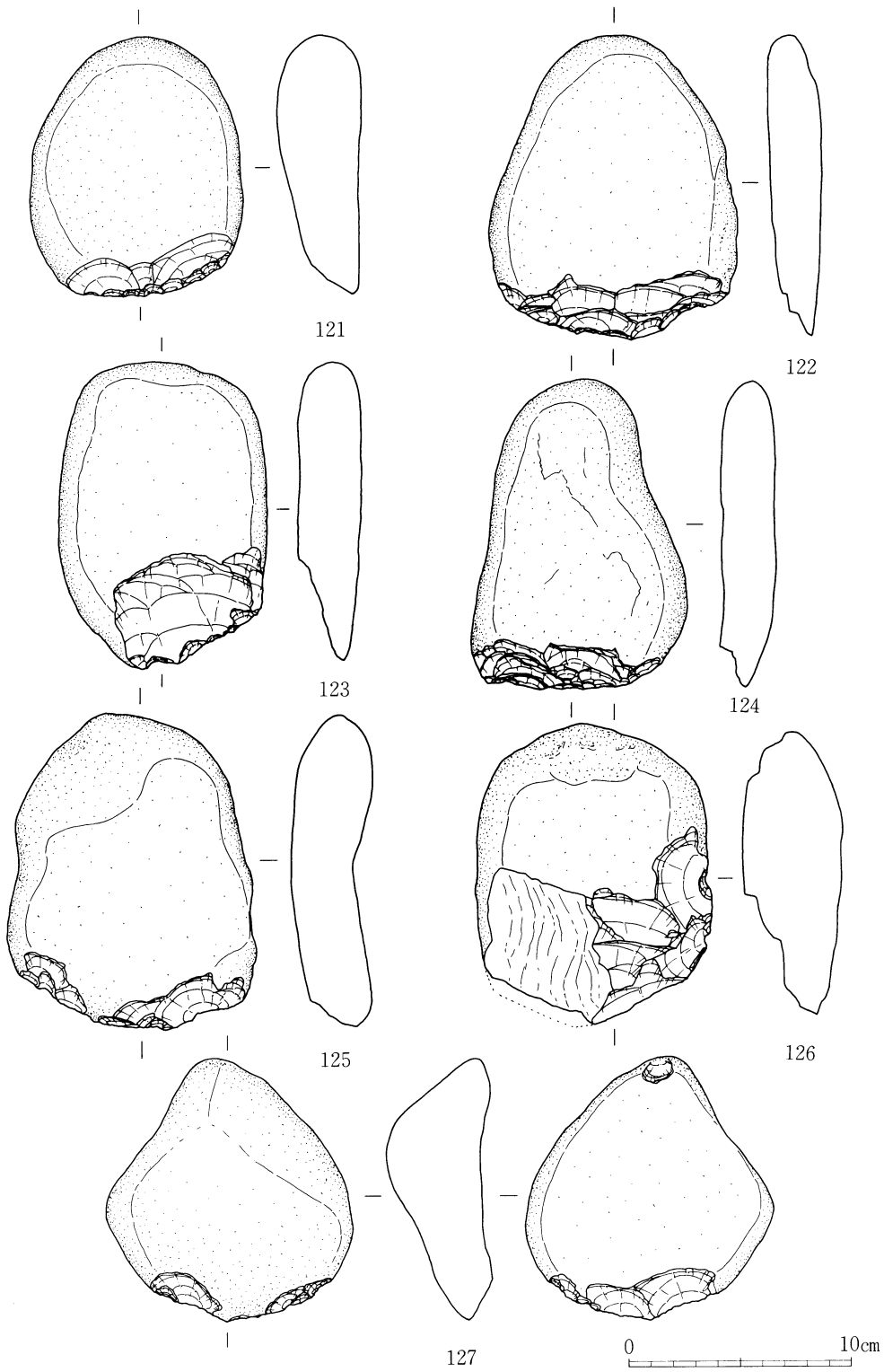
多量に出土した礫器はほぼ調査区域の全体に広がるものの、8区周辺と13区から18区まで及び、22区から27区にかけてと三ヵ所の出土量の多い分布が知られる。

調理用の道具としての磨石・敲石は、その大部分が22区から26区にかけてのほぼ一ヵ所に集中して出土していることがわかる。また6・7区周辺及び13～15区にも小さなまとまりもみられる。石皿の出土分布は、その大半が22区から28区に出土しており、磨石・敲石の集中している区域と重なっている。

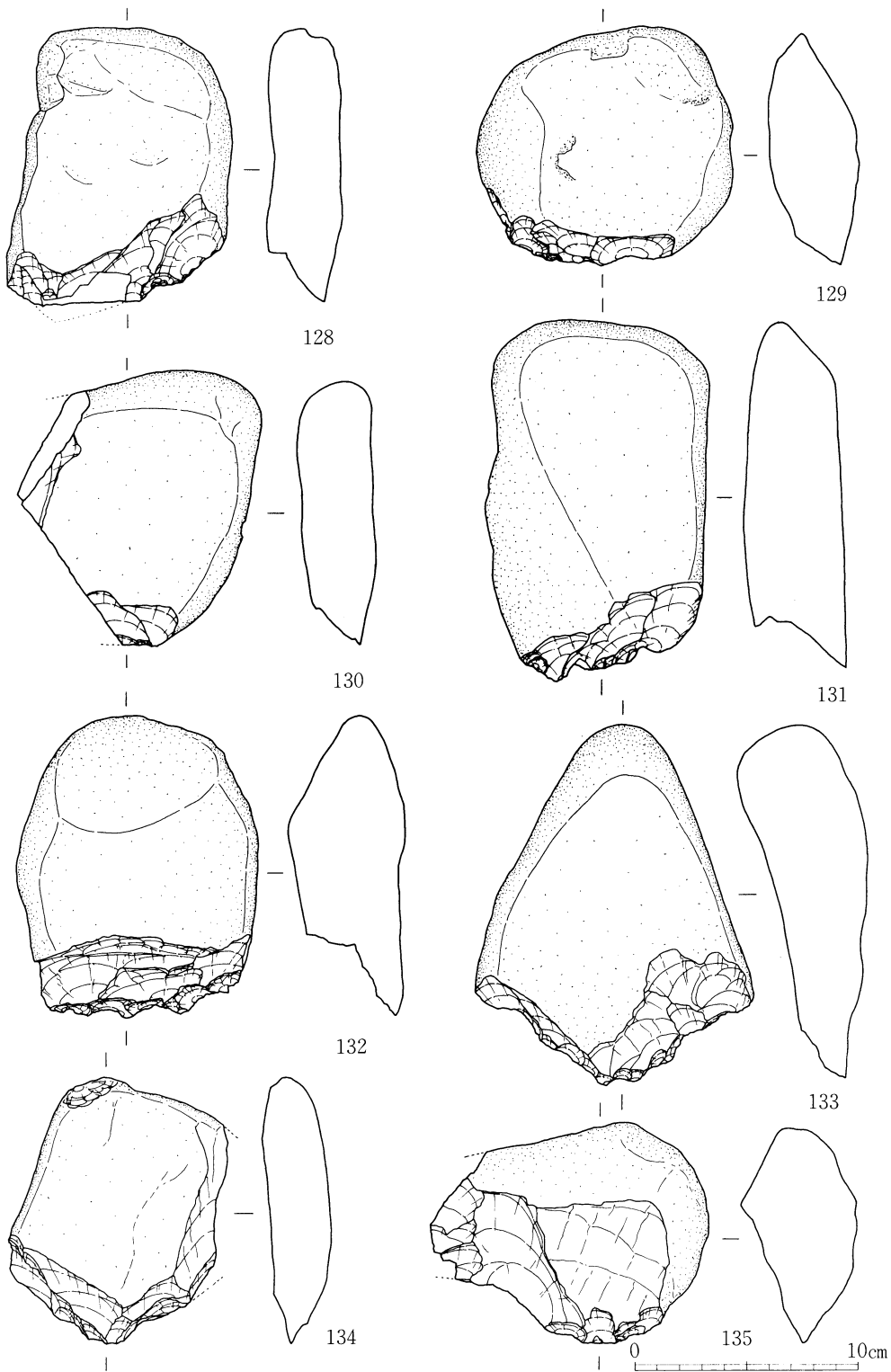
このように各石器の出土分布は、ほぼ3ヵ所のまとまりとなり、出土量では東側のものが多数を占めている。それはまた出土土器の分布及び出土量とも対応している。



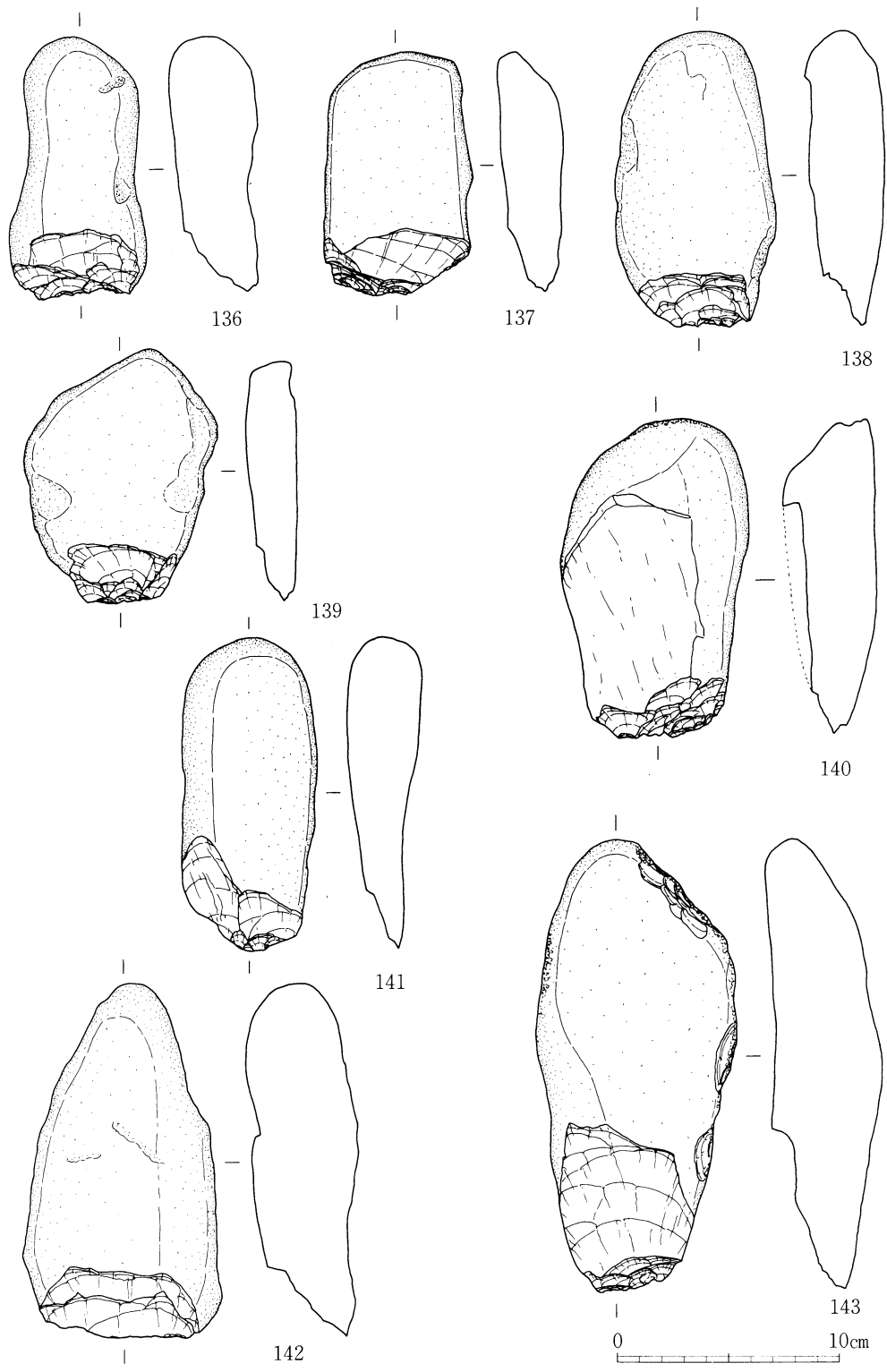
第59图 V層出土石器(2) (石斧, 礫器①)



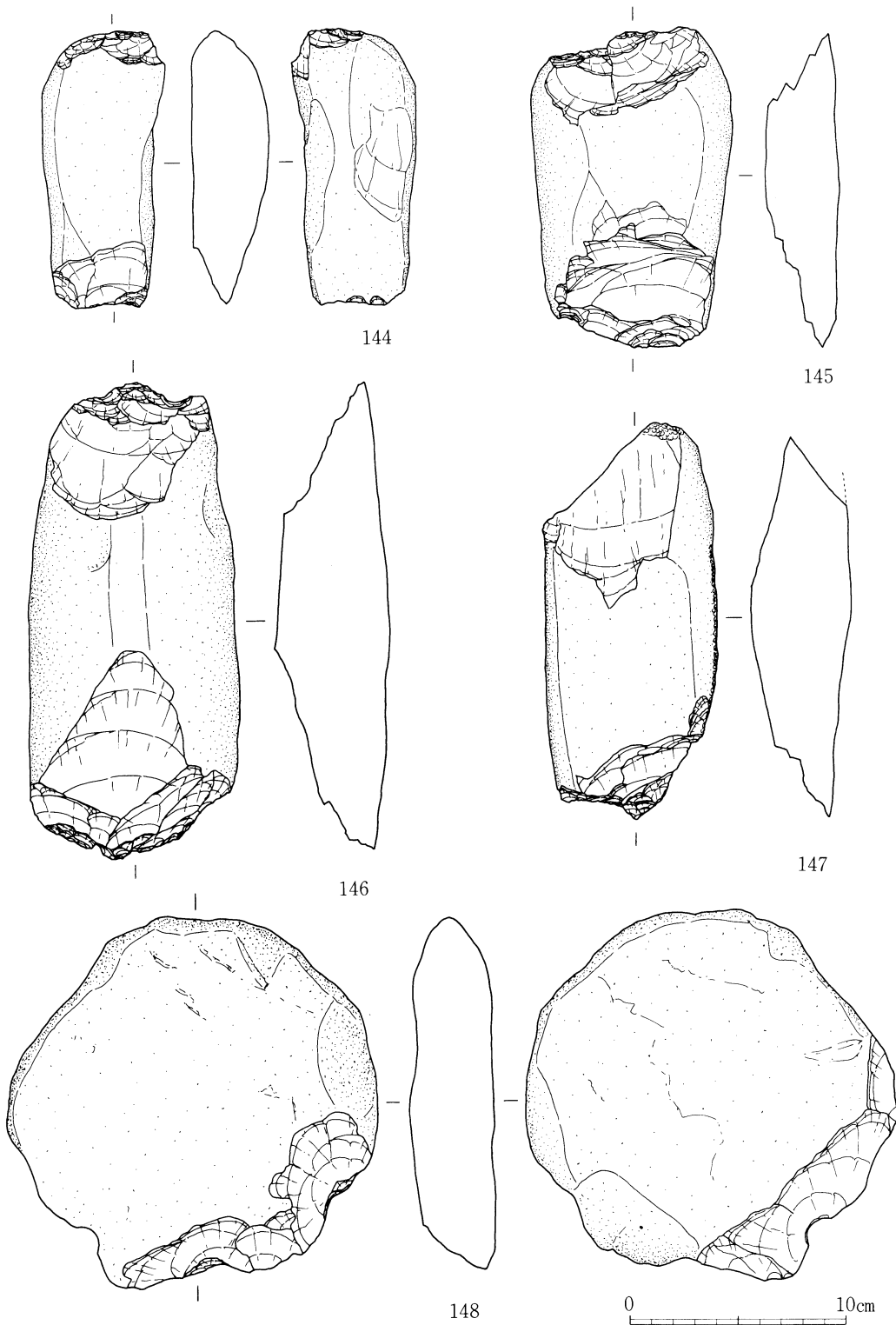
第60図 V層出土石器(3) (礫器②)



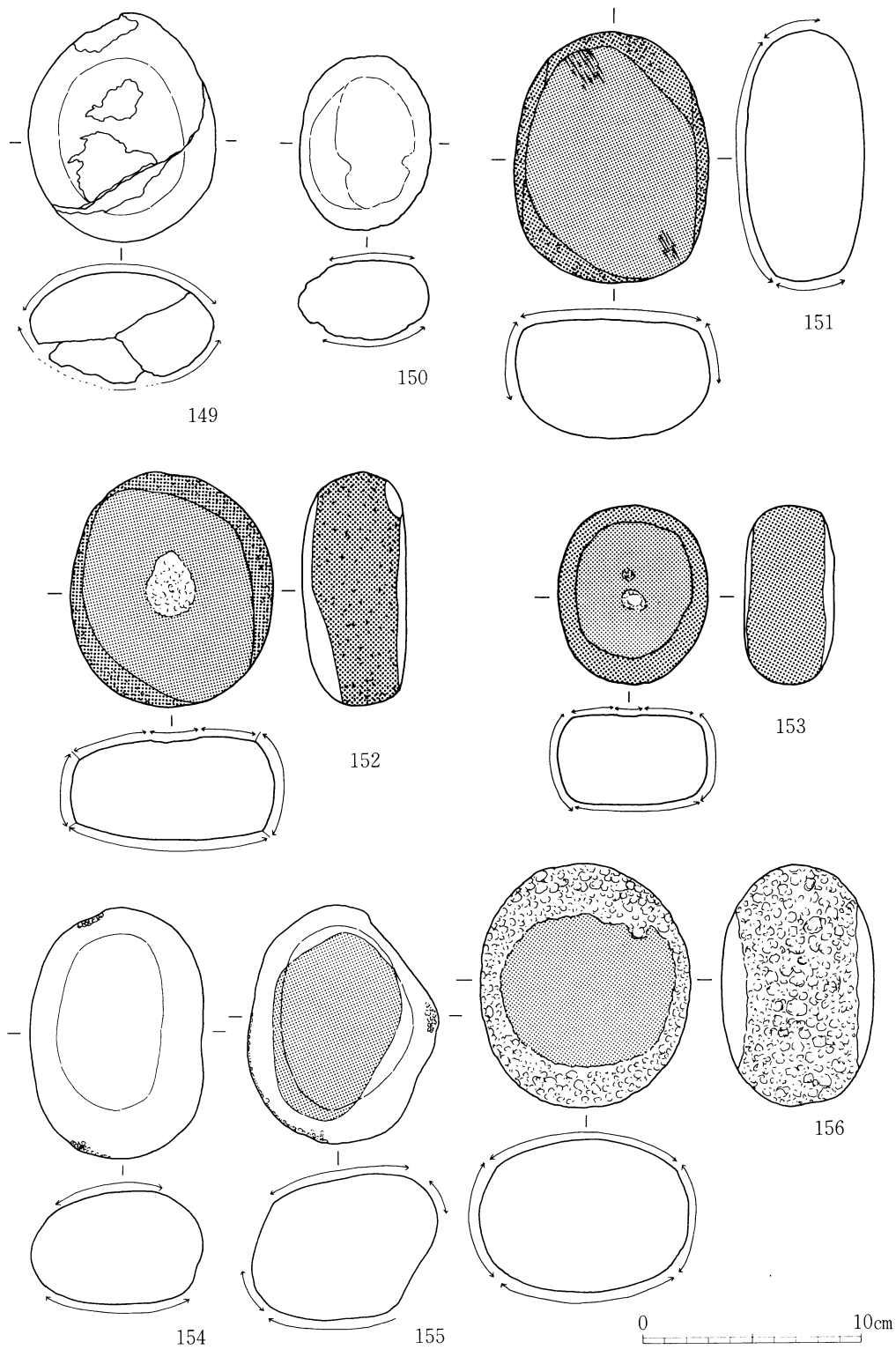
第61圖 V層出土石器(4) (礫器③)



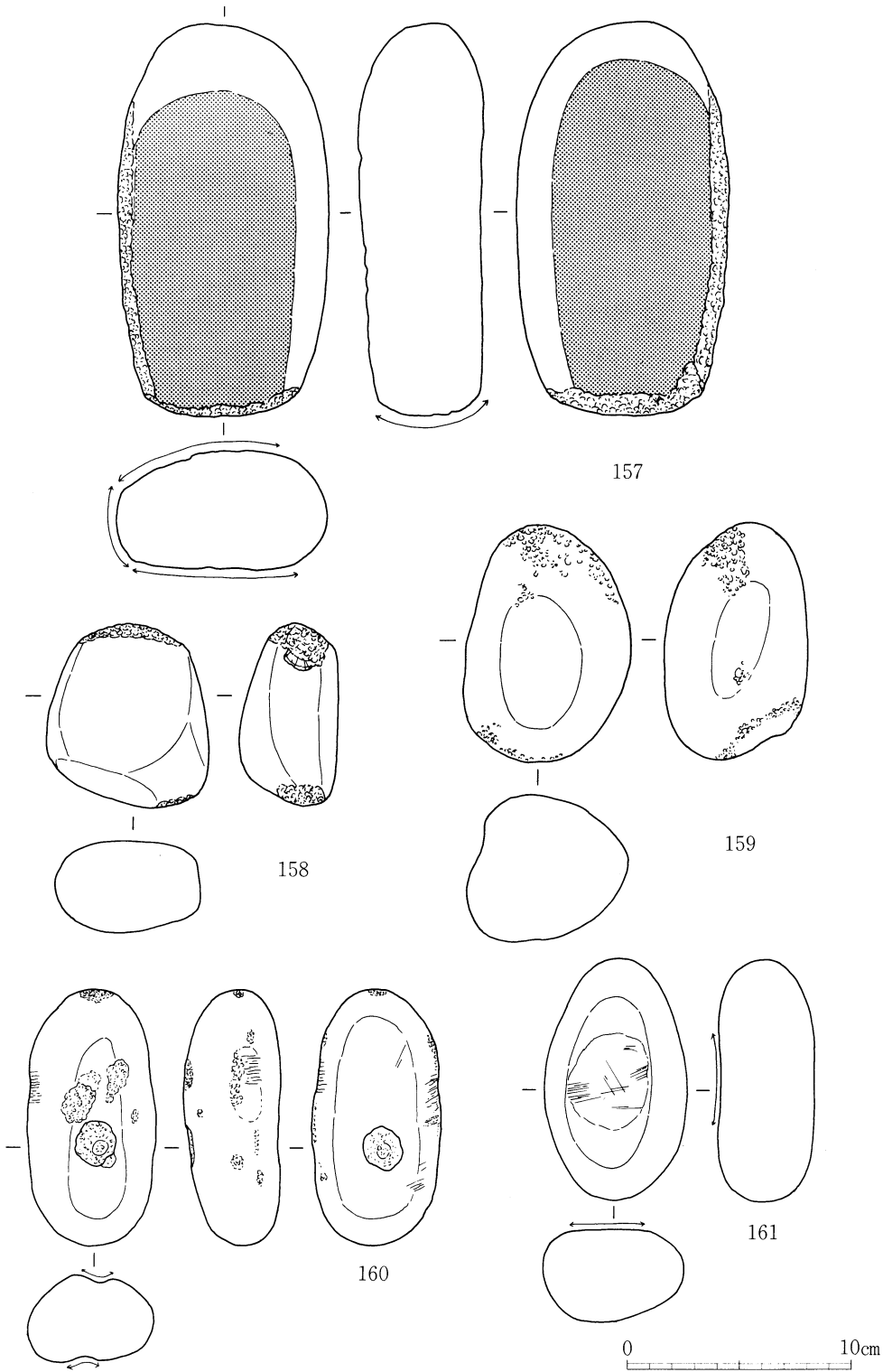
第62図 V層出土石器(5) (礫器④)



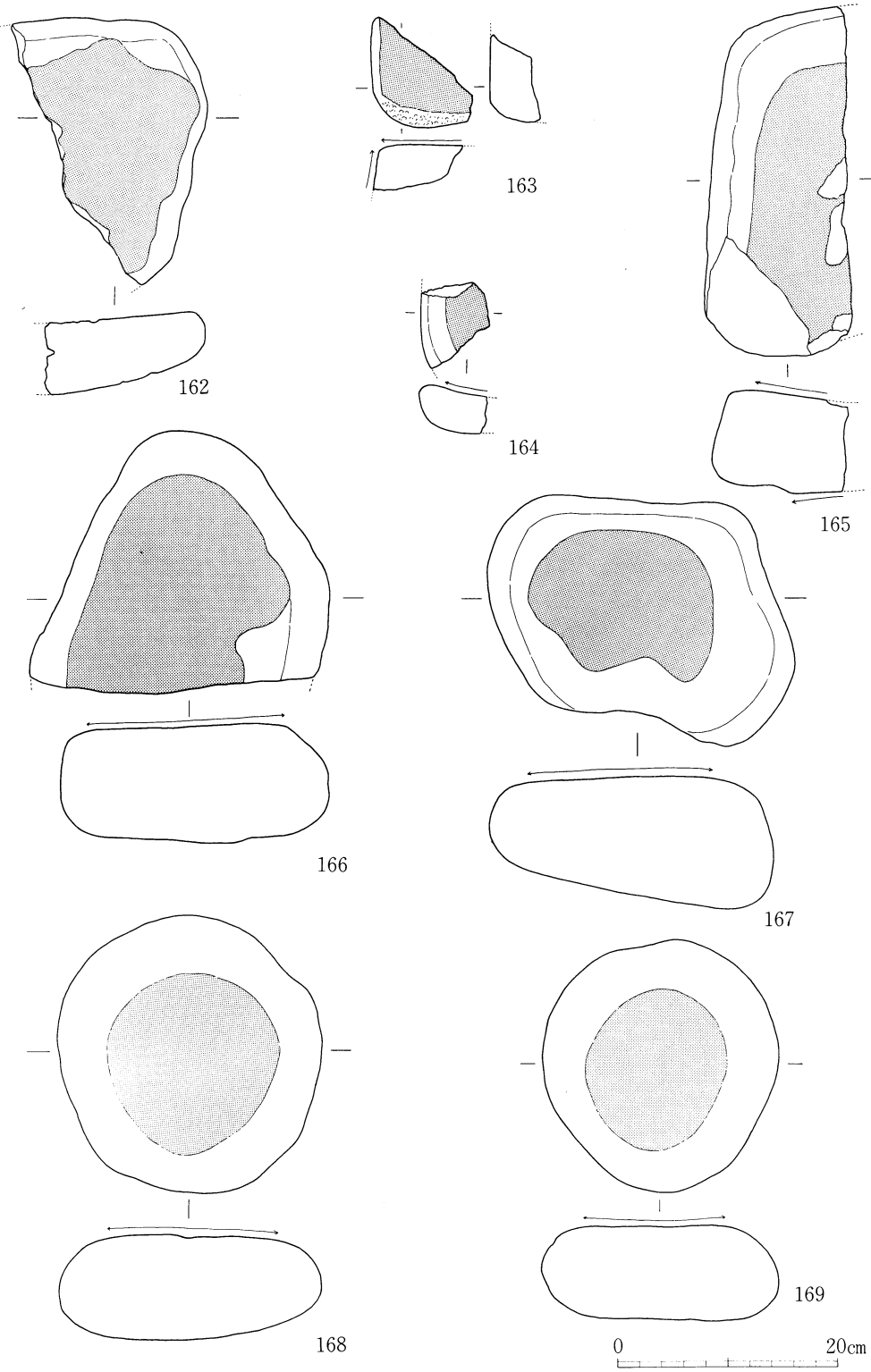
第63図 V層出土石器(6) (礫器⑤)



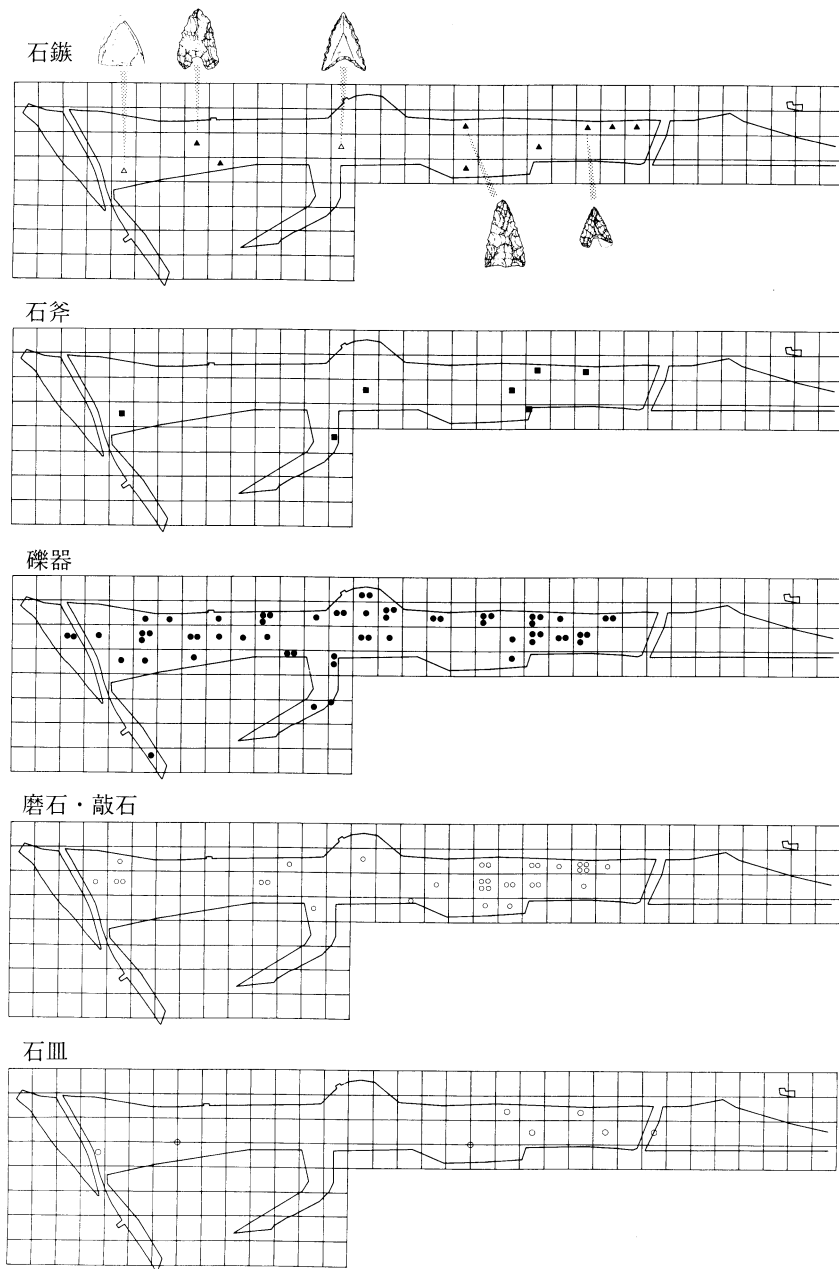
第64図 V層出土石器(7) (磨石・敲石①)



第65図 V層出土石器(8) (磨石・敲石②)



第66図 V層出土石器(9) (石皿)



第67図 縄文時代早期の石器出土分布図

第15表 V層出土石器計測表(1)

番号	器種	出土区	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	注記番号
107	石 鏃	I-26	黒曜石	1.7	1.3	0.4	0.54		19903
108	石 鏃	H-10	黒曜石	2.4	1.7	0.7	2.16		17595
109	石 鏃	I-21	頁岩	2.75	1.65	0.45	1.72		20332
110	磨製石鏃	G-7	頁岩	1.8	1.9	0.15	0.63	先端部欠損	1497
111	磨製石鏃	G-16	頁岩	2.3	1.3	0.25	0.88		31078
112	スクレイパー	H-10	黒曜石	6.1	3.4	2.0	45		17587
113	磨製石斧	I-26	砂岩	14.7	6.1	2.1	275		19921
114	打製石斧	H-23	頁岩	8.4	7.1	2.1	175		20745
115	打製石斧	F-16	頁岩	9.8	5.0	1.6	110		19739
116	打製石斧	G-24	頁岩	12.5	5.1	1.9	155		20807
117	石斧?	H-17	砂岩	12.7	3.9	1.5	100		24016
118	敲打器	H-22		10.3	12.7	5.8	685		集石18-75
119	敲打器	-	砂岩	11.7	9.3	5.9	695		集石33-434
120	敲打器	I-17	頁岩	9.6	7.1	3.0	300		23940
121	礫器	I-20	砂岩(変成)	11.7	9.6	3.8	550		24001
122	礫器	H-25	砂岩	13.6	10.2	2.5	520		19757
123	礫器	G-7	〃	13.8	9.4	2.9	600		943
124	礫器	G H-9・10・11・12	砂岩(変成)	14.0	9.7	2.5	505		-
125	礫器	G H-21・22	頁岩(変成)	14.3	11.3	3.7	785		-
126	礫器	-	〃	13.5	10.7	4.5	775		集石1号
127	礫器	H-26	〃	11.9	11.2	4.7	600		-
128	礫器	-	〃	12.6	10.1	3.4	680		集石29号
129	礫器	I-11	〃	10.8	11.4	4.1	670		集石29号
130	礫器	-	〃	12.5	11.0	3.5	655		集石29-8
131	礫器	G-8	砂岩	16.3	10.1	4.6	1220		946
132	礫器	H-5	頁岩(変成)	13.6	10.9	5.1	920		-
133	礫器	I-24	〃	16.2	12.5	5.9	990		20298
134	礫器	I-24	頁岩	12.0	9.9	3.1	480		-
135	礫器	-	頁岩(変成)	10.0	12.5	5.1	650		集石23-52
136	礫器	H-24	〃	11.9	6.2	4.0	375		20725
137	礫器	H-26	頁岩	11.0	6.7	2.9	330		19752
138	礫器	J-17	砂岩	13.3	7.3	3.6	445		23967
139	礫器	I-17	頁岩(変成)	11.5	8.8	2.3	310		23943
140	礫器	I-13	頁岩	14.4	8.5	4.3	620		30991
141	礫器	-	〃	14.1	6.2	3.4	390		-
142	礫器	G H-9・10・11・12	〃	16.0	9.0	4.1	940		-
143	礫器	I-27	〃	20.5	9.1	5.3	1020		-
144	礫器	H-11・12	〃	12.9	5.7	3.6	380		-
145	礫器	E-15・16	〃	14.9	9.4	3.4	660		-
146	礫器	-	〃	22.1	9.9	5.3	1420		-
147	礫器	-	〃	18.4	8.1	4.6	845		集石35号
148	礫器	H-5	頁岩(変成)	17.2	17.3	4.0	1660		-
149	磨石敲石	H-26	〃	10.5	8.6	5.0	605		集石28-1,7,8
150	磨石敲石	-	溶結凝灰岩	8.0	6.0	3.7	120		集石33号
151	磨石敲石	I-26	安山岩	11.5	8.9	5.5	855		19955
152	磨石敲石	H-22	〃	10.8	9.3	4.8	730		20573
153	磨石敲石	G-15	〃	8.2	6.9	4.2	410		19944
154	磨石敲石	G-22	安山岩	11.6	7.9	5.4	745		20722
155	磨石敲石	-	〃	11.0	8.7	6.7	765		集石33-24
156	磨石敲石	H-26	花崗岩	11.2	9.6	7.0	1000		19798

第16表 V層出土石器計測表(2)

番号	器種	出土区	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	注記番号
157	磨石・敲石	H-22	溶結凝灰岩	17.6	9.5	5.6	1320		20572
158	磨石・敲石	H-23	砂岩	8.2	7.3	4.3	400		20744
159	磨石・敲石	H-22	花崗斑岩	10.6	7.5	6.9	660		20337
160	磨石・敲石	H-7	砂岩	11.4	5.8	4.4	405		958
161	砥石	I-22	砂岩	10.8	6.4	4.3	445		20323
162	石皿	H-27	溶結凝灰岩	24.2	17.6	6.6	2600		19859
163	石皿		安山岩	9.9	9	4.6	375		-
164	石皿	G H-21・22	〃	7.7	6.2	3.6	192		-
165	石皿	I-26	〃	31.5	13.5	9.1	6100		19973
166	石皿	F-6	花崗岩	24.1	23.7	10.8	10000		1010
167	石皿	H-29	〃	28.1	22.3	12.1	10150		集石3号
168	石皿	H-23	〃	25.4	24.2	9.6	8300		20819
169	石皿		〃	23.1	21.4	8.7	6150		-

第17表 未実測礫器計測表

分類	出土区	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	注記番号
1	I-24	砂岩(変成)	15.0	10.5	3.6	760		
1	H-13	頁岩(変成)	12.1	11.8	2.8	480		31007
1	F-15・16	凝灰岩	10.9	9.2	4.4	465		
1		砂岩	13.4	10.0	5.0	840		
1	H-10	頁岩(変成)	12.4	9.9	3.5	430		17562
1	J-17	砂岩(変成)	12.1	(7.1)	3.0	315		23949
1	I-18	頁岩(変成)	12.3	11.6	4.6	795		23976
1	H-17	頁岩(変成)	14.5	9.7	3.2	570		24013
2	H-8	砂岩(変成)	13.9	9.6	3.3	535		949
2	I-25	頁岩(変成)	11.2	10.3	4.0	515		
3 a	I-13	頁岩(変成)	18.8	8.3	5.3	840		30990
3 a	G-14	砂岩(変成)	13.4	6.6	2.5	260		31009
3 a	I-18	頁岩	13.0	6.5	3.3	355		23989
3 a	H-23	〃	14.4	8.7	3.9	565		20666
3 a	I-18	〃	12.4	7.7	3.5	415		23992
3 a	H-9・10・11・12	〃	16.0	5.6	3.0	390		
3 a	I-27	砂岩(変成)	(11.7)	5.5	2.7	230		19990
3 a	H-5	頁岩	13.0	6.4	3.5	335		
3 a	G H-21・22	〃	(7.9)	7.8	2.7	265		
3 b	I-22	頁岩	13.3	10.1	4.5	770		20320
3 b	H-8	〃	15.5	8.5	3.6	680		947
3 b	H-8	砂岩(変成)	20.0	6.4	4.8	765		968
3 b	I-9	頁岩	15.9	8.6	4.0	905		18108
3 b	B-8	〃	15.2	5.1	4.1	465		982
3 b	G H-9・10・11・12	〃	15.3	8.8	3.4	600		
3 b	I-15	砂岩	18.0	6.9	3.1	445		31197
3 b	I-13	頁岩	14.6	6.6	4.5	470		30998
3 b	G-14	〃	15.8	10.8	4.9	975		31012
3 b	H-8	〃	19.4	9.3	2.7	695		967
3 b	H-6	〃	19.3	6.5	3.2	490		755
3 b	G H-21・22	頁岩(変成)	15.0	9.1	4.9	650		
4	H-25	砂岩(変成)	15.1	11.7	3.4	645		19745
4	H-24	〃	(10.5)	9.6	3.6	445		20634
4	H-17	頁岩	(14.7)	8.9	3.6	550		24019
4	H-26	砂岩(変成)	11.6	7.4	2.8	300		21069
4	I-11	〃	13.3	7.2	3.7	435		18033
5	H-5	頁岩	16.5	13.4	3.9	855		
5	G-10	頁岩(変成)	10.7	13.8	3.6	535		18911
5	I-22	〃	19.6	13.6	6.7	1760		20321
5	G-16	〃	16.2	15.5	5.2	1610		19937
5	G-23	〃	10.6	13.7	4.4	730		20696
5	I-16	〃	12.9	14.6	6.0	1090		31041

第Ⅵ章 縄文時代晩期の調査

第1節 調査の概要

縄文時代晩期の遺物は、調査区のほぼ全域にみられるが、東西の両端部付近の出土量は極端に少なくなる傾向にある。遺物の出土するⅢ層の暗黄褐色土は、上部には開聞岳起源の紫ゴラが点在している部分もある。また、下半部には池田カルデラ起源の軽石が多く混在している。Ⅲ層は、畑地の造成や最近のサイロ（牧草保管用施設）建設等により、上半部が削平されている部分もみられたが、ほぼ一定した層の堆積があり、概ね東南方向へのゆるやかな傾斜を持つ。遺物はこのⅢ層の上半部（Ⅲa層）を中心に出土している。なかでも東南部の21～34区付近は、60cm前後の層厚があり多くの遺物が出土した。

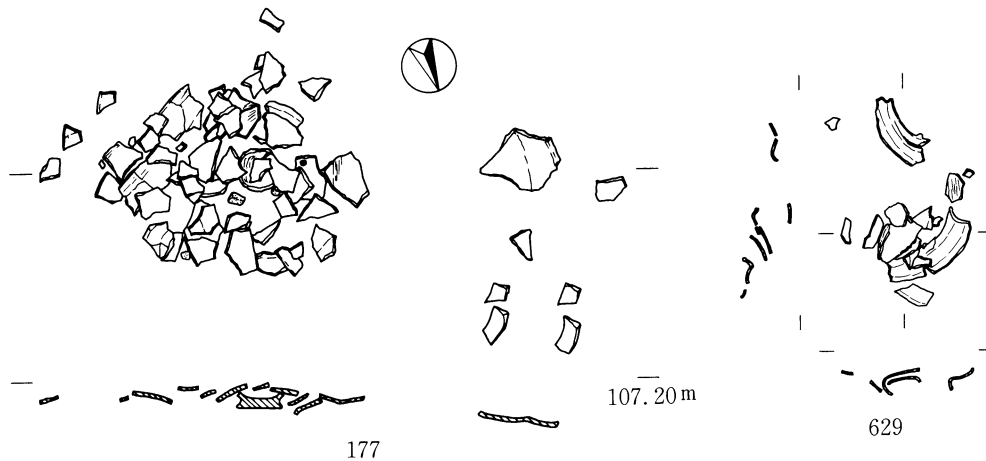
出土遺物について見ると、土器は多量の深鉢、浅鉢があり、それぞれ粗製土器、精製土器がある。他に少量の孔列土器や組織痕土器等がある。石器は、打製石鏃、磨製石鏃、石匙、スクレイパー、石錘、ピエス・エスキュー、打製石斧、磨製石斧、横刃形石器、礫器、磨石・敲石、石皿等がある。他に、軽石製品や石製品、土製品等も出土している。

遺構は51基の土坑が確認され、9～16区及び22～28区の2ヵ所に集中している。また、1～27区では集石が2基検出された。

第2節 遺構

1. 土坑

土坑は合計51基が確認された。これらは9～16区の西側のグループと、22～28区の東側のグループの2つに大きく分けられる。検出面はいずれもⅢ層面であるが、その標高は東側のグループは109m前後であり、西側のグループは111m前後から112m前後である。平面形は円形や楕円形、不整形などさまざまであり、大きさも60cm前後から170cm前後、深さは10cm前後から90cm前後である。遺物も多量に入っているものもあるが、まったくないものもある。



第68図 晩期の遺物出土状況

3, 4号土坑 (第69図)

H-19区に2基切り合って検出されたが、その前後関係ははっきりしない。3号の検出面から102の石皿と96の磨石・敲石が出土した。このことから、土坑の掘り込み面はもう少し上部の可能性も考えられる。102は安山岩を素材とするもので、一部欠損しているが全体を敲打により船形に整形している。磨石は2類に分類されるものであり、平坦面に磨面があり、周縁部にも磨面あるいはつぶれた敲打痕が見られる。

9号土坑 (第70図)

I-10区に当初半分確認して掘り下げたが、後に拡張して全体を掘り下げた。長径175cm、短径129cmのほぼ楕円形を呈している。深さは、78cmで今回調査した土坑の中で最も深い。遺物も、最も多く10~31の土器と、91~93, 97の石器が出土している。10~18は粗製の深鉢である。12は「く」字状になると考えられる胴部から、ゆるやかに外反し口縁部となるもので、胴部径と口縁部径がほぼ同じになるものと考えられる。19~29は精製の浅鉢である。21は床面近くから出土したもので、口縁部と底部が欠損しているが、頸部から底部近くまで比較的残りのよいものである。頸部のくびれ部の直上の断面部分に研磨痕が観察され、破損した口縁部を再生したのと考えられる。肩部から頸部に至る中間部付近の外面にわずかな段を有する。肩部にリボン状の突起を1カ所貼り付ける。底部に近い部分には焼成後の穿孔がある。31は平底の底部から、ほぼ垂直に近く立ち上がり口縁部へとつづくものである。口縁部にはリボン状の突起をもつ。内面の底部付近にわずかに炭化物の付着が認められる。石器は91の磨製石斧片、92, 93の打製石斧、97の磨石・敲石が出土した。床面に近い部分から木炭片が出土している。

29号土坑 (第74図)

H-23区に検出されたもので、長楕円形の形状である。床面の片側の壁寄りに、長径30cm、短径17cm、底径15cm、深さ約15cmのピットを1個もつ。遺物は土器片等が9点出土した。45は粗製の深鉢の口縁部である。肩部は「く」字状になるものと考えられ、頸部のくびれ部の外面にわずかな段をもち、ほぼ直線状に外反し口縁部となる。

34, 35号土坑 (第74, 75図)

H-25区に2基接して検出され、その距離は約35cmである。いずれも平面形は楕円形であり、形態、大きさともに類似しているが、35号がわずかに大きい。また、長軸もほぼ同じ方向である。いずれの土坑からも多くの遺物が出土している。47~52は34号から、53~57, 59は35号から出土した土器である。49は補修孔を持つ粗製の深鉢である。52は丸底、あるいは、わずかな平底と考えられる底部からゆるやかに内彎しながら、内外面ともにわずかな段を持つ口縁部となる精製の浅鉢である。58, 60はそれぞれの土坑内から出土した土器片が第76図に示すような状況で接合した。58は4個の破片が両者で接合し、2個がそれぞれの土坑内で接合し、同一固体と考えられる土器片が6個になったが、これらは接合しない。粗製の深鉢である。頸部でわずかにくびれ、ほぼ直線状に外反し、4カ所でわずかな山形の口縁部となるものである。60はそのほとんどが35号内で接合したものであるが、1点だけ34号のものが接合した。精製の

浅鉢である。わずかな平底から、ほぼ直線状に外反し、口縁端部でわずかに内彎するものである。口縁部にはリボン状の突起とその両側に鱗状突起を組み合わせたものを有する。石器は94の頁岩製の横刃形石器と99の磨石・敲石が34号から、90の頁岩製の石鎌と100の砥石が35号から出土している。

36号土坑（第75図）

H-25区に検出された。長径87cm、短径80cmの円形に近い形状である。深さは約60cmであるが、床面に深さ28cmの不整形のピットを持つ。このピットはⅥ層下部の薩摩層まで掘り込んでいる。遺物等は出土しなかった。

37号土坑（第75図）

I-25区に検出した。検出面での大きさは長径67cm、短径65cmの円形を呈している。検出面からの深さは5cmであるが、実際の掘り込み面は検出面より上部の可能性があり、もう少し深くなるものと考えられる。62は外面はケズリを施し、内面は研磨による粗製の浅鉢である。外面にはススの付着が認められる。

41号土坑（第76図）

I-26区に検出されたが、用地外に延びているため、一部しか調査しなかった。平面形ははっきりしないが、断面形は掘り込み面からすり鉢状に掘り込み、中央部でほぼ垂直に掘り込んでいる。垂直部分の深さは約60cmであり、床面の径は約45cmである。遺物は検出面から床面まで出土している。76は床面より上部から出土した粗製の浅鉢である。口縁部の外面に断面三角形の突帯を一条貼り付ける。口唇部の粘土帯は長めの鱗状の突起の可能性も考えられるが、はっきりしない。外面は条痕後ナデ整形し、内面は研磨している。外面にはススが付着している。

43号土坑（第76図）

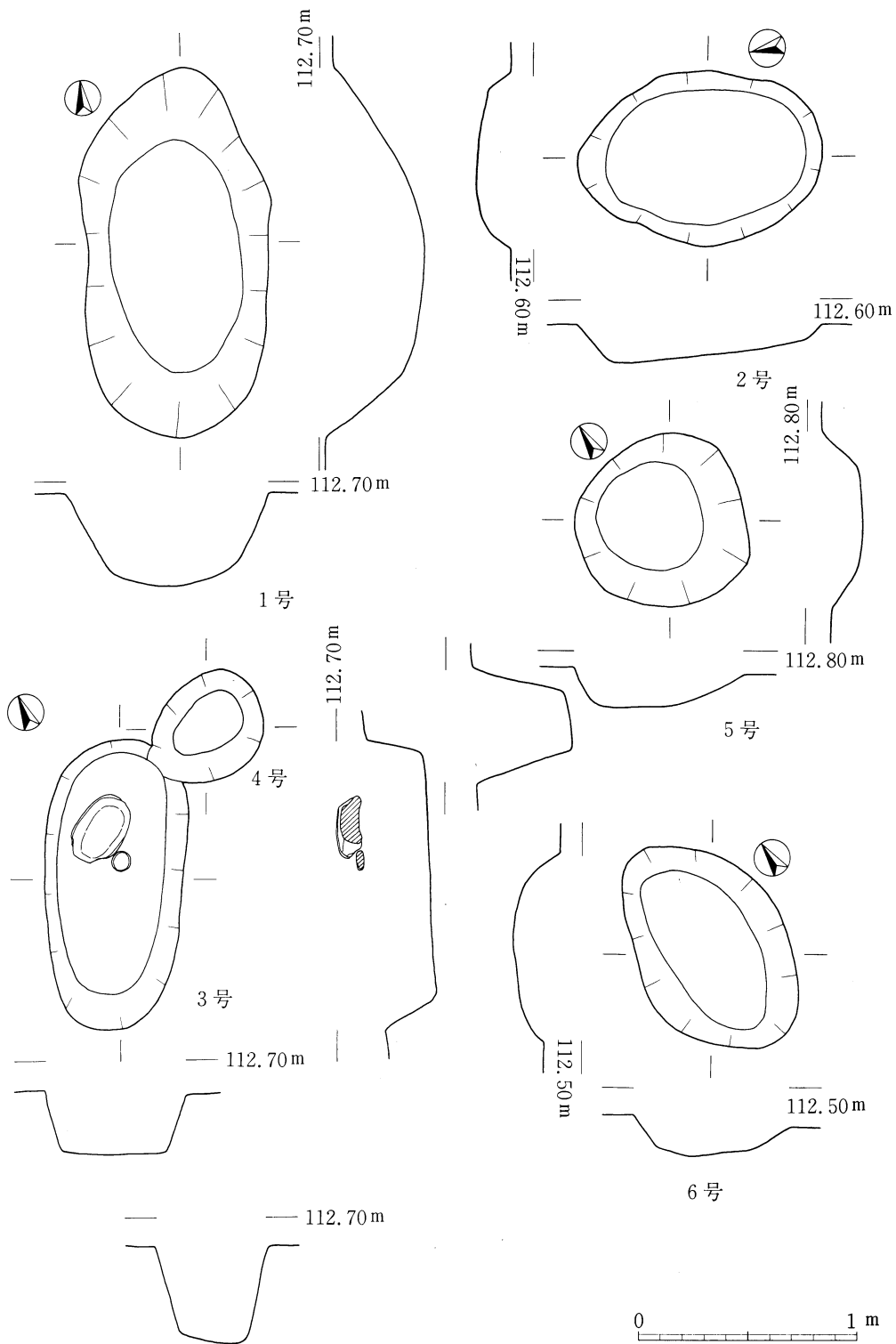
H-26区に検出した。検出面での大きさは長径79cm、短径70cmで、ほぼ円形である。深さは検出面から40cmであるが、実際の深さはもう少し深くなる可能性も考えられる。遺物は土器片、石皿、焼礫等が出土した。103、104の石皿はいずれも安山岩を素材とするものである。104は割れて、バラバラの状態出土したものが接合している。

48号土坑（第77図）

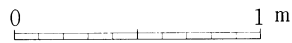
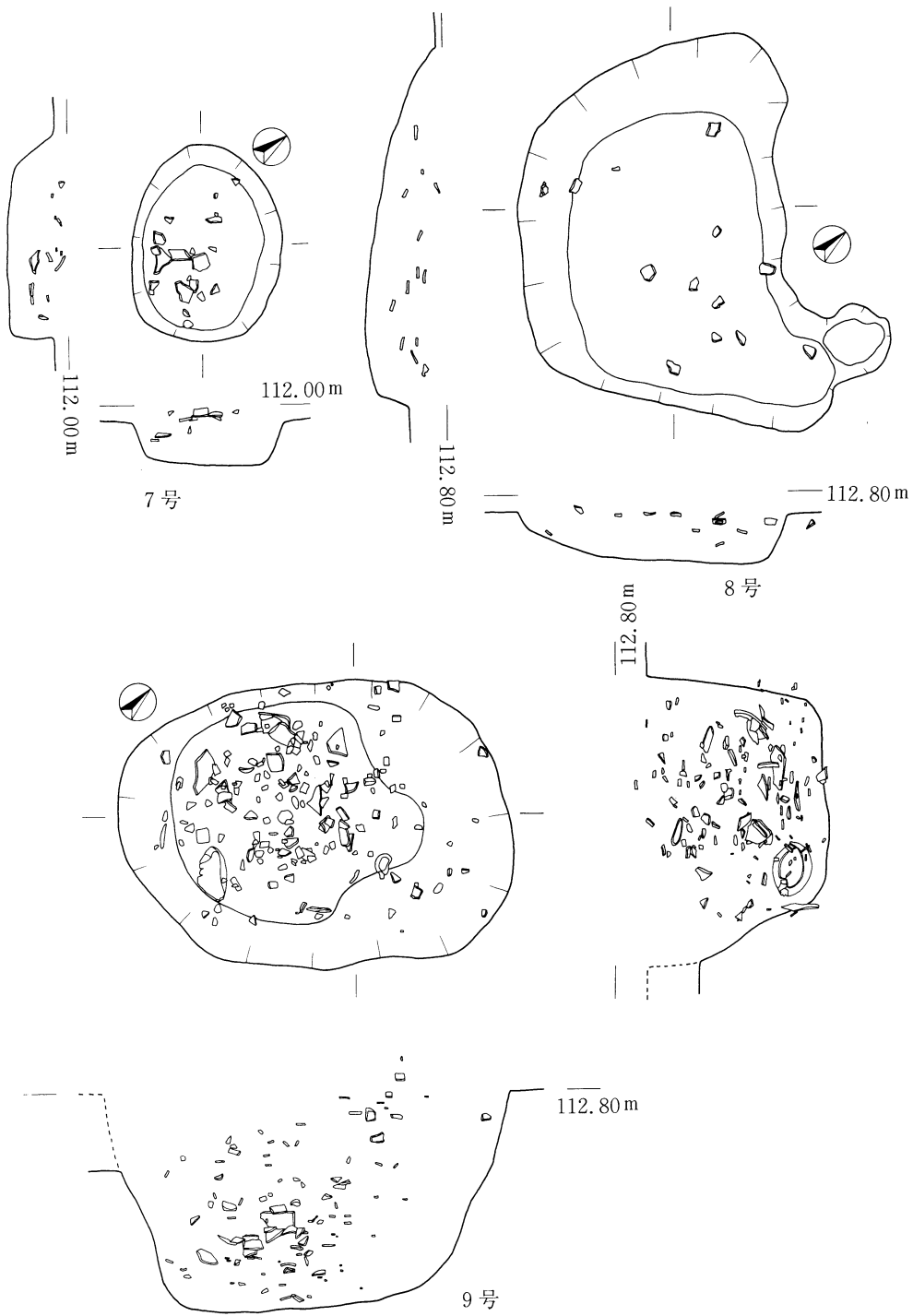
I-28区に検出された。長径85cm、短径61cmの楕円形で、深さは24cmである。多量の木炭片が出土し、その木目は同一方向にそろっており、床面も土が黒っぽいことから、かなりの大きさの木材が入っていたものと考えられる。

50号土坑（第77図）

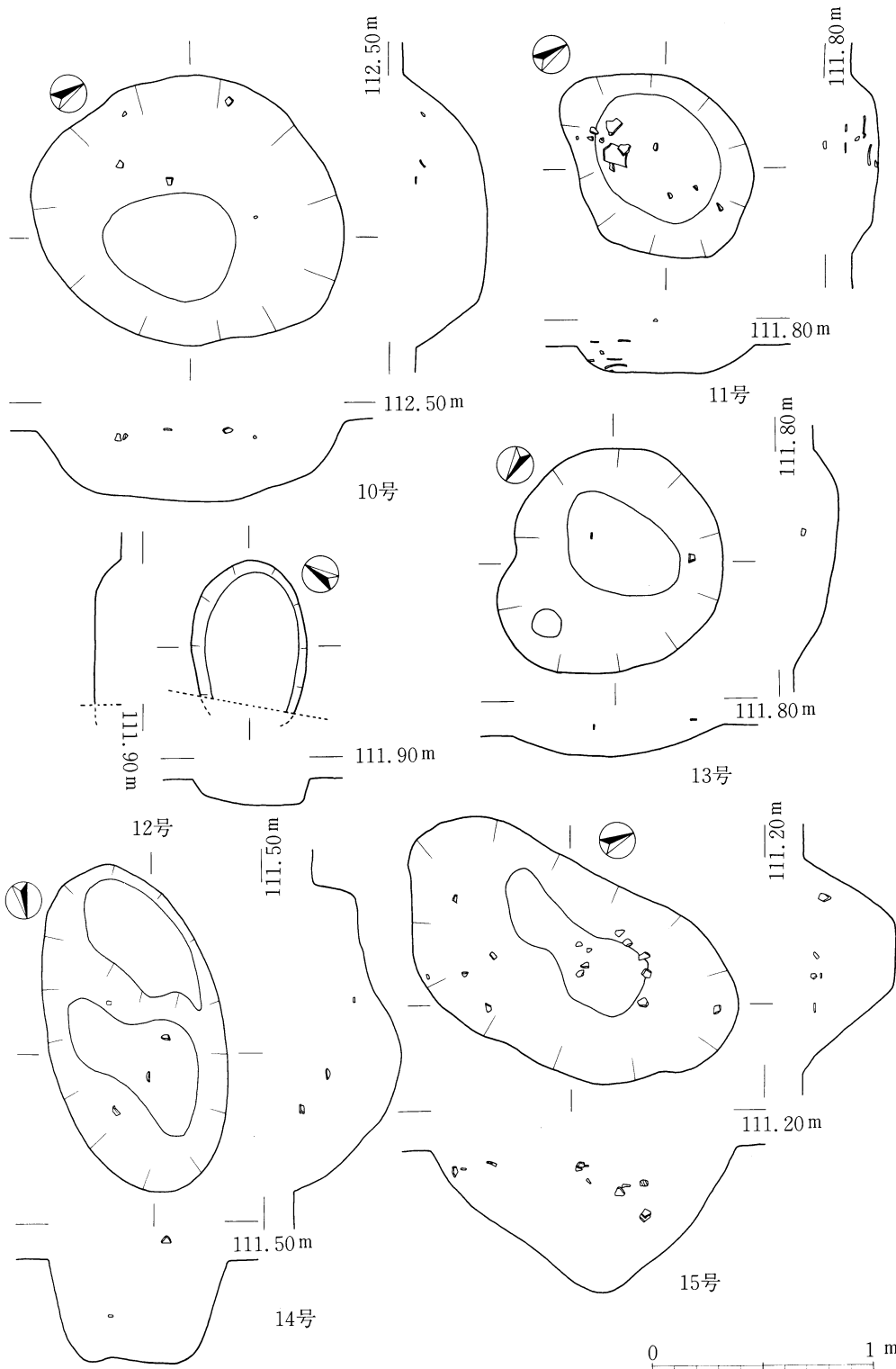
H-28区に検出された。長径78cm、短径64cmの楕円形で、検出面からの深さは5cmである。実際はもう少し深かったものと考えられる。中から25cm前後の円礫と平石が出土し、他に土器の胴部や底部も出土している。



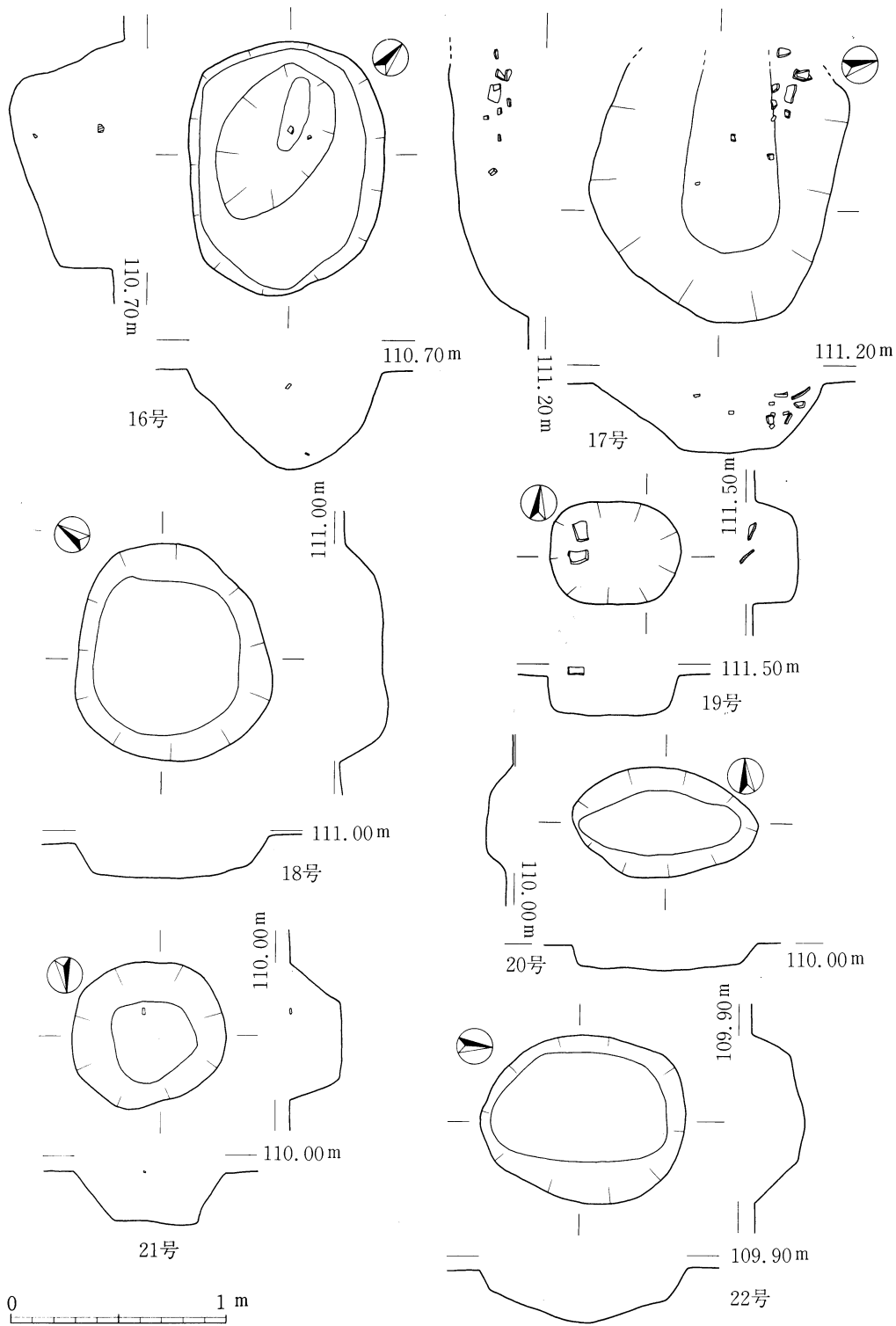
第69図 土坑1～6号



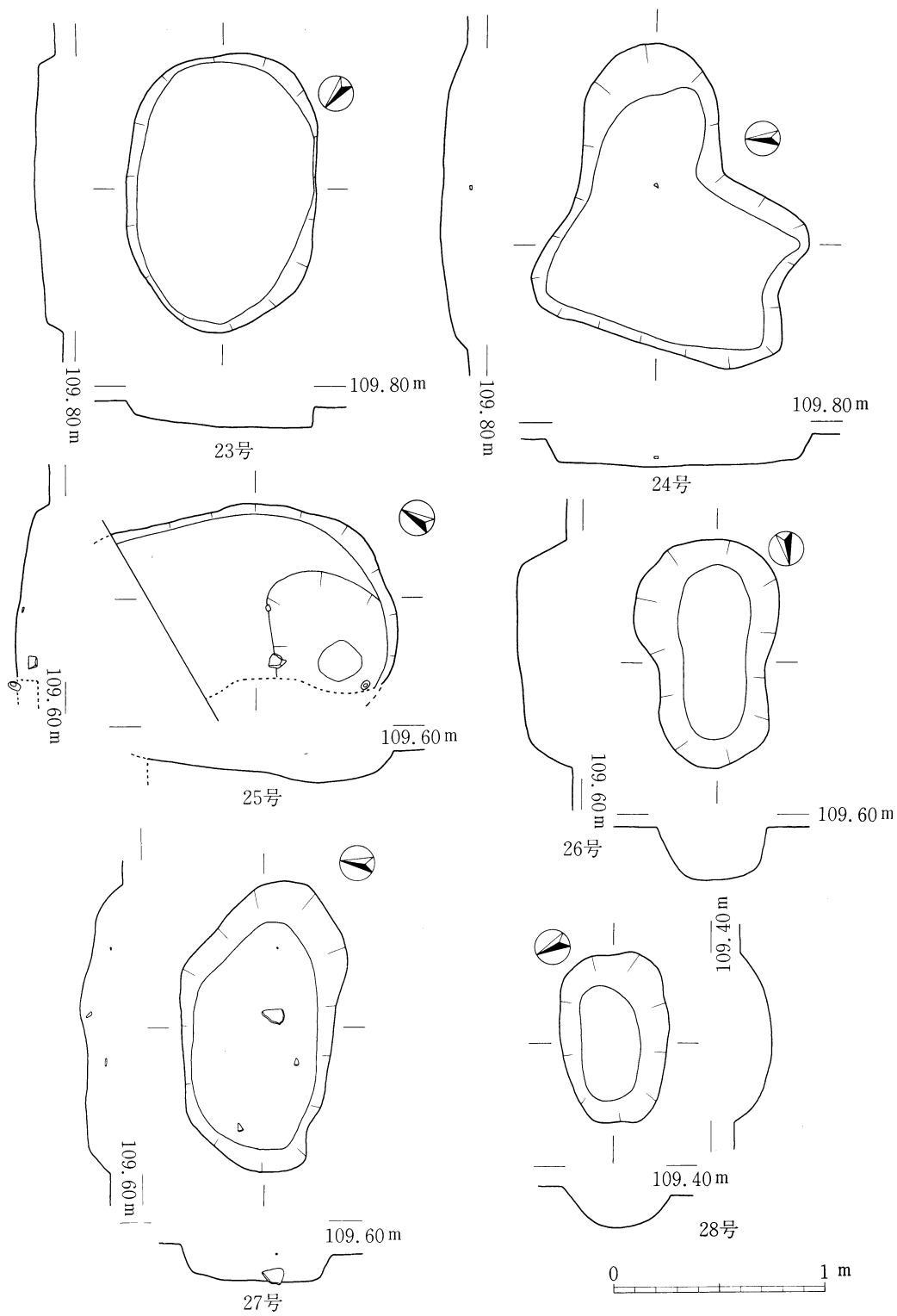
第70図 土坑7~9号



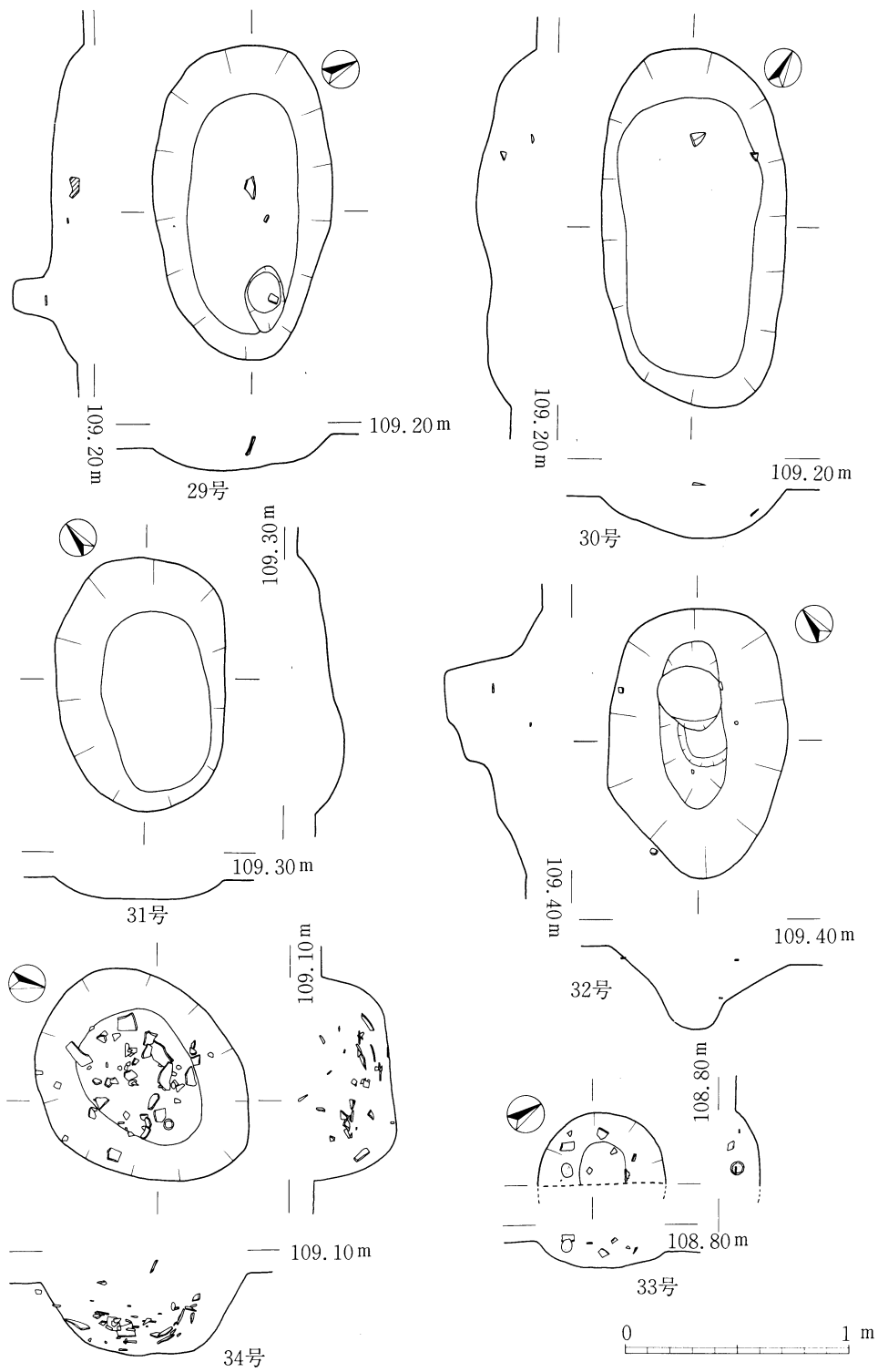
第71图 土坑10~15号



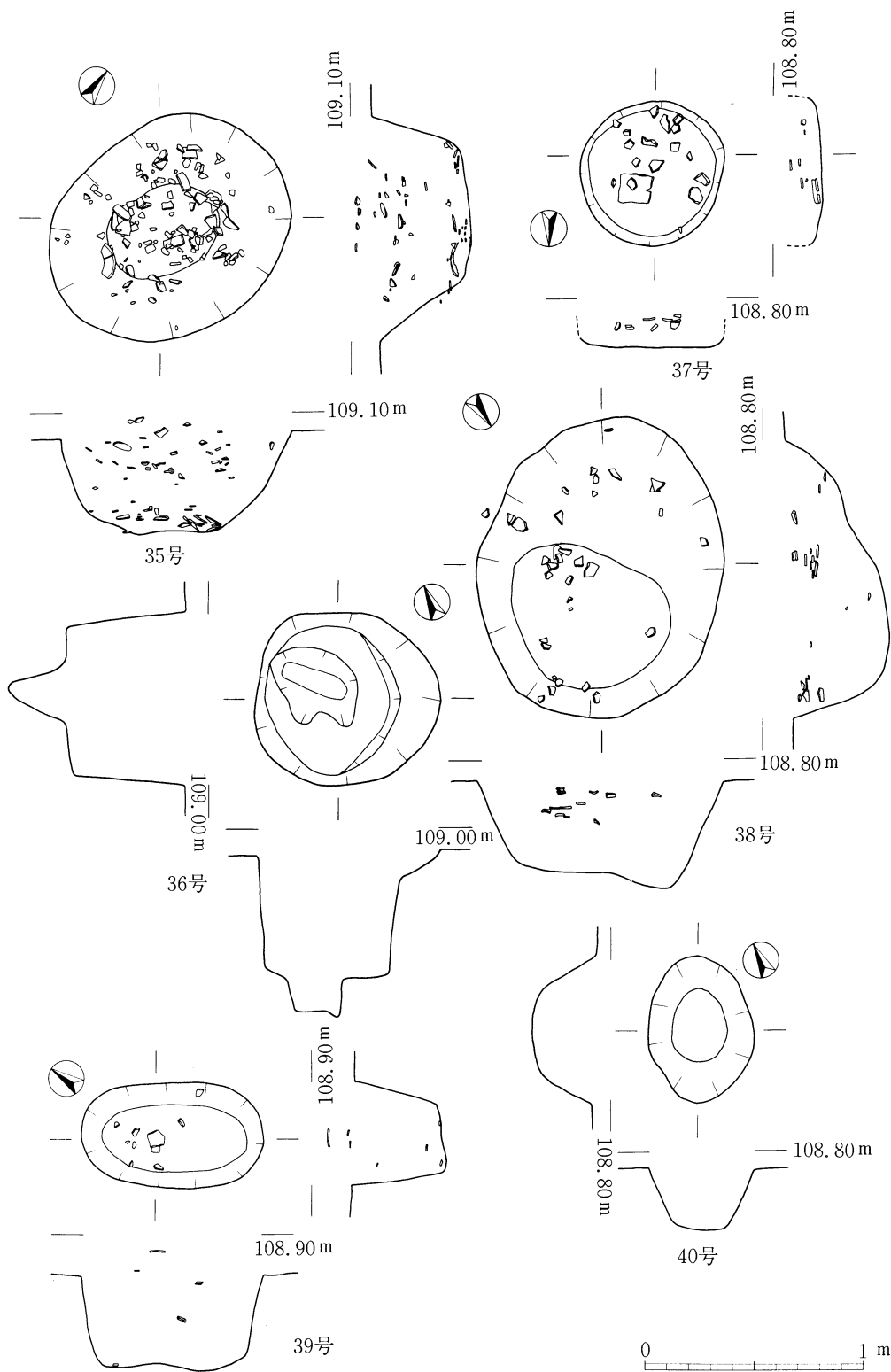
第72图 土坑16~22号



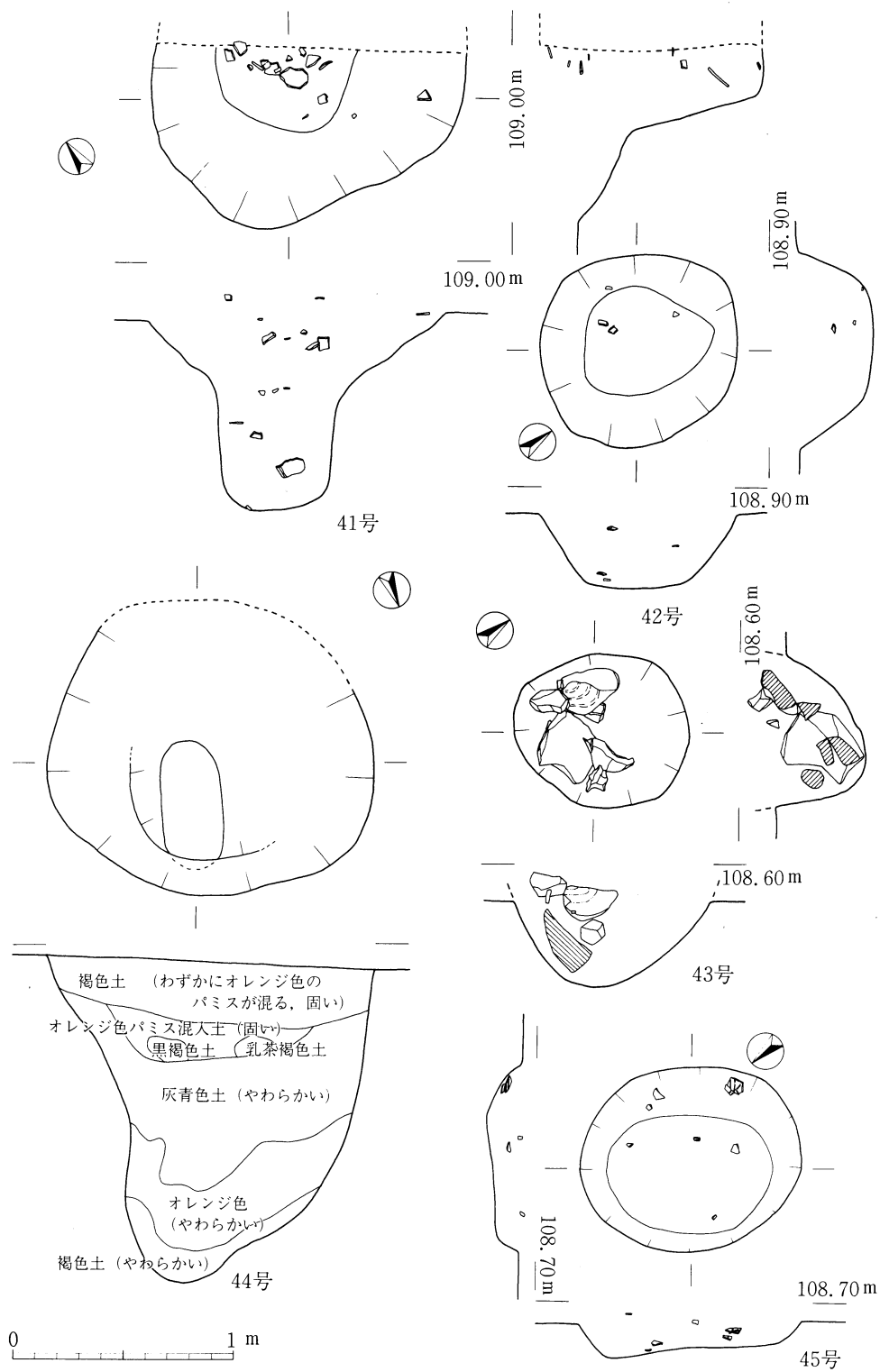
第73图 土坑23~28号



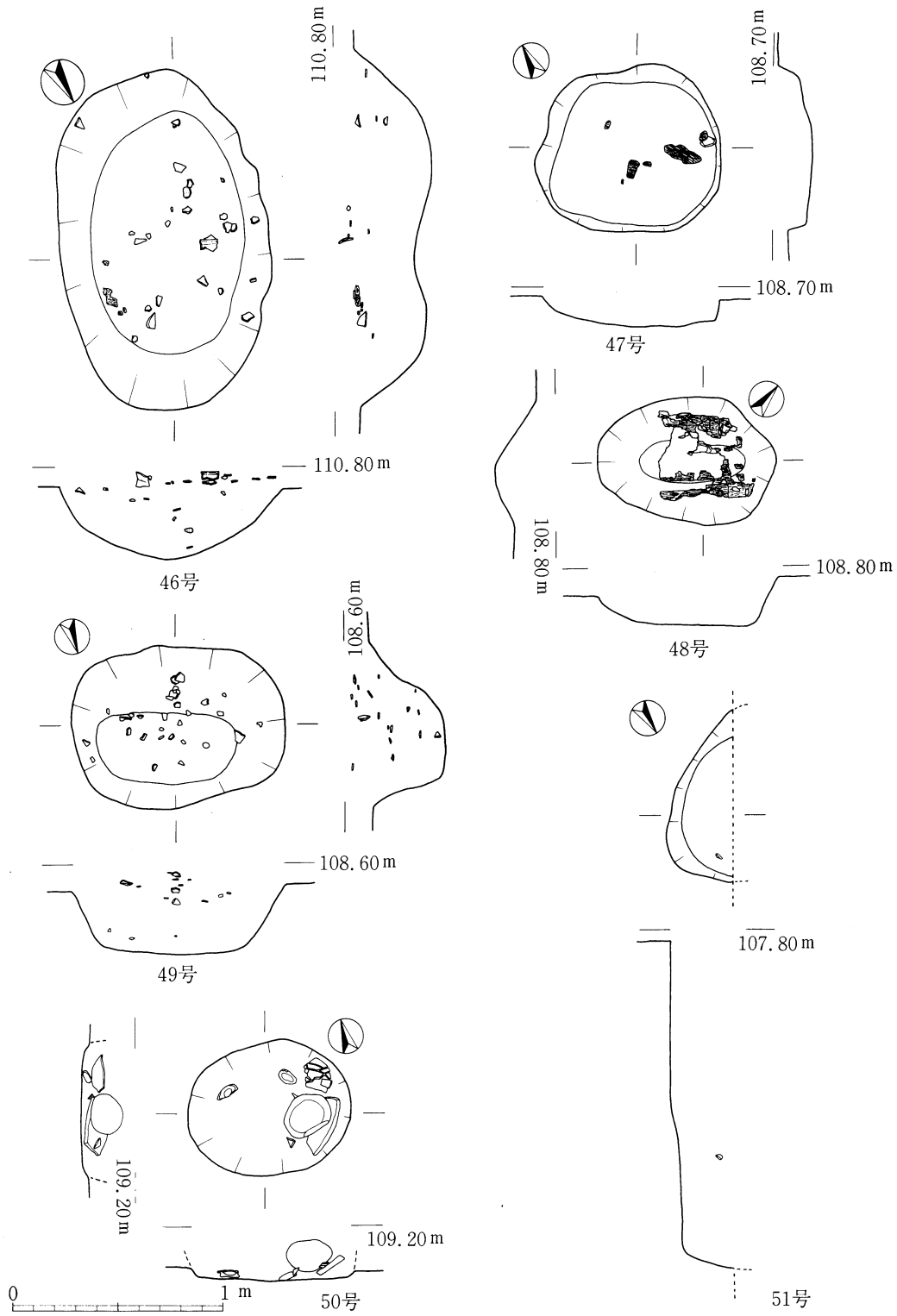
第74図 土坑29~34号



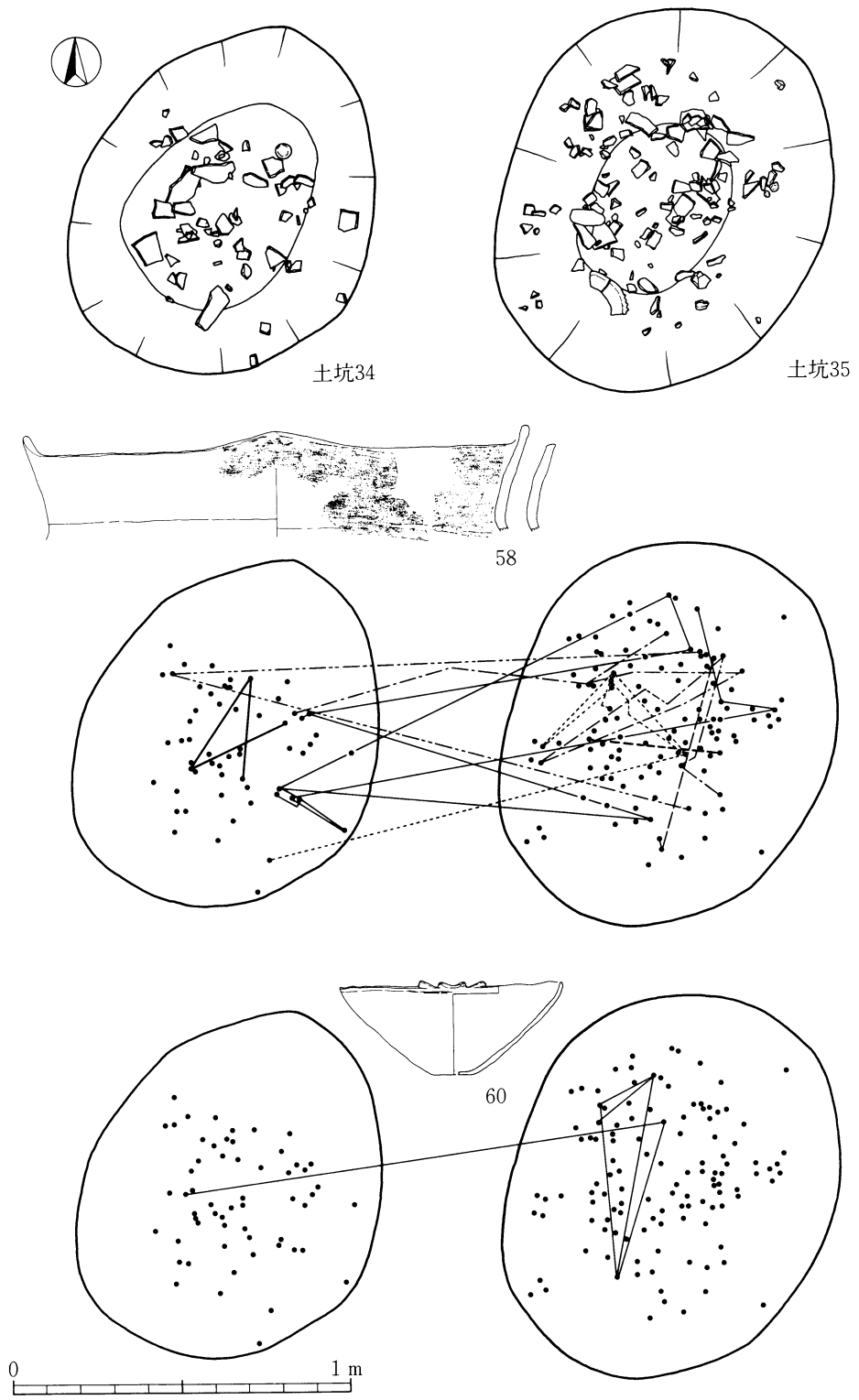
第75图 土坑35~40号



第76図 土坑41~45号



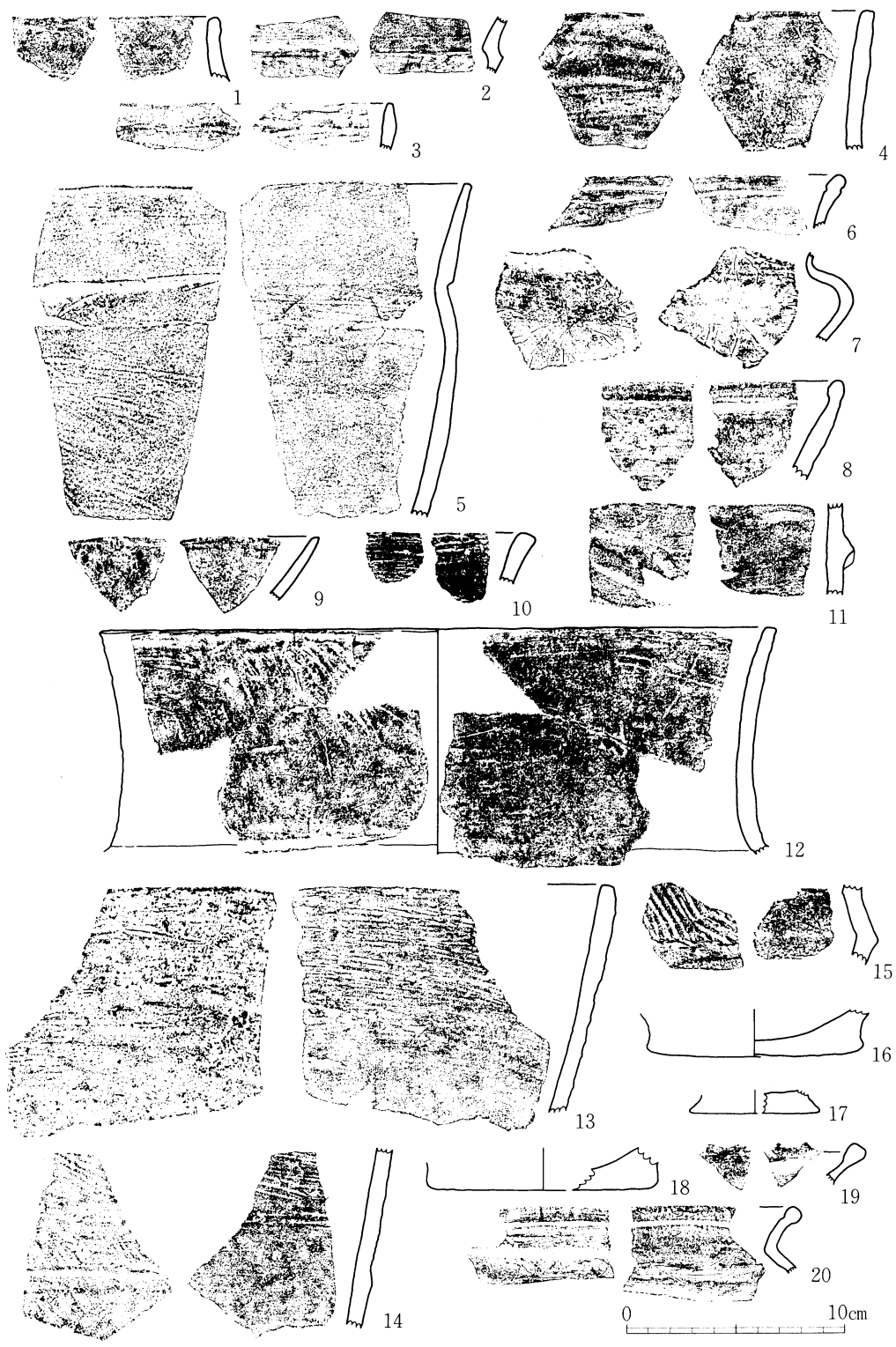
第77图 土坑46~51号



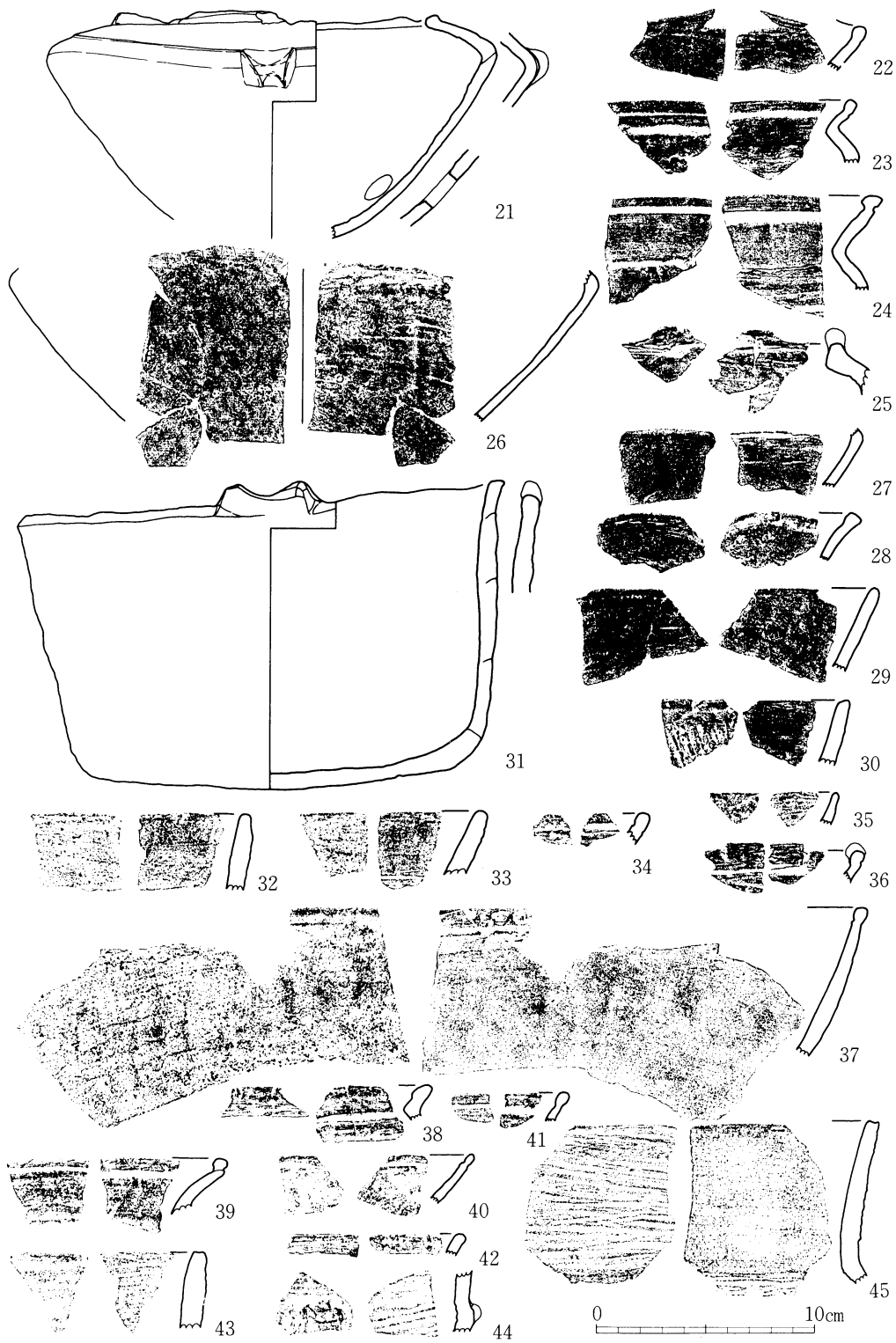
第78图 土坑34, 35号内遗物接合图

第18表 土坑一覧表

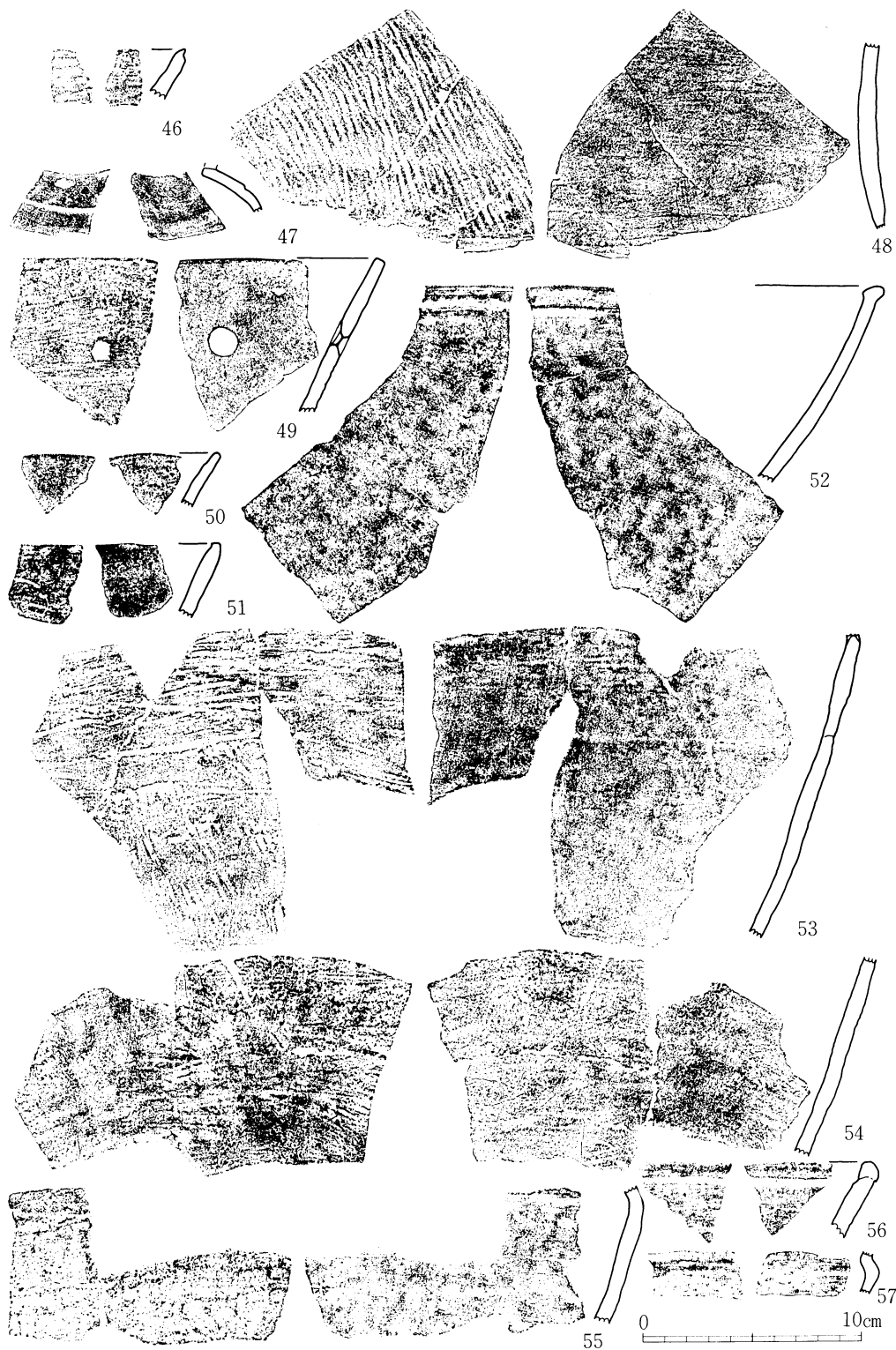
番号	区	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	出土遺物等	備考	旧番号
1	G-9	長楕円形	170	88	44	土器片1 細かい木炭片		19
2	G-9	楕円形	113	82	17	細かい木炭片		20
3	H-9	長楕円形	134	66	27	石皿, 磨石・敲石	4号と切り合い	21
4	H-9	楕円形	(57)	47	44		3号と切り合い	22
5	H-10	円形	80	78	17			18
6	H-10	楕円形	108	73	17	細かい木炭片		23
7	I-11	楕円形	89	67	20	土器片等21		44
8	I-10	不整形	167	120	21	土器片		43
9	I-11	楕円形	175	129	78	土器片等96 木炭片		42
10	I-11	楕円形	146	122	35	土器片等		24
11	H-13	楕円形	101	80	13	土器片, チャート片, 木炭片		36
12	H-13	楕円形?	(75)	53	13	細かい木炭片		40
13	H-13	円形	110	100	14	土器片		39
14	G-13	長楕円形	153	82	45	木炭片少量, 土器片		41
15	J-16	長楕円形	168	90	42	土器片		52
16	G-16	楕円形	120	91	52	土器片		53
17	F-15	楕円形?	(130)	111	32	土器片等11	一部調査区外	46
18	F-16	円形	102	92	22			47
19	E-14	円形	60	48	20	土器片等		45
20	I-22	楕円形	86	52	12			38
21	I-22	円形	72	67	24	土器片		37
22	I-23	円形	96	77	23			35
23	I-23	楕円形	133	90	12			33
24	I-23	不整形	160	135	15	土器片		34
25	H-23	楕円形?	(110)	(85)	(20)	土器片等	一部確認トレンチ	29
26	H-23	楕円形	109	69	25			27
27	H-23	楕円形	139	77	19	土器片3, 礫1		28
28	H-23	隅丸長方形	81	52	18		検出面に木炭片, 焼土	30
29	H-23	長楕円形	142	81	14	土器片等		31
30	H-23	長楕円形	163	84	22	土器片等		32
31	H-23	楕円形	115	77	16			26
32	H-24	楕円形	122	80	41	土器片等5		25
33	H-25	円形?		57	10	土器片等		50
34	H-25	楕円形	107	88	37	土器片等58		7
35	H-25	楕円形	117	95	47	土器片, 石鏃1, 頁岩チップ	細かい木炭片	6
36	H-25	円形	87	80	77			5
37	I-25	円形	(67)	(65)	(5)	土器片等17		12
38	I-26	楕円形	140	113	50	土器片等23		10
39	I-26	楕円形	85	49	44	土器片等9		9
40	I-26	楕円形	68	49	30			16
41	I-26	楕円形?	142	(59)	88	土器片等18	一部調査区外	13
42	I-26	円形	97	90	34	土器片等4		8
43	H-26	円形	(79)	(70)	(40)	石皿, 礫, 土器片		48
44	H-27	円形?	150	(130)	145			2
45	H-27	円形	100	86	16	土器片等8		17
46	I-27	楕円形	163	102	37	土器片等, 木炭片		14
47	H-27	円形?	89	79	13	土器片1, 木炭片6		4
48	I-28	楕円形	85	61	24	木炭片		15
49	I-28	隅丸長方形	102	79	35	土器片等29		11
50	H-28	楕円形	(78)	(64)	(5)	土器片, 円礫, 平石		3
51	I-30	楕円形?	(82)	(32)	(154)	土器片1	一部地層横転	1



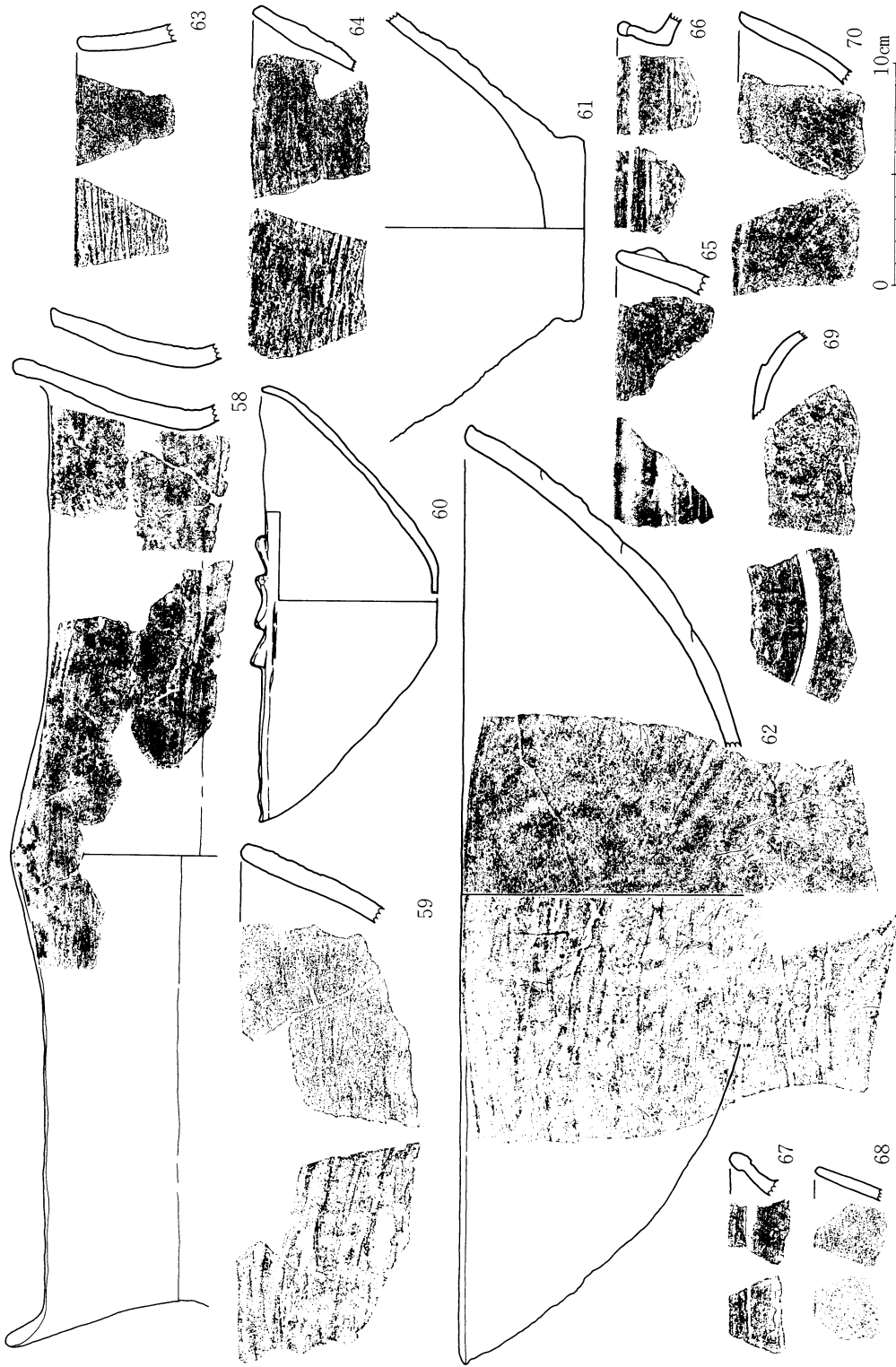
第79图 土坑内出土土器(1)



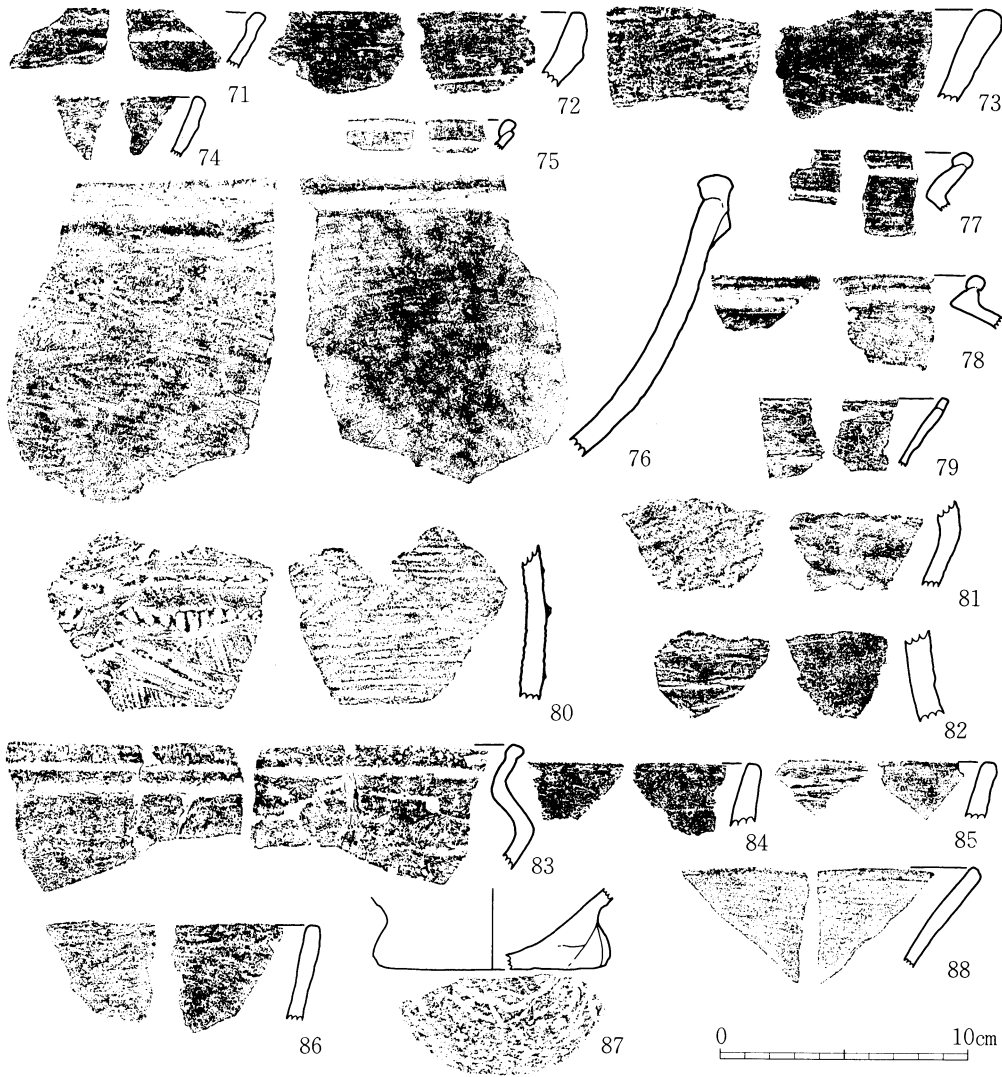
第80图 土坑内出土土器(2)



第81图 土坑内出土土器(3)



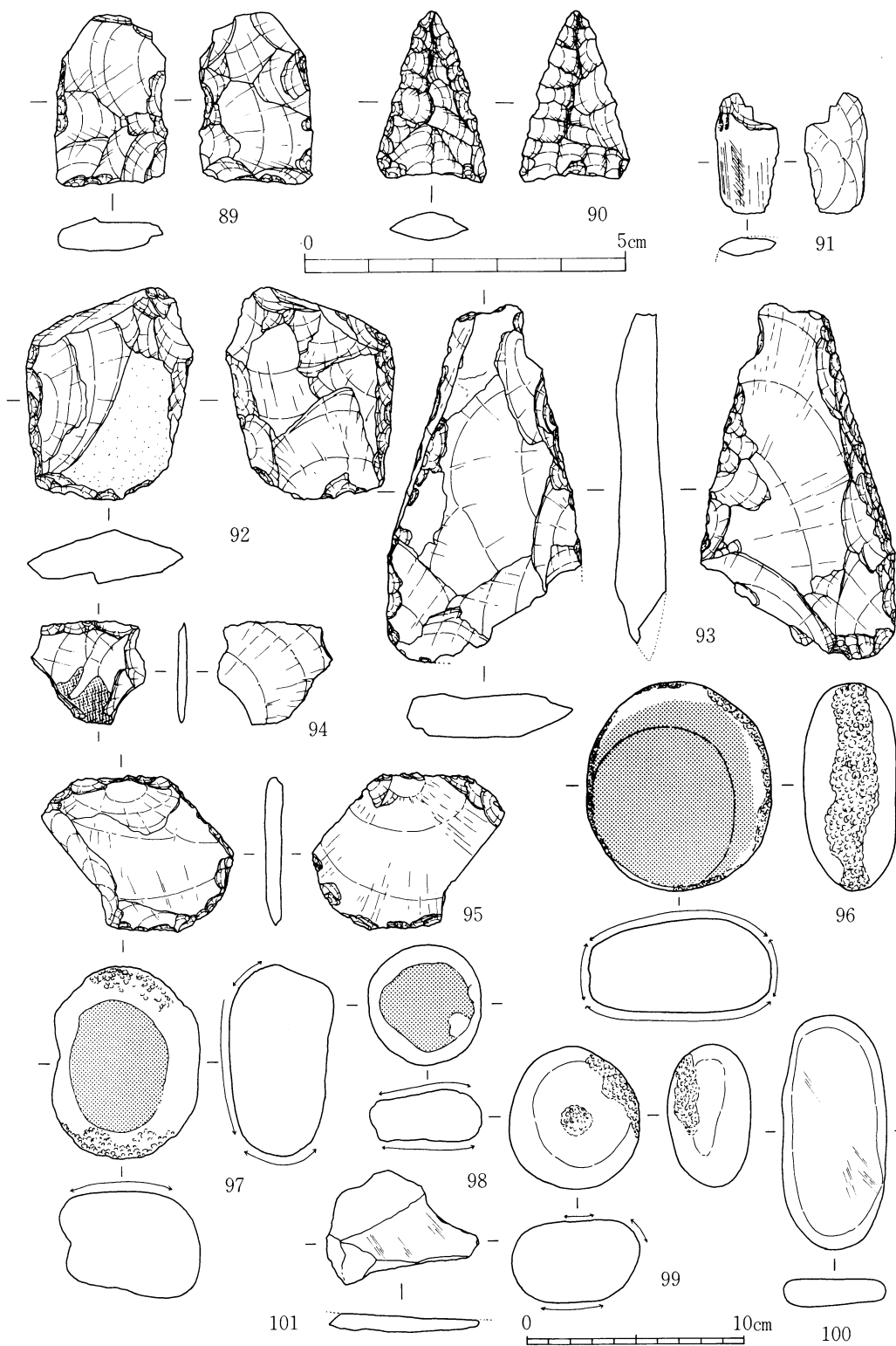
第82图 土坑内出土器(4)



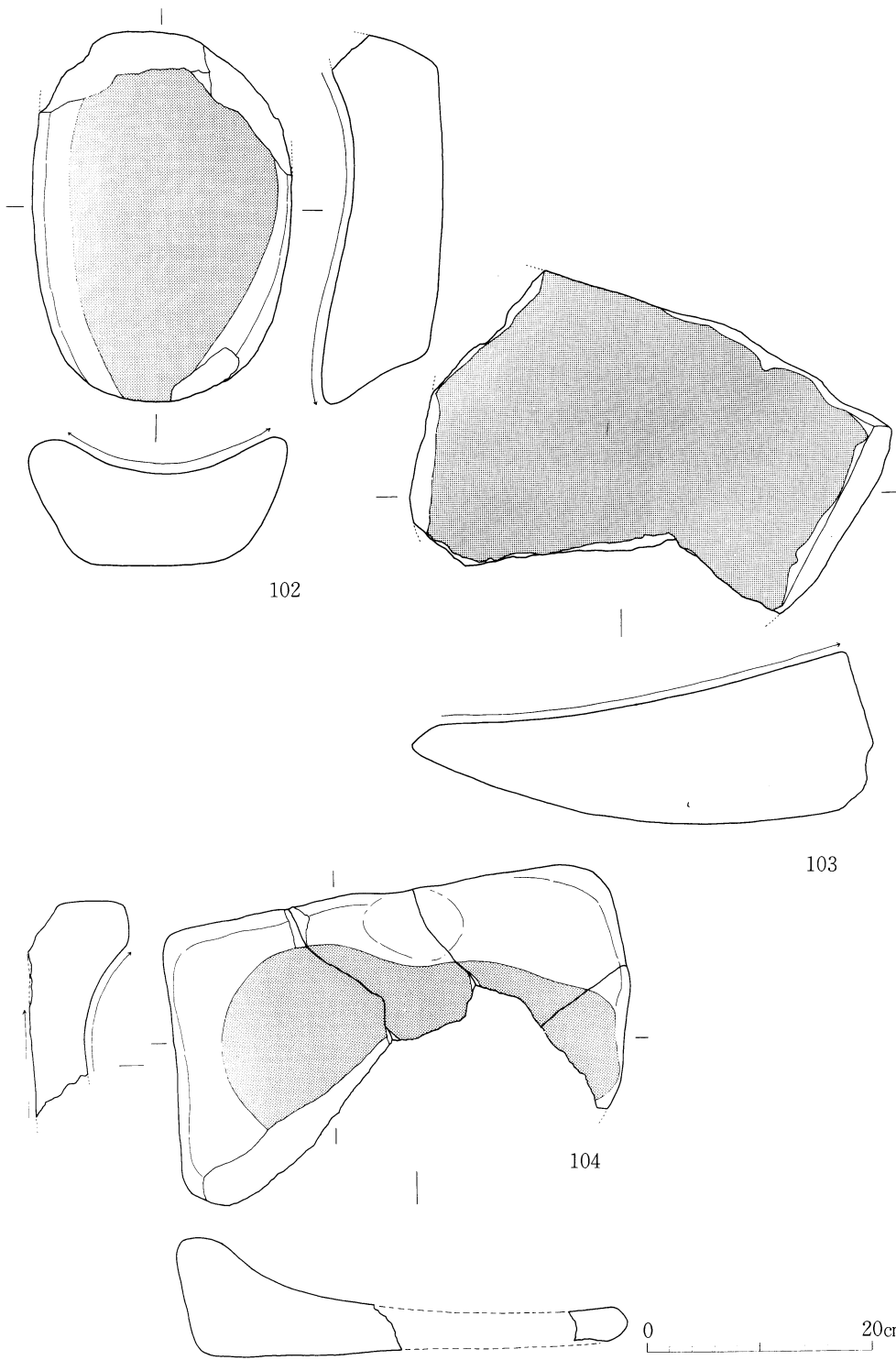
第83図 土坑内出土土器(5)

第20表 土坑出土石器計測表

番号	器種	出土土坑	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	注記番号
89	石 鏃	33	頁岩	2.67	1.77	0.52	3.22	先端部欠損	50-12
90	石 鏃	35	頁岩	2.65	1.68	0.42	1.43		6-60
91	磨製石斧	9	頁岩	5.6	8.5	0.9	13.6	破片	42-155
92	打製石斧	9	頁岩	9.8	7.8	2.45	215	基部欠損	42-180
93	打製石斧	9	頁岩	26.5	9	2.1	368		42-77
94	打製石斧	11	頁岩	4.8	5.3	0.55	14	刃部の破片	36-2
95	横刃形石器	34	頁岩	8.87	7.35	0.87	61	一部欠損	7-1
96	磨石・敲石	3	安山岩	9.7	8.6	4.3	550		15246
97	磨石・敲石	9	花崗岩	8.9	6.9	5	410		42-172
98	磨石・敲石	34	溶結凝灰岩	5.6	5.2	2.4	82		7-49
99	磨石・敲石	33	花崗岩	6.7	6.1	3.9	214	中央に凹み	50-3
100	砥石	35	砂岩	11	4.9	1.3	123	平面に擦痕	6-10
101	砥石	35	砂岩	4.8	5.3	0.6	31		6-10
102	石 皿	3	安山岩	32.4	23.1	11.5	11000		15245
103	石 皿	43	安山岩	42.8	25.6	14	17400		48-9
104	石 皿	43	安山岩	40.4	24.9	10.9	10300		48-4・5・8



第84图 土坑内出土石器(1)



第85図 土坑内出土石器(2)

2. 集石遺構 (第86図)

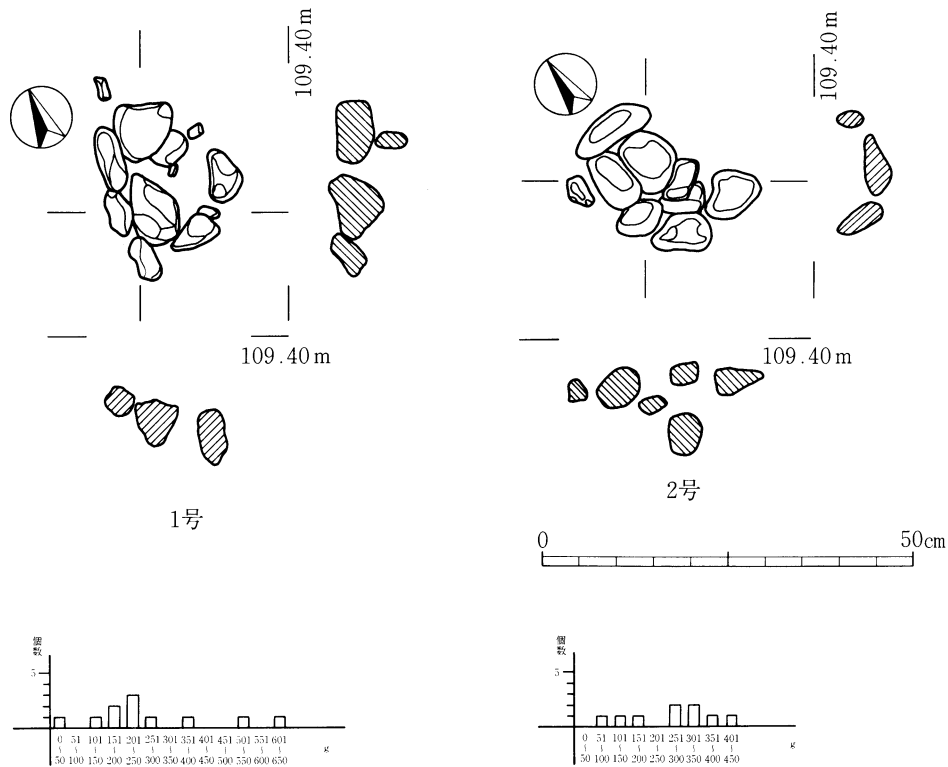
I-27区に2基検出された。いずれもⅢ層中で検出され、その標高はおよそ109.30m前後である。いずれも礫表面の肉眼的観察では火を受けた痕跡は認められない。

1号集石

11個の礫を長径30cm、短径20cmの円形に近い形状に敷きつめたような状態で検出した。中心部にはわずかな空間がある。礫の大きさは長径4cm前後のものから10cm前後のものまであり、形状も一定していない。その重量組成は第86図に示すとおりである。礫の種類は1個が凝灰岩で他はホルンフェルスである。掘り込み等は確認されなかった。

2号集石

9個の礫を長径25cm、短径15cmの長方形に近い形状に敷いたような状態で検出した。礫は5cm前後のものから10cm前後のものまでであるが、10cm程度のものが多い。その重量組成は第86図に示すとおりである。礫の種類は1個が頁岩で他はホルンフェルスである。1号集石と同様に掘り込み等は確認されなかった。



第86図 集石遺構

第3節 出土遺物

1. 土器

調査区域の全体から多量の土器が出土している。土器の出土するⅢ層の暗黄褐色土は、一部に削平や攪乱が見られるものの、ほぼ一定した層の堆積があり、わずかな凹凸はあるものの、ゆるやかに東南方向へ傾斜している。

土器の分布を見てみると調査区のほぼ全域に見られるが、西側及び東側の両端部と中央部の21区近辺は、その密度が薄くなる傾向が見られる。中央部付近は牧草保存用のサイロ等の建設のため、攪乱を受けており、明確な分布状況を把握することは困難であるが、深鉢の底部と浅鉢の口縁部の分布図を見てみると、9～15区周辺と、27区周辺の2ヵ所に、大きく分布が分かれる傾向が見られるようである。

土器は粗製土器と精製土器とに分けられ、それぞれに深鉢、浅鉢があるが、精製の深鉢としたものは極端に少ない。以下、類別ごとに説明していく。

A類（第92図105～第94図156）

口縁部に、断面三角形あるいは台形状に近い形状の突帯を1条貼り付ける粗製の深鉢である。突帯が口縁直下に付くもの（105～129）と、口縁端部に付くもの（130～156）とがある。全体の器形を明らかにできる破片はないが、口縁部はいくつかの形態に分かれる。直線的に外傾するもの（105, 109～117, 140～148等）、外反するもの（107, 108, 130～133等）、直行するもの（118, 119, 122～124等）、内彎あるいは内傾するもの（126, 129等）等である。これらのうち、内傾するものは次のB類と器形的に類似するものもある。

B類（第95図160～第98図173）

胴部が「く」字状、もしくはそれに近い形状に張り、内傾あるいは内彎する口縁部へと続く粗製の深鉢である。口縁部に幅広の突帯を張り付けるもの（B-I：160～166）と突帯の付かないもの（B-II：168～173）とがある。

C類（第98図174～第107図237）

口縁部が外反し、胴部が「く」字状、あるいはそれに近い形状に張る粗製の深鉢である。胴部から外反する口縁部へと続くもの（C-I：174～191）、胴部が「く」字状に張り、頸部で屈曲し、直線状に外傾する口縁部となるもの（C-II：197, 198）、胴部が「く」字状に張り、口縁部が外傾、あるいは外反する点は前2者と同様であるが、頸部外面に削り出しあるいは板状の工具によると考えられるわずかな段を持つもの（C-III：202～237）がある。177は内外面ともに条痕が見られるが、胴部最大径の部分の内面は指頭状のものにより、ナデ消しており、口縁部側にはわずかな稜線が見られる。口縁部にはリボン状の突起を2個相接して付けており、その部分は口唇部との間に隙間がある。

D類（第107図238～第109図272）

口縁部が外傾あるいは、外反する粗製の深鉢である。全体の器形が明らかでないため、中には前のC類に含まれる土器も存在するものと考えられる。269～272は口縁部が山形になる。

E類（第110図273～281）

口縁部が内彎する粗製の深鉢である。この類の土器の中には先のB類に含まれるものが存在する可能性も考えられる。

F類（第112図287～297）

有文の粗製深鉢である。ヘラ状工具による沈線文や、やや太めの凹線文がある。いずれも小破片で、胴部片が多いため、全体の器形等は明らかでない。

粗製深鉢の底部（第112図298～第114図384）

ほとんどが底面が外側へ張り出すものであり、円盤貼り付けのものも見られる。平底（298～356）と上げ底（377～384）に大きく分けられるが、わずかに上げ底ぎみのもの（355, 357～376）も見られる。この上げ底ぎみのものの中には、底面の中央部をヘラ状の工具で研磨しているもの（361, 364, 373, 375）が見られる。底面内側は平坦なもの（326～348, 359, 360等）、丸みをおびるもの（298～322, 349～351等）がある。

G類（第115図385～390）

胴部が「く」字状に張り、頸部で屈曲し、外反もしくは外傾する口縁部となる粗製の浅鉢である。390の外面には明瞭に条痕が残る。388～391は外面に赤色顔料が付着している。

H類（第115図392～第130図514）

粗製の浅鉢で、丸底あるいはわずかな平底と考えられる底部から、口縁部へと続くものである。底部からゆるやかに立ち上がり、そのまま外傾あるいは外反する口縁部となるもの（H-I：392～461）。底部からゆるやかに立ち上がり、頸部付近でわずかに屈曲し、わずかな稜をもち口縁部へと続くもの（H-II：462～475）。口縁端部を肥厚させたり、口縁部の内面あるいは外面、または両面に沈線を有するもの（H-III：476～511, 514）。口縁部外面に、断面が三角形の突帯を貼り付けるもの（H-IV：512～513）等に分けられる。また、397, 398, 411, 412のように45～50cm前後の大型のものや、434, 453のように15～20cm前後のものもある。外面の調整は、ナデあるいは条痕が多いが、397, 398, 415, 510等のようにケズリにより調整されたものもある。内面はナデまたは研磨により調整されている。

I類（第131図522～524）

精製の深鉢としたものである。522に代表される。底部の形状は明らかでないが、丸く張る胴部から頸部でしまり、口縁部は外反する。口縁部には内外面ともに沈線を施す。

J類（第131図525～534）

精製の浅鉢である。胴部が張り、頸部で屈曲し、外反する口縁部となるもので、最大径は口縁部にある。529, 531～534は山形の口縁部である。

K類（第131図535～第133図580）

精製の浅鉢で、胴部が「く」字状に張り稜をもち、頸部で屈曲し、外反する口縁部となるものである。口縁部は内外面ともに沈線をもつものが多い。535～537, 541, 545等は口縁端部がわずかに立ち上がり、さらに細分の可能性もある。

L類（第134図581～第137図633）

精製の浅鉢で、丸底の底部から、胴部が丸く張り、頸部で屈曲し、外反する口縁部となるもので最大径を胴部にもつ。口縁部はその内外面に沈線を施すものがそのほとんどである。602, 629はリボン状の突起の両側に鱗状の突起を付けるものである。胴部の形態や口縁部の形態、特に口縁端部の形態によってはさらに細分の可能性をもつものである。

M類（第138図634～第140図660）

前のL類と類似するが、口縁部がL類に比較して短いものである。口縁部に沈線を施さないもの（634～638）と、施すもの（639～660）とがある。

N類（第140図661, 662）

底部から直線状に伸びる胴部が「く」字状に張り、明確な稜線をもち、頸部で屈曲し、外反する口縁部となるものである。661は口縁部内外面に沈線を施すが、662は沈線を施さない。

O類（第140図663～666）

底部、口縁部の形態は明らかでないが、肩部外面にわずかな段を有するものである。

P類（第141図676, 677）

底部、口縁部の形態は明らかでないが、胴部がわずかに外反し、「く」字状に張り、頸部で屈曲し、口縁部となるものと考えられるものである。676は内外面ともに赤色顔料が付着している。

Q類（第141図678～680）

胴部がわずかに張り、口縁部はわずかに外反するものである。

R類（第141図681, 682）

口縁部が内彎するものである。

S類（第141図683～687）

底部の形態は明らかでないが、丸く張る胴部から、わずかに立ち上がる口縁部へと続くものである。口縁部は、内外面あるいは片面に沈線を施す。685, 687は胴部にも沈線を施す。

T類（第141図688～第143図720）

底部からゆるやかに立ち上がり、口縁部へと続くものである。口縁部に沈線を施すもの（T-I：703～720）と、施さないもの（T-II：688～702）がある。口縁部の形態には外反するもの、直行するもの、内彎するものなどがある。

U類（第143図725～727）

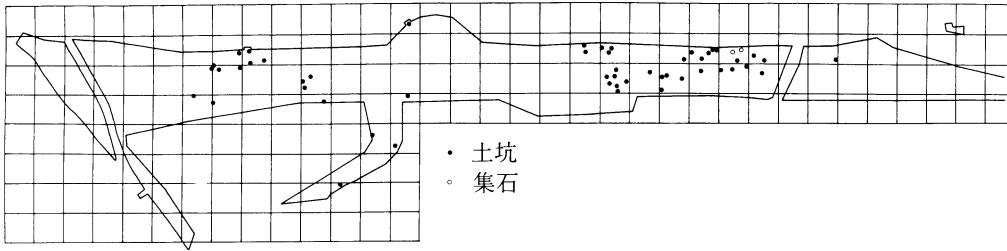
孔列土器である。725, 726はB-I類の器形に類似し、727はH-I類の器形である。

V類（第143図728～732）

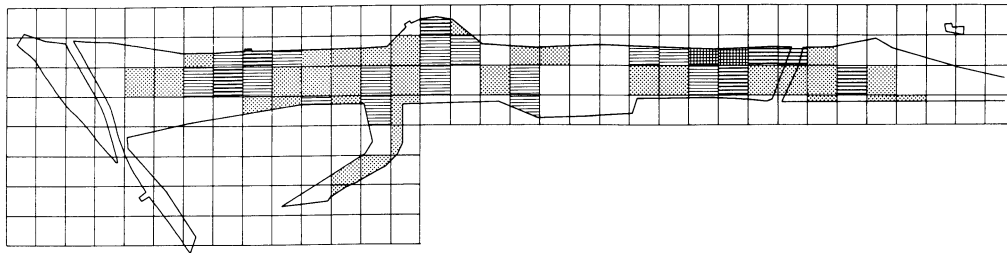
組織痕土器である。網目状のもの（728～729）と、蓆目状のもの（730～732）がある。

667～671はL類もしくはM類の肩部から頸部にかけての破片であるが、頸部直上の断面を研磨しており、口縁部を再生したものと考えられるものである。

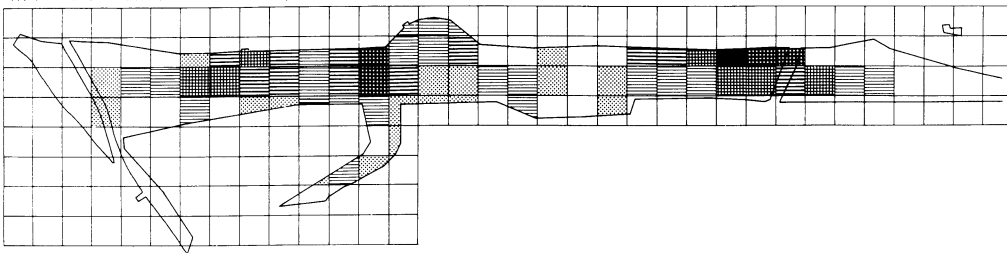
遺構配置図



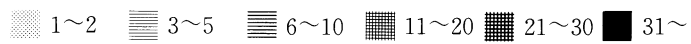
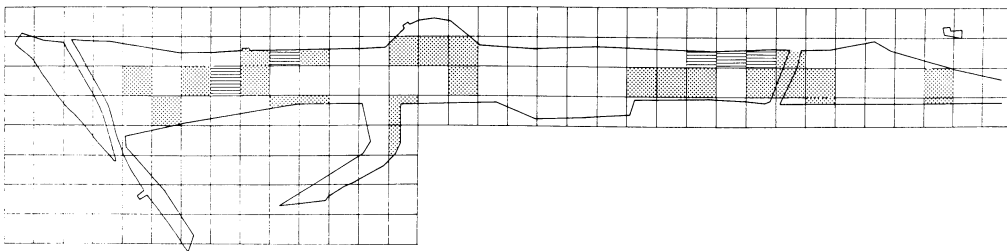
粗製深鉢底部



精製浅鉢口縁部 (K~M類)

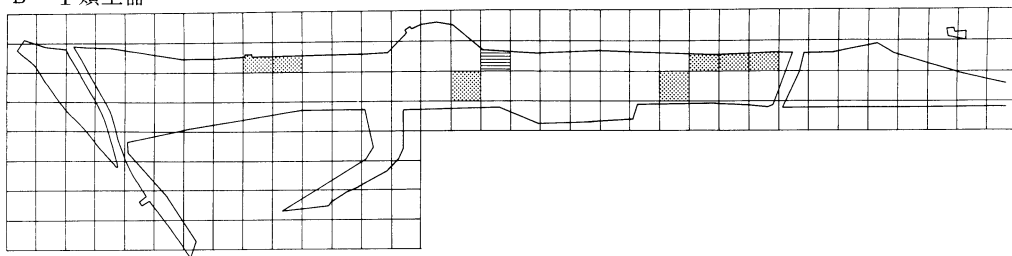


A類土器

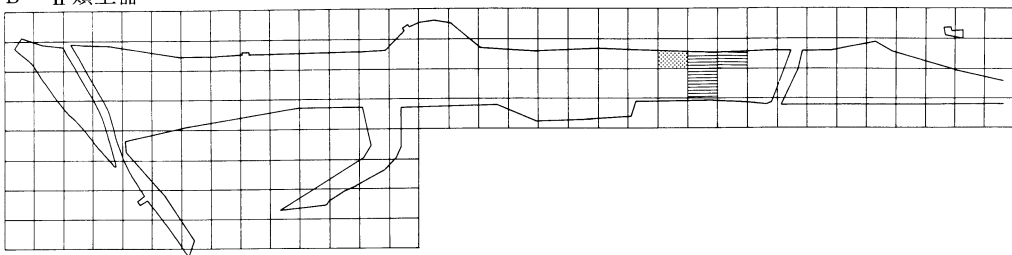


第87図 Ⅲ層出土土器分布図(1)

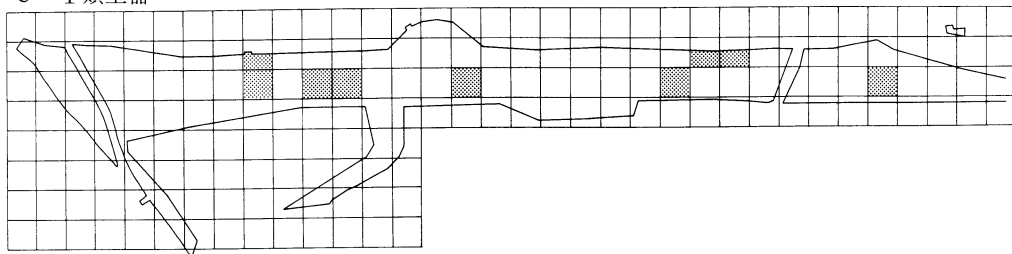
B-I 類土器



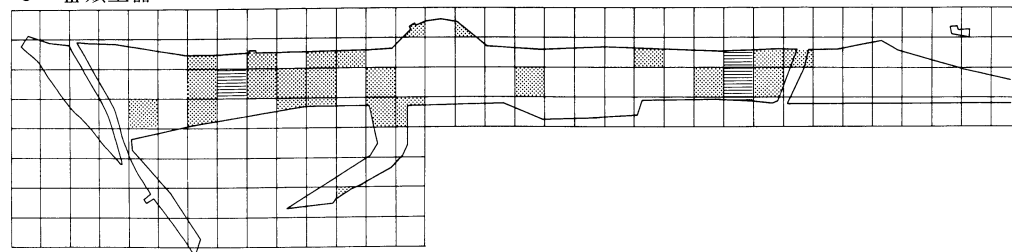
B-II 類土器



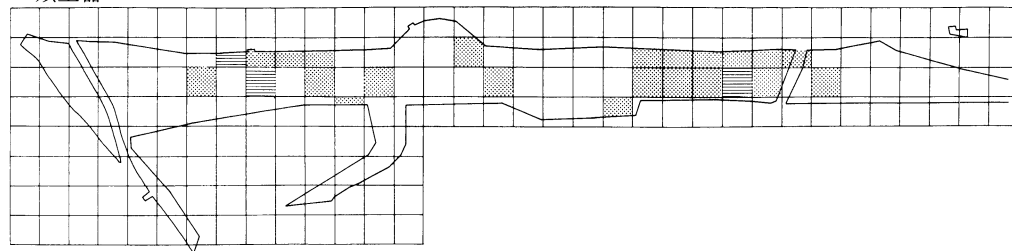
C-I 類土器



C-III 類土器



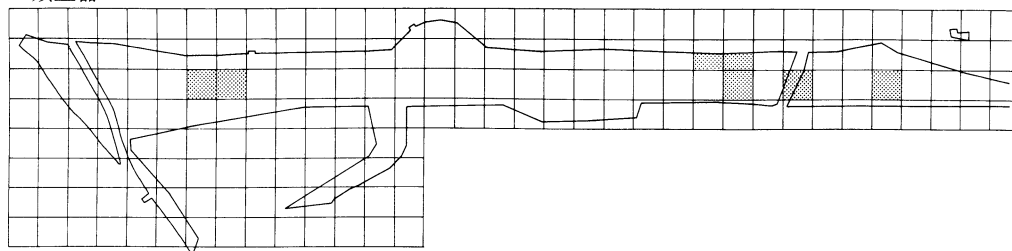
D 類土器



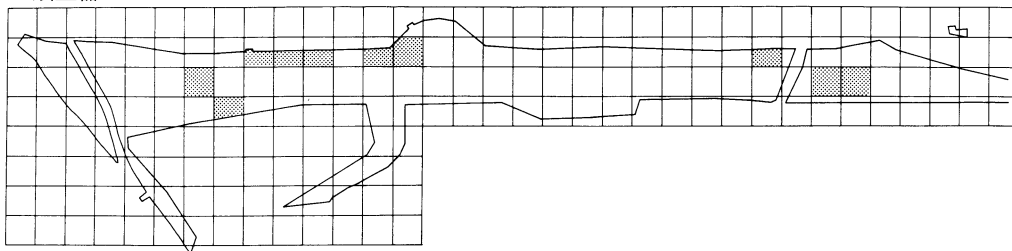
1~2
 3~5
 6~10
 11~20
 21~30
 31~

第88図 Ⅲ層出土土器分布図(2)

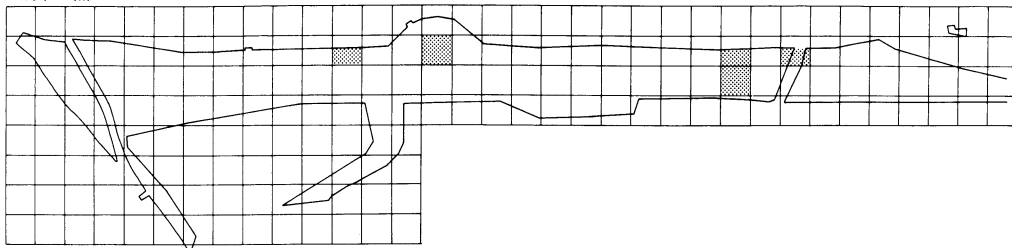
E類土器



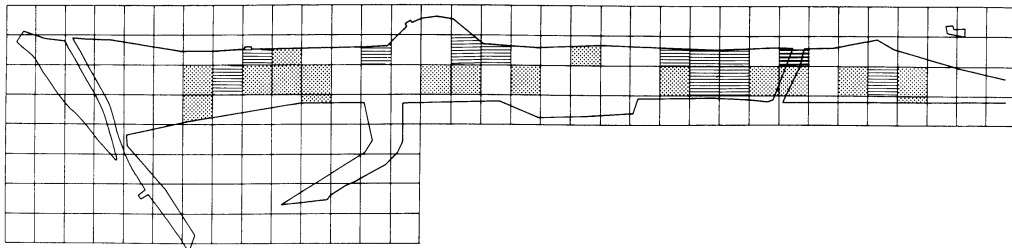
F類土器



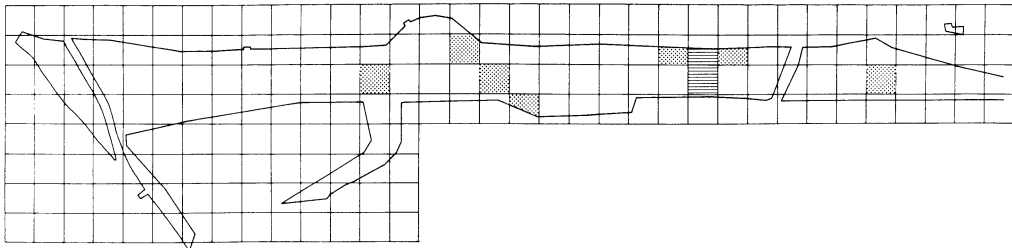
G類土器



H-I類土器



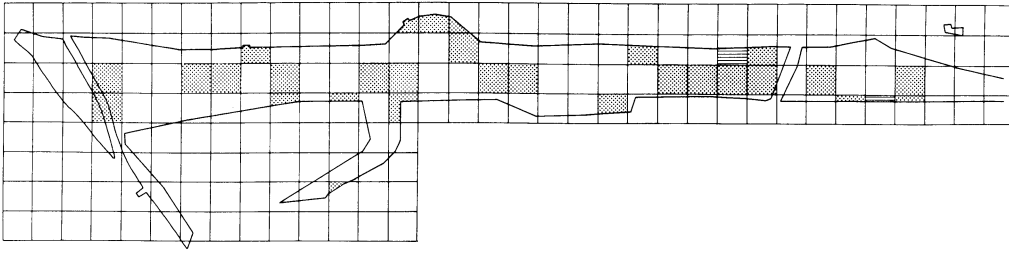
H-II類土器



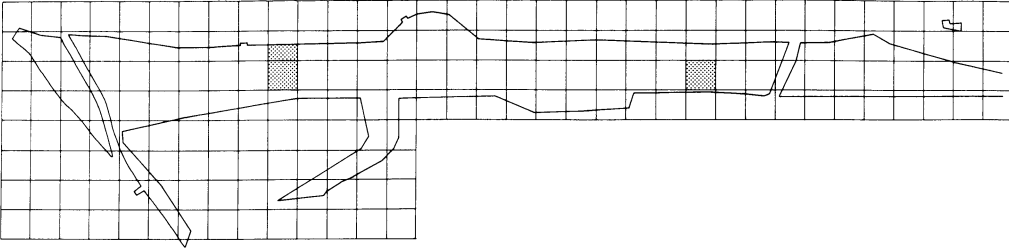
1~2
 3~5
 6~10
 11~20
 21~30
 31~

第89図 Ⅲ層出土土器分布図(3)

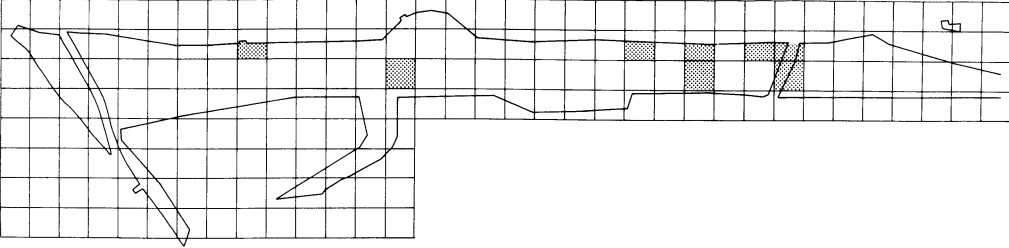
H-III類土器



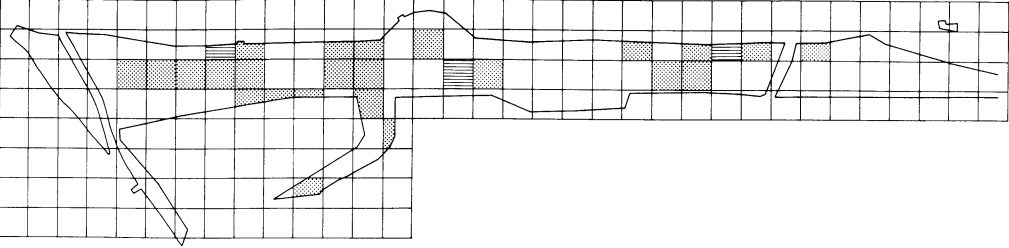
I類土器



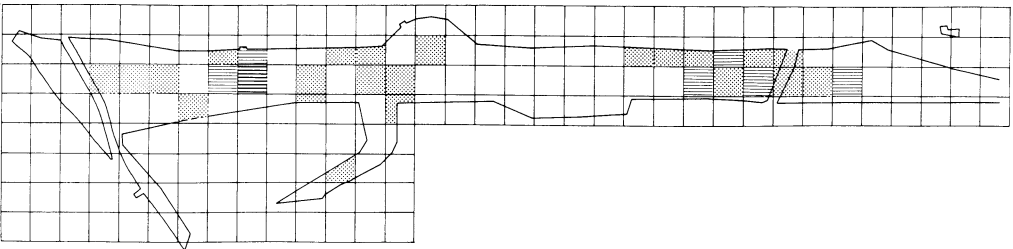
J類土器



K類土器



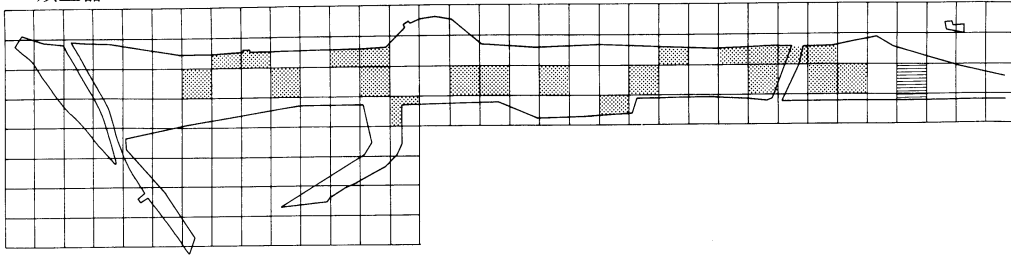
L類土器



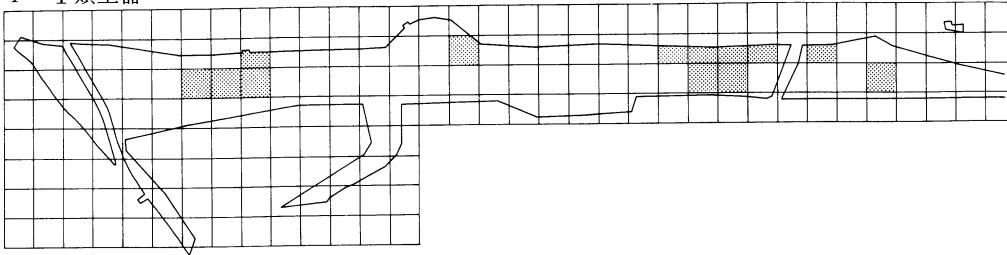
1~2
 3~5
 6~10
 11~20
 21~30
 31~

第90図 III層出土土器分布図(4)

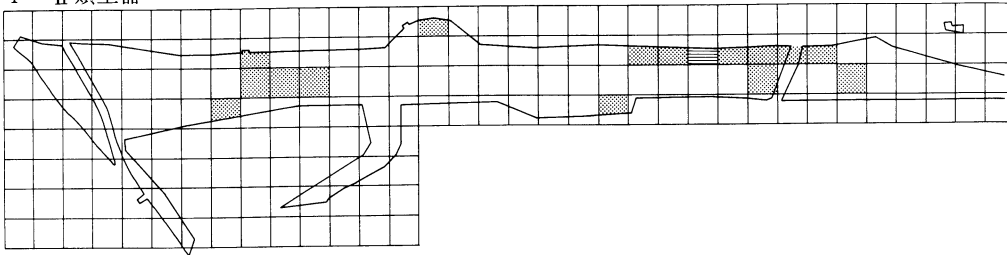
M類土器



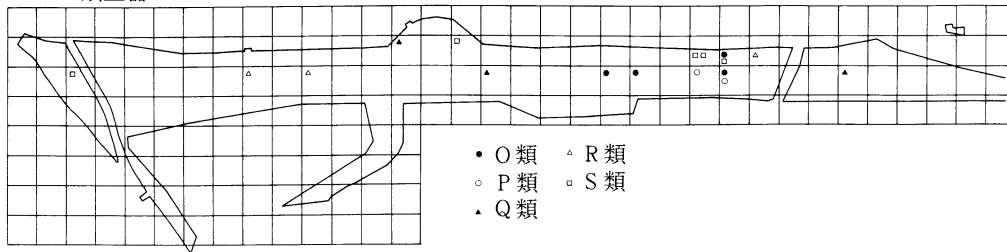
T-I類土器



T-II類土器

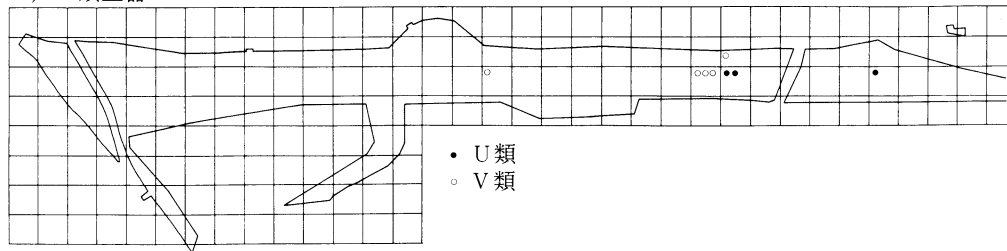


O~S類土器



- O類 △ R類
- P類 □ S類
- ▲ Q類

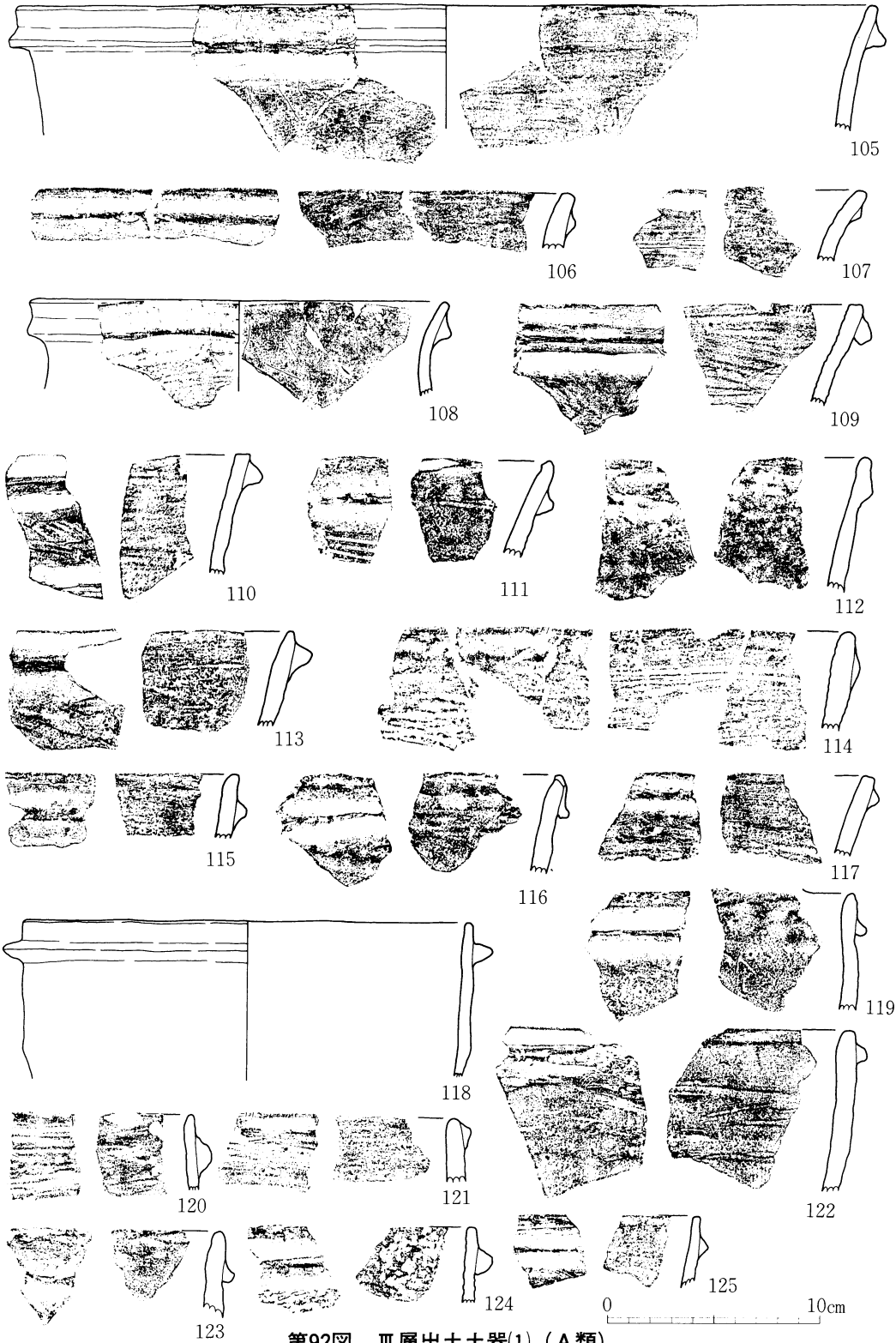
U, V類土器



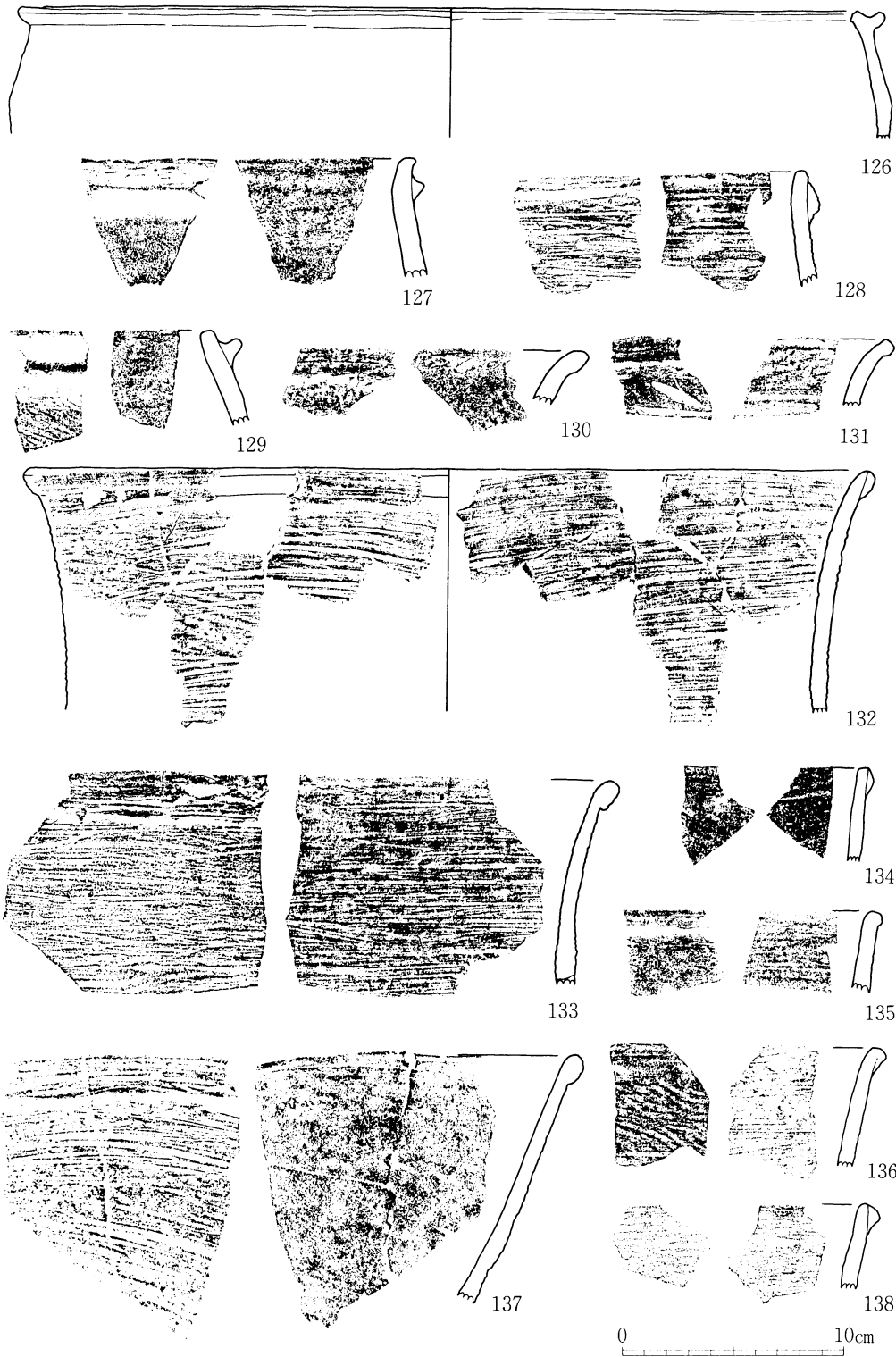
- U類
- V類

■ 1~2 ▨ 3~5 ▩ 6~10 ▪ 11~20 ▫ 21~30 ▬ 31~

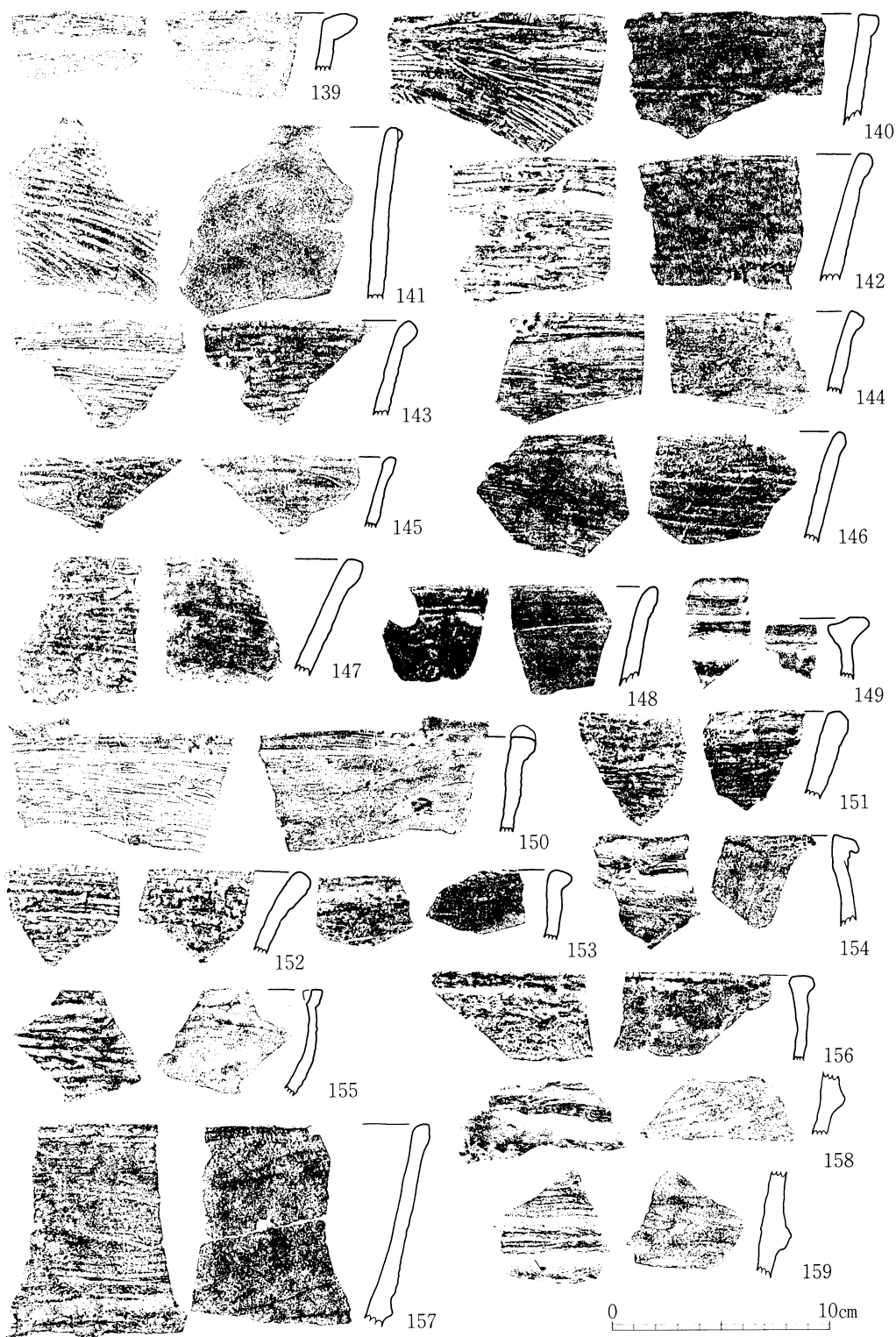
第91図 III層出土土器分布図(5)



第92図 Ⅲ層出土土器(1) (A類)



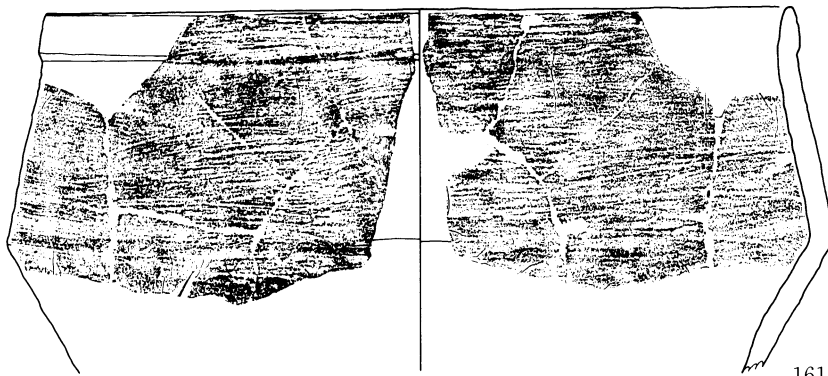
第93図 III層出土土器(2) (A類)



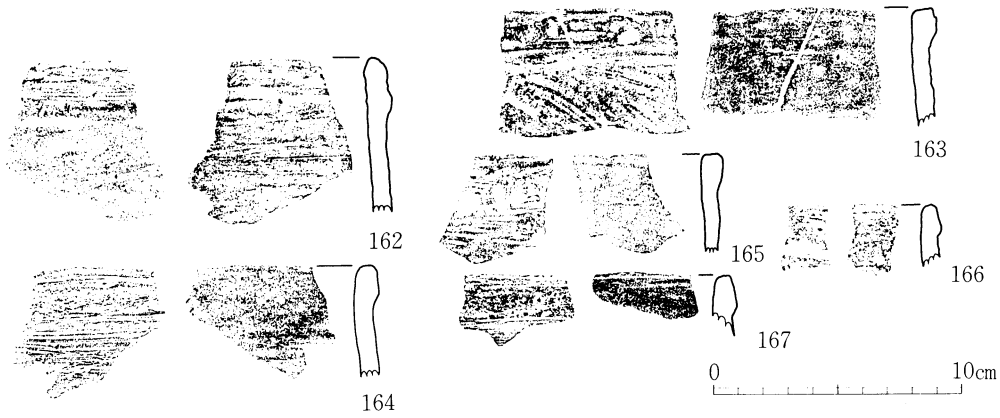
第94図 Ⅲ層出土土器(3) (A類)



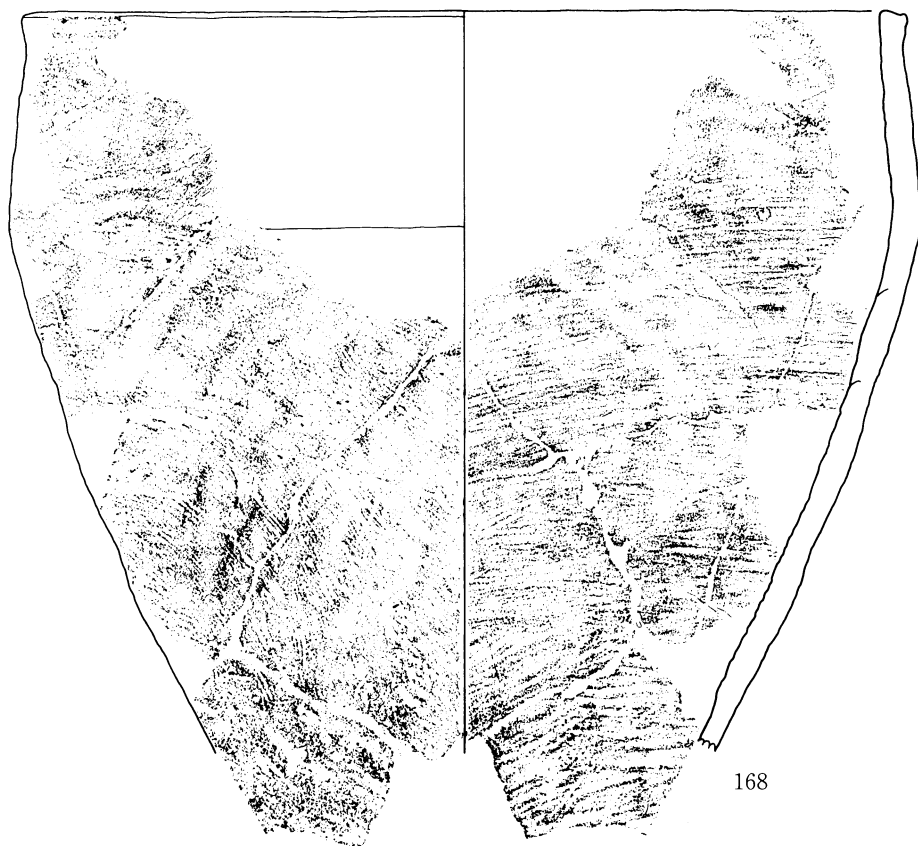
160



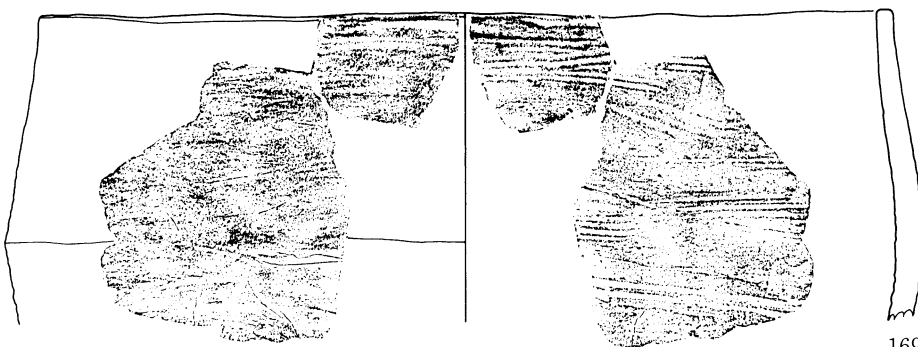
161



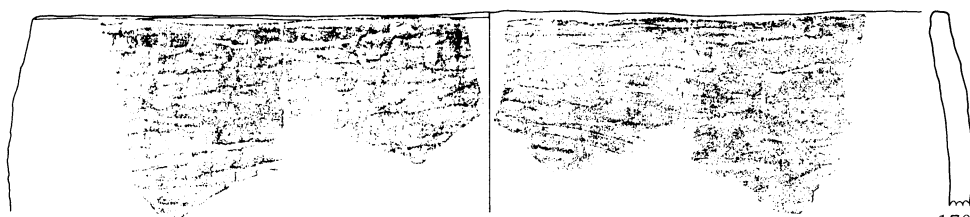
第95図 Ⅲ層出土土器(4) (B類)



168



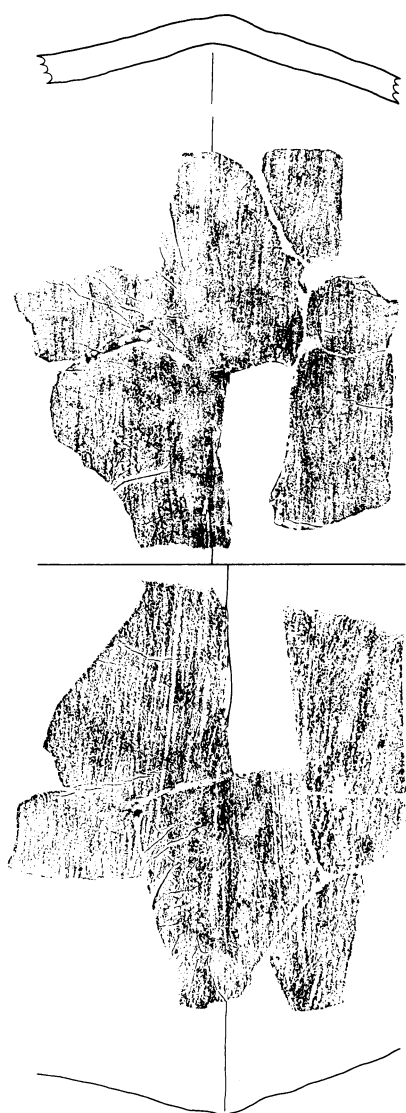
169



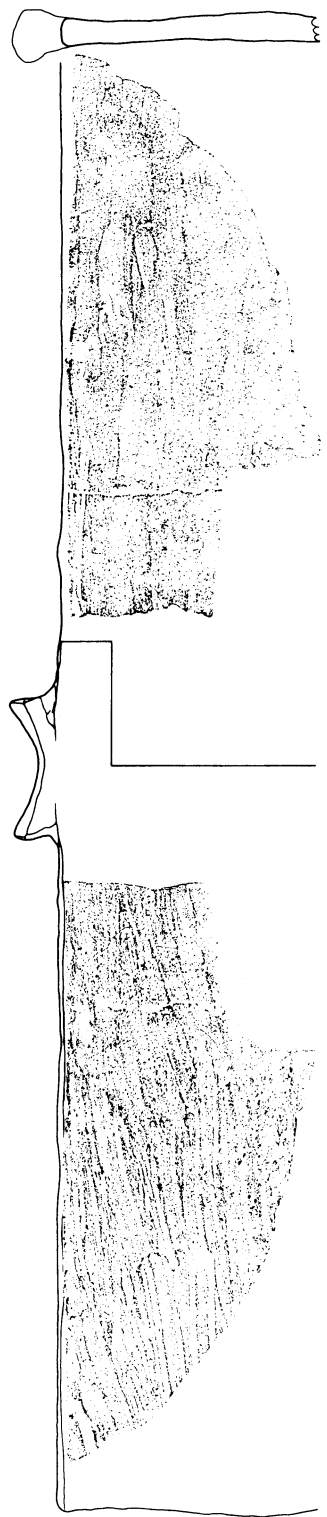
170

0 10cm

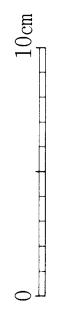
第96図 Ⅲ層出土土器(5) (B類)



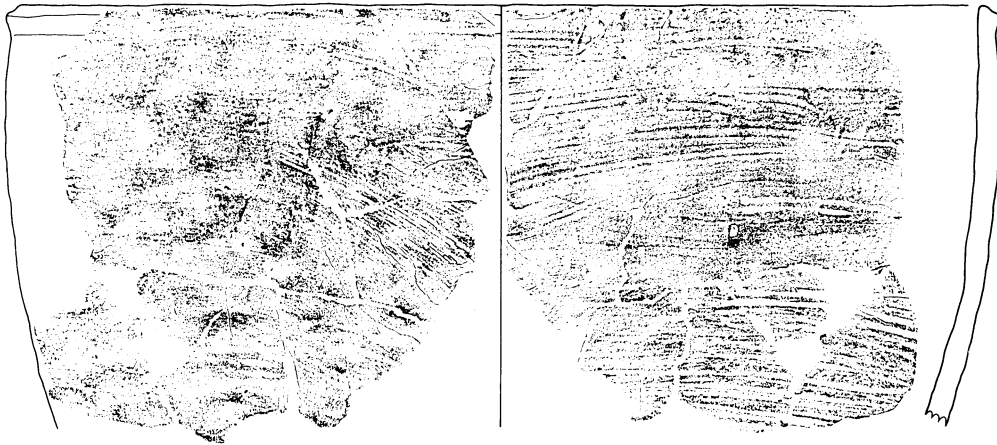
171



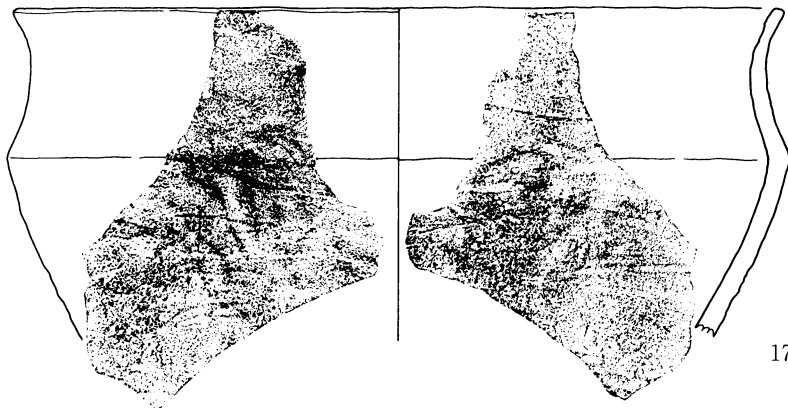
172



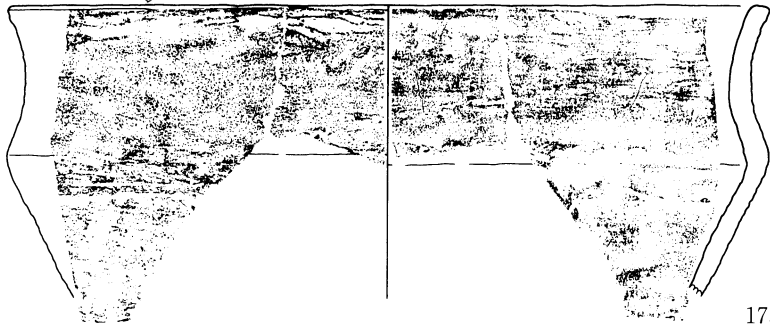
第97図 III層出土土器(6) (B類)



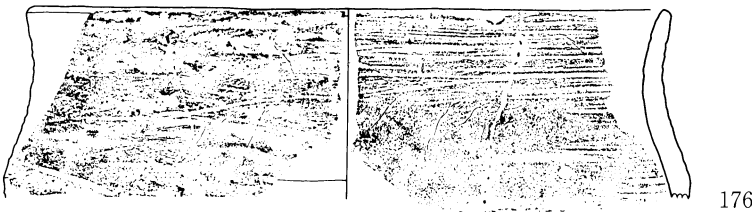
173



174



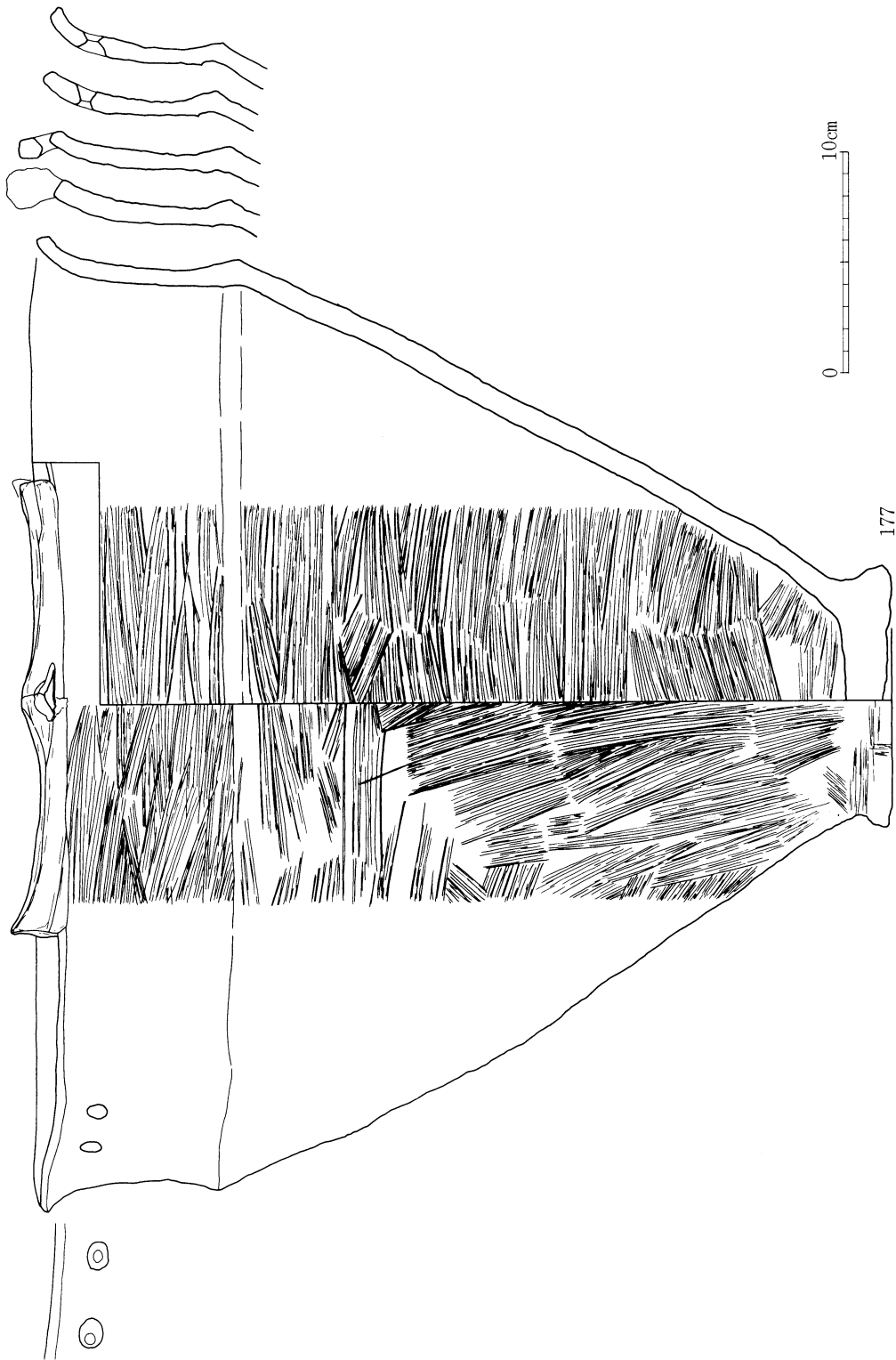
175



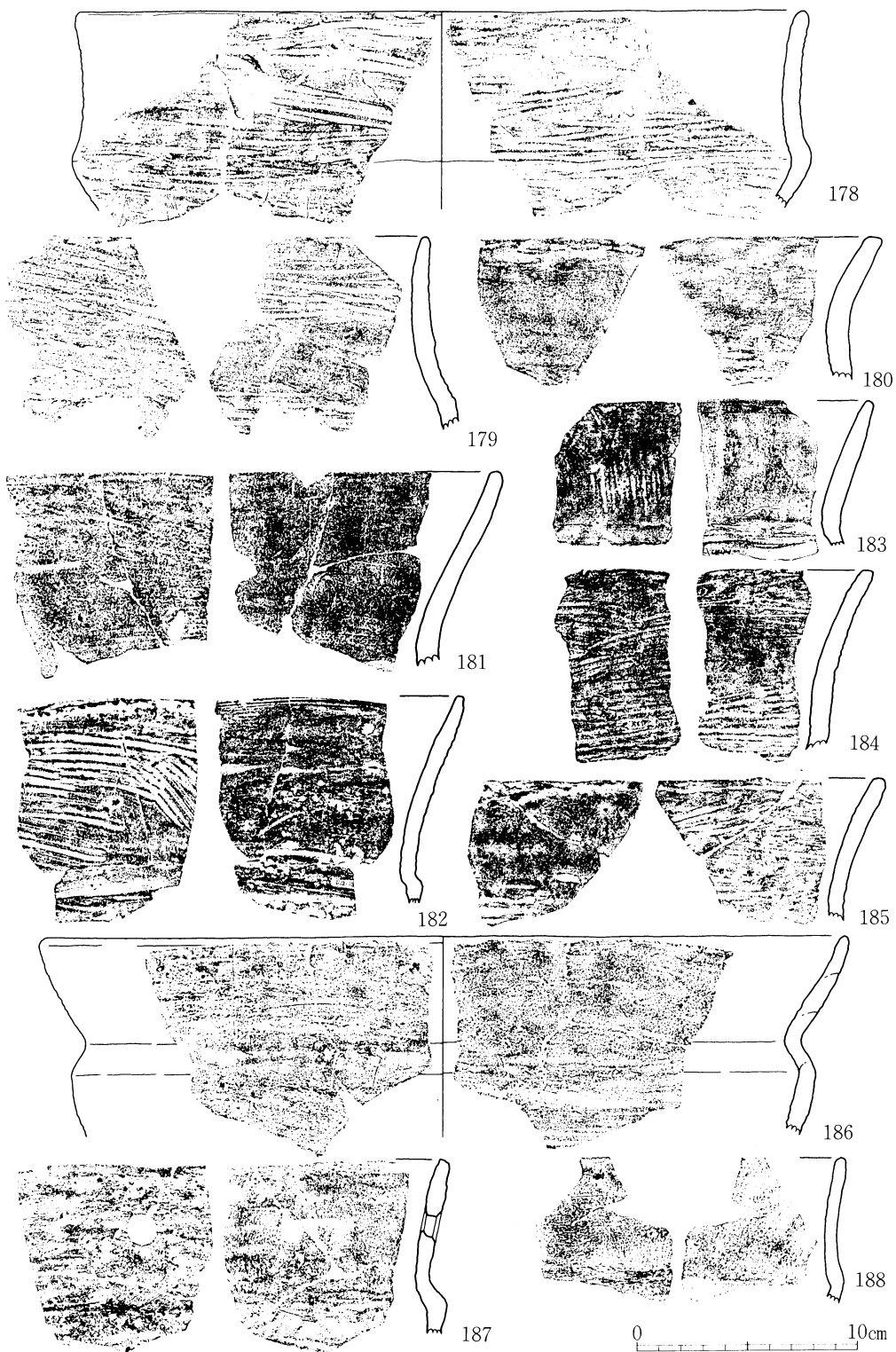
176

0 10cm

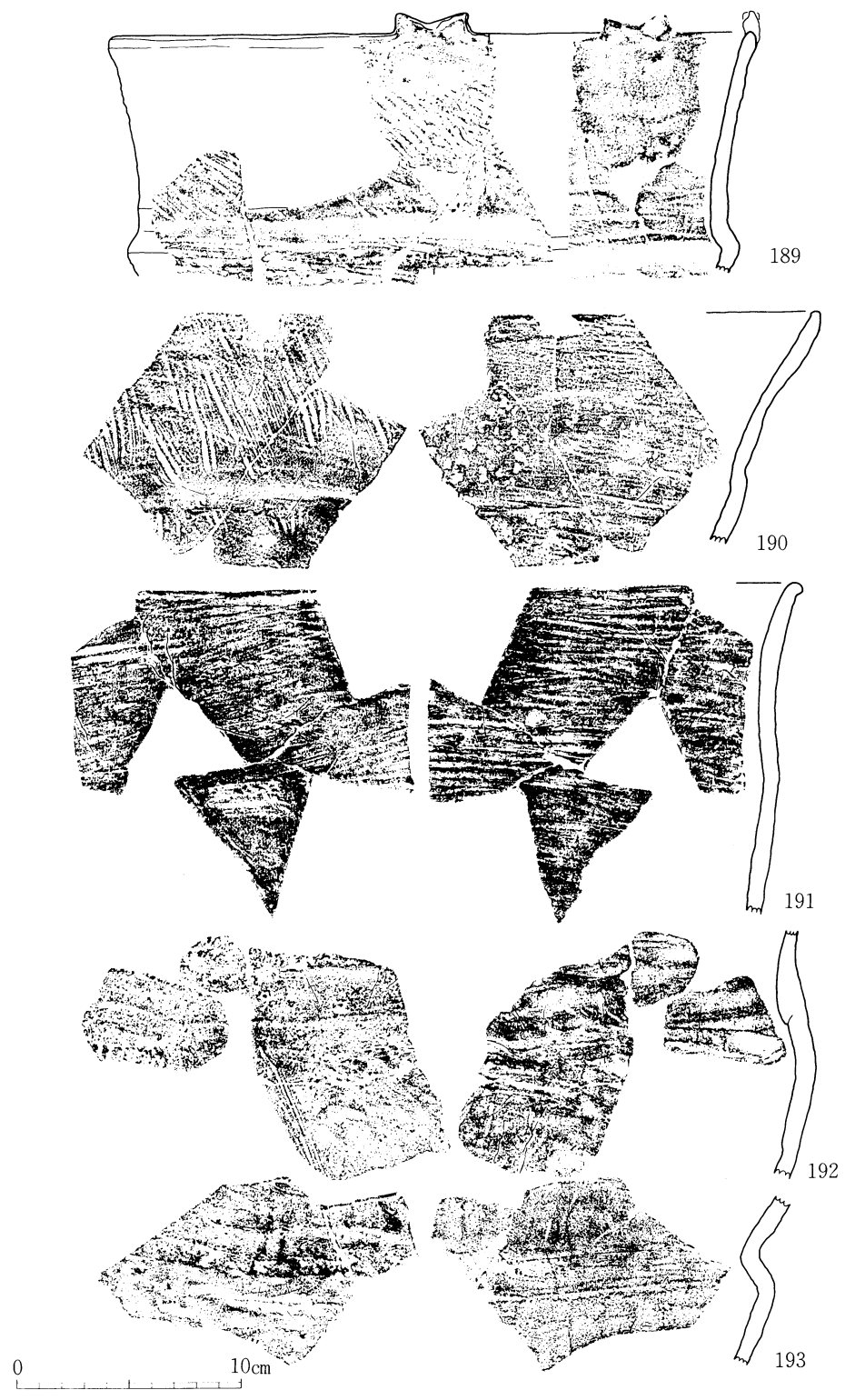
第98図 Ⅲ層出土土器(7) (B, C類)



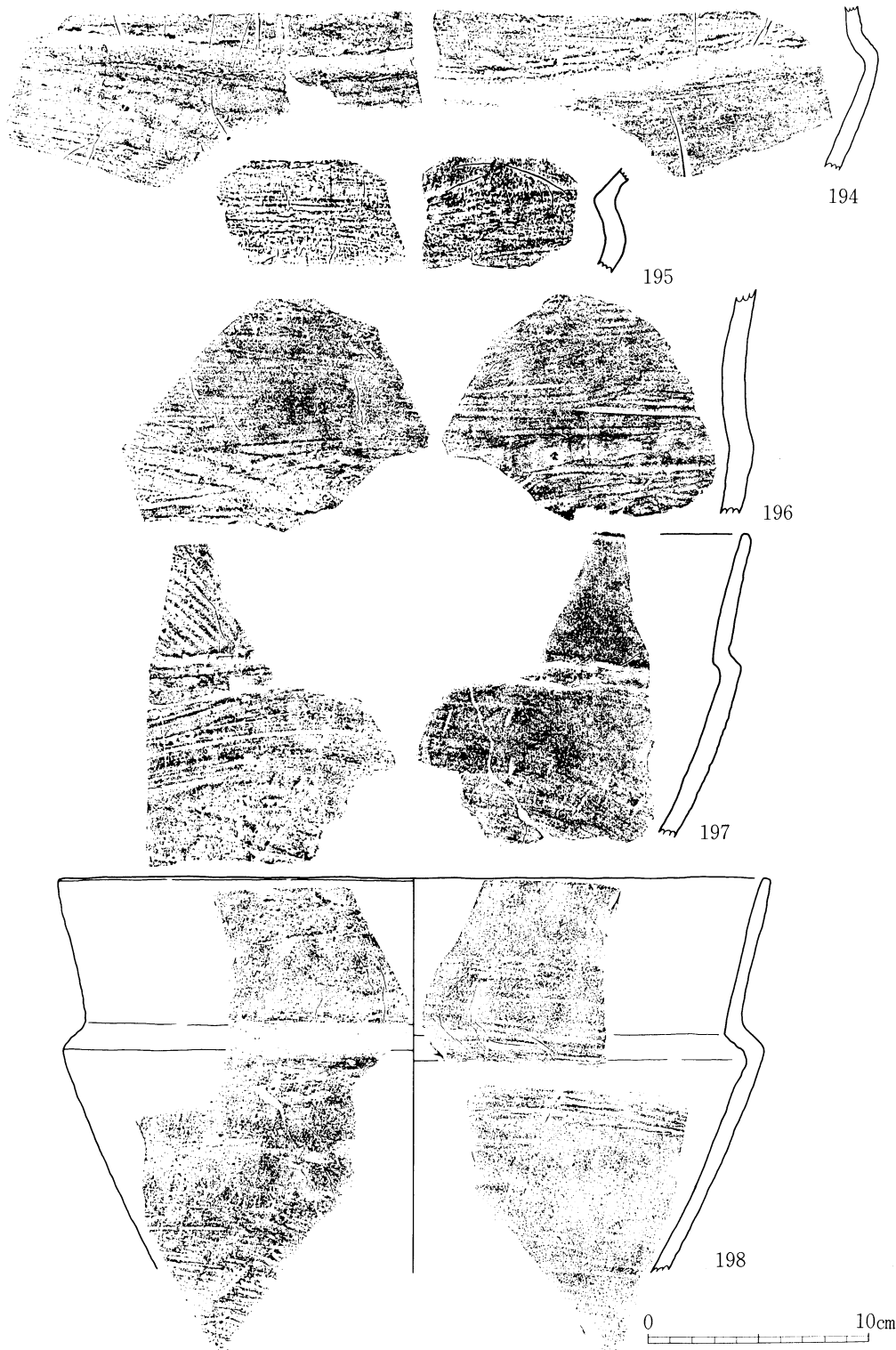
第99図 Ⅲ層出土土器(8) (C類)



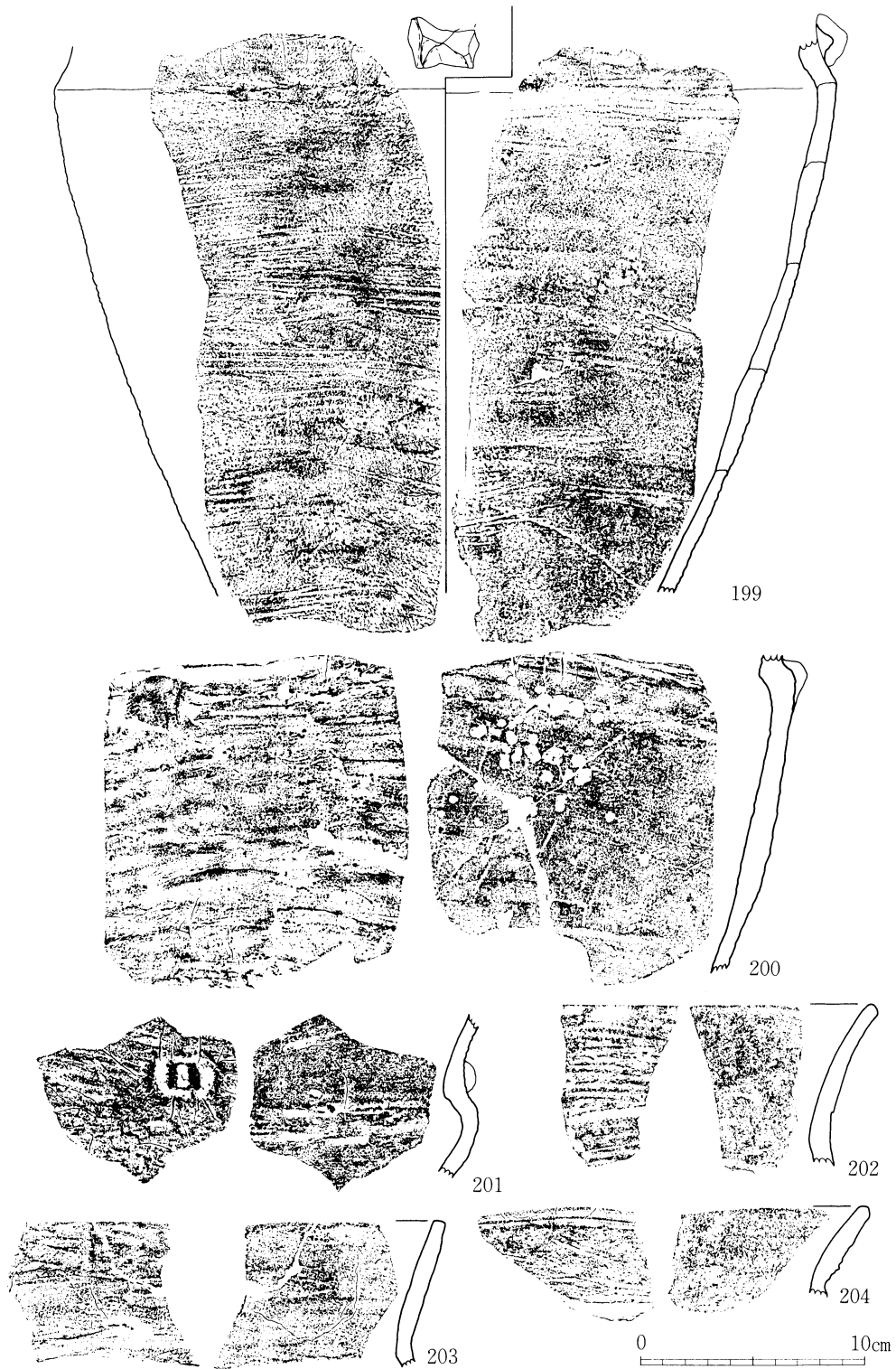
第100図 Ⅲ層出土土器(9) (C類)



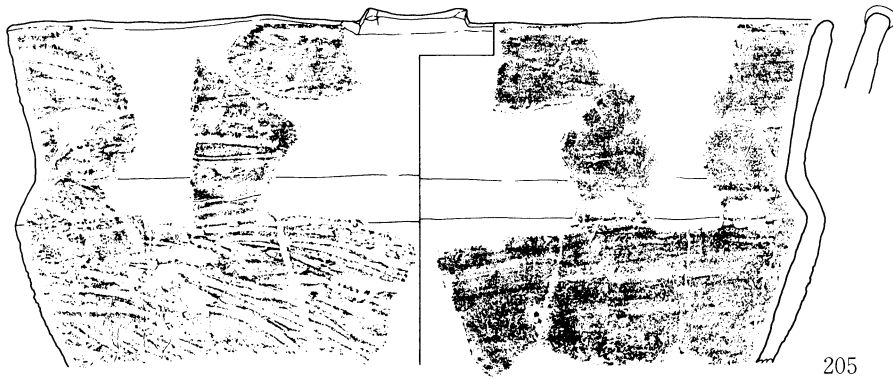
第101図 Ⅲ層出土土器(10) (C類)



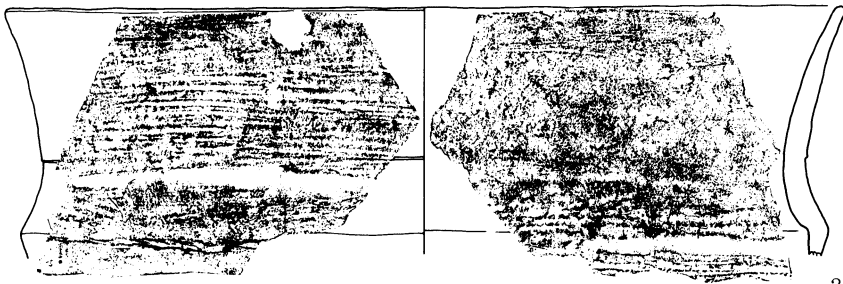
第102図 Ⅲ層出土土器(11) (C類)



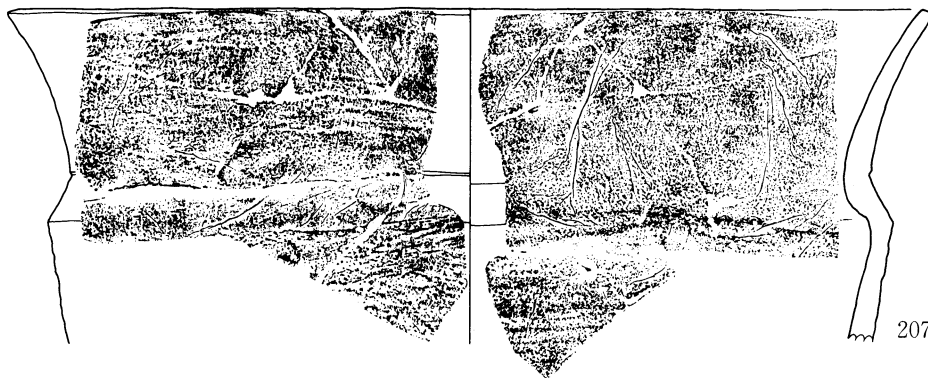
第103図 Ⅲ層出土土器(12) (C類)



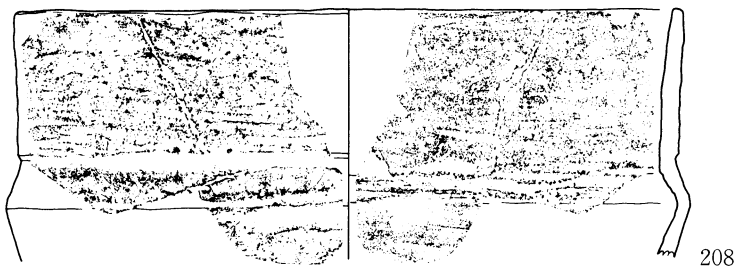
205



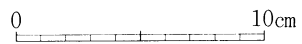
206



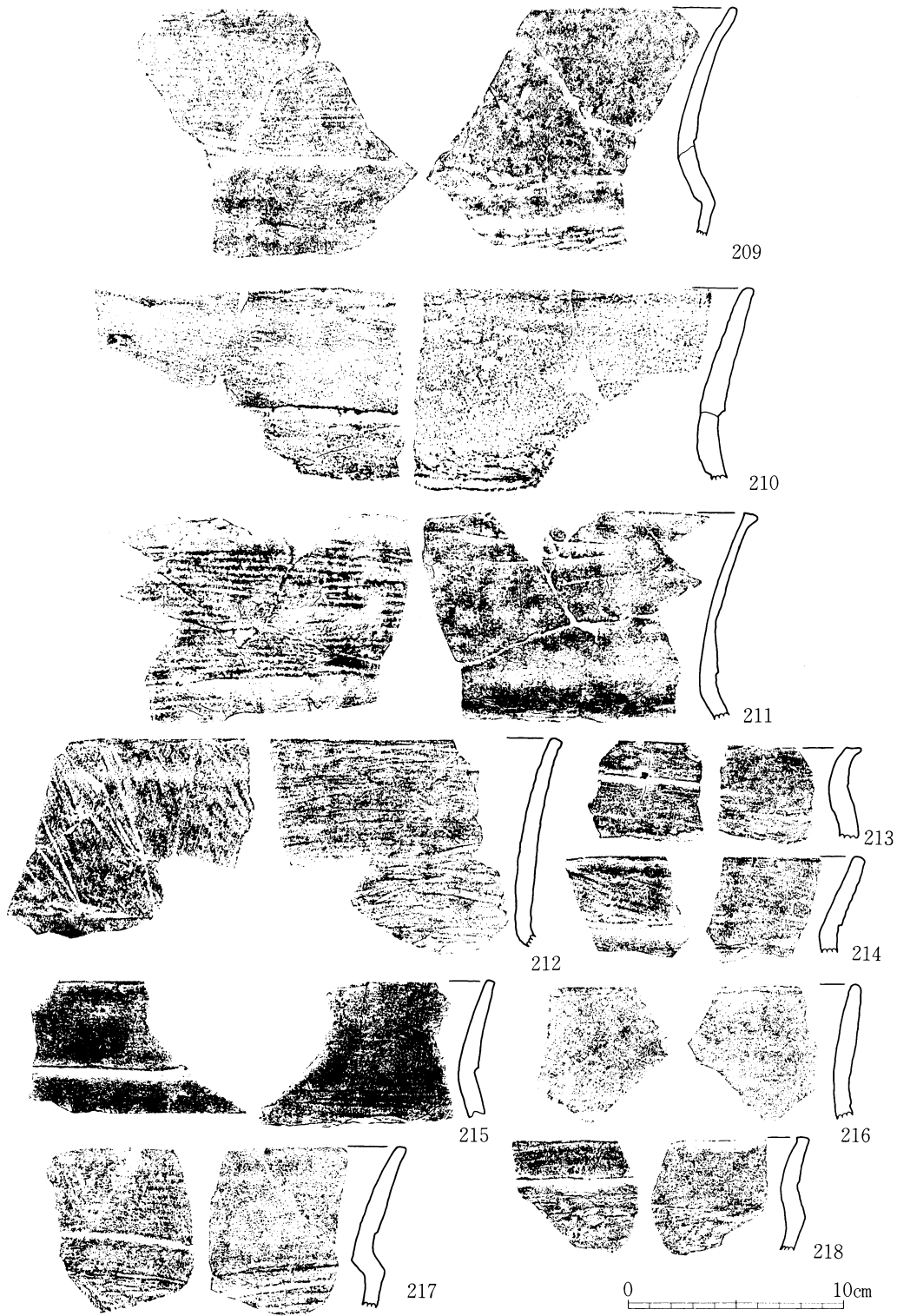
207



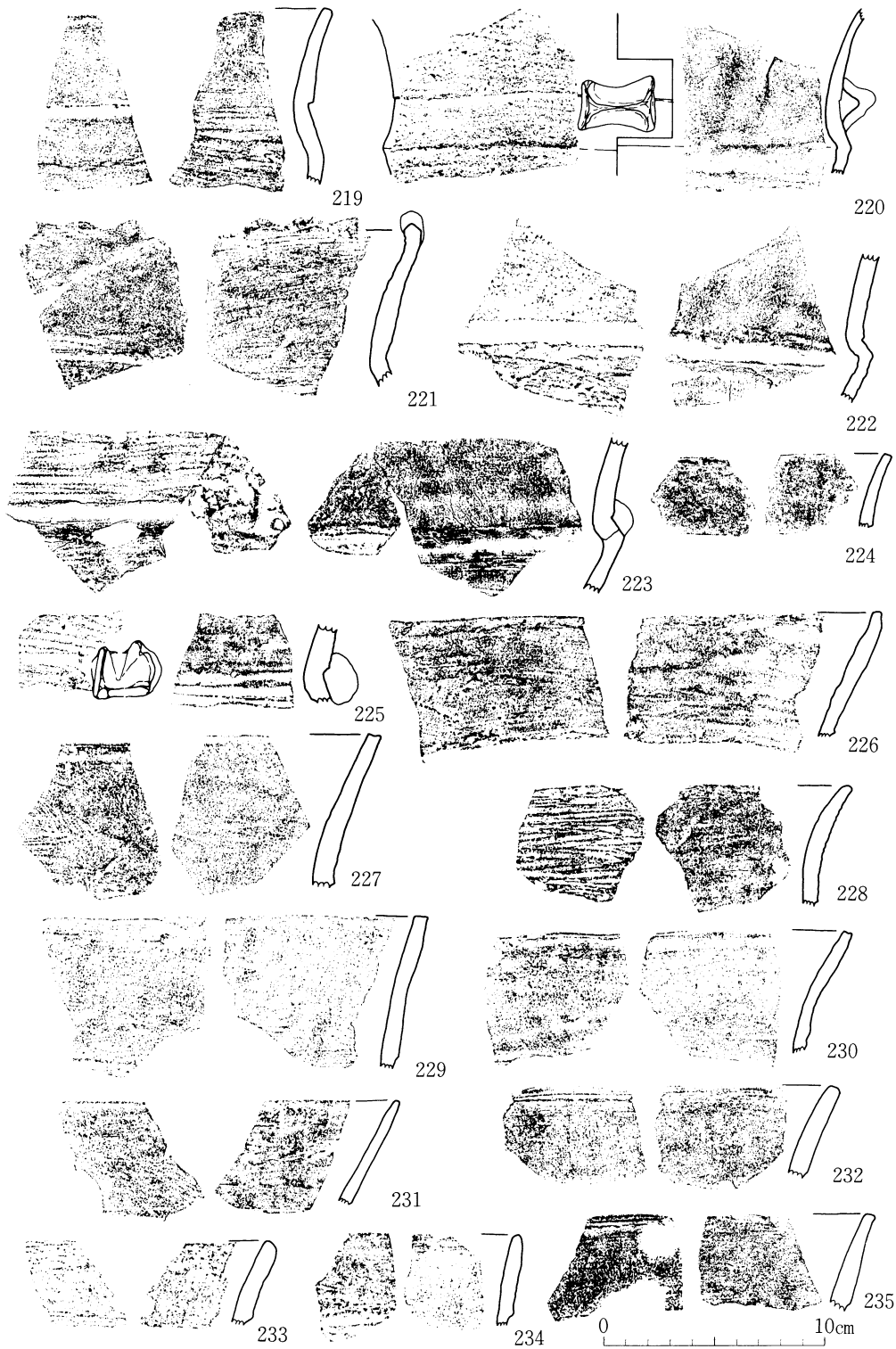
208



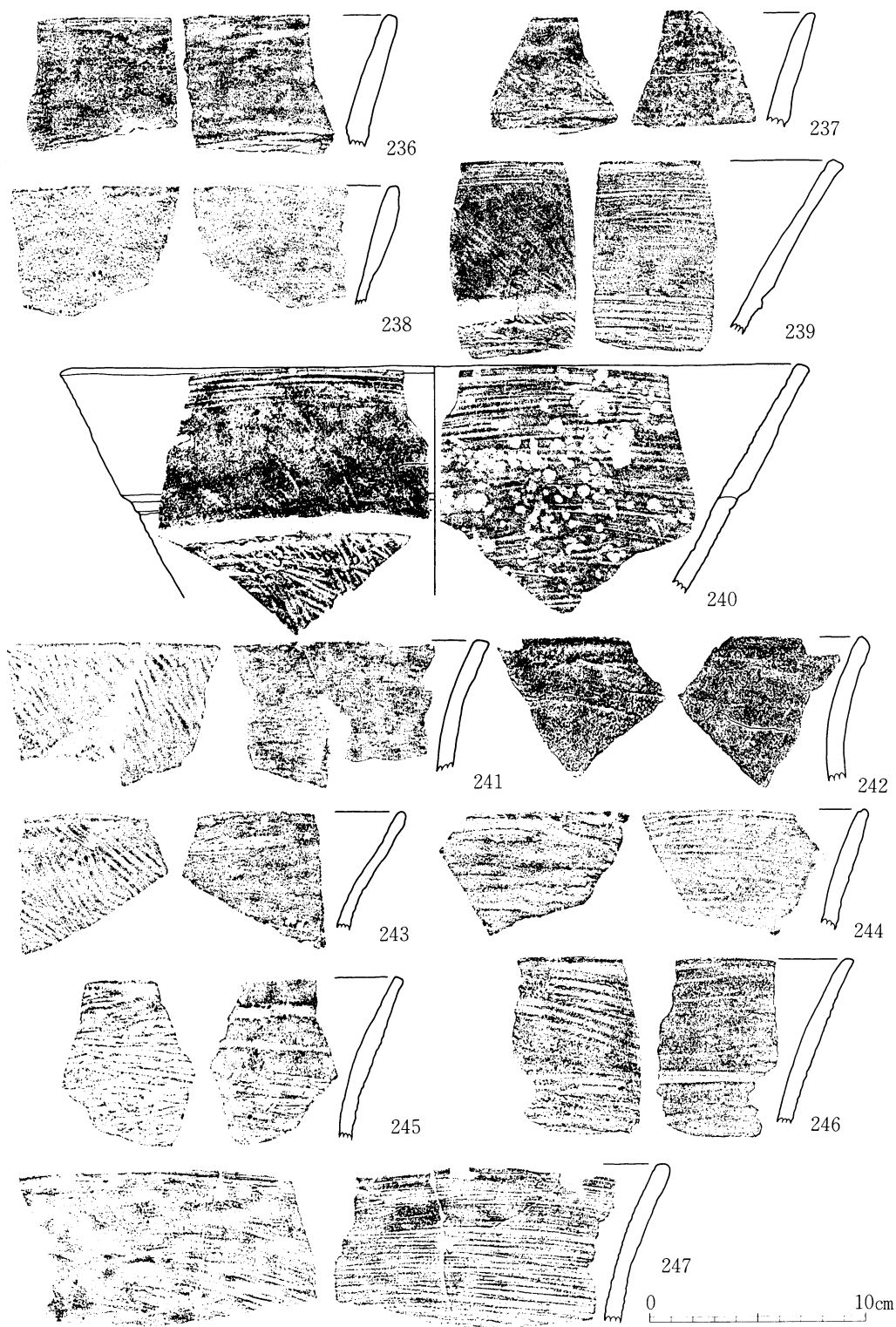
第104図 Ⅲ層出土土器(13) (C類)



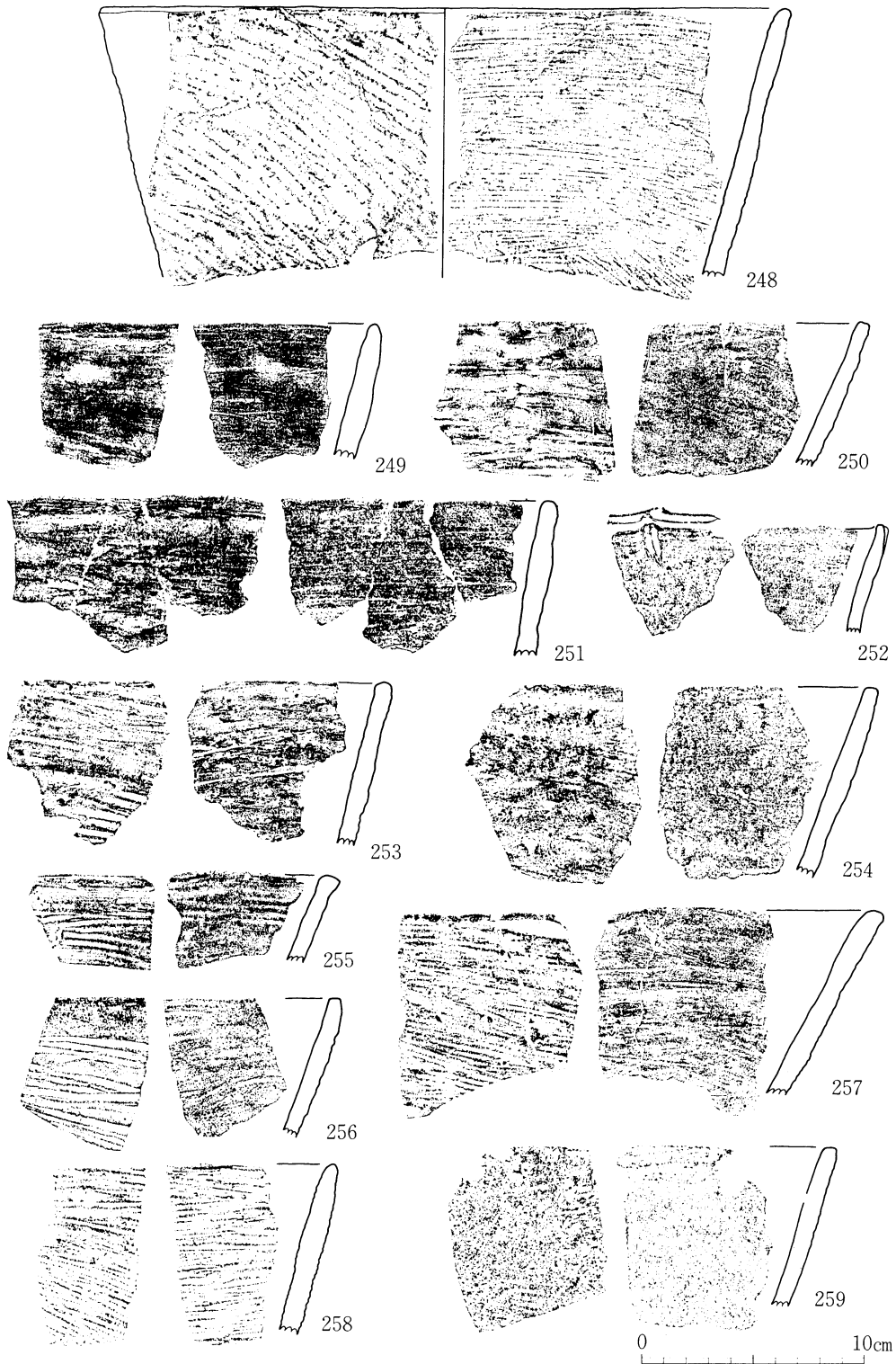
第105図 Ⅲ層出土土器(14) (C類)



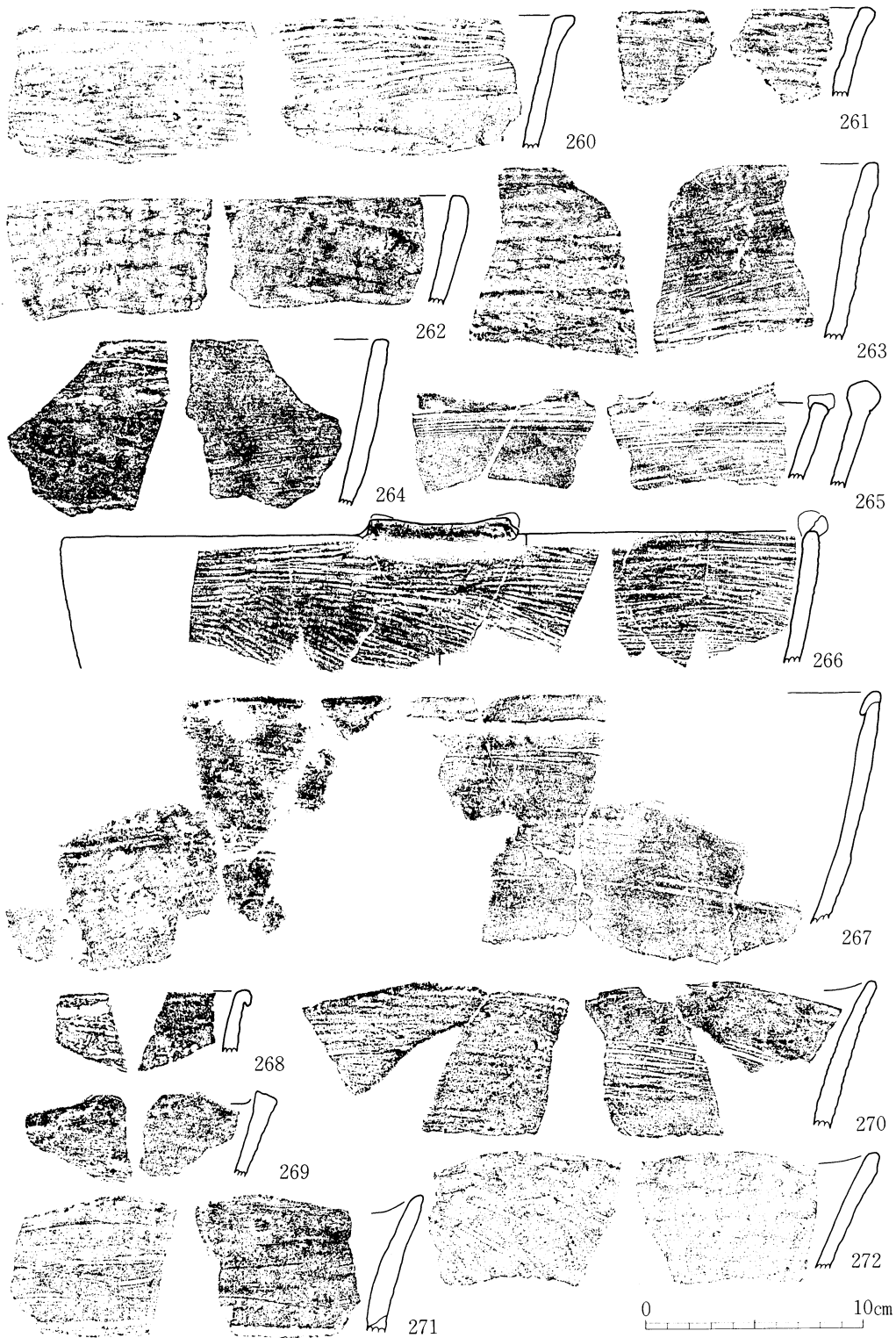
第106図 Ⅲ層出土土器(15) (C類)



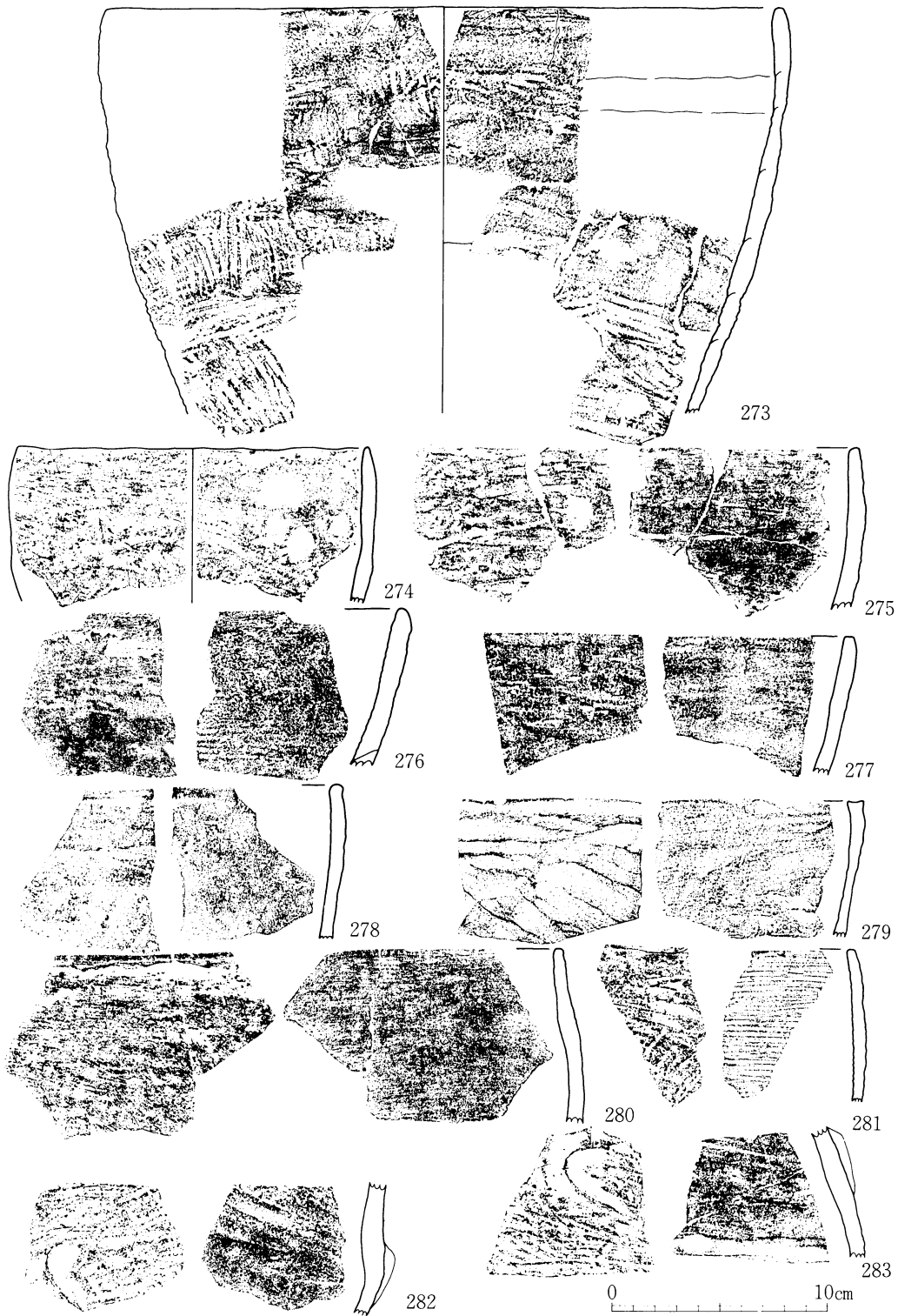
第107図 Ⅲ層出土土器(16) (C, D類)



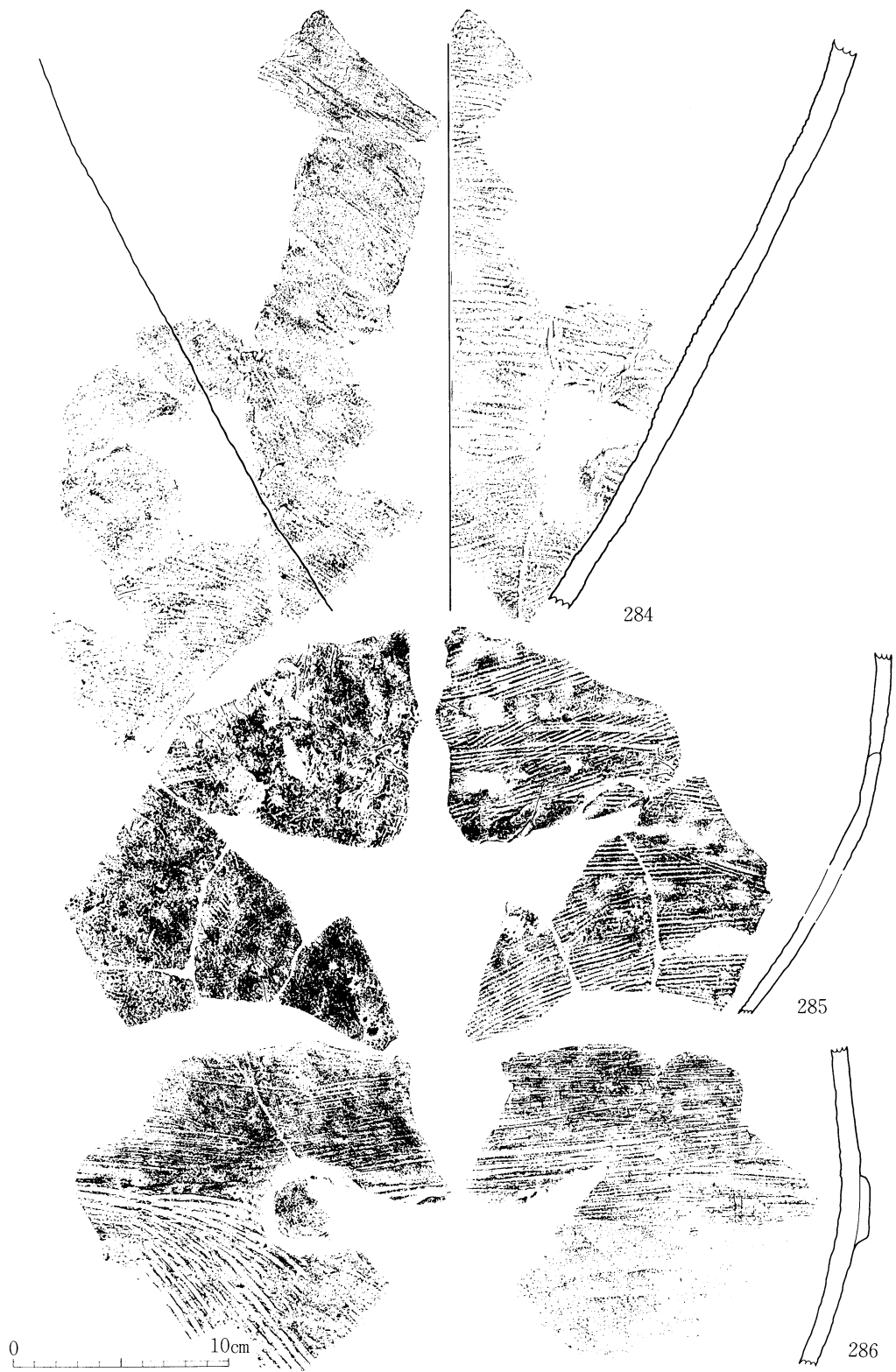
第108図 Ⅲ層出土土器(17) (D類)



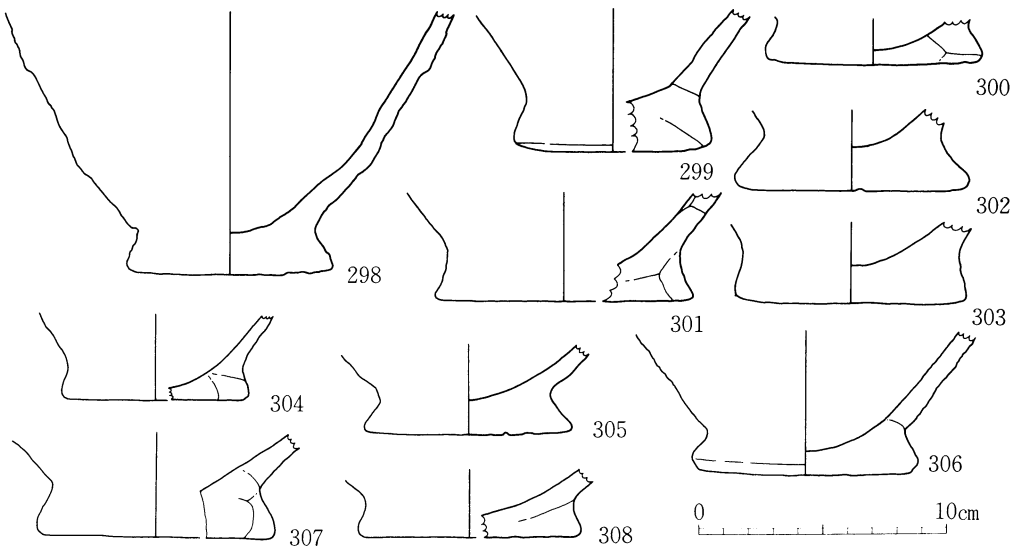
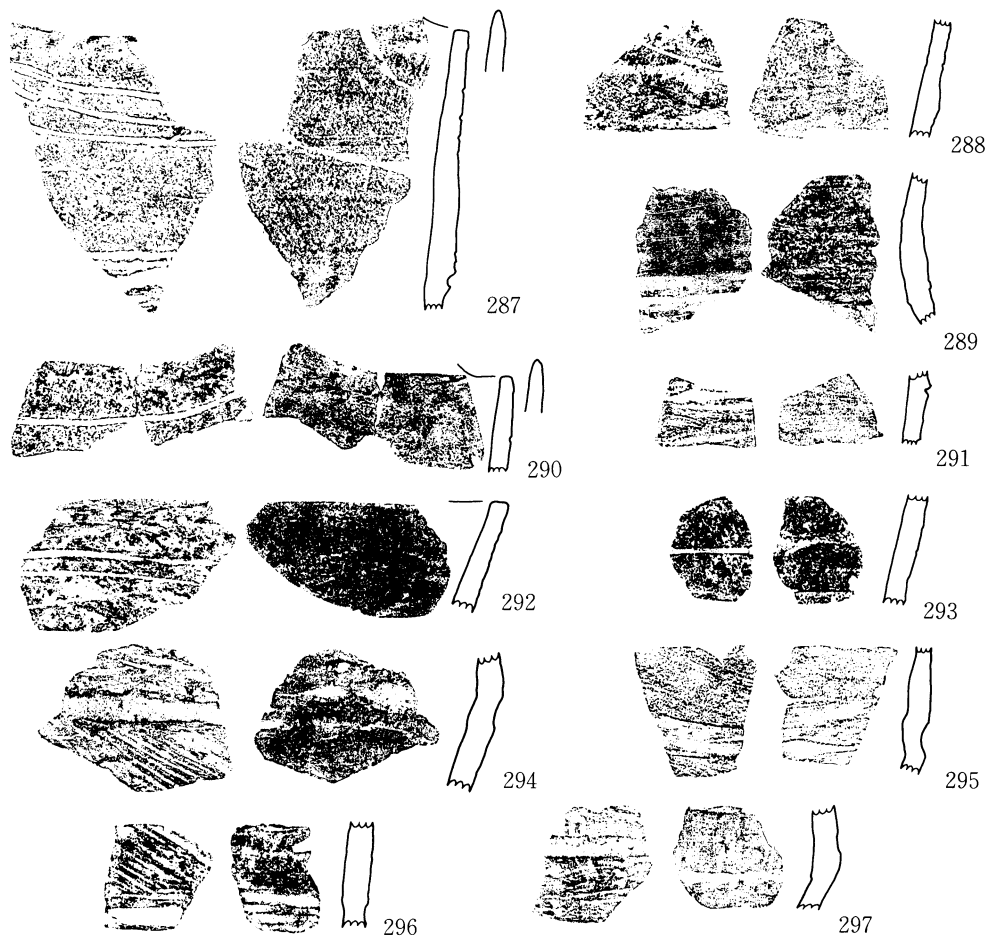
第109図 Ⅲ層出土土器(18) (D類)



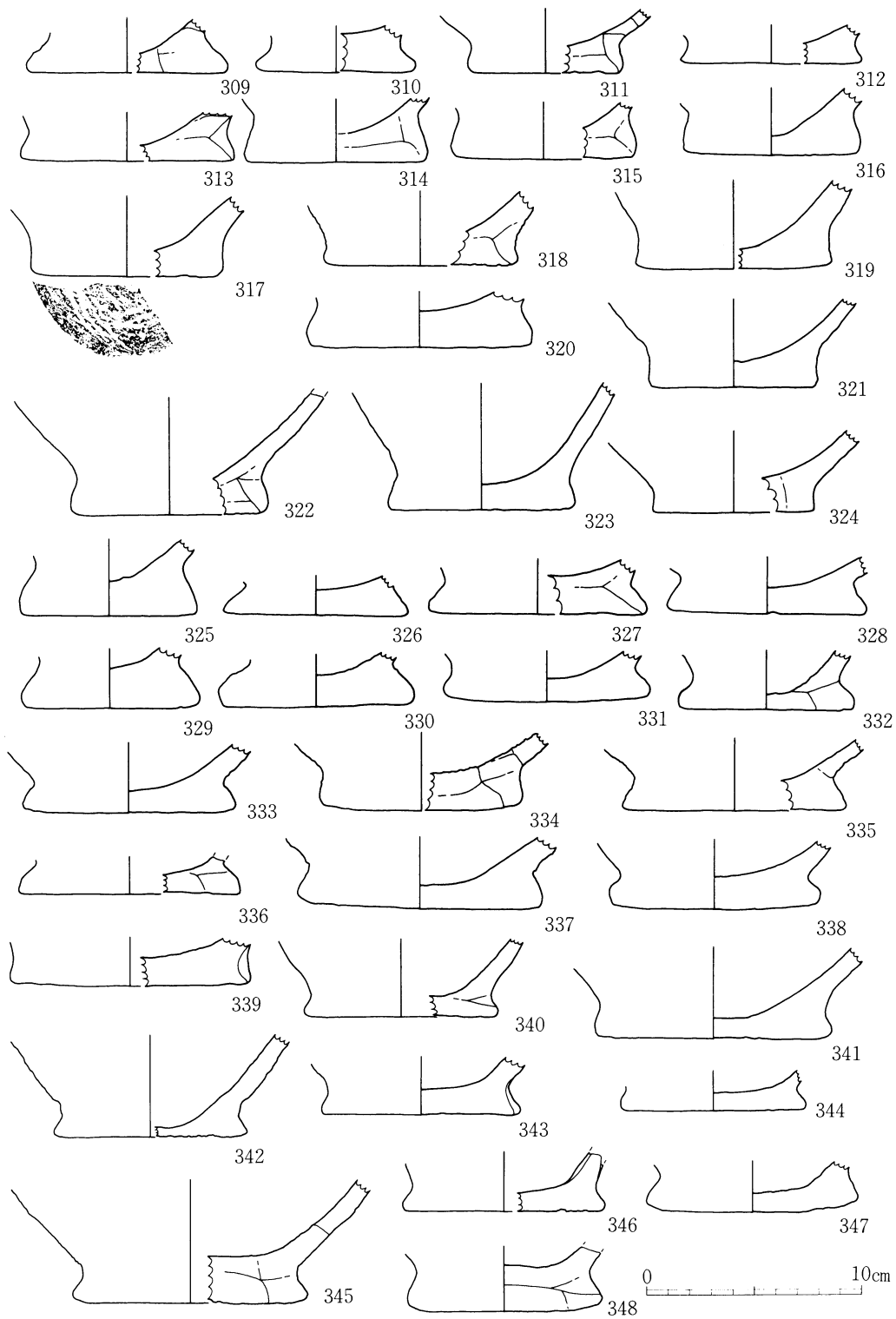
第110図 Ⅲ層出土土器(19) (E類)



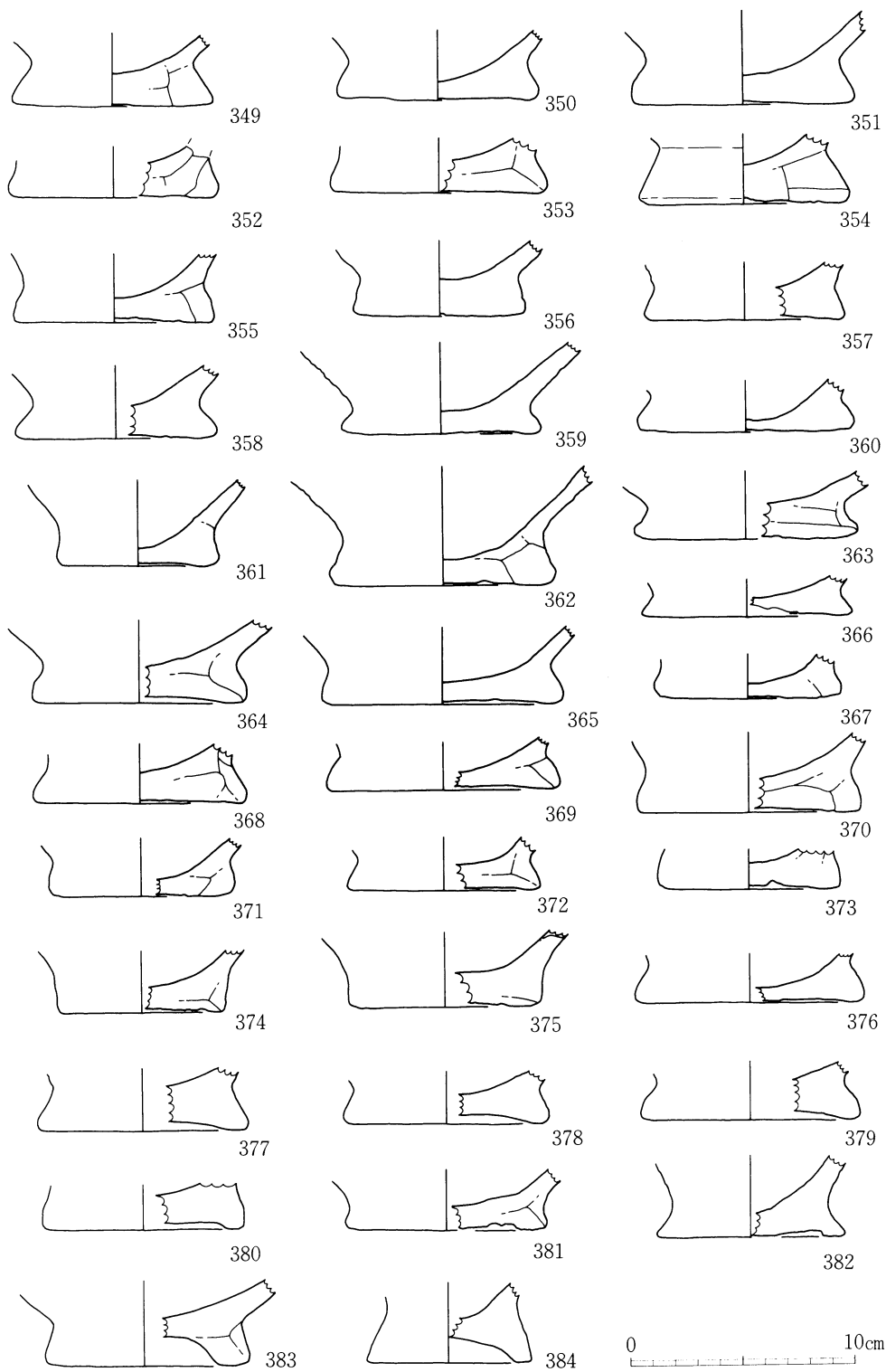
第111図 III層出土土器(20)



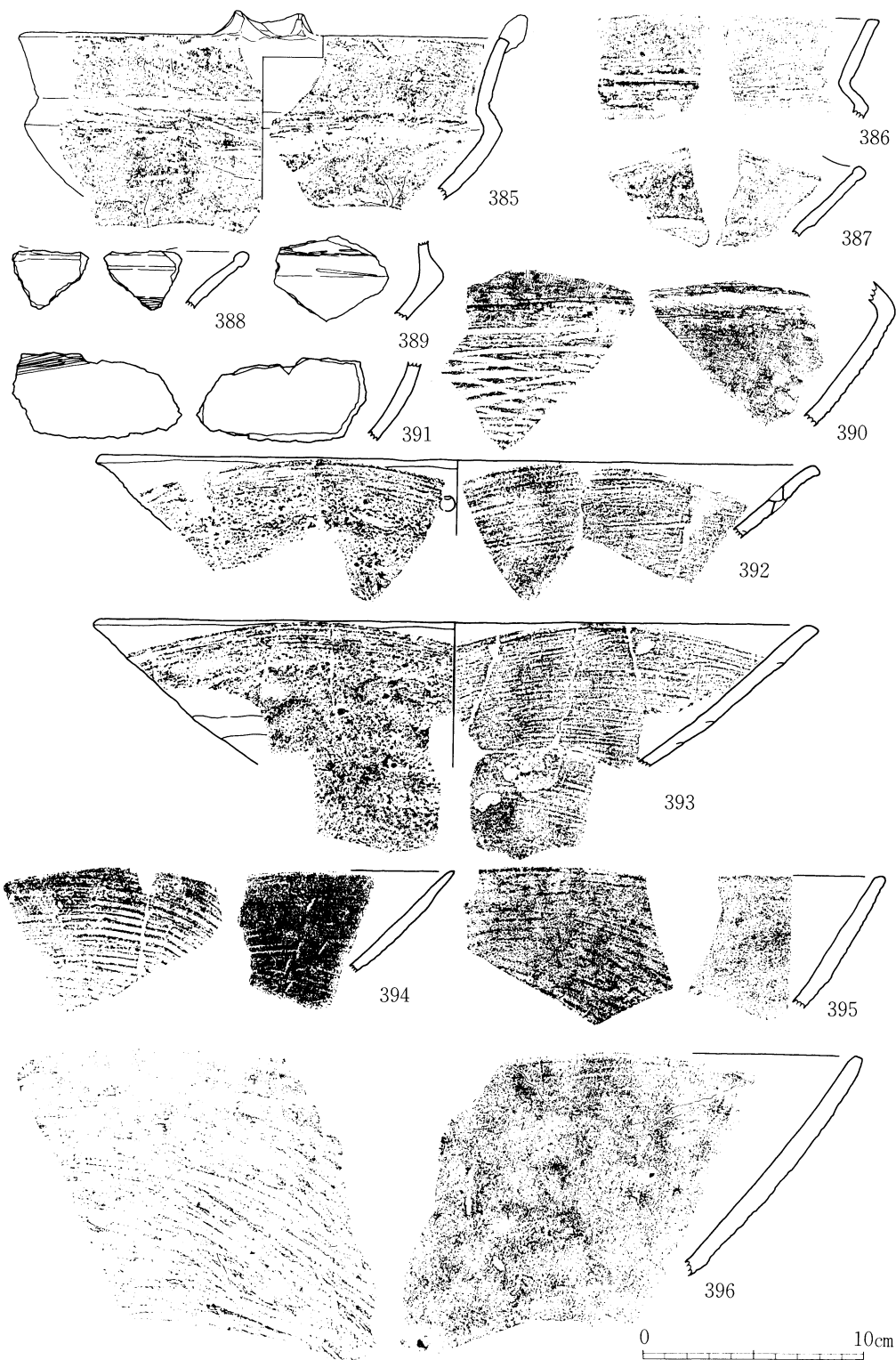
第112図 Ⅲ層出土土器(21) (F類, 底部)



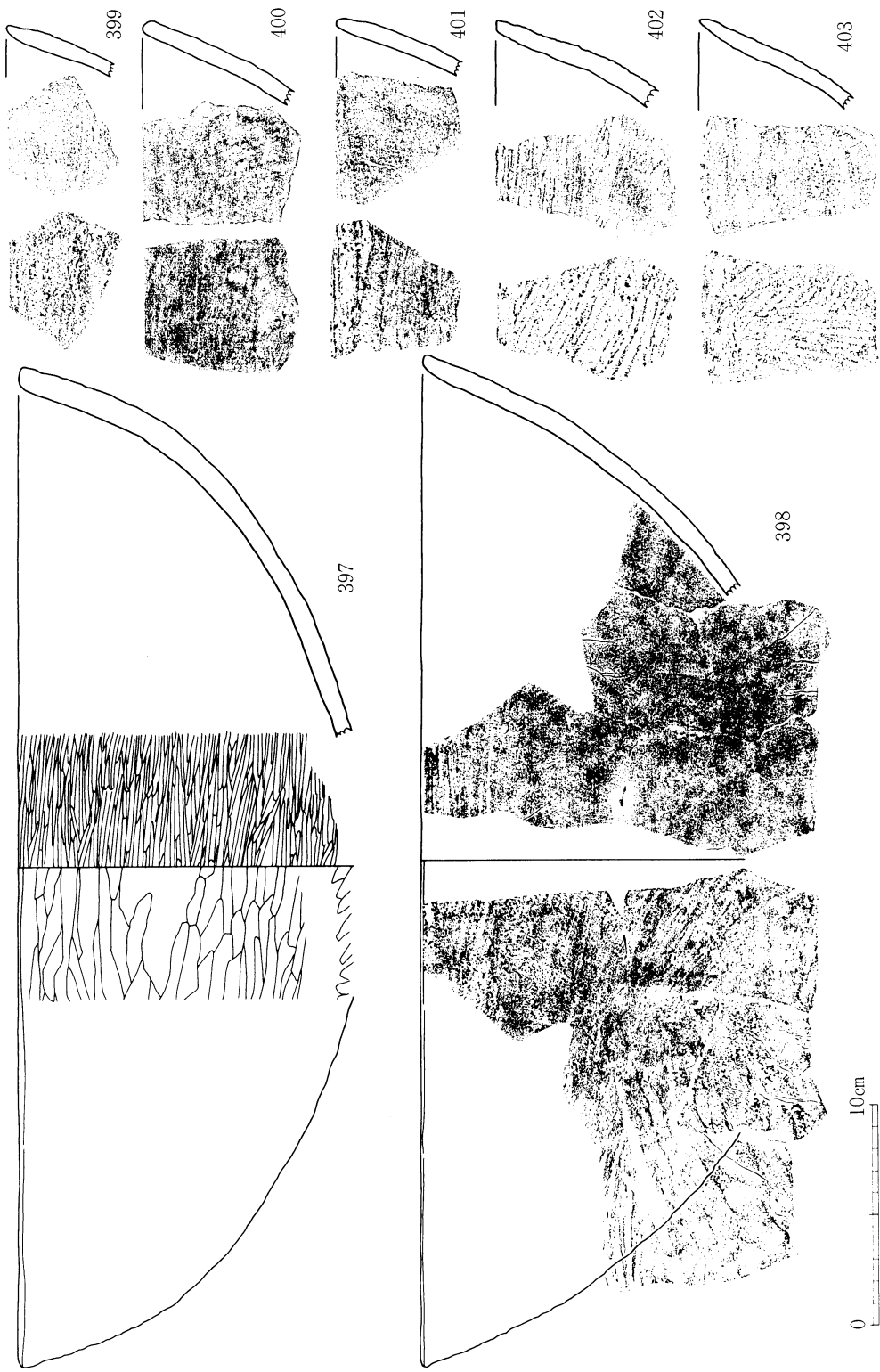
第113图 Ⅲ層出土土器(2) (底部)



第114图 Ⅲ層出土土器(23) (底部)



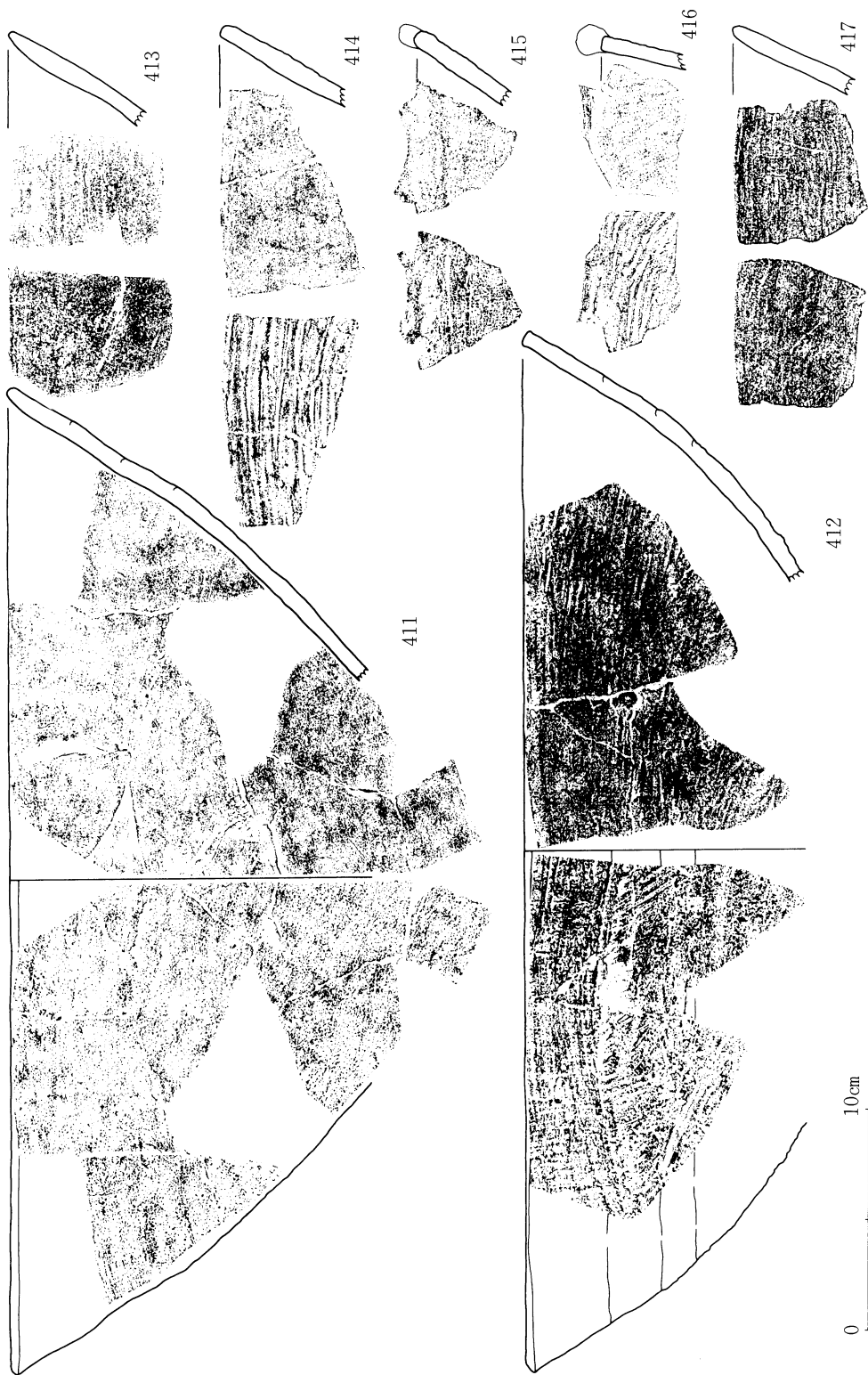
第115図 Ⅲ層出土土器(24) (G, H類)



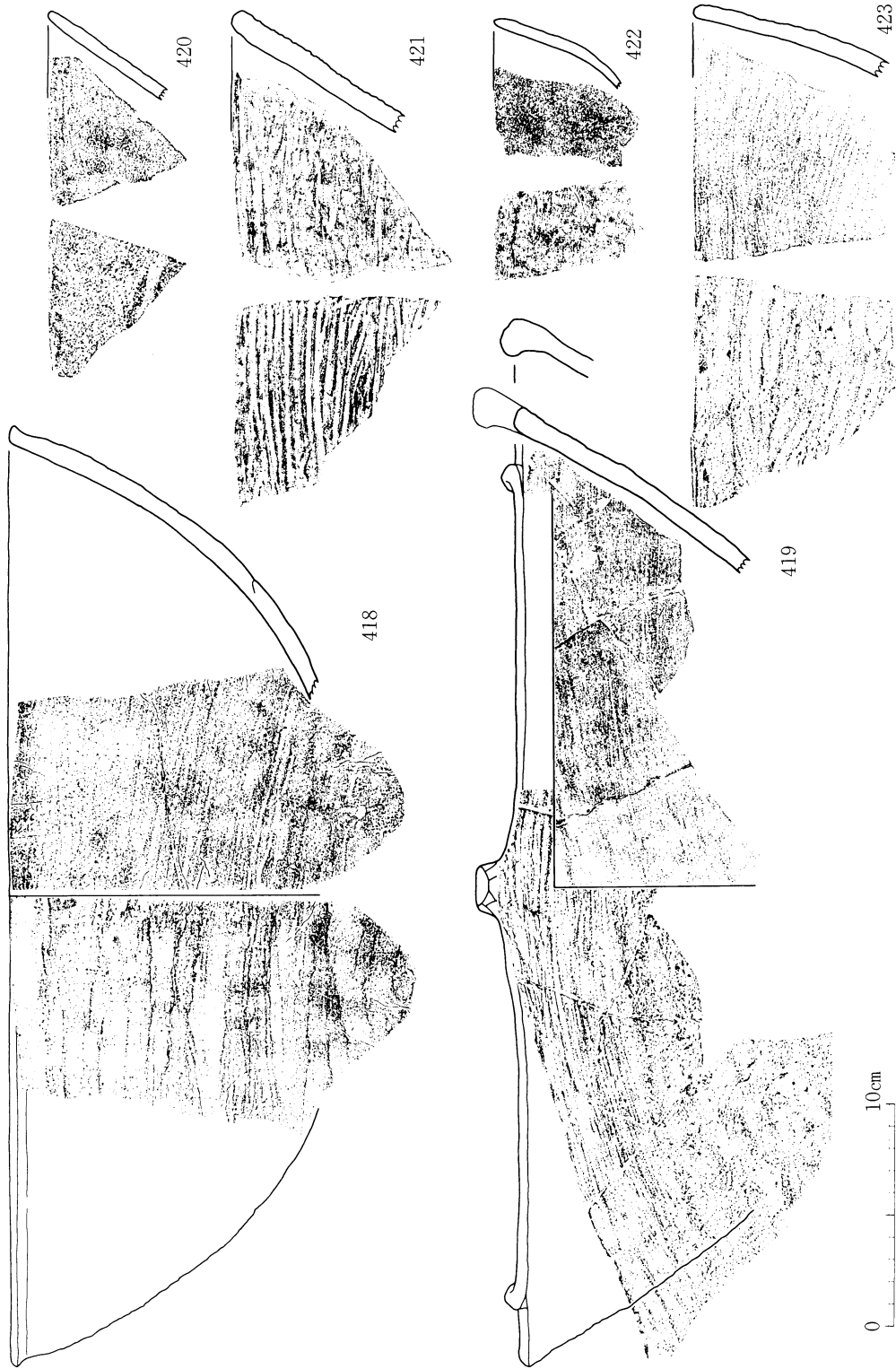
第116図 Ⅲ層出土土器(25) (H類)



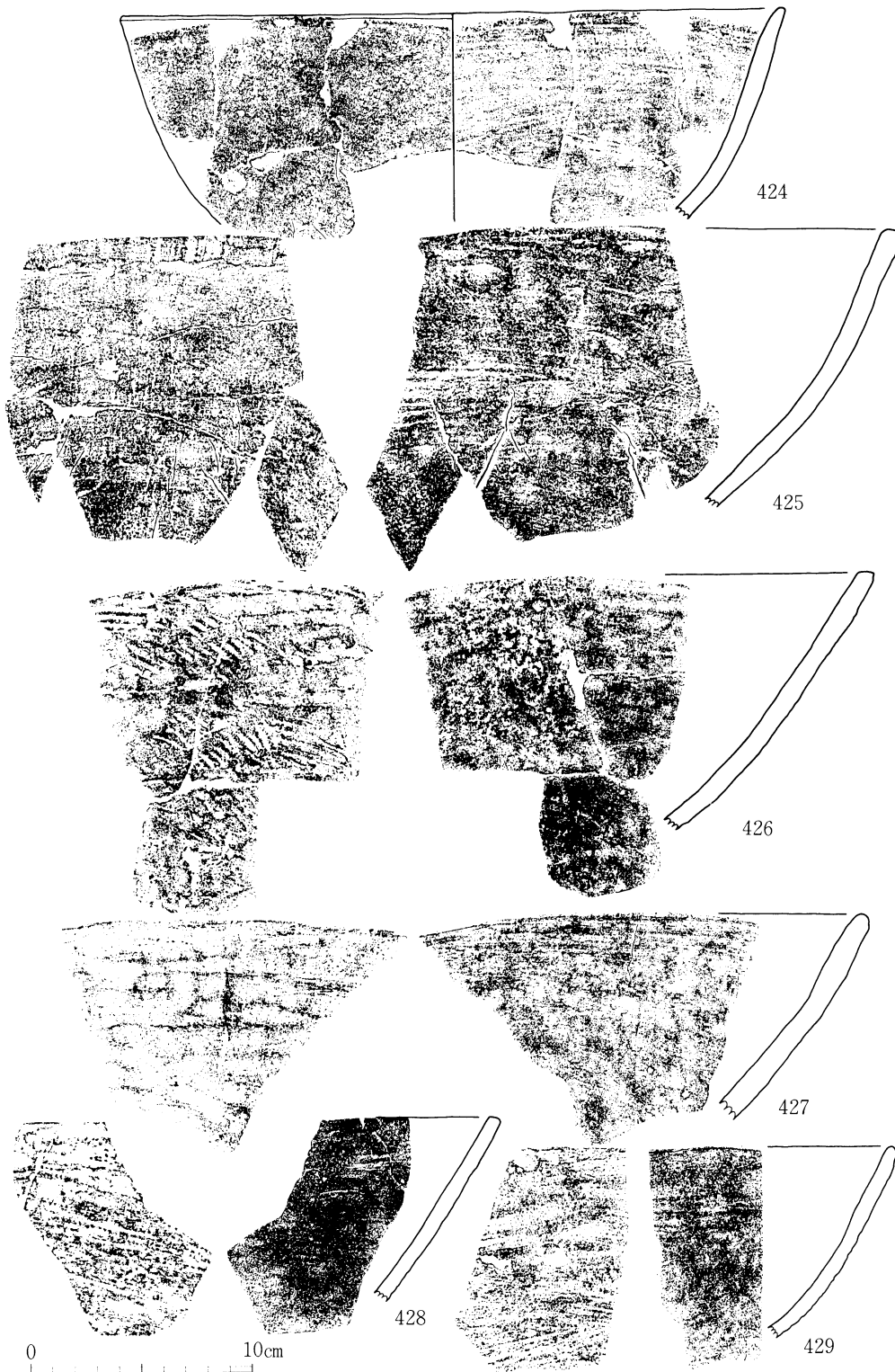
第117図 Ⅲ層出土土器(26) (H類)



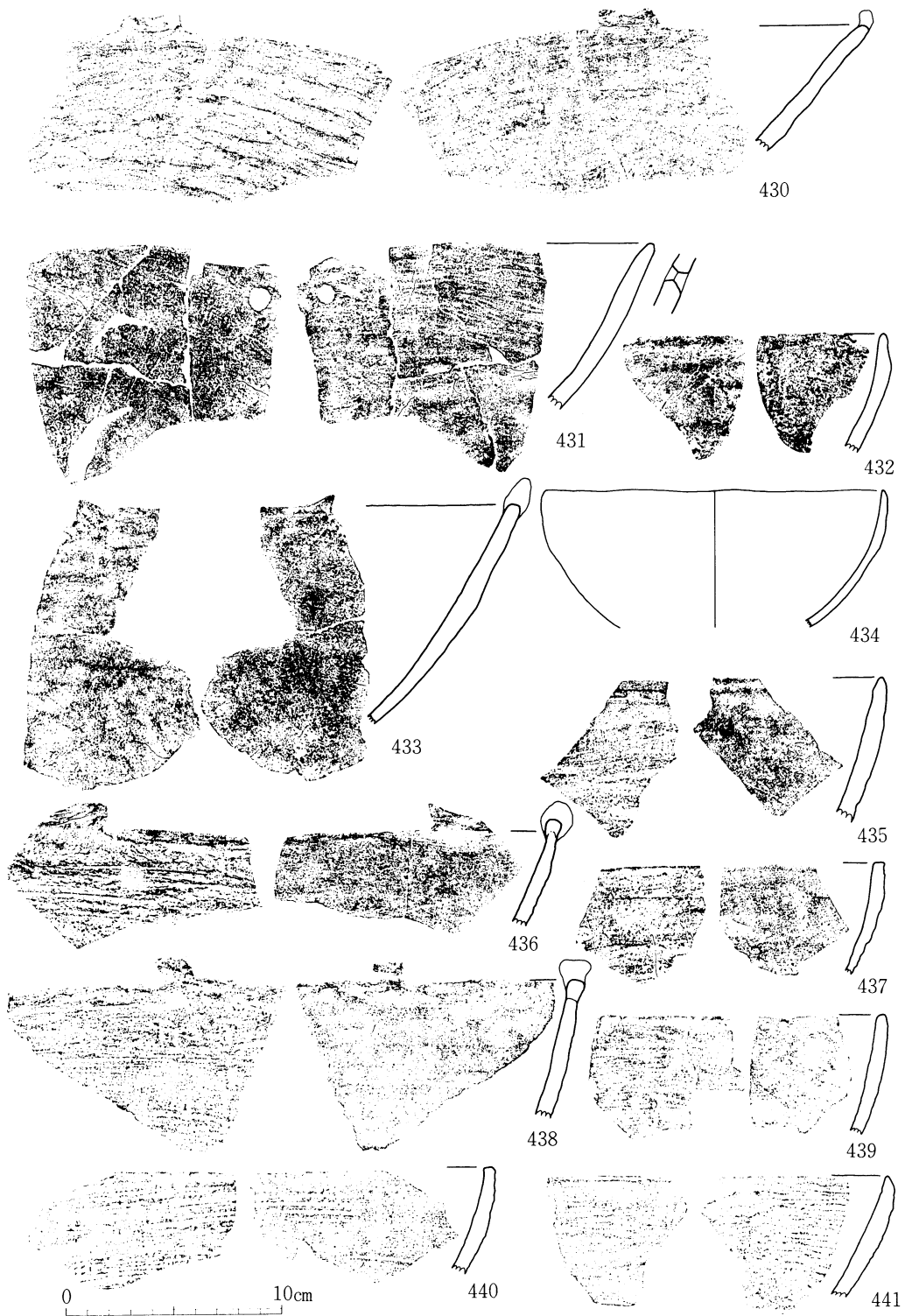
第118図 Ⅲ層出土土器(27) (H類)



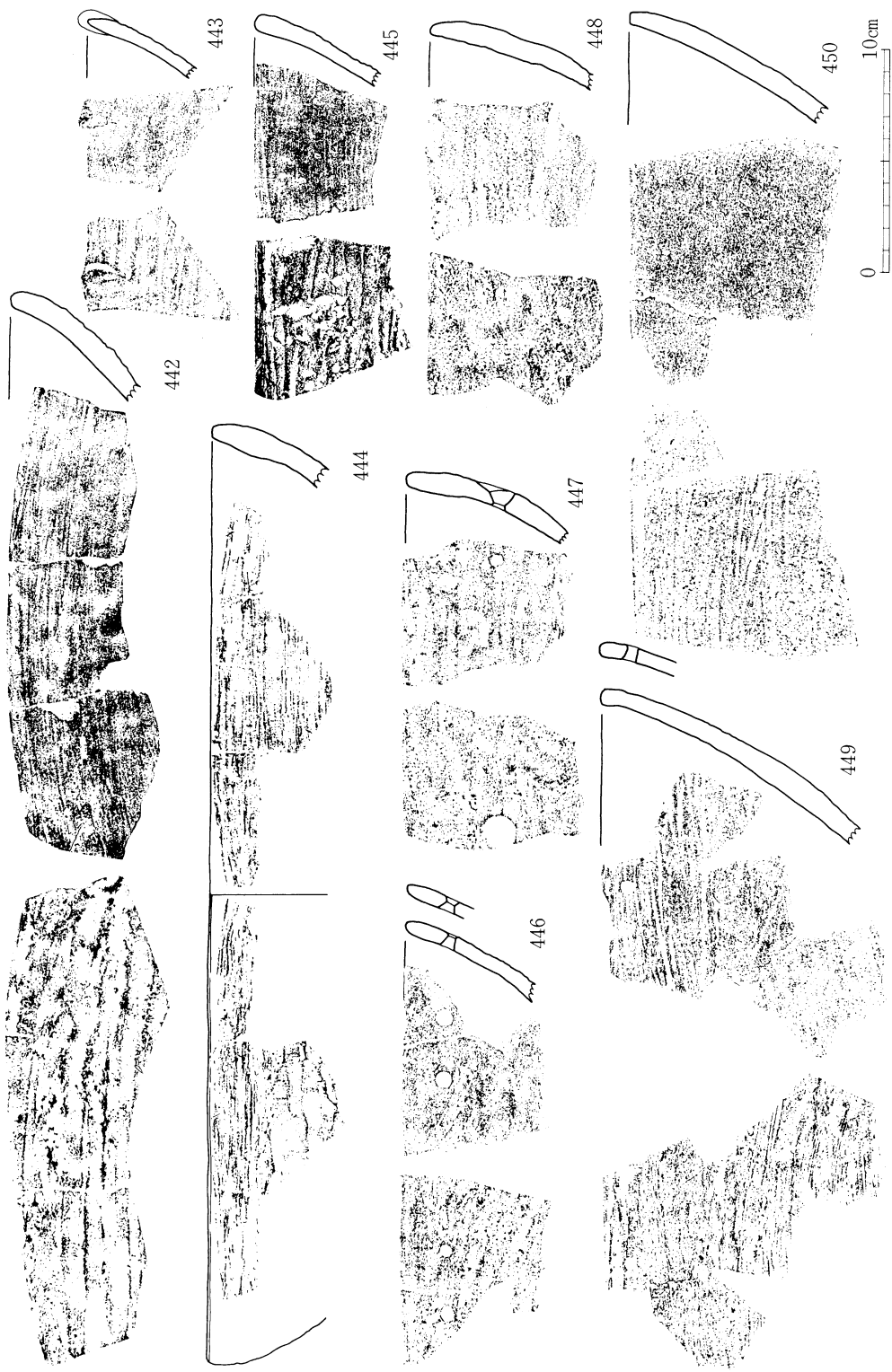
第119図 Ⅲ層出土土器(28) (H類)



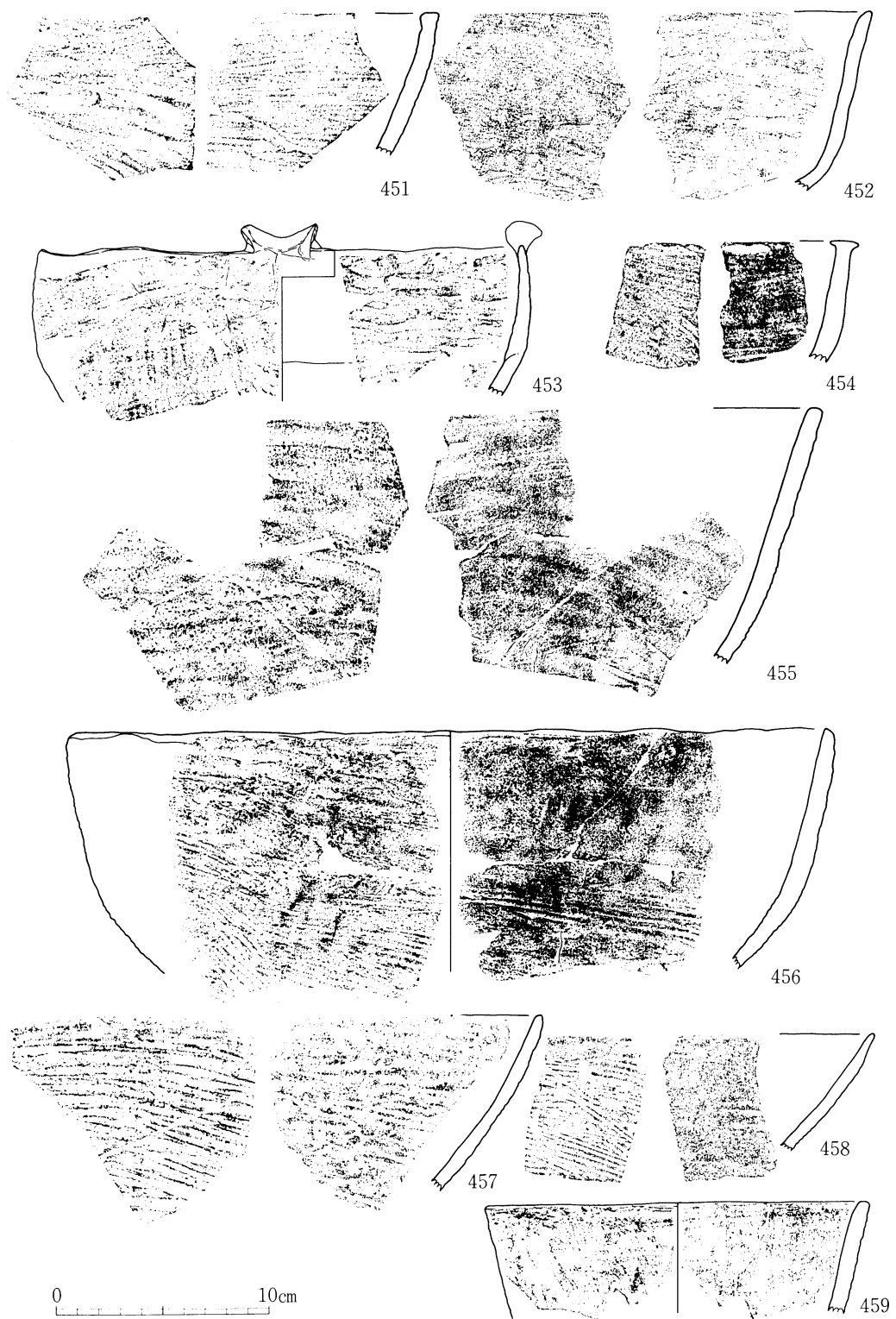
第120図 Ⅲ層出土土器(29) (H類)



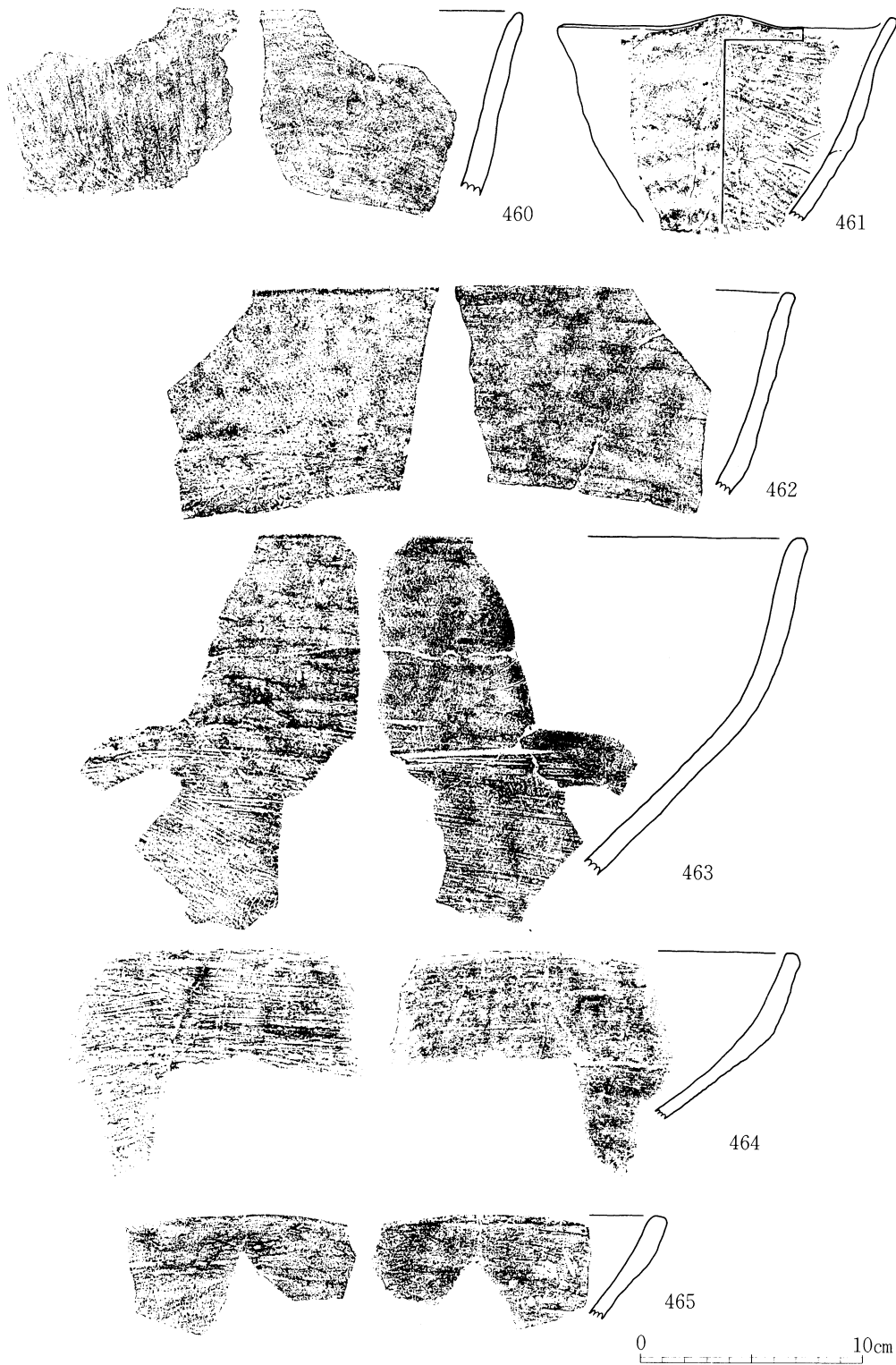
第121図 Ⅲ層出土土器(30) (H類)



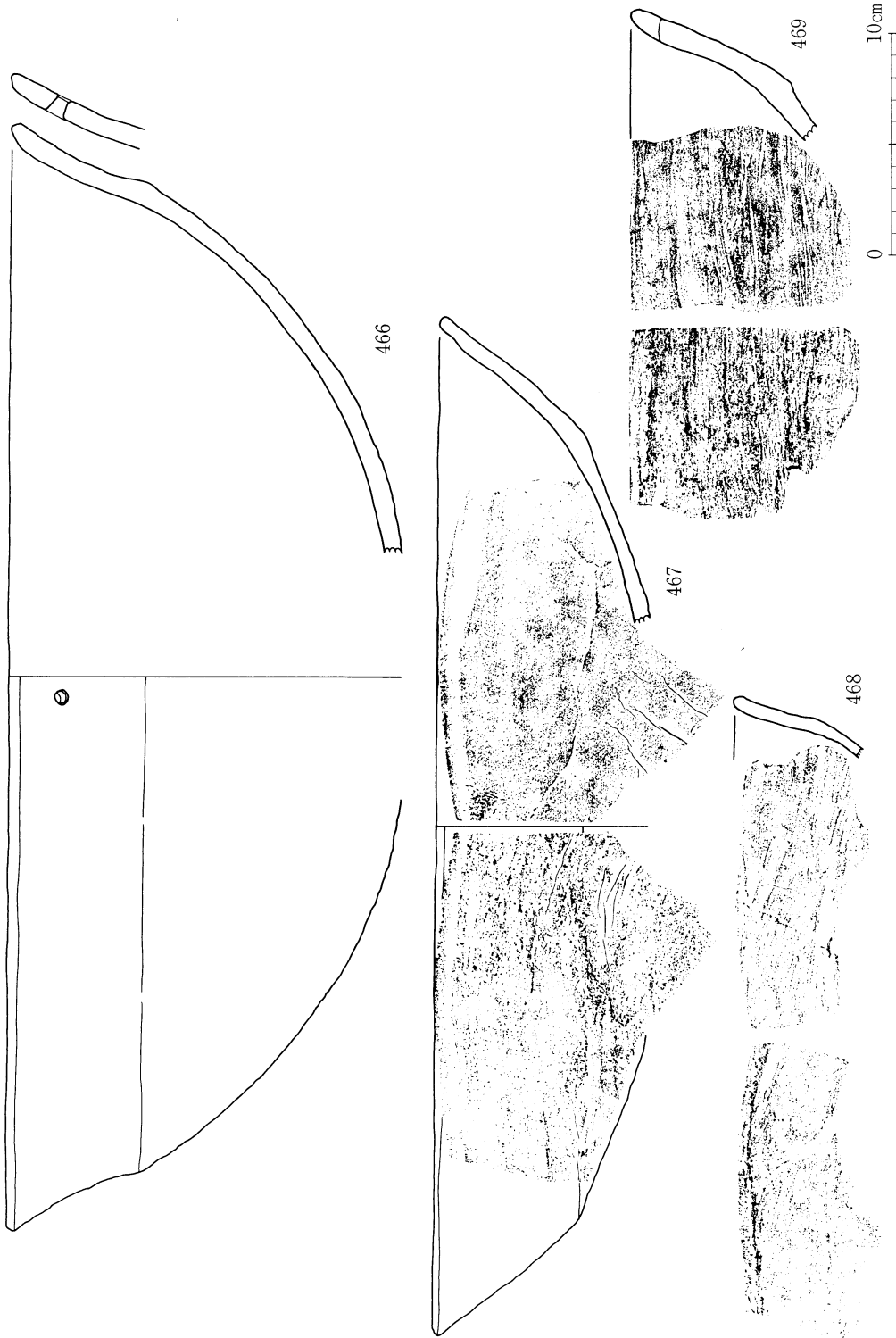
第122図 Ⅲ層出土土器(31) (H類)



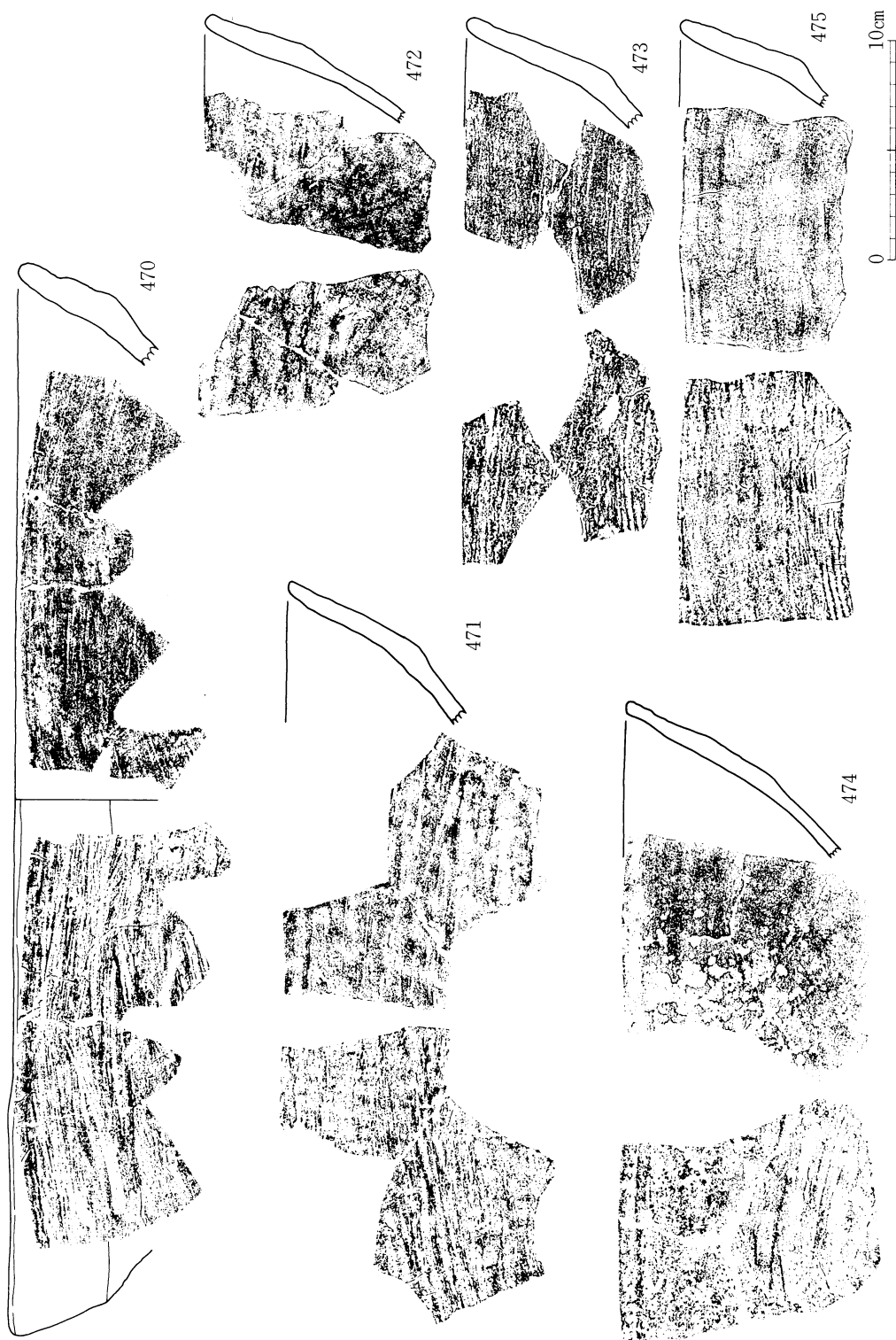
第123図 Ⅲ層出土土器(32) (H類)



第124図 Ⅲ層出土土器(33) (H類)



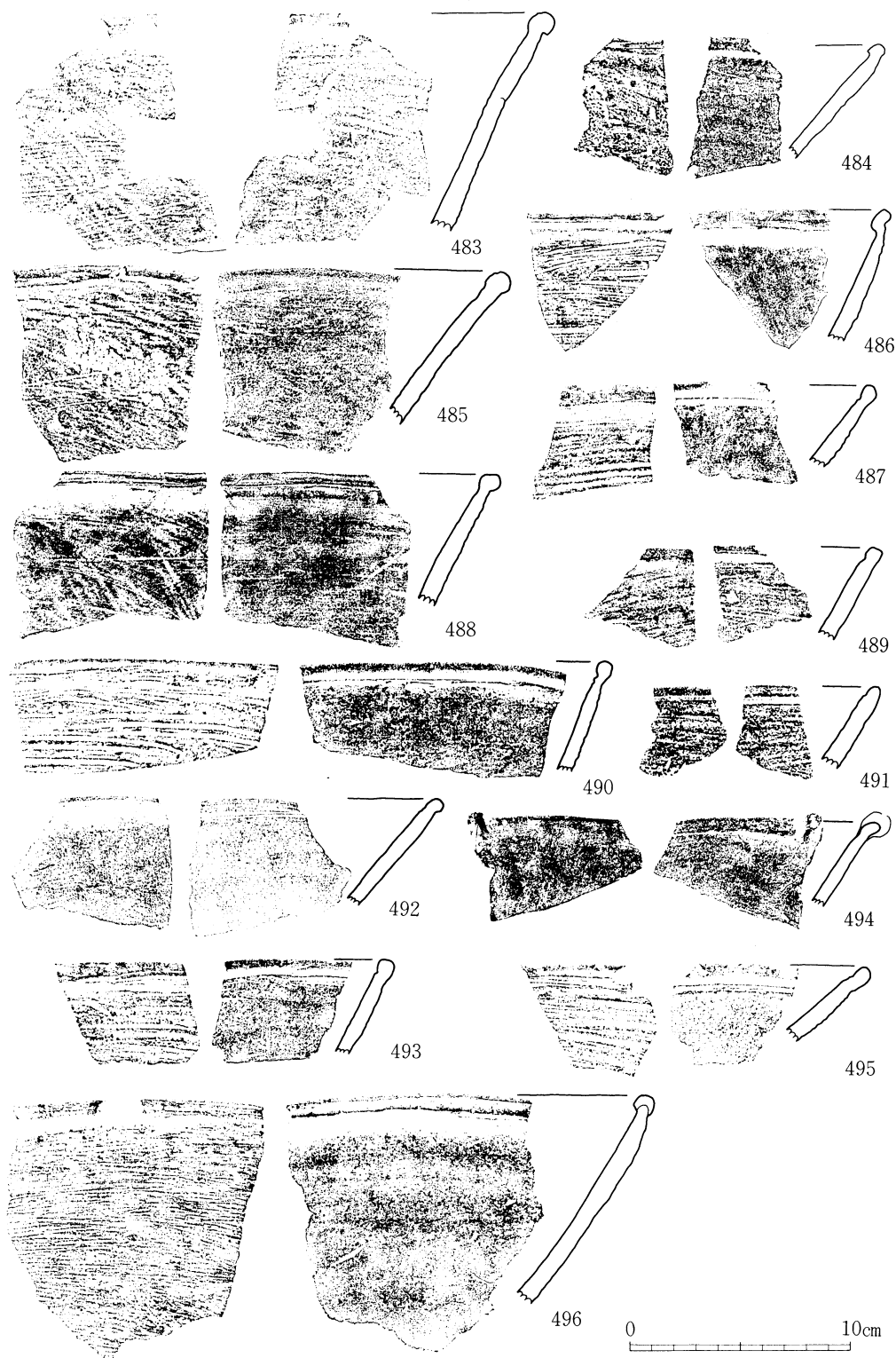
第125図 Ⅲ層出土土器(34) (H類)



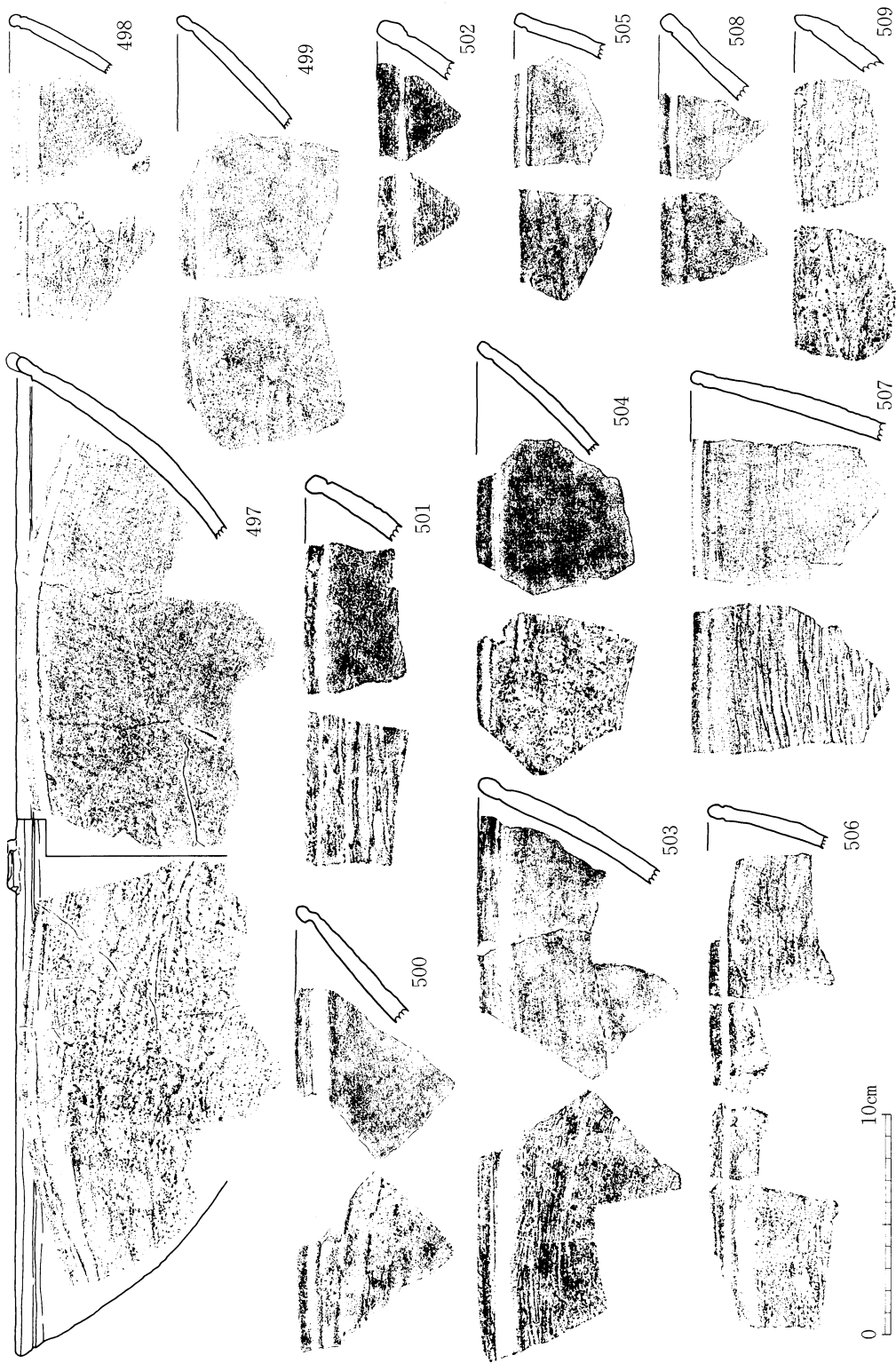
第126図 Ⅲ層出土土器(35) (H類)



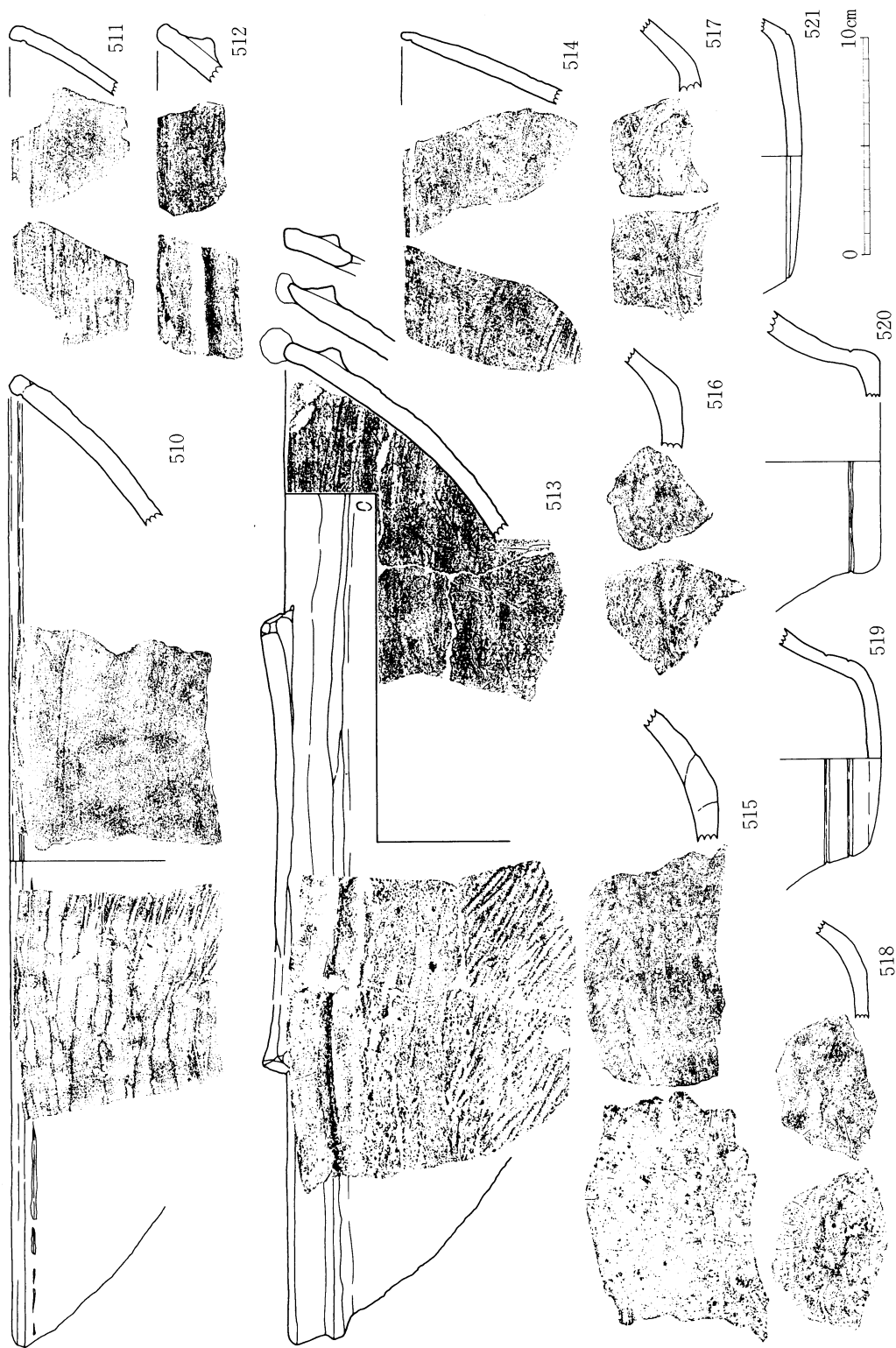
第127図 Ⅲ層出土土器(36) (H類)



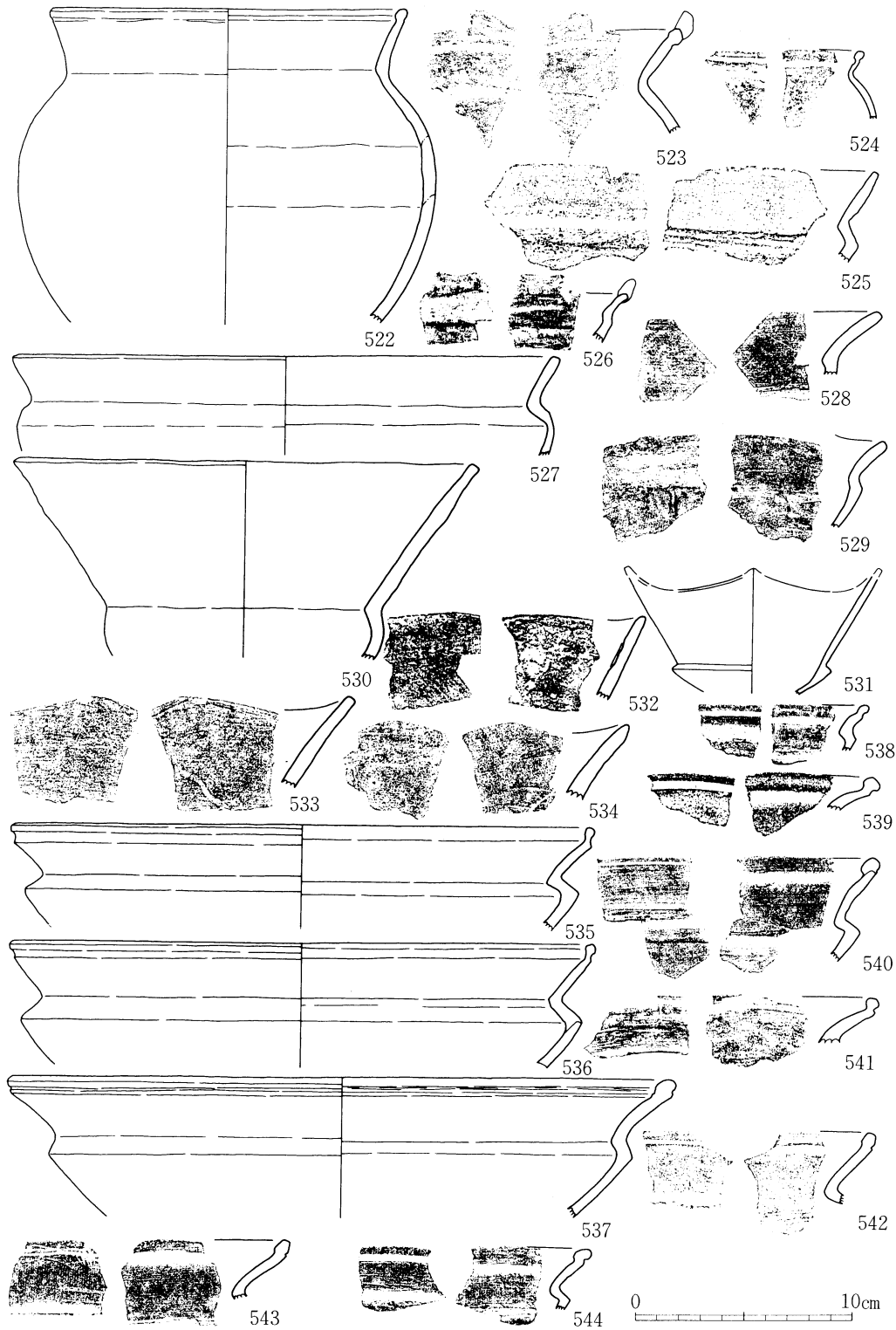
第128図 Ⅲ層出土土器(37) (H類)



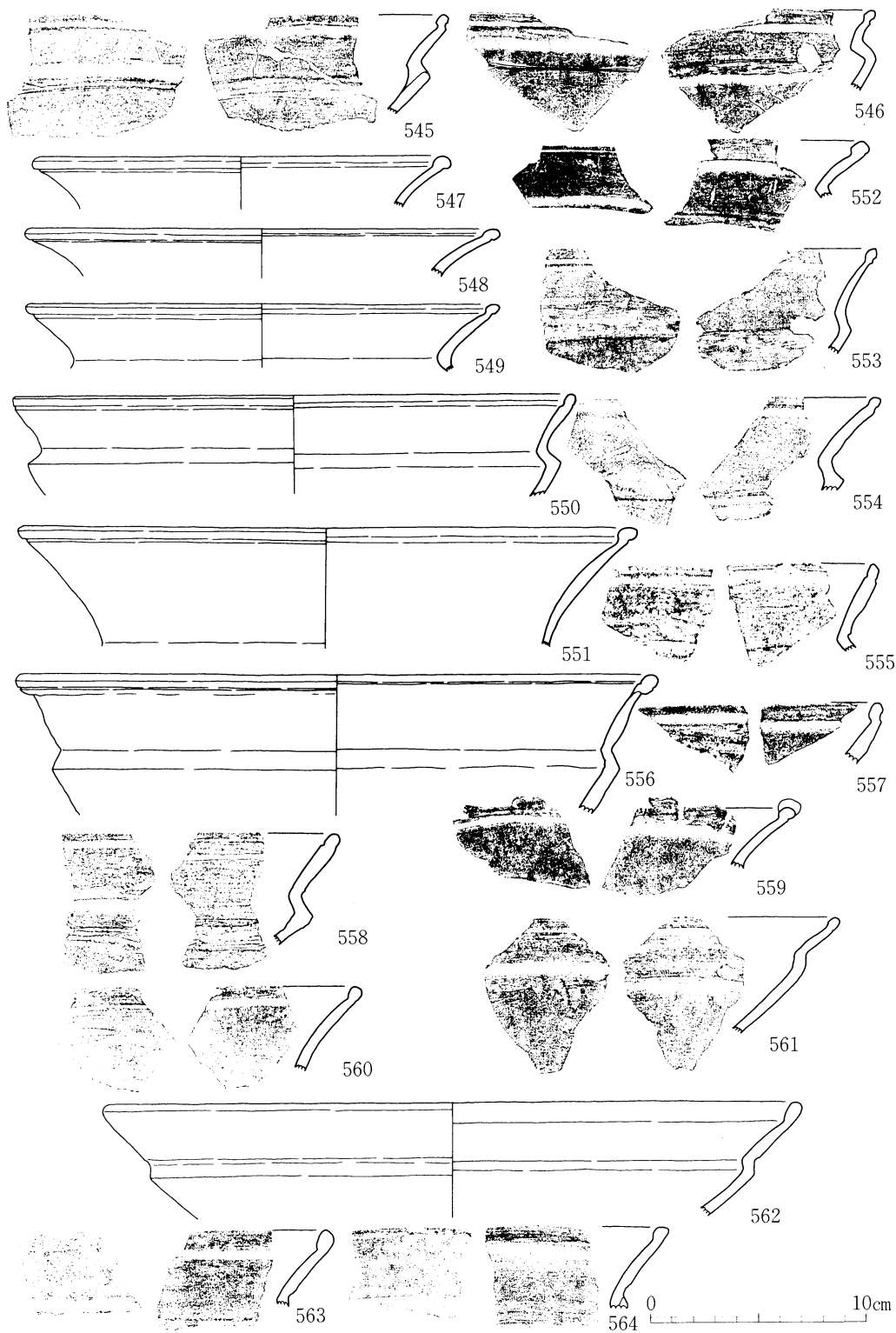
第129図 Ⅲ層出土土器(38) (H類)



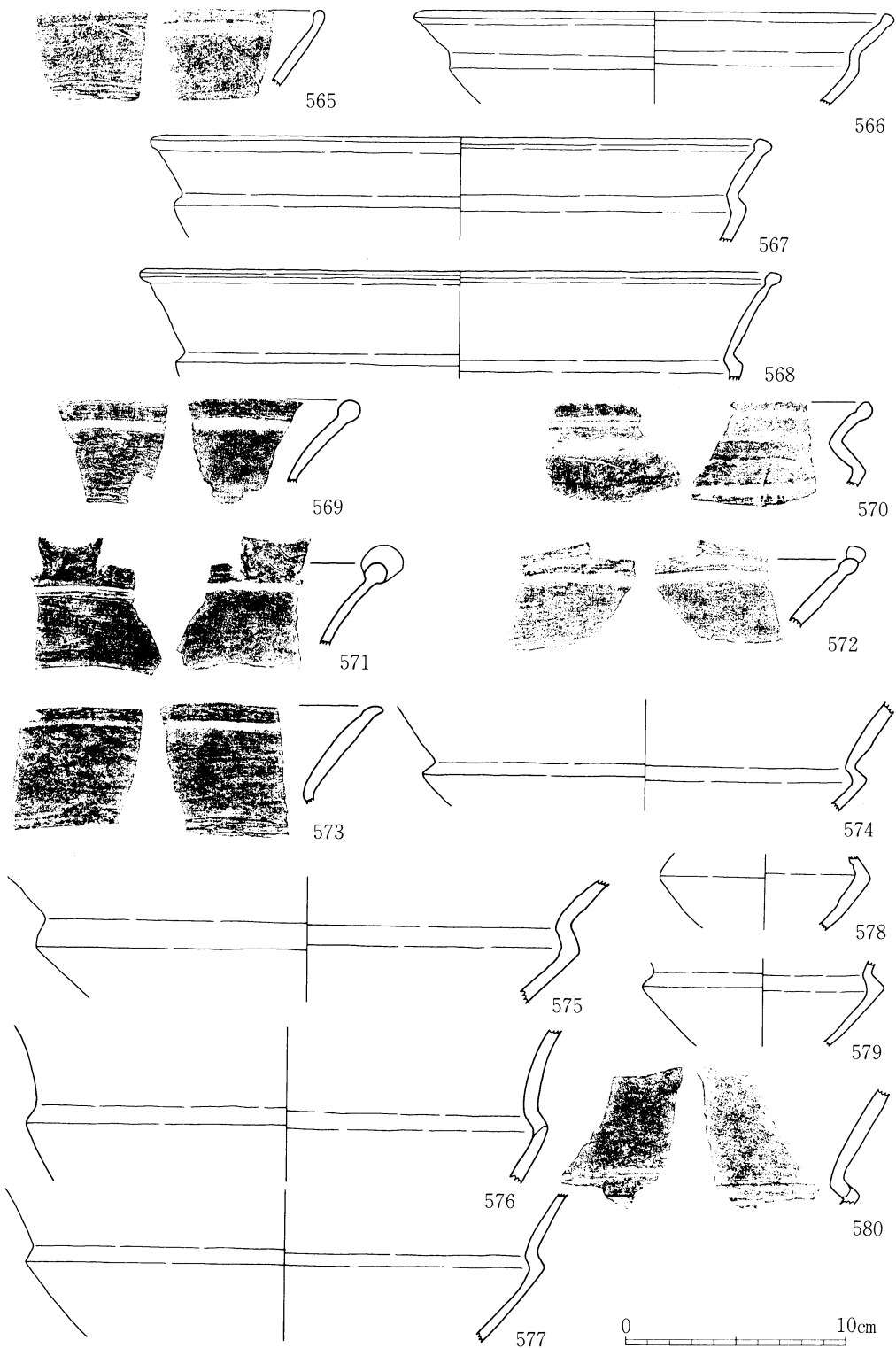
第130图 Ⅲ層出土土器(39) (H類, 底部)



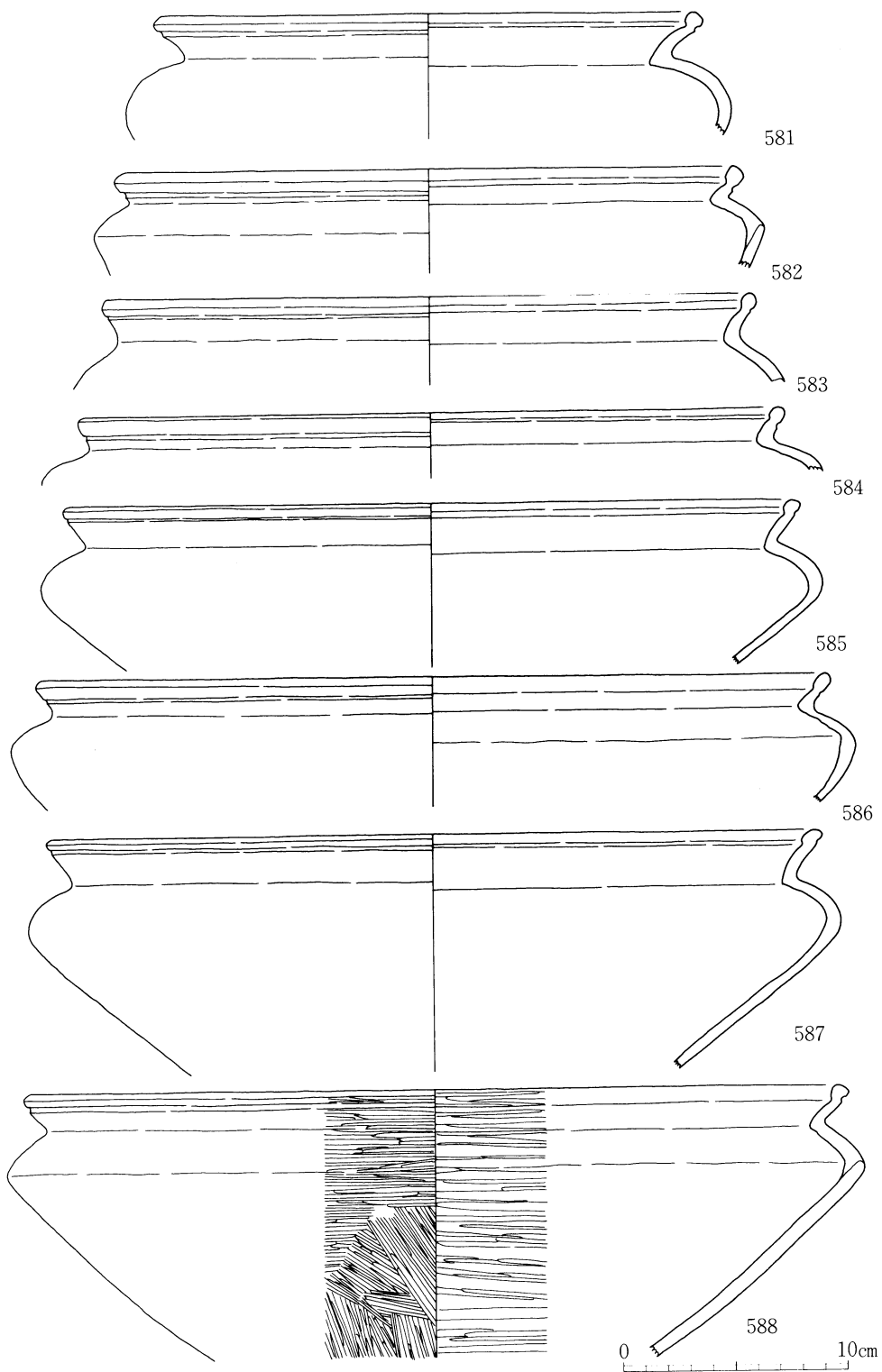
第131图 Ⅲ層出土土器(40) (I, J, K類)



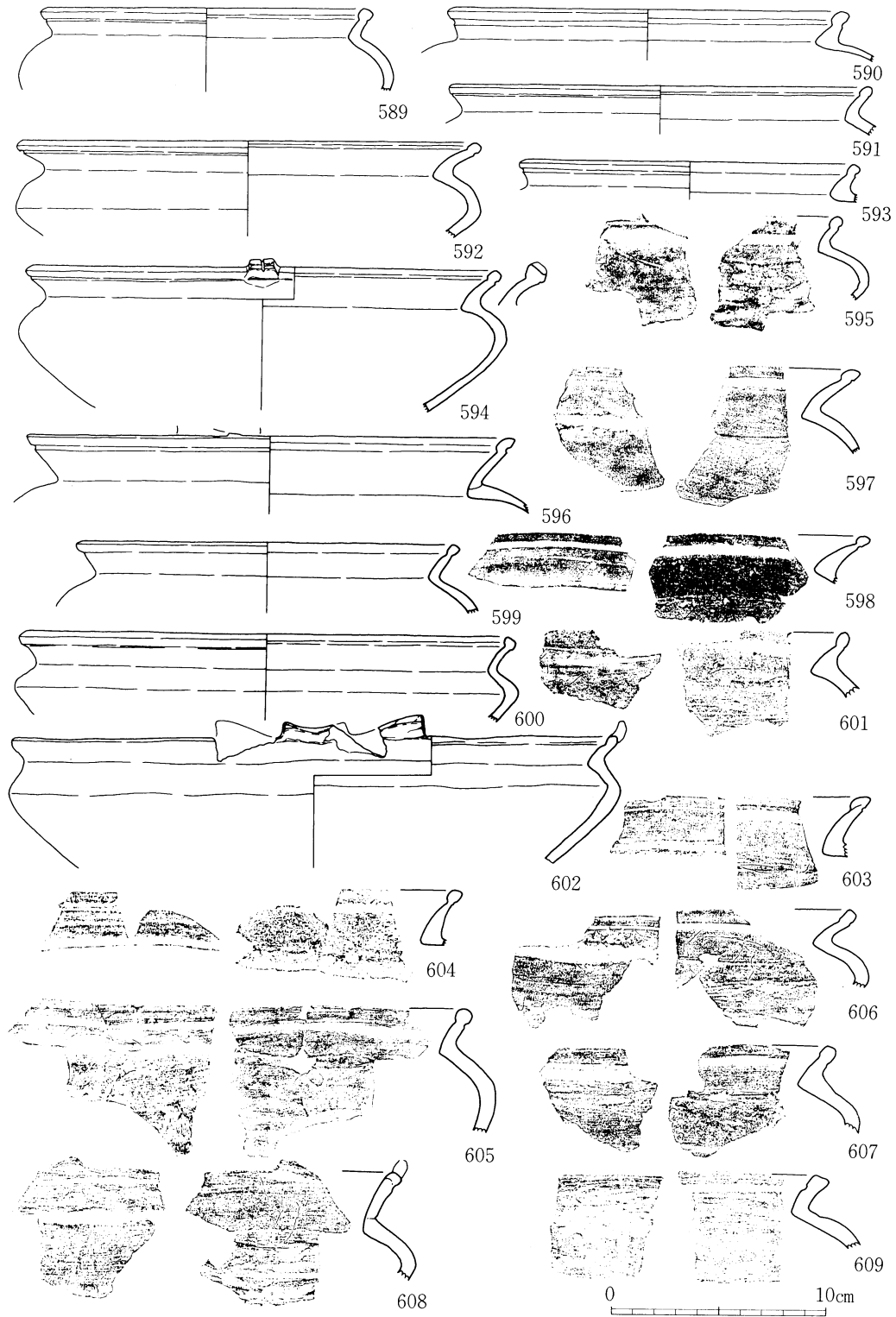
第132図 Ⅲ層出土土器(41) (K類)



第133图 Ⅲ層出土土器(42) (K類)



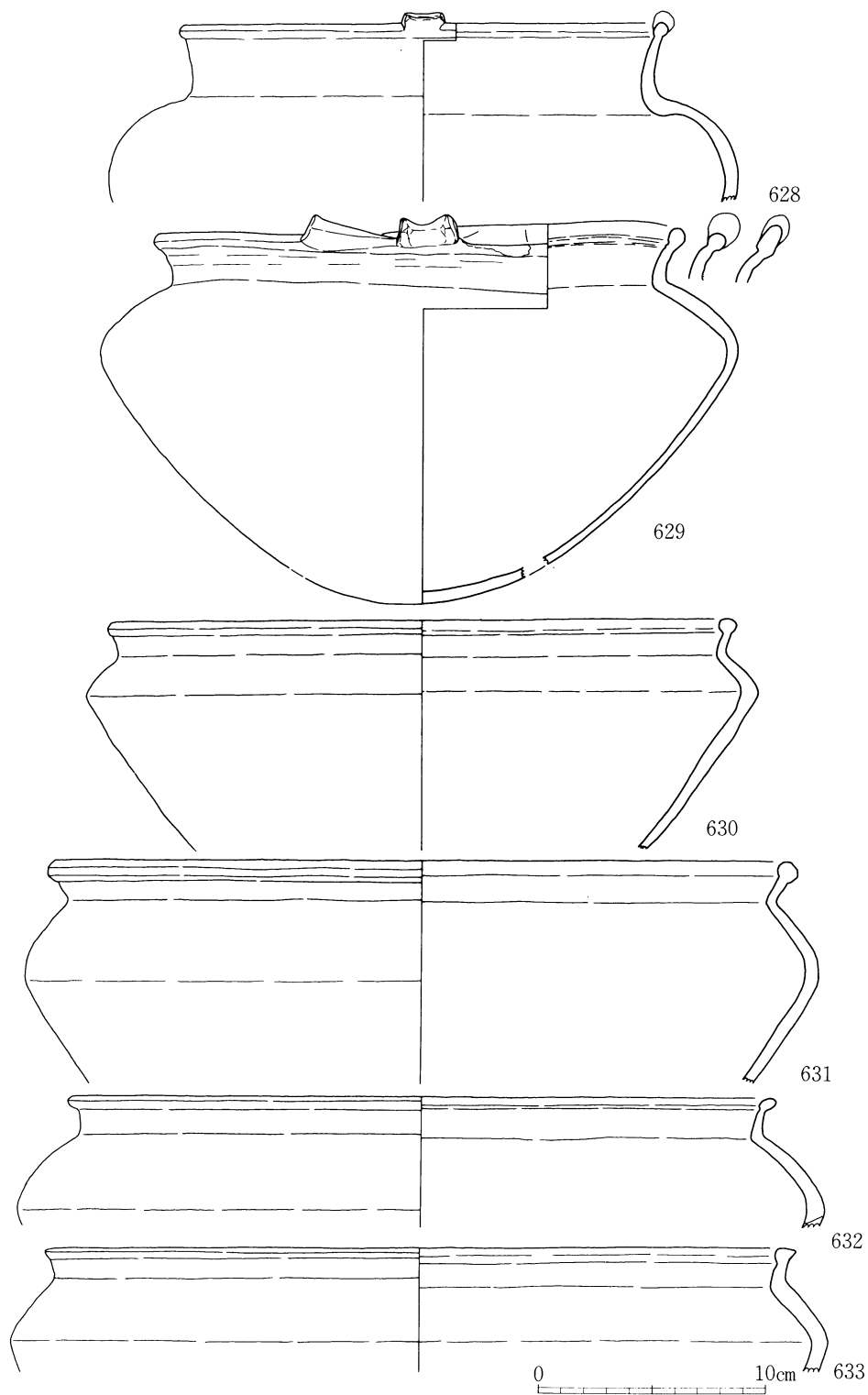
第134図 Ⅲ層出土土器(43) (L類)



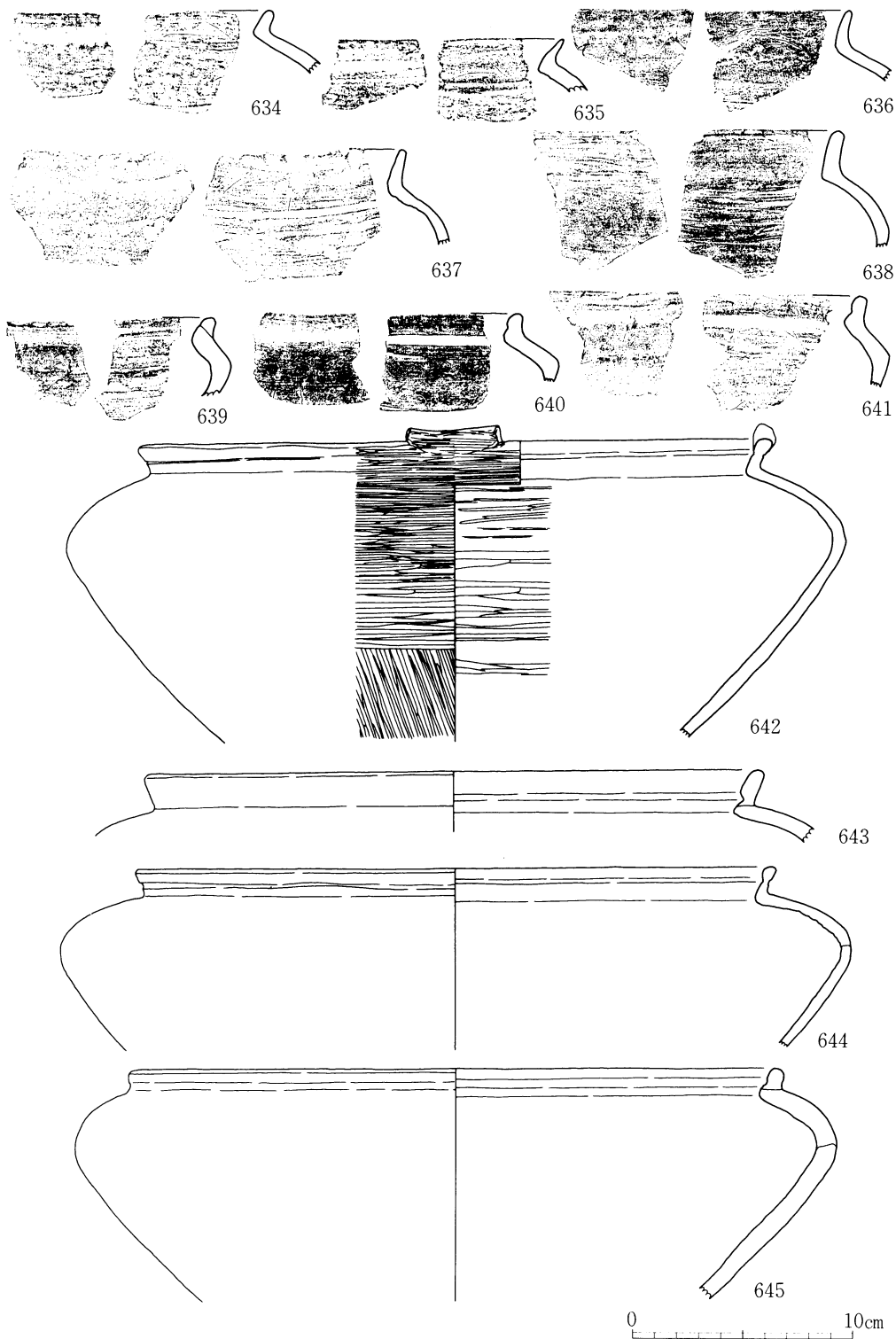
第135图 III層出土土器(44) (L類)



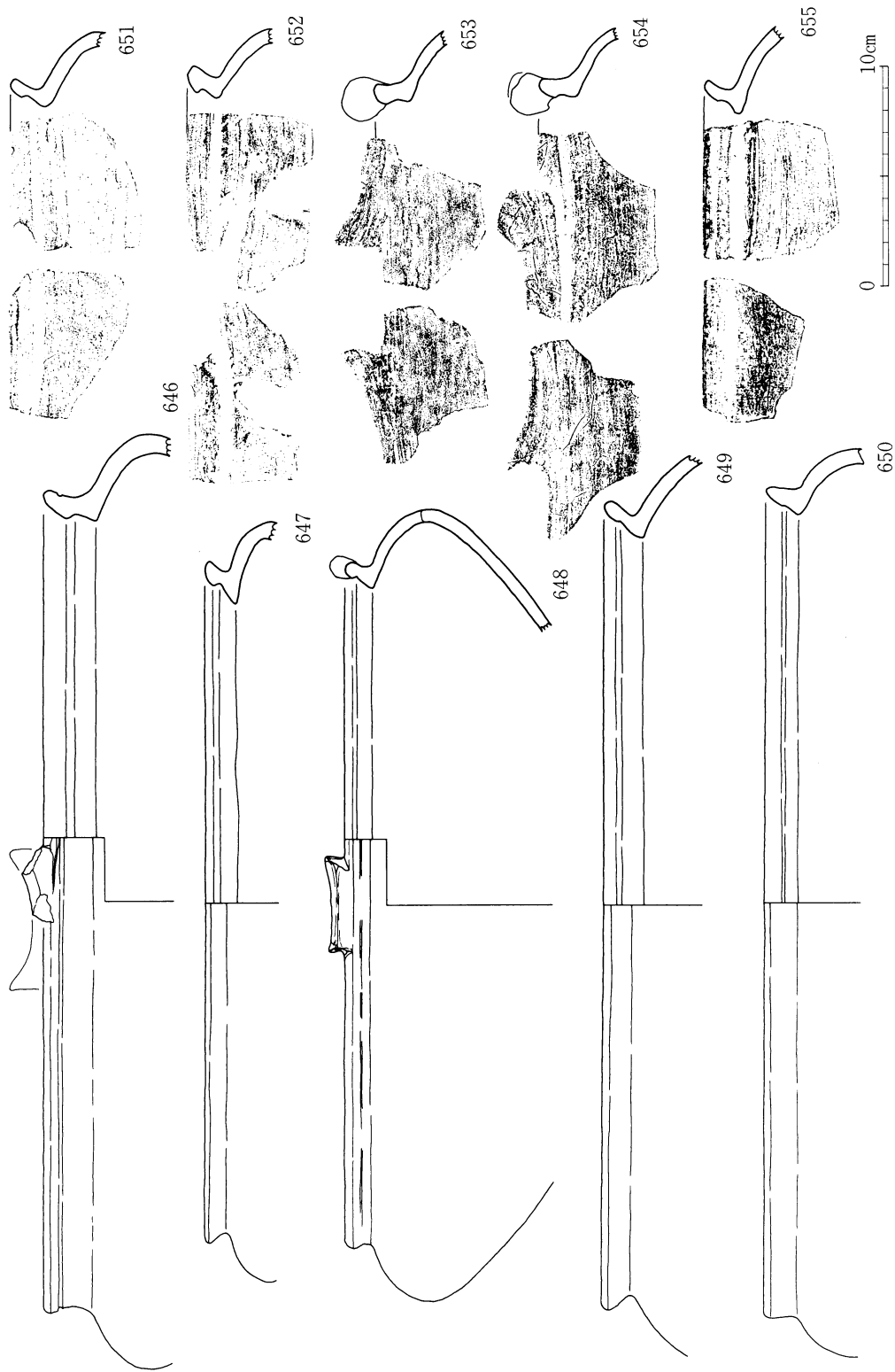
第136図 Ⅲ層出土土器(45) (L類)



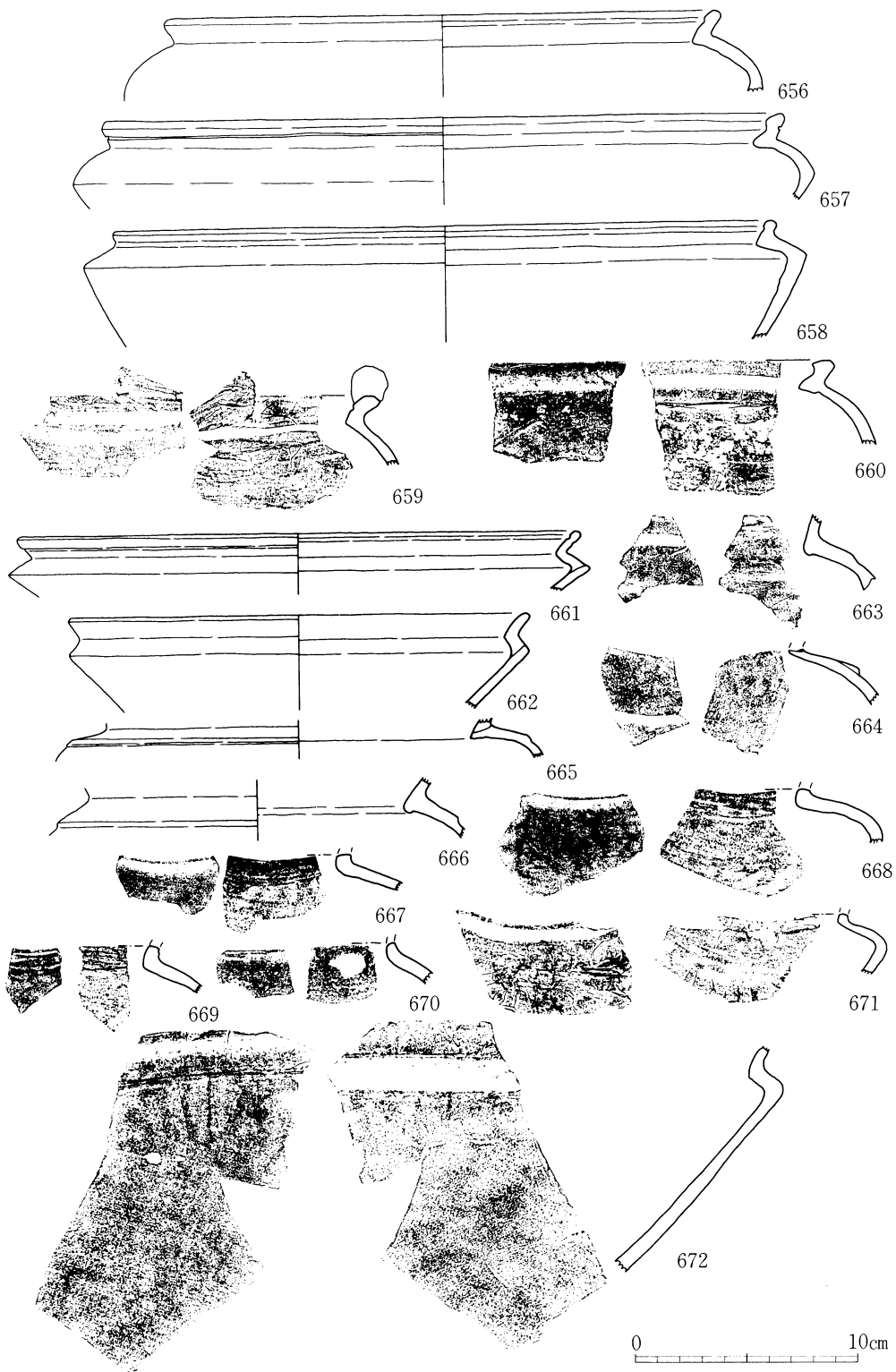
第137図 Ⅲ層出土土器(46) (L類)



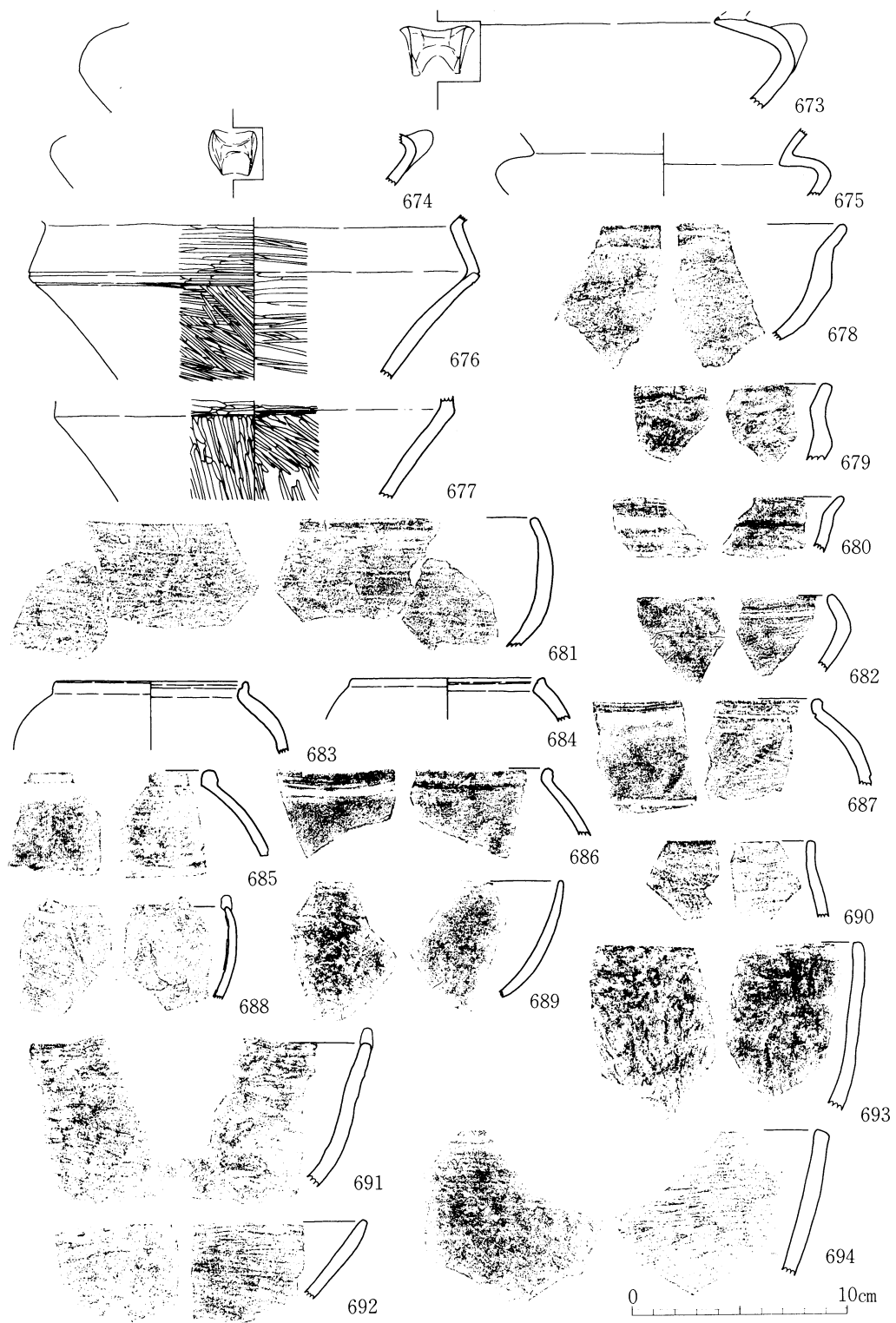
第138図 Ⅲ層出土土器(47) (M類)



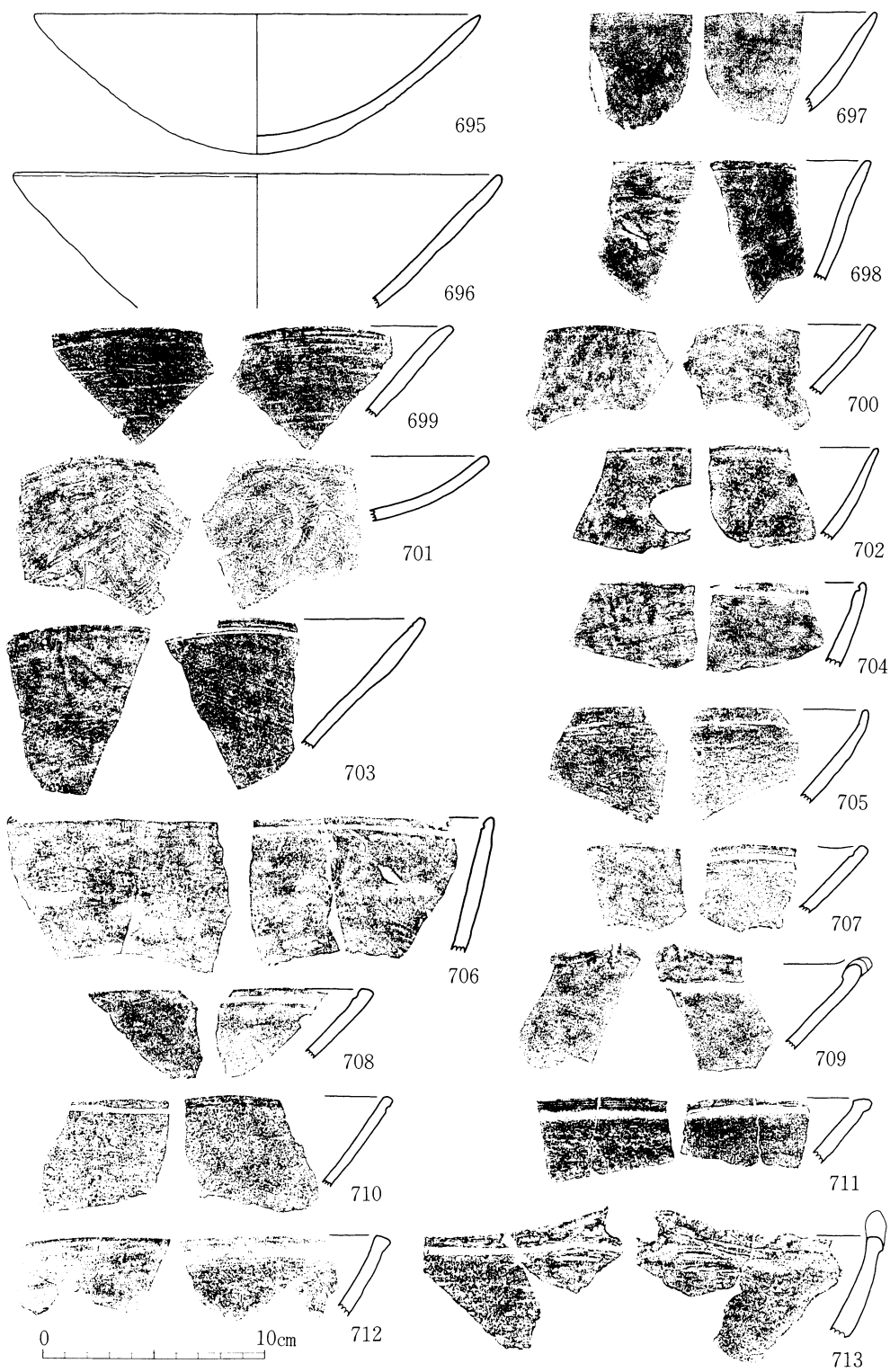
第139図 Ⅲ層出土土器(48) (M類)



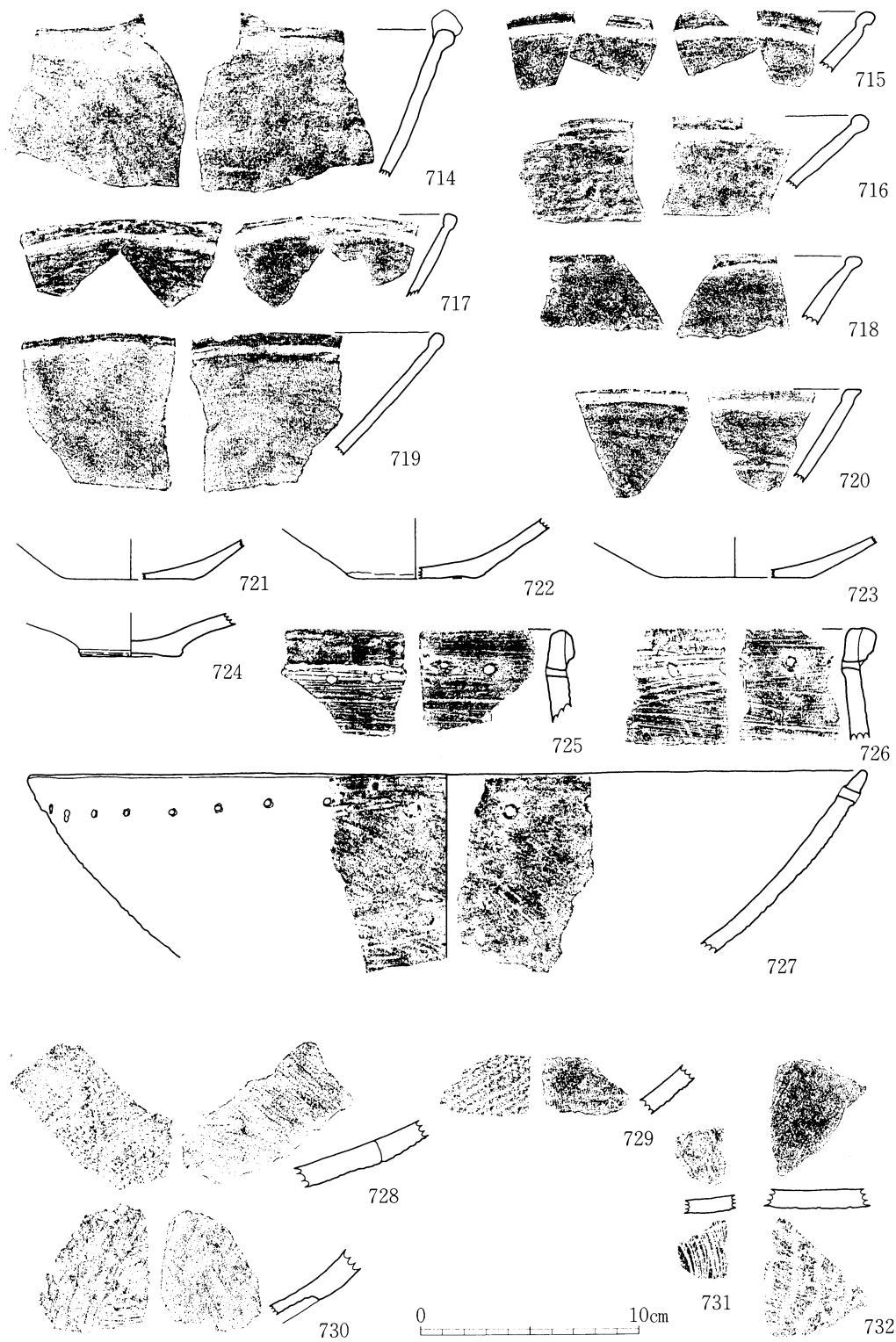
第140図 Ⅲ層出土土器(49) (M, N, O類)



第141図 Ⅲ層出土土器(50) (P, Q, R, S, T類)



第142図 Ⅲ層出土土器(51) (T類)



第143図 Ⅲ層出土土器(52) (T, U, V類)

第21表 Ⅲ層出土土器観察表(1)

番号	区	分類	器面の調整		備考	番号	区	分類	器面の調整		備考			
			外面	内面					外面	内面				
105	I-11	A	ナ	デ		153	I-28	A	ナ	デ				
106	H-18	A	ナ	デ		154	I-28	A	ナ	デ	外スス			
107	I-27	A	ナ	デ	外スス	155	H-10	A	条痕, ナデ	ミガキ	内外スス			
108	H-9	A	条痕, ナデ	ナ	デ	156	I-29	A	ナ	デ				
109	G-30	A	ナ	デ	ナデ, ケズリ	157	I-18		条痕	ナ	デ	外スス		
110	H-31	A	条痕, ナデ	条痕, ナデ		158	I-28		ナ	デ	ナ	デ		
111	I-27	A	条痕, ナデ	条痕, ナデ		159	I-18		ナ	デ	ナ	デ		
112	H-26	A	ナ	デ	ナ	デ	160	I-26	B	条痕, ナデ	条痕, ナデ	一部ミガキ		
113	I-26	A	ナデケズリ	ナデケズリ	外スス	161	I-26	B	条痕	条痕, ナデ				
114	H-31	A	条痕, ナデ	条痕, ナデ		162	I-19	B	ナ	デ	ナ	デ		
115	I-28	A	ナ	デ	ナ	デ	163	I-11	B	ナ	デ	ナ	デ	
116	I-26	A	ナ	デ	ナ	デ	164	H-18	B	条痕, ナデ	ナ	デ		
117	I-27	A	ナ	デ	ナ	デ	165	H-25	B	条痕, ナデ	ケズリ			
118	H-29	A	条痕, ナデ	条痕, ナデ	外スス	166	I-19	B	ナ	デ	ナ	デ		
119	I-26	A	ナ	デ	ナ	デ	167	I-19	B	ナ	デ	ナ	デ	
120	H-25	A	条痕, ナデ	条痕, ナデ		168	H-26	B	条痕, ナデ	条痕, ナデ				
121	H-26	A	条痕, ナデ	ナ	デ	169	H-25	B	条痕, ナデ	条痕, ナデ				
122	I-29	A	ケズリ	ナ	デ	170	I-26	B	ナデ, ケズリ	ナ	デ			
123	I-26	A	ナ	デ	ナ	デ	171	I-26	B	条痕, ナデ	条痕, ナデ			
124	H-7	A	条痕	剥落顯著		172	I-27	B	ナ	デ	ナ	デ		
125	I-12	A	ナ	デ	ナ	デ	173	H-26	B	条痕, ナデ	条痕, ナデ			
126	I-10	A	ナ	デ	条痕, ナデ	174	I-26	C	ナ	デ	ナ	デ	内外スス	
127	G-30	A	条痕, ナデ	条痕, ナデ		175	H-25	C	ナ	デ	ナ	デ	外スス	
128	H-24	A	条痕	条痕		176	I-11	C	ナ	デ	条痕			
129	G-16	A	ナ	デ	ナ	デ	177	I-26	C	条痕	条痕	補修孔		
130	G-34	A	ナ	デ	ナ	デ	178	H-14	C	条痕, ナデ	条痕, ナデ			
131	I-13	A	ナ	デ	ナ	デ	179	H-14	C	条痕, ナデ	条痕, ナデ	外スス		
132	H-30	A	条痕	条痕		180	H-25	C	ナ	デ	ナ	デ	外スス	
133	F-16	A	条痕	条痕		181	F-15	C	ナ	デ	ナ	デ		
134	I-12	A	ナ	デ	ナ	デ	182	H-9	C	条痕	ナ	デ	外スス	
135	H-34	A	ナ	デ	ナ	デ	183	I-29	C	ナ	デ	ナ	デ	
136	I-28	A	条痕, ナデ	条痕		184	H-27	C	条痕	条痕, ナデ	外スス			
137	G-13	A	条痕	ナ	デ	外スス	185	H-15	C	ナ	デ	条痕, ナデ		
138	M-10	A	条痕	条痕	内外スス	186	G-15	C	ナ	デ	ナ	デ		
139	H-11	A	ナ	デ	ナ	デ	187	H-10	C	ナ	デ	ナ	デ	スス, 補修孔
140	H-28	A	条痕	ナ	デ		188	I-19	C	ナデケズリ	ナ	デ		
141	I-12	A	条痕	ナ	デ	外スス	189	H-9	C	条痕, ナデ	条痕, ナデ			
142	H-10	A	条痕	ナ	デ	外スス	190	H-10	C	条痕, ナデ	条痕, ナデ	外スス, 内剥落		
143	G-12	A	条痕	条痕, ナデ		191	H-32	C	条痕, ナデ	条痕				
144	H-9	A	ナ	デ	ナ	デ	192	H-15		ナ	デ	ナ	デ	内外スス
145	I-28	A	条痕, ナデ	ナ	デ		193	H-9		ナ	デ	ナ	デ	外スス
146	I-18	A	ナ	デ	条痕, ナデ		194	I-29		条痕, ナデ	ナ	デ		
147	I-12	A	条痕	ナ	デ	外スス	195	I-14		条痕, ナデ	ナ	デ		
148	I-25	A	ナ	デ	ナ	デ	196	I-15		ナ	デ	条痕, ナデ		
149	I-18	A	ナ	デ	ナ	デ	197	H-26	C	条痕, ナデ	ナ	デ		
150	H-10	A	条痕	ナ	デ		198	I-27	C	条痕, ナデ	条痕, ナデ	外スス		
151	I-26	A	ナ	デ	ナ	デ	199			条痕, ナデ	条痕, ナデ			
152	G-8	A	条痕	条痕	内外剥落	200	H-9		ナ	デ	ナ	デ		

第22表 Ⅲ層出土土器観察表(2)

番号	区	分類	器面の調整		備考	番号	区	分類	器面の調整		備考
			外面	内面					外面	内面	
201	H-9		ナ デ	ナ デ		249	H-25	D	ナ デ	ナ デ	
202	I-25	C	条痕, ナデ	ナ デ		250	I-11	D	条痕, ナデ	ナ デ	外スス
203	H-11	C	ナ デ	ナ デ		251	I-26	D	ナ デ	ナ デ	
204	I-27	C	ナ デ	ナ デ		252	H-13	D	ナ デ	ナ デ	
205		C	条痕, ナデ	条痕, ナデ		253	H-13	D	条痕, ナデ	ナ デ	
206	G-15	C	条痕, ナデ	条痕, ナデ		254	H-11	D	ナ デ	ナ デ	外スス
207	H-15	C	ナ デ	ナ デ		255	I-24	D	条 痕	条痕, ナデ	外スス
208	H-10	C	条痕, ナデ	ナ デ		256	I-13	D	条痕, ナデ	ナ デ	外スス
209	H-12	C	ナ デ	ナ デ		257	H-11	D	条 痕	ナ デ	外スス
210	G-7	C	ナ デ	ナ デ		258	I-28	D	条 痕	条 痕	
211	I-27	C	条痕, ナデ	ナ デ	内外スス	259	I-27	D	ナ デ	ナ デ	
212	I-24	C	ナ デ	ナ デ		260	I-24	D	条痕, ナデ	条痕, ナデ	
213	H-13	C	ナ デ	ナ デ		261	H-26	D	条 痕	条痕, ナデ	
214	I-29	C	ナ デ	ナ デ		262	H-28	D	ナデ, ケズリ	ナ デ	
215	D-14	C	ナ デ	ナ デ	外スス	263	I-10	D	ナ デ	条痕, ナデ	
216	J-18	C	ナ デ	ナ デ	外スス	264	H-19	D	ナデ, ケズリ	ナ デ	
217	H-28	C	ナ デ	ナ デ	内外スス	265	H-26	D	ナ デ	条痕, ナデ	
218	G-13	C	ナ デ	ナ デ		266	I-30	D	条 痕	条 痕	
219	I-14	C	ナ デ	ナ デ		267	H-19	D	ナ デ	条 痕	剥落
220	I-28	C	ナ デ	ナ デ		268	H-27	D	ナ デ	ナ デ	
221	H-11	C	ナ デ	ナ デ		269	H-27	D	ナ デ	ナ デ	外スス
222	H-28	C	ナ デ	ナ デ		270	G-14	D	条痕, ナデ	条痕, ナデ	外スス
223	H-27	C	条痕, ナデ	ナ デ		271	I-10	D	ナ デ	ナ デ	外スス
224	H-20	C	ナ デ	ナ デ		272	H-27	D	ナ デ	ナ デ	外スス
225	H-27	C	条 痕	条痕, ナデ		273	H-10	E	条痕, ナデ	条痕, ナデ	
226	H-10	C	ナ デ	ナ デ	外スス	274	H-11	E	ナ デ	ナ デ	
227	G-16	C	ナ デ	ナ デ		275	I-27	E	ナ デ	ナ デ	
228	I-9	C	条 痕	ナ デ		276	I-27	E	ナ デ	条痕, ナデ	
229	G-9	C	ナ デ	ナ デ		277	H-27	E	ナ デ	条痕, ナデ	外スス
230	G-12	C	ナ デ	ナ デ		278	H-10	E	ナ デ	ナ デ	外スス
231	G-13	C	ナ デ	ナ デ		279	H-32	E	ケズリ	ケズリ	
232	I-13	C	ナ デ	ナ デ	内外スス	280	I-26	E	ナ デ	ナ デ	
233	H-27	C	ナ デ	ナ デ		281	J-36	E	ナ デ	条 痕	外スス
234	I-27	C	ナ デ	ナ デ		282	H-16		条痕, ナデ	ナ デ	外スス
235	I-13	C	ナ デ	ナ デ		283	I-19		条痕, ナデ	ナ デ	
236	H-10	C	ナ デ	ナ デ	外スス	284	H-27		条痕, ナデ	条 痕	
237	J-16	C	ナ デ	ナ デ		285	H-10		ナ デ	ナ デ	内外スス
238	I-24	D	ナ デ	ナ デ	外スス	286	G-9		条 痕	条痕, ナデ	
239	H-11	D	条痕, ナデ	条 痕	外スス	287	I-16	F	ナ デ	ナ デ	
240	I-11	D	条痕, ナデ	条 痕		288	H-30	F	ナ デ	ナ デ	
241	H-24	D	条痕, ナデ	ナ デ		289	I-28	F	ナ デ	ナ デ	
242	H-35	D	ナ デ	ナ デ	外スス	290	I-15	F	ナ デ	ナ デ	
243	I-9	D	条 痕	ナ デ		291	G-10	F	ナ デ	ナ デ	
244	I-25	D	ナ デ	条痕, ナデ		292	H-9	F	ナ デ	ナ デ	
245	G-23	D	条 痕	ナ デ		293	I-12	F	ナ デ	ナ デ	
246	I-29	D	条 痕	ナ デ		294	I-13	F	条痕, ナデ	ナ デ	
247	H-15	D	条痕, ナデ	条 痕	外スス	295	H-31	F	ナ デ	ナ デ	
248	I-25	D	条 痕	条 痕		296	I-13	F	条痕, ナデ	ナ デ	

第23表 Ⅲ層出土土器観察表(3)

番号	区	分類	器面の調整		備考	番号	区	分類	器面の調整		備考
			外面	内面					外面	内面	
297	I-11	F	ナデ,ケズリ	ナデ		432	H-28	H	ナデ	ナデ	外スス
385	H-18	G	ナデ,ケズリ	ナデ	外スス	433	I-26	H	ナデ	研磨	外スス
386	I-16	G	ナデ	ナデ	スス	434	H-27	H	ナデ	ナデ	
387	H-27	G	ナデ	ナデ	スス	435	I-11	H	ナデ	研磨	外スス
388	H-18	G	ナデ	ナデ	外赤色顔料	436	I-18	H	条痕,ナデ	研磨	
389	I-16	G	ナデ	ナデ	外赤色顔料	437	I-29	H	ナデ	ナデ	内外スス
390	I-14	G	条痕,ナデ	研磨		438	I-18	H	条痕,ナデ	研磨	
391	H-16		ナデ	ナデ	外赤色顔料	439	I-26	H	ナデ	研磨	外スス
392	I-11	H	ナデ	条痕,ナデ		440	I-26	H	ナデ,ケズリ	条痕,研磨	内外スス
393	I-16	H	ナデ	ナデ		441	I-29	H	条痕	ナデ	外スス
394	H-28	H	条痕	条痕,ナデ		442	I-26	H	ナデ	研磨	内外スス
395	I-15	H	条痕	ナデ		443	I-12	H	条痕,ナデ	ナデ	
396	I-27	H	条痕,ナデ	ナデ		444	H-27	H	条痕,ケズリ	条痕,研磨	
397	G-33	H	ケズリ	研磨		445	H-26	H	ナデ	研磨	
398	H-29	H	ナデ,ケズリ	条痕,研磨		446	I-19	H	ナデ	ナデ	内外スス,補修孔
399	H-32	H	ナデ	ナデ	外スス	447	H-31	H	ナデ	ナデ	外スス,補修孔
400	H-26	H	ナデ	研磨	外スス	448	H-32	H	ナデ	ナデ	外スス
401	H-27	H	ナデ	研磨		449	I-18	H	条痕,ナデ	条痕,研磨	外スス,補修孔
402	H-20	H	条痕	研磨	外スス	450	H-10	H	条痕,ナデ	研磨	外スス
403	H-33	H	ナデ	ナデ	外スス	451	I-25	H	ナデ	条痕,ナデ	
404	H-27	H	ナデ	ナデ,研磨	外スス	452	I-27	H	ナデ	研磨	外スス
405	H-26	H	ナデ	ナデ		453	I-26	H	条痕,ナデ	ナデ	
406	G-9	H	ナデ	条痕,ナデ	内スス	454	I-15	H	ナデ	ナデ	
407	H-14	H	ナデ	研磨		455	I-25	H	ナデ	研磨	外スス
408	I-26	H	条痕	条痕,ナデ		456	I-26	H	条痕,ナデ	条痕,ナデ	内外スス
409	H-8	H	ナデ	研磨	外スス	457	H-10	H	条痕,ナデ	条痕,ナデ	外スス
410	I-19	H	ケズリ	研磨		458	I-27	H	条痕,ナデ	ナデ	
411	H-10	H	ナデ	研磨	外スス	459	H-26	H	研磨?	研磨	外スス
412	H-26	H	ナデ,ケズリ	条痕,研磨		460	H-26	H	ナデ	ナデ,研磨	外スス
413	I-12	H	ナデ	研磨		461	H-31	H	ナデ	ナデ	内外スス
414	I-15	H	条痕,ナデ	ナデ		462	H-15	H	ナデ	ナデ,研磨	内外スス
415	I-29	H	ケズリ	ナデ		463	I-26	H	条痕,ナデ	条痕,ナデ	外スス
416	H-32	H	条痕	研磨		464	H-19	H	条痕,ナデ	研磨	
417	H-13	H	ナデ	ナデ		465	H-26	H	ナデ	ナデ,研磨	外スス
418	I-26	H	ナデ	ナデ		466	I-18	H	ナデ	条痕,研磨	
419	I-19	H	ナデ	研磨	内外スス	467	I-10	H	ナデ	ナデ	外スス
420	H-27	H	ナデ	研磨	外スス	468	H-32	H	ナデ	研磨	
421	I-24	H	条痕	ナデ		469	I-26	H	ナデ	研磨	外スス
422	I-15	H	ナデ	研磨		470	I-25	H	条痕,ナデ	ナデ	
423	H-26	H	ナデ	ナデ		471	I-27	H	ナデ	研磨	
424	G-13	H	ナデ	ナデ,研磨		472	H-26	H	ナデ	研磨	外スス
425	I-29	H	ナデ,ケズリ	ナデ,研磨	外スス	473	H-26	H	ナデ	研磨	外スス
426	H-17	H	条痕,ナデ	研磨	外スス	474	G-20	H	ナデ	研磨	内剥落
427	H-27	H	ナデ,ケズリ	研磨	外スス	475	H-26	H	ナデ	研磨	外スス
428	I-26	H	ナデ	研磨		476	I-26	H	条痕,ナデ	ナデ	
429	I-18	H	ナデ	研磨		477		H	ナデ	研磨	
430	H-11	H	ナデ	研磨		478	G-31	H	ナデ	研磨	
431	G-13	H	ナデ	ナデ	補修孔	479	I-11	H	条痕	ナデ	

第24表 Ⅲ層出土土器観察表(4)

番号	区	分類	器面の調整		備考	番号	区	分類	器面の調整		備考
			外面	内面					外面	内面	
480	I-27	H	条痕	ナデ		535	H-14	K	研磨	研磨	内外スス
481	J-16	H	ナデ	ナデ		536	H-14	K	研磨	研磨	内外スス
482	I-18	H	ナデ	ナデ, 研磨		537	I-14	K	研磨	研磨	
483	G-32	H	条痕	条痕, ナデ		538	H-7	K	研磨	研磨	
484	I-27	H	ナデ	ナデ		539	I-17	K	研磨	研磨	
485	G-32	H	ナデ	ナデ	外スス	540	H-18	K	研磨	研磨	
486	I-27	H	条痕	研磨	内外スス	541	F-16	K	研磨	研磨	
487	J-18	H	条痕	研磨	外スス	542	G-11	K	研磨	研磨	
488	G-32	H	ナデ	ナデ	外スス	543	H-9	K	研磨	研磨	
489	G-6	H	ナデ	研磨		544	I-30	K	研磨	研磨	
490	H-16	H	条痕	研磨	外スス	545	H-8	K	研磨	研磨	内外スス
491	H-26	H	ナデ	ナデ		546	H-18	K	研磨	研磨	
492	H-15	H	ナデ	研磨	外スス	547	H-26	K	研磨	研磨	
493	H-25	H	ナデ	研磨		548	I-27	K	研磨	研磨	
494	H-15	H	条痕	研磨	外スス	549	I-10	K	研磨	研磨	
495	H-20	H	条痕	ナデ	外スス	550	D-13	K	研磨	研磨	外スス
496	I-26	H	ナデ	研磨	外スス	551	I-26	K	研磨	研磨	
497	D-14	H	ナデ	研磨		552	H-18	K	研磨	研磨	
498	H-15	H	ナデ	ナデ		553	I-17	K	研磨	研磨	
499	G-14	H	ナデ	研磨	内外スス	554	H-11	K	研磨	研磨	
500	H-27	H	ナデ	研磨	内外スス	555	I-10	K	研磨	研磨	
501	I-22	H	条痕	研磨	外スス	556	H-19	K	研磨	研磨	内外スス
502	I-18	H	ナデ	研磨		557	I-27	K	研磨	研磨	
503	I-27	H	ナデ	研磨	内外スス	558	H-7	K	研磨	研磨	外スス
504	H-10	H	ナデ	研磨	内外スス	559	I-27	K	研磨	研磨	
505	H-6	H	ナデ	研磨	外スス	560	H-25	K	研磨	研磨	
506	J-17	H	ナデ	ナデ	外スス	561	G-12	K	研磨	研磨	
507	H-28	H	条痕, ナデ	研磨	内外スス	562	H-15	K	研磨	研磨	
508	H-26	H	ナデ	ナデ		563	H-15	K	研磨	研磨	
509	H-19	H	ナデ	ナデ	内剥落	564	H-10	K	研磨	研磨	
510	G-23	H	条痕, ケズリ	研磨	外スス	565	I-14	K	研磨	研磨	
511	H-6	H	ナデ	研磨	外スス	566	G-13	K	研磨	研磨	
512	I-27	H	ナデ	研磨		567	I-10	K	研磨	研磨	
513	I-27	H	条痕, ケズリ	研磨	外スス	568	I-11	K	研磨	研磨	
514	G-12	H	条痕	研磨	内外スス	569	I-28	K	研磨	研磨	
522	I-12	I	研磨	研磨		570	I-11	K	研磨	研磨	
523	H-26	I	研磨	研磨		571	I-24	K	研磨	研磨	
524	H-12	I	研磨	研磨		572	I-15	K	研磨	研磨	
525	H-16	J	研磨	研磨	内外スス	573	G-15	K	研磨	研磨	
526	I-29	J	研磨	研磨		574	I-27	K	研磨	研磨	内剥落
527	H-16	J	研磨	研磨	内外スス	575	I-14	K	研磨	研磨	
528	I-11	J	研磨	研磨		576	I-11	K	研磨	研磨	
529	H-29	J	研磨	研磨		577	H-9	K	研磨	研磨	外スス
530	I-28	J	研磨	研磨	内外スス	578	I-21	K	研磨	研磨	
531	I-29	J	研磨	研磨		579	H-26	K	研磨	研磨	
532	I-24	J	研磨	研磨		580	I-29	K	研磨	研磨	
533	H-26	J	研磨	研磨		581		L	研磨	研磨	
534	I-26	J	研磨	研磨	外スス	582	H-26	L	研磨	研磨	

第25表 Ⅲ層出土土器観察表(5)

番号	区	分類	器面の調整		備考	番号	区	分類	器面の調整		備考
			外面	内面					外面	内面	
583	H-27	L	研磨	研磨		631	I-24	L	研磨	研磨	
584	H-13	L	研磨	研磨		632	I-28	L	研磨	研磨	
585	H-28	L	研磨	研磨		633	I-29	L	研磨	研磨	
586	H-11	L	研磨	研磨		634	H-28	M	研磨	研磨	
587	H-28	L	研磨	研磨		635	H-19	M	研磨	研磨	
588	I-27	L	研磨	研磨		636	I-11	M	研磨	研磨	
589	H-28	L	研磨	研磨		637	I-10	M	研磨	研磨	内外剥落
590	I-25	L	研磨	研磨	内外剥落	638	G-16	M	研磨	研磨	
591	H-7	L	研磨	研磨		639		M	研磨	研磨	
592	I-10	L	研磨	研磨		640	I-25	M	研磨	研磨	
593	H-29	L	研磨	研磨		641	H-31	M	研磨	研磨	外スス
594	G-13	L	研磨	研磨		642	H-33	M	研磨	研磨	
595	H-6	L	研磨	研磨	外スス	643	I-15	M	研磨	研磨	内剥落
596	I-15	L	研磨	研磨		644	G-33	M	研磨	研磨	
597	I-14	L	研磨	研磨		645	H-12	M	研磨	研磨	
598	H-31	L	研磨	研磨	内外剥落	646	I-30	M	研磨	研磨	スス
599	H-26	L	研磨	研磨		647	H-9	M	研磨	研磨	
600	I-14	L	研磨	研磨		648	H-33	M	研磨	研磨	
601	H-11	L	研磨	研磨		649	I-11	M	研磨	研磨	
602	I-11	L	研磨	研磨	外スス	650	H-18	M	研磨	研磨	
603	G-13	L	研磨	研磨		651	H-24	M	研磨	研磨	
604	I-27	L	研磨	研磨		652	H-30	M	研磨	研磨	
605	H-10	L	研磨	研磨		653	I-28	M	研磨	研磨	
606	H-7	L	研磨	研磨	外スス	654	I-27	M	研磨	研磨	
607	I-26	L	研磨	研磨		655	H-21	M	研磨	研磨	
608	H-10	L	研磨	研磨		656	I-24	M	研磨	研磨	内剥落
609	H-10	L	研磨	研磨		657	H-15	M	研磨	研磨	
610	I-27	L	研磨	研磨		658	I-29	M	研磨	研磨	
611	E-14	L	研磨	研磨		659	G-23	M	研磨	研磨	
612	I-15	L	研磨	研磨		660	H-24	M	研磨	研磨	
613	D-15	L	研磨	研磨		661	I-29	N	研磨	研磨	
614	H-27	L	研磨	研磨		662	H-11	N	研磨	研磨	内剥落
615	H-11	L	研磨	ケズリ		663	I-24	O	研磨	研磨	
616	H-15	L	研磨	ケズリ		664	I-27	O	研磨	ナデ	
617	G-16	L	研磨	研磨		665	H-27	O	研磨	研磨	
618	H-26	L	研磨	研磨		666	H-23	O	研磨	研磨	
619	H-30	L	研磨	研磨		667	G-13		研磨	研磨	
620	H-31	L	研磨	研磨		668	H-15		研磨	ナデ	
621	I-11	L	研磨	研磨		669	I-14		研磨	ナデ	
622	I-11	L	研磨	研磨		670			研磨	ナデ	
623	I-17	L	研磨	研磨		671	I-18		研磨	ナデ	
624	H-16	L	研磨	研磨		672	I-28		研磨	研磨	
625	I-29	L	研磨	研磨		673	H-10		研磨	研磨	
626		L	研磨	研磨		674	I-28		研磨	研磨	
627	H-10	L	研磨	研磨		675	H-27		研磨	研磨	
628	H-8	L	研磨	研磨	内外剥落	676	H-26	P	研磨	研磨	外スス、内外赤色顔料
629	G-9	L	研磨	研磨		677	H-27	P	研磨	研磨	
630	H-11	L	研磨	研磨		678	H-19	Q	研磨	研磨	

第26表 Ⅲ層出土土器観察表(6)

番号	区	分類	器面の調整		備考	番号	区	分類	器面の調整		備考
			外面	内面					外面	内面	
679	I-16	Q	研磨	研磨		706	I-26	T	研磨	研磨	
680	H-31	Q	研磨	研磨		707	G-10	T	研磨	研磨	
681	H-28	R	研磨	ナデ	外スス	708	G-10	T	研磨	研磨	
682	I-28	R	研磨	ナデ		709	J-17	T	研磨	研磨	
683	I-27	S	研磨	ナデ	外スス	710	H-13	T	研磨	ナデ	内外スス
684	I-18	S	研磨	研磨		711	I-26	T	研磨	研磨	外スス
685	I-26	S	研磨	研磨		712	I-26	T	研磨	研磨	
686	I-26	S	研磨	研磨		713	I-26	T	研磨	研磨	内外スス
687	H-5	S	研磨	ナデ		714	I-27	T	研磨	研磨	
688	I-26	T	研磨	研磨		715	I-28	T	研磨	研磨	
689	I-25	T	研磨	研磨		716	H-16	T	研磨	研磨	
690	H-10	T	研磨	研磨		717	I-29	T	研磨	研磨	
691	H-26	T	研磨	研磨		718	G-23	T	研磨	研磨	
692	I-26	T	研磨	研磨		719	I-11	T	研磨	研磨	
693	I-26	T	研磨	研磨		720	H-13	T	研磨	研磨	
694	I-27	T	研磨	研磨	外スス	721	I-24		研磨	研磨	底部
695	I-28	T	研磨	研磨		722	H-26		研磨	ナデ	底部
696	I-27	T	研磨	研磨		723	H-24		研磨	ナデ	底部
697	H-11	T	研磨, ナデ	研磨, ナデ		724	H-11		研磨	研磨	底部
698	H-27	T	研磨	研磨	外スス	725	H-27	U	条痕, ナデ	条痕, ナデ	
699	I-13	T	研磨	研磨		726	H-27	U	条痕, ナデ	条痕, ナデ	
700	H-32	T	研磨	研磨		727	H-32	U	条痕, ナデ	ナデ, 研磨	
701	H-9	T	研磨	研磨		728	H-26	V	網目圧痕	研磨	
702	I-11	T	研磨, ナデ	研磨, ナデ		729	H-26	V	薙目圧痕	研磨	
703	I-28	T	研磨	研磨		730	H-26	V	網目圧痕	ナデ	
704	H-27	T	研磨	研磨		731	I-27	V	薙目圧痕	ナデ	
705	I-27	T	研磨	研磨		732	I-19	V	薙目圧痕	研磨	

2. 石器

第Ⅲ層を中心とする層から出土した縄文時代晩期の石器は、計340点であった。

石器組成と出土分布

出土した石器の器種には多種のものがみられ、その内訳は第27表に示した。量的に最も卓越したものが打製石斧であり、計91点出土している。石器全体の26.8%を占めている。次に多いのが磨石・敲石類で、83点出土しており24.4%を占めている。狩猟具としての石鏃も61点と多く出土しており、全体の17.9%にあたる。

第144・145図には各石器の出土分布を示した。石鏃の出土分布は一見して理解されるように、7区から17区までのまとまりと、24区から30区までのまとまりと大きく2カ所の集中区域に分けられる。西側のグループは比較的広い区域にやや散在しており、東側のグループは北側に密度が強く分布している。他の各石器の出土分布も石鏃の出土分布とほぼ同様である。それはまた、土坑の分布や出土土器の分布とも一致している。

両グループを石器数で比較すると、石鏃の数は両方ともほぼ同数であるのに対し、打製石斧の分布は西側に、磨石・敲石類の場合は逆に東側のグループに多く出土している。

打製石鏃

計61点出土した。そのうち2点は土坑内出土であり、また4点は未製品と考えられるものがある。形態的には三角形を基本とし、733~738のように浅い凹基式や平基式のものが多く、また、平基で比較的大きいもの(739~741)(5点出土)や、742・743のように先端部と基部の間に小さな突基を有するものや五角形状を呈するものも8点出土している。

製作技術的には、両面及び基部を丁寧に二次加工により整形したもの他に、薄い剥片を利用し片面のみに二次加工を施したものや、片側側縁と基部をわずかに加工し整形したものなどがみられる。使用されている石材は多種であり、黒曜石(13点)、チャート(11点)、安山岩(21点)、頁岩(10点)、ギョクズイ(2点)、石英(1点)、擬灰岩(1点)、たんぱく石(1

第27表 縄文時代晩期石器組成表

器種	石鏃	石匙	スクレイパー	石鏃	ピエス・エスキュー	異形石器	磨製石斧(工具)	磨製石斧(伐採)	打製石斧(土掘具)	横刃形石器	棒状敲打器	礫器	磨石・敲石	石皿	砥石	計
出土数	61	3	7	4	5	2	5	10	91	15	11	12	83	27	4	340
出土率	17.9	0.9	2.1	1.2	1.5	0.6	1.5	2.9	26.8	4.4	3.2	3.5	24.4	7.9	1.2	100

点) が使用されている。

出土した石鏃は完形のものが多く、破損したものは少ない。破損したものの破損部位は主に先端部の欠損である。

磨製石鏃

751は最大長4cmを測るもので、全体に丁寧な研磨が施され薄身である。表裏両面には着柄のための凹面状の溝がある。基部は弧状の凹基式があり、縁辺は平坦に研磨している。このような形態のものは本県では主に弥生時代にみられるもので、縄文時代晩期のものか注意を要する。752は表層より出土したものであり、全面に丁寧な研磨が施されているものの751とは形態的に大きく異なる。形態及び大きさは打製石鏃とほぼ同様であり、側縁と同様に基部縁辺も鋭くしている。

石 匙

計3点出土している。753は横長のもの、他は全長2.5cmの小型のものと基部部分の破損品である。

スクレイパー

計7点出土している。いずれも剥片の一部に二次加工を施し刃部としたものである。754は黒曜石の扁平な小礫を利用し、一辺に二次加工を行い刃部としたものである。

石 錐

755・756はチャートの剥片に二次加工を施し鋭い先端部を作り出したものである。二次加工は機能部の先端部のみ行われている。計4点出土しており全てチャート製である。

ピエス・エスキュー

757・758は上下両端からの剥離がみられるもので、直線状の刃部とレンズ状の断面を有する。計5点出土している。そのうち4点はチャート製で1点はたんぱく石製である。

異形石器

759は黒曜石の剥片を使用し、棒状の基部と三角形の先端を有し、全体は蛇頭形を呈する。基部部分の二次加工は丁寧であるが、三角形の先端部は主に片面調整である。先端部は使用痕と思われる磨滅痕が観察される。760は最大長1.6cm、幅0.6cmの小型のものであり、縁辺に二次加工を施したものである。

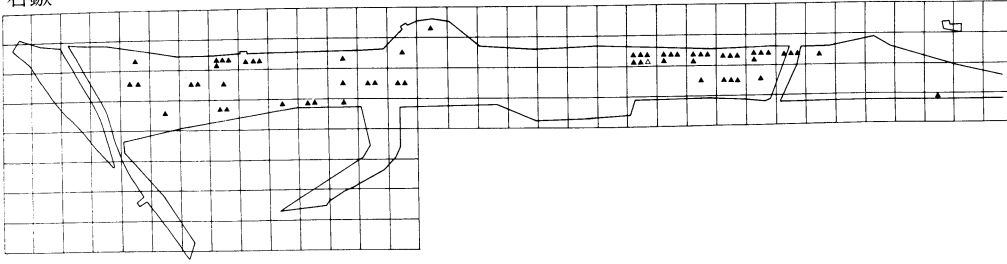
石 核

761は黒曜石製の石核である。小角礫を利用し、打面作成を行わず自然面を打面にして作業を行っている。また打面及び作業面は回転しながら剥離している。他に1点同様のものが出土している。

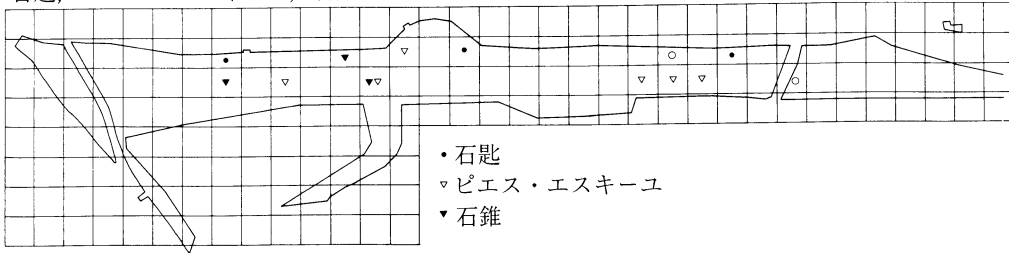
磨製石斧

研磨を施した斧形の石器には、工具と考えられる全長約5cm程度で刃部幅1cm前後のノミ形のもの(762・763)、扁平小型のもの(764～766)、樹木の伐採用と考えられるもの(768～771)などがある。762は蛇文岩製で全体を入念に研磨を施したもので、763は小礫に刃部のみ研磨した

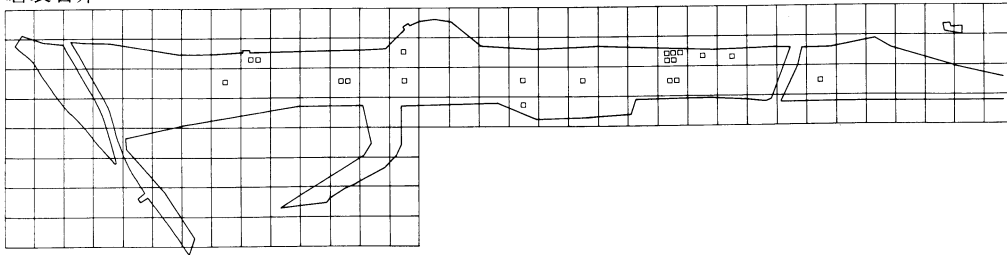
石鏃



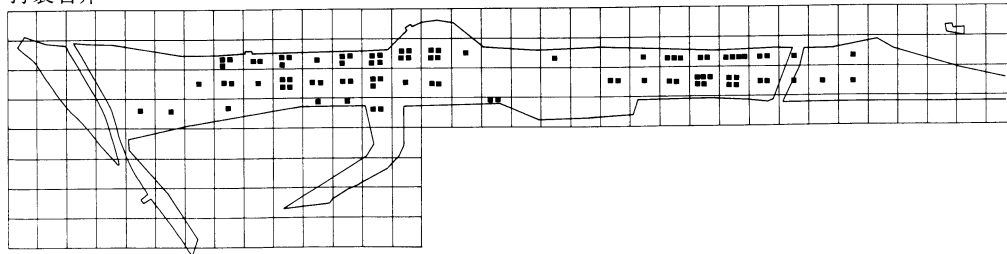
石匙, ピエス・エスキュー, 石錐



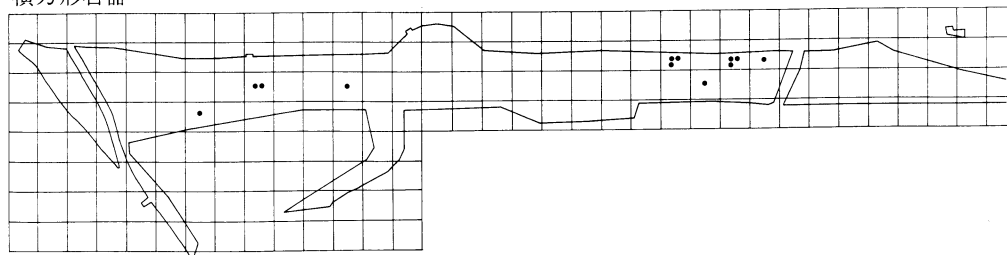
磨製石斧



打製石斧

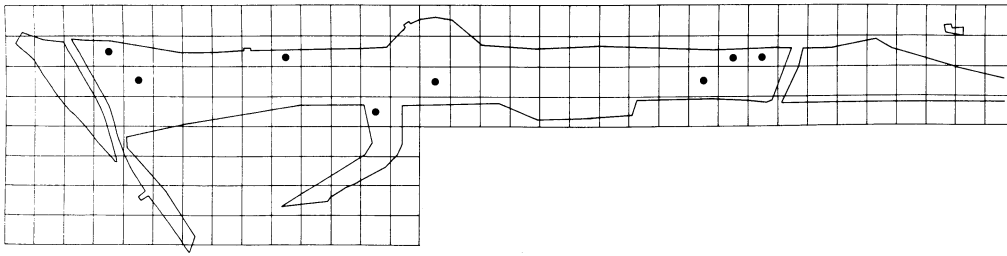


横刃形石器

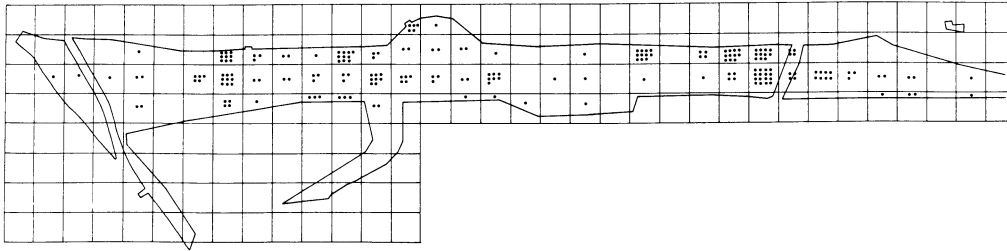


第144図 III層出土石器分布図(1)

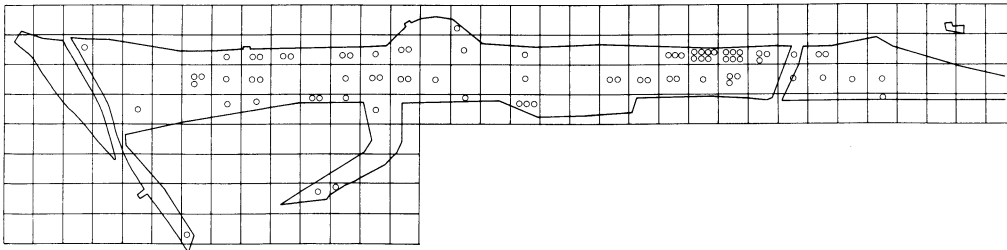
礫器



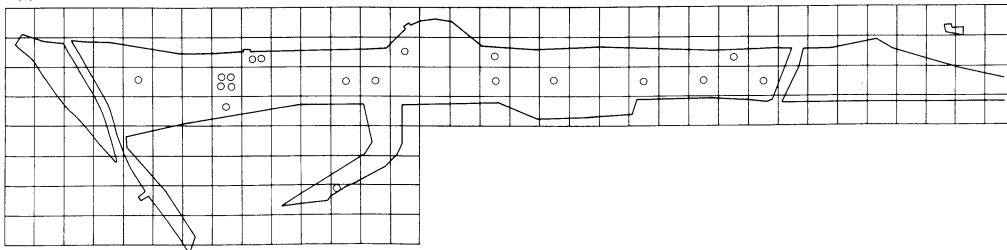
打製石斧製作剝片



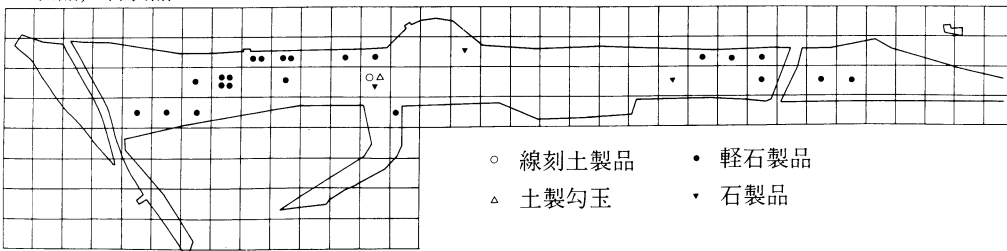
磨石, 敲石



石皿

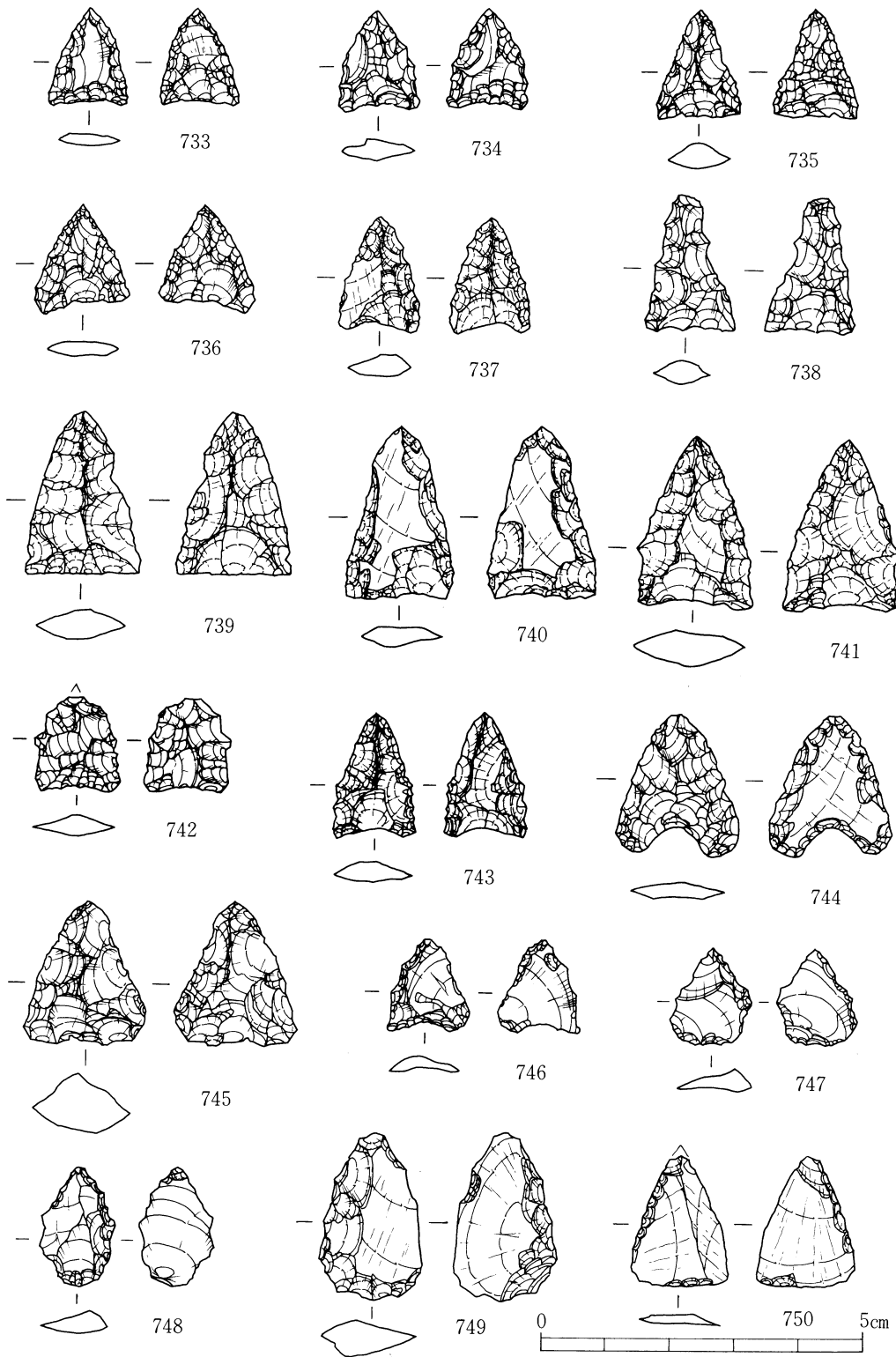


土製品, 石製品

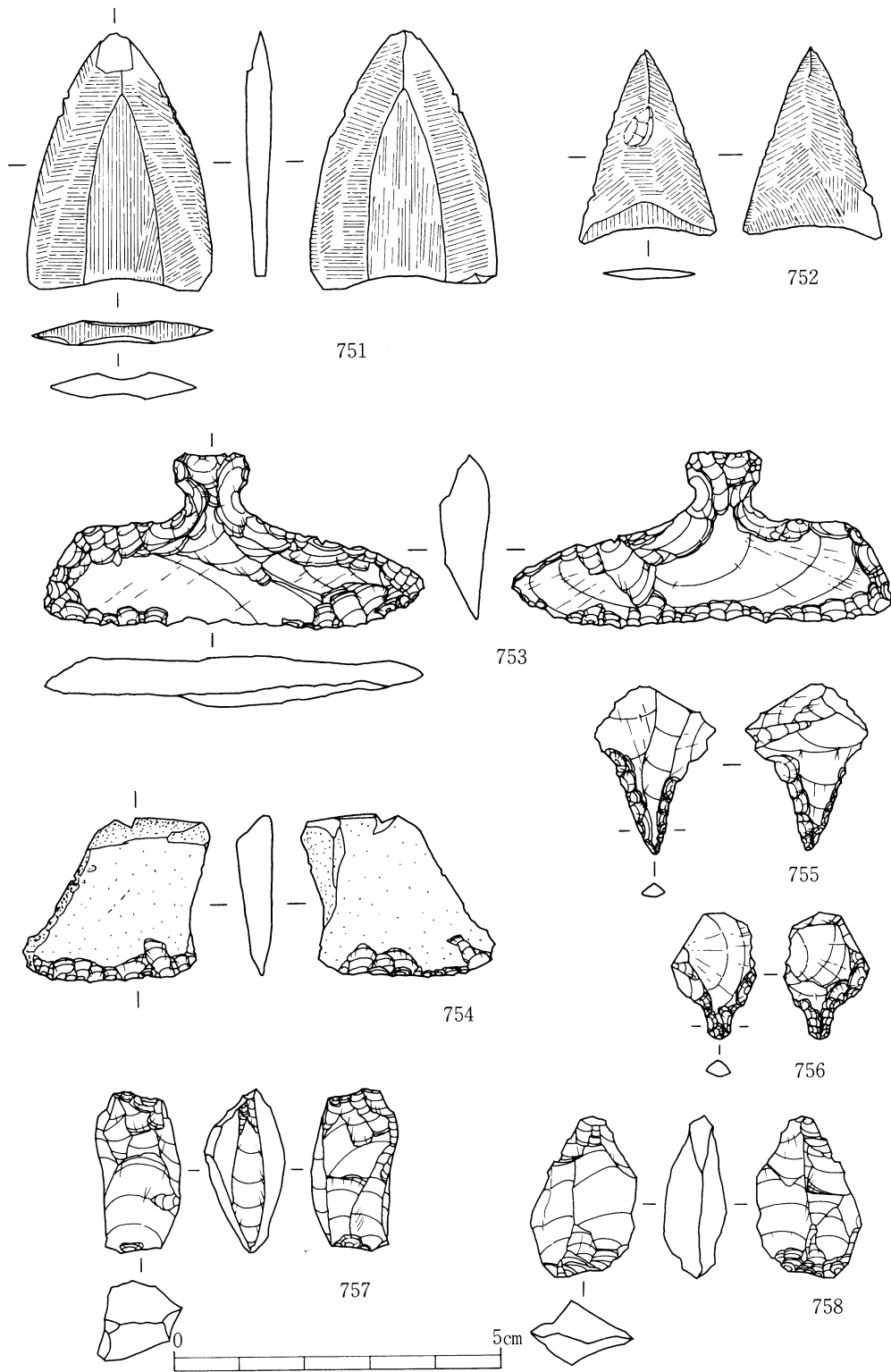


- 線刻土製品
- 輕石製品
- △ 土製勾玉
- ▽ 石製品

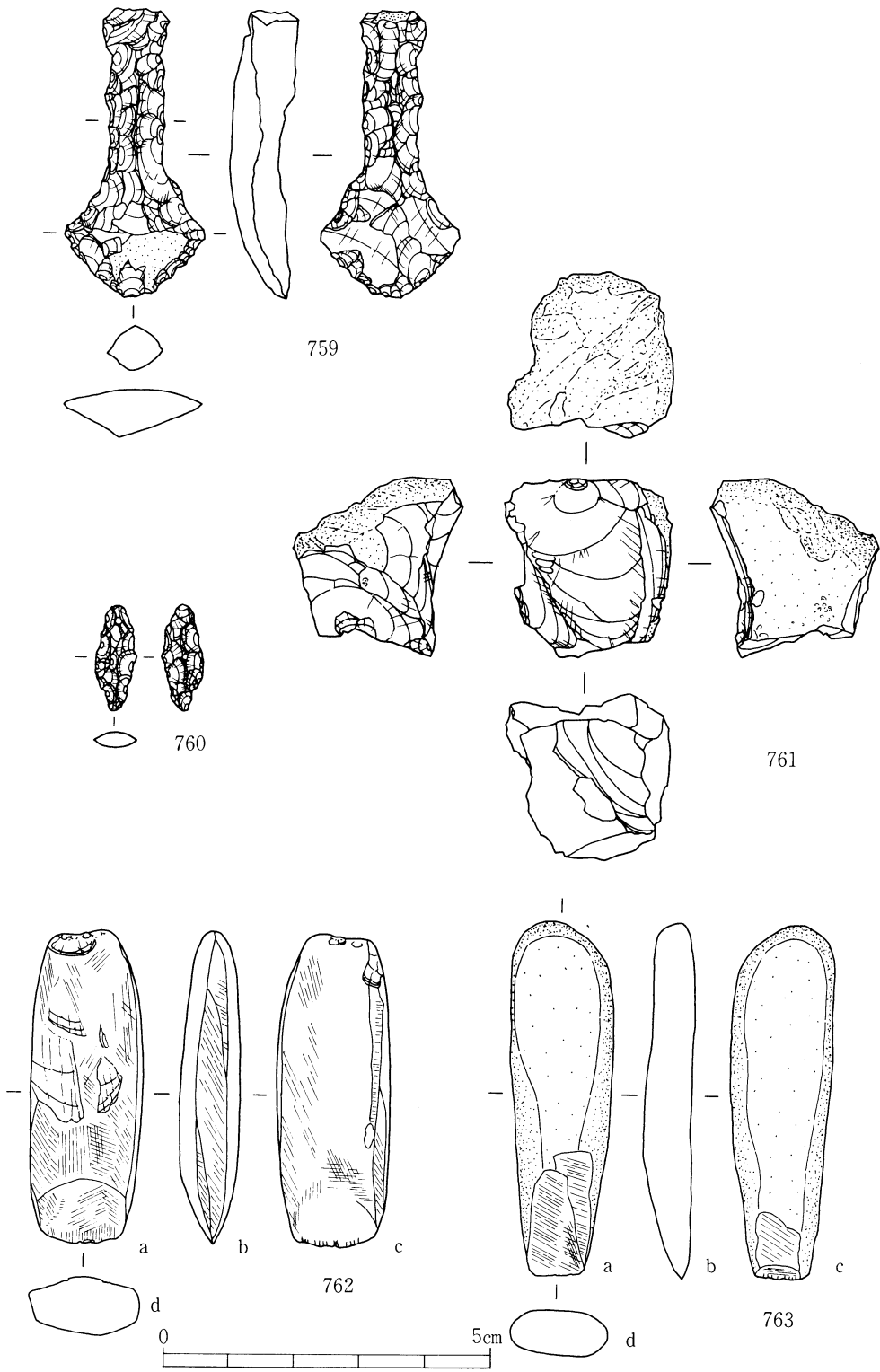
第145図 III層出土石器分布図(2)



第146図 Ⅲ層出土石器(1) (石鏃)



第147图 Ⅲ層出土石器(2) (磨製石鏃, 他)



第148图 Ⅲ層出土石器(3) (異形石器, 他)

ものである。両方とも片刃であり、各々C面の刃部先端に使用痕が観察される。764・765はほぼ刃部部分のみの研磨が施してあり、刃部は片刃である。工具の一種と考えられる。766は刃部幅が小さく同様のものと考えられる。767は粗い剥離により整形が行われ、片側側縁には研磨もみられる。未製品と推定される。772は破損した基部の部分であり、敲打具として再利用されている。他に磨製石斧の破片と思われるものが7点出土している。

打製石斧

合計91点出土した。その内訳は、ほぼ完形12点、基部のみの破片27点、刃部を含む先端部片43点、基部と刃部を欠損した中間部の破片9点となっている。形態的にはいわゆる偏平打製石斧と呼ばれるものであり、短冊型に近いもの(773・777)、分銅形に近いもの(774・779)、概ね撥型を呈するもの(775・778・780・781)のほか、円盤形を呈するもの(783)などがみられる。このように形態的な違いはあるものの、そのほとんどが、基部近くの両側縁に対して快りを入れ、着柄を意識しているという特徴が共通している。784～787は基部の破片、788～793は刃部の破片である。刃部には使用による部分的破損(774・777・781)などの他、摩滅した使用痕(790・791・792)がみられるものも多い。また、基部にも摩滅した痕跡があるもの(774・781・784・785・786)が認められ、着柄の痕跡と考えられる。さらに、剥離面の構成より、先端部が一部欠損した後、再加工を行い使用していると考えられるもの(774・781)などもあり、刃部再生による全長の変化が認められる。製作技術的には分割あるいは粗割した薄手の剥片を素材にし、比較的粗い剥離により二次加工を行い整形しているものが多い。使用されている石材はその大部分が頁岩であり、わずかに粘板岩(774)が存在している。

打製石斧製作に生じた剥片

計216点出土している。794～797が打製石斧製作に伴う剥片と考えられるものであり、背面には腹面の打面と同一方向の剥離面がみられ、その打面は一縁辺に連続している。これらは石斧の整形のための剥片と考えてよい。

横刃形石器

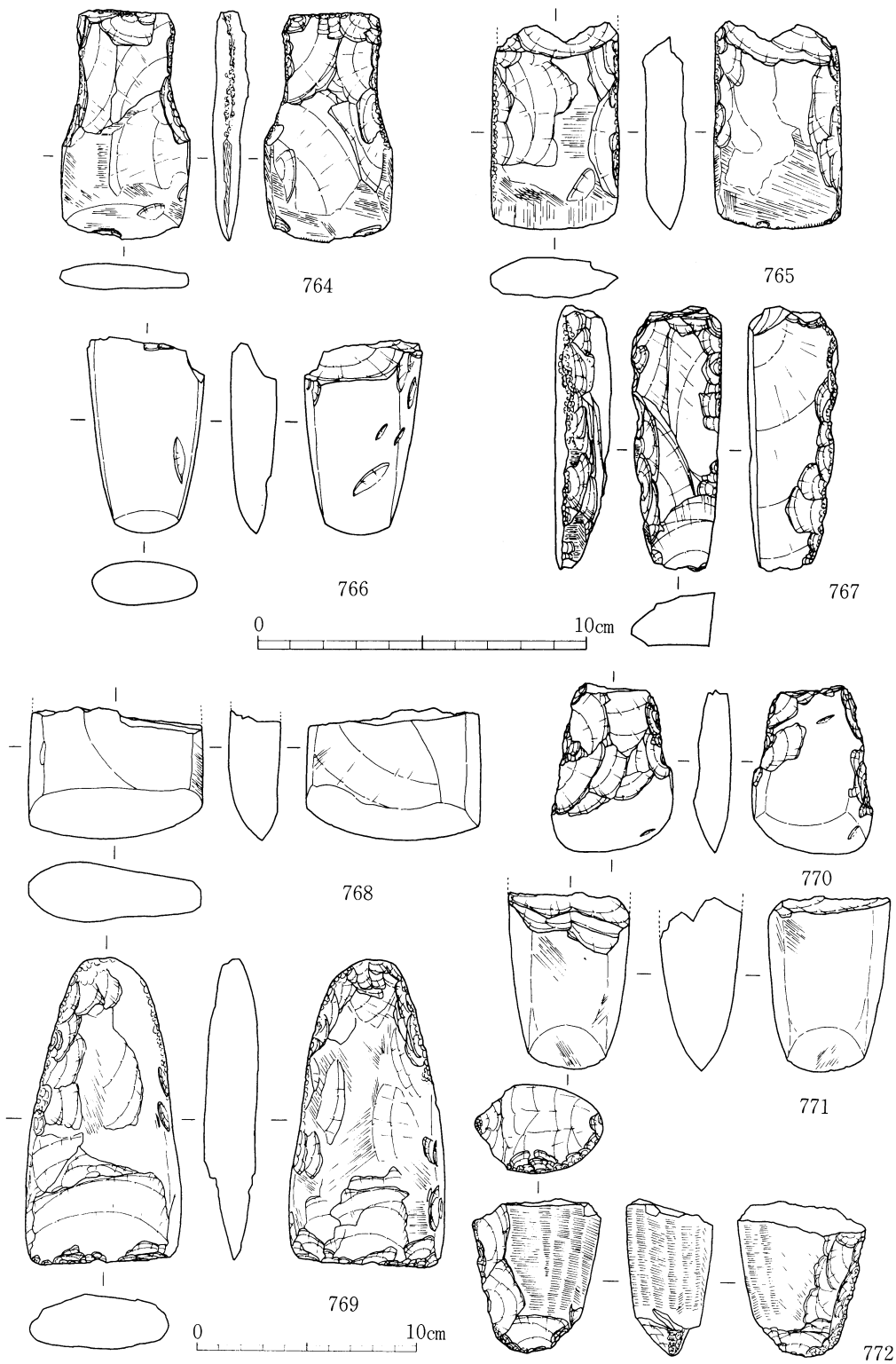
798～801は横長剥片を利用し、鋭利な剥片の長い縁辺に連続した二次加工を施し刃部としたものであり打製石斧とは区別される。縁辺に明瞭な二次加工を施すもの(798・800)や、著しい使用痕が認められるもの(799)や、刃部のみでなく他の縁辺も整形したもの(801)がみられる。総計15点出土した。

棒状敲打器

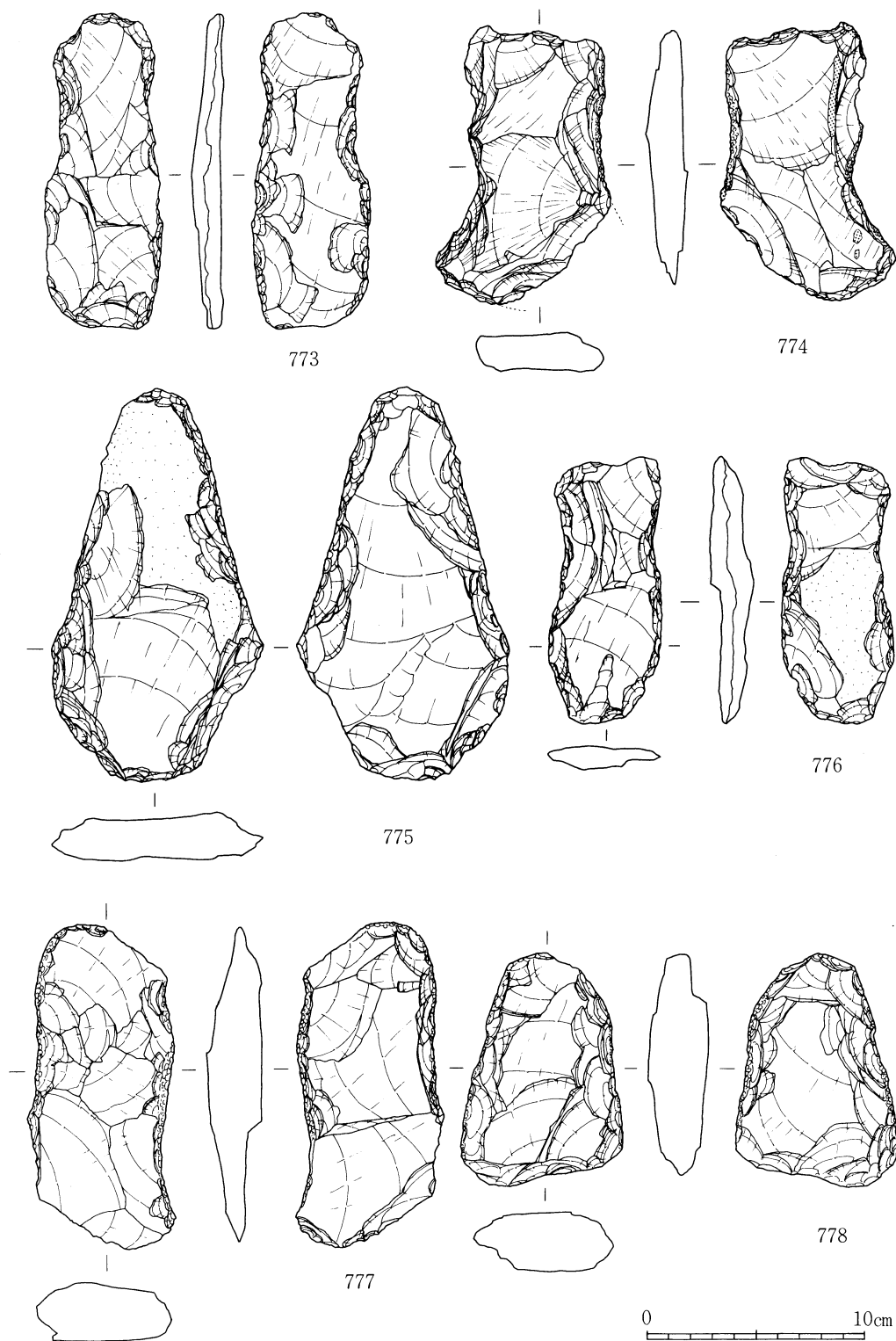
803・804は棒状の礫を利用し両端に敲打痕がみられるもの、802は磨製石斧の破損品が利用され同様の敲打痕がみられるものである。計11点出土している。

礫器

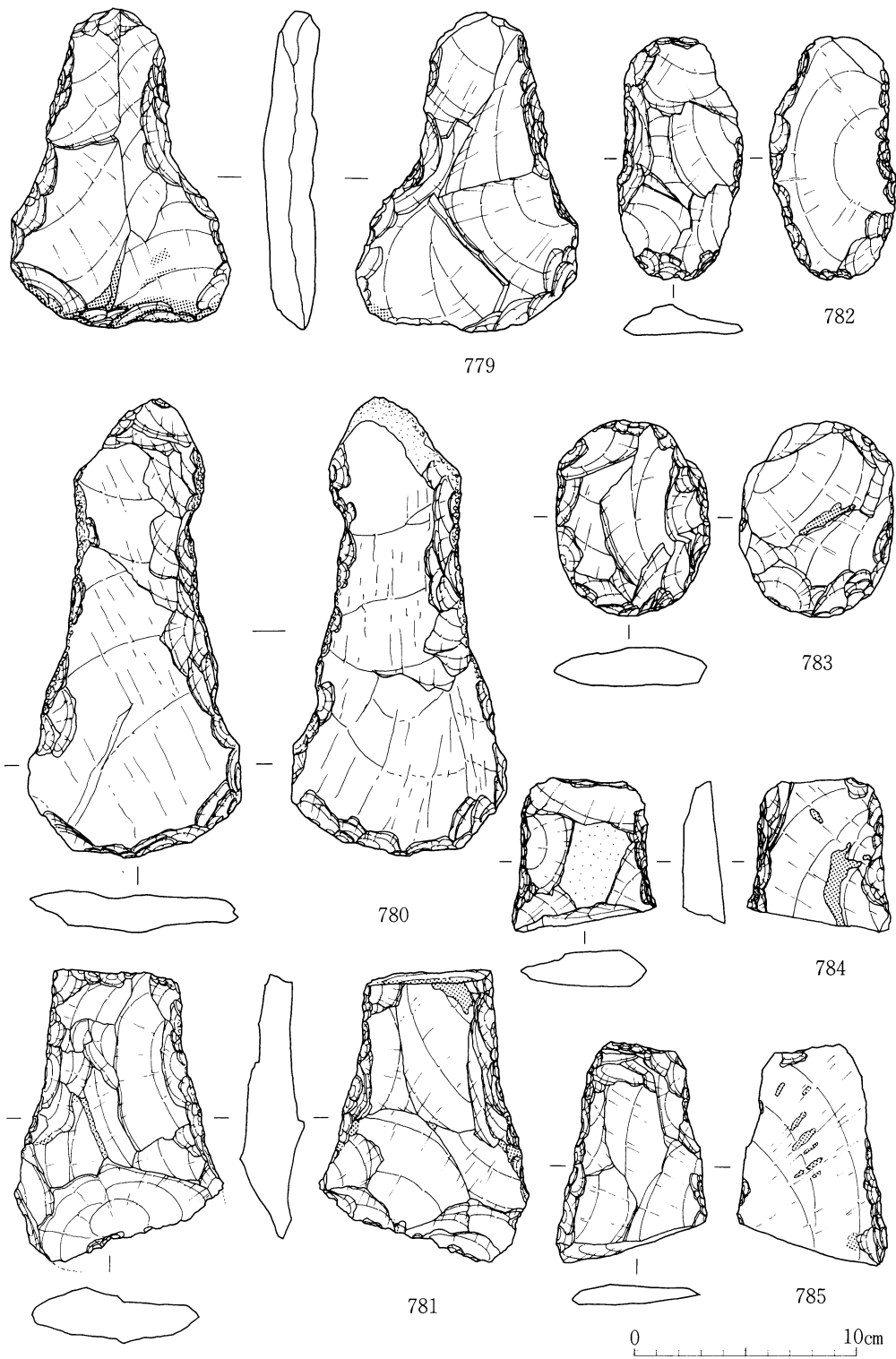
計12点出土している。円礫あるいは棒状礫の一端に、粗い数回の剥離を行い、刃部としている。806は大型の剥片を利用したもの、811は分割礫を素材としたものであるが、ここで取り扱っている。807及び811は側縁に敲打痕が観察される。



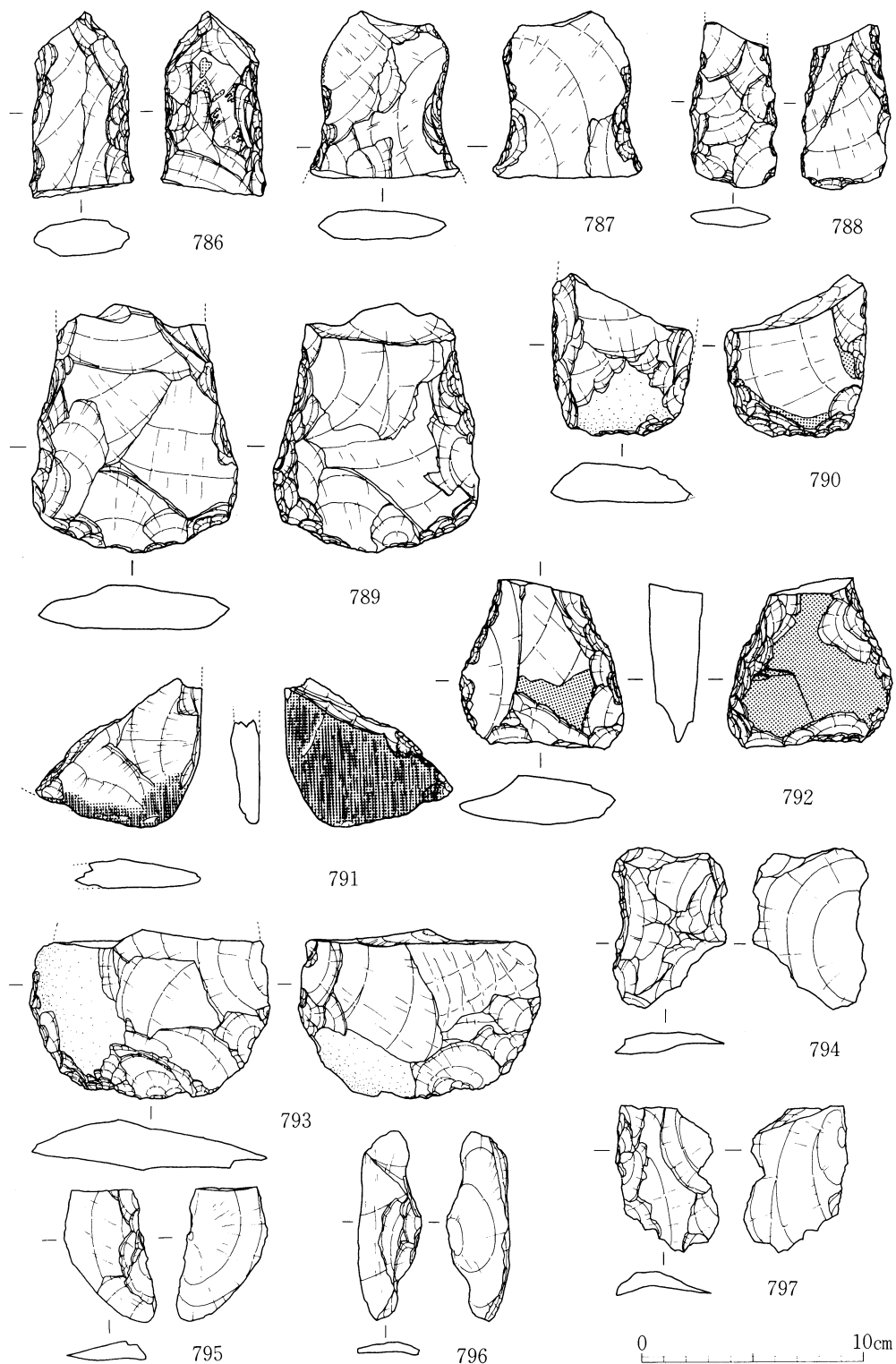
第149図 Ⅲ層出土石器(4) (磨製石斧)



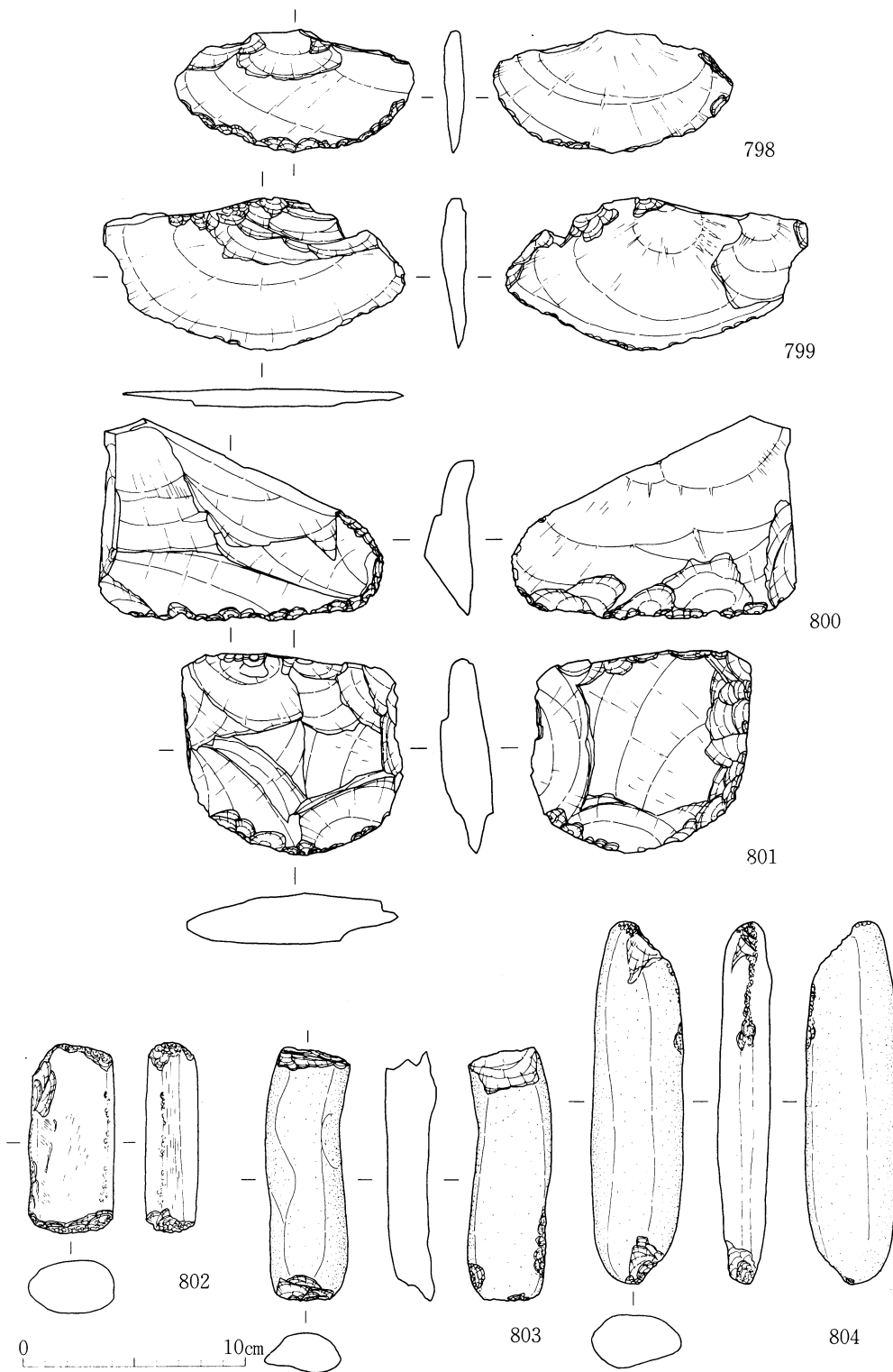
第150図 Ⅲ層出土石器(5) (打製石斧①)



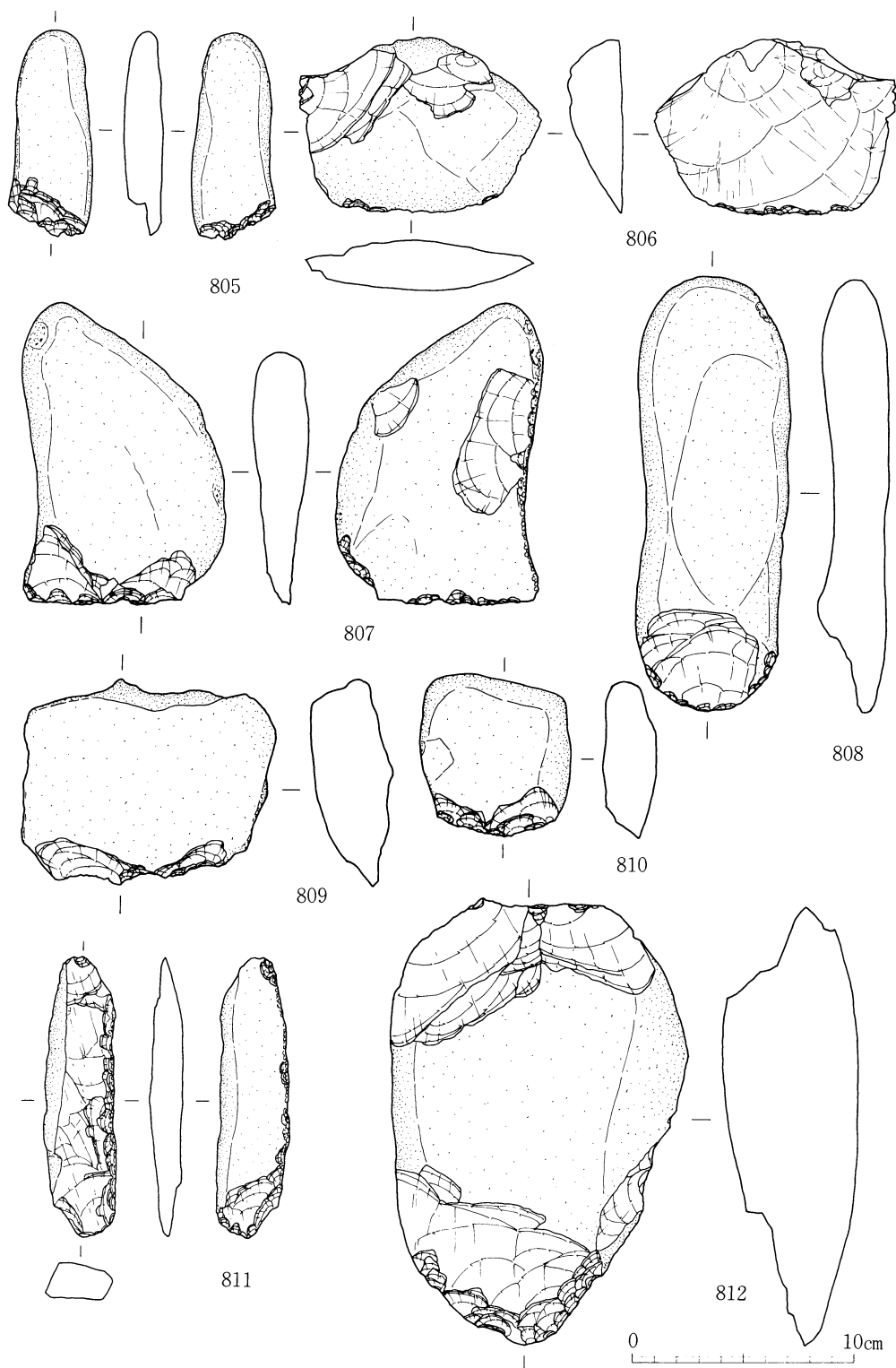
第151图 Ⅲ層出土石器(6) (打製石斧②)



第152圖 Ⅲ層出土石器(7) (打製石斧③)



第153図 Ⅲ層出土石器(8) (横刃形石器, 他)



第154図 Ⅲ層出土石器(9) (礫器)

磨石・敲石

一つの石器に磨面及び敲打痕あるいは敲打痕が集中し凹みがあるものなど複数の使用痕がみられるため、磨石・敲石類として取り扱った。これらは以下のように分類できる。

- 1 類…… 磨面のみを有する。34点出土。(813～816)
- 2 類…… 平坦面に磨面があり、周縁部にも磨面あるいはつぶれた敲打痕をもつもの。16点出土。(817～823)。819・823は表裏平坦面の中央部に敲打痕が集中した凹みがみられる。
- 3 類…… 磨面と部分的な敲打痕がみられるもの。(824～828)。20点出土。827・828は片側平坦面の中央に敲打による凹みがみられる。
- 4 類……部分的に敲打痕のみがみられるもの。(830～834)。13点出土。

総計83点出土している。また、大きさにより最大長10～15cm程度のものと、約5cm程度のものに分けられるが、使用された痕跡は同様で大小の違いはない。

石 皿

小さな破片も含め計27点出土している。使用により中央部が著しく磨り凹んでいるもの(835～839)、磨面は認められるものの平坦に近いもの(841～843)がある。前者には敲打整形を周縁に施しているもの(837)や表裏両面とも磨面がみられるもの(835, 836, 838, 839, 840)もみられる。石質は前者が安山岩であるのに対し、後者は全て花崗岩である。また円礫ではなく安山岩の板状礫を使用したもの(840)も2点出土している。

砥 石

844は粒子の細かい砂岩を使用した砥石であり線状痕が観察される。砥石の破損品と考えられる同様の石材の破片が計4点出土している。

軽石製品

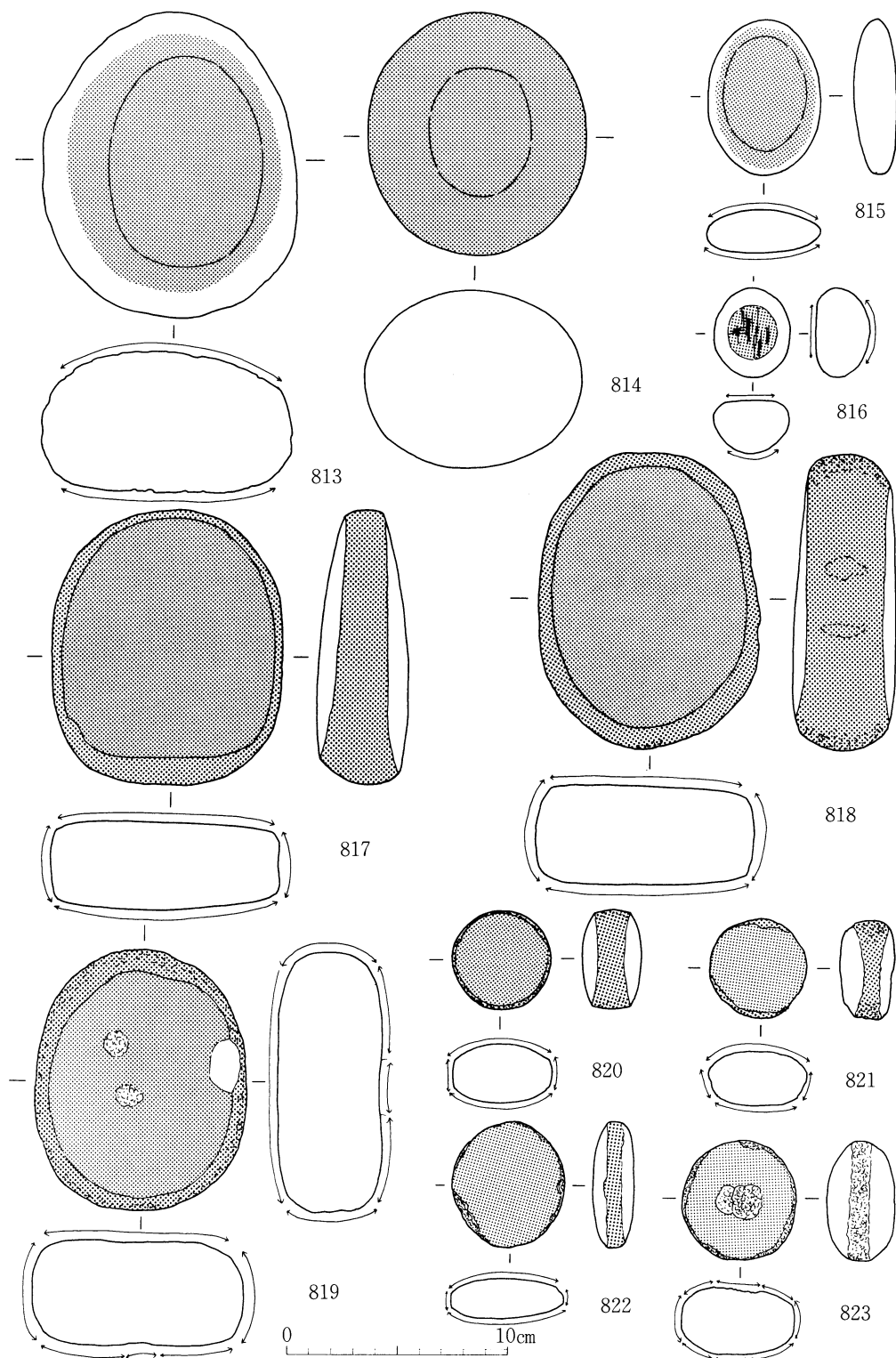
845～848は軽石製品である。845は平坦な磨面が認められる。846は表裏の平坦面が磨面として使用され、擦痕が観察される。847は断面三角形の船形状に整形されているもので、平坦な甲板面とやや丸みを帯びた両側面がある。舳先状の先端部と、逆の部分は丸い突起状となる。848は片側平坦面の中央に凹みがみられるものである。

この他、人為的な加工及び使用痕は認められない軽石礫が計15点出土している。849はその一つである。

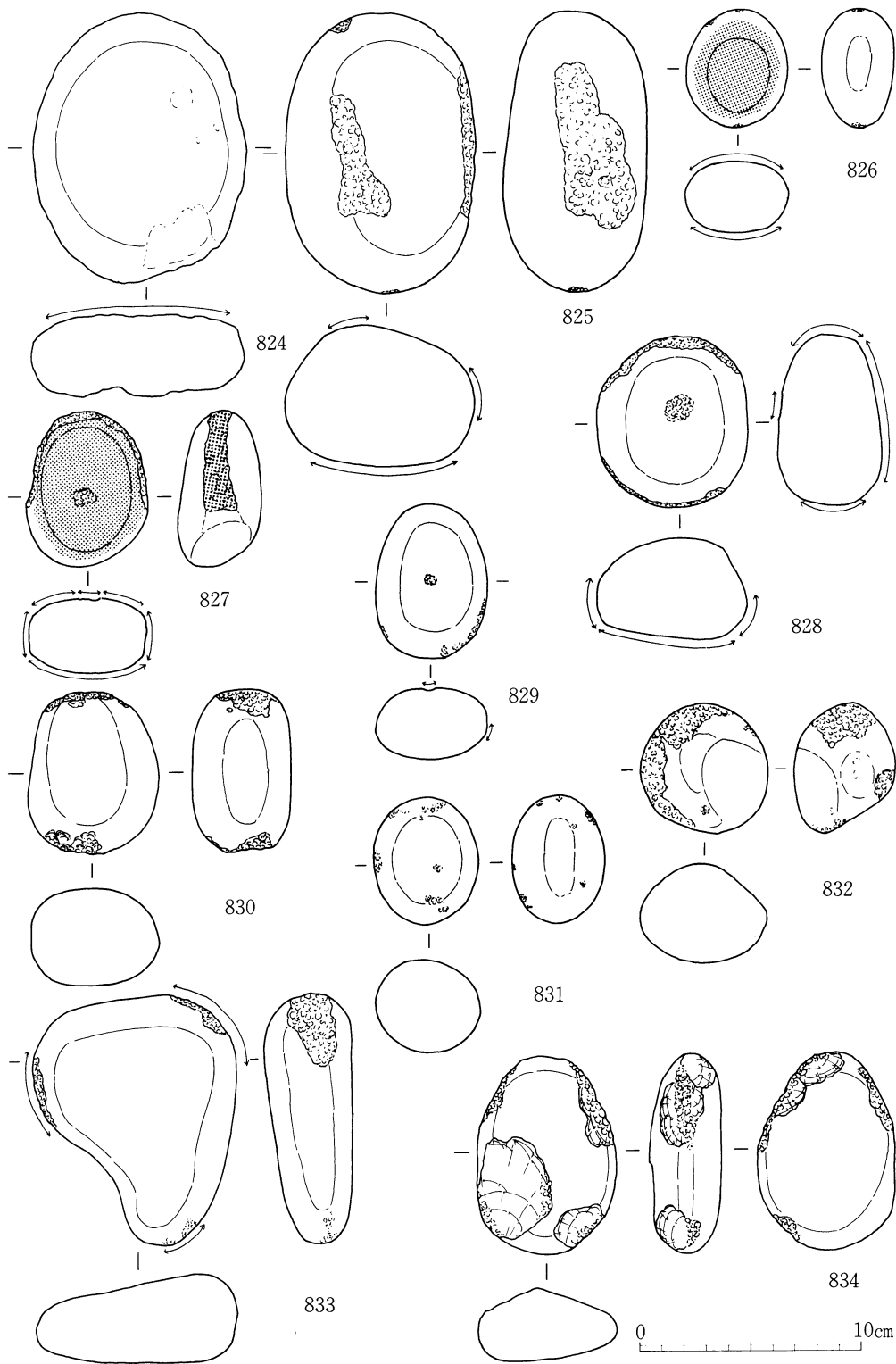
土製品

850は長軸と並行して中心部に穿孔した土錘に類似した形状のものである。穿孔は両側からなされたものと考えられ、中心部付近のごく一部にわずかな段差が見られる。孔の中心部の径は約4mmである。表面を全面にわたり研磨し、その後にヘラ状工具を用い全面に直線と曲線を組み合わせた文様を施文する。

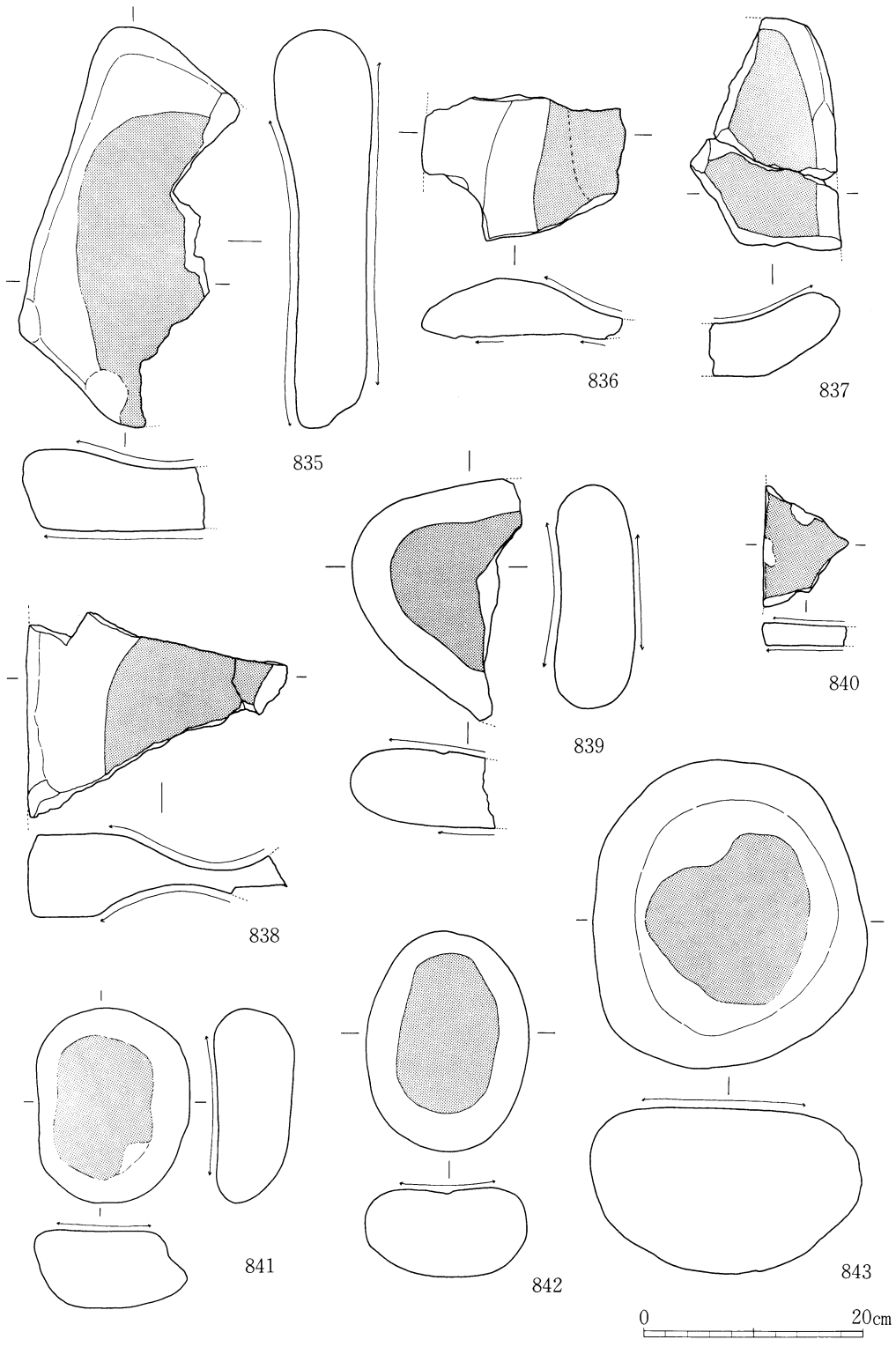
851は土製勾玉と考えられるものであるが、頭部及び尾部を欠損している。



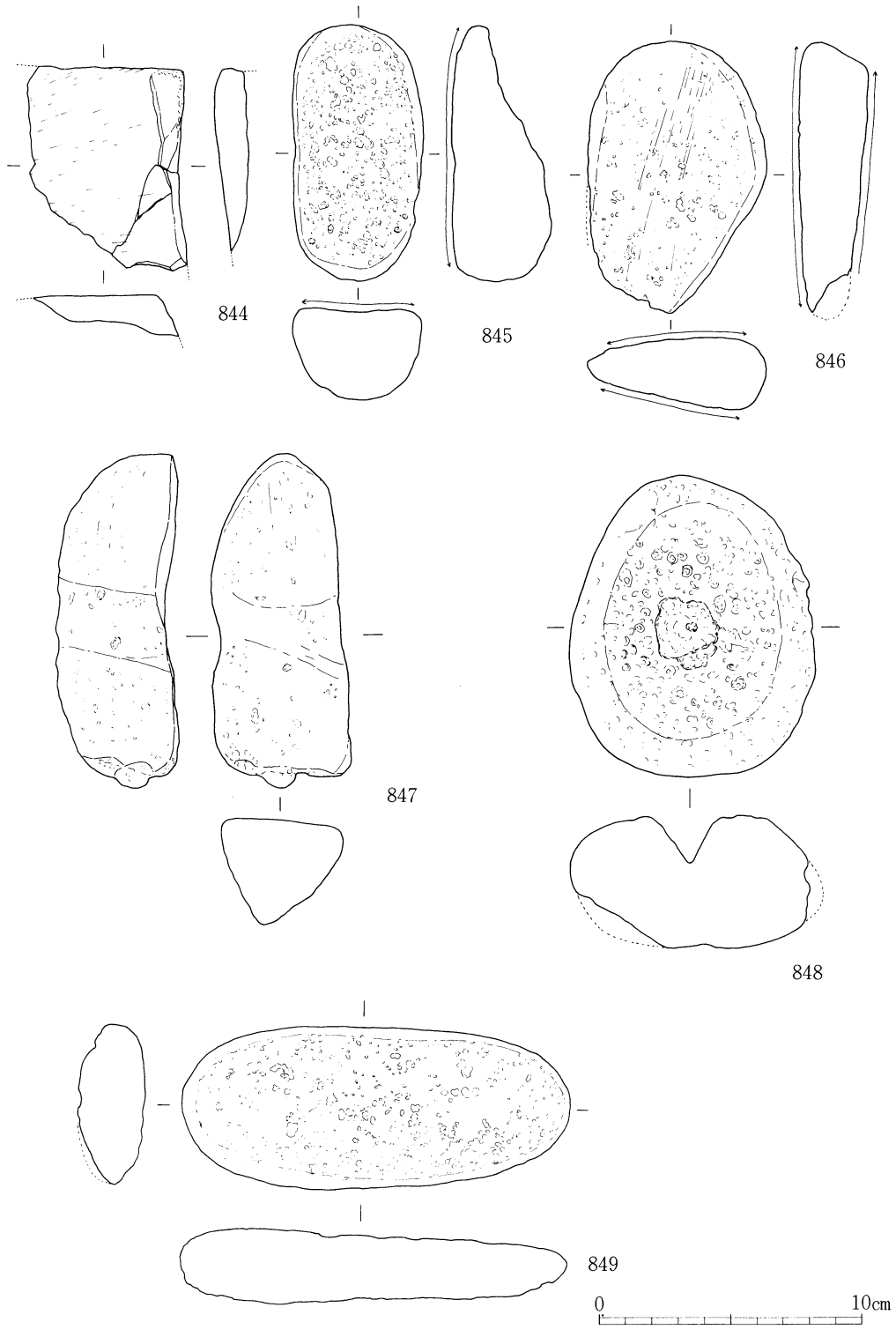
第155図 Ⅲ層出土石器(10) (磨石・敲石①)



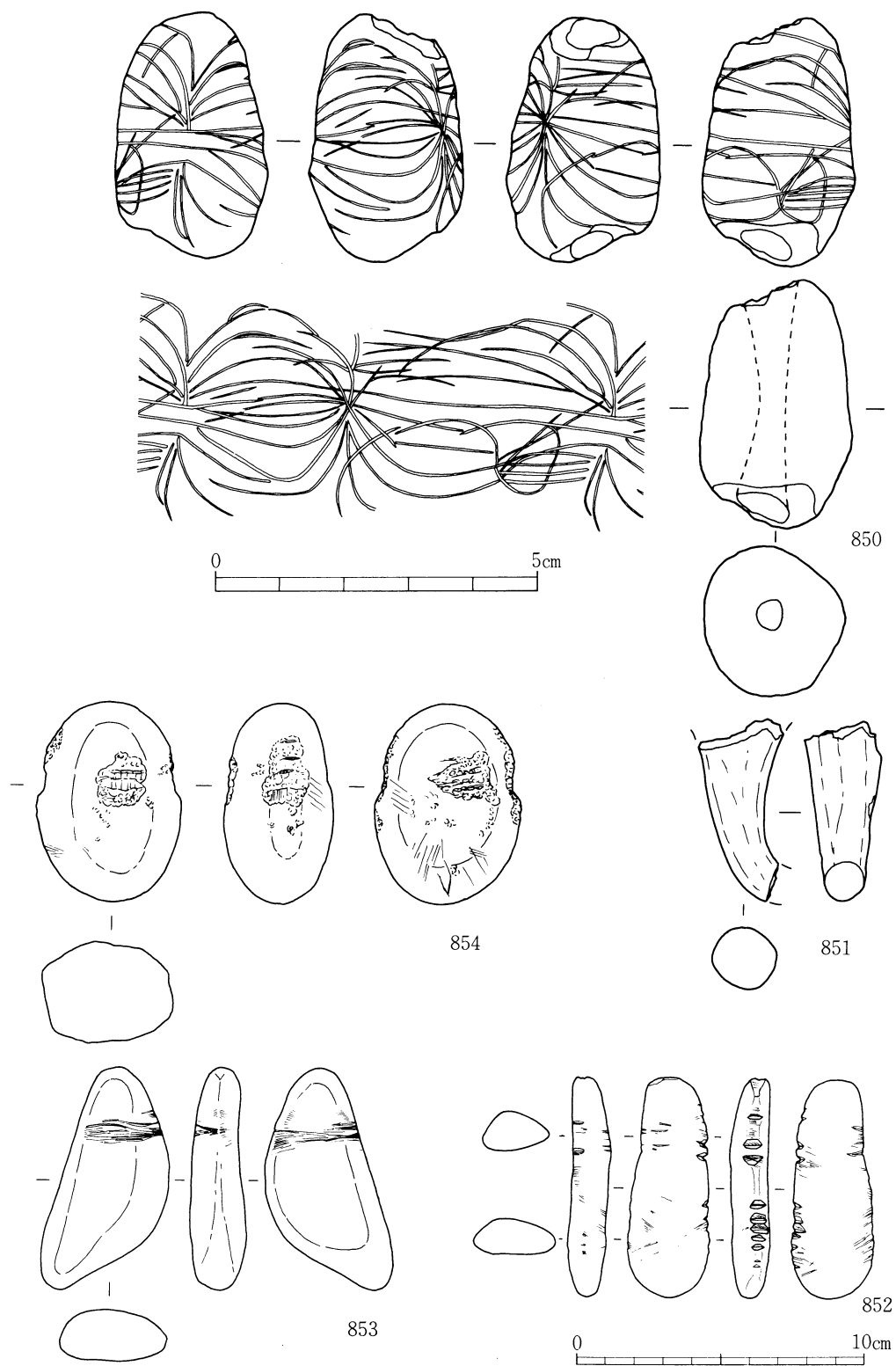
第156図 Ⅲ層出土石器(1) (磨石・敲石②)



第157図 Ⅲ層出土石器(12) (石皿)



第158図 Ⅲ層出土軽石製品



第159图 Ⅲ層出土土製品，石製品

石製品

852は細長い小礫の片側縁辺に、断面V字形の刻みがみられるものである。刻みは切り込み状で最も深い部分で2mmを有し、ほかの浅いものを含め計9カ所ある。刻みの中は夥しい線状痕が観察される。また、反対側の縁辺にも浅い刻み状のものが1カ所あるほか、縁辺全体に多くの線状痕が横方向に観察される。さらに両側縁のみでなく、両平坦面にも多くの線状痕が認められる。なお、片側端部（図の上）は平坦に擦られている。

853は「鯉節」形の礫の片側端部近くに、ほぼ並行して多くの線状痕が認められるものであり、縁辺の深い部分は約1mm程度の、断面V字形の刻み状を呈する。

854は凹石状を呈するもので、凹みは表裏両面及び両側縁部にみられる。凹み自体は敲打痕によるものと考えられるが、その上には横方向及びそれに直行する線状痕が観察される。また、表面のほかの部分にも線状痕が観察される。

第28表 Ⅲ層出土石器計測表(1)

番号	器種	出土区	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	注記番号
733	石 鏃	H-9	黒曜石	1.4	1.2	0.2	0.36		17650
734	石 鏃	H-16	チャート	1.6	1.2	0.3	0.56		30048
735	石 鏃	I-14	たんぱく石	1.6	1.3	0.4	0.70		28598
736	石 鏃	I-28	黒曜石	1.7	1.3	0.3	0.52		10902
737	石 鏃	H-15	頁岩	1.7	1.2	0.3	0.75		30644
738	石 鏃	G-7	チャート	2.1	1.4	0.4	0.98		117
739	石 鏃	G-34	頁岩	2.6	1.3	0.5	1.72		2771
740	石 鏃	G-12	砂岩	2.7	1.7	0.3	1.54		15879
741	石 鏃	I-27	頁岩	2.2	1.8	0.5	2.15		12080
742	石 鏃	H-10	チャート	1.5	1.3	0.3	0.75		15677
743	石 鏃	H-27	頁岩	1.9	1.2	0.3	0.73		4522
744	石 鏃	I-11	頁岩	2.2	1.9	0.3	0.90		17859
745	石 鏃	F-8	チャート	2.3	1.9	0.9	2.63		781
746	石 鏃	I-30	黒曜石	1.4	1.3	0.2	0.45		1827
747	石 鏃	I-10	黒曜石	1.6	1.2	0.3	0.51		17388
748	石 鏃	I-11	チャート	1.8	1.2	0.3	0.75		17345
749	石 鏃	I-25	頁岩	2.6	1.6	0.6	1.70		13564
750	石 鏃	H-27	頁岩	2.0	1.5	0.1	0.63		12891
751	磨製石鏃	I-24	頁岩	3.95	2.84	0.37	5.06		20173
752	磨製石鏃	H-31	頁岩	2.95	2.1	0.2	1.14	表層出土	
753	石 匙	I-30	頁岩	5.8	2.7	0.77	7.23		17385
754	スクレイパー	I-26	黒曜石	2.5	2.9	0.55	3.82		10477
755	石 錐	H-10	チャート	2.58	1.84	0.6	1.71		15530
756	石 錐	I-14	チャート	1.92	1.28	0.4	0.92		29037
757	ビエス・エスキュー	H-25	チャート	2.45	1.3	1.22	3.85		20931
758	ビエス・エスキュー	H-24	チャート	2.45	1.6	0.95	2.69		13713

第29表 Ⅲ層出土石器計測表(2)

番号	器種	出土区	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	注記番号
759	異形石器	H-29	黒曜石	4.38	2.17	1.02	4.42		5781
760	異形石器	I-25	黒曜石	1.65	0.6	2.7	0.26		12484
761	石核	I-15	黒曜石	2.75	2.55	2.55	14.8		28872
762	小型ノミ形石器	I-27	蛇紋岩	4.78	1.75	0.92	11.16	片刃	12613
763	小型ノミ形石器	H-16	砂岩	5.4	1.58	0.74	9.4	片刃	30514
764	磨製石斧	H-25	頁岩	7.0	4.0	0.8	3.5	片刃	7981
765	磨製石斧	H-22	頁岩	6.35	3.9	1.35	50	片刃	21151
766	磨製石斧	H-20	頁岩	6.0	3.65	1.4	39	片刃	23643
767	小型ノミ形石器	I-26	頁岩	8.1	2.75	1.6	58	未製品	11481
768	磨製石斧	I-11	砂岩	6.1	8.0	2.8	185	刃部のみ	16894
769	磨製石斧	H-30	頁岩	14.1	7.2	2.5	328		3485
770	磨製石斧	I-26	頁岩	7.7	5.6	1.7	93		11458
771	磨製石斧	I-25	砂岩	8.1	5.5	3.8	223	基部欠損	11702
722	敲石	H-14	頁岩	7.1	5.9	4.0	209	石斧の転用	29532
773	打製石斧	F-8	砂岩	14.5	5.5	1.4	130		782
774	打製石斧		粘板岩	13.3	8.1	1.9	198		0002
775	打製石斧	I-16	砂岩	18.1	9.8	2.3	470		28266
776	打製石斧	H-26	頁岩	12.2	5.2	2.1	113		13123
777	打製石斧	I-12	頁岩	15.0	6.9	2.8	301		18161
778	打製石斧	I-17	頁岩	10.8	7.5	2.8	273		22021
779	打製石斧	H-17	頁岩	14.5	10.0	2.5	318		21646
780	打製石斧	I-15	頁岩	20.7	9.7	1.9	445		28487
781	打製石斧	H-25	頁岩	13.2	9.5	3.0	322		9409
782	打製石斧	H-23	頁岩	11.0	5.7	1.4	88		14224
783	打製石斧	I-14	頁岩	8.9	7.0	1.8	150		28695
784	打製石斧	G-14	頁岩	7.0	6.5	1.9	99	基部	30385
785	打製石斧	H-28	頁岩	10.0	6.9	0.9	94	基部	8864
786	打製石斧	H-14	頁岩	8.4	4.8	1.7	95	基部	29581
787	打製石斧	G-15	頁岩	7.5	6.8	1.4	85	基部	28997
788	打製石斧	H-26	頁岩	7.5	4.0	0.9	38	刃部	9508
789	打製石斧	I-28	頁岩	11.3	9.3	2.0	253	刃部	13332
790	打製石斧	I-24	頁岩	7.3	6.5	1.8	55	刃部	14105
791	打製石斧	H-14	頁岩	6.8	7.6	1.3	62	刃部	29519
792	打製石斧	I-11	頁岩	7.7	7.5	2.4	158	刃部	16947
793	打製石斧	H-12	頁岩	7.7	10.9	2.4	220	刃部	10327
794	剥片	I-18	頁岩	7.3	5.3	1.0	38		23243
795	剥片	H-15	頁岩	6.1	4.2	0.9	20		30247
796	剥片	I-27	頁岩	8.6	2.9	0.6	15		12594
797	剥片	G-32	頁岩	6.6	4.7	1.1	22		62939
798	横刃形石器	I-25	頁岩	3.7	7.2	0.6	19		7787
799	横刃形石器	H-11	頁岩	4.6	9.1	0.7	30		15732
800	横刃形石器	I-25	頁岩	6.2	8.6	1.5	76		21208
801	横刃形石器	I-28	頁岩	6.1	6.7	1.6	68		13043
802	棒状敲打器	I-25	頁岩	8.5	3.9	2.4	142	磨製石斧の転用	11840
803	棒状敲打器	H-20	砂岩	11.4	3.8	2.3	141		23654
804	棒状敲打器	H-32	砂岩	16.3	4.2	2.4	135		2389
805	礫器	I-18	砂岩	9.3	3.8	1.8	92		22548
806	礫器	G-22	頁岩	7.9	10.9	2.55	115	大型剥片使用	14311
807	礫器	M-26	砂岩	13.7	9.3	2.5	420	側縁に敲打痕	19796
808	礫器	I-12	砂岩	19.7	7.0	3.2	604		18154

第30表 Ⅲ層出土石器計測表(3)

番号	器種	出土区	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	注記番号
809	礫器	H-17	溶結凝灰岩	9.4	11.6	3.8	524		22288
810	礫器	G-15	砂岩	7.4	6.8	2.5	220		28903
811	礫器	G-15	砂岩(変成)	12.7	3.4	1.7	85	側縁に敲打痕	28902
812	礫器	I-6	砂岩	20.2	13.5	6.2	1840		861
813	磨石・敲石	H-16	安山岩	13.9	11.4	6.4	1430		30209
814	磨石・敲石	I-10	安山岩	10.9	9.9	8.1	1250		15634
815	磨石・敲石	H-15	砂岩	7.0	5.0	2.0	100		29452
816	磨石・敲石	H-9	安山岩	4.1	3.5	2.9	50		15135
817	磨石・敲石	I-26	安山岩	12.3	10.3	4.3	930		11356
818	磨石・敲石	I-25	花崗岩	12.3	9.8	4.7	1105		13568
819	磨石・敲石	I-18	安山岩	11.7	9.7	4.7	925	両面に凹み	22006
820	磨石・敲石	I-12	砂岩	4.5	4.4	2.7	80		17114
821	磨石・敲石	H-11	安山岩	4.6	4.4	2.5	60		14510
822	磨石・敲石	I-26	砂岩	5.6	5.0	1.9	75		11514
823	磨石・敲石	H-25	安山岩	5.4	5.2	3.1	130	両面に凹み	9397
824	磨石・敲石	I-26	溶結凝灰岩	12.1	9.7	4.4	500		11491
825	磨石・敲石	H-32	花崗岩	8.4	12.6	6.4	1020		2423
826	磨石・敲石	I-15	砂岩	5.3	4.7	3.3	115		30788
827	磨石・敲石	H-27	安山岩	7.0	5.4	3.5	190	片面に凹み	8519
828	磨石・敲石	H-26	花崗岩	7.7	6.9	4.7	365	片面に凹み	10151
829	磨石・敲石	D-13	花崗岩	6.9	5.0	3.3	110	片面に凹み	19396
830	敲石	I-11	花崗岩	7.3	6.0	4.5	290		17929
831	敲石	G-15	砂岩	6.8	4.8	4.3	150		19879
832	敲石	G-7	砂岩	5.8	5.4	4.7	190		99
833	敲石	G-10	砂岩	11.2	8.7	3.8	530	突部に敲打痕	16659
834	敲石	G-20	砂岩	8.9	6.4	3.2	250		23738
835	石皿	H-27	安山岩	35.2	16.8	9.0	6980	両面使用	5395・5400
836	石皿	I-19	安山岩	18.6	13.4	5.5	1680	両面使用	23339
837	石皿	D-14	安山岩	21.7	14.9	5.2	1900		19496
838	石皿	H-7	安山岩	24.2	18.6	7.8	2840	両面使用	853
839	石皿	H-26	安山岩	21.8	15.6	7.4	2660	両面使用	16766
840	石皿	H-10	安山岩	11.2	7.9	2.2	230	両面使用	15275
841	石皿	H-24	花崗岩	17.6	14.4	6.8	2540		20552
842	石皿	I-11	花崗岩	19.9	14.9	8.3	3420		16905
843	石皿	H-15	花崗岩	28.4	25.0	15.5	14800		30370
844	砥石	I-26	砂岩	7.8	6.1	1.9	95	破損品	12241

第31表 土製品、石製品観察表

番号	種類	出土区	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	注記番号
845	軽石製品	H-10	軽石	9.7	5.1	3.8	38	一面磨	16722
846	軽石製品	I-11	軽石	10.3	6.8	2.8	36	二面磨	16907
847	軽石製品	G-16	軽石	12.8	5.8	4.6	51	三面磨	19777
848	軽石製品	I-11	軽石	11.5	9.4	5.1	117	中央に凹み	土坑42周辺
849	軽石製品	I-28	軽石	14.8	6.8	3.9	72		11261
850	土製品	H-15		3.8	2.3		18.36	全面研磨、線刻	29222
851	土製勾玉	H-15		(2.8)	(1.4)		2.63	頭部、尾部欠損	29142
852	石製品	I-18	頁岩	7.63	2.88	1.47	40.7	刻み、線状痕	21875
853	石製品	H-15	砂岩	7.7	4.45	1.8	74.7	線状痕	29222
854	石製品	H-25	頁岩	7.95	5.1	3.8	173	敲打・線状痕	10724

第Ⅶ章 古墳時代の調査

第1節 調査の概要

古墳時代の遺物は、調査区の中央部から北西側（6区～22区）にかけてのⅡ層より出土した。特にH-22区からは成川式土器の甕形土器が1個体分集中して出土し、完形に復元できた。また、I-18区からは、鉢形土器がほぼ完形で出土した。

第2節 出土遺物（第161図～163図）

古墳時代の土器は、甕形土器、鉢形土器、壺形土器、埴形土器、高坏形土器等が出土している。

甕形土器（第161図・第162図1～13）

1～13は甕形土器である。

1はH-22区より集中して出土した（第160図）もので、完形に復元された。口径33.5cm、底径12cm、器高34.4cmを測る。胴部はあまり張らずわずかにしまった頸部から口縁部が外反し、口唇部は平坦に治められている。頸部には、板状工具による刻目突帯を巡らし、底部は上げ底の脚台である。内外面の調整は同様で、口縁部は横ナデ、胴部はハケ目の調整が施されている。口唇部内面に煤の付着が認められ幅1cm程度のものが1条巡っているが、煮炊きに利用する時に蓋をしていたものと想定される。2・3は頸部に布目の痕跡をもつ刻目突帯を巡らすものである。2は、わずかにしまった頸部から口縁部が外反し、口唇部は丸く治められている。復元口径26cmを測り、内外面は横ナデ調整が施されている。3は、口縁部がわずかに肥厚しながら内湾し、口唇部は丸く治められており、復元口径23.2cmを測る。

4～9は底部である。4はわずかに上げ底気味であるが、充実した高台である。復元底径は9.4cmを測る。5は上げ底の底部で、底径9.6cmを測り、6～9は浅い上げ底の底部で、底径はそれぞれ6が11.4cm、7が10cm、8が9cm、9が8.8cmを測る。

10～12は口縁部から胴部にかけてである。10は頸部に絡条突帯を巡らせるもので、口縁部はやや内湾する。復元口径30.4cmを測り、内外面は横ナデ調整である。11は頸部に断面三角形の貼付け突帯を巡らせるものである。口縁部はやや内湾し、復元口径28.2cmを測る。外面調整は、口縁上部で横ナデ、頸部から口縁部にかけて板状工具によるカキ上げ調整、突帯の上下でナデ調整が施されている。12は突帯のないものである。口縁部は直行し、復元口径23cmを測る。外面は口縁部では横ナデ、胴部では板状工具によるナデ調整が施されている。13は胴部である。外面は篋状工具によるナデ調整が施され、底部では板状工具によるカキ上げ調整が施されている。口縁部・脚部ともに欠損しているが、口縁部は外反し底部は上げ底であると思われる。

鉢形土器（第162図14・第163図15）

14・15は鉢形土器である。

14は上げ底の底部であり、復元底径7.6cmを測る。外面はヘラ磨き調整が施され、内面はナ

デ調整が施されている。15はI-18区よりほぼ完形の状態で出土した土器である。口径17.9cm、底径6.6cm、器高10.8cmを測り、安定した平底の底部である。底部より胴部が球形状に膨らみ、口縁部で内湾する。内外面は板状工具によるナデ調整が施され、底部外面で横ナデ、底部内面でヘラ削りが施されている。

壺形土器（第163図16～22）

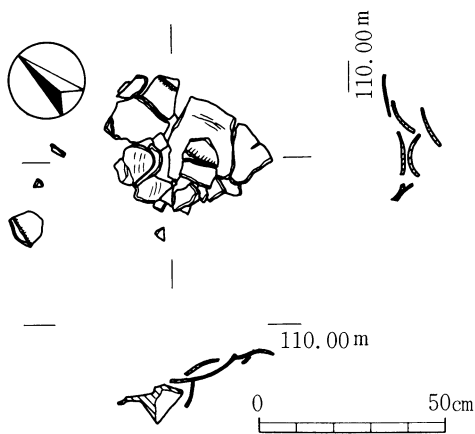
16～22は壺形土器である。

16は口縁部で、復元口径15.6cmを測る。頸部から口縁部にかけて外反し、口唇部は丸く治める。17は貼付け突帯を有する頸部である。内外面はヘラ磨きが施されている。18・19は球形状に膨らむ胴部である。18は肩部に布の痕圧のある刻目突帯が1条巡り、内外はナデ調整が施されている。19は突帯を巡らさないもので、内外はナデ調整が施されている。20～22は丸底の底部である。20は外面にヘラ磨きが施され、内面は胴部にナデ調整、底部にヘラ削りが施されている。21・22は内外面ともナデ調整が施されているようであるが、表面の磨耗が激しく定かではない。

高坏形土器（第163図23～29）

23～28は高坏形土器である。

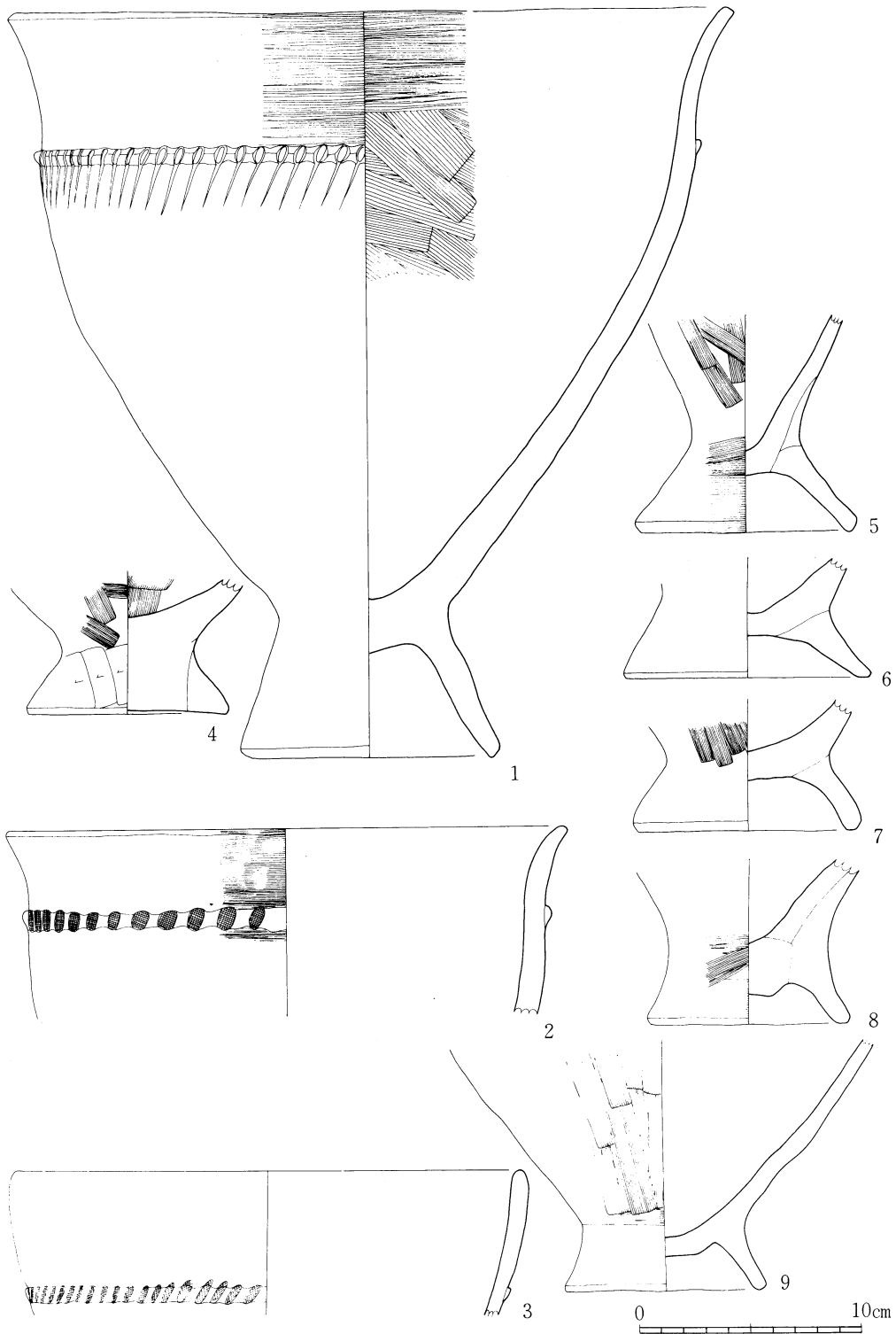
23は口径15cm、坏部高さ6cmを測り、脚部は欠損している。坏部は底部と立ち上がりの境に弱い稜を有し、立ち上がりはまっすぐ伸びる。口唇部は丸く治める。内外面は口縁部上部は横ナデ、他の坏部はヘラ磨きが施されている。24は復元口径20.2cmを測り、底部と立ち上がりの境に段を有するものである。立ち上がりはやや内湾気味である。内外面は口縁部上部で横ナデが施され、他の坏部ではヘラ磨きが施されている。25、26は同一個体であると思われるものである。25は口径19cmを測り、底部と立ち上がりの境に段のないもので、立ち上がりはやや内湾気味であるが口縁部はまっすぐに伸びる。内外面は、口縁部上部で横ナデ、他の坏部ではヘラ磨きが施されている。26は坏部の底部であり、内外面はヘラ磨きが施されている。27は坏部である。外面に赤色顔料が付着し、ヘラ磨きが施されている。28は坏底部から脚部にかけてである。底部内面、脚部外面はヘラ磨きが施され、底部と脚部の接合部分や中空の脚部内面はナデ調整が施されている。



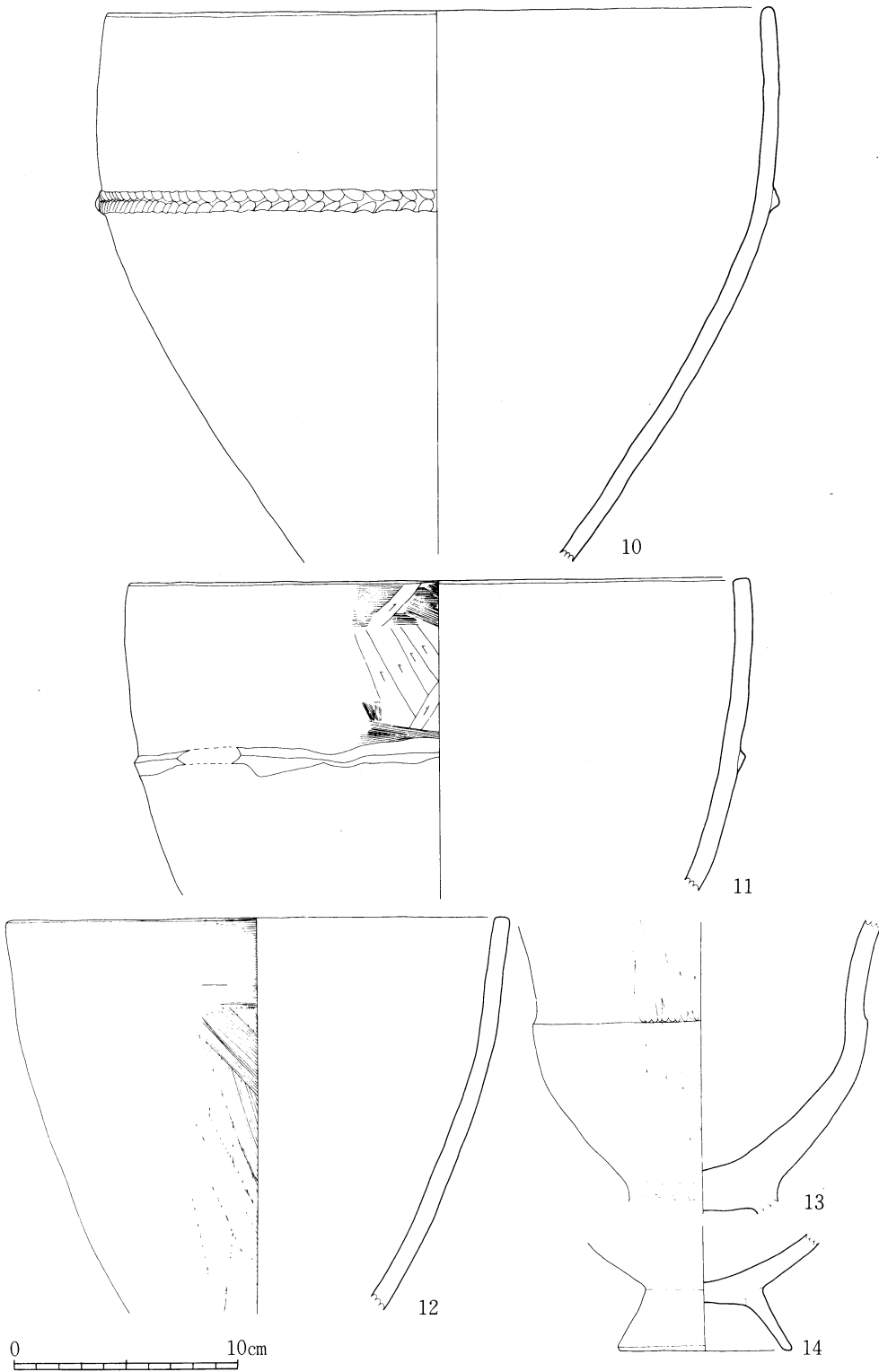
第160図 古墳時代の土器出土状況

埴形土器（第163図29）

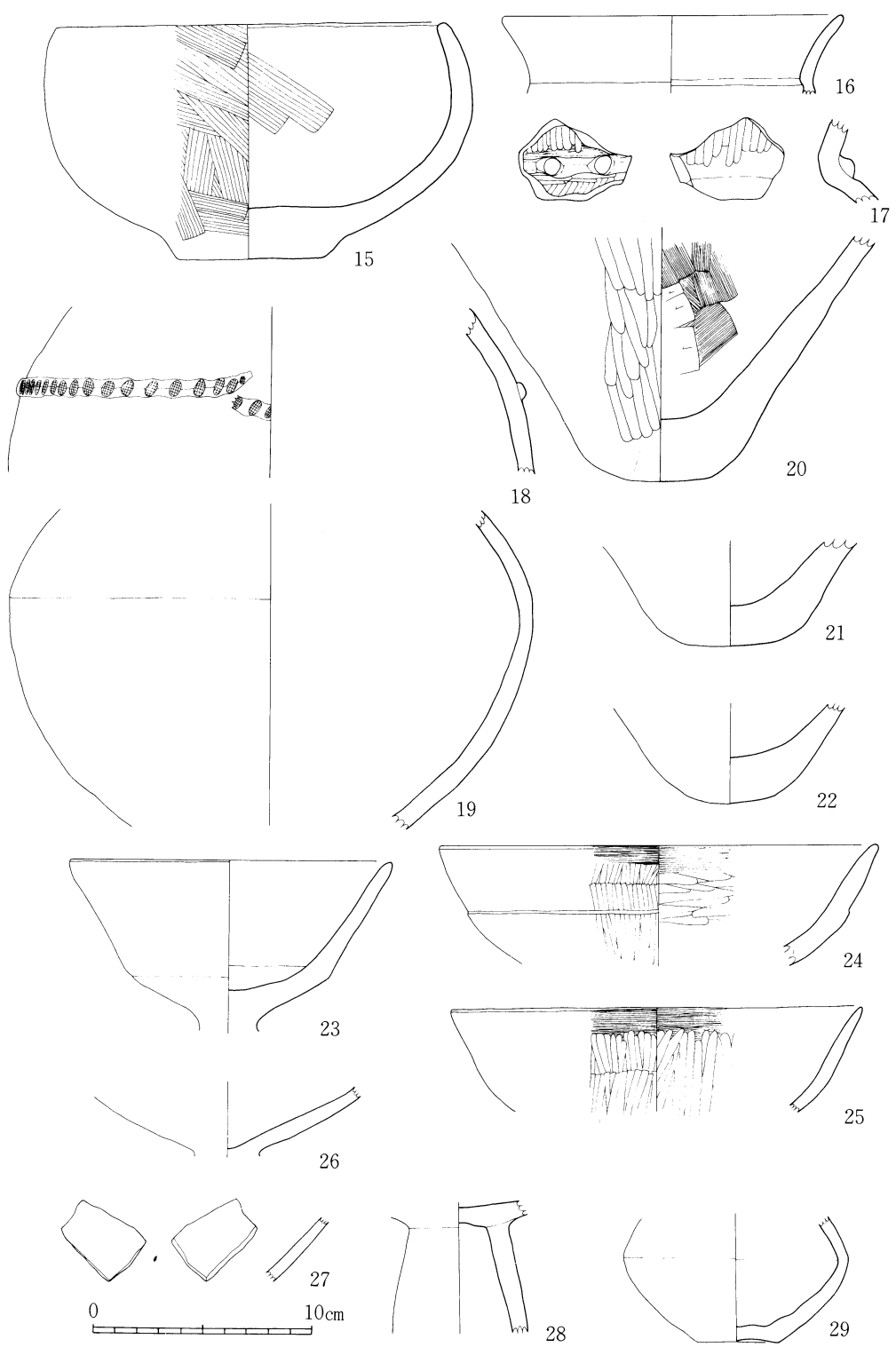
29は埴形土器である。1点のみの出土である。胴部は球形状を呈し、底部は径3.8cmで、やや上げ底ぎみの平底である。頸部は欠損している。内外面ともに、器面が荒れていて調整がわかりにくい。内面はナデ調整、外面はヘラ磨きが施されていると思われる。



第161図 古墳時代の土器実測図(1)



第162図 古墳時代の土器実測図(2)



第163図 古墳時代の土器実測図(3)

第32表 古墳時代の土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
第 161 図	1	H-22	Ⅱ	石英、長石、角閃石	良好	茶褐色	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目	刻目突帯、口縁内部に煤
	2	G-9	Ⅲ	〃	〃	〃	〃	ナデ	〃
	3	H-12	Ⅱ	〃	〃	淡茶褐色	〃	〃	〃
	4	H-18	Ⅲ	〃	〃	茶褐色	ヘラ削り、ナデ	〃	
	5	H-14	Ⅲ	〃	〃	〃	ナデ	ナデ	底部内面に煤付着
	6	H-6	Ⅰ	〃	〃	暗茶褐色	〃	ヘラ削り？	
	7	H-14	Ⅲ	〃	〃	茶褐色	〃	ナデ	
	8	H-6	Ⅰ	〃	〃	赤茶褐色	〃	〃	
	9	F-15 G-15・16	Ⅲ Ⅱ	〃	〃	灰茶褐色	〃	〃	
第 162 図	10	H・I-14	Ⅱ	〃	〃	茶褐色	〃	〃	絡条突帯、外面に煤付着
	11	H-6	I-Ⅲ	〃	〃	〃	ハケ目、ナデ	〃	三角突帯
	12	G-5 H-6	〃	〃	〃	〃	ナデ		
	13	F-6,7 G-8	Ⅱ,Ⅲ	〃	〃	〃	ナデ、ヘラ磨き	〃	
	14	D・E-13	〃	〃	〃	赤茶褐色	〃	〃	底部内面に煤付着
第 163 図	15	I-18	Ⅲ	石英、長石、金雲母	〃	茶褐色	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目、 ヘラ削り	底部内面に煤付着
	16	H-24	〃	石英、長石、角閃石	〃	灰茶褐色	ナデ	ナデ	
	17	E-14	〃	〃	〃	暗茶褐色	ナデ、ヘラ磨き	ナデ、ヘラ磨き	刻目突帯
	18	H-6	Ⅰ Ⅲ	〃	〃	茶褐色	ナデ	ナデ	〃
	19	G-7	Ⅱ Ⅲ	〃	〃	〃	〃	〃	外面に煤付着
	20	H-6	Ⅲ	〃	〃	〃	ナデ、ヘラ磨き	〃	
	21	G-16	Ⅱ	〃	〃	淡茶褐色	ナデ	〃	
	22	F・G-7	Ⅰ Ⅲ	〃	〃	茶褐色	〃	〃	
	23	J-11	Ⅲ	〃	〃	赤茶褐色	ナデ、ヘラ磨き	ナデ、ヘラ磨き	
	24	H-6	〃	〃	〃	茶褐色	〃	〃	
	25	H-17	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	26	I-11	〃	〃	〃	〃	〃	〃	内外面に煤付着
27	I-24	Ⅰ	〃	〃	赤褐色	ヘラ磨き	ナデ		
28	H-13	Ⅲ	〃	〃	茶褐色	ナデ、ヘラ磨き	ナデ、ヘラ磨き		
29	G-8	〃	〃	〃	〃	ナデ	ナデ		

第Ⅷ章 奈良・平安時代の調査

第1節 調査の概要

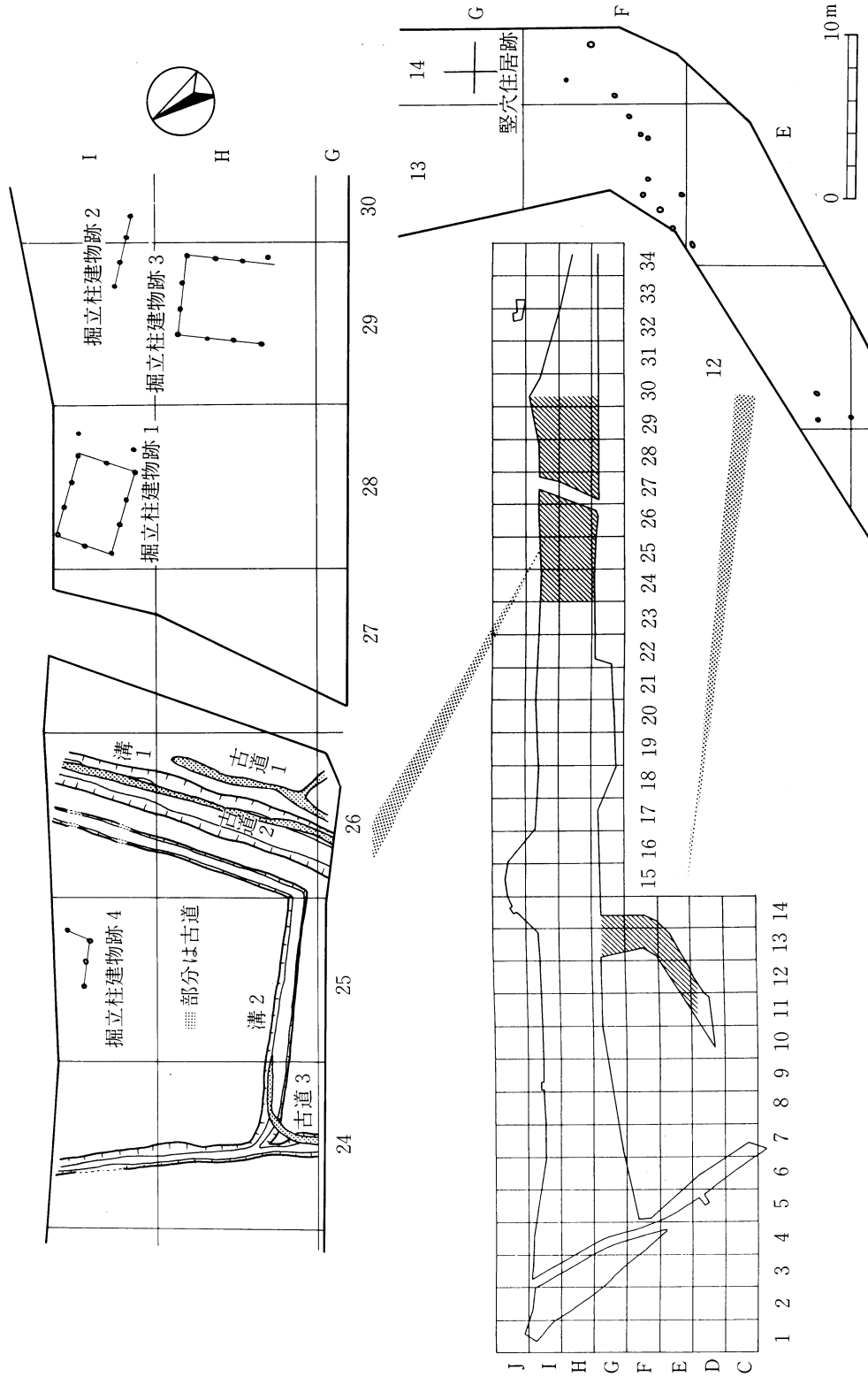
Ⅱ層およびⅢ層上部から土師器・須恵器、その他に土製品が出土した。また遺構は竪穴住居跡1基、掘立柱建物跡4棟、時期が不明であるが溝状遺構2条とそれに伴うものと思われる古道3本が検出された。Ⅱ層がこの時代の包含層の中心をなすものであると考えられるが、後世の耕作等による削平のためⅡ層が削られている部分がかかなりあった。Ⅱ層の残りが良く、遺構・遺物が検出・出土した所は、調査区の中心から北東側のG～I-21～35区、F～I-15～18区であった。その中でも特にG・H-24～27区が遺物が集中して出土した。

第2節 遺構

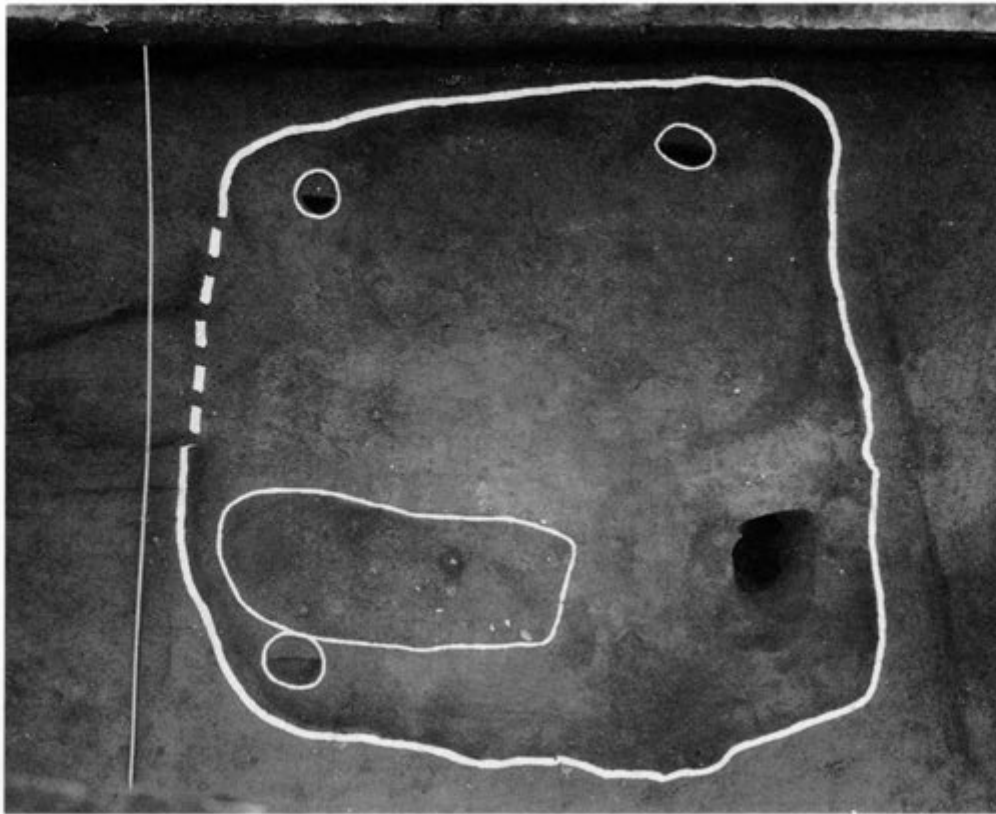
1. 竪穴住居跡（第165図・第166図）

G-16区より検出されたもので、4m×4.1mのほぼ正方形の住居跡である。四隅に柱穴がみられる。これらの柱穴は検出が難しく、黄橙色の土まで掘り下げてから検出したが、柱穴の埋土は少しざらざらした感じの黒色土が大部分をしめ、他に黄褐色土と黒色土が混ざったような埋土もみられた。住居跡の北東側床面部分は土層横転がみられ、Ⅱ層～Ⅵ層までが横転していた。またその影響を受けて、住居跡中心部でも黄橙色の層が床面より高く盛り上がっていた。この土層横転のすぐ近くで、住居跡内の東側にはやわらかい黒褐色土があり、かなり深くまで（Ⅴ層と思われる）掘り下げることができた。また住居跡内の北側と南側の床面は浅い土坑状になっており、床面に近いところで土器が出土した。床面付近から土師器や黒色土器A類が出土しているので、平安時代の住居跡と思われる。

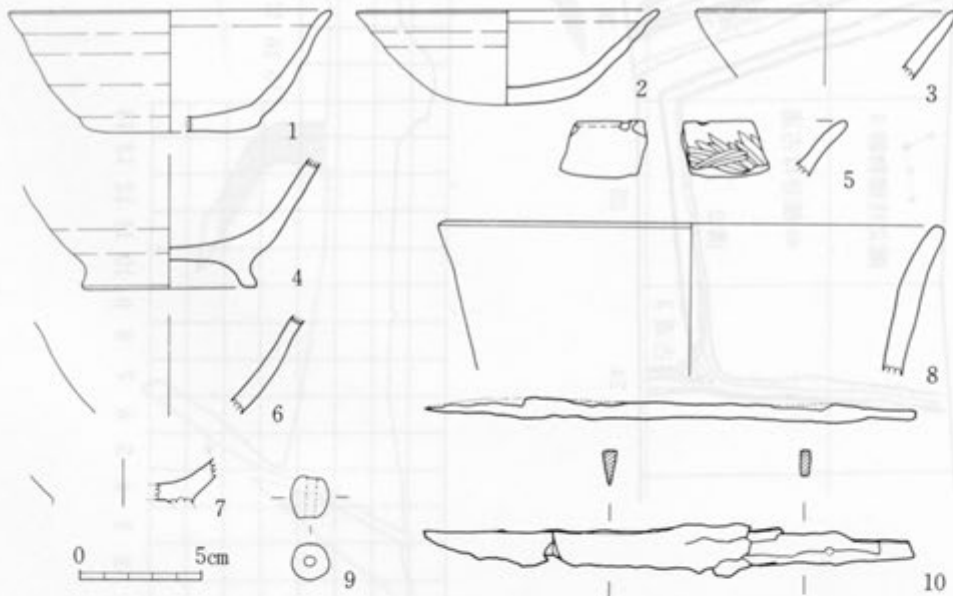
遺物は、床面付近から土師器の坏・椀・甕・鉢、黒色土器A類の坏または椀、土錘、刀子等が出土している。1は体部がやや内湾して立ち上がり口縁部が外反する坏である。内外面は横ナデが施され、底部は回転ヘラ切りである。復元口径13.4cm、底径7.4cm、器高5cmを測り、茶褐色を呈する。2も坏である。体部がまっすぐに伸びるもので、内外面は横ナデ調整である。底部はやや丸みを帯び、回転ヘラ切りである。復元口径12.4cm、器高3.9cm、底径は約5cm程度で、明茶褐色を呈する。3はまっすぐにのびる坏の口縁部で、復元口径10.6cmを測る。内外面は横ナデ調整が施され、明茶褐色を呈する。5は黒色土器A類の坏または椀の口縁部である。外面は茶褐色を呈し横ナデ、内面は黒くいぶしがかかりヘラ磨きが施されている。4は口縁部が欠損している以外はほぼ完形の土師器の椀である。底部にハの字に開く高台が付き、体部は内湾して立ち上がる。底径7.2cmを測る。内外面は横ナデ調整が施され、淡茶褐色を呈する。6は土師器の椀又は坏の体部であり、7は土師器の椀の底部で高台が欠損している。どちらも内外面は横ナデが施され、淡茶褐色を呈する。8は土師器の鉢である。やや外反する口縁で、復元口径20.8cm測る。内外面は横ナデが施され、赤褐色を呈する。9は直径1.6cm、長さ1.7cmの土錘である。穴は土錘のほぼ中心を通っており、直径約4mmである。表面はナデ調



第164図 奈良・平安時代遺構配置図



第165圖 豎穴住居跡



第166圖 豎穴住居跡出土遺物

整が施されている。10は全長19.1cmの刀子である。茎は長さ5.3cm，幅約3mm～5mmで，目釘穴がわかる。柄は残っておらず，不明である。

2. 掘立柱建物跡（第167図・第168図）

調査区域内で45カ所の柱穴が検出されたが，建物跡として確認できたものは2棟，また建物跡の一部であると考えられる柱列は2列検出された。いずれもⅢ層上面で検出された。

掘立柱建物跡1

I-28区で検出された。主軸は北西～南東方向で，2間×3間の建物跡である。南東側桁行は約5.2mを測り，柱間はP1-P2が約1.8m，P2-P3が約1.6m，P3-P4が約1.8mである。北東側桁行は約4.9mを測り，柱間はP6-P7，P7-P8が約1.6m，P8-P9が約1.7mである。北西側梁行は約3.6mを測り，柱間はP4-P5，P5-P6ともに約1.8mである。南東側梁行は約3.7mを測り，柱間はP9-P10が約1.6m，P10-P1が約1.7mである。柱穴の平面形は径約20～34cmのほぼ円形であり，ほぼ垂直に掘り込まれている。柱穴の断面形は筒状で，P4とP10が浅く（約18cm），P7がいちばん深い（約50cm）。他の柱穴は約28cm～40cmである。

また，P1とP9の約1.5m前にやや小さめの浅い柱穴が検出された。主軸よりやや東側にずれているが，建物跡と何らかの関係が考えられる。簡単な廂が作られていたのかもしれない。

掘立柱建物跡2

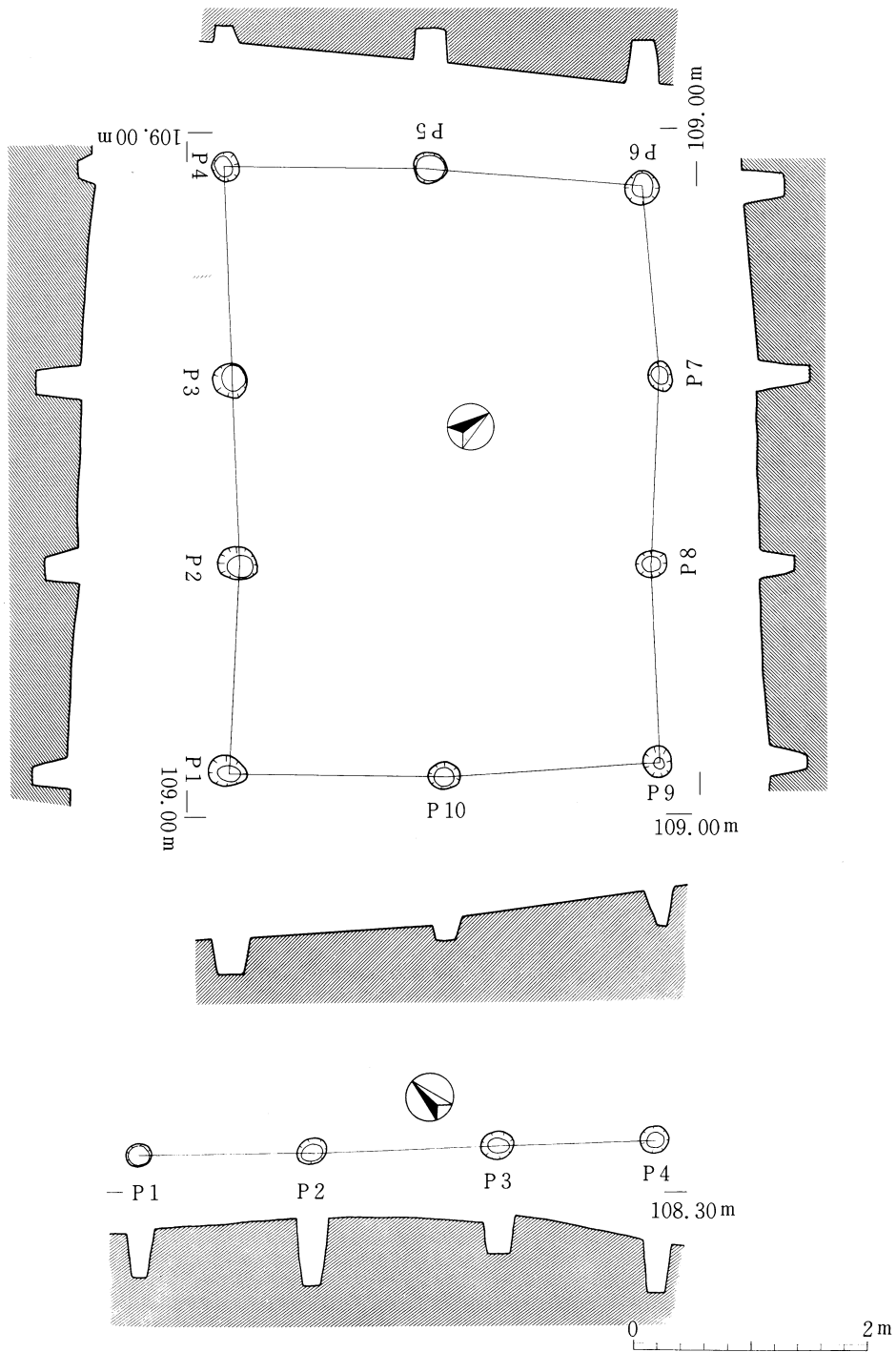
I-29・30区より検出された柱列である。他は削平を受けたのか検出できなかったため，主軸方向も不明である。一列が3間で約4.4mを測り，柱間はP1-P2が約1.5m，P2-P3が約1.6m，P3-P4が約1.3mである。柱穴の平面形は径約24～28cmのほぼ円形であり，断面形は筒状でP2が約80cmと深く，P3が約30cmと浅い。

掘立柱建物跡3

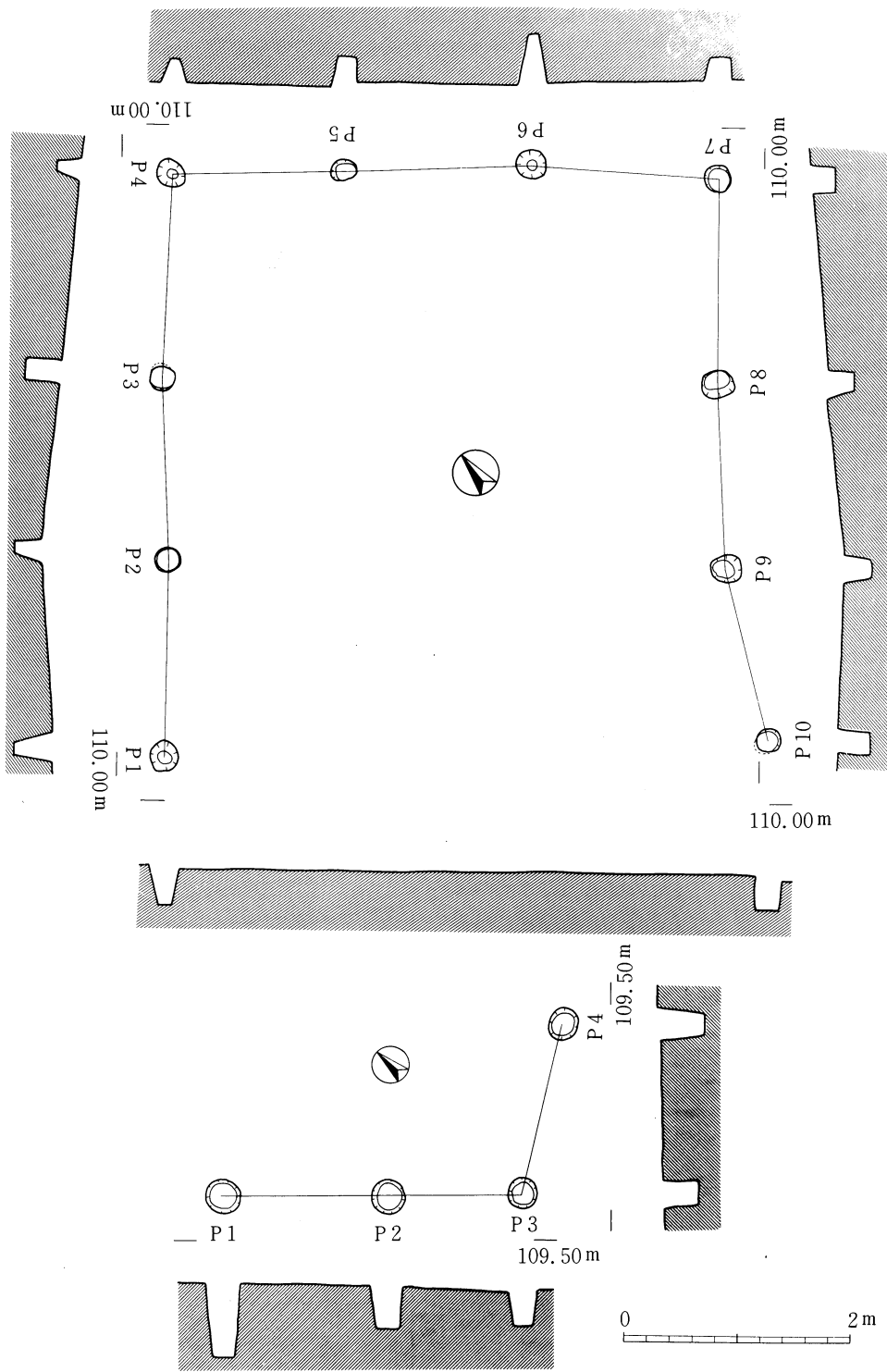
H-29区より検出された。主軸は北東～南西方面で，柱穴が確認できなかったところがあるため，3間×3間の建物跡になるのか，3間×4間になるのかまたはそれ以上か不明である。北西側桁行は約5.2mを測り，柱間はP1-P2とP3-P4が約1.8m，P2-P3が約1.6mである。南東側桁行は約5mを測り，柱間はP7-P8が約1.8m，P8-P9とP9-P10が約1.6mである。北東梁行は約4.8mを測り，柱間はP4-P5，P5-P6，P6-P7ともに約1.6mである。P10は南東梁部の並びからやや南東方向にずれている。柱穴の平面形は径約20～30cmのほぼ円形で，垂直に掘り込まれている。柱穴の断面形は筒状になり，約24～44cmの深さである。

掘立柱建物跡4

I-25区より検出された。他の柱穴は調査区域外に広がると思われる。主軸方向は不明である。柱間はP1-P2が約1.5m，P2-P3が約1.2m，P3-P4が約1.5mである。P4



第167図 掘立柱建物跡 1, 2



第168図 掘立柱建物跡 3, 4

は他の柱穴の並びから見るとやや南側方向にずれている。柱穴の平面形は径約24～30cmのほぼ円形であり、断面形は筒状で、P1が約64cmと一番深く、他の3つが約36cmである。

3. 溝状遺構及び古道 (第169図)

G～I-24～26区のⅢ層上面で、溝状遺構2条、古道3本が検出された。しかし部分的であり、溝状遺構も古道も調査区域外へ続くものと思われる。時期は不明であるがこれらの溝状遺構と古道は同時期のものであると思われる。

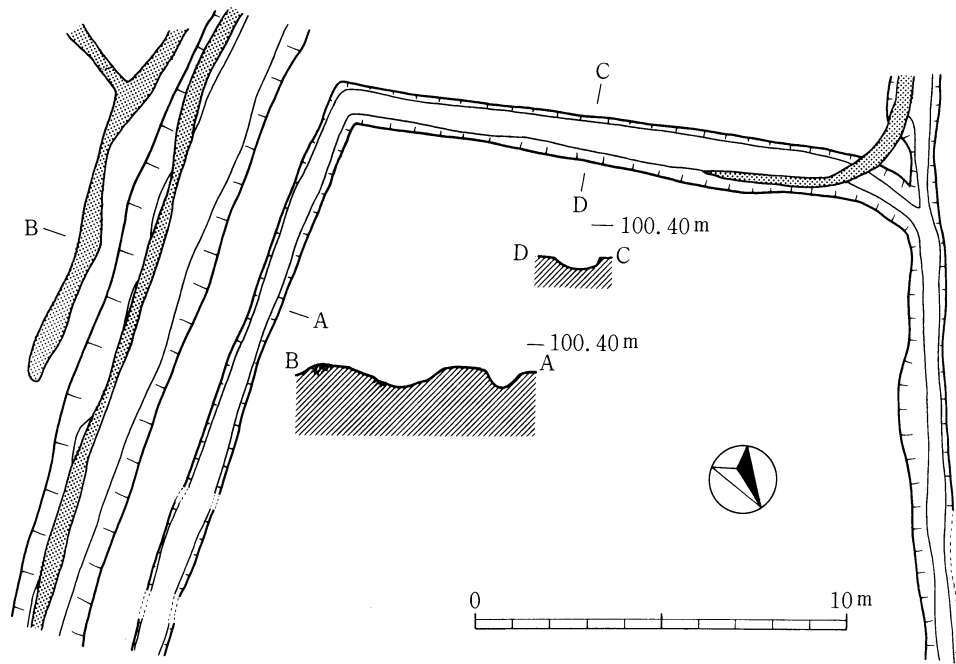
遺物は溝状遺構埋土内より出土しているが、ほとんど小片で、縄文時代晩期の浅鉢・深鉢、成川式土器、土師器、須恵器等が出土している。また数点ではあるが、陶器も出土している。

溝状遺構1

G～I-26区で検出され、北東-南西方向に走っている。幅は約2m～3mで、長さは調査範囲内をほぼ横断し、約18mである。断面形はU字形をなし、深さは約50cmである。埋土は、一様で、溝は一時期に埋められたようであったが、溝状遺構の底面にはわずかではあるが砂層が見られ、水が流れていた可能性があると考えられる。

溝状遺構2

G～I-24～26区で検出された。溝状遺構1とほぼ平行に北東-南西方向に走り、そこから南東-北西方向、そして南-北方向に走る、コの字形に走る溝である。幅は約60～140cmで、長さは北東-南西方面が約18m、南東-北西方面が約16m、南-北方面が約16mである。深さは約30～50cmである。埋土は溝状遺構1と同じで、遺構の底面にはわずかではあるが砂層がみ



第169図 溝状遺構, 古道

られた。

古道 1・2

G・H-26区で検出された。古道 1・2ともに北東-南西方面にほぼ平行に走り、古道 1は途中で2つに分かれる。幅は約20~80cmで、長さは古道 1が約10.5m、古道 2が約12.5mである。古道部分は固く踏みしめられている。

古道 3

H-24区で検出された。溝状遺構 2に沿うように走るが、途中から検出できなくなった。古道部分は固く踏みしめられている。

第3節 出土遺物

1. 土師器 (第170図~第174図)

土師器は蓋・皿・坏・椀・甕・黒色土器 A類の坏・椀、黒色土器 B類、墨書土器、刻書土器等が出土している。包含層内出土の土師器は破片が多く、復元できるものがわずかであった。

蓋 (第170図11)

11は蓋である。復元口径16.2cmを測る。

皿 (第170図12・13)

12・13は皿である。どちらも口縁部は外反し、底部は回転ヘラ切りである。12は復元口径3.8cm、底径8.4cm、器高2.8cmを測り、13は復元口径13cm、底径7cm、器高3.7cmを測る。

坏 (第170図14~57)

14~57は坏である。

14はG-11区から出土し、15は内側に坏と同じくらいの大きさの石をのせた状態でI-27区から出土し、ほぼ完形に復元できたものである。14は口径12.6cm、底径4.8cm、器高4.7cmを測り、体部は内湾気味に立ち上がる。15は口径11.4cm、底径5.1cm、器高4.8cmを測り、体部はまっすぐ伸び口縁部で外反する。底部の切り離しはどちらも回転ヘラ切りである。

16~26は口縁部である。

18・24・26を除き、16~25は体部が口縁部にかけてまっすぐに伸びるもので、復元口径は12.3cm~15.6cmを測る。18は体部がまっすぐに伸び、口縁部が外反するもので、復元口径14cmを測る。24・26は体部がやや内湾するもので、24が復元口径12cmで、26が11.6cmを測る。内外面は16~26すべて横ナデ調整が施されている。

27~57は底部である。

復元底径は、4.4cm~7.2cmで、5.5cm以上のものがほとんどである。52~57は底部に高さとくびれ部を有しているもので、充実高台を呈している。

椀 (第171図58~84)

58~84は椀である。

58~64は口縁部である。復元口径は10.4cm~14.2cmを測る。58~60・63・64は体部がやや内

湾し口縁部がまっすぐ伸びるものである。61・62は口縁部で外反するものである。

64～84は高台を有する底部である。高台部分は76を除きハの字に開き、貼付けである。復元口径5.6cm～9.8cmを測る。65～68は高台部分が高いもの、69～73は中くらいのもの、78～83は短いものである。74・75は厚く短い高台がつくもので、76は高台部分がハの字ほど開かずやや内湾気味のものである。

黒色土器 A 類 (第171図85～114)

85～114は内面に黒いいぶしがかったものである。

85・86は坏の口縁部である。体部が直線的に伸び上がり、復元口径は、85が15.8cm、86が16cmを測る。

87～90は、坏の底部である。87～89は体部が内湾して立ち上がるが、90は直線的に立ち上がる。復元底径は5.6cm～10.4cmである。底部の切り離しはすべて回転ヘラ切りである。

91～96は椀の口縁部である。91は体部が直線的に伸び、口縁部の端部は平坦に治められている。復元口径は12.6cmである。92～94は口縁部で外反するもので、復元口径11cm～16cmである。95・96は口縁部がまっすぐ伸びるもので、復元口径は95が14.4cm、96が13.8cmである。

97～112は高台を有する椀の底部である。高台の高さから3種類に分類した。97～100は高台の高さが高いもの、110～112は短いもの、101～109はその中間のものである。高台はハの字に開き、復元底径は5.8cm～8.8cmである。112は高台の外面に稜を有する。113・114は高台が底部との貼付け部分から欠損したものである。

黒色土器 B 類 (第172図115～118)

115～118は内外面ともに黒色を呈するものである。いずれも口縁部で、復元口径は115が13.2cm、116が12.4cmである。内外面はヘラ磨きが施されており、口縁部は115～117ではまっすぐに伸び、118ではわずかに外反している。

その他の土師器・青磁 (第172図119～121)

119～121は内面が磨かれているもので、ヘラ磨きである。外面はナデ調整が施されている。120は内面に赤色顔料の付着がみられるものであり、ベンガラであると思われる。121は高台を有する底部である。太いしっかりとした脚部は、ハの字に開いている。112は青磁の口縁部である。

墨書土器 (第172図123～138)

123～138は墨書土器である。全部で17点出土しているが、ほとんどが破片で、文字も一部分しか残っておらず、判読できるものは少ない。墨書は全て土師器、黒色土器 A 類等の坏や椀の体部外面に書かれている。

123・124は黒色土器 A 類で表層から出土したものであるが、ほぼ完形の形で出土した。やや内湾気味の体部から口縁部はまっすぐ伸び、端部でわずかに外反する。ハの字に開く高台を有する。外面は横ナデ調整が施され、内面は黒色にいぶしをかけ、細かい左上がりのヘラ磨きが施されている。123は口径12.2cm、底径6.6cm、器高5.4cmを測り、124は口径12.4cm、底径6.6

cm, 器高5.7cmを測る。体部外面に書かれている文字は, 123が「七箇」, 124が「十箇」であると思われる。「七」と「十」の区別がつきにくい, 123はわずかに曲がった部分があり「七」と推定され, また「个」の字は「箇」の略字であると推定される。他にこれらと同じ種類の文字が書かれていたのではないかと考えられるものが, 125・127・128・130である。125は復元口径13.4cmである。

129は体部が内湾して立ち上がり, 口縁部で外反するものである。内外面は横ナデ調整が施されている。体部外面に「石」という字がみられるが, 石偏である。傍の部分が欠けているため判読不能である。その下の字も判読できない。復元口径11.6cmを測る。

131は, 体部がまっすぐに立ち上がるもので, 復元底径7.4cmを測る。内外面とも横ナデ調整が施されている。体部外面には, 数字の「0」のような字が書かれているが, 判読不能である。136は小片であるが, 「口」という字がみられる。ある文字の一部分であると思われる。

刻書土器 (第172図139)

139は刻書土器と思われるものである。小片であるため, 字の一部分であるのか絵の一部分であるのか不明である。

甕 (第173図, 第174図)

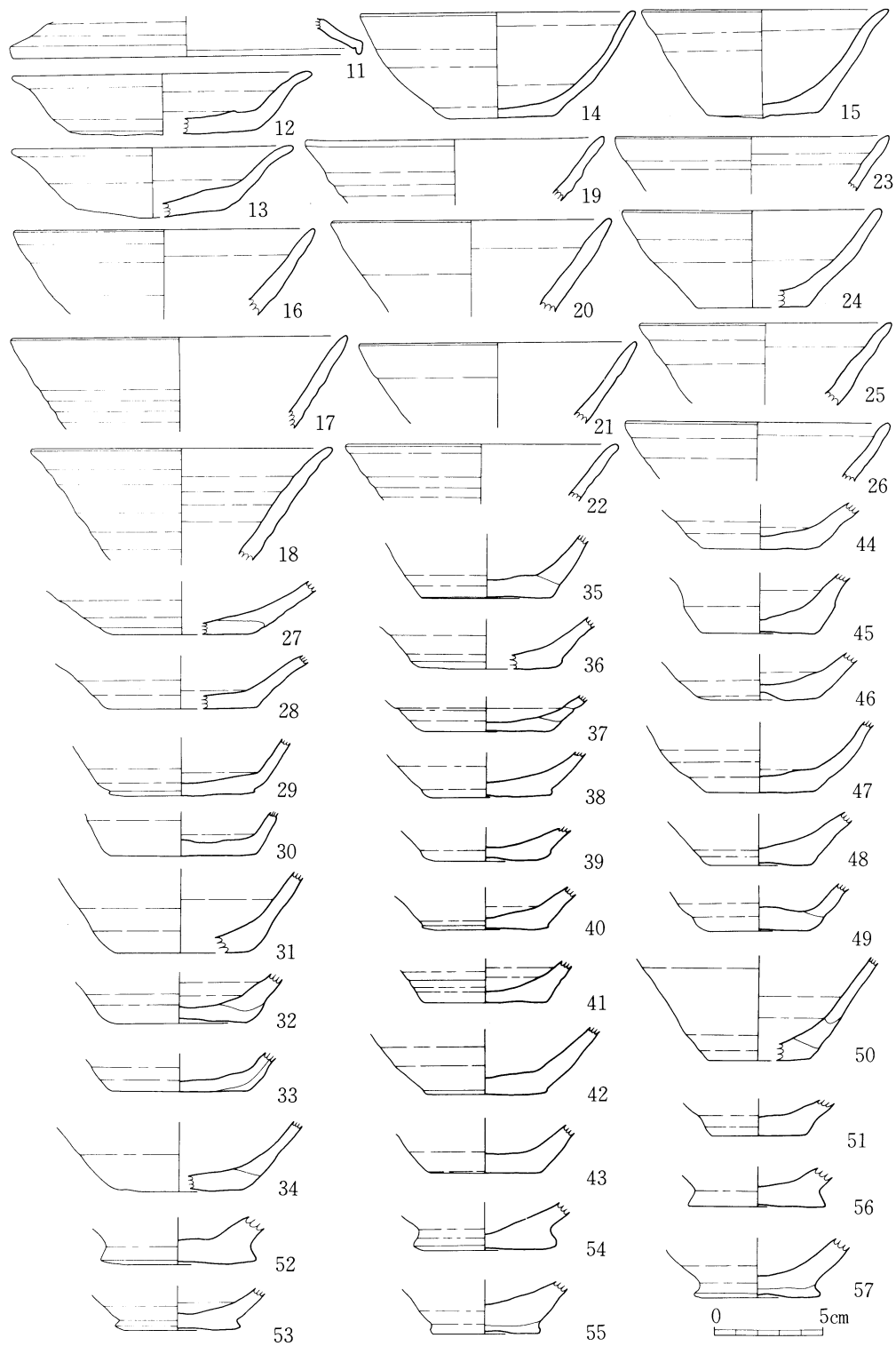
140～165は甕である。口縁部が外反し, 内面の頸部以下にヘラ削りが施され, 外面は口縁部では横ナデ, 頸部からはナデ調整が施されている。全体の形状を把握できる個体がないため, 口縁部から頸部にかけての形状によって大きく3種類に分類した。

140～146は頸部があまりしまらず, 口縁部が強く外反するものである。その中でも140～143は頸部から口縁部までの長さが長いもので, 復元口径25cm～33.2cmを測り, 144～146は短いもので復元口径24.4cm～32cmを測る。

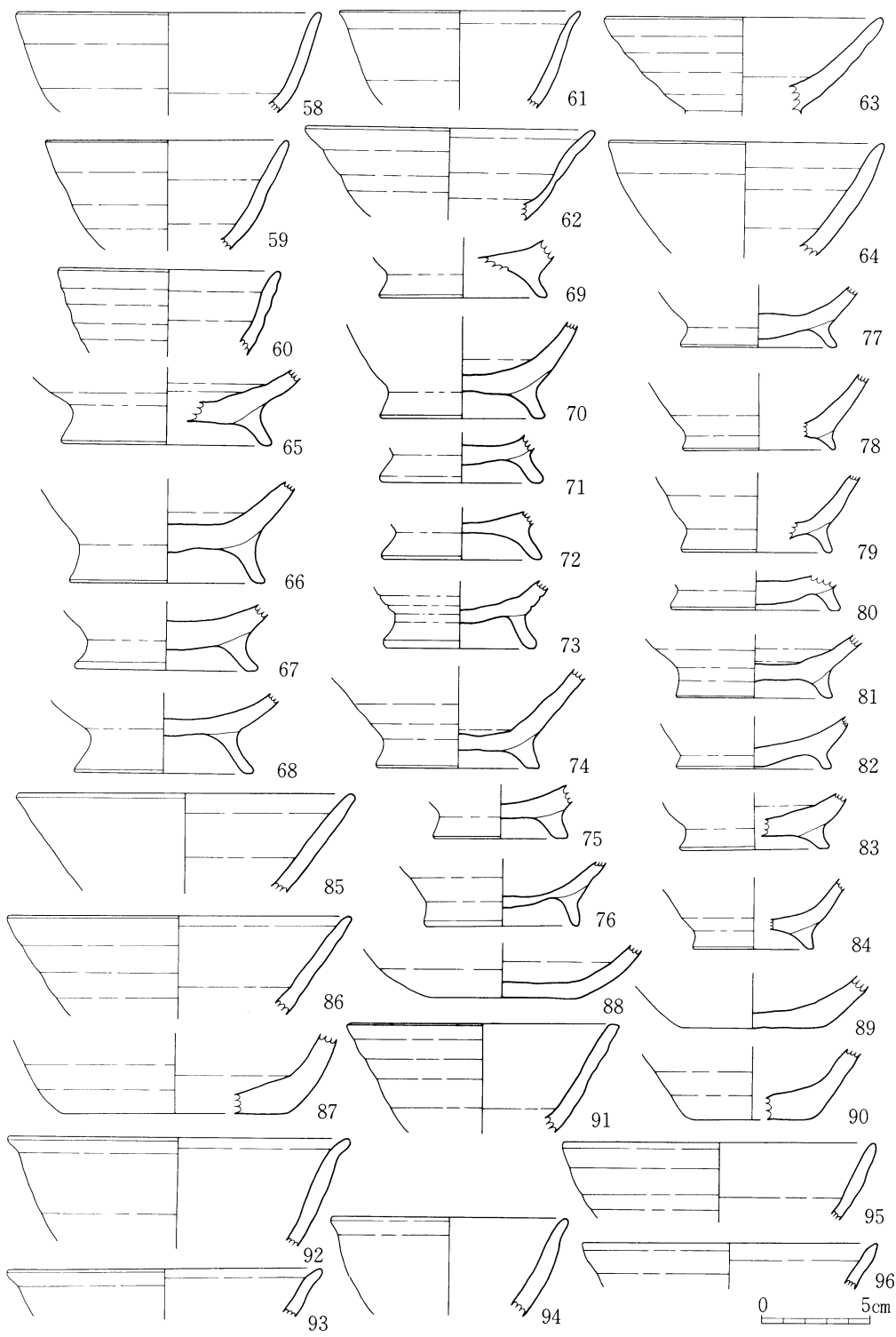
147～152は頸部がくの字にしまるものである。胴部はほとんど欠損しているため形状は断定できないが, やや張るものと思われる。その中でも147～149は頸部から口縁部までの長さが短いもので復元口径25.8cm～31.6cmを測り, 150～152は短いもので復元口径24.2cm～28.4cmを測る。

153～160, 162～164は口縁部が外反するがそれほど強くないもので, 頸部もあまりしまらず, 胴部も張らないものである。復元口径22.4cm～31.2cmを測る。162は頸部がしまらず, 胴部から口縁部はわずかに外反しながら伸び, 端部でまたわずかに外反する。

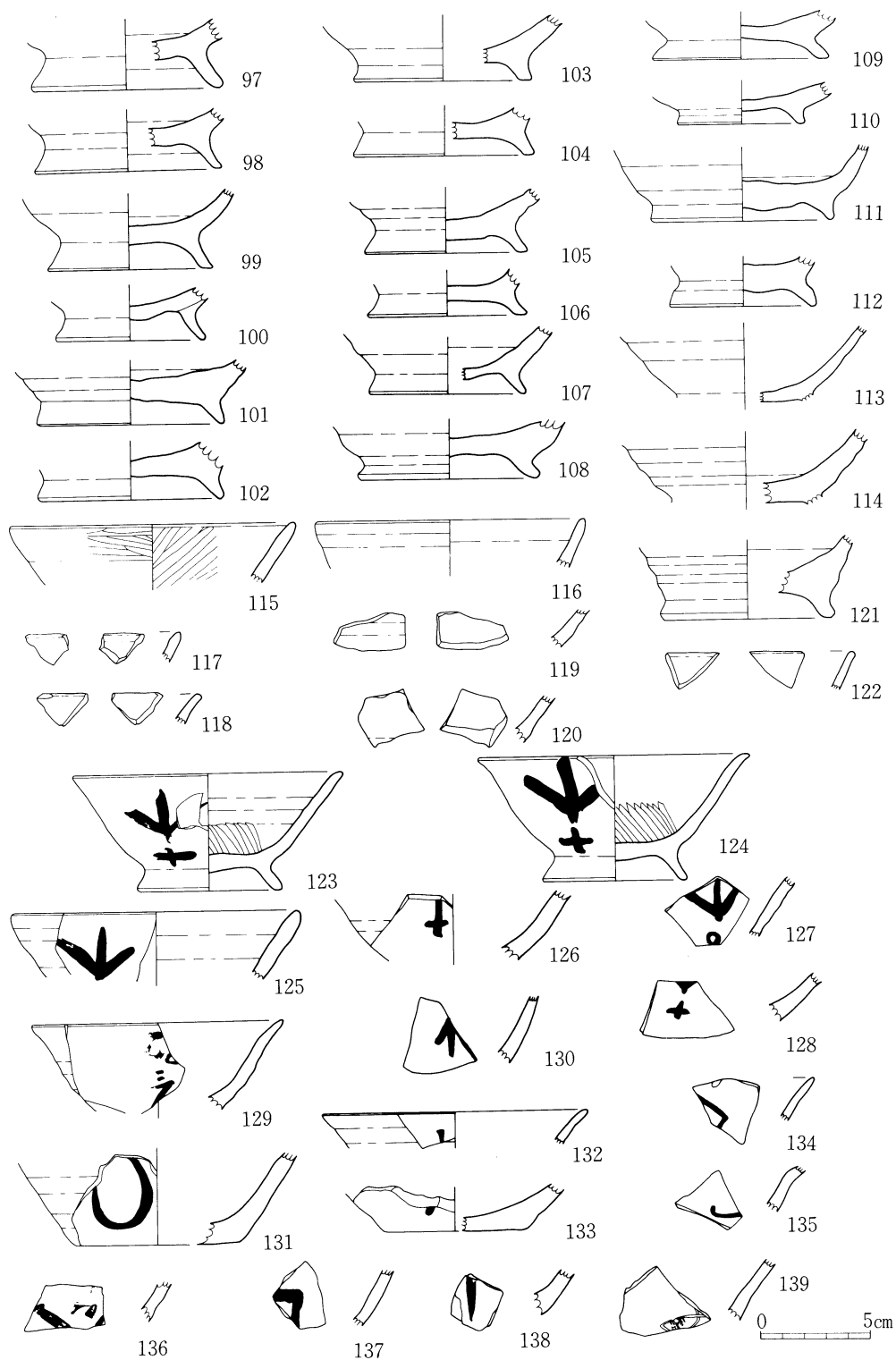
158・159は口縁端部が丸く治められているものである。161・165は口縁部のみであるが, 161は口縁部内面ハケ目がしっかりと残っているものである。165は口縁端部が強く外反するものである。



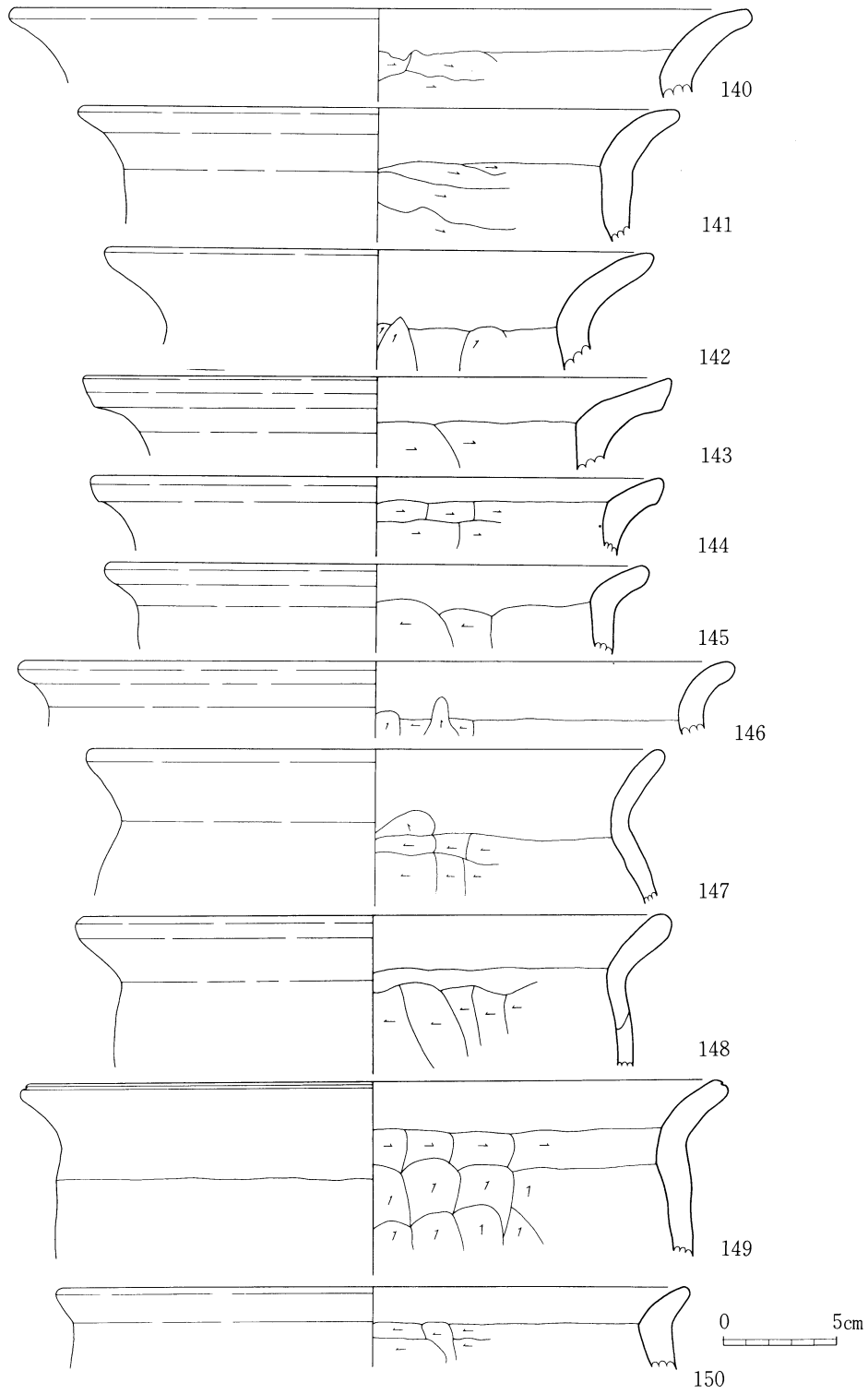
第170図 土師器(1)



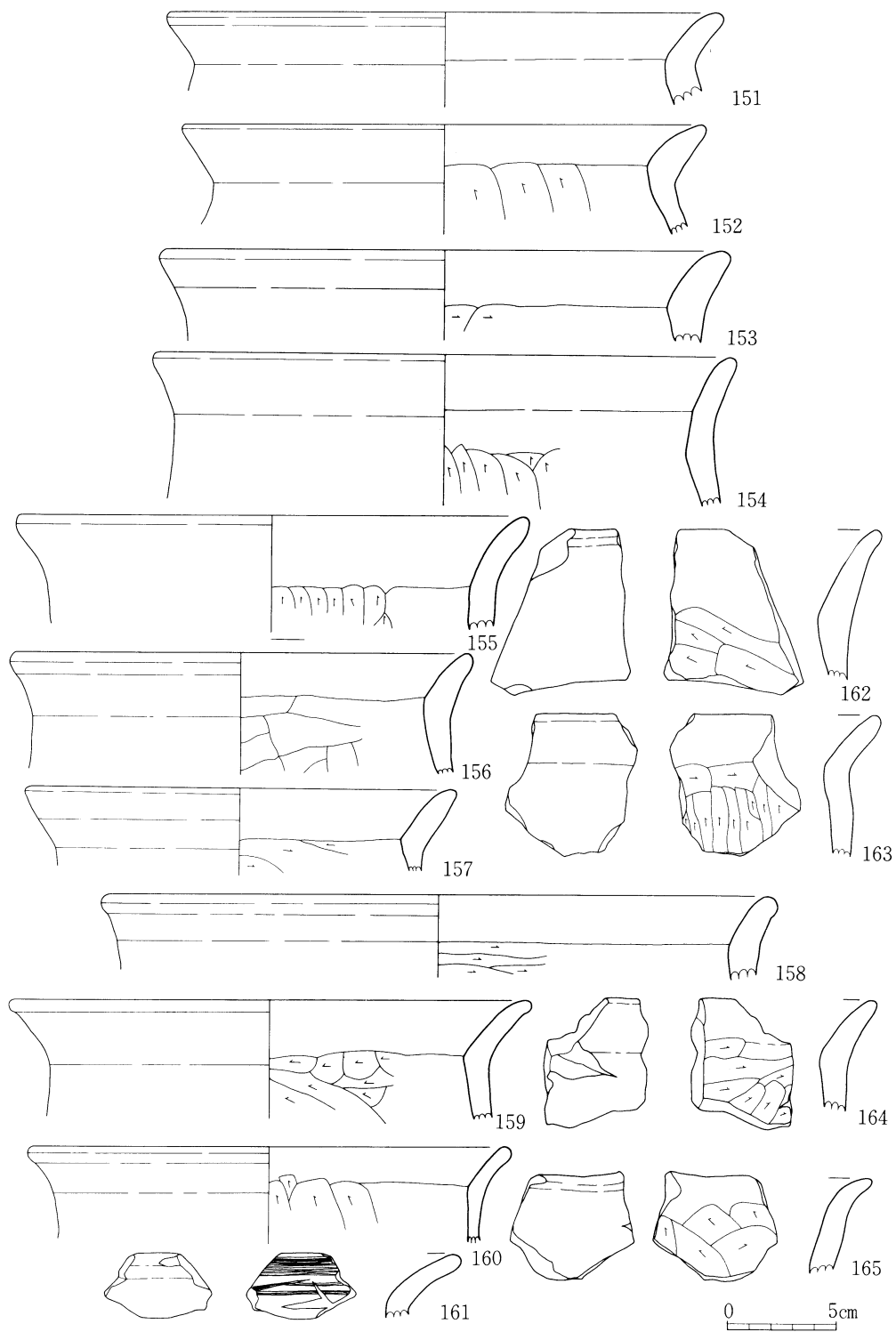
第171図 土師器(2)



第172図 土師器(3)



第173図 土師器(4)



第174図 土師器(5)

第33表 土師器観察表(1)

石=石英、長=長石、角=角閃石を表す

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整		
第170図	11	I-25	II	石、長、角	良好	茶褐色	ナデ	ナデ	第170図	53	I-25	II	石、長、角	良好	淡茶褐色	ナデ	ナデ		
	12	H-16	III	〃	〃	〃	〃	〃		54	〃	〃	〃	〃	茶褐色	〃	〃		
	13	I-25	〃	〃	〃	〃	〃	〃		55	H-26	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
	14	G-11	〃	〃	〃	〃	〃	〃		56	H-25	〃	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃	〃	
	15	I-27	II	〃	〃	淡茶褐色	〃	〃		57	H-23	〃	〃	〃	〃	茶褐色	〃	〃	
	16	G-23	〃	〃	〃	〃	〃	〃		58	I-25	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	17	I-25	〃	〃	〃	〃	茶褐色	〃		〃	59	G-16	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	18	〃	II-III	〃	〃	〃	〃	〃		〃	60	I-24	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	19	〃	III	〃	〃	〃	〃	〃		〃	61	I-27	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	20	H-17	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃	62	H-26	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	21	I-27	II	〃	〃	〃	〃	〃		〃	63		I	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	22	I-25	III	〃	〃	〃	〃	〃		〃	64	I-24	II	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	23	〃	II	〃	〃	〃	〃	〃		〃	65	H-21	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	24	H-30	III	〃	〃	〃	〃	〃		〃	66	I-26	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	25	I-25	II	〃	〃	〃	〃	〃		〃	67		I	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	26	H-30	III	〃	〃	淡茶褐色	〃	〃		〃	68	G-34	II	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	27	I-19	〃	〃	〃	〃	茶褐色	〃		〃	69	I-25	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	28	I-25	〃	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃		〃	70	II-27	〃	〃	〃	〃	茶褐色	〃	〃
	29	H-27	II	〃	〃	〃	〃	〃		〃	71	I-25	〃	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃	〃
	30	I-25	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃	72	I-25	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	31	〃	〃	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃		〃	73	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	32	H-25	〃	〃	〃	〃	茶褐色	〃		〃	74	H-25	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	33	I-24	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃	75	H-26	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	34	G-34	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃	76	I-25	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	35	I-23	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃	77	H-24	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	36	I-25	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃	78	I-25	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	37	I-27	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃	79	I-26	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	38	I-25	〃	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃		〃	80	I-25	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	39	H-27	〃	〃	〃	〃	茶褐色	〃		〃	81	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	40	I-25	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃	82	H-25	〃	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃	〃
	41	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃	83	〃	〃	〃	〃	〃	茶褐色	〃	〃
	42	I-26	〃	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃		〃	84	I-25	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	43	I-27	〃	〃	〃	〃	茶褐色	〃		〃	85	I-27	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	44	〃	〃	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃		〃	86	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	45	〃	〃	〃	〃	〃	暗茶褐色	〃		〃	87	H-25	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	46	I-25	〃	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃		〃	88	I-25	〃	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃	ハラ磨き
	47	I-27	〃	〃	〃	〃	茶褐色	〃		〃	89	I-26	〃	〃	〃	〃	茶褐色	〃	ナデ
	48	H-24	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃	90	H-24	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	49	I-25	〃	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃		〃	91	G-32	〃	〃	〃	〃	〃	〃	ハラ磨き
	50	〃	〃	〃	〃	〃	茶褐色	〃		〃	92	H-25	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	51	I-26	〃	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃		〃	93	H-32	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	52	H-24	〃	〃	〃	〃	茶褐色	〃		〃	94	G-33	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

第34表 土師器観察表(2)

石=石英、長=長石、角=角閃石を表す

挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	挿図番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整		
第171図	95	H-33	II	石、長、角	良好	茶褐色	ナデ	ヘラ磨き	第172図	137	H-16	III	石、長、角	良好	淡茶褐色	ナデ	ナデ		
	96	H-27	III	〃	〃	〃	〃	〃		138	I-27	II	〃	〃	茶褐色	〃	〃		
	97	I-25	II	〃	〃	〃	〃	〃		139	I-27	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	98	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		140	H-26	〃	〃	〃	〃	〃	〃	ナデ ヘラ削り	
	99	I-28	〃	〃	〃	〃	〃	〃		141	H-33	〃	〃	〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	
	100	G-33	〃	〃	〃	〃	〃	〃		142	I-25	〃	〃	〃	〃	茶褐色	〃	〃	
	101	H-25	〃	〃	〃	〃	〃	〃		143	〃	〃	〃	〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	
	102	I-27	〃	〃	〃	〃	〃	〃		144	H-26	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	103	I-26	〃	〃	〃	〃	〃	〃		第173図	145	I-29	〃	〃	〃	茶褐色	〃	〃	
	104	I-25	〃	〃	〃	〃	〃	〃			146	I-28	〃	〃	〃	〃	暗茶褐色	〃	〃
	105	G-16	〃	〃	〃	〃	〃	〃			147	H-33	〃	〃	〃	〃	黒褐色	〃	〃
	106	I-25	〃	〃	〃	〃	〃	〃			148	I-28	III	〃	〃	〃	茶褐色	〃	〃
	107	G-33	〃	〃	〃	〃	〃	〃			149	H-34	II	〃	〃	〃	暗茶褐色	〃	〃
	108	H-26	〃	〃	〃	〃	〃	〃			150	I-25	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	109	G-33	〃	〃	〃	〃	〃	〃			151	〃	〃	〃	〃	〃	茶褐色	〃	ナデ
	110	H-25	〃	〃	〃	〃	〃	〃			152	H-28	III	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃	ナデ ヘラ削り
	111	H-34	〃	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃			〃	153	H-25	II	〃	〃	〃	〃	〃
112	H-25	〃	〃	〃	〃	茶褐色	〃	摩耗して ヘラ磨き	154		〃	〃	〃	〃	茶褐色	〃	〃		
113	H-23	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	155		I-26	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
114	G-33	III	〃	〃	〃	〃	〃	第174図	156		I-27	II	〃	〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	
115	H-23	II	〃	〃	〃	黒色	〃		〃		157	I-26	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
116	H-34	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃		158	H-26	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
117	H-34	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃		159	G-33	〃	〃	〃	〃	茶褐色	〃	〃
118	H-24	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃		160	H-27	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
119	H-26	〃	〃	〃	〃	茶褐色	〃		ナデ		161	H-24	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
120	〃	I	〃	〃	〃	〃	〃		〃	162	H-26	〃	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃	〃	
121	H-26	II	〃	〃	〃	〃	〃		〃	163	H-31	III	〃	〃	〃	茶褐色	〃	〃	
122	I-25	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃	164	H-26	II	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
123	〃	I	石、長、角	良好	茶褐色	ナデ	ヘラ磨き		第175図	165	I-27	III	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
124	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃			〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
125	H-25	II	〃	〃	〃	〃	〃			〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
126	I-28	〃	〃	〃	〃	〃	〃			〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
127	I-26	〃	〃	〃	〃	〃	〃			ナデ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
128	〃	〃	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃			〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
129	H-28	〃	〃	〃	〃	〃	〃			〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
130	〃	I	〃	〃	〃	〃	〃			〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
131	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
132	H-24	II	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
133	H-26	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
134	I-27	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
135	I-25	〃	〃	〃	〃	茶褐色	〃	〃		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
136	H-25	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		

須恵器（第175図～178図）

須恵器は蓋・坏・椀・壺・甕等が出土しているが、量も少なく破片がほとんどであり、復元可能なものはなかった。主にH・I-23～29区から出土している。

166～169は蓋である。復元口径は166が14.4cm、167は13.4cmを測る。168はつまみを貼りつけた跡が残るが、つまみ部分は欠損している。外面は天井部にヘラ削りが施され、口縁部は横ナデが施されている。169もつまみを有していたと思われる。

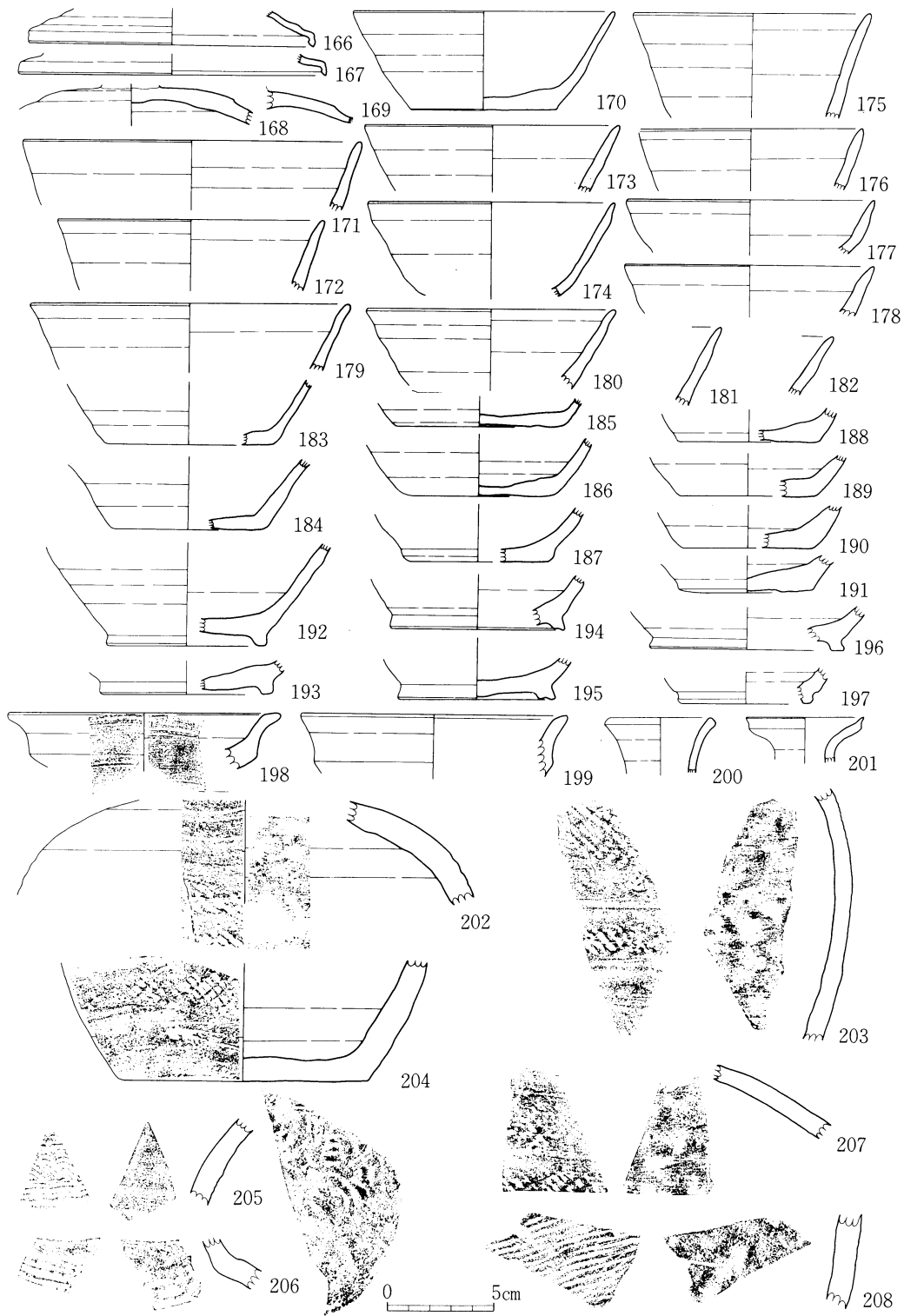
170～191は坏である。170は復元口径12.4cm、底径6.8cm、器高4.7cmを測る。体部はやや内湾して立ち上がり口縁部は直線的に伸びる。底部は回転ヘラ切りである。171～173・176は直線的に伸びる口縁部である。174は体部が内湾して立ち上がり口縁は直線的に伸び、175は体部が直線的に立ち上がり口縁部もまっすぐに伸びるものである。177は口縁部がやや内湾するものである。178～180は口縁部の端部がやや外反するものである。

183～191は坏の底部である。底部は全て回転ヘラ切りである。復元口径は6.2cm～7.9cmである。183・184は体部がまっすぐに立ち上がるもので、186～190は体部が内湾して立ち上がるものである。190は底部裏側に靦痕がみられる。191は体部が外反気味に立ち上がり、底部が若干上げ底になっている。

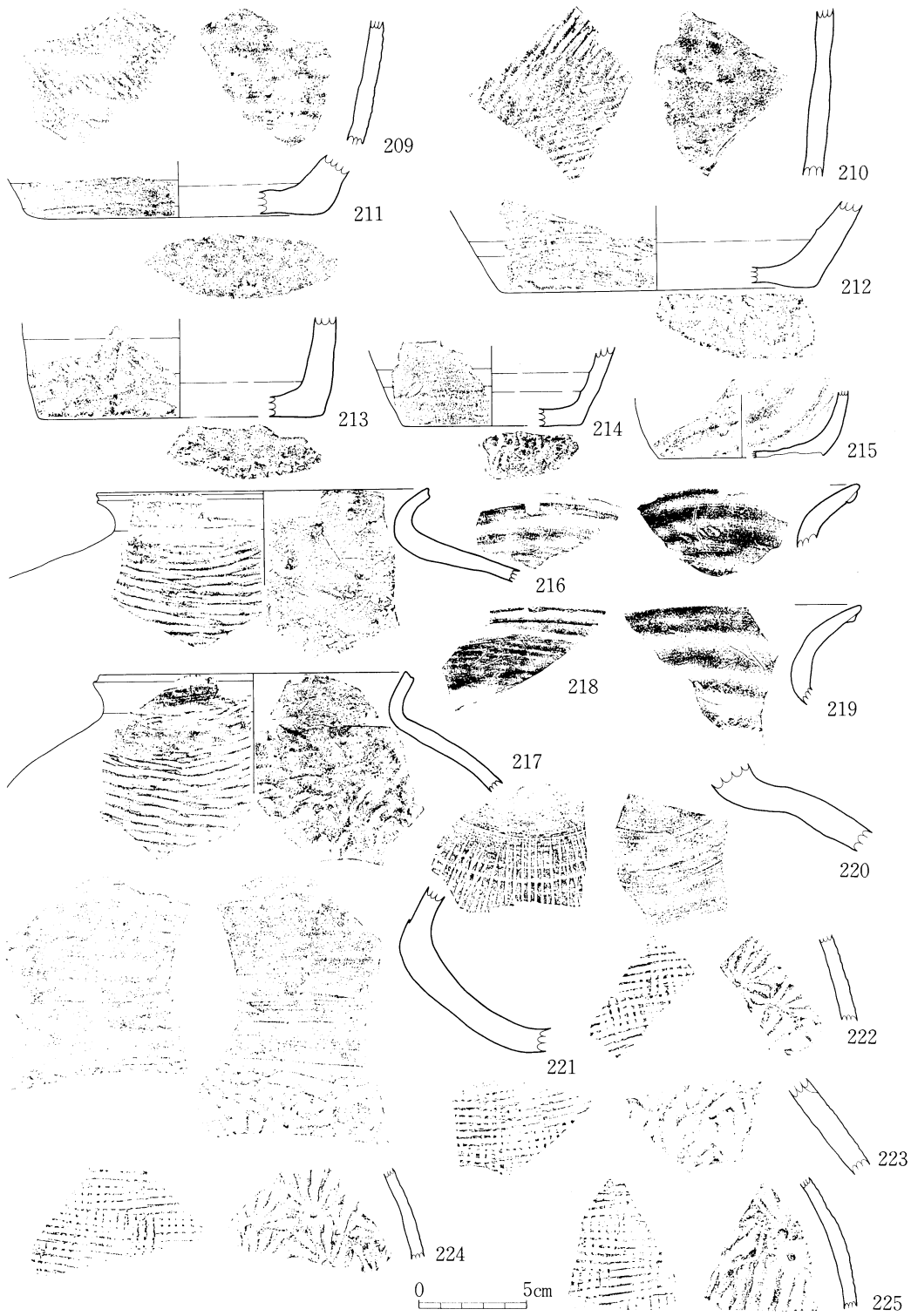
192～197は椀である。197を除き他は全て厚く短い高台がハの字に付く底部である。復元口径は7.4cm～9cmである。192は体部が直線的に立ち上がる。197は高台と体部の間に段を有し、高台がまっすぐに張り付けられている。復元底径6cmを測る。

198～215は壺である。198～201は壺の口縁である。198・199は口頸部から外反し、口縁部は平坦でやや内傾する。復元口径は198が13cm、199が12.6cmを測る。200は口縁上端がやや厚くなり、復元口径4.6cmを測る。201は口縁上端が先細り、復元口径5.6cmを測る。202～204は同一個体と思われるものである。202は肩部、203は胴部、204は底部である。外面は頸部に近いところでナデ調整、肩部でヘラ削り、胴部で格子目叩き、底部側面でヘラ削りが施されている。内面は、肩部では指で押さえた後横ナデ、胴部から底部にかけてはヘラ削りの後横ナデを施している。また底部裏面は同心円叩きが施されており、復元底径11.8cmを測る。205は口縁付近で、外面には沈線文と波状文が施されている。206は頸部である。211～215は底部である。215を除きすべて回転ヘラ切りで、復元底径は7.8cm～13.3cmである。

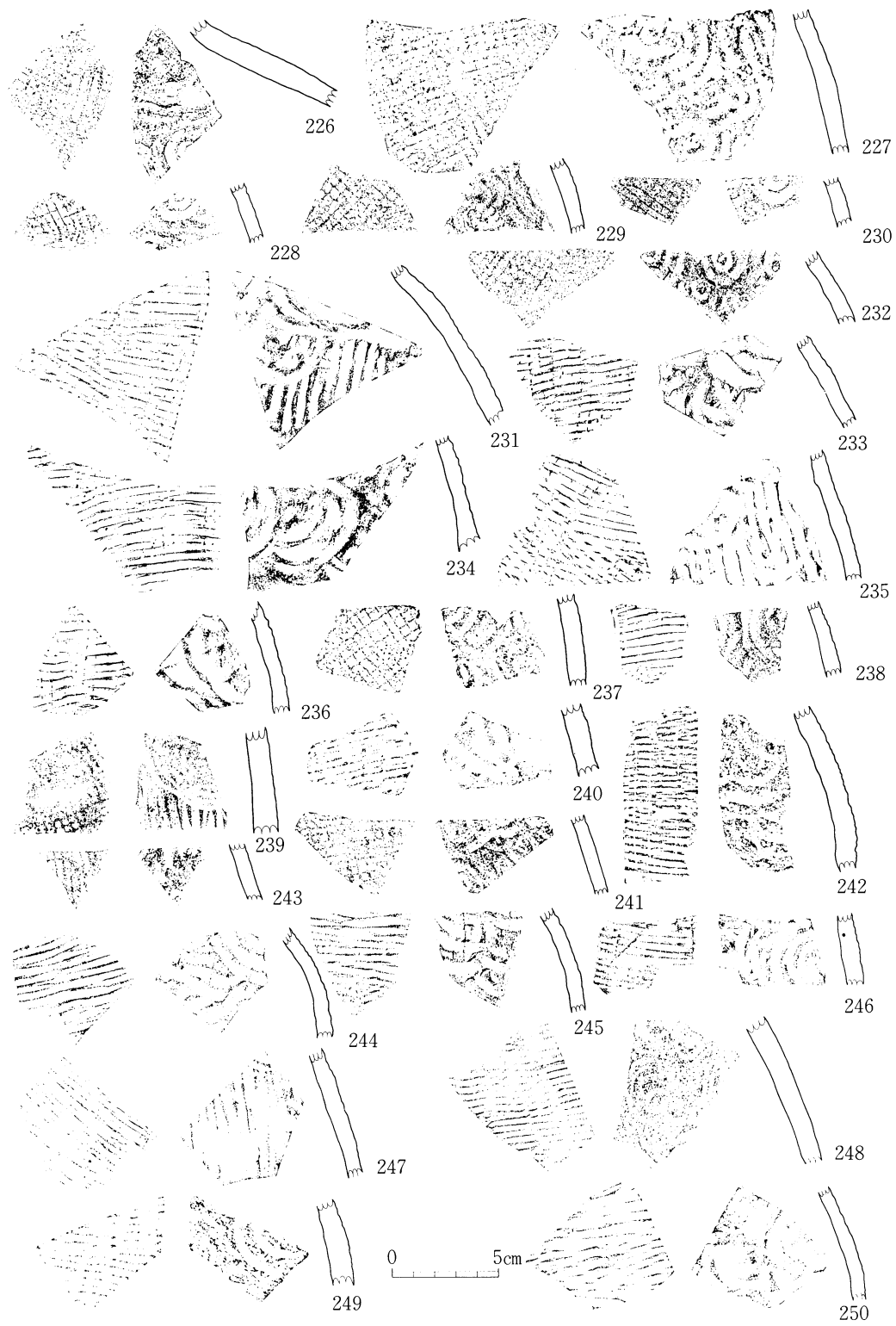
216～271は甕である。216～219は口縁部で、復元口径は216が15.4cm、217が14.4cmを測る。220・221は頸部であり、221の胴部内面には車輪文が施されている。222～271は胴部で叩き技法によって整形されており、外面と内面がそれぞれ格子目叩きと同心円叩き、平行叩きと同心円叩き、格子目叩きと平行叩き、平行叩きと平行叩きの組合せになっている。平行叩きと平行叩きの組合せは271の1点のみである。またその他に、外面が格子目叩きで内面は車輪文のものがあり、222～225の4点である。254は1点のみであるが、内面のあて具には直径2cm程度の丸い木の棒の断面を使っており、またその棒の断面は「+」の形の掘り込みがみられ、その跡が観察される。



第175図 須恵器(1)



第176図 須恵器(2)



第177図 須恵器(3)



第178図 須恵器(4)

第35表 須恵器観察表

石=石英, 長=長石, 角=角閃石を表す

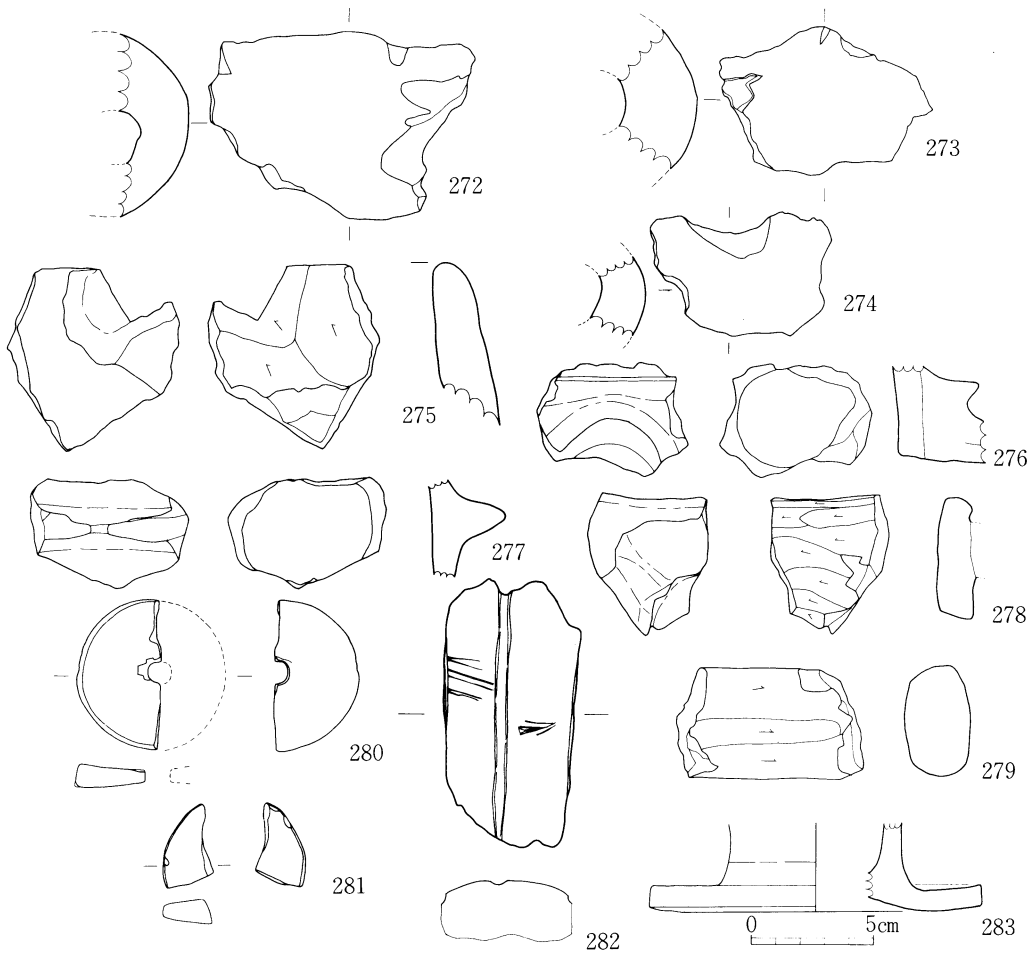
挿入番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	挿入番号	遺物番号	出土区	層	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整			
第	166	H-24	II	石,長,角	良好	暗灰色	ナデ	ナデ	第	219	I-24	II	石,長,角	良好	淡茶褐色	ナデ	ナデ			
	167	H-25	III	〃	〃	〃	〃	〃		220	H-16			〃	〃	〃	格子目叩き ヘラ削り, ナデ	〃		
	168	〃	II	〃	〃	灰白色	ヘラ削り ナデ	〃		221	I-25	II	〃	〃	〃	青灰色	平行叩き ナデ	車輪文		
	169	〃	〃	〃	〃	暗灰色	〃	〃		222	H-23	〃	〃	〃	〃	〃	格子目叩き	〃		
	170	—	I	〃	〃	青灰色	ナデ	〃		223	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
	171	H-25	II	〃	〃	〃	〃	〃		図	224	H-24	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	172	I-24	〃	〃	〃	〃	〃	〃			225	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	車輪文 平行文
	173	H-24	〃	〃	〃	〃	〃	〃			226	I-25	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	同心円文
	174	H-20	〃	〃	〃	茶褐色	〃	〃			227	I-27	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	175	I-25	〃	〃	〃	暗灰色	〃	〃			228	H-25	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	176	H-20	〃	〃	〃	赤褐色	〃	〃			229	I-27	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	177	H-31	III	〃	〃	茶褐色	〃	〃			230	I-26	III	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	178	I-25	II	〃	〃	〃	〃	〃			231	H-26	II	〃	〃	〃	灰白色	〃	〃	同心円文 平行文
	179	I-24	〃	〃	〃	青灰色	〃	〃			232	I-25	III	〃	〃	〃	青灰色	〃	〃	同心円文
	180	I-23	〃	〃	〃	〃	〃	〃			233	H-26	II	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃	〃	〃
	181	—	I	〃	〃	〃	〃	〃			234	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	182	—	〃	〃	〃	茶灰色	〃	〃			235	〃	〃	〃	〃	〃	明青灰色	〃	〃	同心円文 平行文
183	I-25	II	〃	〃	青灰色	〃	〃	236	I-27		〃	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃	〃	同心円文		
184	—	I	〃	〃	〃	〃	〃	237	H-16		〃	〃	〃	〃	青灰色	〃	〃	〃		
185	H-27	II	〃	〃	茶褐色	〃	〃	178	238		H-24	〃	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃	〃		
186	F-15	〃	〃	〃	青灰色	〃	〃		239		I-27	〃	〃	〃	〃	暗青灰色	〃	〃	同心円文 平行文	
187	I-27	II	〃	〃	赤褐色	〃	〃		240		H-26	〃	〃	〃	〃	灰白色	〃	〃		
188	—	I	〃	〃	灰白色	〃	〃		241	H-24	〃	〃	〃	〃	青灰色	〃	〃	同心円文		
189	I-25	II	〃	〃	青灰色	〃	〃		242	I-23	〃	〃	〃	〃	灰白色	〃	〃	〃		
190	H-28	〃	〃	〃	〃	〃	〃		243	I-25	〃	〃	〃	〃	青灰色	〃	〃	〃		
191	I-16	〃	〃	〃	暗茶褐色	〃	〃		図	244	H-25	〃	〃	〃	〃	淡茶褐色	平行叩き	〃		
192	I-25	III	〃	〃	明青灰色	〃	〃			245	I-25	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
193	I-24	II	〃	〃	青灰色	〃	〃			246	I-29	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
194	H-24	〃	〃	〃	〃	〃	〃			247	I-27	〃	〃	〃	〃	灰白色	格子目叩き	同心円文 平行文		
195	I-26 G-11	〃	〃	〃	〃	〃	〃			248	H-25	〃	〃	〃	〃	〃	平行叩き	同心円文		
196	H-24	〃	〃	〃	褐色	〃	〃			249	I-26	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
197	G-5	III	〃	〃	青灰色	〃	〃			250	H-24	II	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃	〃		
198	I-25	II	〃	〃	〃	〃	〃			251	I-24	〃	〃	〃	〃	青灰色	〃	〃		
199	I-24	〃	〃	〃	〃	〃	〃			252	I-25	〃	〃	〃	〃	淡茶褐色	〃	〃		
200	G-5	III	〃	〃	〃	〃	〃			253	I-27	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
201	H-32	II	〃	〃	〃	〃	〃			254	〃	〃	〃	〃	〃	灰白色	格子目叩き	〃		
202	I-25	〃	〃	〃	茶褐色	格子目叩き ヘラ削り, ナデ	〃	第		255	I-25	〃	〃	〃	〃	暗青灰色	〃	平行文		
203	H-24 H-25	〃	〃	〃	〃	〃	〃			256	〃	〃	〃	〃	〃	青灰色	〃	〃		
204	H-4	III	〃	〃	〃	〃	〃			257	—	I	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
205	H-27	II	〃	〃	暗青灰色	波状文	〃			258	I-25	II	〃	〃	〃	〃	灰白色	〃	〃	
206	H-25	III	〃	〃	茶灰色	ナデ	〃			259	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平行叩き	〃		
207	G-5	〃	〃	〃	灰褐色	格子目叩き ヘラ削り, ナデ	〃			260	〃	〃	〃	〃	〃	青灰色	格子目叩き	〃		
208	H-25	II	〃	〃	灰白色	平行叩き	ナデ		179	261	H-24	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
209	G-5	III	〃	〃	青灰色	格子目叩き ナデ	〃			262	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
210	I-25	II	〃	〃	〃	平行叩き ナデ	〃			263	H-23	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
211	I-24	〃	〃	〃	灰白色	ヘラ削り ナデ	〃			264	H-25	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
212	H-26	〃	〃	〃	青灰色	〃	〃			図	265	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
213	I-26	〃	〃	〃	〃	平行叩き ナデ	〃				266	I-26	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
214	I-29	〃	〃	〃	淡茶褐色	ヘラ削り ナデ	〃				267	I-25	〃	〃	〃	〃	灰黒色	〃	〃	
215	G-22	〃	〃	〃	青灰色	〃	〃				268	〃	〃	〃	〃	〃	青灰色	〃	〃	
216	—	I	〃	〃	淡茶褐色	平行叩き	〃				269	I-26	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
217	I-27	III	〃	〃	〃	〃	〃				270	J-16	〃	〃	〃	〃	灰白色	〃	〃	
218	H-24	II	〃	〃	〃	ナデ	〃				271	H-27	〃	〃	〃	〃	赤茶褐色	平行叩き	〃	

その他の遺物 (第179図272~283)

Ⅱ層およびⅢ層上面から出土した遺物のなかで、土師器 (黒色土器等を含む)、須恵器以外のものをその他の遺物とした。

272~274は轆である。同一個体であると思われる。272は復元外径7.5cm, 273は6.2cm, 274は8.2cmを測る。275は口縁部である。外面はナデ調整, 内面はヘラ削りが施されている。荒い作りである。276~278は同一個体であると思われるものであるが、器形等は不明である。279は把手である。表面はヘラ削りが施されている。280・281は紡錘車である。2点とも土師器の底部を再利用したものである。中でも260は黒色土器A類の底部を再利用している。外径6.1cm, 内径1cm, 厚さ5~9mmを測る。282は一部欠損しているが、少なくとも3本の溝が通っていたと思われる土製品である。用途、形態ともに不明である。

283も用途、形態ともに不明の土製品である。下の部分の復元径は13.7cmである。内外面ともナデ調整が施されている。



第179図 その他の遺物

第Ⅸ章 まとめ

1 細石器文化

(1) ピット群と礫群について

出土遺物の平面的分布から、A、B、Cの3カ所のブロックが識別された。2カ所のピット群と9基の礫群は全て、調査区域の西側端部で、台地の縁辺に位置するAブロック内で検出されている。ピット群のうちピット群Aは一つの遺構として把握できるほど集中している。

ピット群Aはブロックのほぼ中心部付近で、平坦に近い位置に検出され、礫群はピット群を囲むような位置に配置しており、その大部分は弧状に並んでいた。このようなピット群Aと礫群の位置的観点から、両者は相互に関連した一連の生活遺構としての理解が可能である。

ピット群Aを構成する各々のピットは、埋土及び掘り込みの断面からの観察により人為的なものと判断して差し支えないと思われるが、ピット全体の配置は規格性に欠けている。これまでに検出された旧石器時代例として、大阪府はさみ山遺跡¹⁾、広島県西ガカラ遺跡²⁾、熊本県下城遺跡³⁾などで住居跡⁴⁾と想定されるピット群が報告されている。これらの遺跡のピット群はピットが外周を巡り円形あるいは楕円形プランを呈するものである。しかし本遺跡のピット群Aは外周の間隔も一定でなく、内部にもピットがみられ規格性がない。そのためこの上屋構造については不明であるが、テント状の簡易なものを想定できるかもしれない。また出土遺物の分布との関連では、ピット群内部は遺物がかなり少なく、ピット群Aに接近して北東部に、ブロック内で最も遺物量の多い区域が見られる。その部分は最も細石刃の多い場でもあり、石器製作場と考えることができる。遺跡内でのピット群の位置と石器及び碎片等の集中した部分が隣接していることは、遺跡空間を考慮するうえで興味深い構造となっている。さらにピット群周辺には磨石・敲石が多く出土しており注意されよう。

本遺跡で検出された9基の礫群は、礫の集中度が強いものであり、その形状から、ほぼ円形に礫が強く集中しているもの（A類）、楕円形状に礫が比較的散在するもの（B類）、石囲い炉状に礫が円形に並ぶもの（C類）に分けられた。これらの礫群の特徴は、ゆるい傾斜地に近接して弧状に並ぶという配置あるいはまた、ピット群を取り囲んだ位置に所在するという配置にある。またこれまで本県で確認されている細石器文化期の西丸尾遺跡⁵⁾、金峰町宇治野原遺跡⁶⁾、入来町床並B遺跡⁷⁾などの礫群と同様に下部に掘り込みがないという共通点がみられる。

礫群自体は火を受けていることにより、縄文時代早期に普遍的な調理用の施設と考えられるが、礫群の形状の違いは、使用から廃棄までの形成過程⁸⁾による違いであろう。ただし、本遺跡とは谷を隔てて相対する西丸尾遺跡の礫群は全て、このB類に属しており注意される。またC類としたものは、静岡県休場遺跡⁹⁾などで検出された、いわゆる石囲い炉に形状が類似するが、内部には焼土・炭化物は検出されていない点で異なる。さらに他の礫群と比較すると、構成する礫で100g以下の破碎礫が全くなく、大部分が完形礫であり、他の礫群とは大きな違い

がある。

これらの礫群の同時性について具体的な検討は困難であるが、かなり接近した位置に存在することや、全体が弧状に配置していること、また総遺物数や石器数が比較的多くないことより一定の集団により、ほぼ同時期につくられた可能性が高いと考えられる。

礫群の礫は、加熱を受けたためと考えられる赤化やヒビ割れ、破碎したものが多く、それらの破碎礫は、2・3・5・7・9号礫群で接合している。これらの礫群が、その位置で火を受けたかどうか、渡辺栄次氏に各礫群下部の土を分析していただいた。その詳細は附篇に掲載している。分析の結果1・2・3・5・6・7号はその位置で熱を受けているものの、8号及び9号礫群はその位置で熱を受けていないという判断がなされた。このことは、礫群を使用して後、その位置で廃棄するものと、他の位置に使用済礫を捨てた可能性、あるいは別の地点で焼いた礫を、位置を変えた場所で使用する等、多様な形成過程が考えられる。8号礫群は、100g以下の破碎した小片が全くないことから、その場で熱を受けたとは考えにくい点があり、分析の結果と符号している。9号の場合、熱破碎礫片が存在し、かつ接合しており、他の地点で使用したものを一括して捨てたことが想定されよう。

(2) 出土遺物

総計約1700点の遺物が出土しており、石器の大部分は細石刃で計162点出土した。本遺跡の細石刃の特徴¹⁰⁾は、細石刃の頭部調整が全くみられないことである。これは西丸尾遺跡でも同様である。このように頭部調整がなされず、打面が広く平面形が四角形を呈する細石刃が南九州の多数の遺跡で多い傾向¹¹⁾がある。このことは細石刃の剥離方法あるいは細石刃核の固定法が、南九州では他地域と異なる特徴ある方法が行われていた可能性も考慮する必要がある。

細石刃核は計33点出土し、次のように分類できる。

- 1類……小礫を素材とし、石核整形加工はほとんど行わず、そのまま一端から細石刃を剥取するもの。
- 2類……小礫を素材とし、それを分割し、石核整形を行うもの。
- 3類……小礫を素材とし、比較的大きな一回の剥離で打面をつくるもの。石核整形は行われない。
- 4類……偏平な剥片を素材とするもの。

それぞれは細石刃剥離前に打面調整をしないもの（a類）と、打面調整を施すもの（b類）に分けることができる。

細石刃核の出土分布は各ブロックに対応するのみでなく、数個ずつの集中したグループがみられる。この小単位グループごとの細石刃の形態は次のようになる。

- A 1 ブロック…………… 2 a, 2 b 類
- A 2 ブロック西側… 1 a, 1 b 類
- A 2 ブロック中央… 1 a, 2 a, 2 b 類
- A 2 ブロック東側… 1 b 類

A 4 ブロック…………… 1 b 類

B ブロック…………… 1 a, 2 b, 3 a 類

C ブロック…………… 2 a, 4 b 類

このようにAブロック内でも各小単位グループの細石刃核は、単一形態あるいは類似する形態のものである。このような小さなまとまりは製作者が細石刃を一回（あるいは一時期）に製作した場の最小単位として認識できるかもしれない。

細石刃核 2 類と 3 類について、2 類では得られた平坦面が側面と打面に利用されているが、3 類は打面形成のために分割されるという違いがあり、88の接合例や82及び92の例のように、石核整形も行われていないようである。また細石刃剥離前に打面調整も全く施されないという違いもある。ただし素材礫及び得られた平坦面を利用するという類似する特徴もみられる。

出土した細石刃核は、小礫を使用したものが大部分であり、打面転移もみられることより型的には野岳・休場型¹²⁾の範疇に比定されるものである。1 類のように小礫をそのまま利用するものは船野遺跡 B 地点¹³⁾、成岡遺跡 B ユニット¹⁴⁾、榎崎 A 遺跡¹⁵⁾で出土している。成岡遺跡 B ユニットでは加治屋園型細石刃核¹⁶⁾と、榎崎 A 遺跡では畦原型細石刃核¹⁹⁾と共伴している。

本遺跡では接合した細石刃核の特徴は、一回の剥離で平坦な打面を形成すること、石核整形を行わないこと、細石刃剥離前に打面調整を施さない点である。この特徴は南九州地域に特徴的に分布する畦原型細石刃核と共通したものである。本来の畦原型細石刃核は砂岩あるいは頁岩の小円礫を側面方向からの二分割によって打面を形成し、石核整形を行わず、また打面調整も施さず、細石刃は一端あるいは両端から剥出しているものである。本遺跡のものは石材が黒曜石という違いと、作業面方向からの剥離による打面の形成という差はあるものの畦原型の範疇で理解できる。ただし、82のように作業が進行した後打面転移する例も存在しており、広い意味では野岳・休場型として理解すべきであろう。すなわち、畦原型は野岳・休場型の南九州的なタイプとして位置づけが指摘できよう。

石器組成の面では、本遺跡の石器群は細石刃以外の石器が数点のスクレイパーや石斧・敲石などであり、極めて貧弱な様相を呈している。しかし、三本の石斧は注目に値する、二本の磨製石斧と、かなり大型の石斧である。細石器に共伴する磨製石斧として県内では加栗山遺跡¹⁸⁾出土の片刃のものが知られるのみであったが、西丸尾遺跡でも部分的にわずかに研磨が施された局部磨製石斧が出土している。本遺跡出土の磨製石斧はこれらのものとは形態が異なり、2 点のうち 1 点は敲打調整が施されており縄文時代のものに類似している。103は刃部整形や形態の特徴がいわゆる神子柴型石斧¹⁹⁾に類似するもので貴重な例と考える。3 点の石斧はいずれも片刃であり、刃部先端の片面にのみ特徴的な使用痕が観察され、全て横斧と考えられる。九州における神子柴型石斧の出土例は横田義章氏²⁰⁾によって17遺跡例集成されており、最近では大分県市ノ久保遺跡²¹⁾で船野型細石刃核と共伴して出土している。

本遺跡の細石器文化の石器群は、野岳・休場型の細石刃核と畦原型の細石刃核などに特徴が

あり磨製石斧に加え神子柴型石斧という共伴例から、細石器文化の後半の時期に位置づけておきたい。

2 縄文時代早期

(1) 土器

土器は、Ⅰ類～Ⅶ類とその他の土器に大きく分類した。

Ⅰ類土器は、貝殻条痕を全面に施し、口縁部に貝殻腹縁による刻目を有する円筒土器である。地文に貝殻条痕を施したのちに貝殻腹縁刺突文や刺突線文を施すいわゆる二重施文の前平式土器と分離される前平B式土器である。

Ⅱ類土器は、口縁部に貝殻腹縁による刺突文を施し、胴部に斜位又は綾杉文状の貝殻条痕を施すものである。口縁部の貝殻腹縁による刺突文のタイプから、さらに3つに細分した。Ⅱa類土器は横位のもの、Ⅱb類土器は縦位のもの、Ⅱc類土器は斜位または羽状のものである。

器形は口縁部が内湾又は直行気味のもが多くみられ、従来知られている口縁部が大きく外反し肥厚する石坂式土器とは異なるが、文様構成はほぼ同様であり、近年の資料の増加もあり石坂式土器の範疇でとらえられる。

Ⅲ類土器は、貝殻腹縁による刺突文が施され、胴部では羽状文が密に施文される。Ⅱ類土器の綾杉文状の貝殻条痕と区別するものである。Ⅱ類土器と同じく、口縁部の貝殻腹縁による刺突文のタイプからさらに3つに細分したが、Ⅲb類土器にあたるものはみられなかった。Ⅲa類土器は横位のもの、Ⅲc類土器は斜位又は羽状のものである。

下剝峰式土器と解釈できるが、口縁部は肥厚・外反せず、直行もしくは若干の内湾がみられる。また、従来知られているバケツタイプと異なり、スマートな円筒形に近く、焼成も良好で施文も丁寧である。中尾田遺跡出土のⅢc類土器、下剝峰遺跡出土のⅡc類土器に似ているが、施文の粗密度が異なる。酷似するタイプがみられず、今後の資料の増加を待ちたい。

Ⅳ類土器は、同一個体である。円筒形の胴部にラッパ状に開いた口縁部がつくという形であり、施文部分が沈線による区画がされない塞ノ神A式a土器である。

Ⅴ類土器は、粗成土器で磨耗が激しく施文状態が観察できない。形式も不明である。

Ⅵ類土器は、山形口縁を呈し、口唇部外縁にヘラ状工具により細かい刻目が施され、器面には同一工具による粗い波状の条痕が施文されている。1点だけの出土であり、形式は不明である。

Ⅶ類土器は、壺形土器の口縁部と思われる。早期後半の押型文形土器やこれに後続する手向山式土器さらに塞ノ神式土器・平椀式土器などに特徴的にみられる南九州独特な形態である。本遺跡出土の壺形土器片はその文様や口縁の形態からして新しい時期に該当するものであると考えられる。

その他の土器については、現在の知見において分類不能な一群である。特に77においては、ヘラ状工具で器面を丁寧になでた後、2～3条の細い沈線で縦位又は斜位に文様を施す。口唇部には刻目を巡らし、1か所もしくは一対の刻目を持つ瘤状突起を配する特異な形態が見られ

る。74・78～80も同一個体である。

(2) 石器

石器全体の50.7%を占める礫器と磨製石鏃について若干触れてまとめとしたい。

総計141点出土した石器のうちで礫器は計71点出土しており、石器組成では圧倒的に多い。出土点数の少ない石器は各土器の集中部と分布がほぼ一致しているが、礫器は全体に広く分布しており、各土器形式を通じて使用されたものと考えられる。この礫器は円形から楕円形の扁平礫を素材として、縁辺に数回の粗い剥離を行い刃部としたもので、素材礫の形状や刃部の位置により5類に分類できた。刃部には使用によると判断される小さい剥離や刃遣れ、割れなどが観察され、その重い重量を意識した機能が想定されよう。柄を装着するための加工や痕跡もなく、片手で持ち使用する場合に際して大部分が自然礫の丸味があり都合が良さそうである。これらは手持ちの斧的な機能を想定しておきたい。

縄文時代早期の礫器について、夏島貝場などで古い段階から確認されていたものの、南九州では出土例がほとんどなく一般的な器種ではなかった。しかし、最近の調査による本遺跡近辺の西丸尾遺跡³⁴⁾、榎崎A遺跡³⁵⁾、飯盛ヶ岡遺跡³⁶⁾や、熊本県狸谷遺跡³⁷⁾で出土しており、礫器は南九州縄文時代早期の石器の確実な一組成と言える。

石器組成のなかで6点の打製石鏃とともに2点の磨製石鏃が出土した。一点は表裏面とも平坦に研磨しているのみでなく、両側縁部も両面から縁辺を研磨している。全体形はほぼ三角形に近いものの、基部は丸味を有しややふくらむ。他の一点は凹基式で両面を研磨しているものの両側縁及び基部には押圧剥離による加工が残存しており、通常の製作による石鏃を研磨した形態のものである。仮に前者をA類、後者をB類としておく。A類のものは近接する西丸尾遺跡や、塚ノ越遺跡³⁸⁾、宇治野原遺跡³⁹⁾、木落遺跡⁴⁰⁾、小牧3A遺跡⁴¹⁾などで出土している。またB類に類似するものは岩本遺跡⁴²⁾で出土している。A類やB類は長さが約2cm前後であるのに対し、約5cm程度の石槍形のもの(C類)もあり、塚の越遺跡や岩本遺跡で出土している。

本遺跡のA類の出土地点は前平式の集中地点と一致しており、前平式に伴うものと判断される。また、左記の一覧表に示したとおり、そのほとんどが前平式(岩本タイプ)⁴³⁾に伴うという共通性が指摘できる。これらの磨製石鏃は先端部や基部の一部が破損したものが認められ、使用されたものと考えられるが、全体の遺跡数の中での出土率は少ない。そのため祭祀用などに使用した可能性を含め、またいわゆるトロトロ石器との関連も考慮して検討する必要がある。

縄文時代早期の磨製石鏃等出土地名表

遺 跡 名	形 態	共 伴 土 器
本遺跡	A・B	前平
西丸尾(鹿屋市)	A	前平(岩本タイプ)
塚ノ越(吹上町)	A・C	前平(岩本タイプ)
宇治野原(金峰町)	A	前平
木落(金峰町)	A	塞ノ神
岩本(指宿市)	B・C	前平(岩本タイプ)
小牧3A(指宿市)	A	前平(岩本タイプ)
和田前(知覧町)		

3 縄文時代晩期

(1) 遺構

遺構は集石2基と土坑51基が確認されているが、ここでは土坑を中心に若干のまとめを行ってみたい。

51基の土坑の分布は、9～16区の西側のグループと22～28区の東側のグループに大きく分けられる。今回の調査は道路幅部分の調査であるから、いずれのグループも調査区外にも土坑は存在するものと考えられる。土坑のまとまっている部分は、遺物も集中する傾向が見られるが、それぞれのグループの前後関係やグループ内での前後関係については明らかにできなかった。

土坑の形態は円形や楕円形のものが多く、ほかに長楕円形、隅丸長方形、不整形のものなどが見られる。一方、深さは10cm前後のものから、150cm前後のものまでさまざまである。

遺物の出土した土坑は34基である。その内容は、土器の細片数点のものから9号1基のみであるが100点近くの遺物が出土しているものもある。土器はいずれも黒川式土器と考えられるものである。木炭片が12基から出土しており、そのほとんどは細片であるが、48号からは比較的大きなものが多量に出土した。

このような縄文時代の土坑の性格については一般的に埋葬のための墓穴、貯蔵穴、狩猟のための陥し穴等が考えられている。榎崎B遺跡のものについてみると、その大きさや形態から陥し穴の可能性のあるものもあるが、遺物が多量に出土するいわば生活の場では狩猟の方法としての陥し穴は考えられない。1号、3号、9号、14号、15号、38号、46号等のようにある程度の大きささと深さのあるものは墓穴とすることも可能であるが、脂肪酸分析等の化学的分析を行っていないので断定はできない。9号については大きさ深さともに墓穴とするに十分であり、第80図21の底部近くに穿孔された土器が出土しており、十分その可能性は考えられるが、多量の遺物が埋土中の上から下まで出土しており、この点について今後の検討、資料の集積が必要である。同様の土坑が川内市の成岡遺跡⁴⁴⁾で1基確認されているがその性格は明らかでない。5号、19号、21号、33号、40号等のように小さいものについては、貯蔵穴の可能性も考えられるが、中から木の実等が確認されていないため、明確なことは不明である。県内の貯蔵穴ではっきりしたものは志布志町東黒土田遺跡⁴⁵⁾で木の実が多量に入ったものが確認されている。東黒土田遺跡のものは縄文草創期と時期は違うが、直径40cm、深さ25cmである。34号と35号内の出土遺物が第78図に示す状態で接合した。2つの土坑はわずか40cmの距離で相接しており、土器の接合はこの2つの土坑が同時に存在したことを示すものであろう。その性格について周辺にちらばっていた土器を掃除してこの土坑に落とし入れた可能性⁴⁶⁾も考えられ、これらの土坑の性格等を明らかにするうえで、今後の参考になるものと思われる。

(2) 土器

土器について本文では粗製、精製に分けて記述したが、これは器面の調整により区分したもので、条痕やナデまたは削りによる調整のものを粗製、研磨による調整のものを精製とした。この区分は厳密なものではなく、精製浅鉢としたものの中にはナデ調整のものも一部含んでい

る。また、同じ浅鉢でも内面はていねいな研磨による調整であるが、外面はナデ調整や削りによる調整のものもあり、こういったものは粗製の浅鉢とした。深鉢の中にもごく一部であるが精製のものもある。

深鉢は口縁部に無刻目の突帯のつくもの（A類）とつかないもの（B、C、D、E類）がある。A類の突帯は断面が三角形のもの、台形に近いもの、やや幅広のものがあり、その位置も口縁端部につくもの、やや下がった位置のもの等がある。この無刻目突帯文の土器は県内では鹿屋市榎原遺跡⁴⁷⁾や志布志町道重遺跡⁴⁸⁾からも出土している。大分県の上菅生B遺跡⁴⁹⁾や夏足原遺跡⁵⁰⁾からも出土しており、上菅生B式として刻目突帯文土器の直前に位置づけられている。B類は胴部が「く」字状に張り、口縁部が内傾あるいは内湾するものである。B-I類は突帯が付くという点ではA類と同様であるが、突帯の幅が広いこと、器形を見ると口縁部が直線的に内傾すること等によりB類の中を含めた。C類は胴部が「く」字状に張り、口縁部が外反するものである。口縁部にリボン状の突起を付けるものや、頸部に蝶ネクタイ状の突起を張り付けるものもある。深鉢は入佐式土器の口縁帯をもつものや刻目突帯をもつものがないことから、従来の黒川式の範疇でとらえられるが、今後、無刻目突帯をもつ土器を含めて、細分を行い時間的幅等について検討することが必要である。

浅鉢は粗製と精製の両方があり、その割合はやや精製の方が多い。外面はナデや条痕または削りによって調整され、内面はていねいなナデや研磨により調整されており、いわば半粗半精製であるが、粗製浅鉢とした（H類）。同様の土器は鹿屋市榎原遺跡において黒川式土器とともにまとまって出土している。精製の浅鉢は頸部が長く張り出し、口縁部は内外面に沈線をもつものや、内面にわずかな段をもつもの（K類）。胴部が丸く張り、頸部で屈曲し、外反する口縁部となるもの（L、M類）。粗製浅鉢のH類と同様の器形で体部からゆるやかに立ち上がり口縁部となるもの（T類）。丸く張る胴部からわずかに立ち上がる口縁部へと続くもの（S類）等が特徴的である。L類、M類は黒川式土器の典型的な浅鉢である。K類については黒川式土器の範疇の中でとらえられるが、中には若干古い様相を残すと思われる口縁帯の立ち上がりの比較的はっきりした535、536、539～541等の土器も含まれる。667～671はL類またはM類と考えられる土器で、頸部付近の断面が焼成後ていねいに研磨されており、口縁部を再生していると考えられるものである。同様に口縁部を再生したと考えられる土器が鹿屋市榎原遺跡や東市来町桜原遺跡⁵¹⁾等でも出土している。他に孔列土器が二固体分、組織痕土器が5点出土している。孔列土器は粗製の深鉢と浅鉢、組織痕土器はいずれも粗製の浅鉢である。

榎崎B遺跡の土器はそのほとんどが包含層からの出土であり、各器種のセット関係は明確にできないが、いずれも黒川式土器の範疇でとらえられるものである。黒川式土器については近年その細分が試みられており⁵²⁾、榎崎B遺跡の黒川式土器についても、A類深鉢と他の深鉢の関係、精製浅鉢のK類とL、M類との関係、粗製浅鉢の削りの問題、孔列土器、組織痕土器等について今後、細かく検討していくことが必要であろう。

(3) 石器

総数340点の石器が出土し、多種の器種が認められた。調査面積はかなり広いが、遺物の集中している区域があり、東西の2カ所の出土集中グループが認められた。ただし、各々の出土分布を概観すると、まだ調査区域に広がることは確実である。特に東側の集中グループはその出土状況からなお北側に拡大することが予想される。

石器組成は当時の生業を反映しているものと考えられ、本遺跡で各種の石器が出土しているなかで、それらの量的割合も当時の生業における労働の比率（あるいは石器の消耗率）を反映しているものと予想される。

本遺跡で量的に最も卓越していたものが打製石斧であり、石器全体の26.8%を占めている。次が磨石、敲石の24.4%、そして石鏃の17.9%という順序になっている。多量に出土した打製石斧製作に伴う破片・破片類は、遺跡内で必要な打製石斧は遺跡内で製作されたことを意味しており、棒状敲石とした804などは整形剥離後の敲打調整に使用されたものと考えられる。打製石斧はいわゆる偏平打製石器と呼ばれるもので、偏平で幅広の刃部と比較的軟質の石材をも使用するという特徴、そして比較的粗雑な製作などの特徴から木材の伐採用ではなく、土堀具と考えられるものである。形態的には短冊型や分銅型に近いものや、概ね撥型を呈するものなどが認められるが、基部近くの両側縁に着柄を意識した抉り状の加工が施されているという共通性がみられる。柄を装着していたであろうことは、石器の基部に柄ずれによると考えられる磨滅痕が観察されることにより理解される。基部の磨滅痕は主要剥離両面の平坦な片面だけに認められるものと、両面に認められるものがある。刃部には、使用による小剥離のほか磨滅痕も認められる。刃部に磨滅痕の残るものは、特に片面に著しいものがある。このことより、これらの土堀具は地面に対して垂直に使用されたとするより、角度をつけて斜めに使用された結果と考えられる。すなわち、装着される柄は石器と平行に柄と直線状に装着されるものだけではなく、現在のクワのような「L字状」の柄の装着を考慮することも必要であろう。

土堀具である偏平打製石斧が多量に存在するということは、当時の生業のなかで根茎類などの植物質食料の確保に占める作業が少なくなかったことを意味していると考えられる。また、ドングリなど堅果類の植物質食料の加工のためのものと考えられる磨石・敲石が多いこと特徴の一つである。さらに横刃形石器も15点出土しているが、これも収穫などの何らかの植物質食料獲得に関連する石器と推定されるものである。

このように、本遺跡の縄文時代晩期の石器組成から判断すると、植物質食料への依存度が狩猟と同程度かそれ以上高かったものと思われる。ただその植物質食料がドングリなどの堅果類や、自然に生育する根茎類のほか栽培植物の存在も考慮する必要がある。今回遺物包含層の土壌と土器片の胎土のプラント・オパール分析を藤原宏志氏に依頼した。その結果は附編に掲載してあるようにイネ及びヒエ・アワ・キビなどのキビ族が検出され、栽培植物の存在が指摘された。石器組成からの推定と一致している。また逆に、石器組成のなかでは石錘が一点も出土しておらず、漁労活動を示唆する石器は全くないのも本遺跡の特徴と言えよう。

4 古墳時代

古墳時代では、遺構は検出されなかった。遺物は、成川式土器の甕形土器、鉢形土器、壺形土器、高坏形土器、埴形土器等が出土している。

甕形土器は、口縁部が外反するものと内湾するものがあり、また頸部に突帯を有するものと有しないものがある。底部は成川式土器特有の中空の脚台である。

鉢形式土器は、底部が安定した平底で器形は胴部が球状に張ったマリ形を呈するものが、ほぼ完形で出土している。

壺形土器は破片が多く良好な資料が少ないが、しまった頸部より口縁部が外反し、胴部の最大径が中央にくるものがみられる。底部は丸底で、胴部又は頸部に布目圧痕のある刻目突帯が巡ってくる。

高坏形土器は、坏部は底部と立ち上がりとの間に、段を有するものと有しないものがあり、碗形を呈する。内外面は丁寧なヘラ磨きが施され、赤色顔料が塗られているものもある。

その他に埴形土器が1点出土している。

本遺跡の成川式土器は出土量は少ないが、その形態からみて5 C～6 C頃の時期に該当するものと思われる。

5 奈良・平安時代

本遺跡では、Ⅱ層及びⅢ層上部から土師器（黒色土器を含む）、須恵器等の遺物が出土し、また遺構も竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝状遺構及び古道などが検出されている。

竪穴住居跡は、図面が紛失しており、詳細は不明であるが、1基検出されている。約4 m×4.1 mのほぼ方形のもので、四隅に柱穴がみられる。住居跡の中には、炉跡などは検出されなかった。床面付近から土師器・黒色土器A類・刀子等が出土しており、これらの遺物から平安時代（9 C後半）の住居跡と思われる。

掘立柱建物跡は2棟、またその一部と考えられる柱列が2列検出された。掘立柱建物1は、2間×3間で廂になると思われる柱穴も2つ検出されている。掘立柱建物3は3間×3間であるが、それ以上になる可能性も考えられる。建物の向きは一定していない。

溝状遺構は2条、古道は3本検出された。古道は溝状遺構と同一方向に平行して走っているが、2つの遺構を同一時期と決定する資料に欠ける。しかし遺構全体の配置から考えると、同一時期の遺構であると想定は可能である。時期については、奈良・平安時代の遺構出土面で検出したが時期を決定できる資料が乏しく、近世の遺構である可能性もある。

出土遺物については、土師器の器種は蓋・皿・坏・碗・甕に分類した。特徴的なものをあげると坏は、体部が開きながらまっすぐのびるものがほとんどで、他に口縁部がわずかに外反するものもみられる。碗も同じように体部が開きながらまっすぐのびるものがほとんどで、他に体部が内湾気味に開き、口縁部はまっすぐ開きながらのびるものやわずかに外反するものがみられる。

黒色土器は、黒色土器A類（内面が黒色）と黒色土器B類（内外面とも黒色）が出土している。黒色土器B類は小片が多く、その器形がわかるものはみられない。黒色土器A類は、坏・椀が出土しており、その形態は土師器の坏・椀と同様で、森隆氏の分類による九州系黒色土器Ⅱ類及びⅢ類に相当し、9世紀後半に位置づけられる資料と思われる。

また本遺跡の土師器・黒色土器ともに底部の切り難しは、すべて回転ヘラ切りであり、高台をもつものにも同様の技法がみられる。

墨書土器は、土師器・黒色土器A類の坏や椀にみられ、小片で判読不明なものもあるが、数量を表す「箇」という字の異体字と思われる「个」の描かれた資料が7～8点みられる。

甕はすべて、口縁部が頸部より外反し、内面の調整は頸部より下でヘラ削りを施し、頸部から口縁部にかけては横ナデ調整がみられる。

須恵器は、特徴的なものをあげると、底部外面に同心円叩きを施す壺が1点と、内面に車輪文を施す甕の胴部片が5点みられる。特に底部外面に同心円叩きを有する壺、車輪文を有する甕などは、従来肥後の荒尾窯跡群との関連で考えられており、9世紀後半の年代が与えられており、土師器や黒色土器の年代とも符号するものである。

引用・参考文献

- 註1 一ノ瀬和夫 1987 「大阪府はさみ山遺跡」『日本考古学年報』第38号
- 2 広島大学総合移転地埋蔵文化財調査委員会 1988 『広島大学総合移転地埋蔵文化財調査年報Ⅵ』
- 3 古森政次・緒方勉 1980 『下城遺跡Ⅱ』熊本県教育委員会
- 4 栗島義明 1989 「旧石器時代住居と遺物分布に就いて」『土曜考古』第14号
- 5 鹿児島県教育委員会 1992 『西丸尾遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(64)
- 6 金峰町教育委員会 1992 『宇治ノ原遺跡』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
- 7 入来町教育委員会 1993 『床並B遺跡』入来町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
- 8 保坂康夫 1987 「礫群使用の非常性について」『古代文化』39巻7号
辻本崇夫 1987 「礫群の形成過程復元とその意味」『古代文化』39巻7号
金山喜昭 1987 「先土器時代の礫群研究史」『古代文化』39巻7号
金山喜昭 1988 「礫群の機能と用途」『古代文化』40巻8号
- 9 杉原荘介・小野真一 1965 「静岡県休場遺跡における細石器文化」『考古学集刊』第3巻2号
- 10 織笠昭 1983 「細石刃の形態学的考察」『人間・遺跡・遺物』文献出版
- 11 宮田栄二 1992 「野岳・休場型細石刃核の細分①細石刃の剝離方法」第16回九州旧石器文化研究会発表要綱
- 12 鈴木忠司 1971 「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石器文化」『古代文化』23-8
橘昌信 1979 「九州地方の細石器文化」『駁台史学』47
- 13 橘昌信 1975 「宮崎県船野遺跡における細石器文化」『考古学論叢』3
- 14 鹿児島県教育委員会 1985 『成岡遺跡Ⅱ』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(35)
- 15 鹿児島県教育委員会 1992 『榎崎A遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(64)
- 16 鹿児島県教育委員会 1981 『加治屋園遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(14)
- 17 茂山護・大野寅夫 1977 「児湯郡下の旧石器」『宮崎考古』3
- 18 鹿児島県教育委員会 1981 『加栗山遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(13)
- 19 岡本東三 1979 「神子柴・長者久保文化について」『研究論集』Ⅴ 奈良国立文化財研究所
- 20 横田義章 1981 「いわゆる神子柴型石斧の資料(一)」『九州歴史資料館研究論集』7
横田義章 1990 「いわゆる神子柴型石斧の資料(二)」『九州歴史資料館研究論集』15
横田義章 1992 「いわゆる神子柴型石斧の資料(三)」『九州歴史資料館研究論集』17

- 21 栗田勝弘 1989 「大分県市ノ久保遺跡」『季刊考古学』第29号
- 22 新東晃一 1988 「南九州の円筒土器と角筒土器」『考古学と関連科学』鎌本義昌先生古稀記念論集刊行会
- 23 河口貞徳 1989 「吉田式と前平式のその後について」『鹿児島考古』第23号 鹿児島県考古学会
- 24 河口貞徳 1955 「南九州の条痕文土器」『石器時代』1
- 25 西之表市教育委員会 1978 『赤木遺跡・下剝峯遺跡・大四郎遺跡・内和遺跡』西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(20)
- 26 鹿児島県教育委員会 1981 『中尾田遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(15)
- 27 河口貞徳 1972 「塞ノ神式土器」『鹿児島考古』第6号 鹿児島県考古学会
- 28 河口貞徳 1985 「塞ノ神式土器と轟式土器」『鹿児島考古』第19号 鹿児島県考古学会
- 29 新東晃一 1987 「南九州のアカホヤ火山灰と前後の土器形式」『火山灰と考古学をめぐる諸問題』埋蔵文化財研究会
- 30 新東晃一 1980 「火山灰からみた南九州縄文早・前期の様相」『古文化論叢』鏡山猛先生古稀記念
- 31 鹿児島県教育委員会 1982 『小山遺跡・谷ノ口遺跡・宮後遺跡・上城城址』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(20)
- 32 新東晃一 1991 「縄文早期の壺形土器」『縄文通信』No.4 南九州縄文研究会
- 33 鹿児島県教育委員会 1991 『前畑遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(52)
- 34 5に同じ
- 35 15に同じ
- 36 鹿児島県立埋蔵文化財センターで現在報告書作成中
- 37 木崎康弘 1987 『狸谷遺跡』熊本県文化財調査報告 第90集
- 38 吹上町教育委員会 1990 『塚ノ越遺跡ほか2遺跡』吹上町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- 39 6に同じ
- 40 金峰町教育委員会 1991 『木落遺跡・高源寺遺跡』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
- 41 未報告 長野真一氏の教示による
- 42 指宿市教育委員会 1978 『岩本遺跡』
- 43 新東晃一 1988 「南九州の円筒土器と角筒土器」『考古学と関連科学』
- 44 14に同じ
- 45 瀬戸口 望 1981 「東黒土田遺跡発掘調査報告」『鹿児島考古』第15号
- 46 小林達雄氏の御教示による
- 47 鹿児島県教育委員会 1987 『榎原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(44)
- 48 志布志町教育委員会 1990 『道重遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(17)
- 49 竹田市教育委員会 1986 『下菅生B遺跡・上菅生B遺跡』菅生台地周辺の遺跡
- 50 大野町教育委員会 1992 『駒方津室迫遺跡・夏足原遺跡(O地区)』大野地区遺跡群発掘調査報告書
- 51 東市来町教育委員会 1992 『陣ヶ原遺跡・桜原遺跡』東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
- 52 福岡県教育委員会 1985 『石崎曲り田遺跡』Ⅲ
瀬高町教育委員会 1985 『権現塚北遺跡』
下山 覚 1985 「黒川式土器細分のための基礎論」『鹿大考古』第3号 鹿児島大学法文学部考古学研究室
- 53 池畑耕一 1980 「成川式土器の細分編年試案」『鹿児島考古』第14号
- 54 多々良友博 1981 「成川式土器の検討」『鹿児島考古』第15号
- 55 鹿児島県教育委員会 1983 『成岡・西ノ平・上ノ原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(28)
- 56 15に同じ
- 57 福岡県教育委員会 1978 『筑紫郡太宰府町所在御笠川南条房遺跡』(4) 福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第8集(下)
- 58 森 隆 1989 「九州系黒色土器の器形的系譜に関する若干の覚書」『古文化談叢』第21集 九州古文化研究会
- 59 田中 琢 1967 「古代・中世における手工業の発達(4)畿内」『日本の考古学』Ⅳ歴史時代(上)

第X章 分 析

榎崎B遺跡におけるプラント・オパール分析結果について（報告）

宮崎大学 藤 原 宏 志

1990年10月、当該遺跡で採取した土壌資料のプラント・オパール定量分析結果を報告する。

- 1 各地点とも3層は黒川式（縄文時代晩期中葉）遺物包含層である。3地点とも、3a層でイネが検出されている。I-25地点およびH-28地点では3層の直上、2層にイネのピークがあり、3層のイネは2層からの混入とも考えられる。しかし、H-18地点では2層にイネが認められず、3層でイネが検出されたことから、3層が稲の生産面であった可能性が高いことを示している。
- 2 3地点とも、タケが多く検出されている。照葉樹林の下床植生であるスズタケと思われる。
- 3 3地点とも、キビ族が多く検出される。キビ族植物には、ヒエ、アワ、キビなどの雑穀類が含まれており、これらの作物が栽培されていた可能性のあることを示唆するものであろう。
- 4 黒川式土器（縄文時代晩期）片の胎土分析を行ったが、イネは検出されなかった。同胎土から、タケ、ススキとともにキビ族が多量に検出された。
- 5 1項で縄文時代晩期の遺物包含層（3層）からイネが検出されており、この時代に稲作が行われていた可能性が高いことを指摘した。縄文時代晩期に稲作が行われていたことは他の遺跡でも実証されており、当該遺跡もその例に連なることになろう。

榎崎 B 遺跡における

プラント・オーバーオール定置分析結果

宮崎大学農学部 農作業管理学研究室

sampling block [H-18TRENCH]
sampling date (10/01'90)

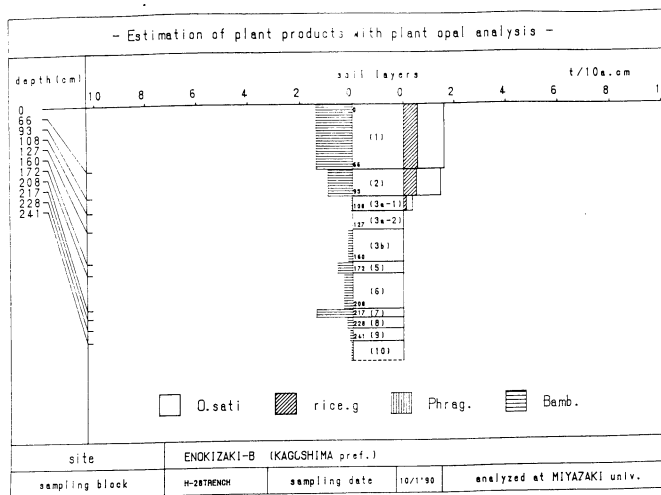
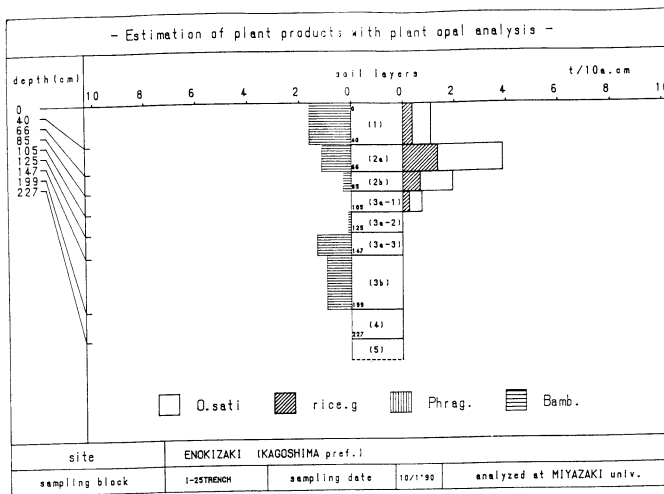
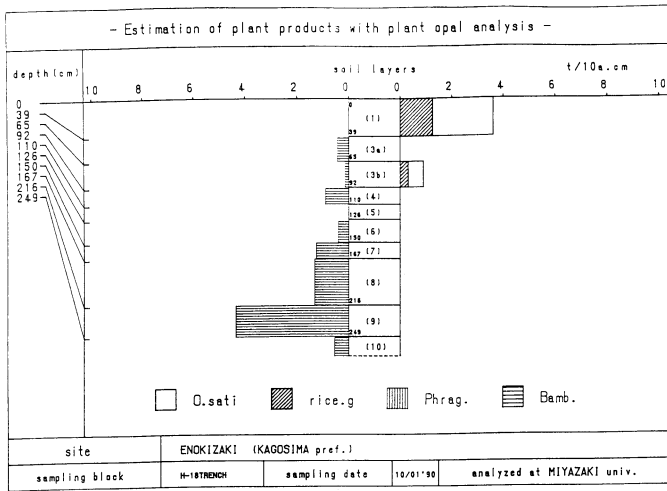
層名	イネ		植物体乾重 (t / 1 0 a . c m)		ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
	(O.sati.)	イネ穂 (rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani.seed)			
1	3.610	1.265	18.728	8.504	0.000	0.000	6.472
3a	0.000	0.000	6.854	3.112	0.000	0.449	3.019
3b	0.908	0.318	7.533	3.421	0.000	0.148	5.742
4	0.000	0.000	7.741	3.515	0.000	0.914	2.360
5	0.000	0.000	10.045	4.561	0.000	0.000	2.808
6	0.000	0.000	3.511	1.594	0.000	0.414	2.319
7	0.000	0.000	36.971	16.789	0.000	1.273	2.114
8	0.000	0.000	20.422	9.273	0.000	1.339	1.153
9	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	4.371	4.195
10	0.000	0.000	2.843	1.291	0.000	0.559	0.867

sampling block [I-25TRENCH]
sampling date (10/1'90)

層名	イネ		植物体乾重 (t / 1 0 a . c m)		ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
	(O.sati.)	イネ穂 (rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani.seed)			
1	1.099	0.385	41.027	18.630	0.000	1.614	4.633
2a	3.884	1.361	54.801	24.885	0.000	1.141	5.898
2b	1.948	0.682	12.124	5.506	0.000	0.318	10.680
3a-1	0.748	0.262	0.000	0.000	0.000	0.000	1.893
3a-2	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.112	2.310
3a-3	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	1.325	0.489
3b	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.944	0.348
4	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.637
5	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	2.328

sampling block [H-28TRENCH]
sampling date (10/1'90)

層名	イネ		植物体乾重 (t / 1 0 a . c m)		ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
	(O.sati.)	イネ穂 (rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani.seed)			
1	1.602	0.561	22.163	10.064	0.000	1.395	3.154
2	1.465	0.513	10.131	4.601	0.000	0.957	3.707
3a-1	0.355	0.125	1.475	0.670	0.000	0.058	1.199
3a-2	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.705
3b	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.186	0.482
5	0.000	0.000	2.178	0.989	0.000	0.600	0.885
6	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.346	1.789
7	0.000	0.000	2.543	1.155	0.000	1.401	2.326
8	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.215	1.294
9	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.115	1.637
10	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.068	0.349



礫群土壌分析（加熱について）

通産省工業技術院名古屋工業技術研究所 主任研究官 渡 辺 栄 次

① 礫群土壌の熱的变化

実 験

礫群各地点の中心部と思われる試料を調べた。サンプル管を用い、生活面の地表から数cmの深さまでを採取した。サンプル管から円柱状試料を3分画し、上部1/3を分析に供した。

風乾後、それぞれメノウ乳鉢で粉碎し、70meshのふるいを通した。

最初は、そのまま分析を行ったが、有機物が1%程度含まれること、及びその影響が測定に重大なことなどから、過酸化水素水による有機物の分解を行った。処理した試料は、真空乾燥機で乾燥し、DTA-TGで測定した。

試料重は自動的に秤量されるが、150mgから200mgの範囲である。真空理工社製 TGD 7000RH型 DTA-TG。

測定条件は、昇温速度10℃/min、チャートスピード120mm/h、昇温範囲は室温から1100℃までとした。他にX線回析を行った。

DTA（示差熱分析）は、試料が加えられた温度に応じて、発熱したり、吸熱したりする変化をとらえるもので、曲線上、上に向かうピークは発熱を、下に向かうピークは吸熱を表わす。装置の状態が悪く基準線が低下するが、発熱及び吸熱はこの基準線にそって上にあるか下にあるかで判断した。

TG（熱重量分析）は、やはり試料が熱を加えられたときに試料がもつ物質（水分など）が放出されることに伴う重量減をとらえるものである。

結 果

測定した試料8点及び対照2点はDTA-TG結果から3つに分類することが可能である。第1のグループは対照1、2に類似した結果を示すものである。これには、8号と9号が入る。

※図1・2

DTA-TG曲線を見ると、100℃～200℃の範囲で深い吸熱のピークを持ち、それに伴って大きな重量減（8%以上）がある。300℃付近に小さな吸熱ピークと、それに伴う1～3%の重量減が認められる。さらに520℃付近を中心として吸熱ピークで5%程度の重量減を伴っている。また920℃の付近には小さな発熱ピークが認められる。これには重量変化は認められない。

第2グループは、300℃付近の吸熱ピーク及びそれに伴う重量減が少ない（1%以下）のものである。1号、2号、3号の3つが含まれる。他のピークは①のグループと大きな違いはない。※図3

第3のグループは、300℃付近の吸熱ピークがまったく認められないものである。5号、6号、及び7号の3つが入る。※図4

以上の結果について、さらにその原因をX線回析により調べた。※図5 全般的に含まれるものは、石英、長石、カオリナイト、クリストバライトなどであるが、その他に20°~30°付近にかけての幅広いが低いピークとゲータイト（水酸化鉄の結晶）及びギブサイト（水酸化アルミニウムの結晶鉱物）のピークである。幅広いピークは非品質のアルミノ・ケイ酸塩鉱物の存在を示している。一般にはアロフェン様粘土鉱物と考えられるものである。これら鉱物組成を基にして、DTA-TG 曲線のみをみると、次のことが考えられる。

100℃~200℃付近の吸熱ピーク（低温側に小さなピークを伴うことがある）は、アロフェン様粘土鉱物が熱を吸収して、OH 基を放出し分解する。いわゆる脱 OH 反応である。離れたOH の分だけもとの重量が減ることになる。

300℃付近の吸熱ピークはゲータイトやギブサイトが熱分解し、OH を放出して、他の鉄やアルミニウムの結晶鉱物に変化することに伴うもので、やはり重量減を同時に起こす。

520℃付近の吸熱はカオリナイトという粘土鉱物の分解に伴うものである。

920℃付近の発熱ピークは、アロフェンやカオリナイトなどの粘土鉱物が熱分解された後、再び熱による相変化を起こし、新たな鉱物として結晶生成することに伴うものである。この場合は、重量変化は伴わない。

考 察

前提として付近の地質（先土器時代が含まれる層位）が、岩石、鉱物的母材としての均一性が保たれると考えられることが必要である。

均一性があると仮定すると、以下のように推定できる。

試料の熱変化（特に対照となった試料）に見られるように土壌などは、熱を受けて変化する。すなわちもともと含まれている鉱物などが熱により分解されたり、新たな鉱物などを生成したりして、今までであった状態から新たな状態をもつに至ることを意味する。

調べた試料では、特に300℃付近に認められる吸熱ピークの有無と重量変化が重要である。100~200℃及び520℃付近のピークは、すべての試料で大きな相違は認められない。

300℃付近のピークが無く、520℃付近のピークが有るものは、その間の温度例えば400℃前後の熱を受けている可能性がある。すなわちゲータイトなどは300℃前後で分解されるがカオリナイトは500℃を越えなければ分解されない。従ってその中間の熱を土壌が受けたため、ゲータイトなどが消失した状態にあることを示していると考えられる。

第2のグループは熱の受け方が少なかったため、ゲータイトの一部が残っている可能性を示唆している。

第1のグループは全く熱を受けていないと考えてよい。すなわち、対照区が熱を受けた可能性がないとすれば、それと同じ傾向を持つ地点は同様に熱が加えられていないと考えられるからである。

② 400℃加熱減量値によるダイヤグラム

DTA-TG 曲線にみられた300℃付近の吸熱及び重量減の有無に注目して、野焼き場所（炉）

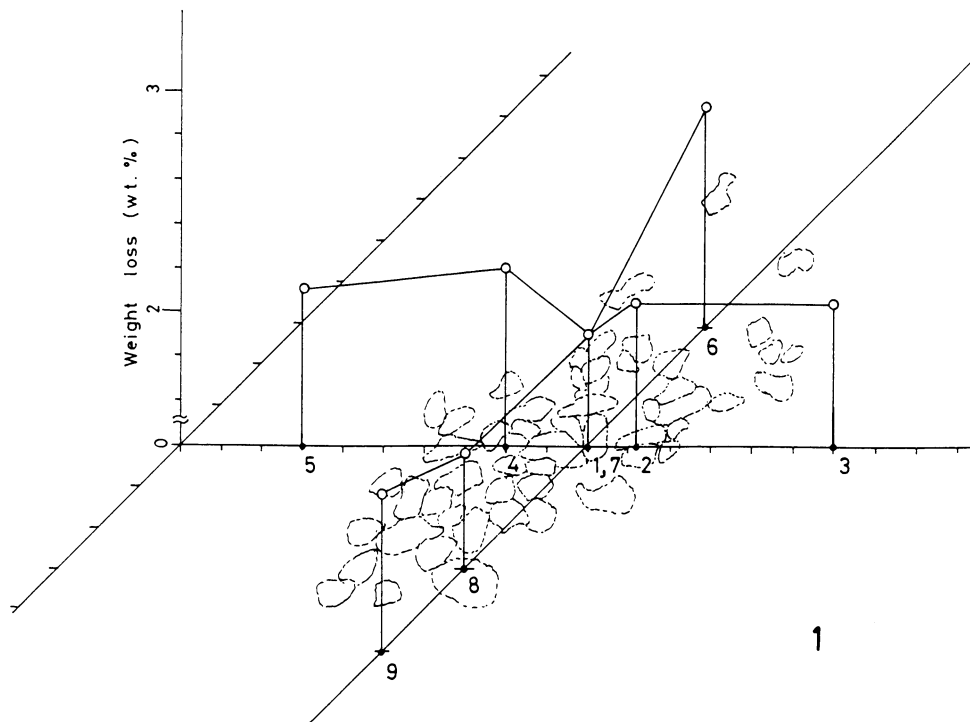
の探査を試みた。DTA-TG 測定用に調整した試料約 1 g を白金ルツボにいれ、105℃（1 昼夜）、250℃（1 時間、以下同じ）、400℃、600℃、1100℃ で加熱した。加熱後、それぞれの試料の重量を秤量した。105℃ 減量値、105℃ から 250℃ までの減量値、250℃ から 400℃ までの減量値、400℃ から 600℃ までの減量値、及び 600℃ から 1100℃ までの減量値を算出した。

その一つの例として、礫群 1 に関して、250℃ から 400℃ までの減量値を用い、図化（ダイヤグラム）した。図中、波線は礫一つ一つを示す。

図によると、礫群の周りの試料点 5、6、3、9 で高い減量値を示し、礫群の中心部にある試料点 7 及び 8 を中心として低い値が認められる。このことは、礫群の周りに比べて、中心部では、400℃ 加熱によって分解減量する物質（ギブサイトやゲータイト）が少ないことを意味する。

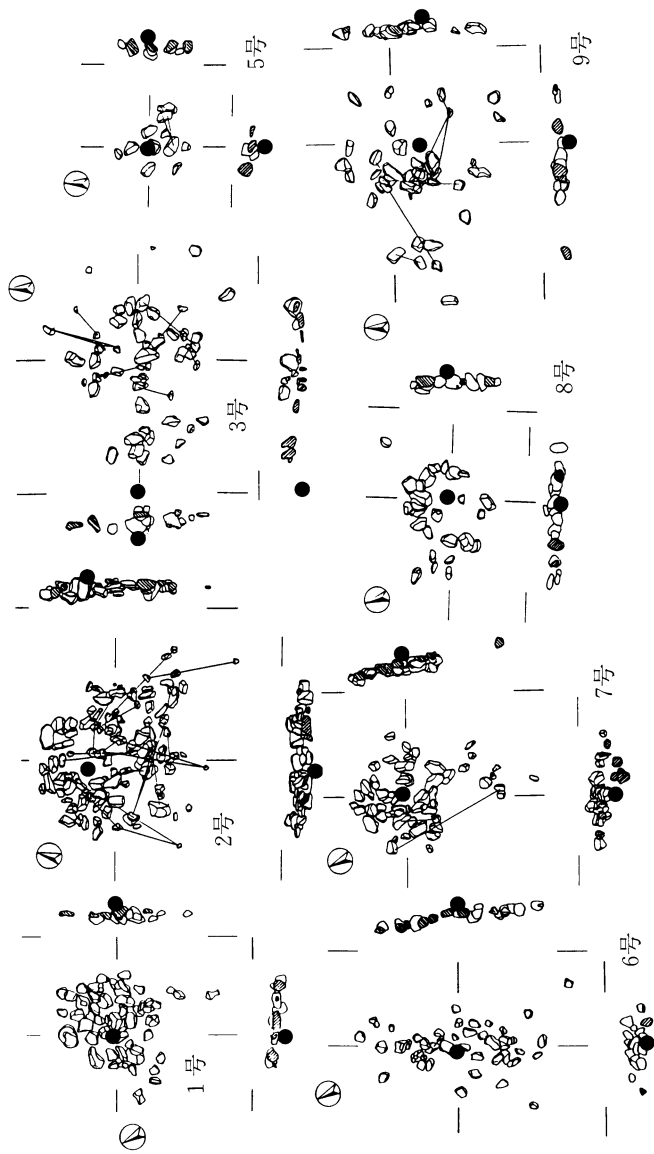
人々が生活する以前はこれらの物質は一定の値を示すように存在していたと考えられる。従って、野焼き場所として使われている間に、その熱による変成を受けて、既に一部が失われたことを意味するのではないかと考えられる。

こうしたダイヤグラムにより、野焼き場所（炉）の特定化が可能となると考えられる。



400℃ 加熱減量 (250~400℃)
ダイヤグラム

以上、分析結果について大胆な推定を行ったものであるが、100℃~200℃ 付近のピークがすべての材料に認められることや、もっと高い熱を加えられた地点がないか等、それぞれのサンプル地点についてさらに調査する必要があると思われる。



※ 土のサンプリングは各機群の中心部を十字に組み、中心部及び周辺から6~12ヶ所採取した。

サンプリングにはプラスチックのフィルムケースを用い、ケースを逆さにして、採取場所にケースを押し込でを行った。

※ 対照一機群外からの採取
●印は採取場所

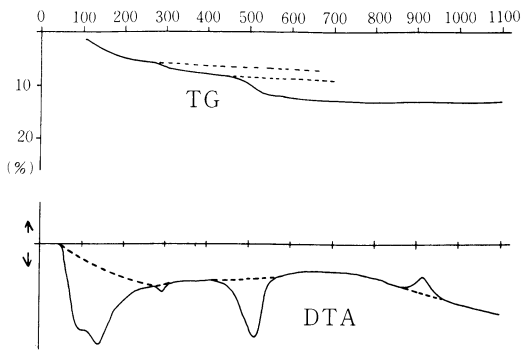


図1 対照 2

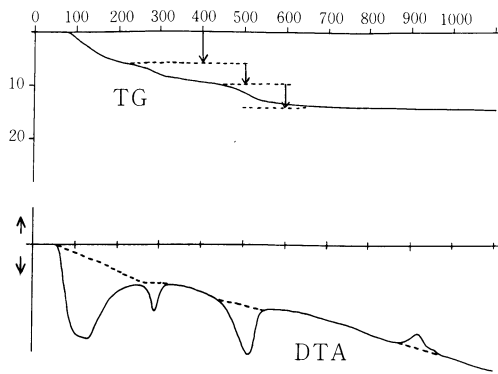


図 2

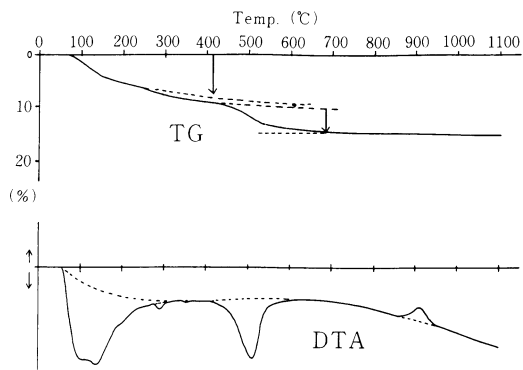


図 3

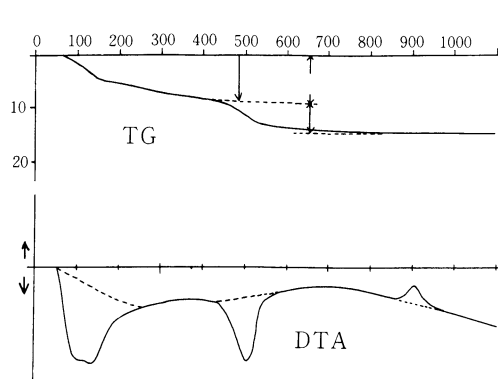


図 4

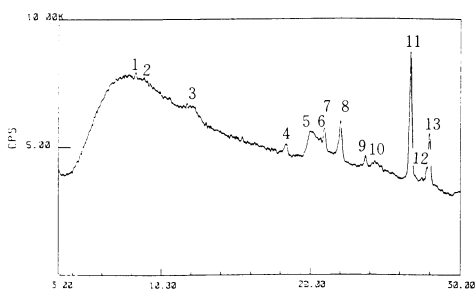


図 5

SAMPLE NAME: Kago3-2
 TARGET : Cu
 VOL and CUR: 40KV 30mA
 SLITS : DS 1 RS .3 SS 1
 SCAN SPEED: 2 DEG/MIN.
 STEP/SAMPL.: 01 DEG
 PRESET TIME: 2 SEC
 FILE NAME : KR25120
 OPERATOR : E. Watanabe
 COMMENT :

DATE: 93.02.25

SMOOTHING NO.: 15
 THRESH. INTEN.: 507 CPS
 2nd DERIV.: 295 CPS/(DEG*DEG)
 WIDTH: 08 DEG
 B.G. REDUCTION: NO EXECUTION
 OUTPUT FILE :

No	2-Theta	INTEN	b	WIDTH	I / I ₀
1	8.19	7965	10.786	.195	91
2	8.74	7738	10.109	.15	89
3	12.08	6561	7.32	***	75
4	18.3	5112	4.644	***	58
5	19.9	5625	4.458	.165	64
6	20.64	5329	4.299	.15	61
7	20.9	5776	4.246	.255	66
8	21.95	6006	4.046	.24	69
9	23.64	4641	3.76	.195	53
10	24.28	4455	3.662	.15	51
11	26.67	8742	3.339	.255	100
12	27.73	4192	3.214	.15	48
13	27.93	5550	3.191	.225	63

榎崎B遺跡¹⁴C年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

榎崎B遺跡は鹿屋市に所在する。遺跡からは縄文時代晩期に属す土壌が検出されている。ここでは土壌内から採取された炭化材を測定試料として、放射性炭素年代測定（¹⁴C年代測定）を行った。

1. 試料

試料は、榎崎B遺跡の土壌No. 9 および土壌No. 46内より出土した炭化材2点（試料番号3・4）である。いずれの土壌も縄文時代晩期とされている。

2. 方法

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。

3. 結果

結果は、表1に示した。

表1 ¹⁴C年代測定結果

試料番号	出土場所	質	Code No.	年代（1950年よりの年数）
3	土壌No. 9	炭化材	Gak-16795	3110±150 y. B. P. (1160 B. C.)
4	土壌No. 46	炭化材	Gak-16795	3670±90 y. B. P. (1720 B. C.)

なお年代値の算出には¹⁴Cの半減期として、LIBBYの半減期5570年を使用しています。また、付記した誤差はβ線の計数値の標準偏差σにもとづいて算出した年数で、標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代です。また試料のβ線計数率と自然計数率の差が2σ以下のときは、3σに相当する年代を下限の年代値（B. P.）として表示してあります。また試料のβ線計数率と現在の標準炭素（MODERN STANDARD CARBON）についての計数率との差が2σ以下にときには、Modernと表示し、δ¹⁴C%を付記してあります。

4. 考察

九州の縄文時代晩期の¹⁴C年代値は、2700～2500 y. B. P.、後期が3500～2700 y. B. P.、中期が4500～3500 y. B. P.などの既存資料がある（キーリ・武藤、1982）。今回の年代値は、いずれも縄文時代晩期とは調和せず、土壌No. 9炭化材は後期、土壌No. 46炭化材は中期の範疇になる。各方面からこの年代値を検討する必要があるが、炭化材を包含する土壤中により古い炭素分があり、約2500年間の内に炭化材に混入したのかもしれない。

引用文献

キーリ・武藤康弘（1982）縄文時代の年代，縄文文化の研究1，縄文人とその環境，P. 251-243.

榎崎B遺跡出土土器に付着した赤色顔料について

鹿児島県立埋蔵文化財センター 大久保 浩 二

榎崎B遺跡出土の土器に、赤色顔料の付着が認められるものがあった。その顔料について粒子の形状の観察と成分の分析を行い、顔料の種類を同定を試みたのでここに報告する。

一般に赤色顔料の種類には、ベンガラと水銀朱が考えられる。それぞれは顔料の粒子の形状に特徴があるようであり、主成分もベンガラは酸化第二鉄 (Fe_2O_3)、水銀朱は硫化水銀 (HgS) と大きく異なっている。今回は主にEDSによるX線分析(成分分析)で検出される元素をもとに、赤色顔料の種類を同定を試みた。

分析に使用した機器は、鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵の日本電子製走査型電子顕微鏡(低真空タイプ・LV-SEM)とエネルギー分散型X線分析装置(EDS)である。

1. 試料 榎崎B遺跡出土の土器4点に付着していた(塗彩された?)赤色顔料。試料1から5の付着していた土器の実測図は、本文の挿図を参照。試料3と試料4は同一の土器の外表面と内面に付着していたものである。

2. SEM像の観察 試料1, 2, 3, 5には、中空のパイプ状をした粒子が観察される。口径が $1\mu\text{m}$ ほどで長さはまちまちである。試料4は鉱物が細かく粉砕されているような形状をしている。(図版92に試料2, 3, 4, 5のSEM像とX線分析のスペクトル図を示す。)

3. X線分析 X線分析は加速電圧20KV, 有効時間100秒, 取り出し角度 20.2° , 作動距離20.0mmの測定条件で行った。分析の結果、試料1, 2, 3, 5からはいずれもFeが、そして試料4からはHgとSが顕著なピークとして検出された。Al, Siなどのピークも検出されたものがあるが、これらは土器の胎土や土壌からの汚染であると考えられる。

4. まとめ X線分析の結果試料1, 2, 3, 5からはFeのピークが認められたので、赤色顔料の種類は酸化鉄を主成分とするベンガラであると考えられる。粒子の形状はいわゆるパイプ状粒子と呼ばれるものである。試料4はHgSを主成分とする水銀朱であると思われる。

これらの結果の中で、特筆すべきはNo.676の精製浅鉢についてである。黒川式土器の範疇で捉えられている土器であるが、外表面に付着していた赤色顔料(試料3)はベンガラであり、内表面に付着していた赤色顔料(試料4)は水銀朱であった。つまり同時に2種類の赤色顔料を用いていたことが明らかになった。また内表面と外表面という使い分けとも思われる用いられ方をしている。遺跡出土の赤色顔料について研究を進める上で、今後注目すべき資料であると思われる。分析試料の増加を図り、類例を待ちたい。

試料No	挿図	遺物番号	注記番号	時期	遺物と付着位置	X線分析	顔料種類	粒子の形状
1	115	389	8256	晩期	粗製浅鉢 外面	Fe	ベンガラ	パイプ状
2	〃	391	12194	晩期	粗製浅鉢 外面	Fe	ベンガラ	パイプ状
3	141	676	12175	晩期	精製浅鉢 外面	Fe	ベンガラ	パイプ状
4	〃	〃	〃	〃	精製浅鉢 内面	Hg, S	水銀朱	細粒
5		I層出土		古墳	高坏? 外面	Fe	ベンガラ	パイプ状

版 圖



遺跡遠景

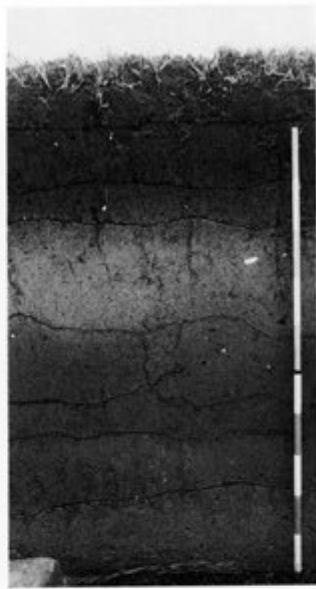
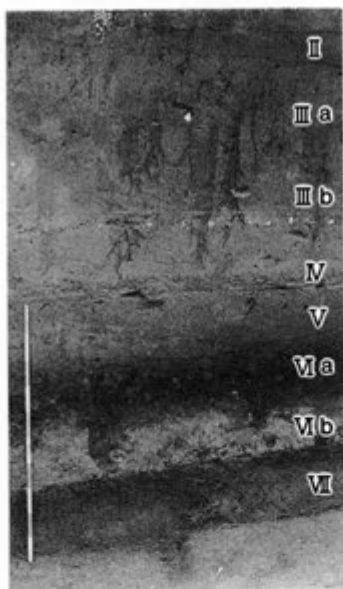


遺跡近景

図版 2



土層と火山灰の堆積状況



各地点の土層



礫群・ピット群の配置



細石器文化調査風景

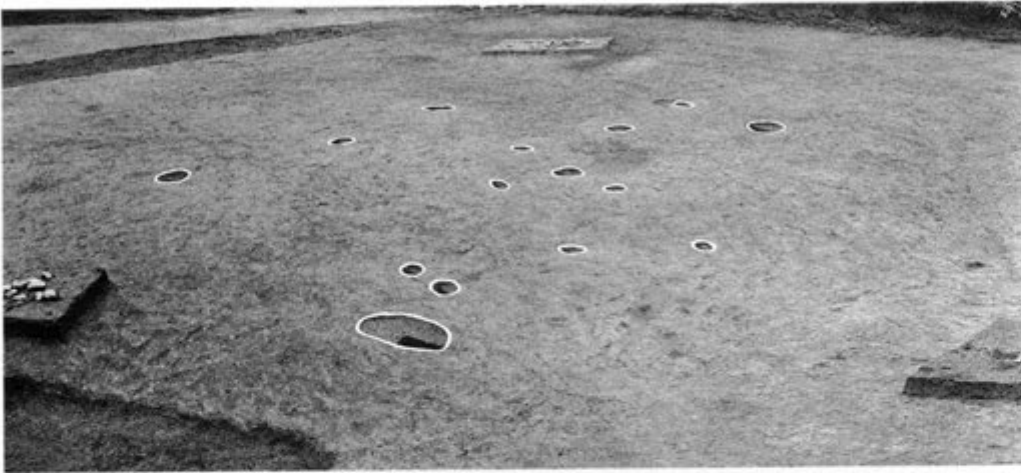


4号礫群の移設

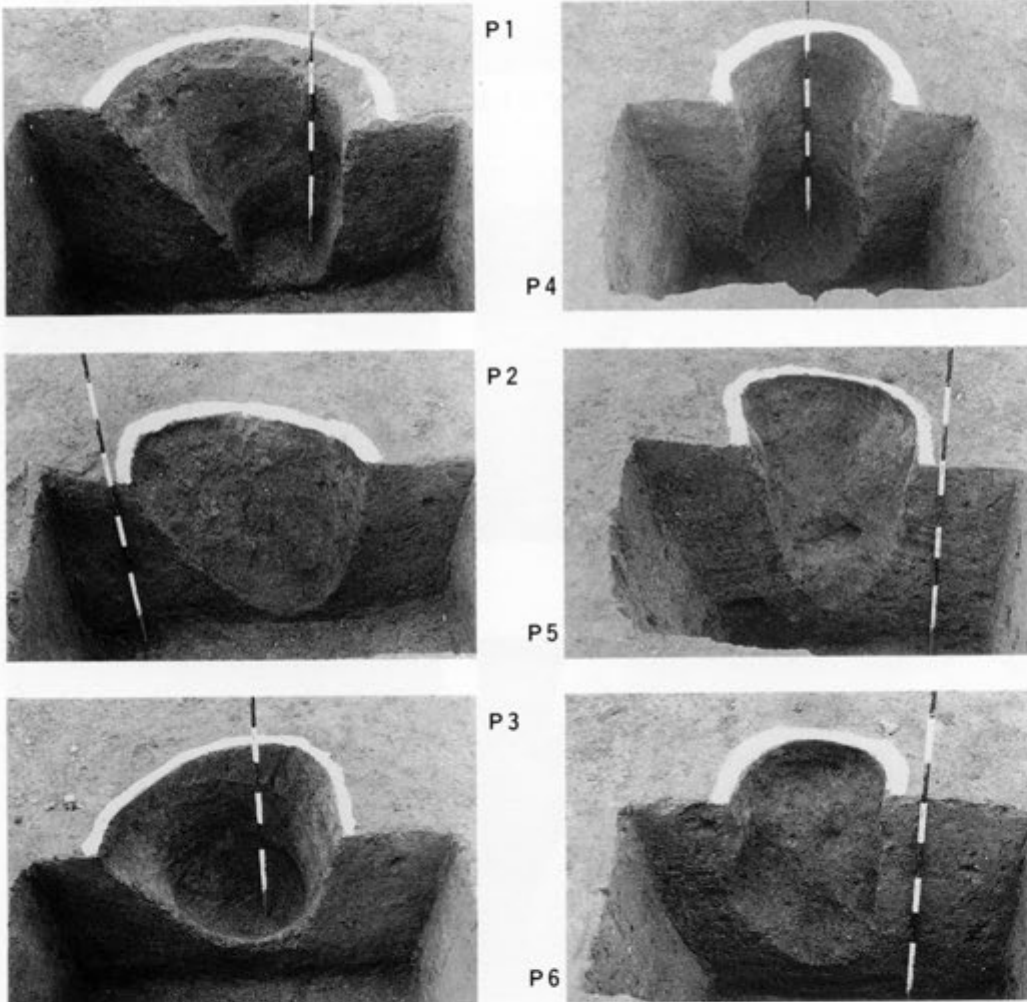


磨製石斧出土状況

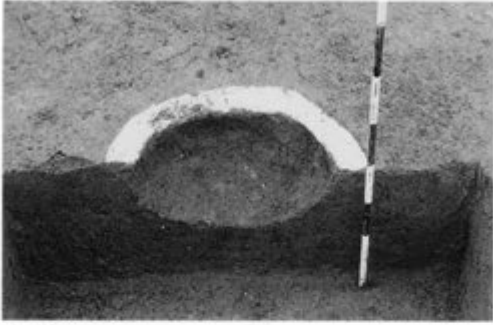
図版 4



ピットA群と礫群 (右端7号, 中上9号, 左端4号)



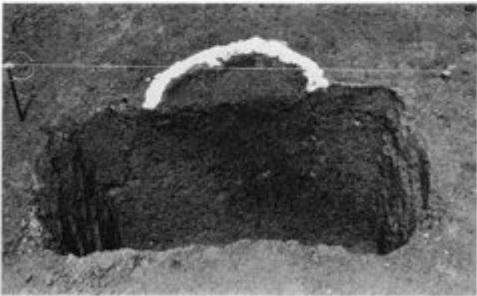
ピット(1) A群



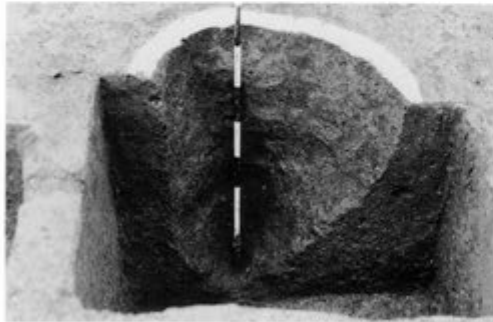
P7



P11



P8



P12



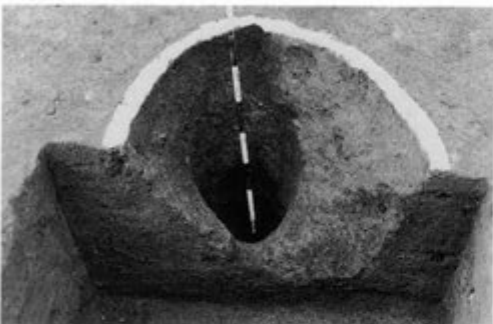
P9



P13



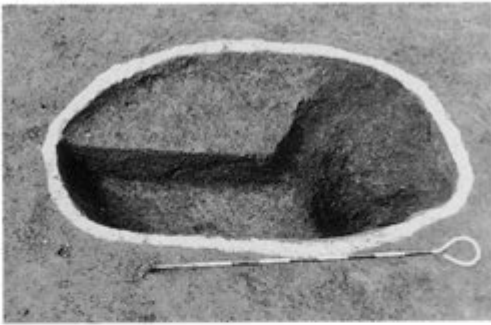
P10



P14

ピット(2) A群

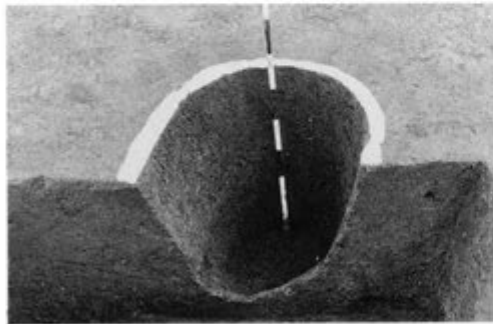
図版 6



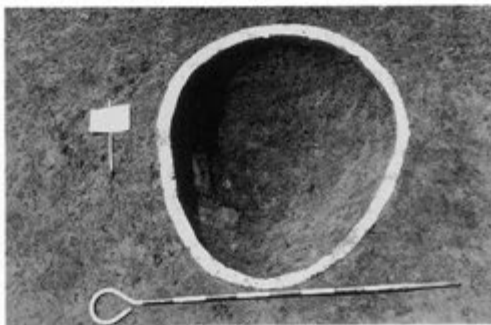
P15

ピットA群
P1~P15

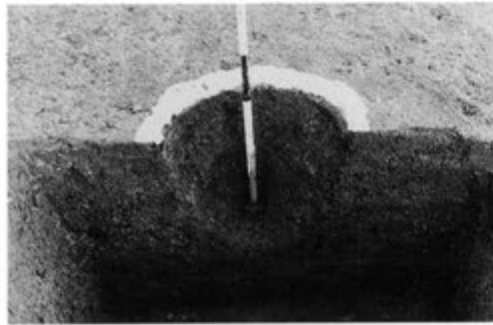
ピットB群
P16~P20



P18



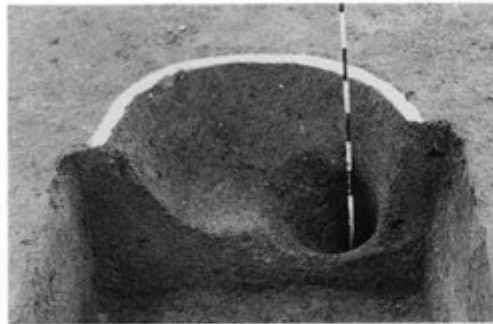
P16



P19



P17



P20

ピット(3) A群及びB群



1号



2号



3号



4号



5号



6号



7号



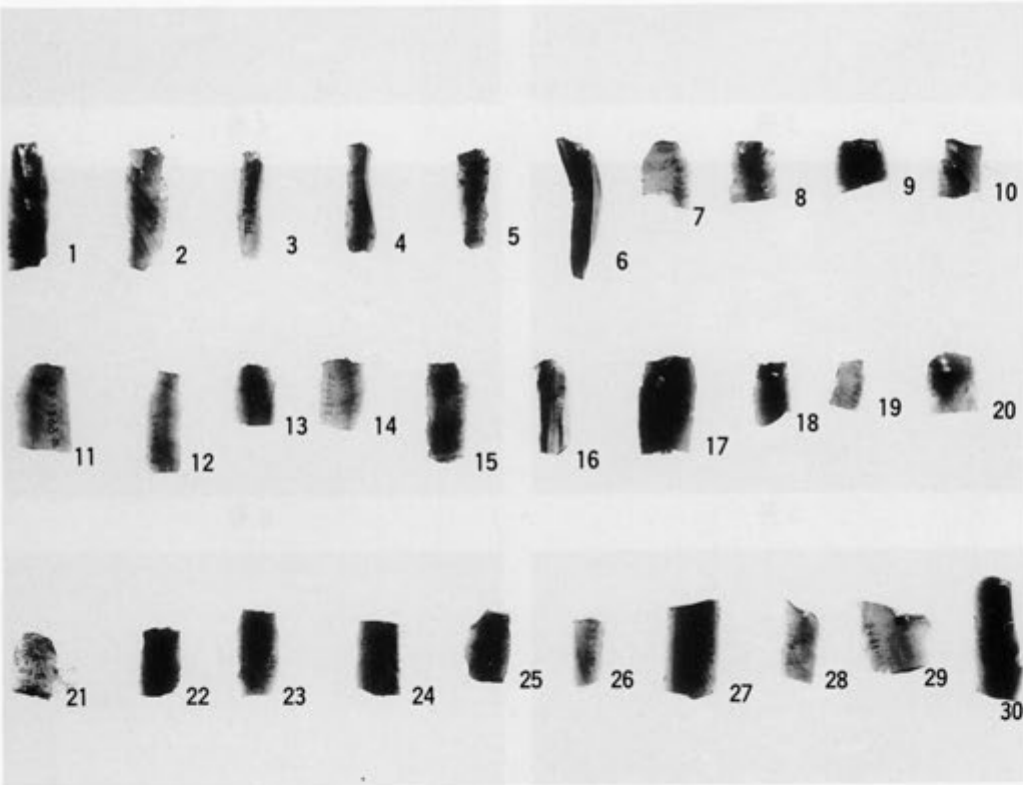
8号

礫群 1 ~ 8 号

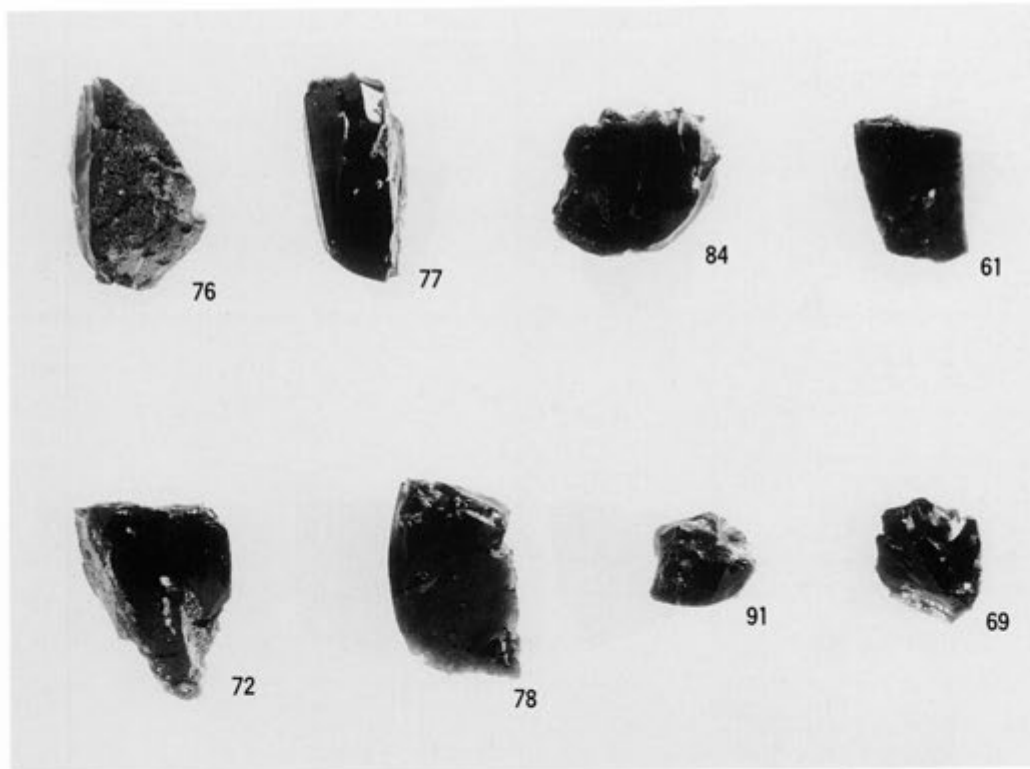
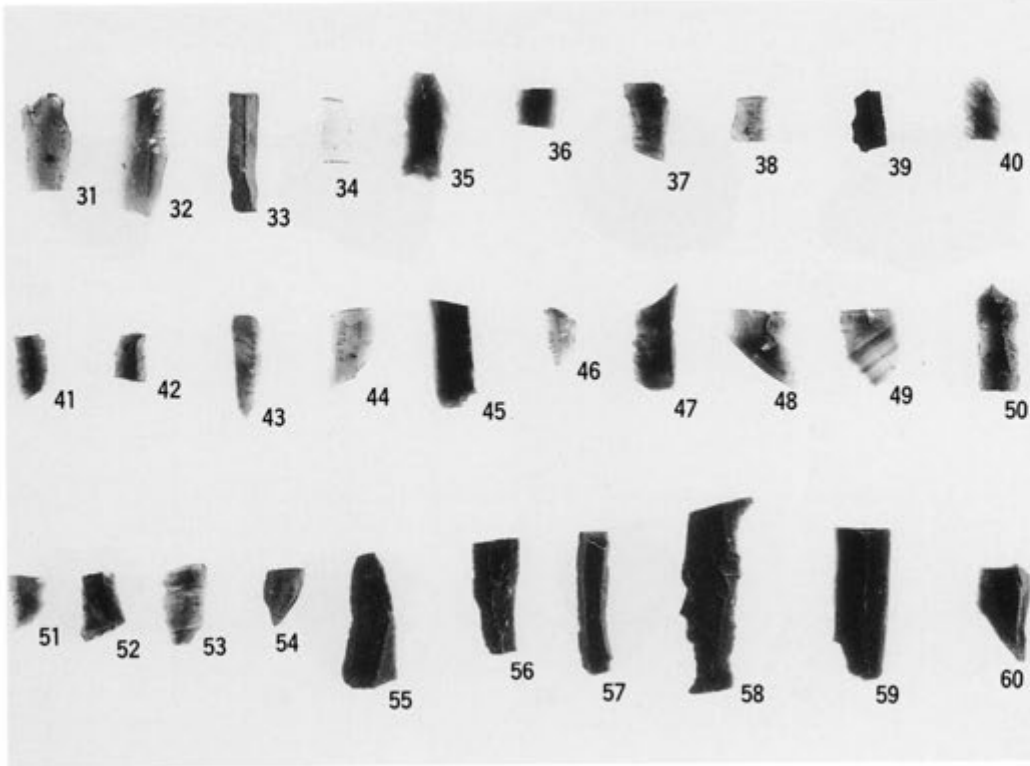
図版 8



9号

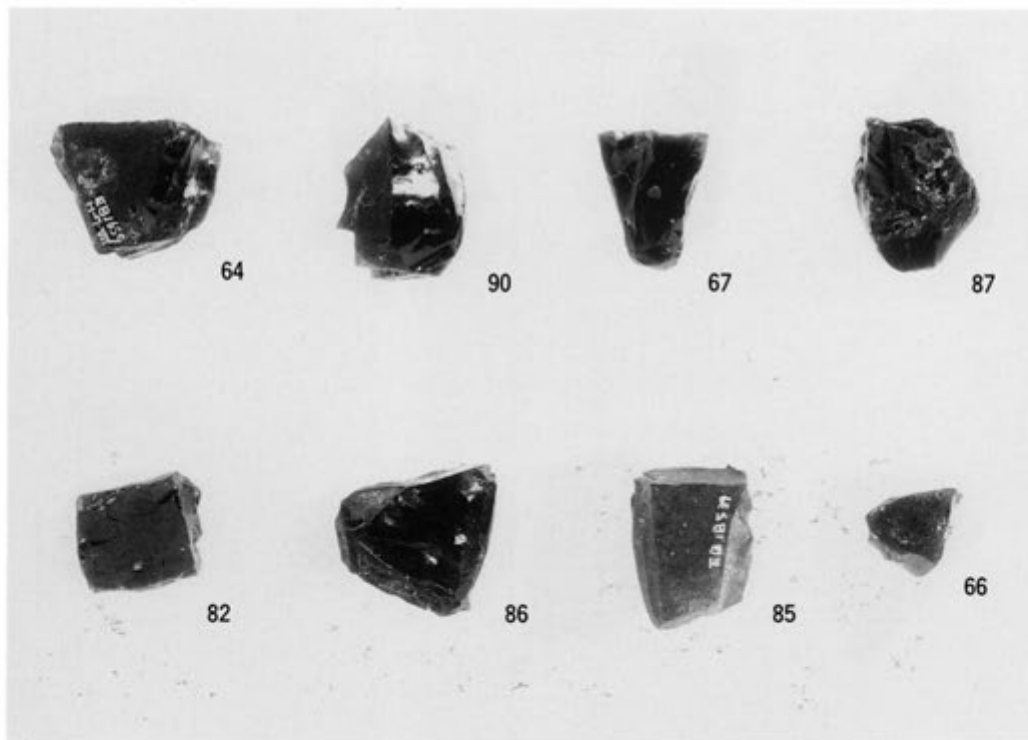
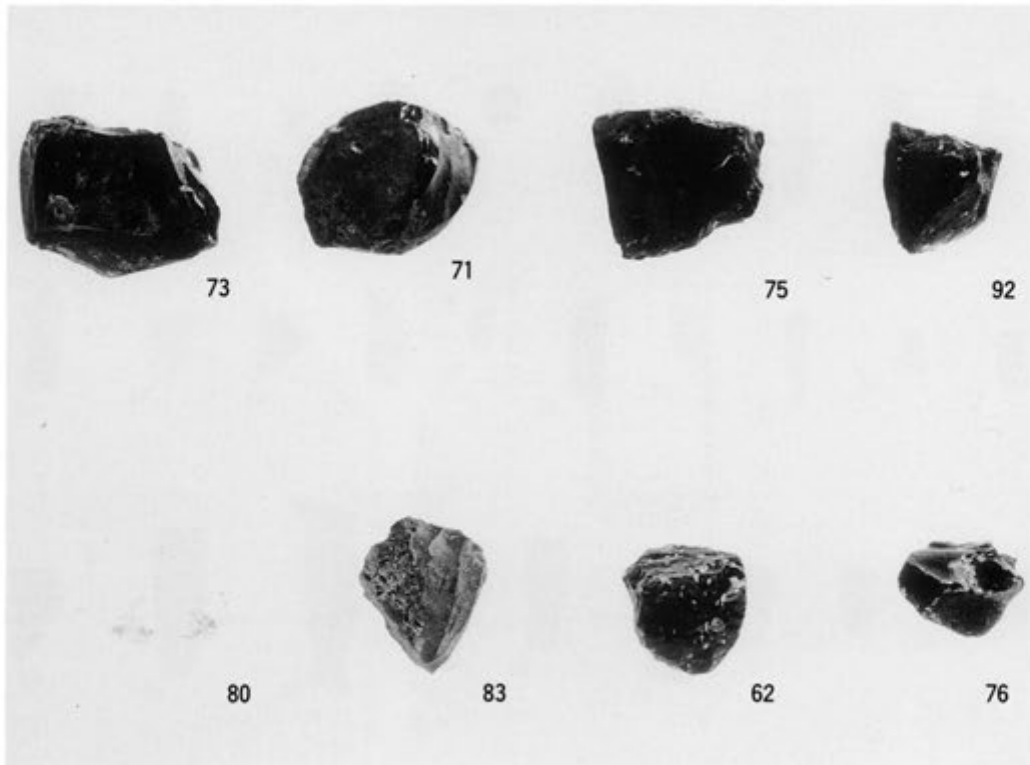


礫群 9号・細石刃(1)

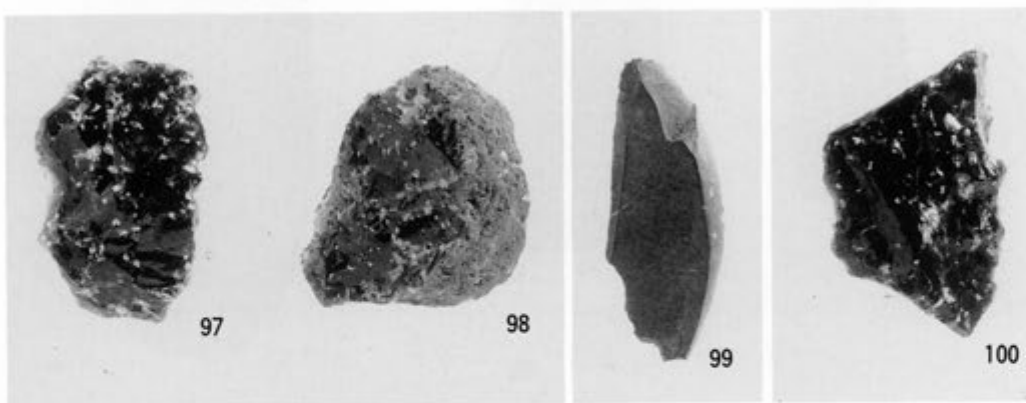
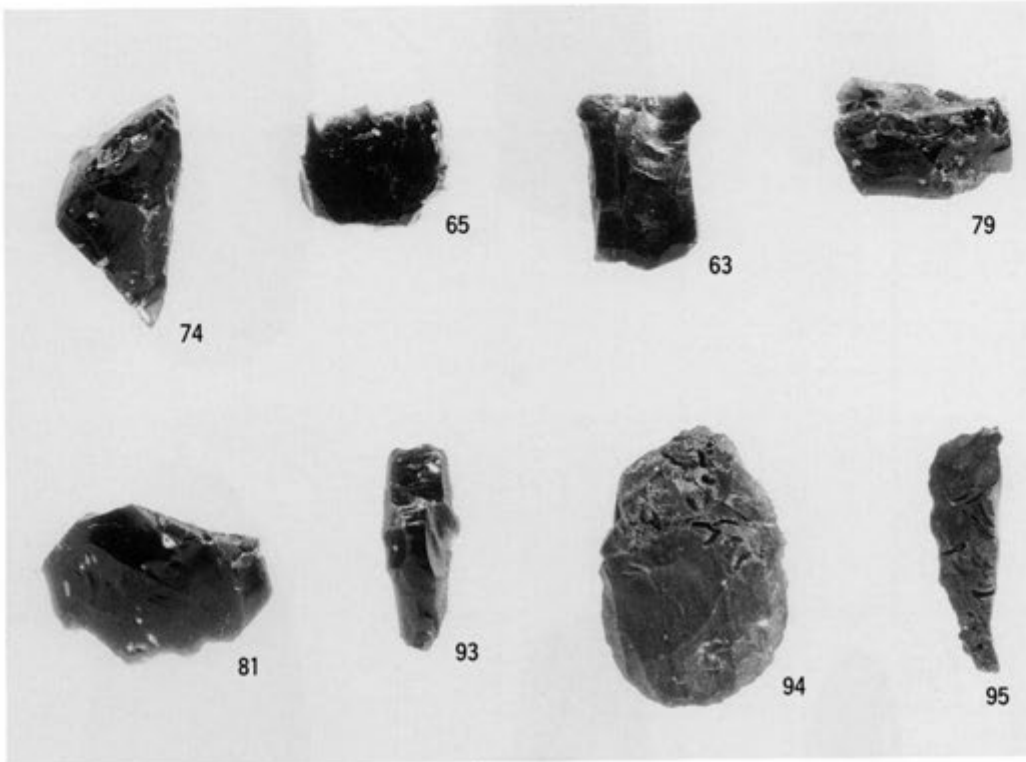
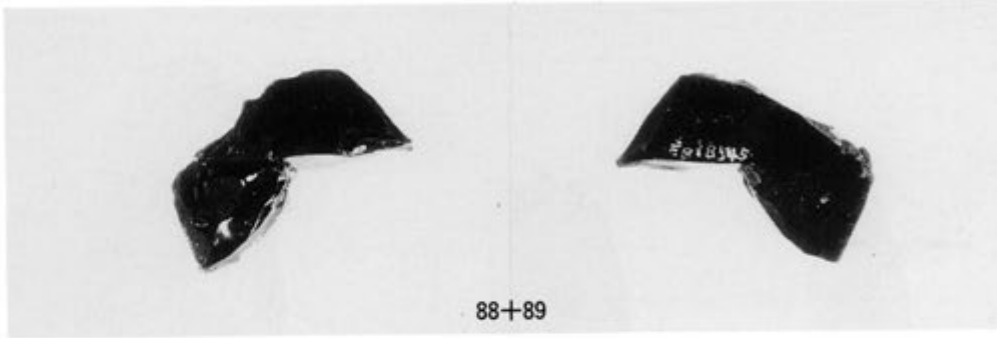


細石刃(2)・細石刃核(1)

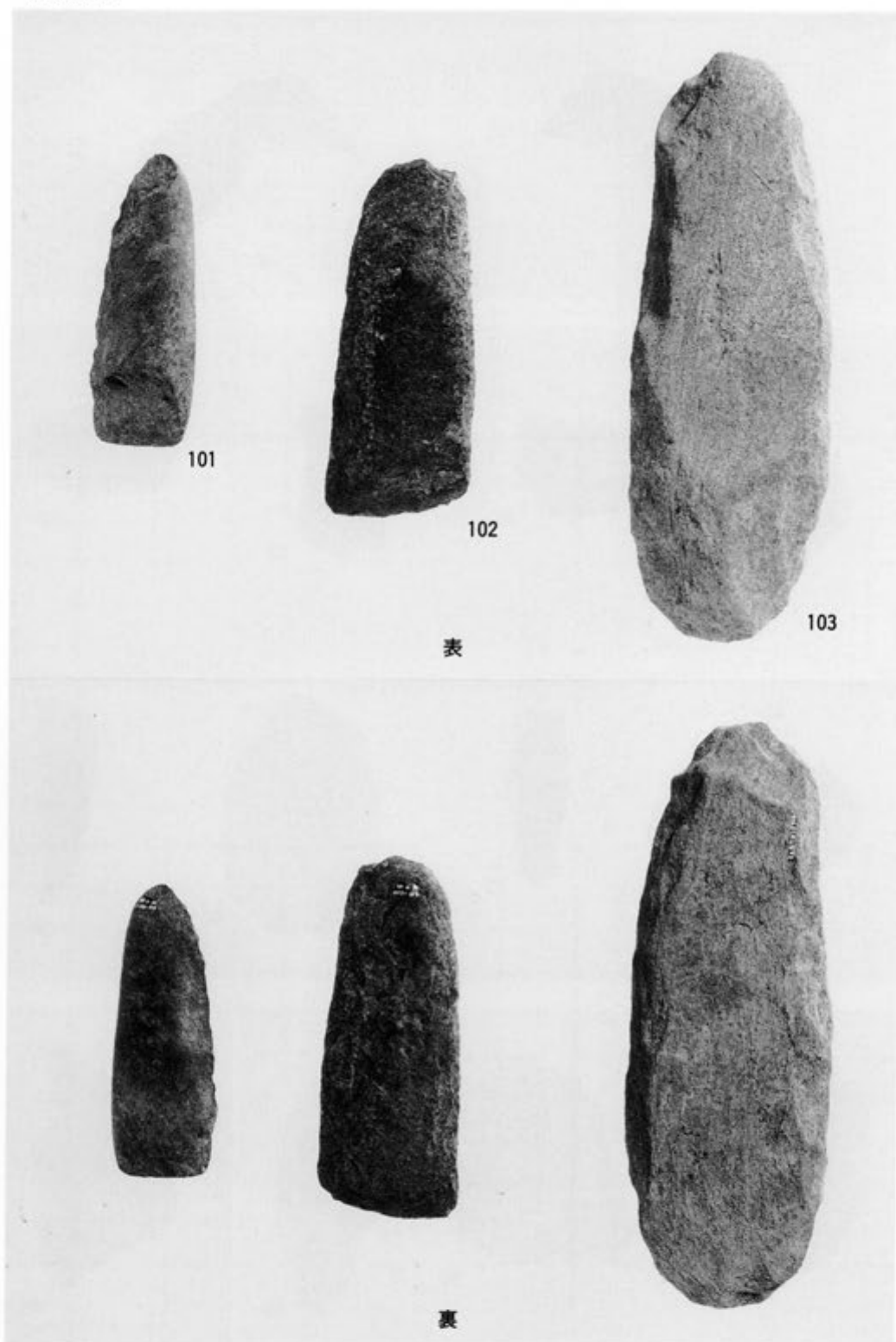
図版10



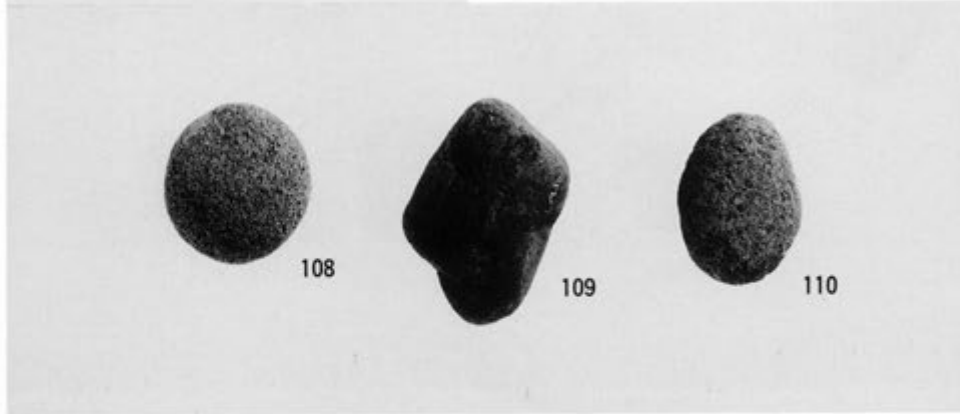
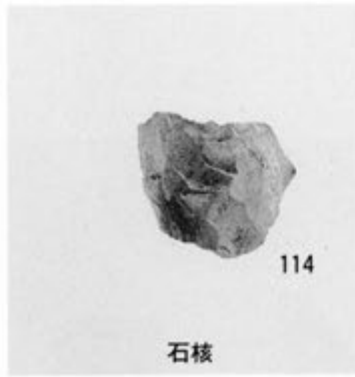
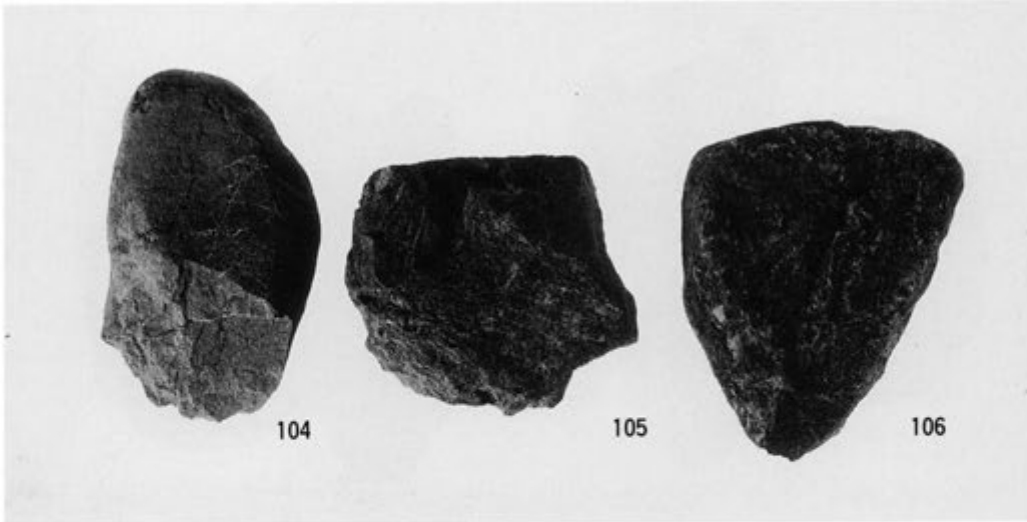
細石刃核(2)



細石刃核(3)・調整剥片

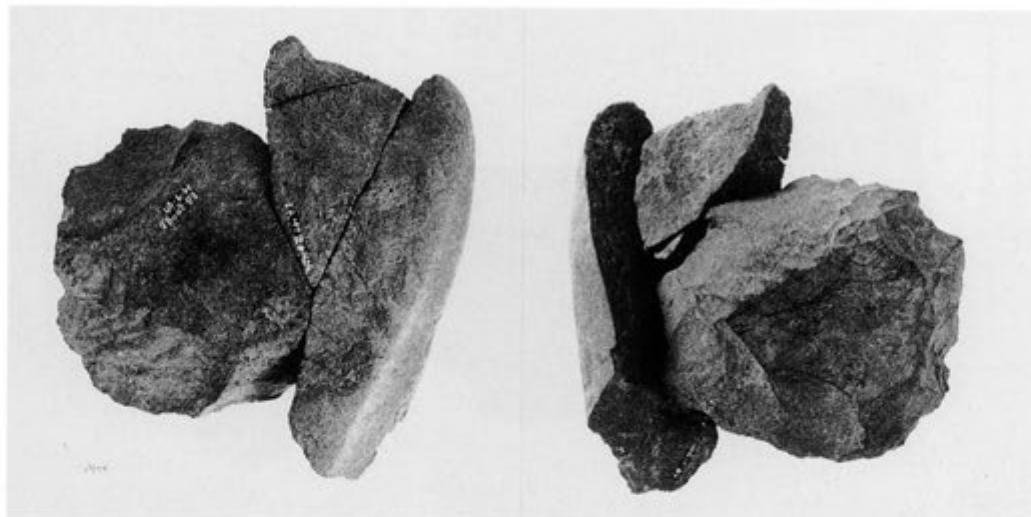


磨製石斧



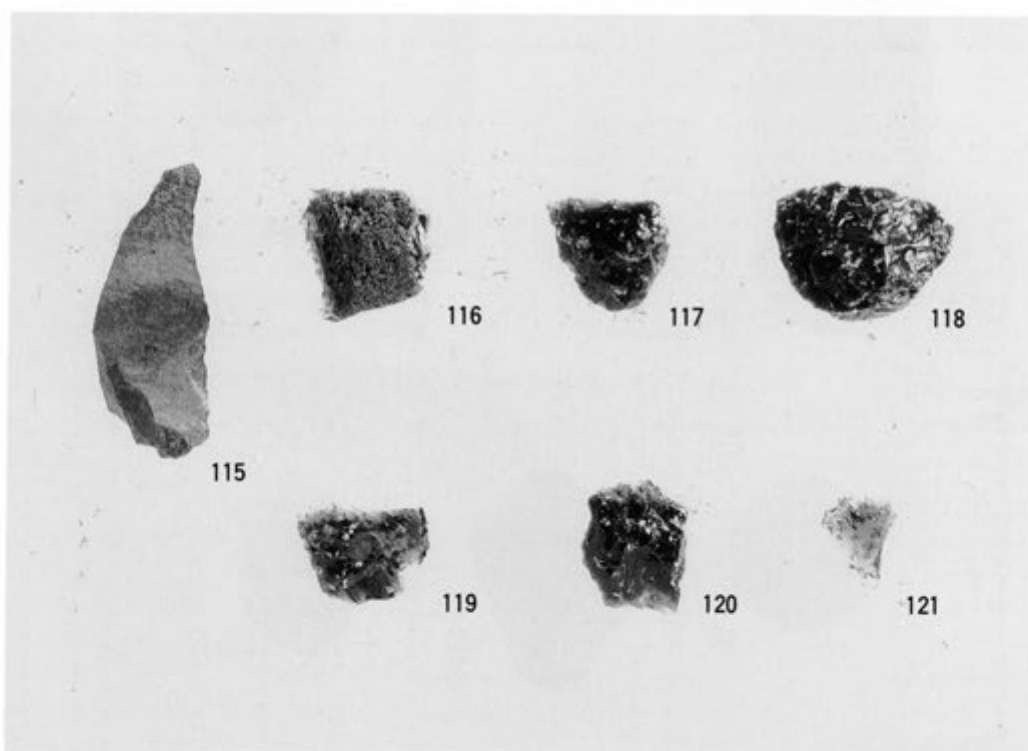
磔器・敲石

図版14



111+112+113

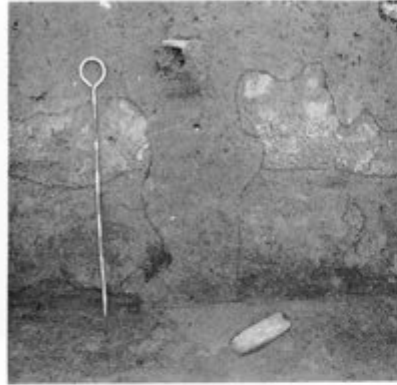
接合資料



ナイフ形石器・台形石器



V層縄文早期発掘調査風景



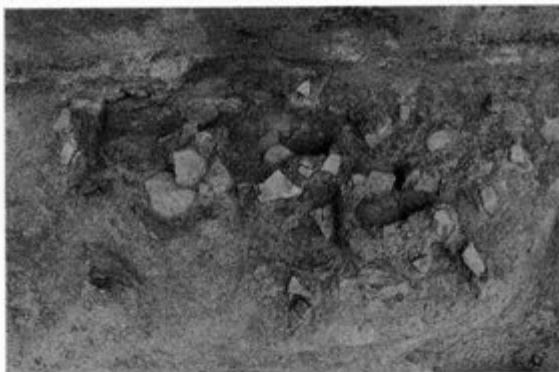
磨製石斧出土状況(113)



土器出土状況(1)



土器出土状況(15)



土器出土状況(77~80)



土器出土状況(71)

V層調査風景・遺物出土状況

图版16



3号



4号



5号



9号



11号

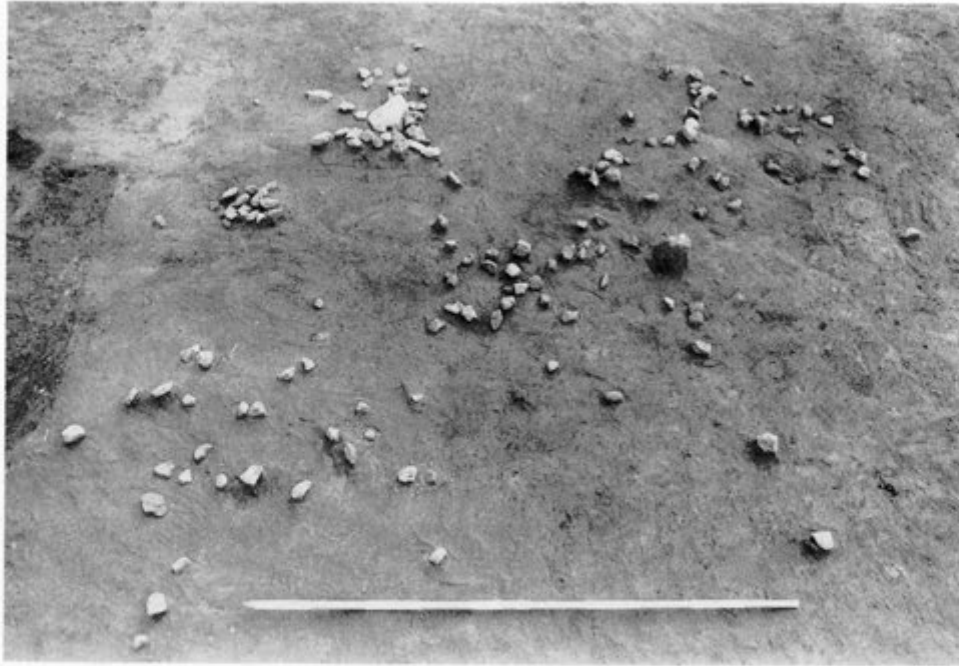


13号



14号

集石(1)



15·16·17·号



19号



20号

集石(2)

図版18



23号



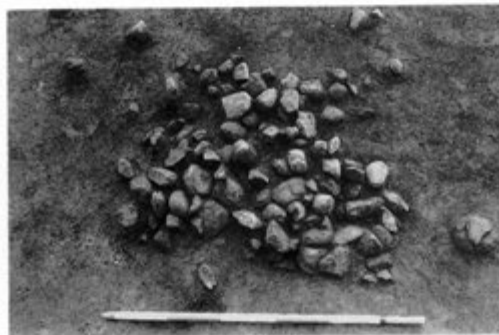
23・24・25号



25号



28号



29号



32号

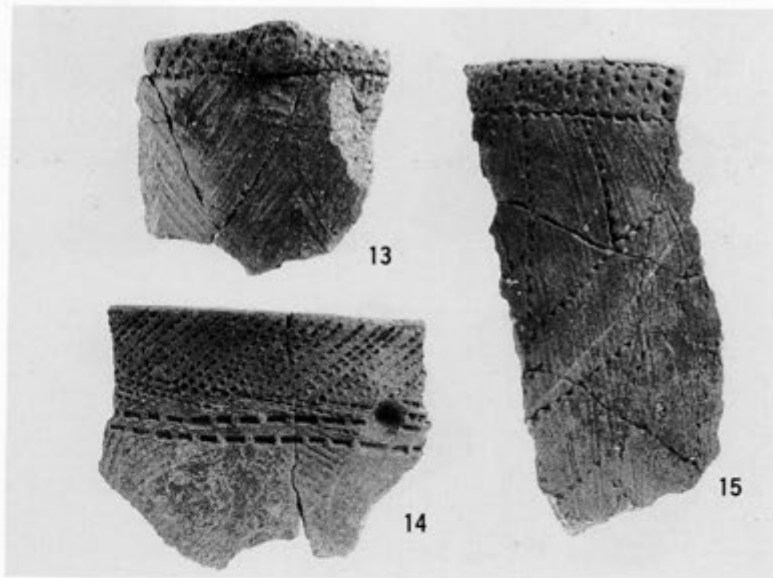
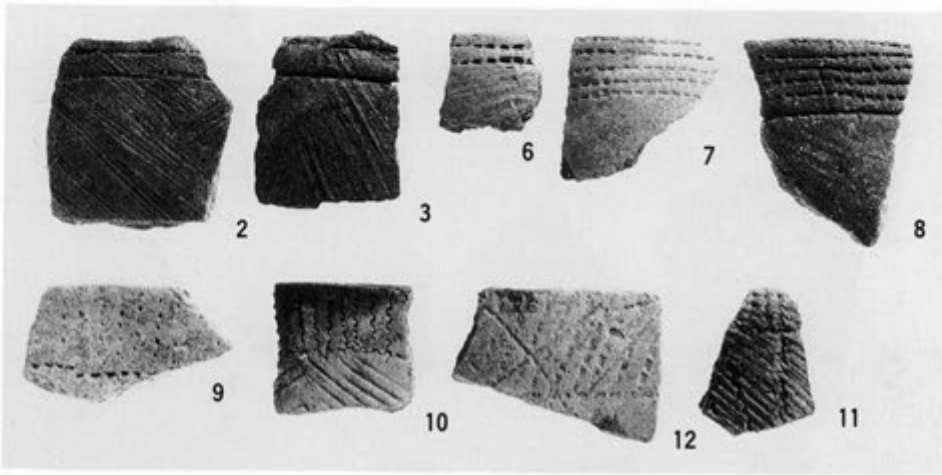


33号

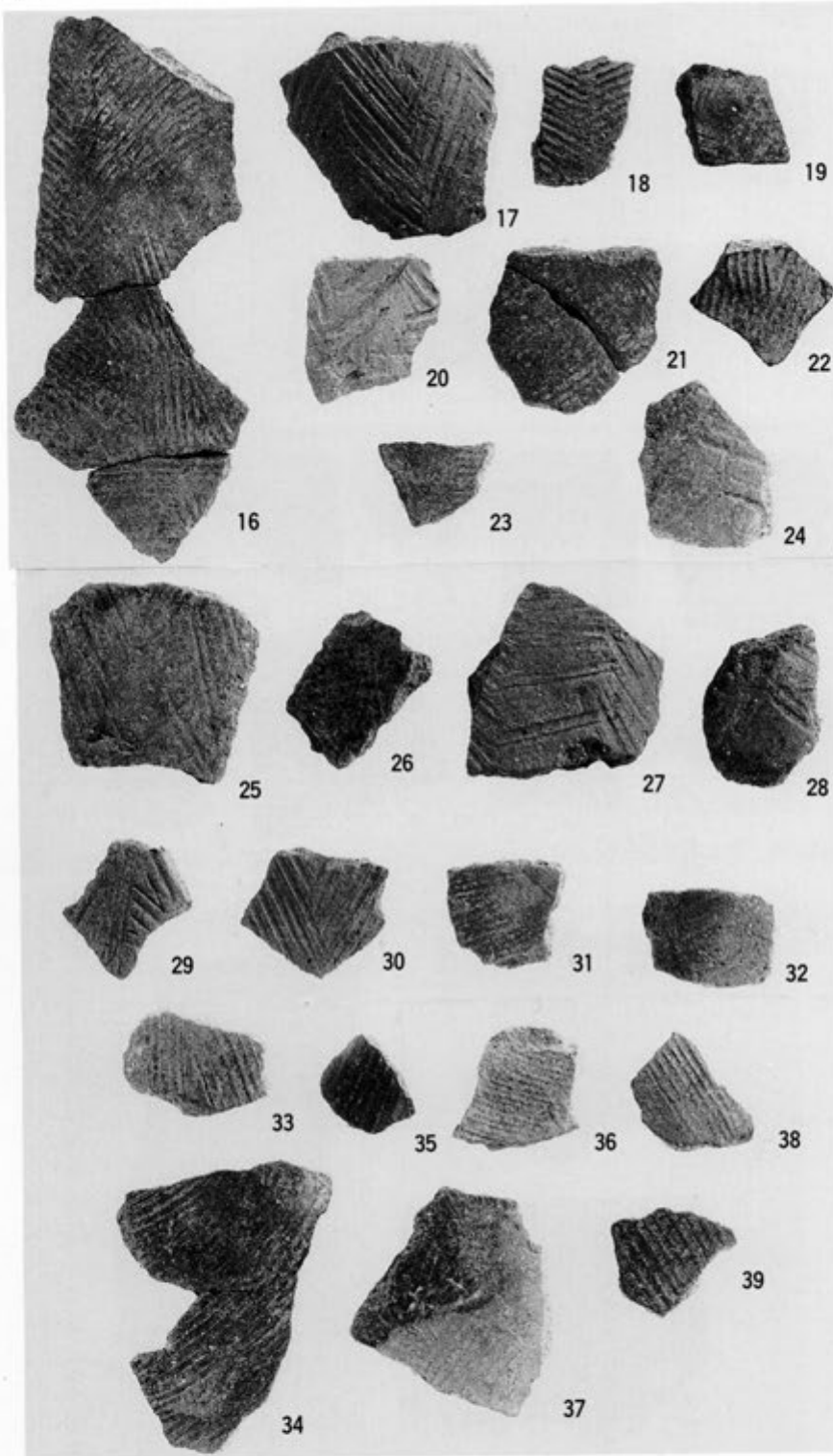


34号

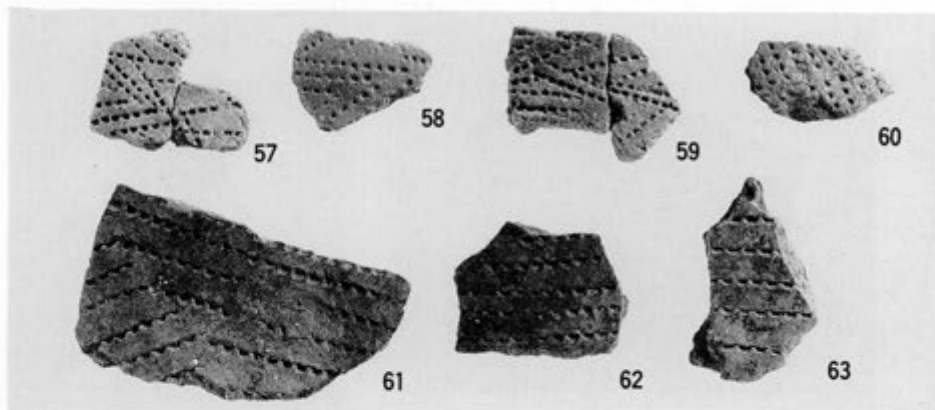
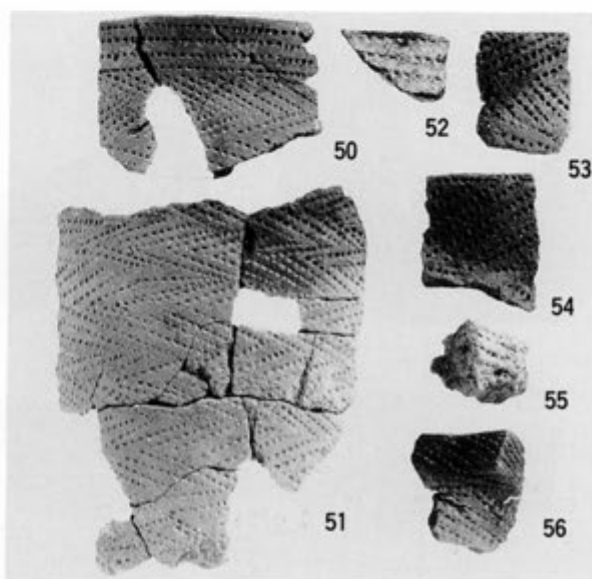
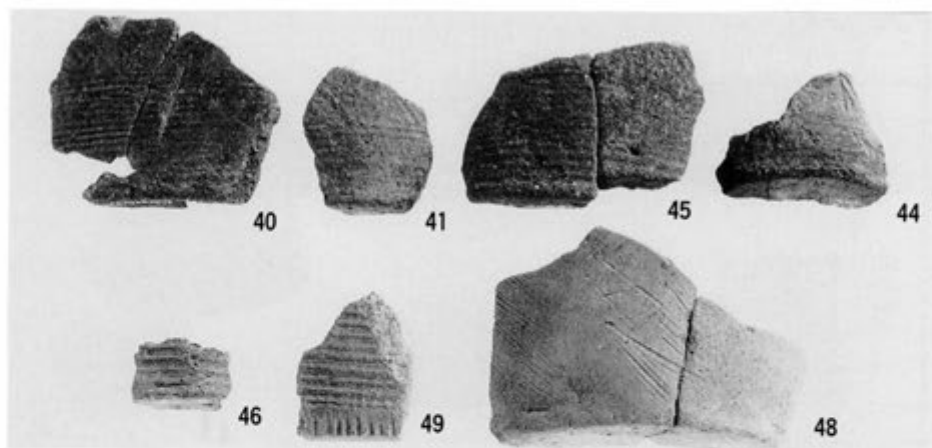
集石(3)



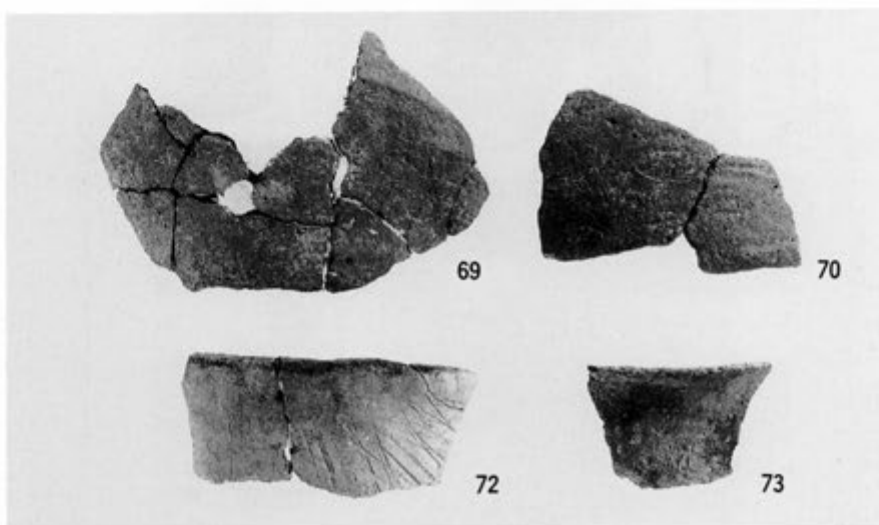
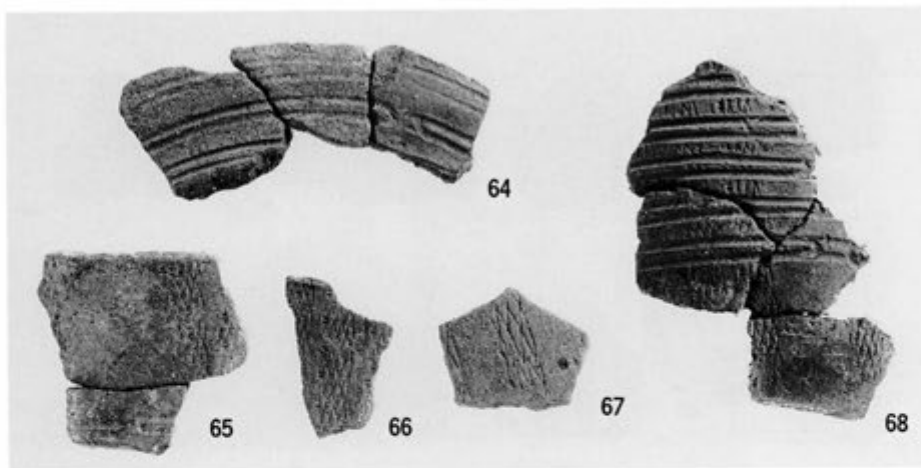
V層出土土器(1)



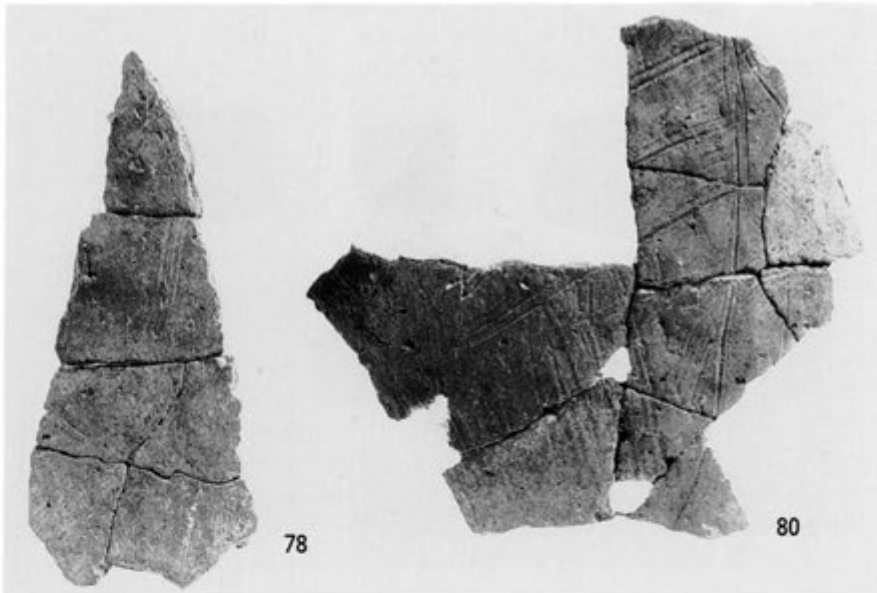
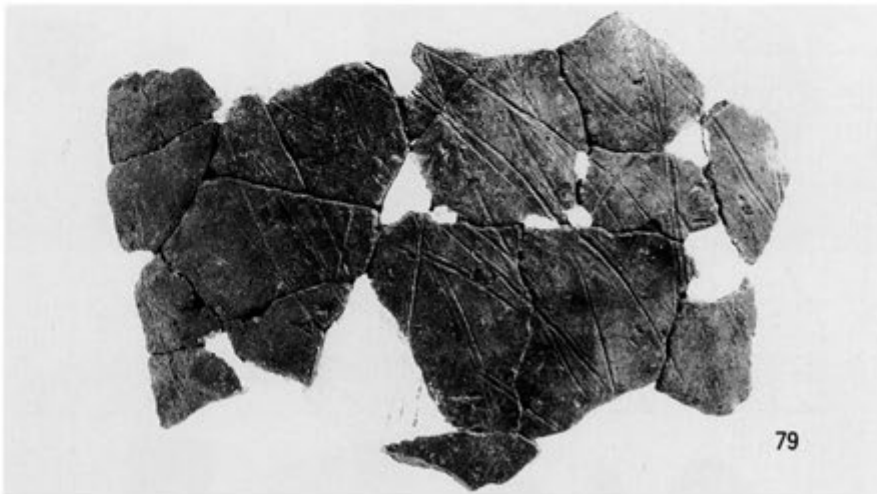
V層出土土器(2)



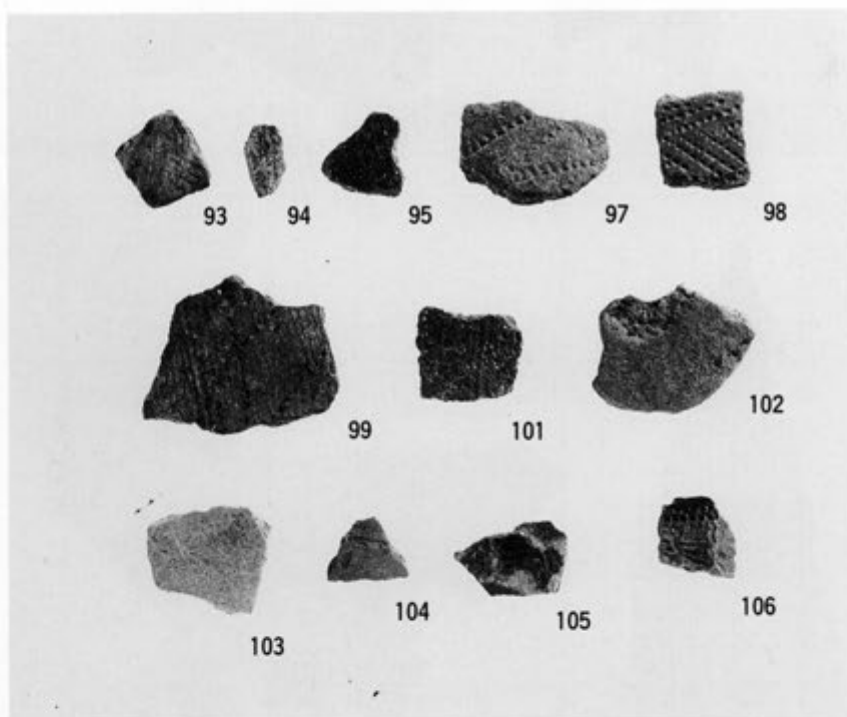
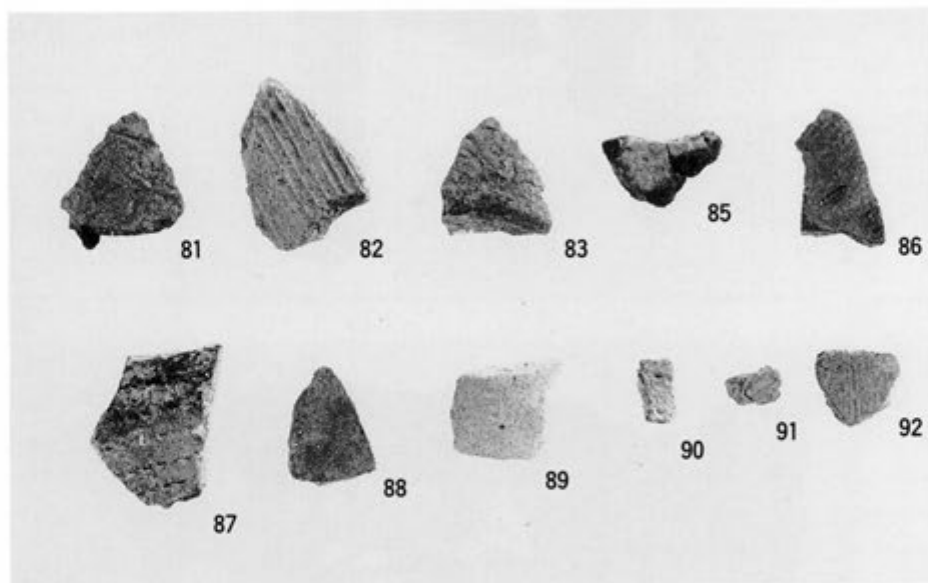
V層出土土器(3)



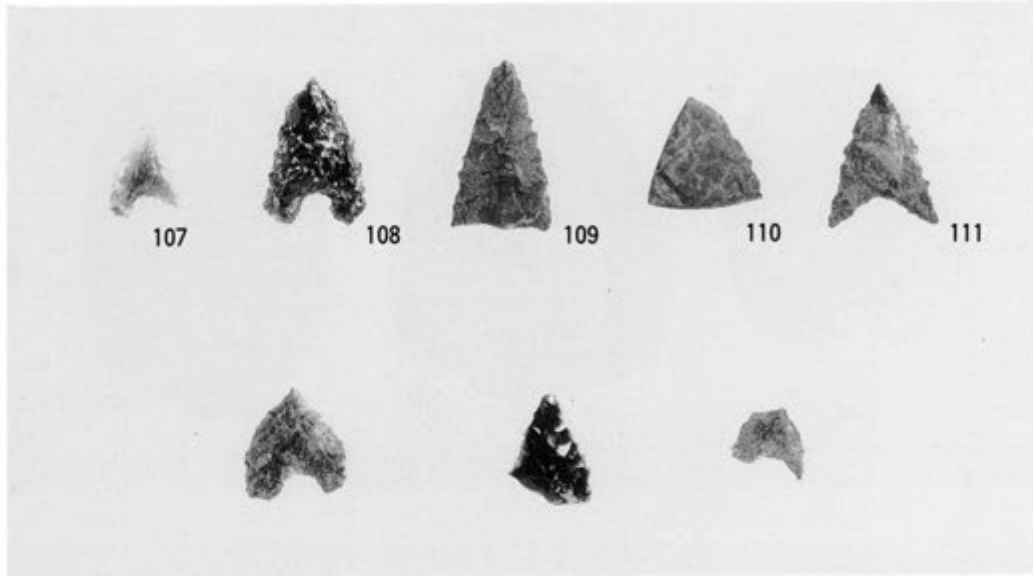
V層出土土器(4)



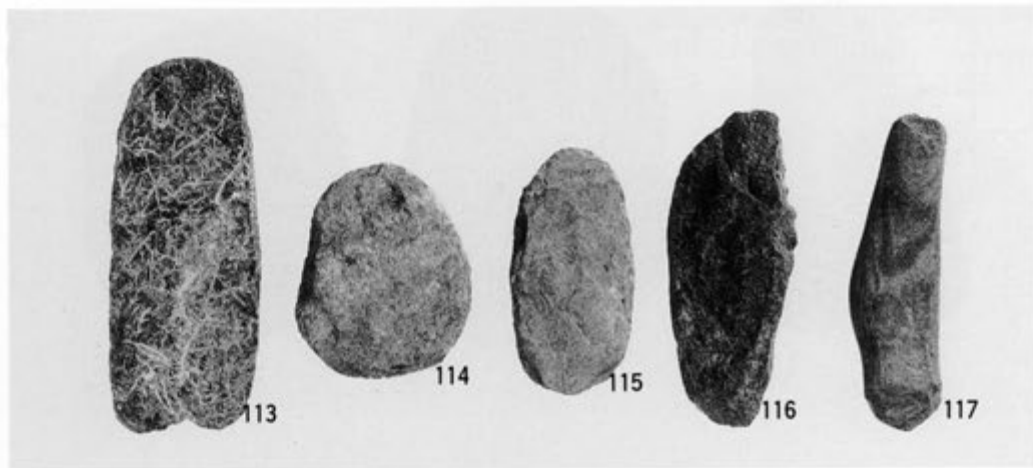
V層出土土器(5)



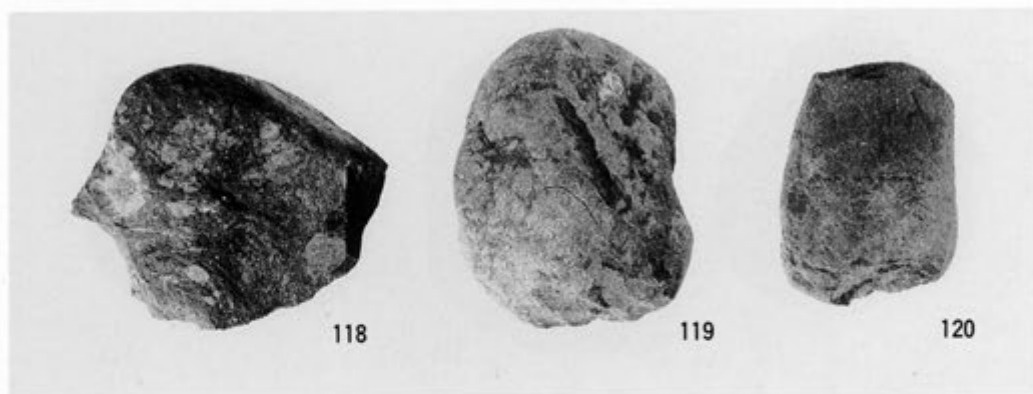
V層出土土器(6)



石鏃

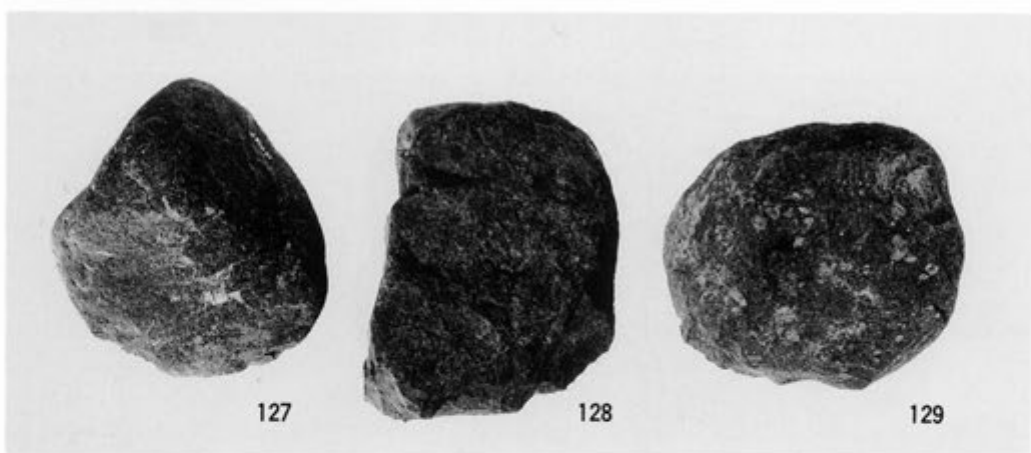
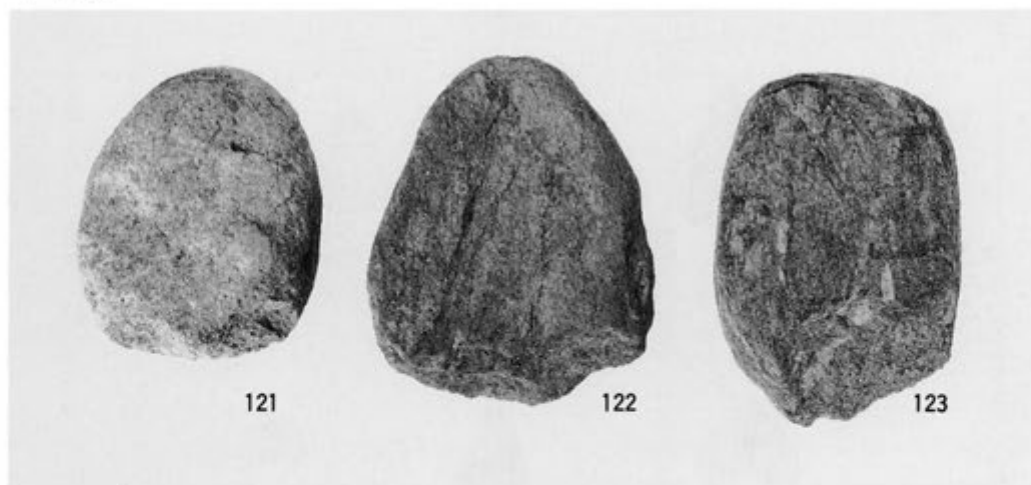


石斧

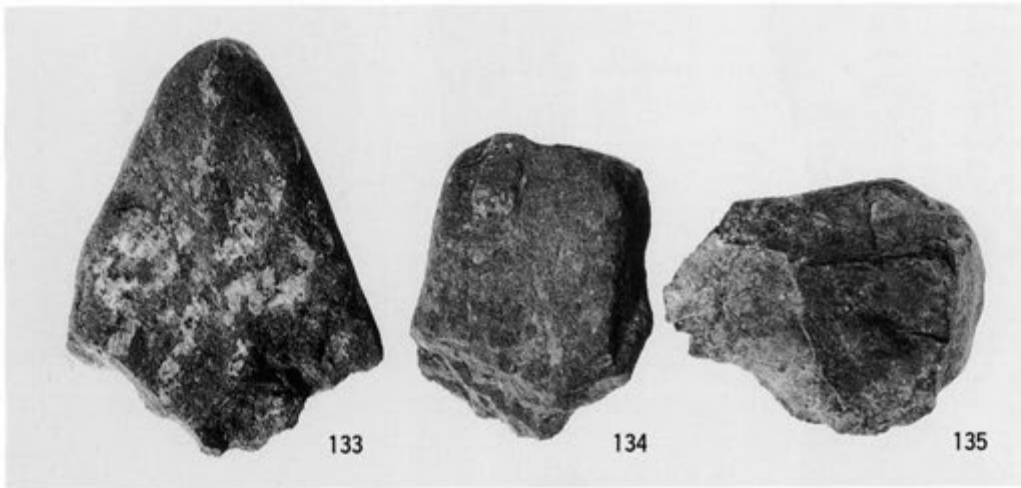
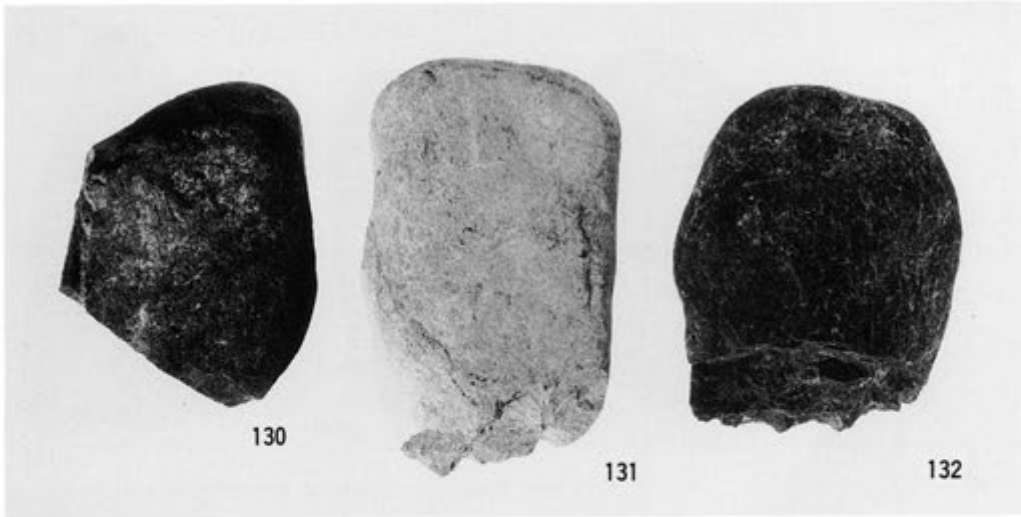


V層出土石器(1)

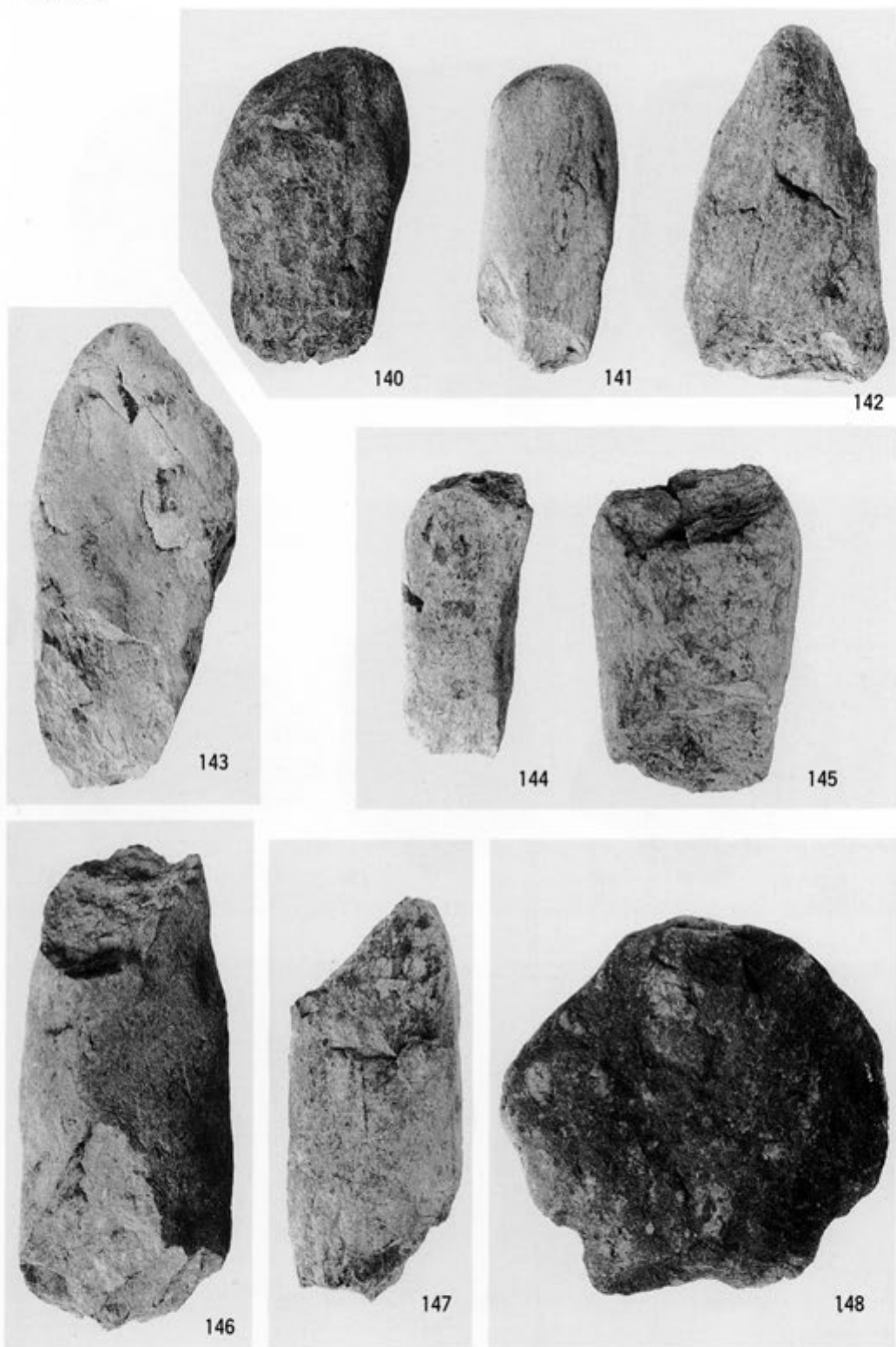
礫器



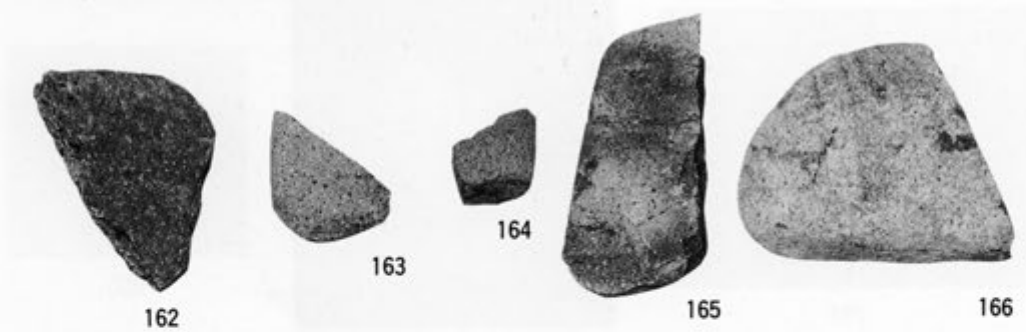
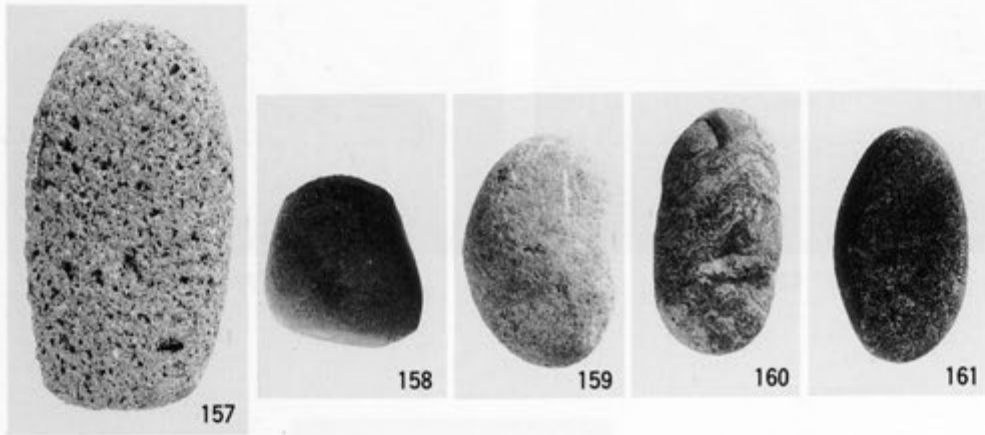
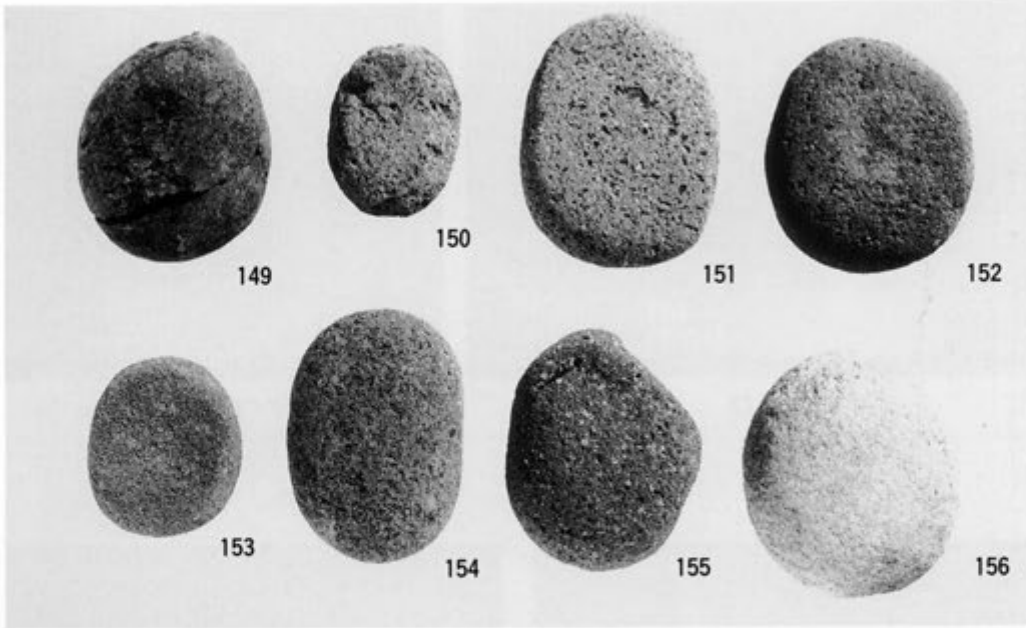
V層出土石器(2) (礫器)



V層出土石器(3) (礫器)



V層出土石器(4) (礫器)



V層出土石器(5) (磨石・敲石・石皿)

图版30



177



588



629



177



751

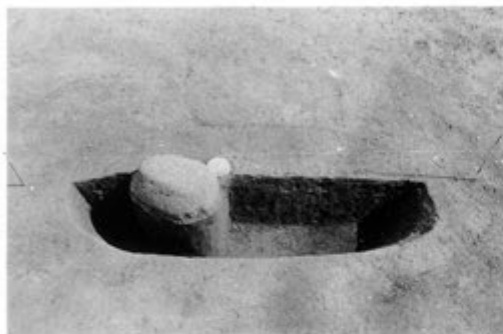


853



850

Ⅲ層遺物出土狀況



3·4号



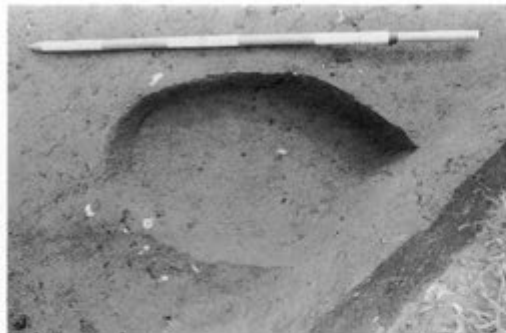
9号

土坑(1)

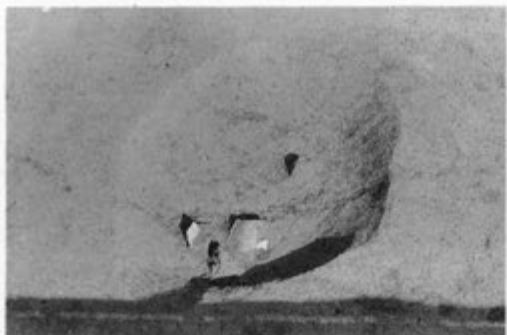
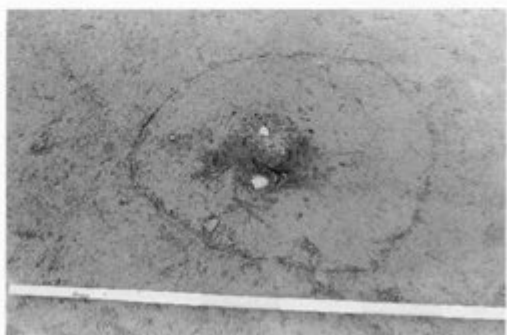
图版32



10号



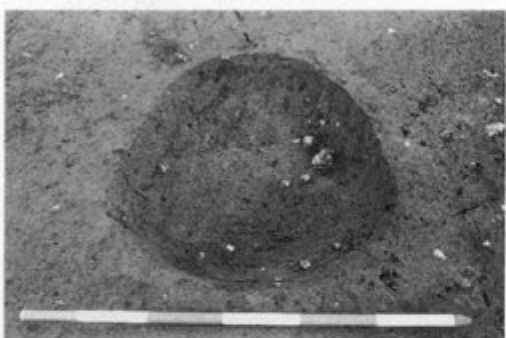
12号



11号

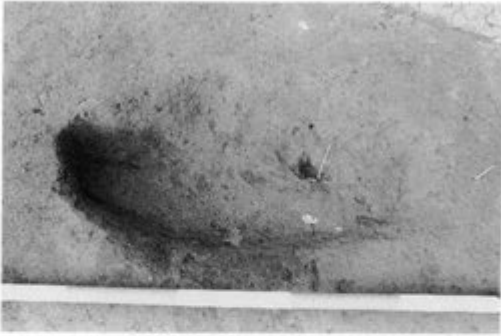


17号

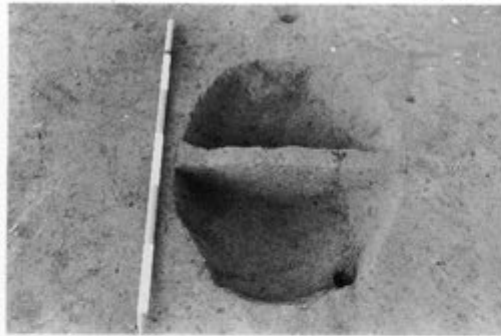


18号

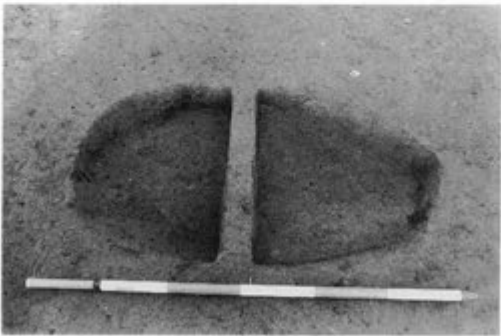
土坑(2)



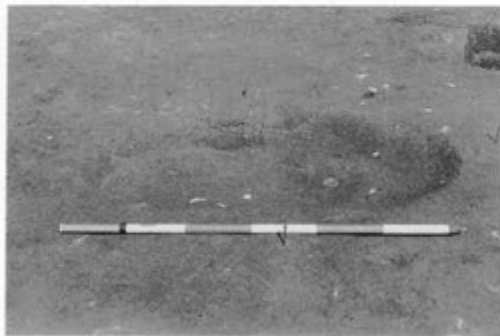
20号



22号



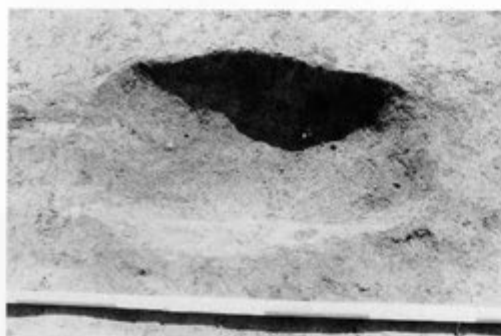
23号



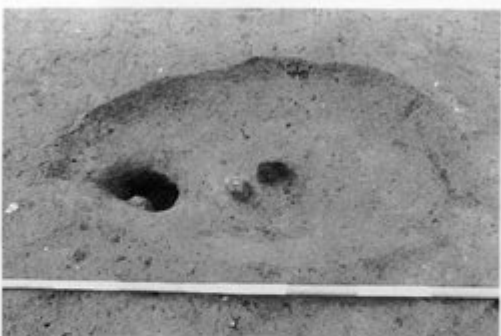
27号



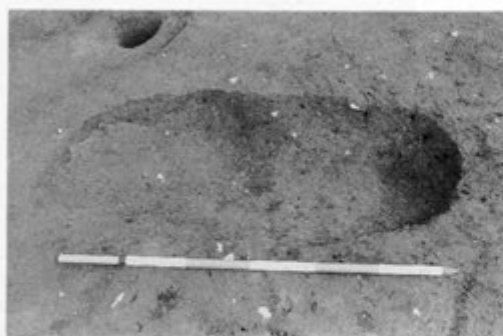
28号~30号



28号



29号

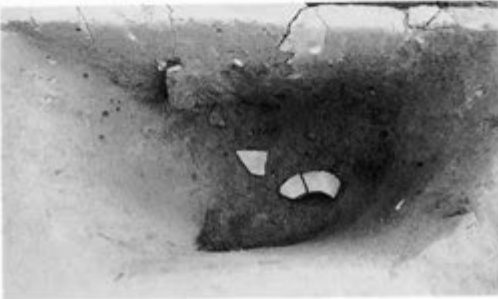


30号

土坑(3)



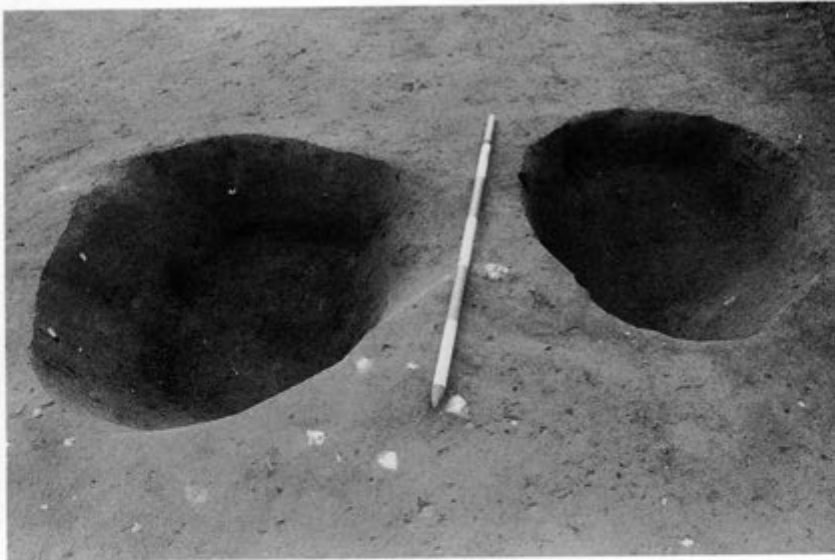
35・34号検出状況



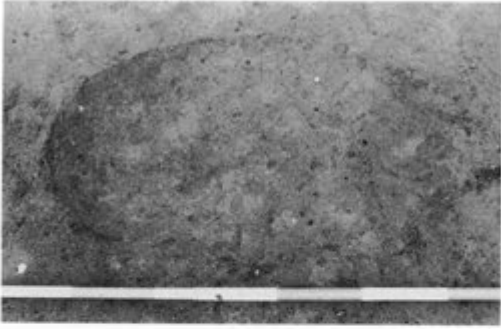
35号半掘状況



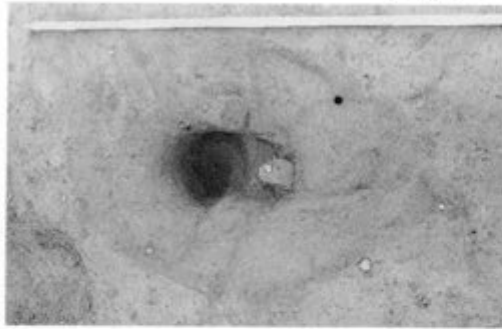
34号半掘状況



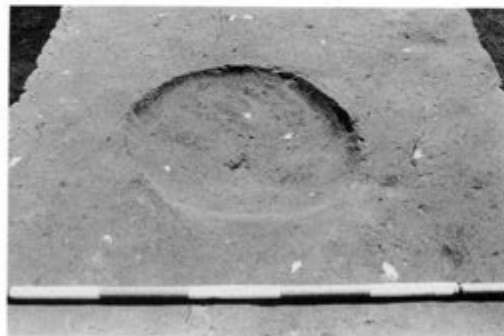
35・34号完掘状況



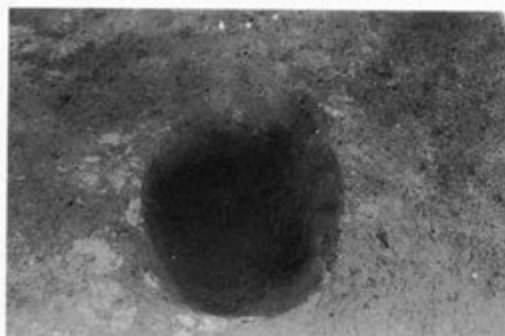
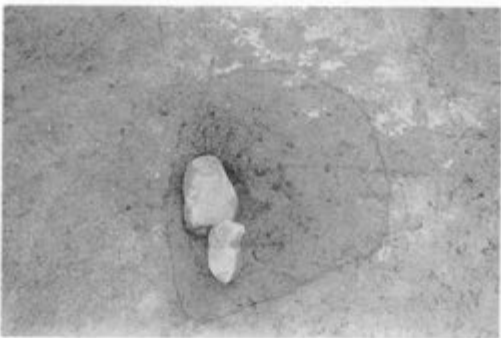
31号



32号



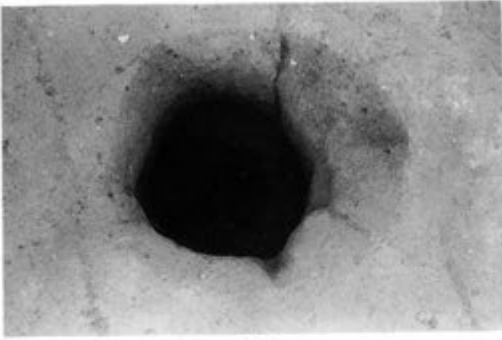
37号



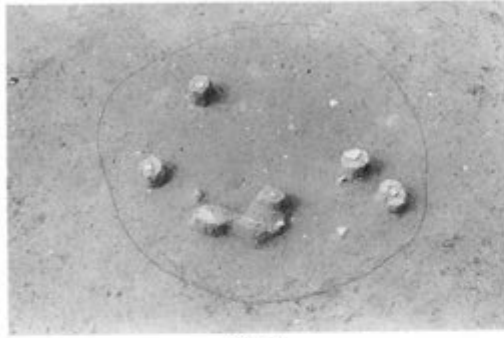
43号

土坑(5)

図版36



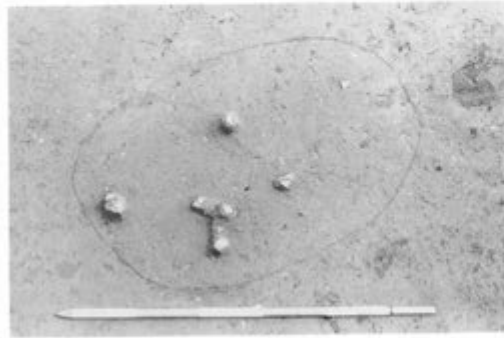
36号



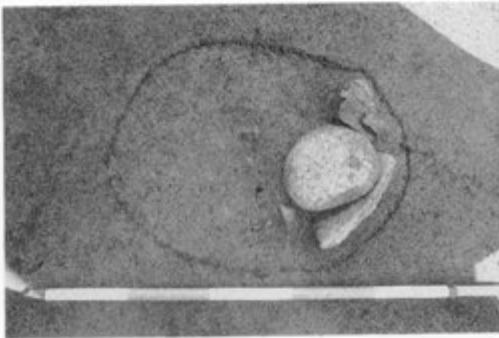
38号



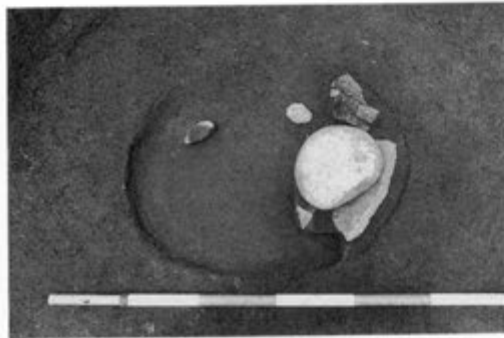
39号



49号



50号

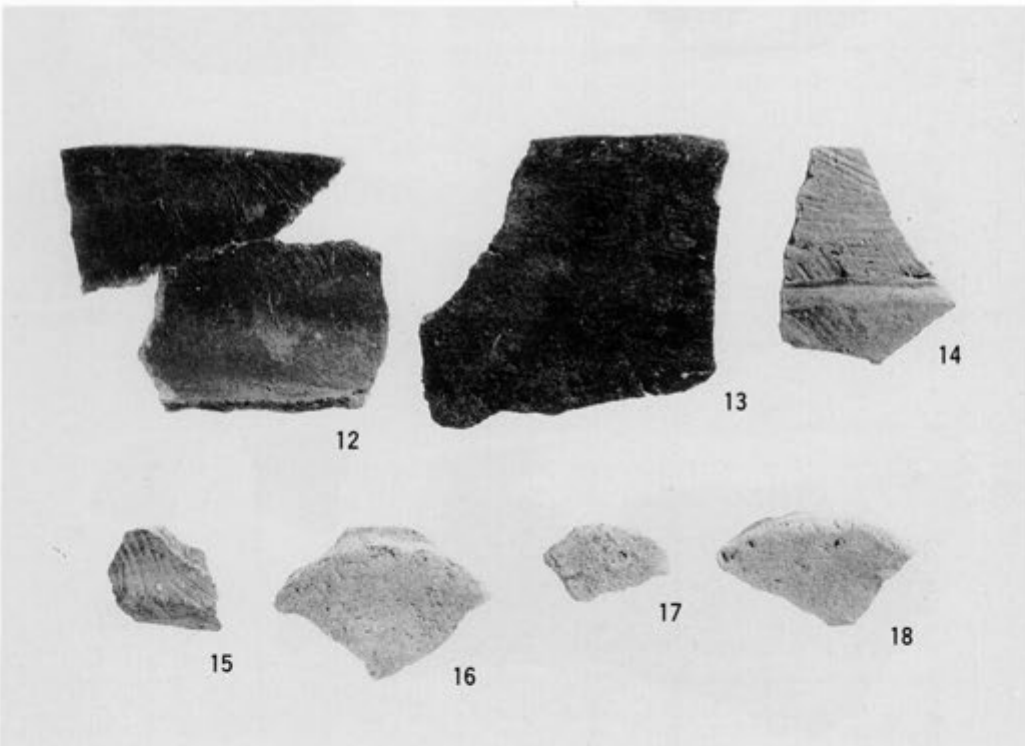
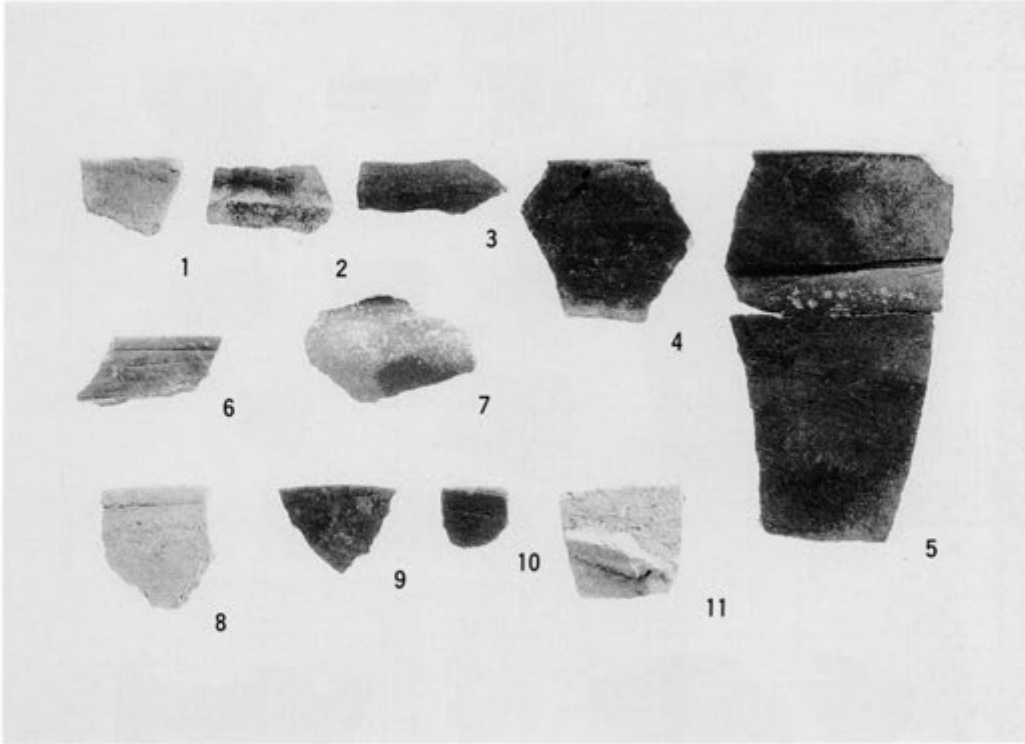


1号 集石

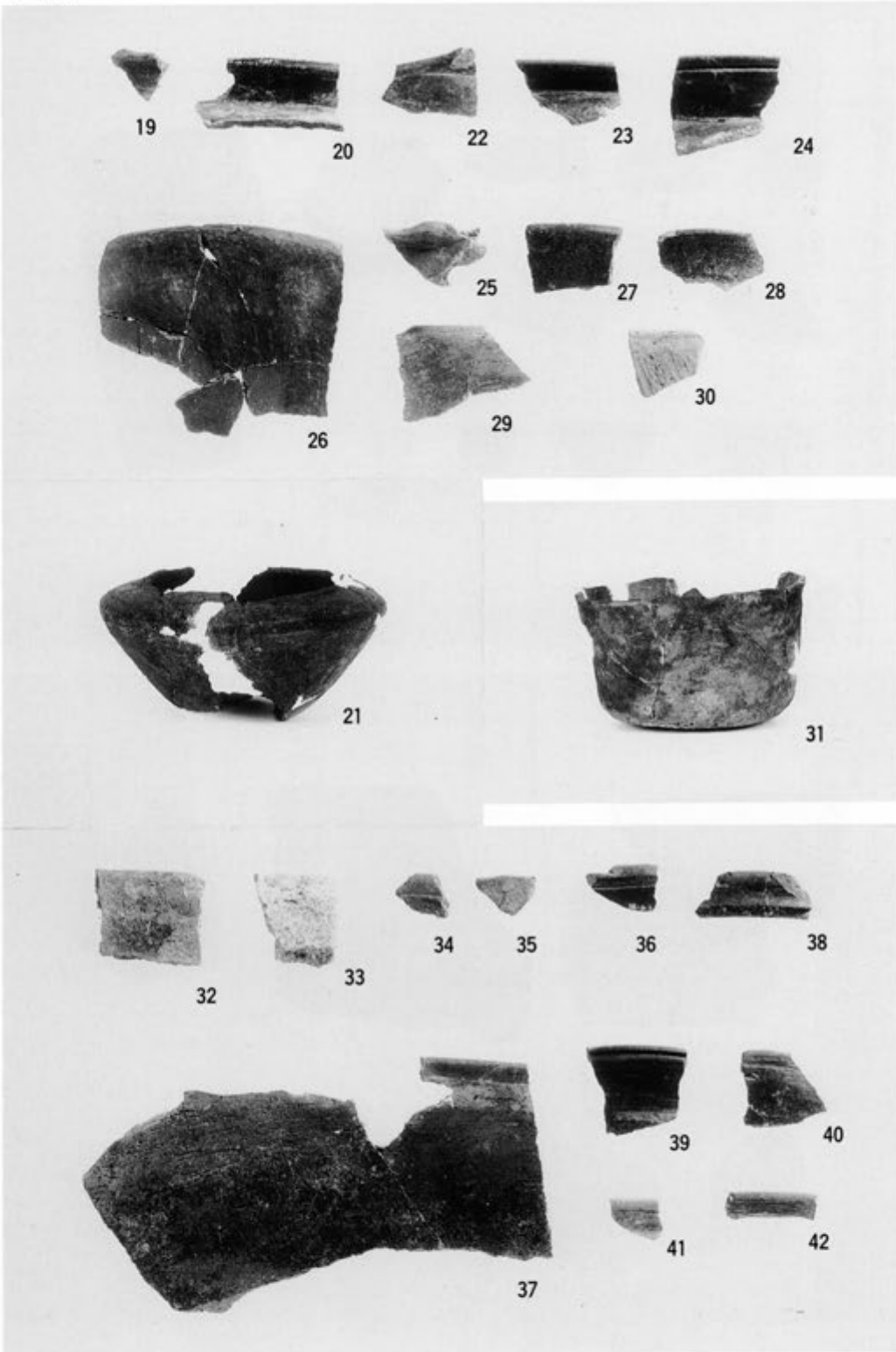


2号 集石

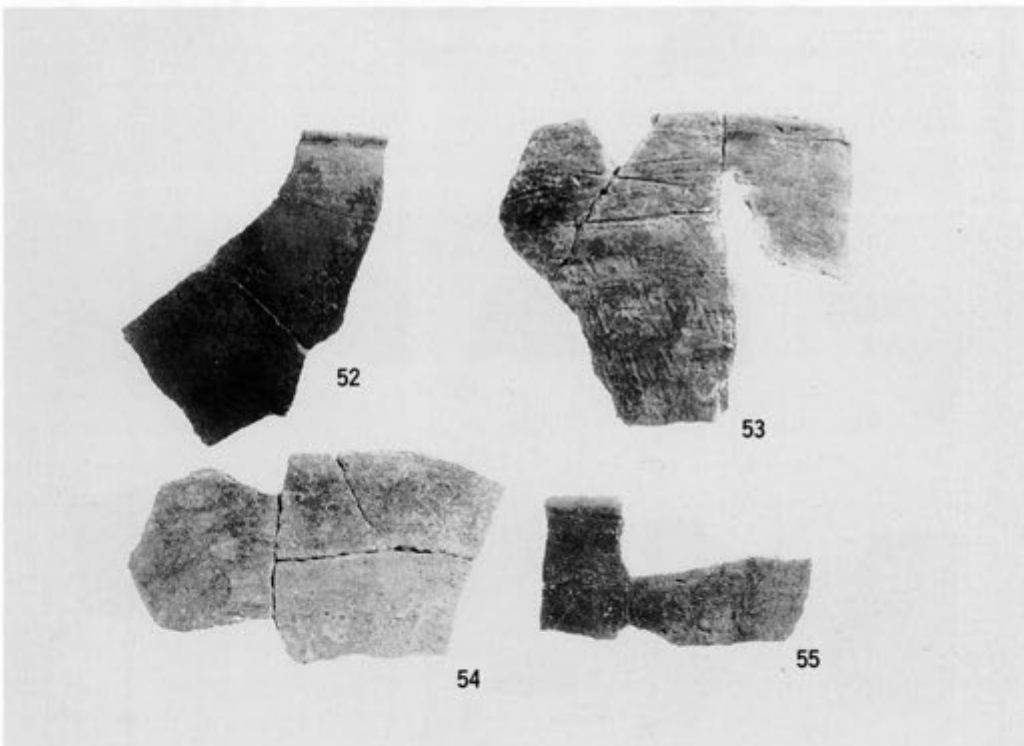
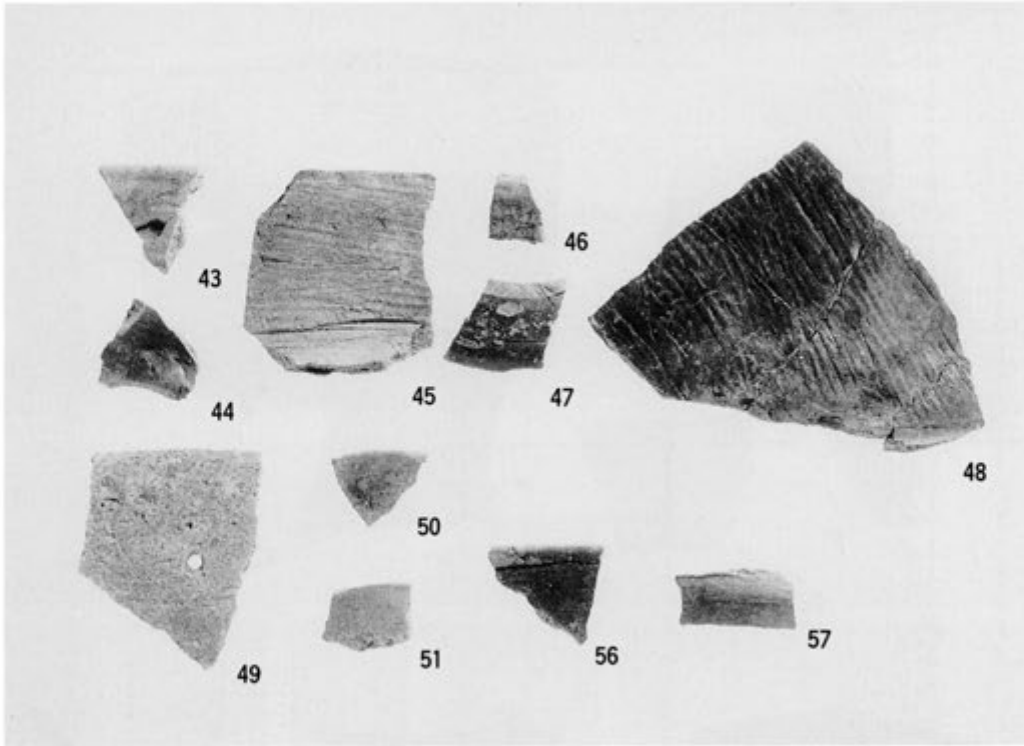
土坑(6)・集石



土坑出土土器(1)

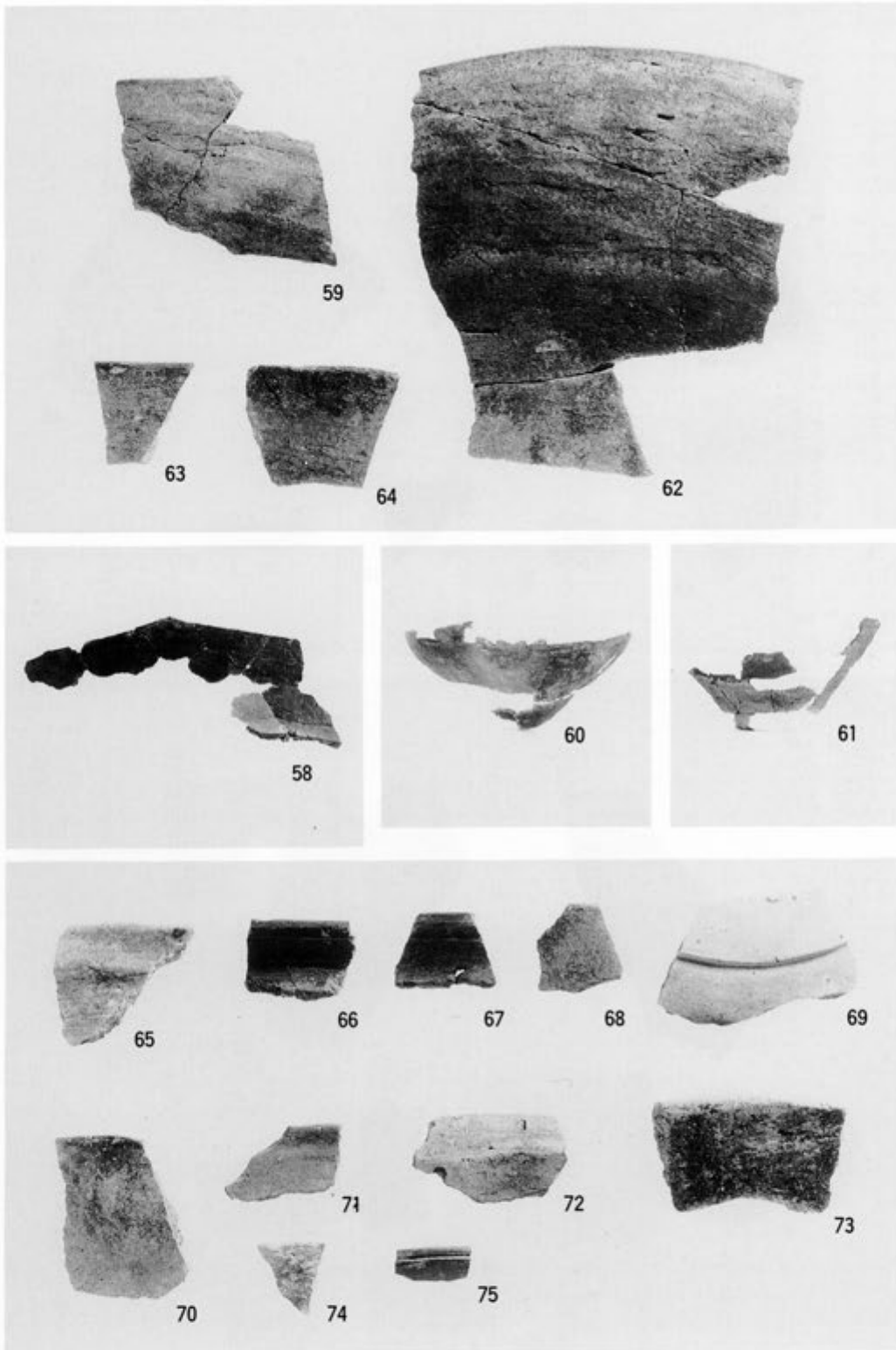


土坑出土土器(2)

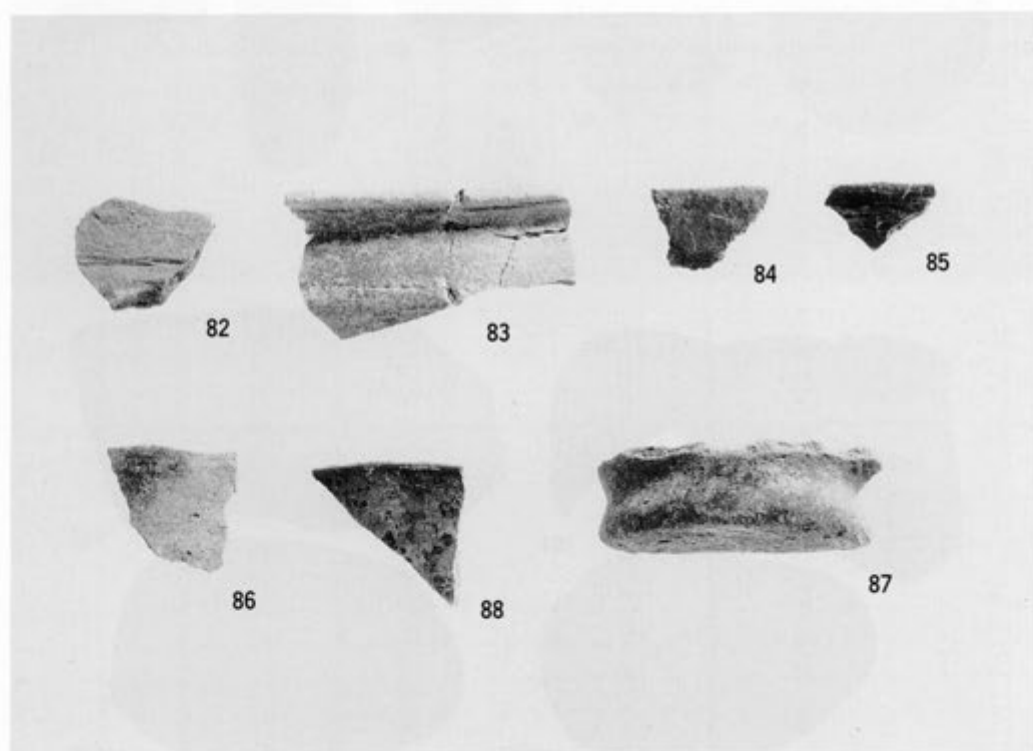
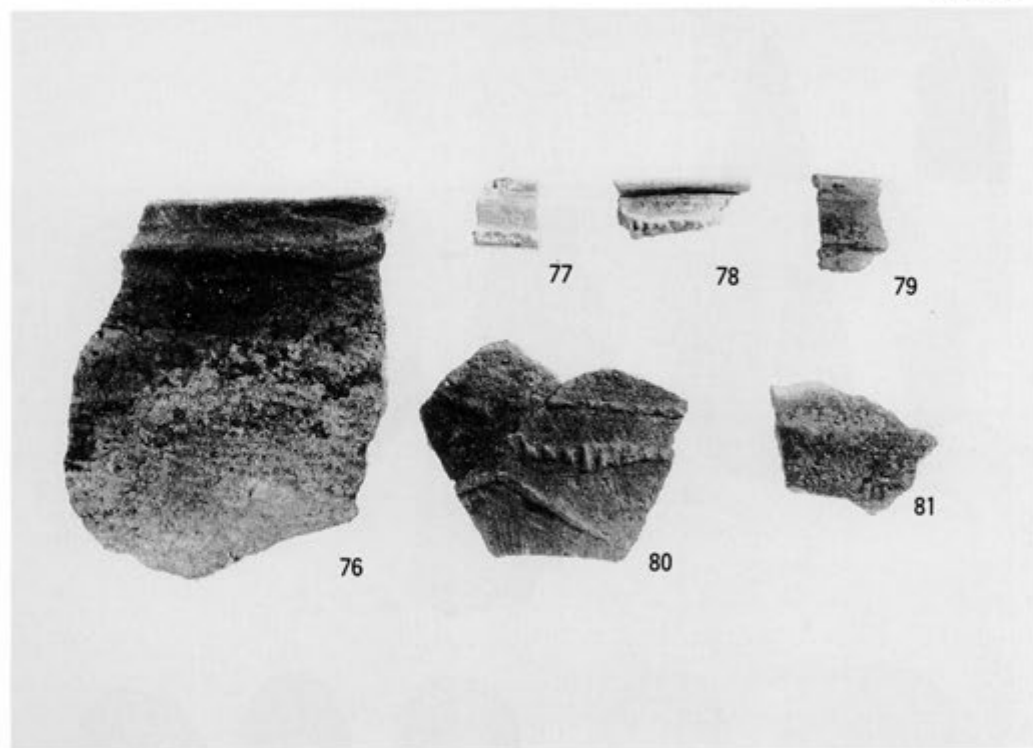


土坑出土土器(3)

图版40

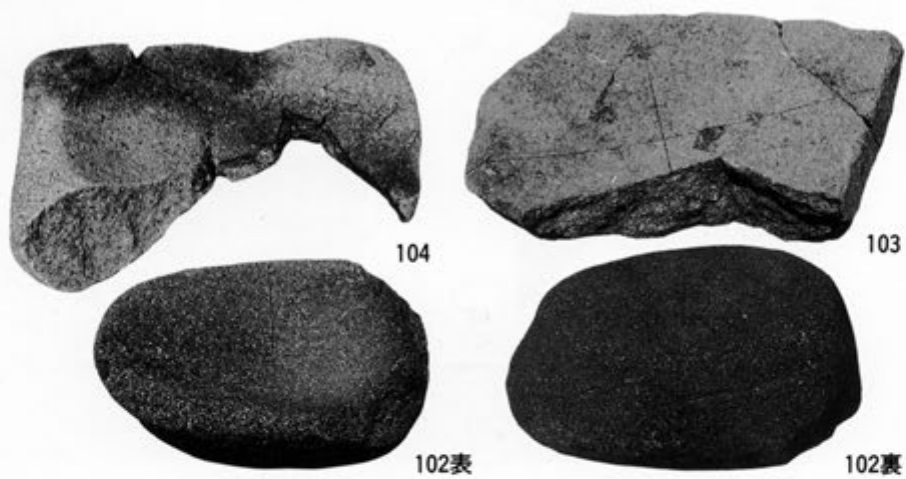
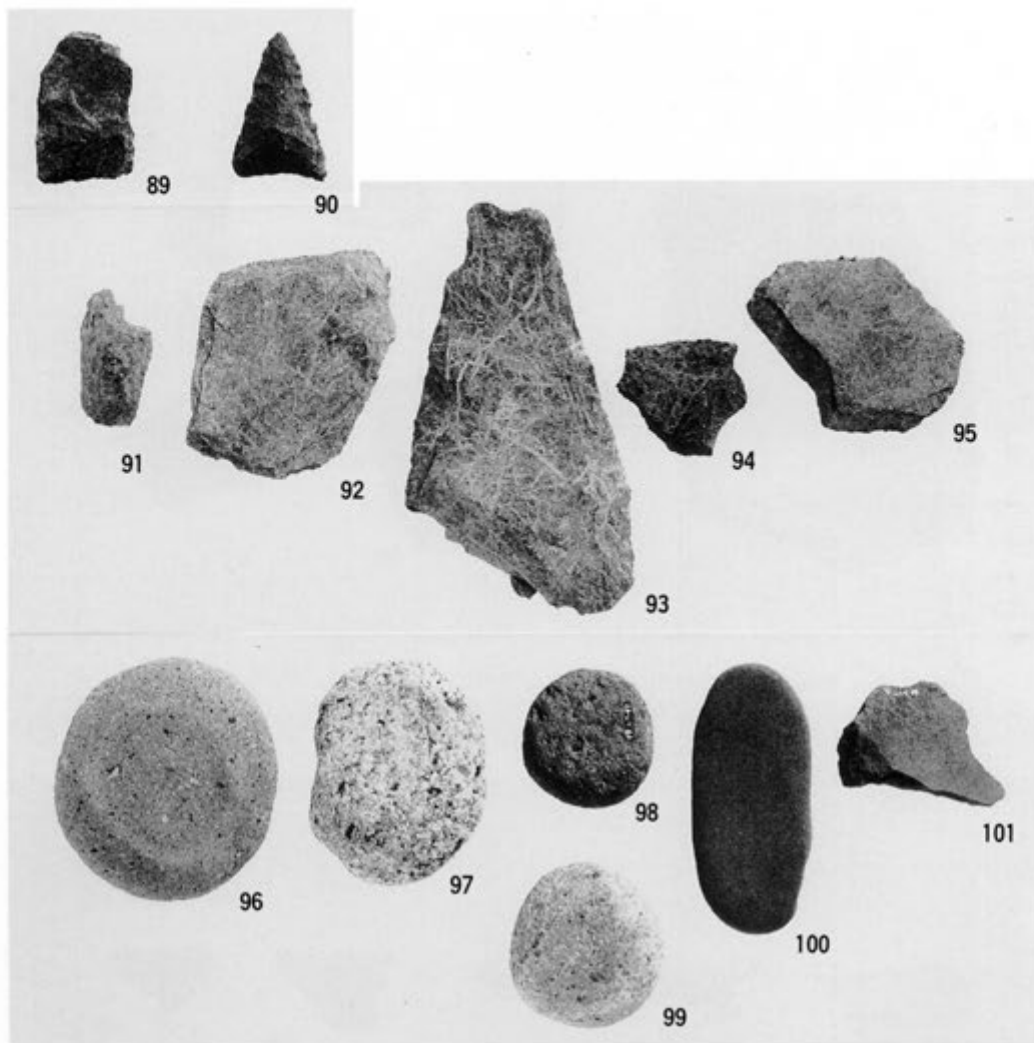


土坑出土土器(4)

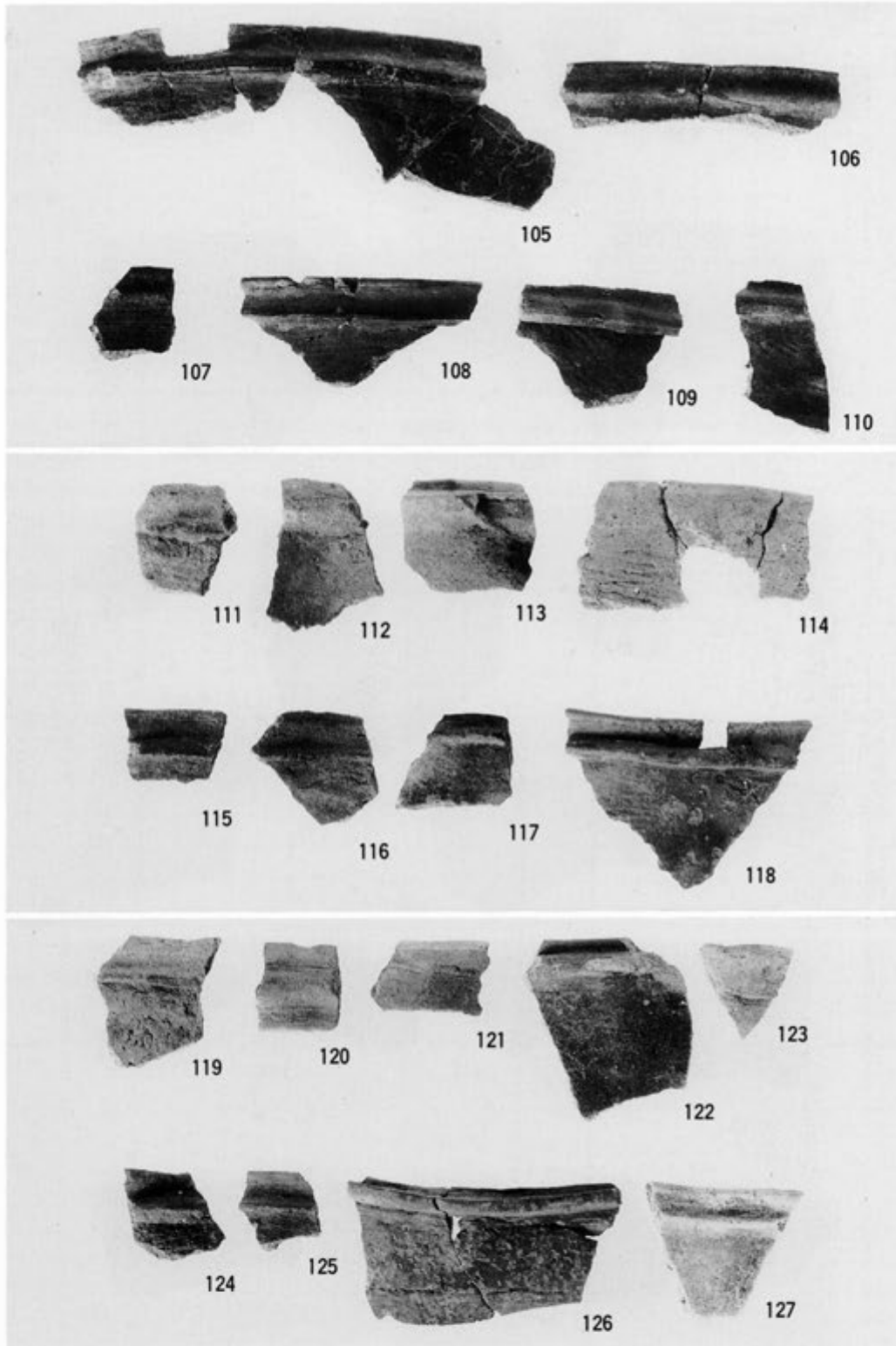


土坑出土土器(5)

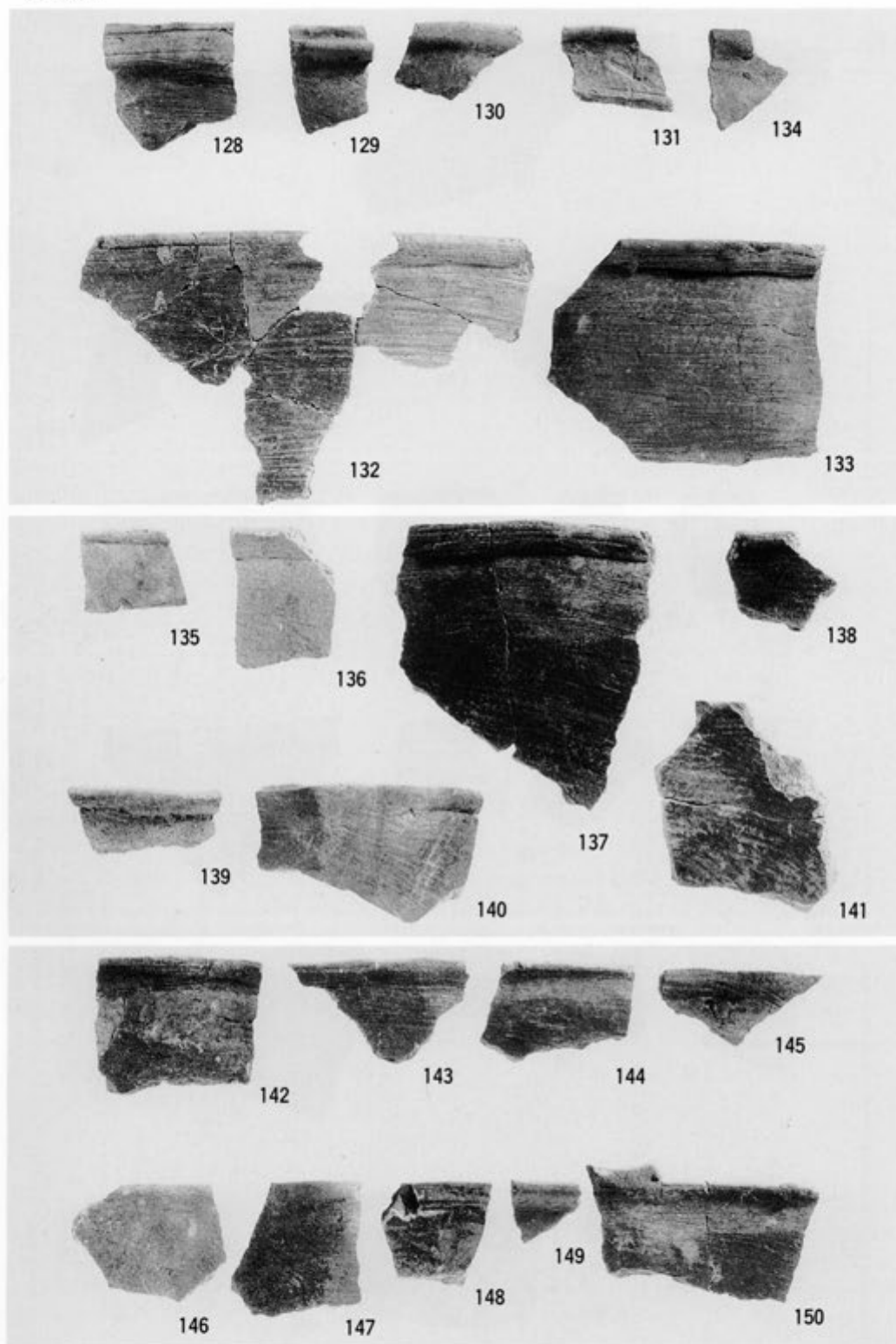
図版42



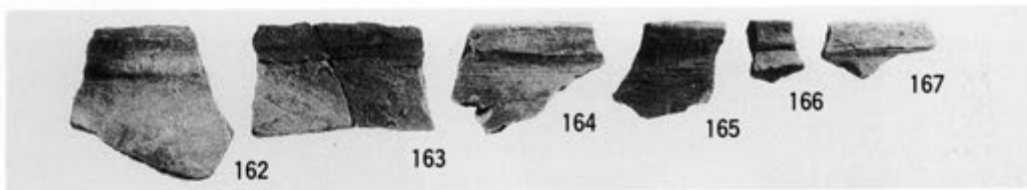
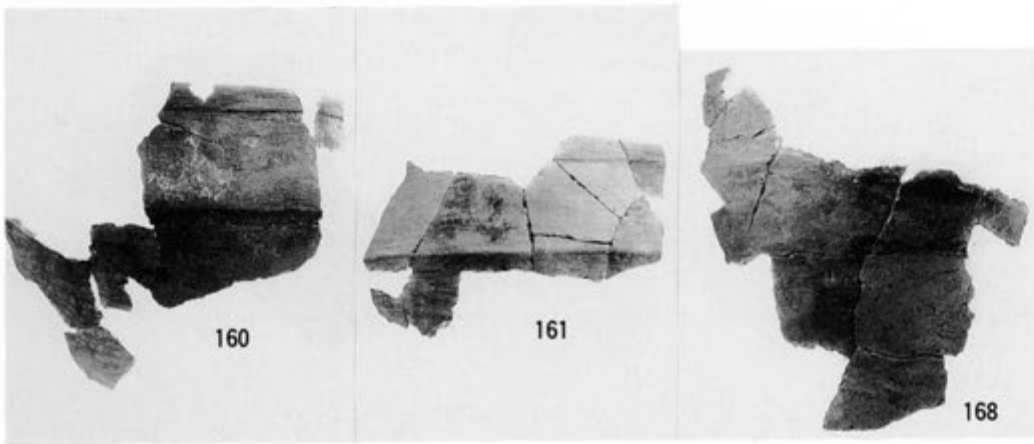
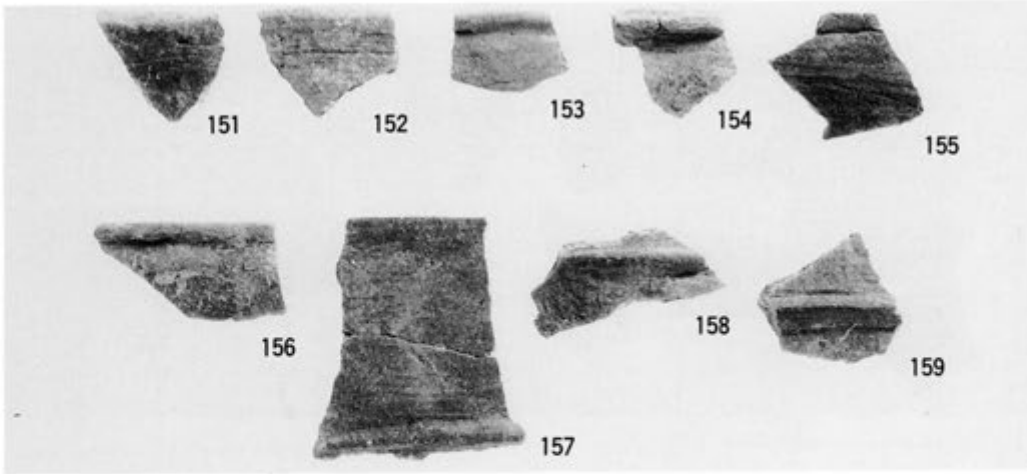
土坑出土石器



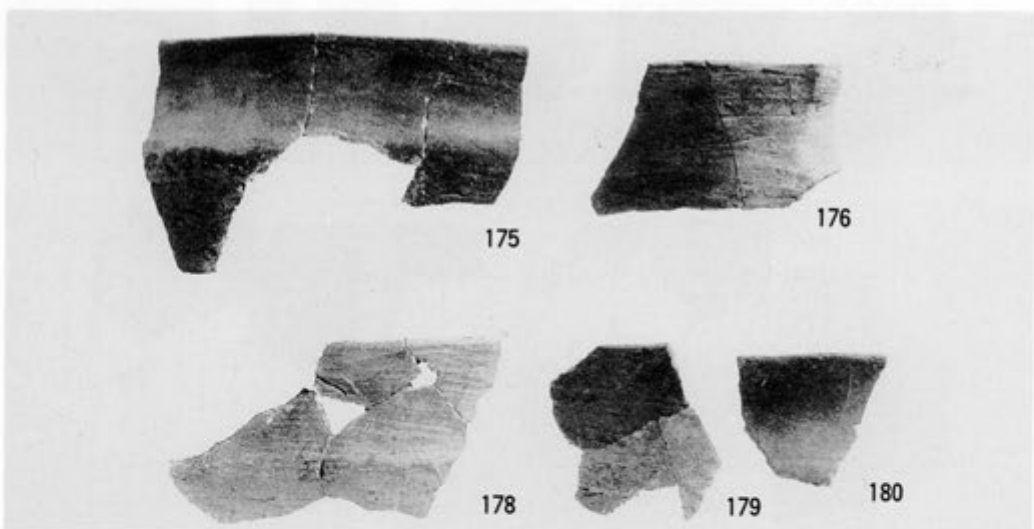
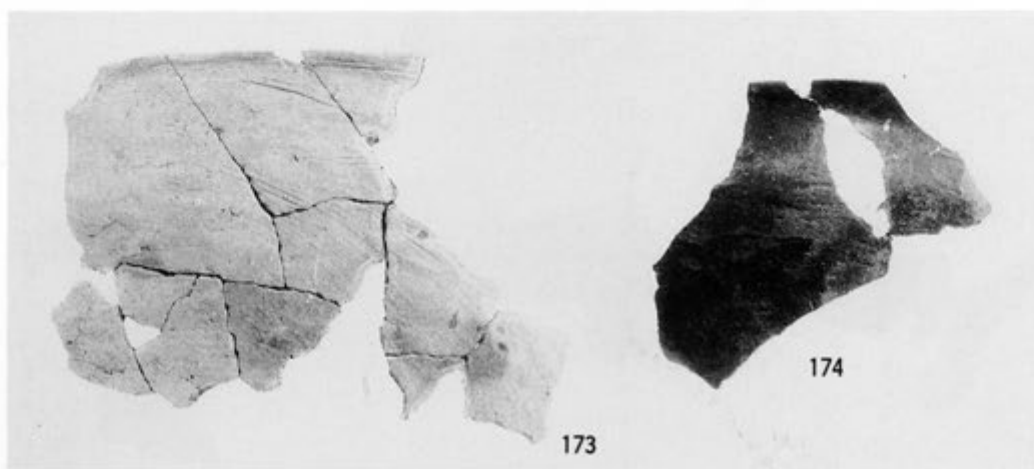
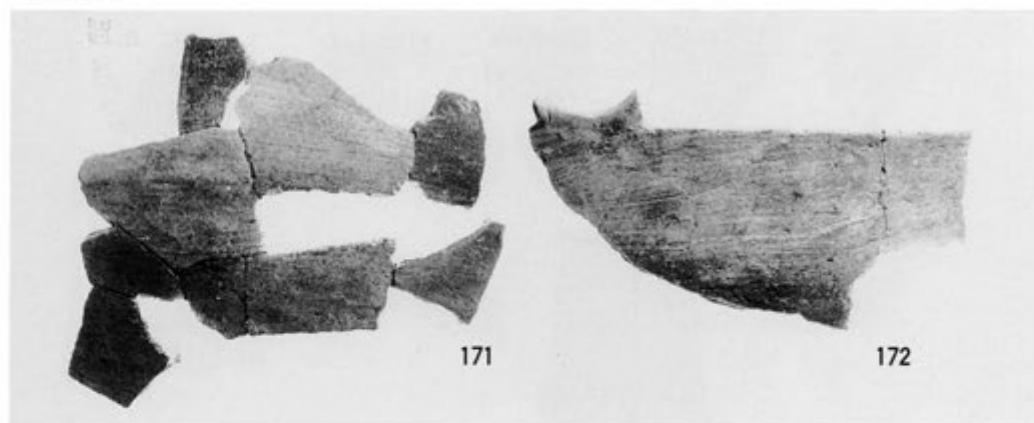
Ⅲ層出土土器(1)



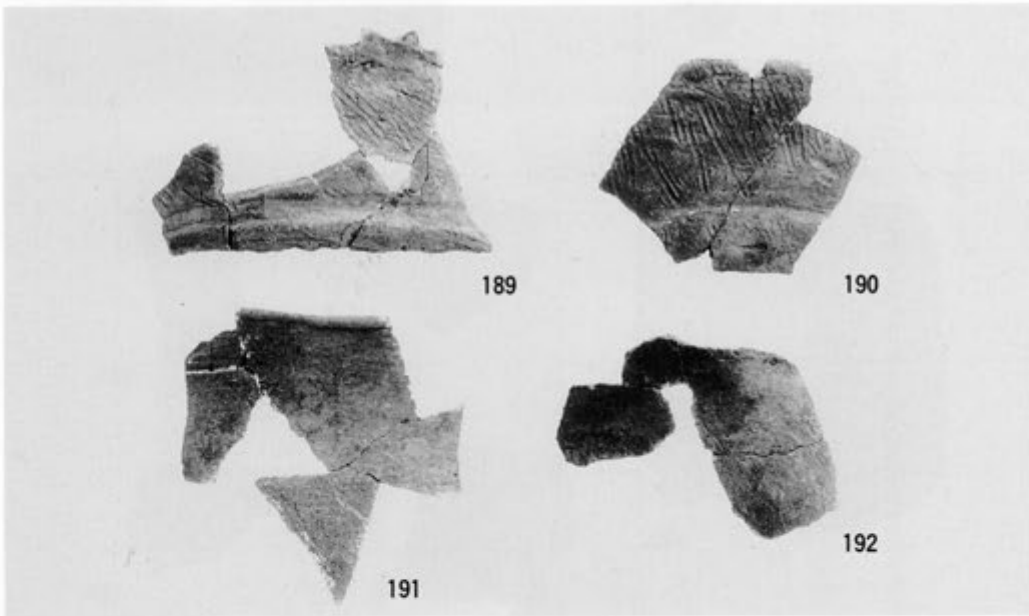
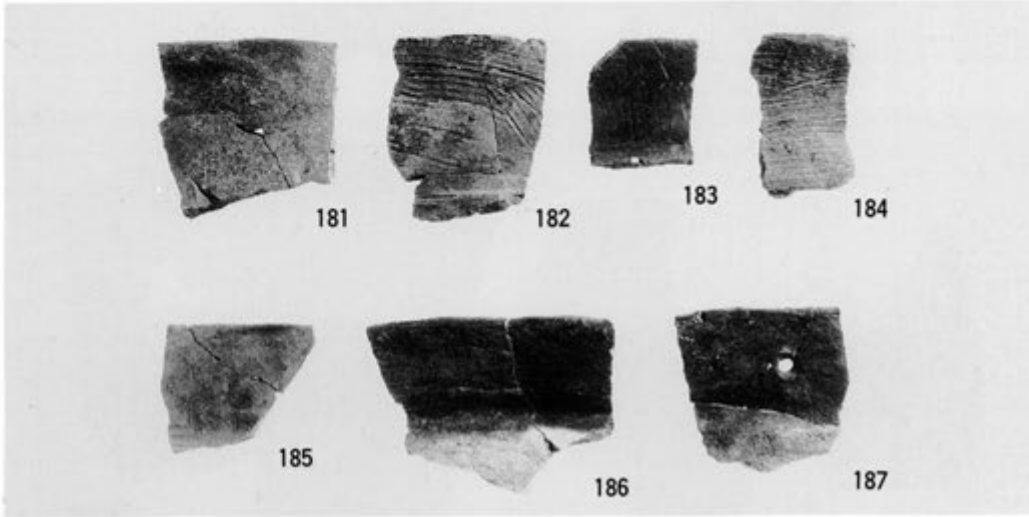
Ⅲ層出土土器(2)



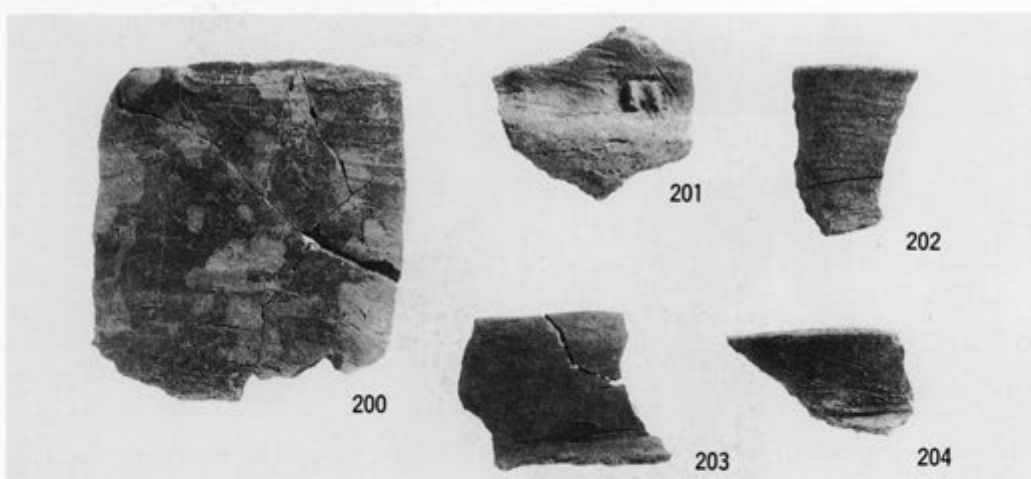
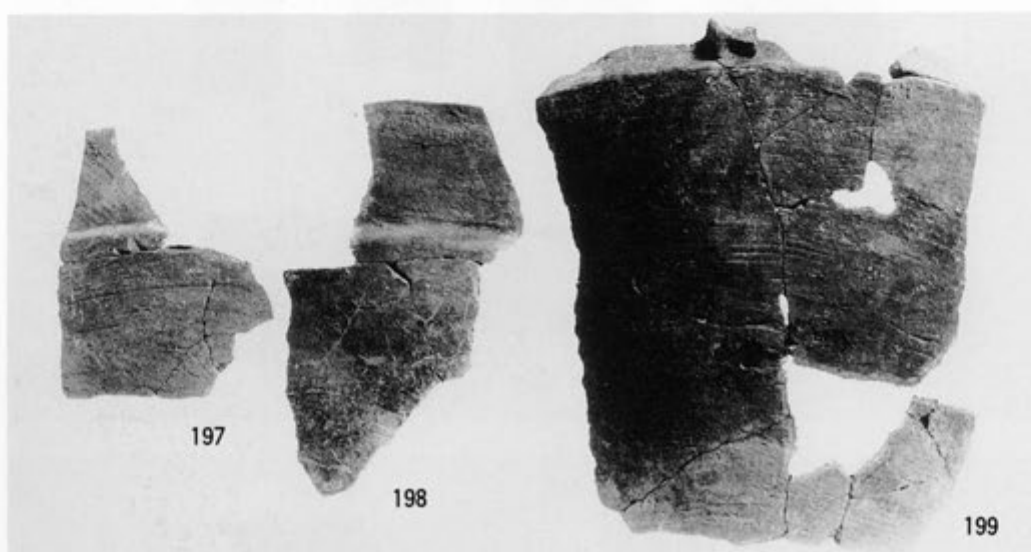
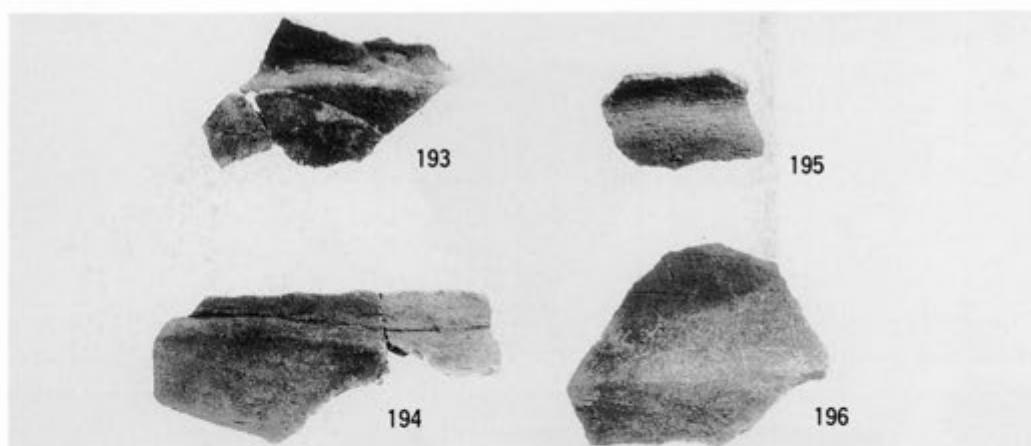
Ⅲ層出土土器(3)



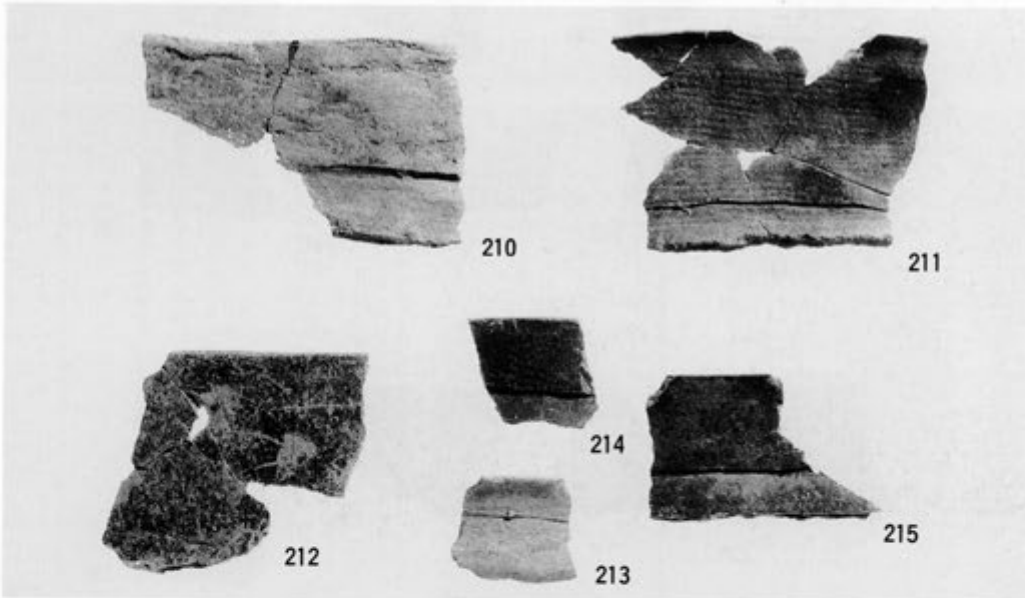
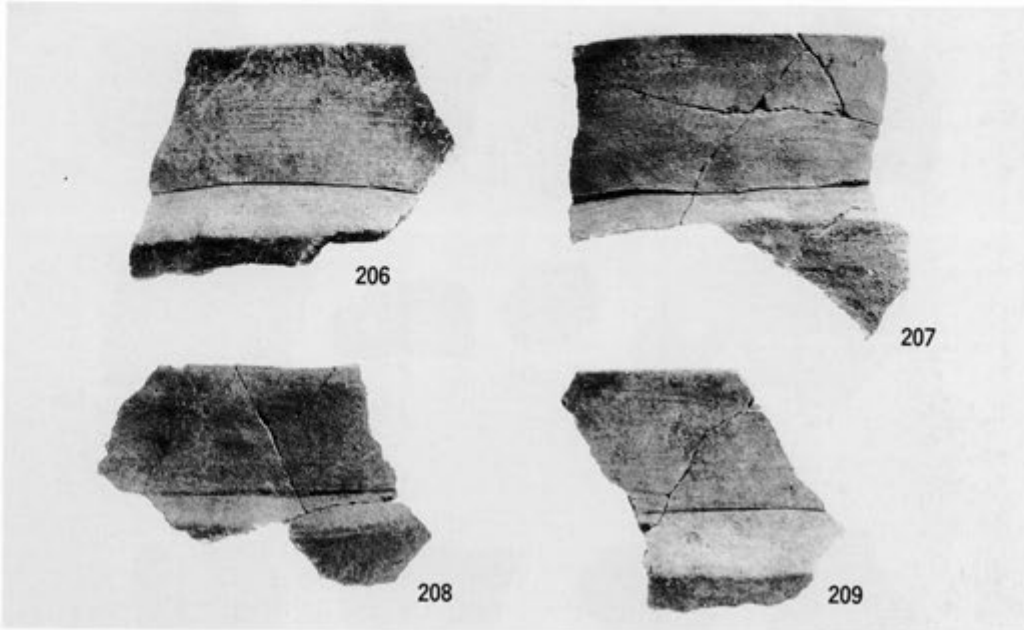
Ⅲ層出土土器(4)



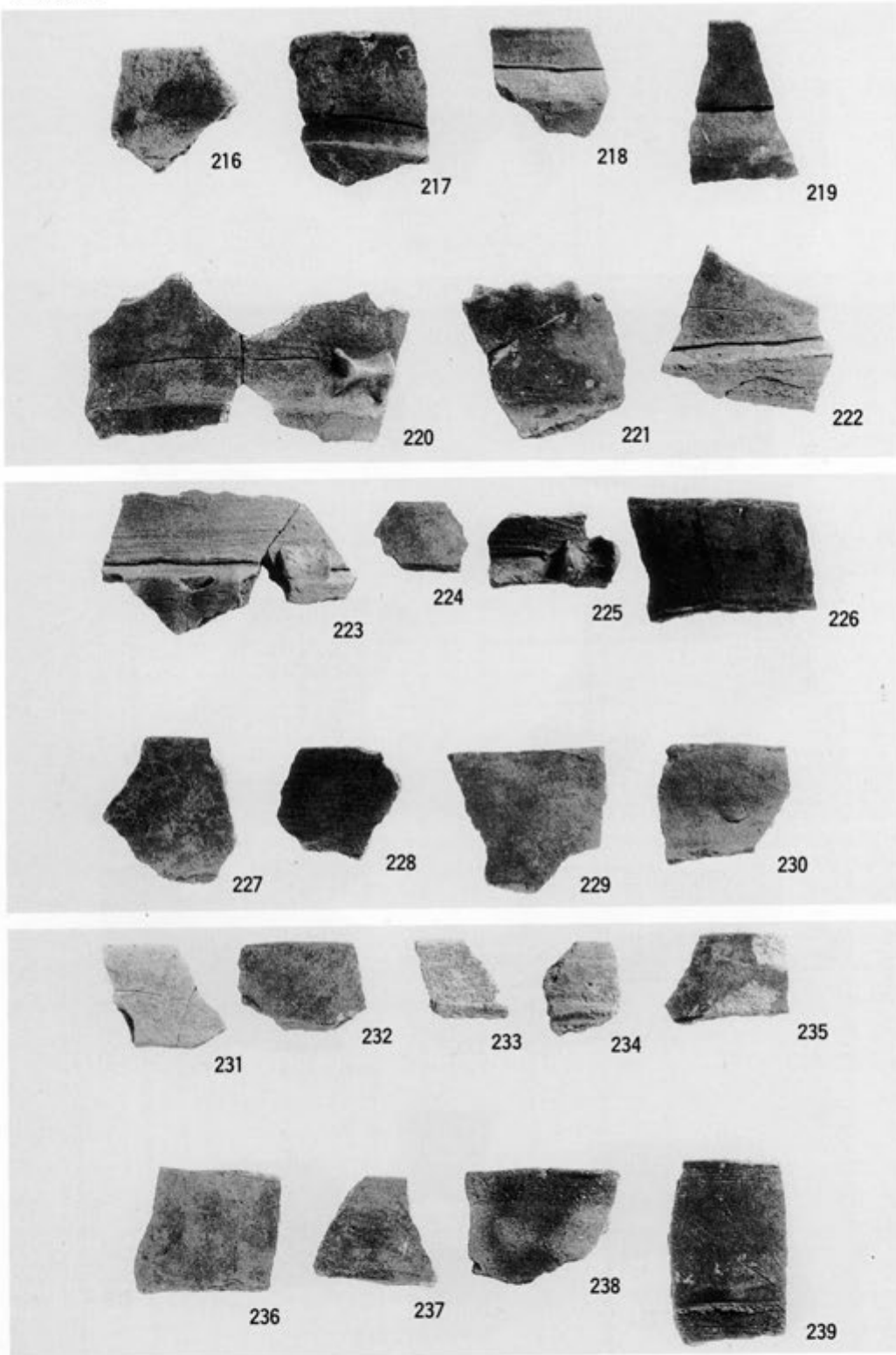
Ⅲ層出土土器(5)



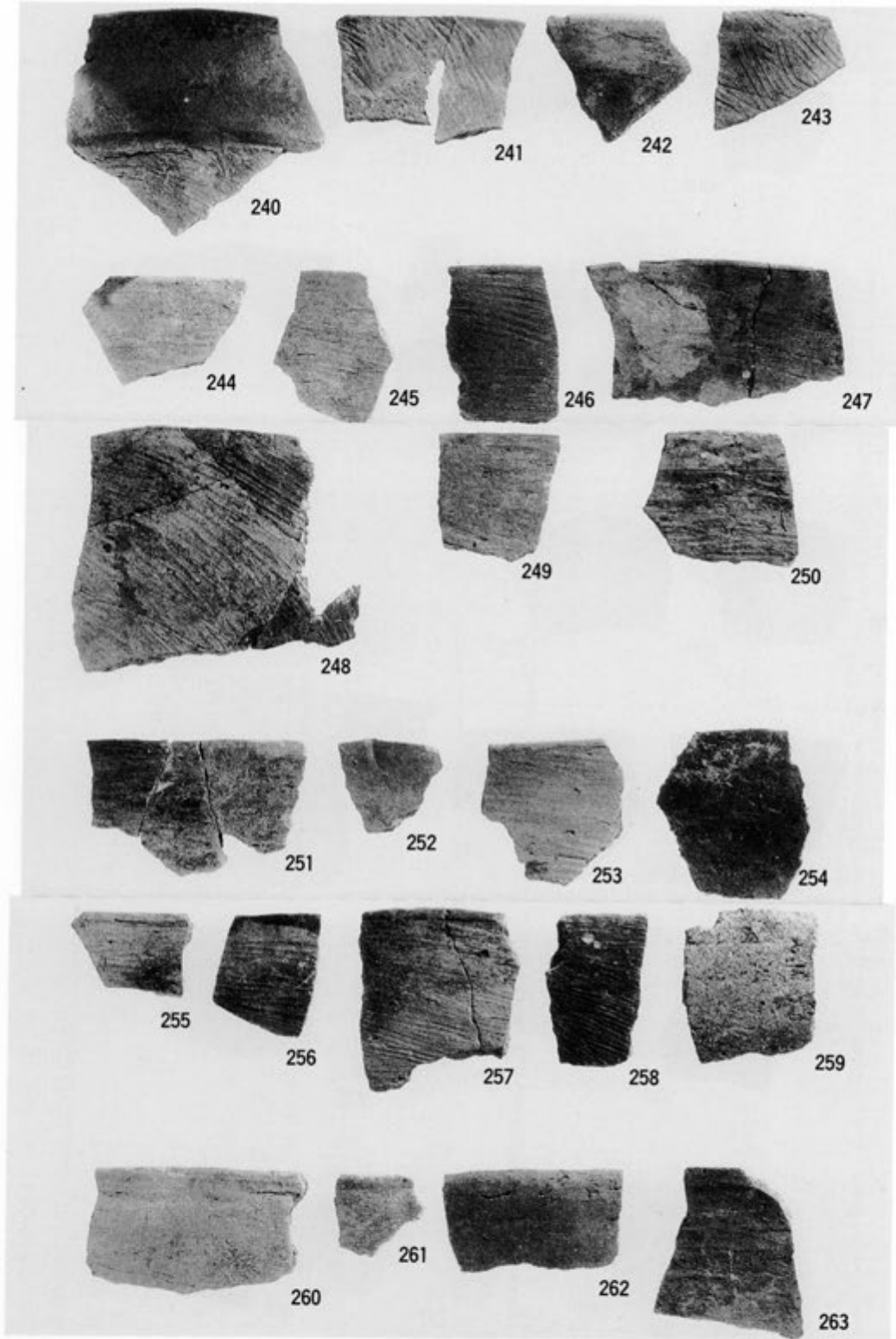
Ⅲ層出土土器(6)



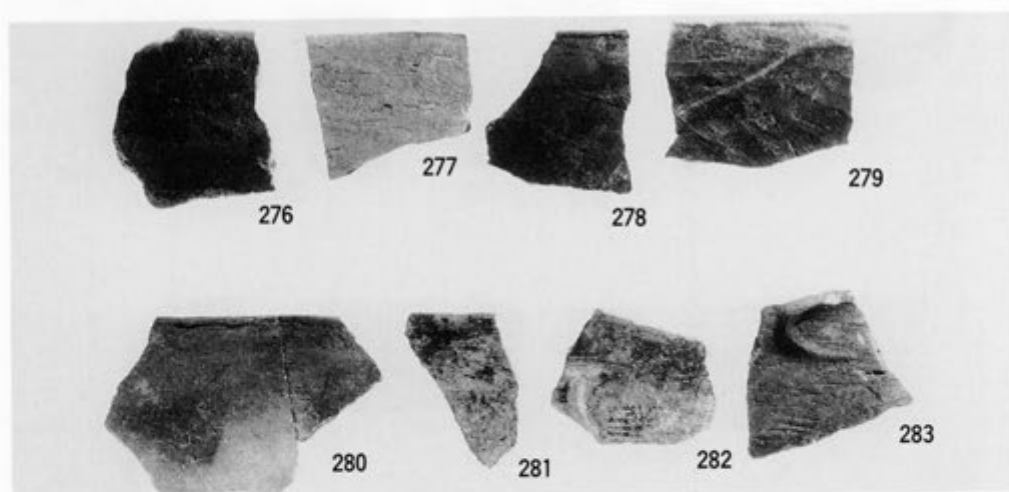
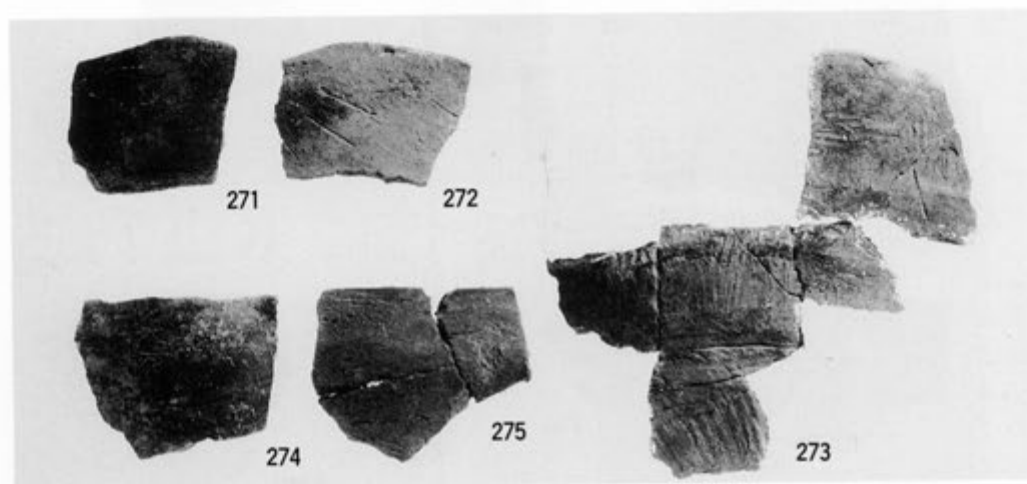
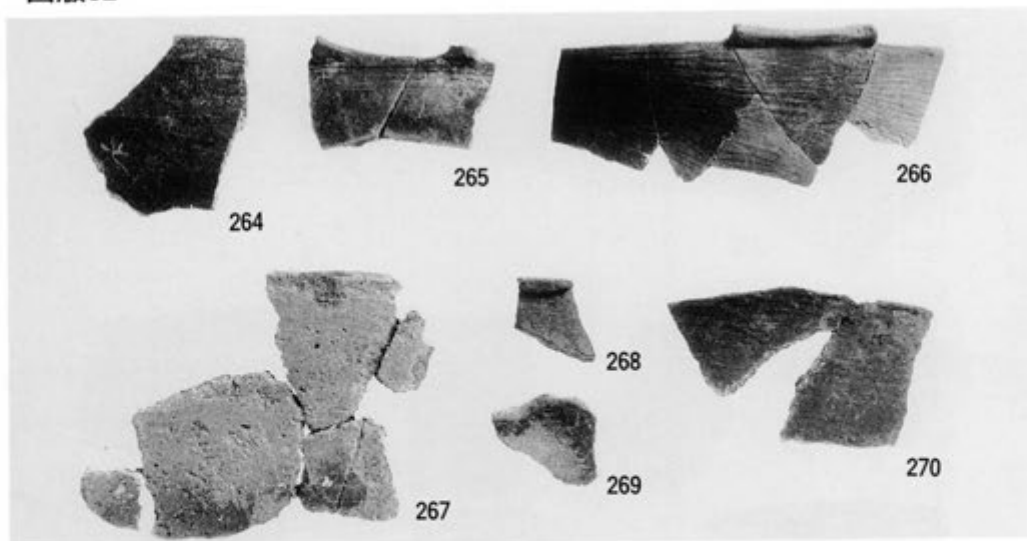
Ⅲ層出土土器(7)



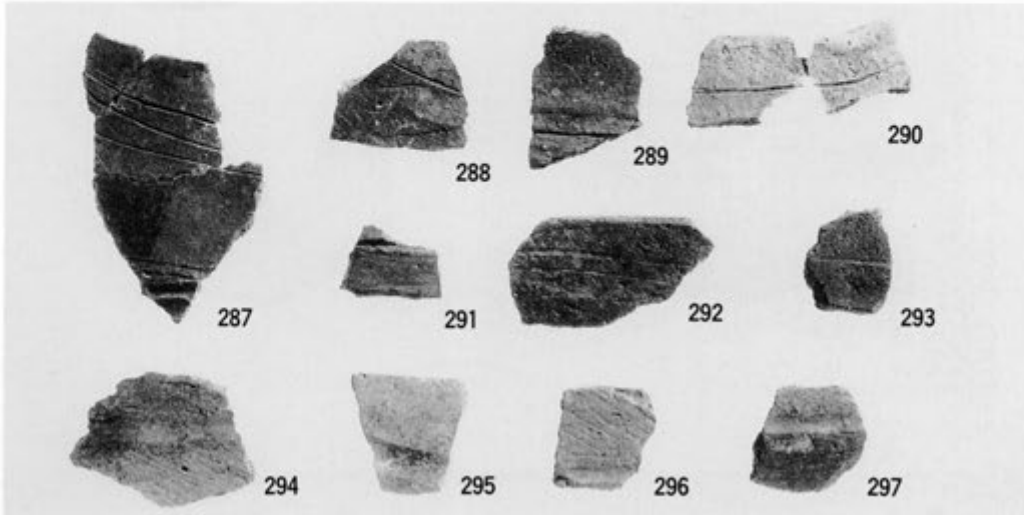
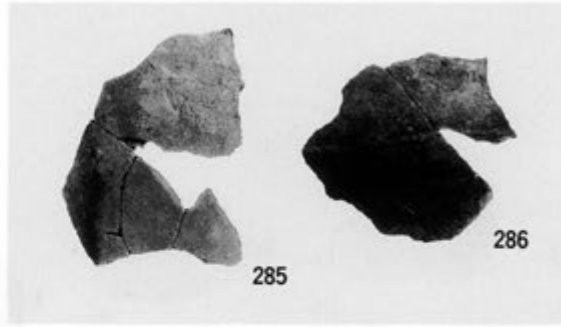
Ⅲ層出土土器(8)



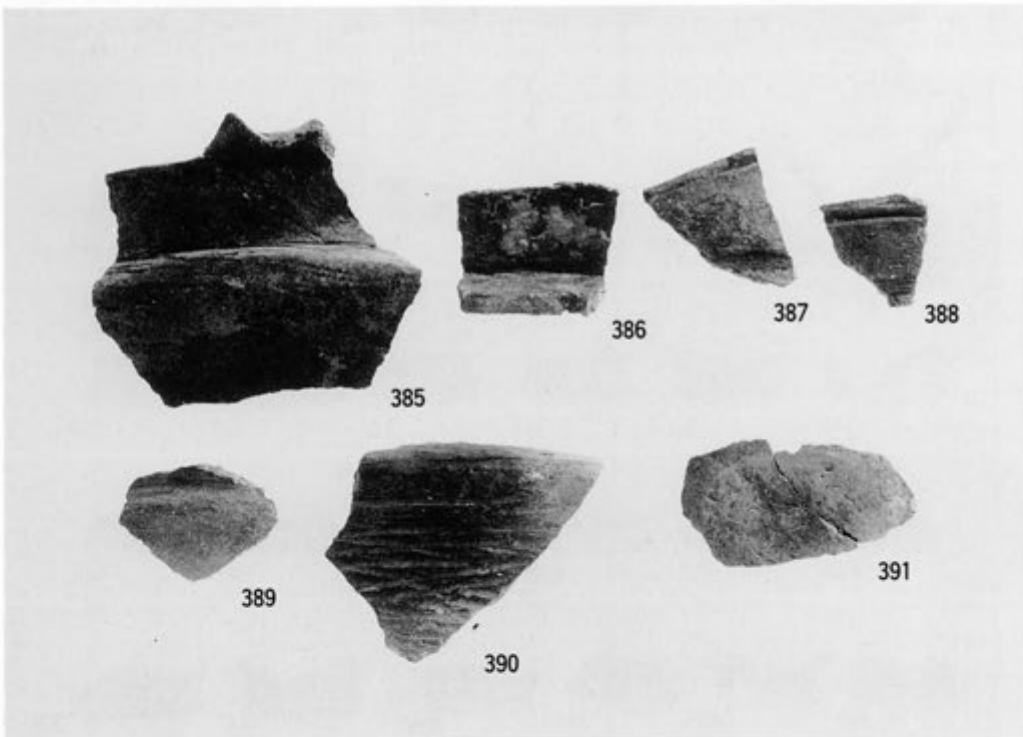
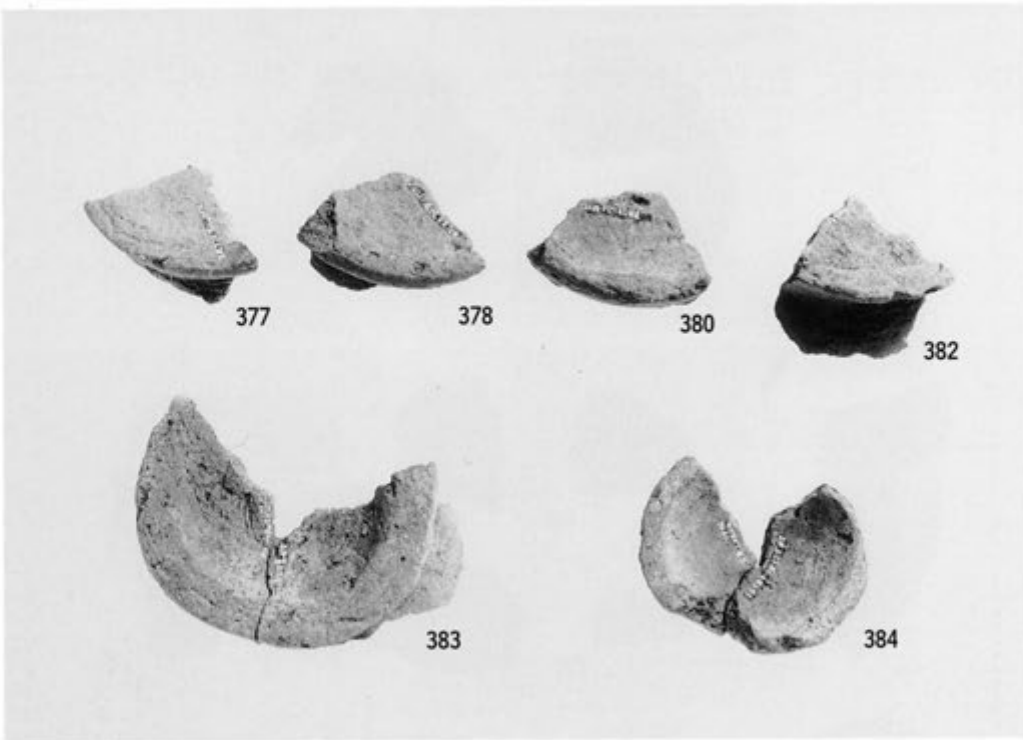
Ⅲ層出土土器(9)



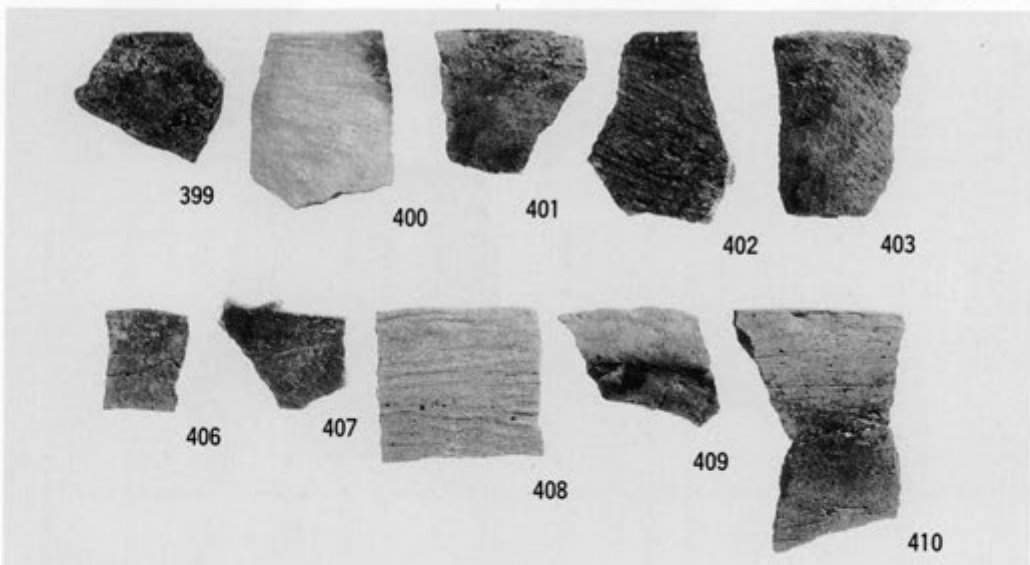
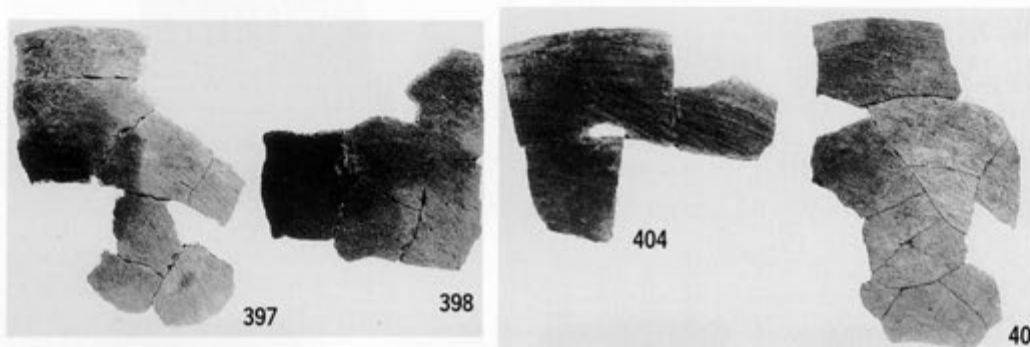
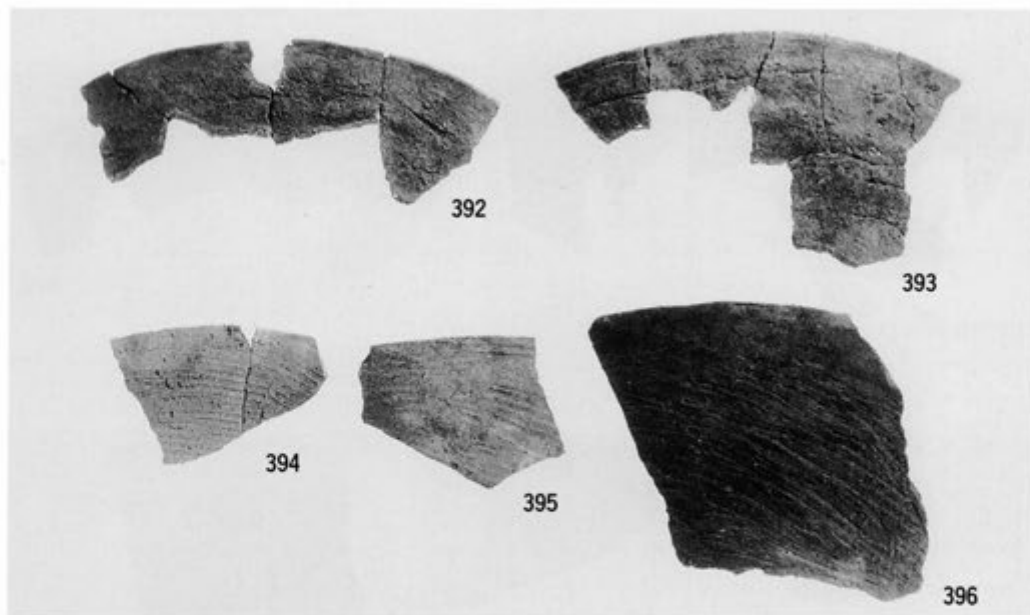
Ⅲ層出土土器(10)



Ⅲ層出土土器(11)

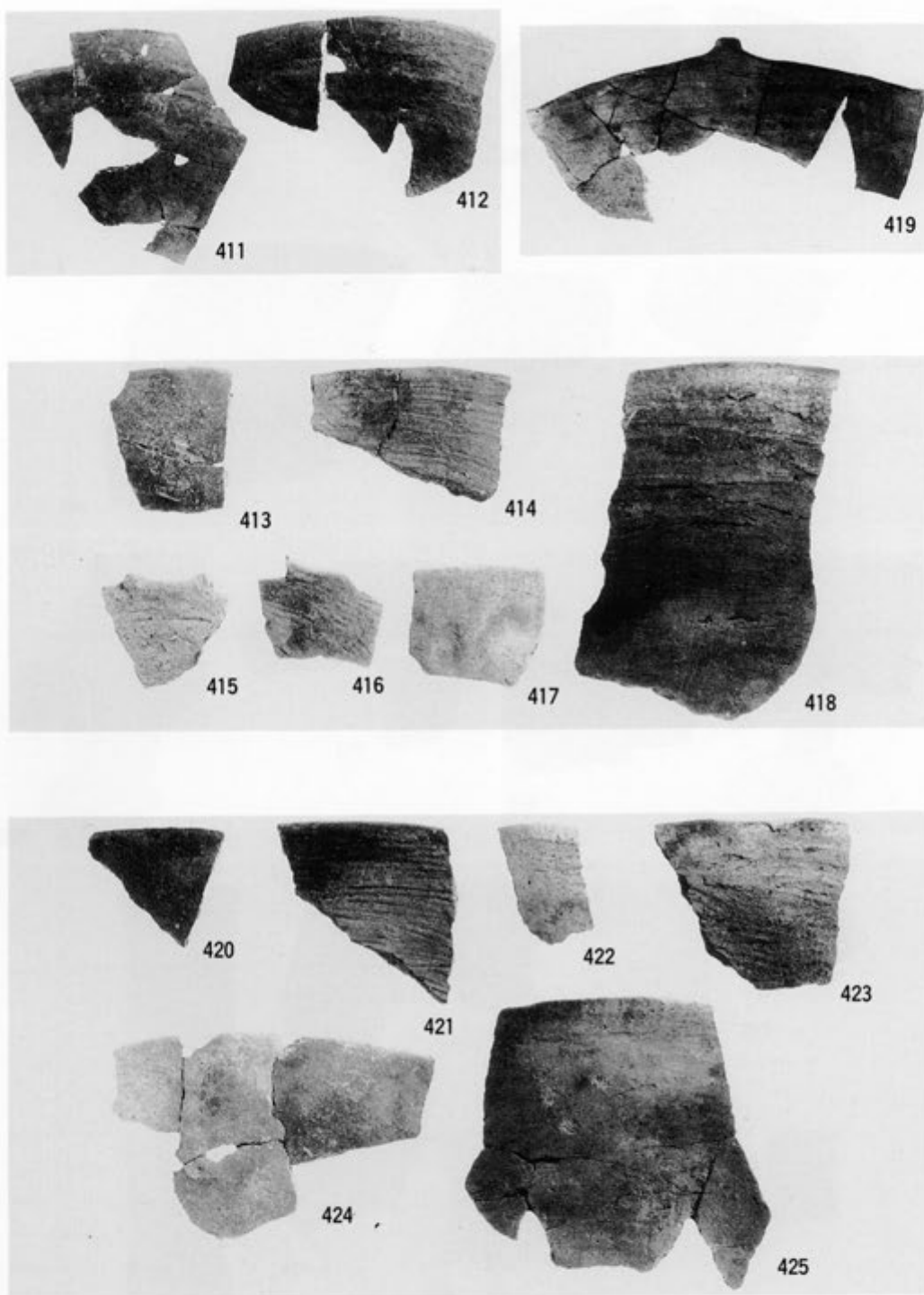


Ⅲ層出土土器(12)

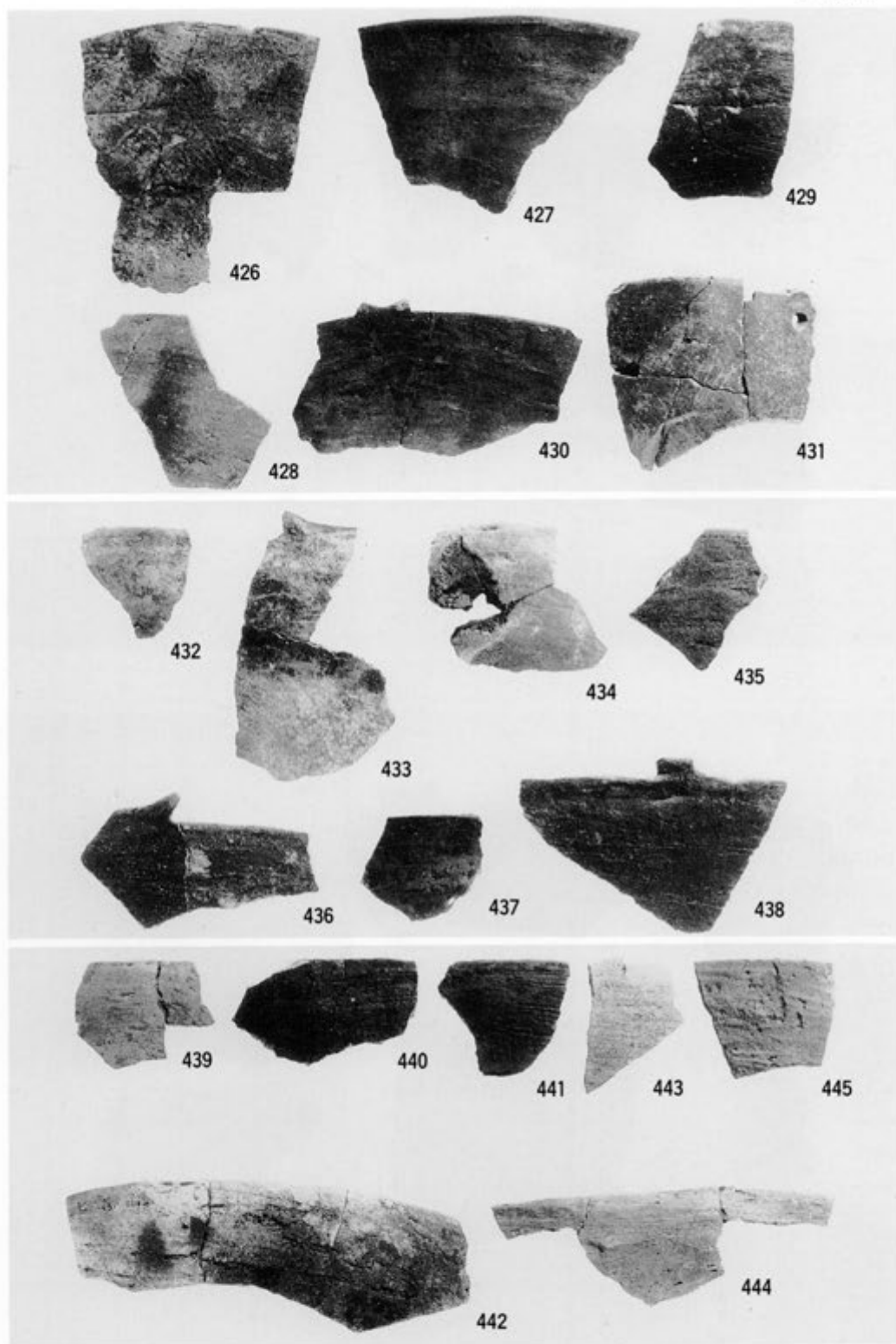


Ⅲ層出土土器(13)

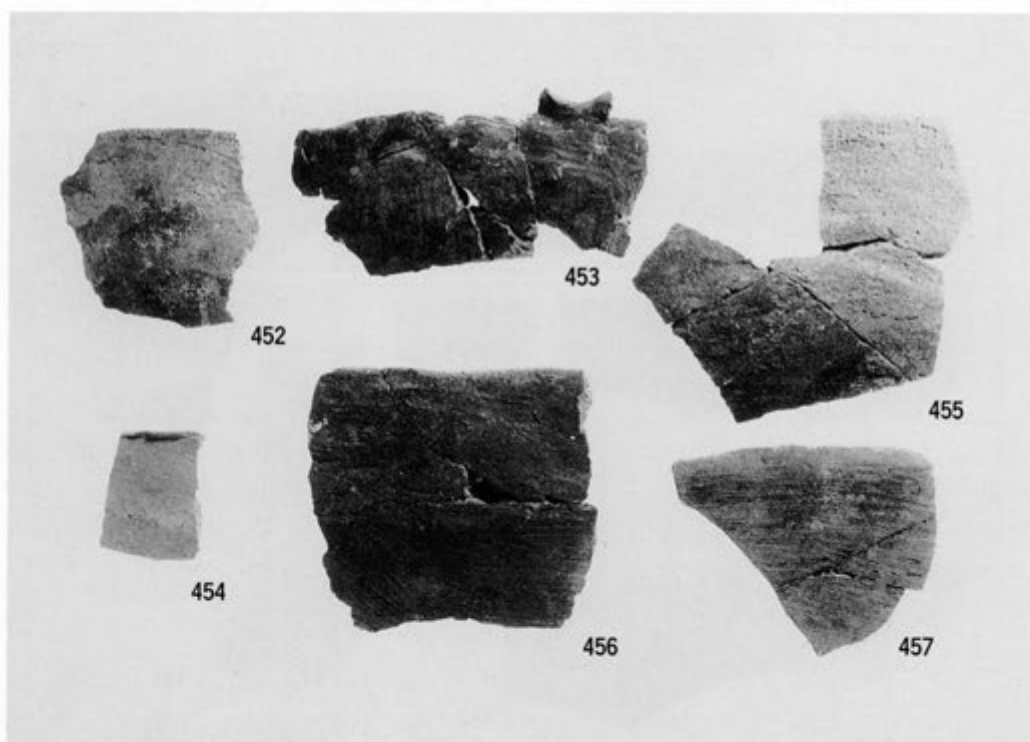
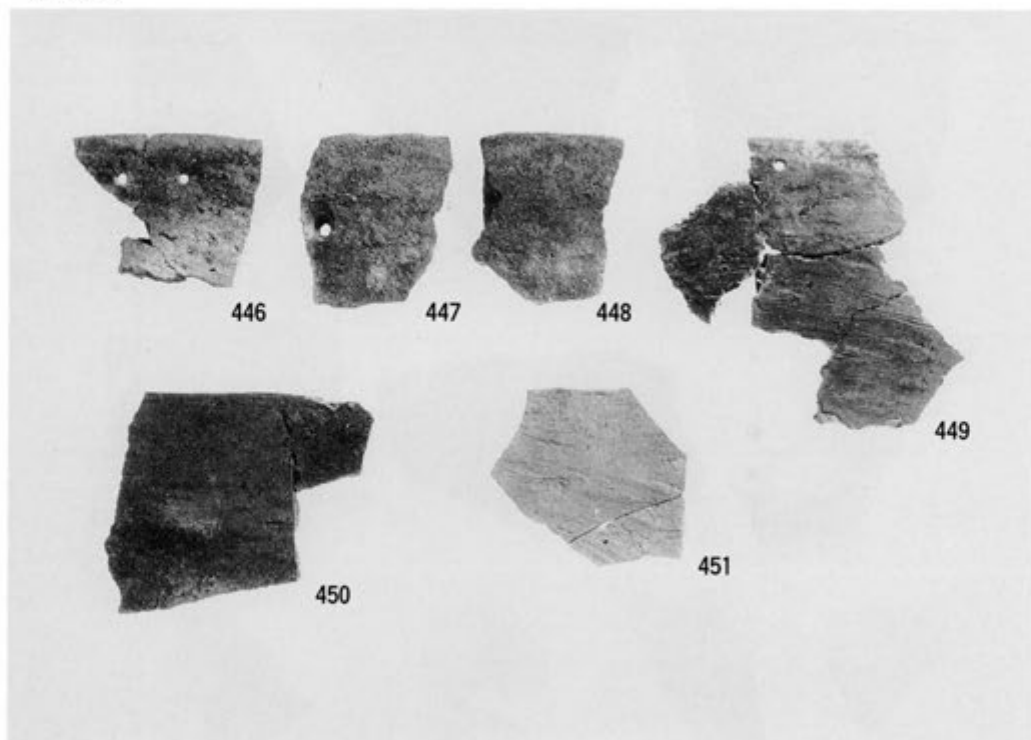
图版56



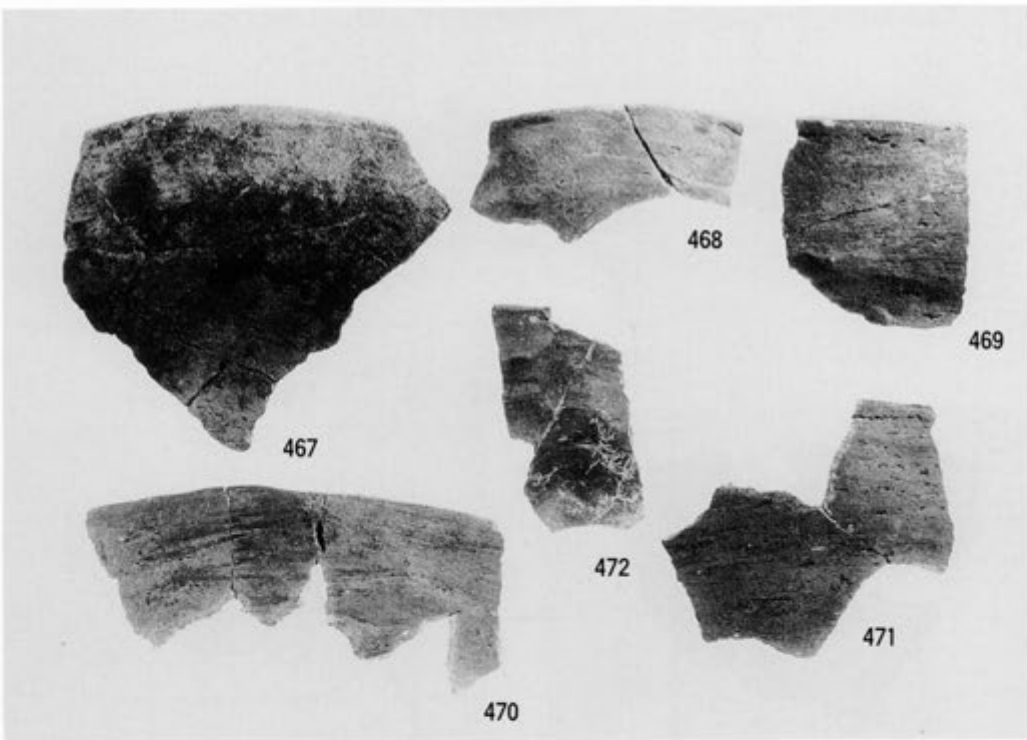
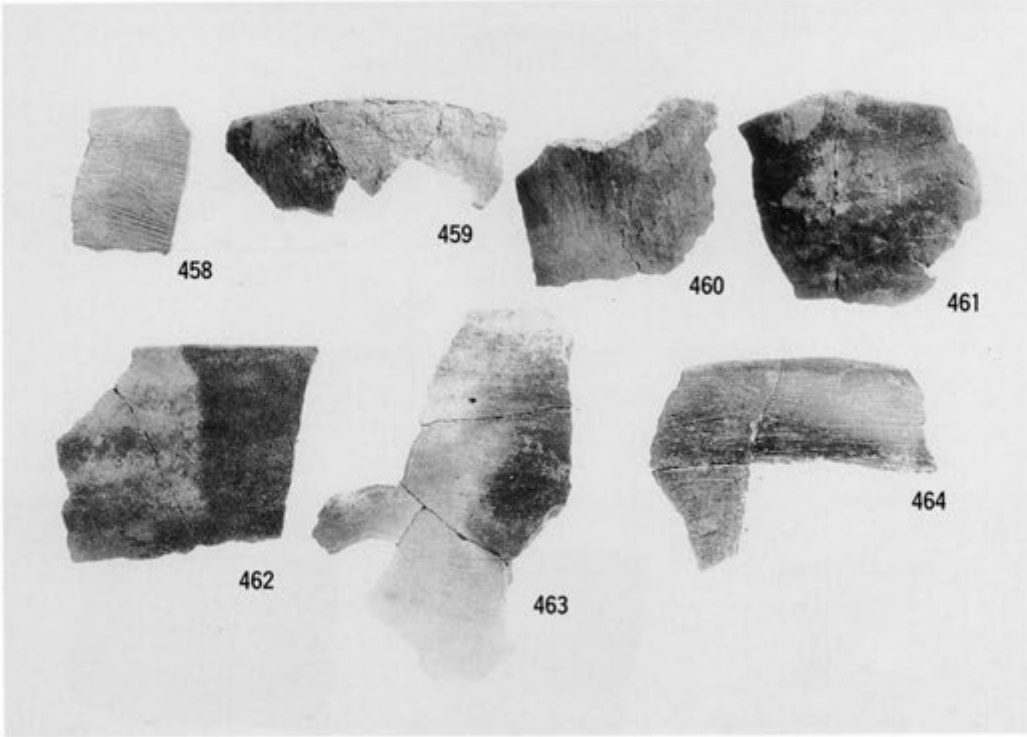
Ⅲ層出土土器(14)



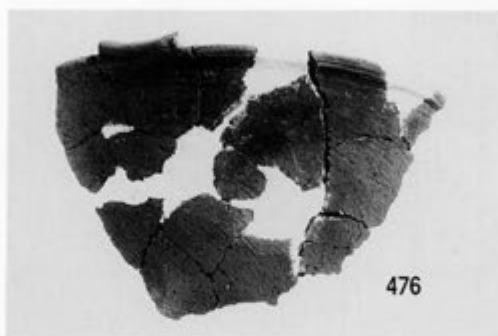
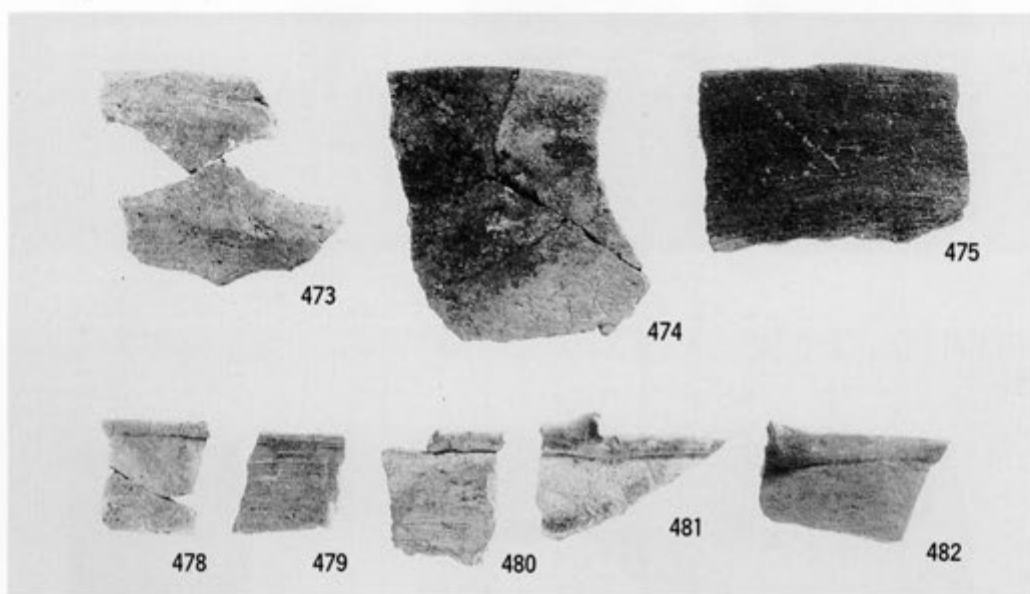
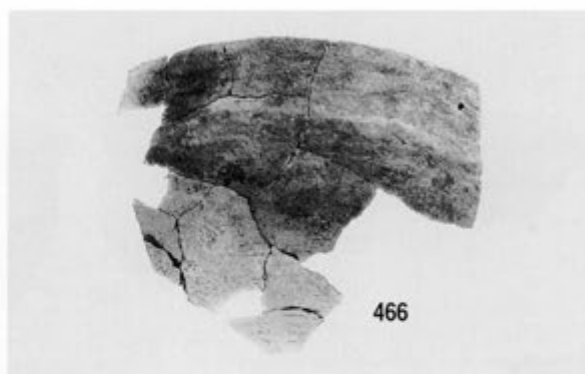
Ⅲ層出土土器(15)



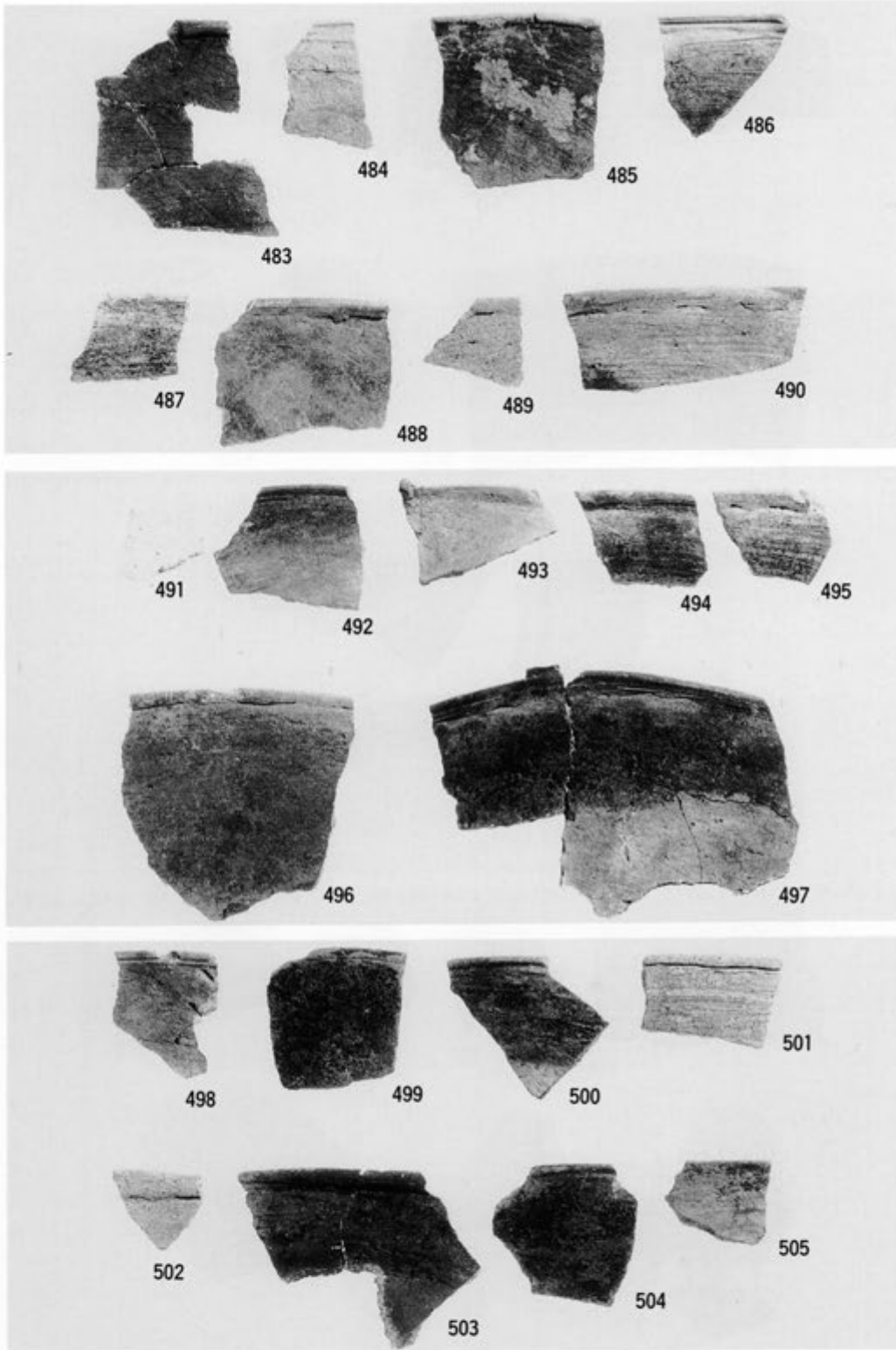
Ⅲ層出土土器(16)



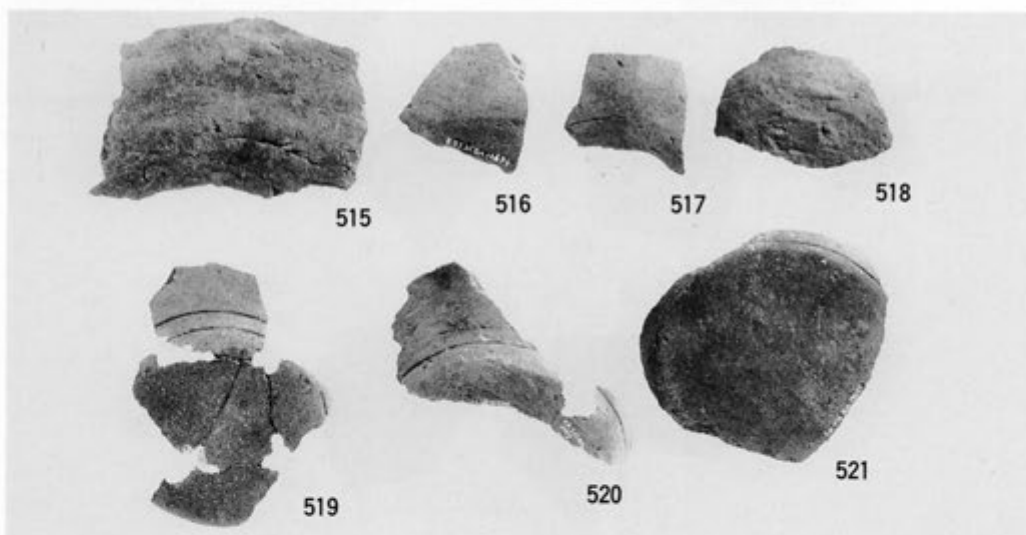
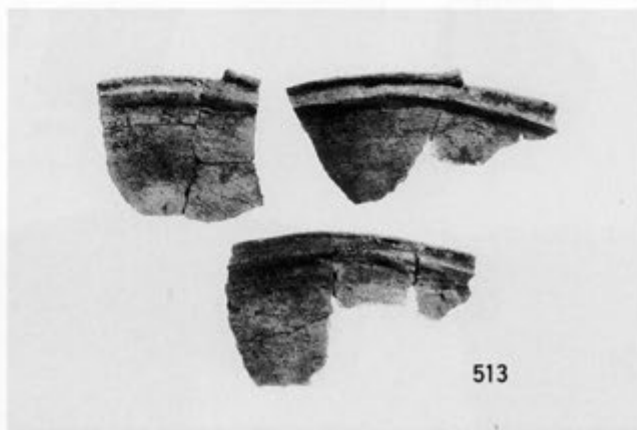
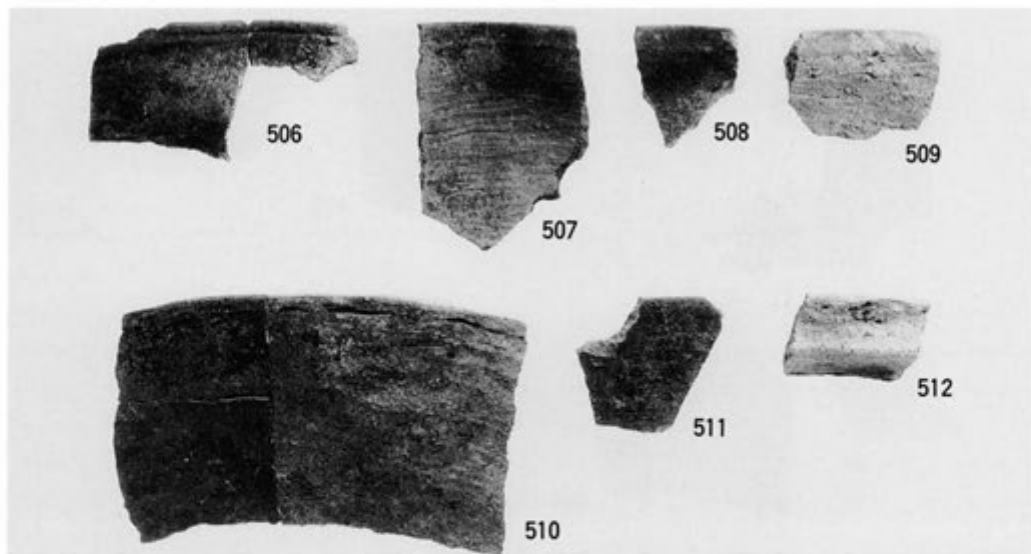
Ⅲ層出土土器(17)



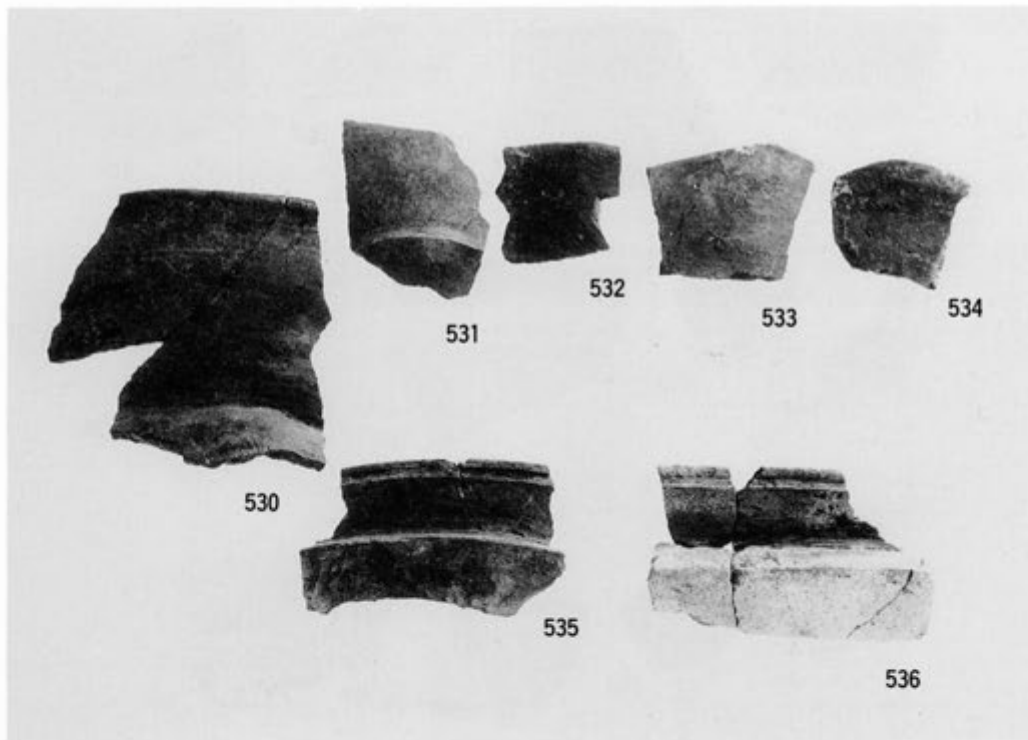
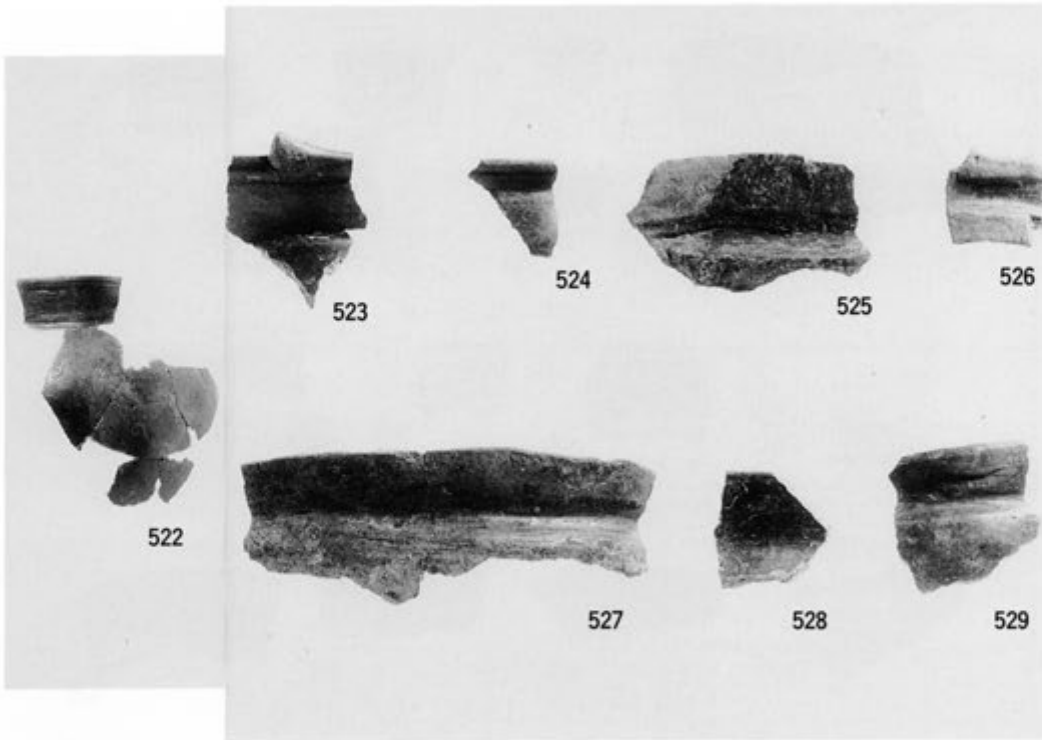
Ⅲ層出土土器(18)



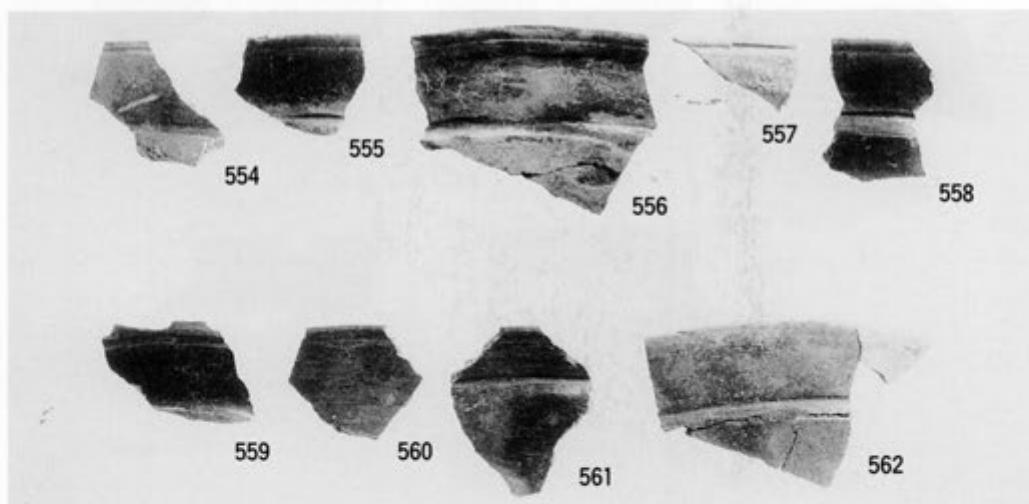
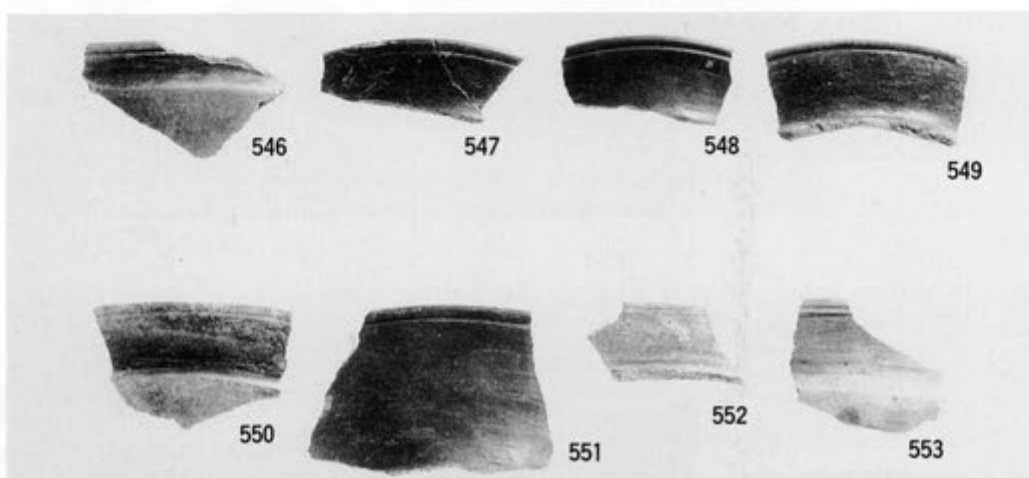
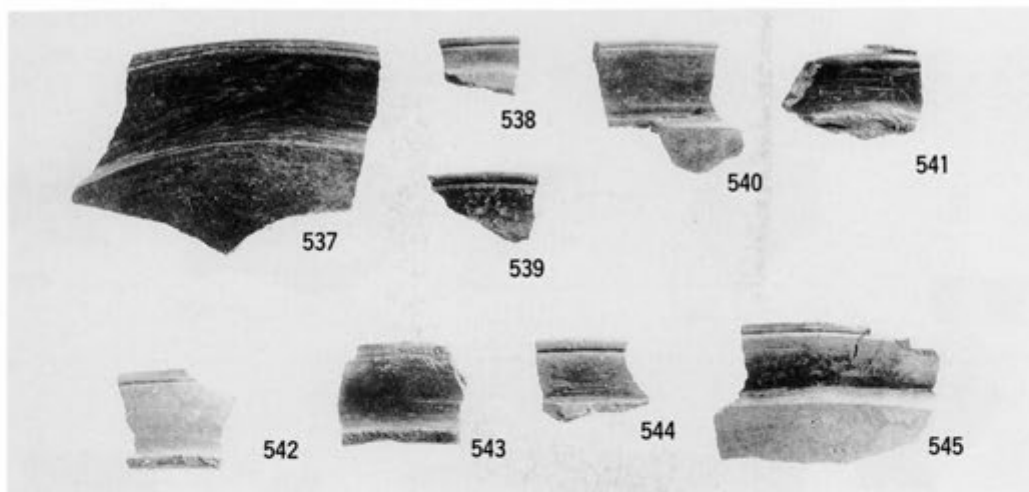
Ⅲ層出土土器(19)



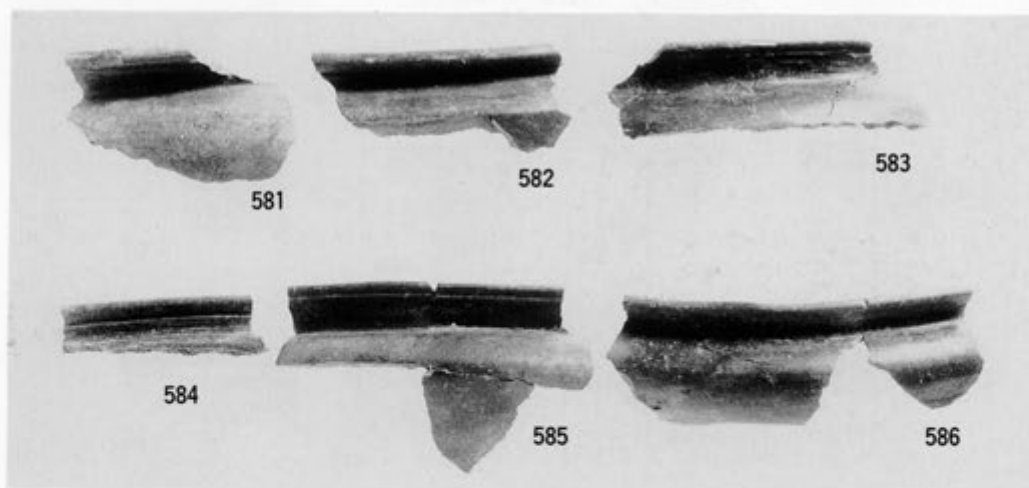
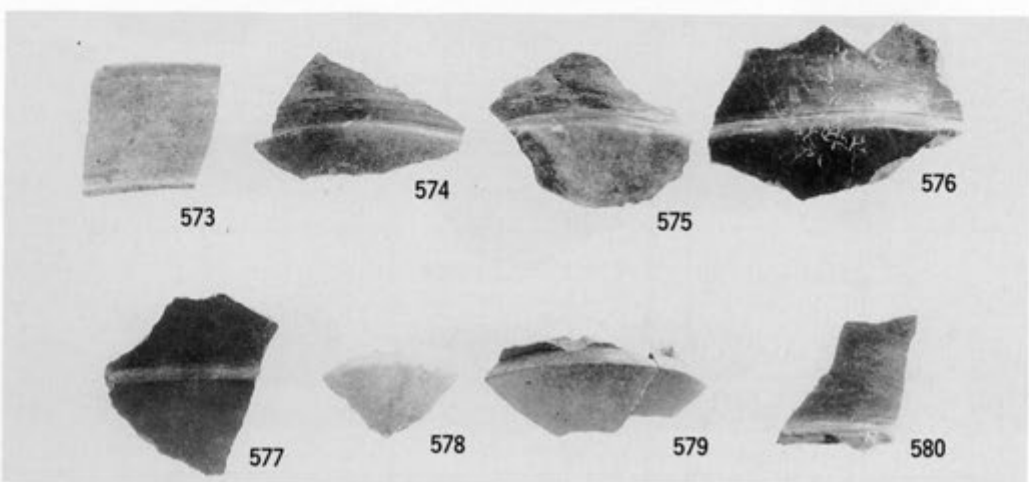
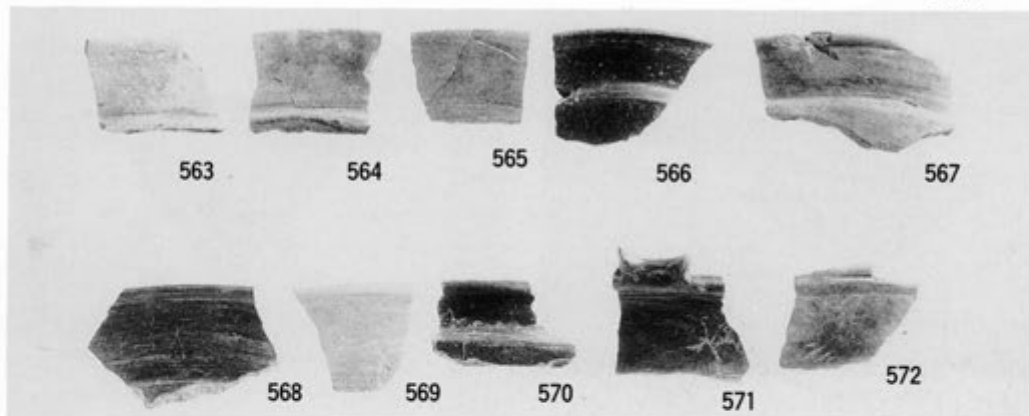
Ⅲ層出土土器(20)



Ⅲ層出土土器(21)

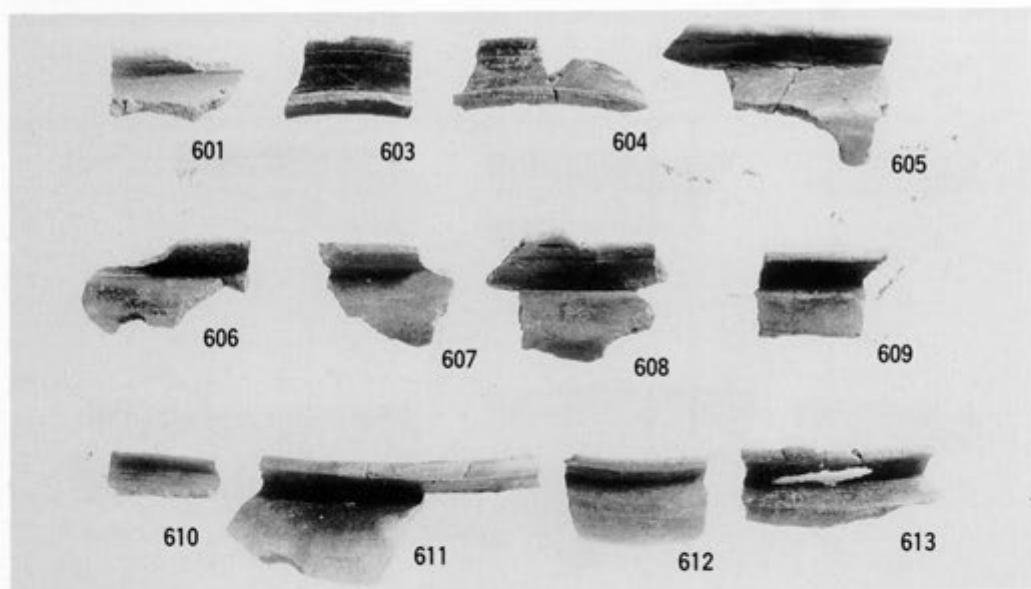
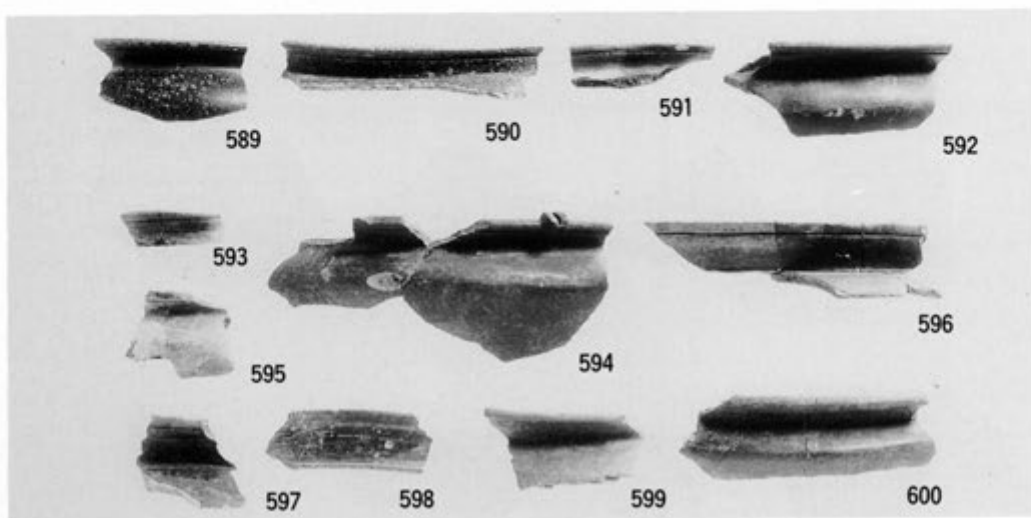
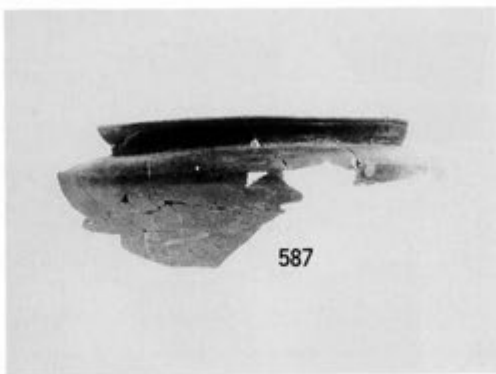


Ⅲ層出土土器(22)

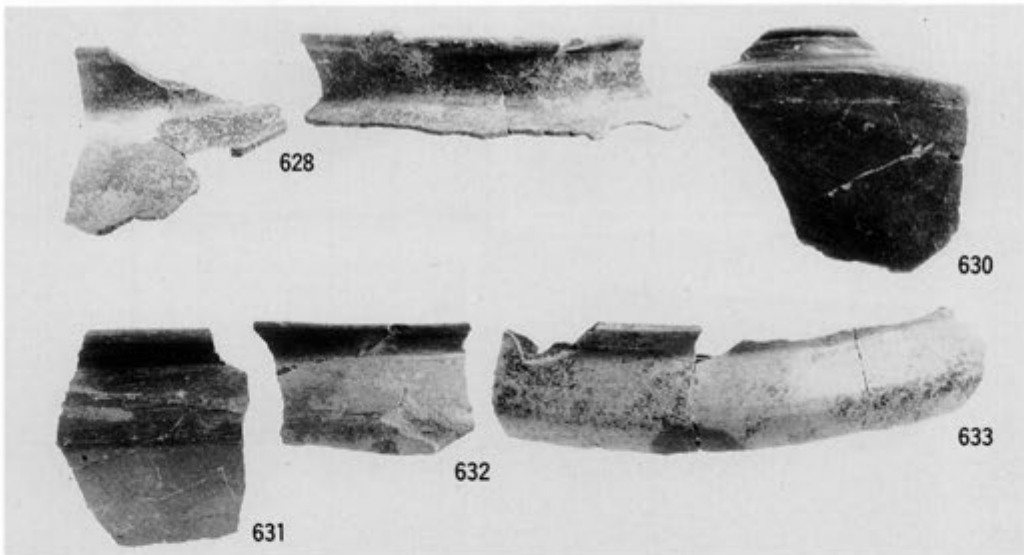
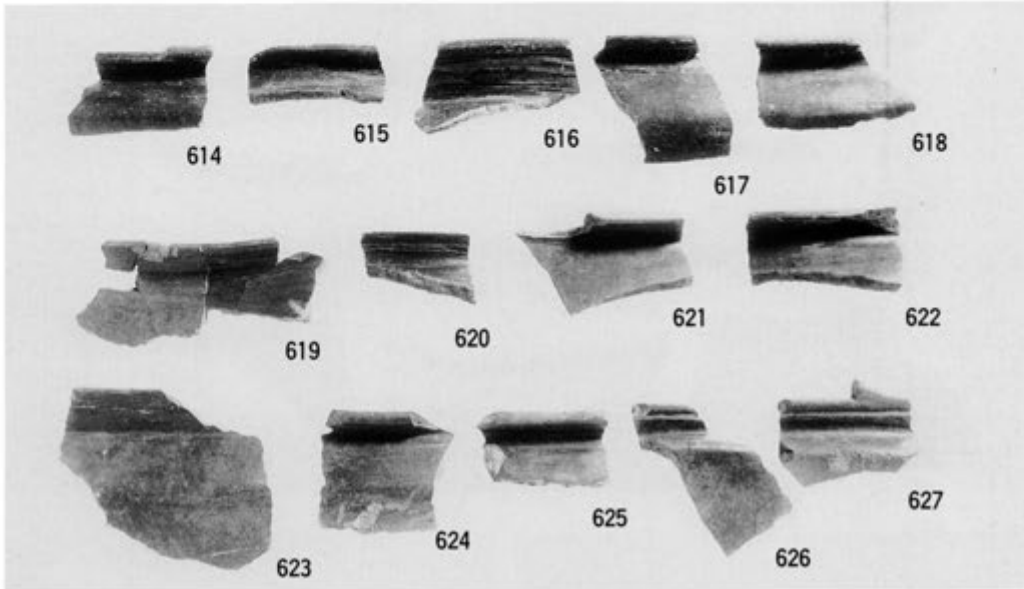
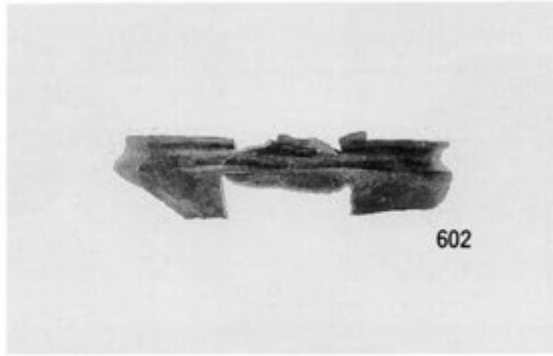


Ⅲ層出土土器(23)

図版66

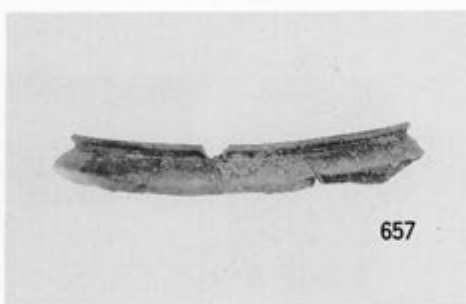
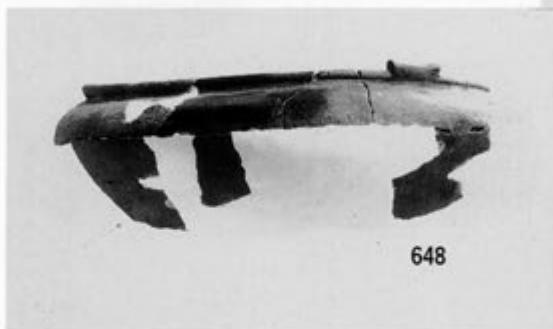
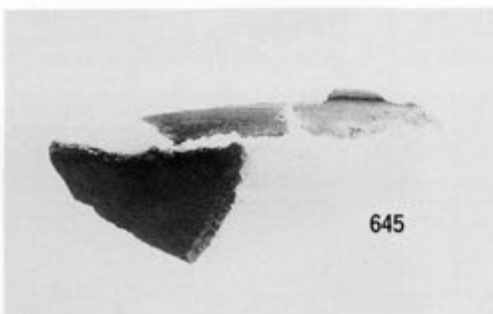
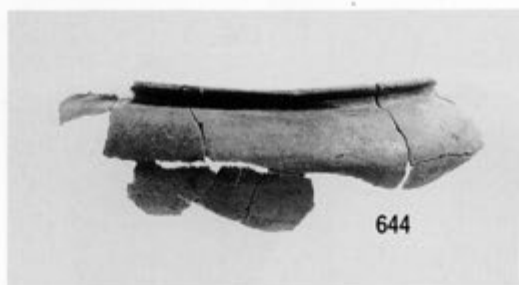
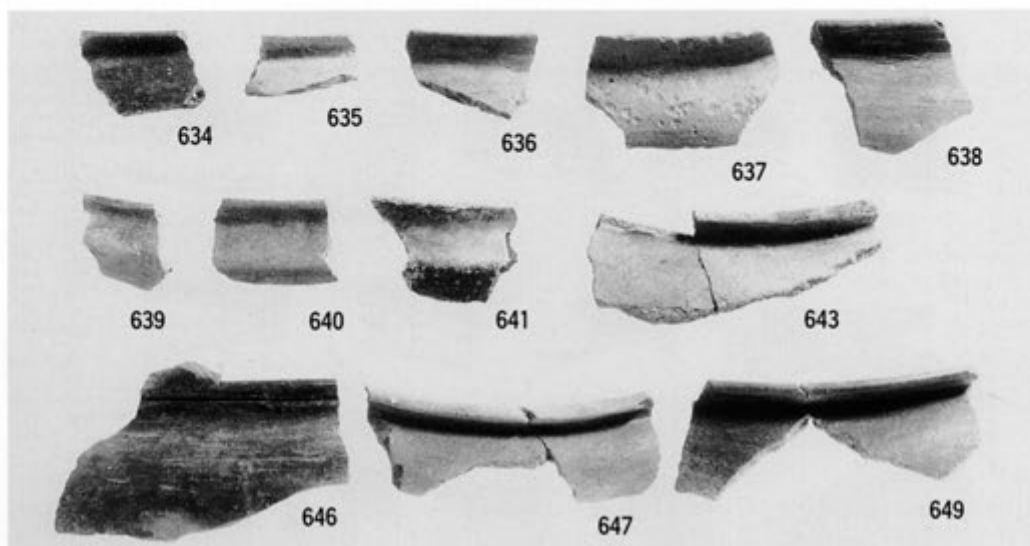
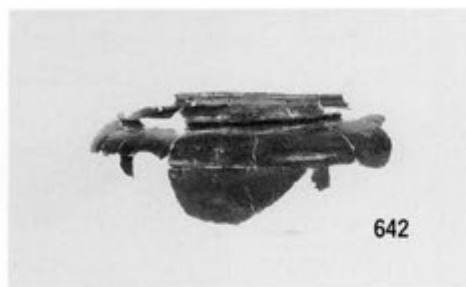


Ⅲ層出土土器(24)

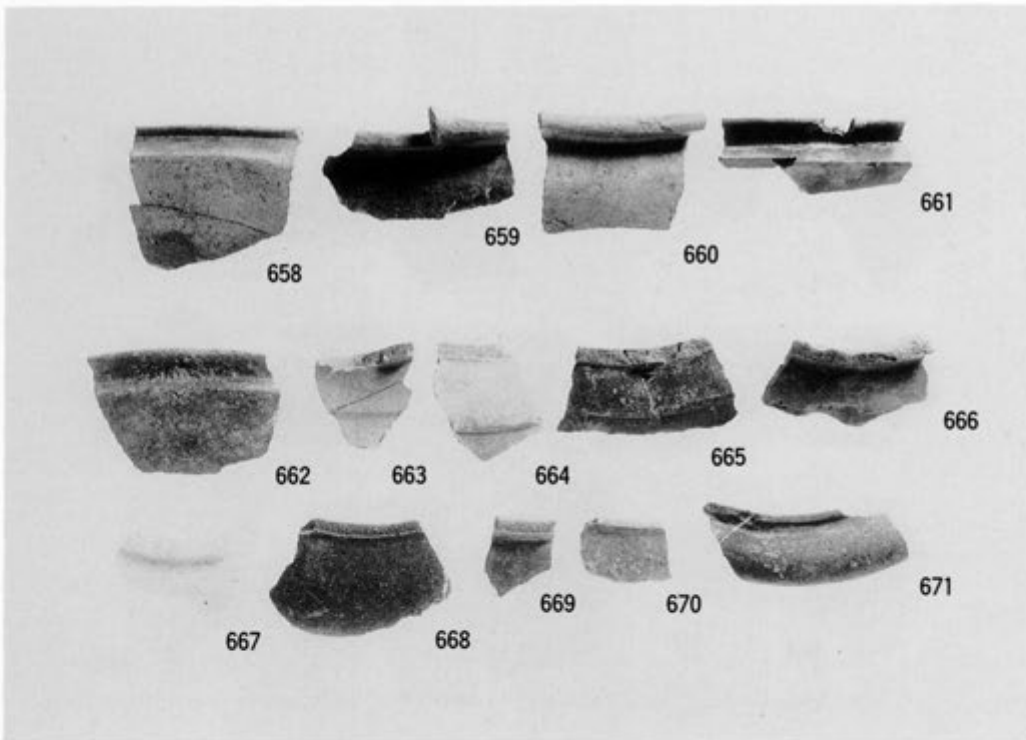
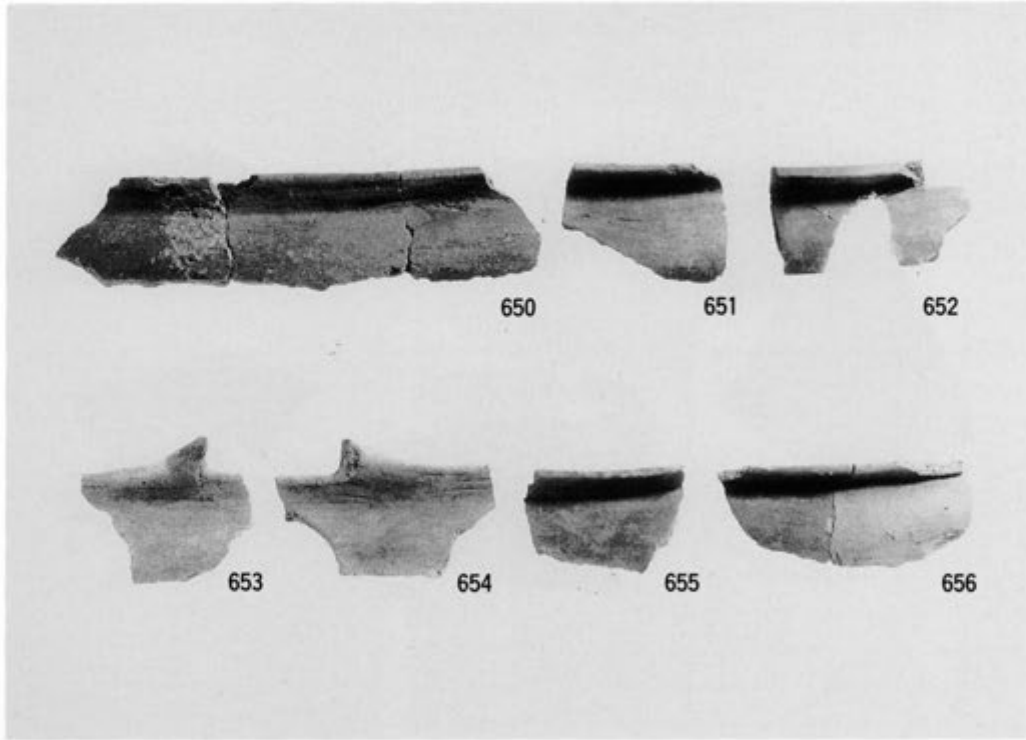


Ⅲ層出土土器(25)

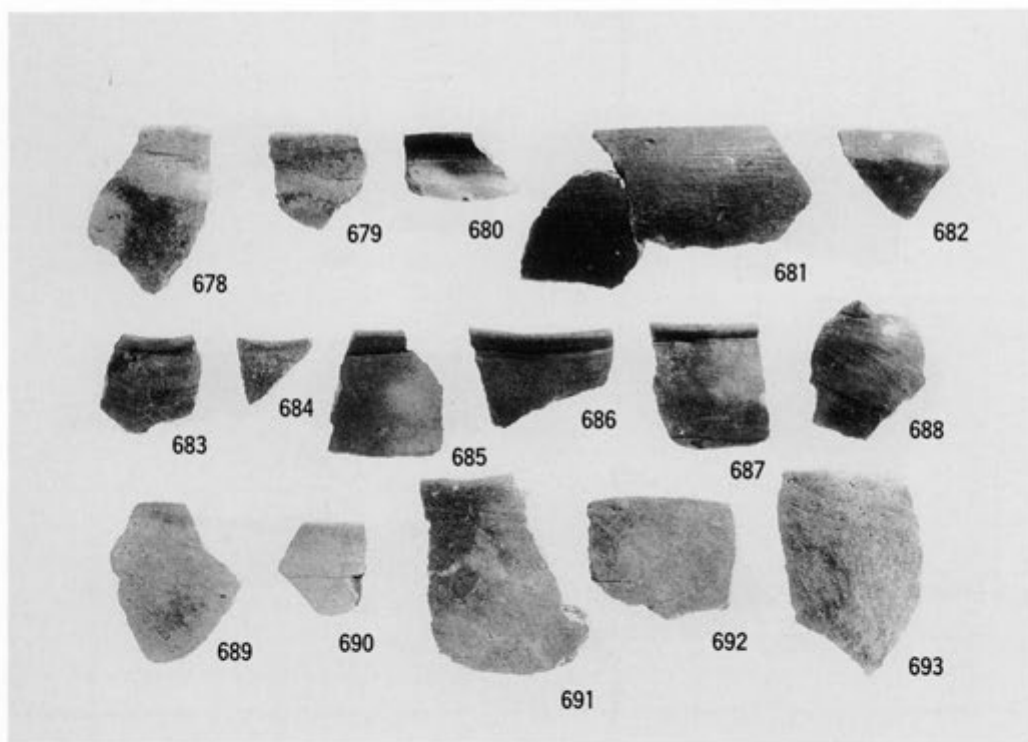
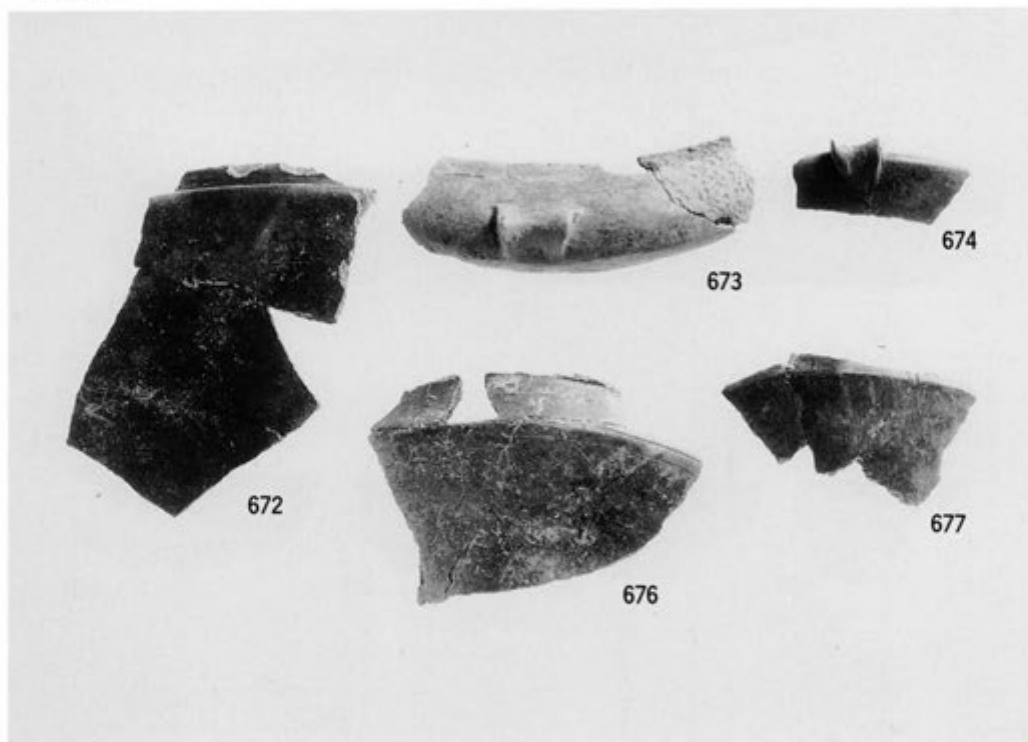
图版68



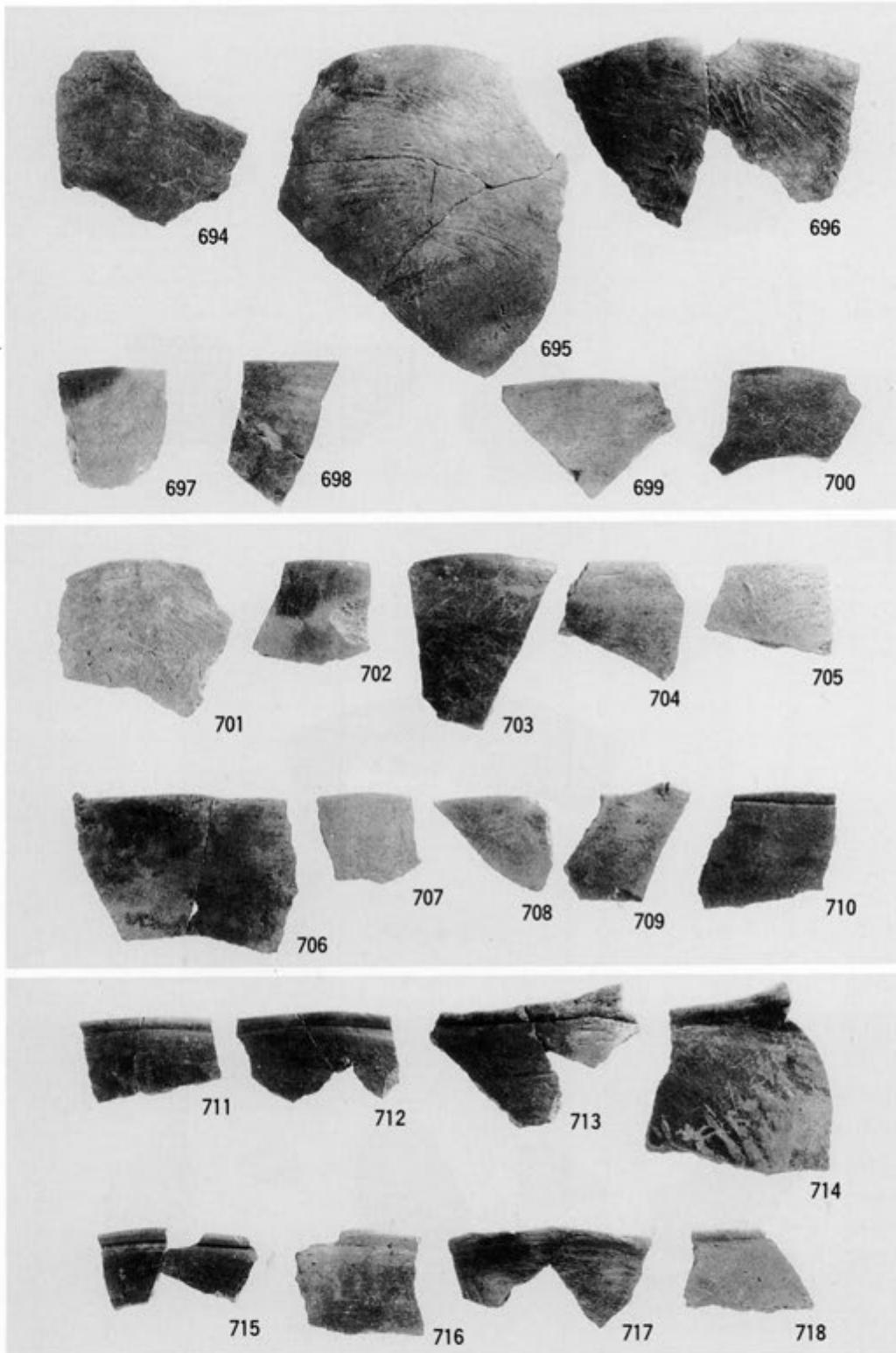
Ⅲ層出土土器(26)



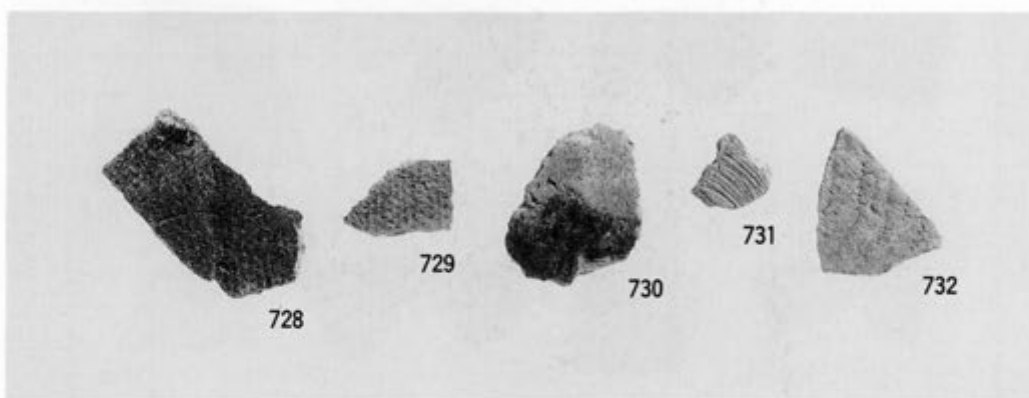
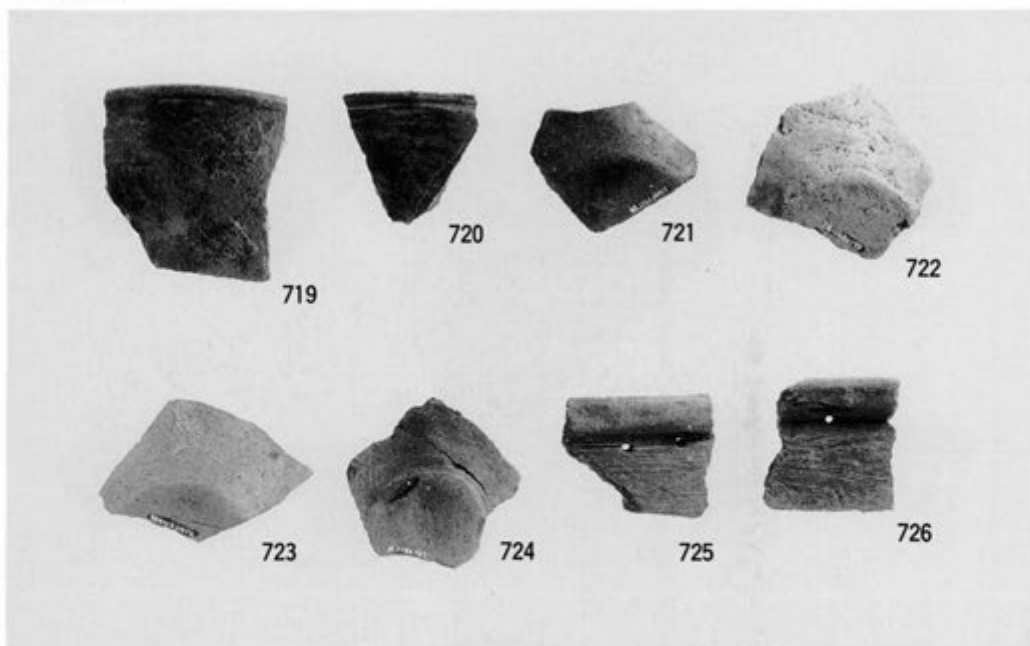
Ⅲ層出土土器(27)



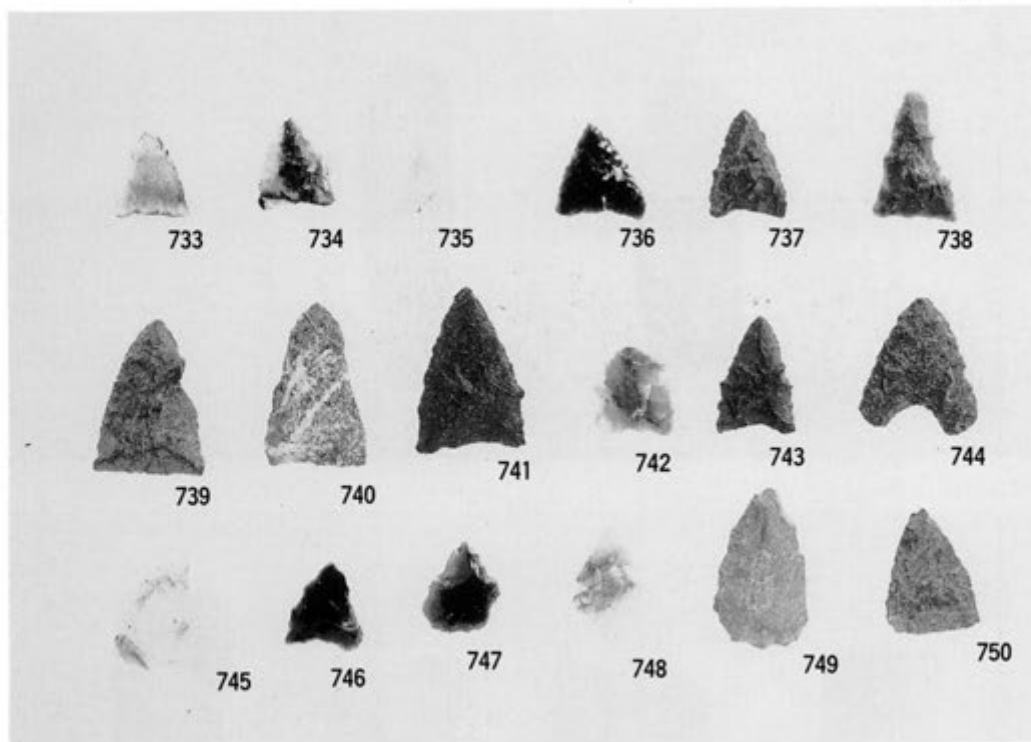
Ⅲ層出土土器(28)



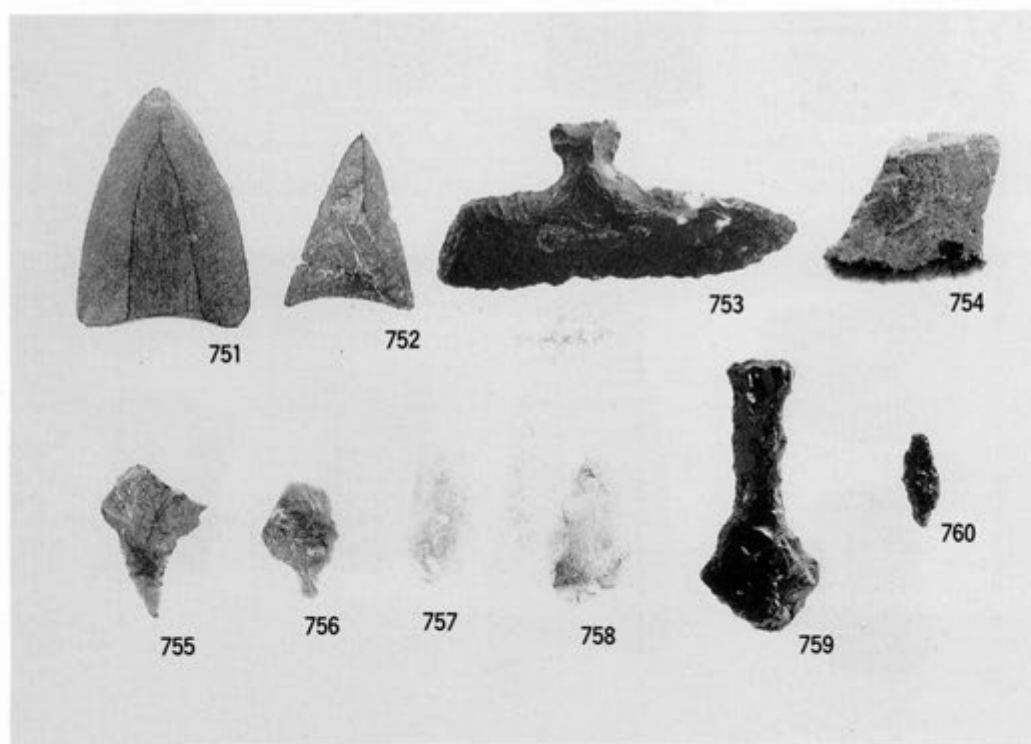
Ⅲ層出土土器(29)



Ⅲ層出土土器(30)

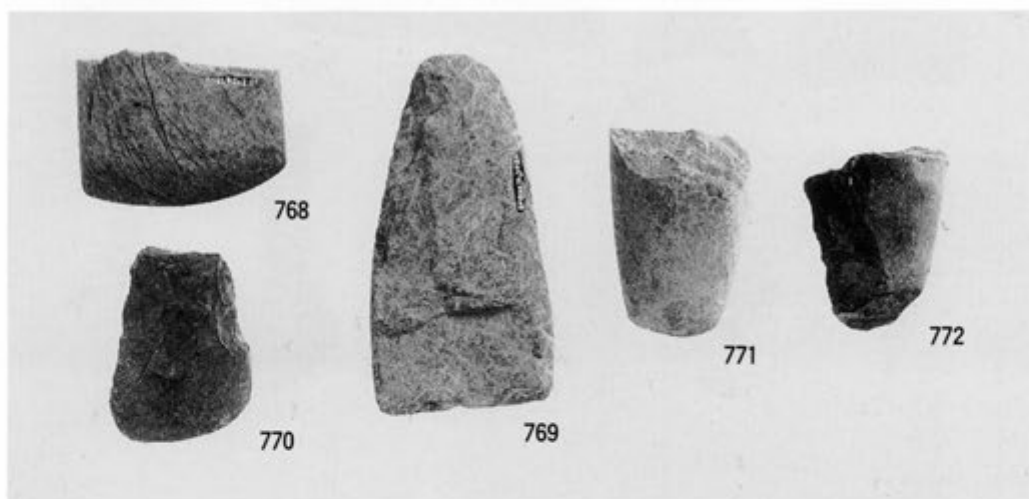
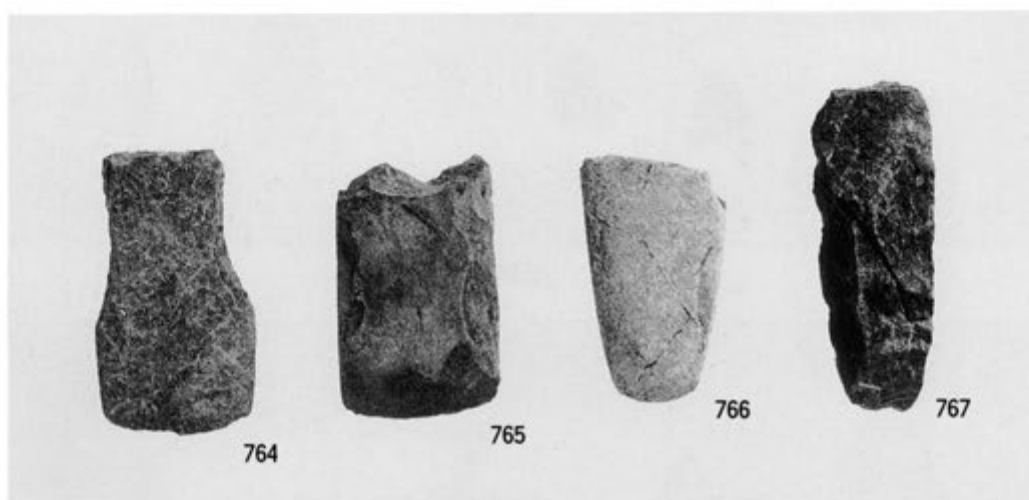
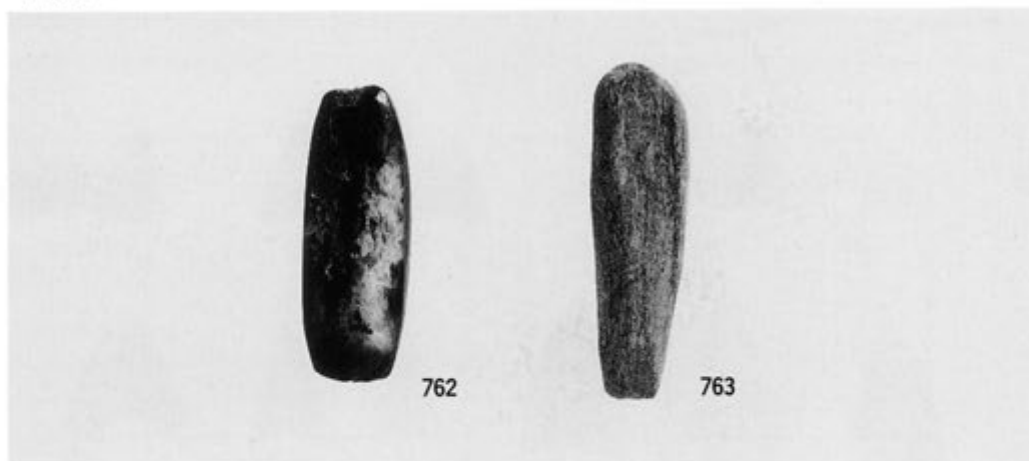


石鏃

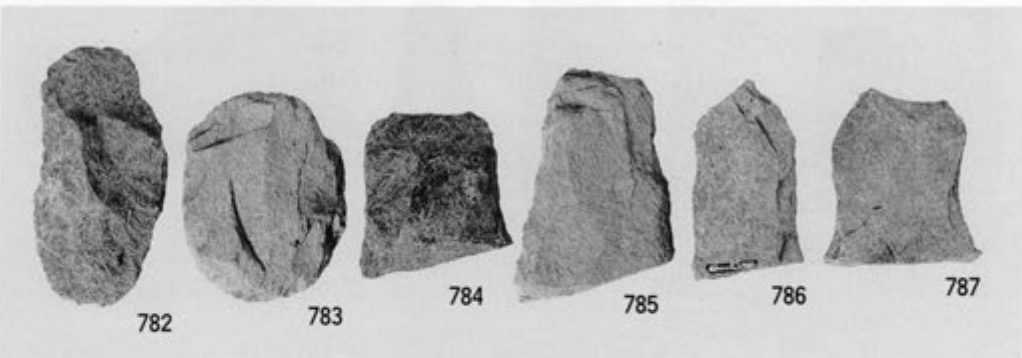
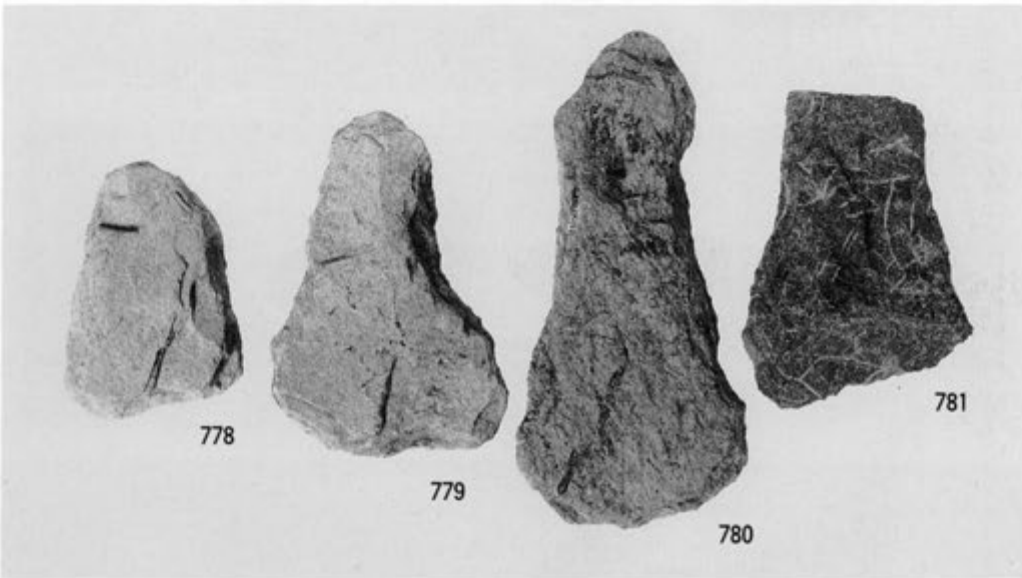
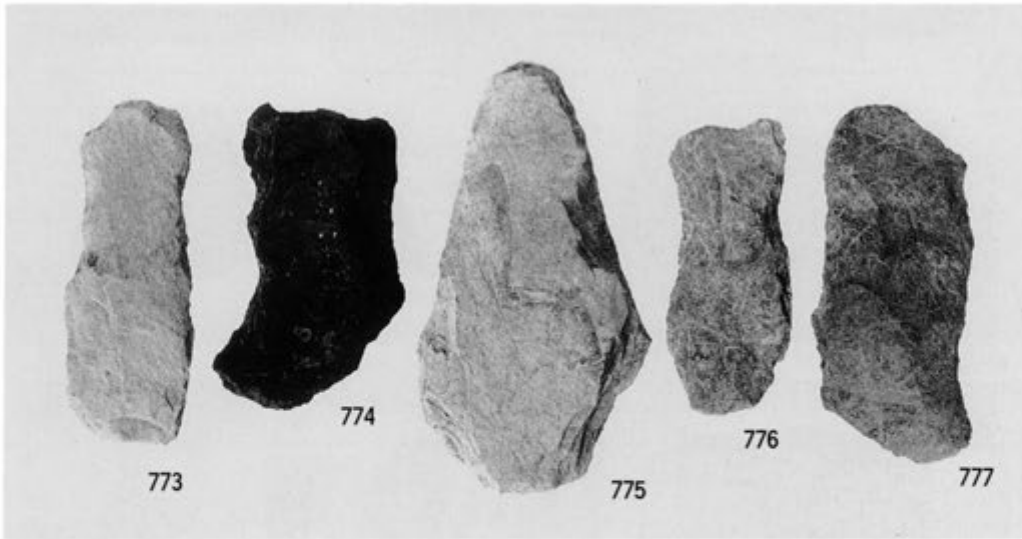


Ⅲ層出土石器(1)

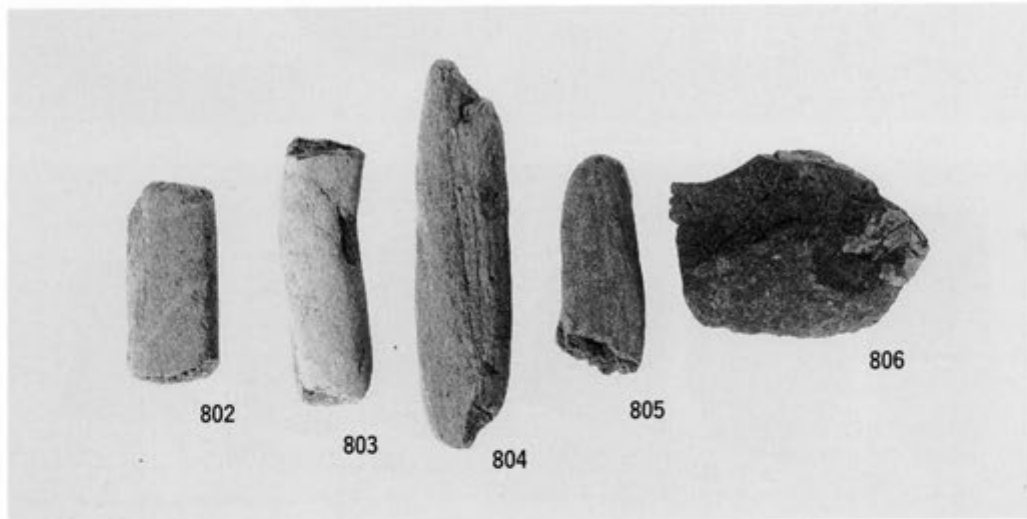
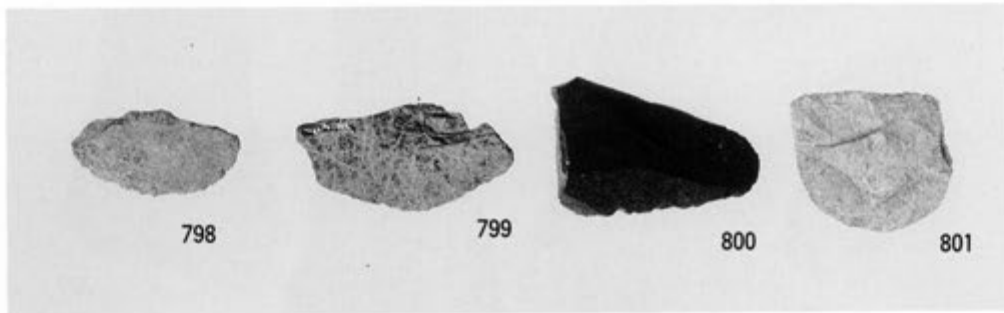
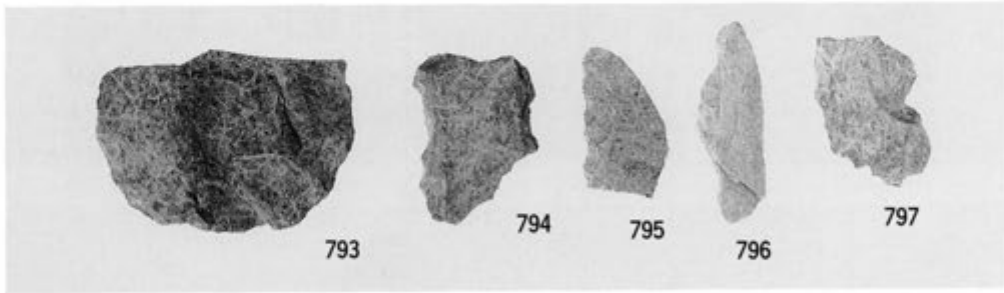
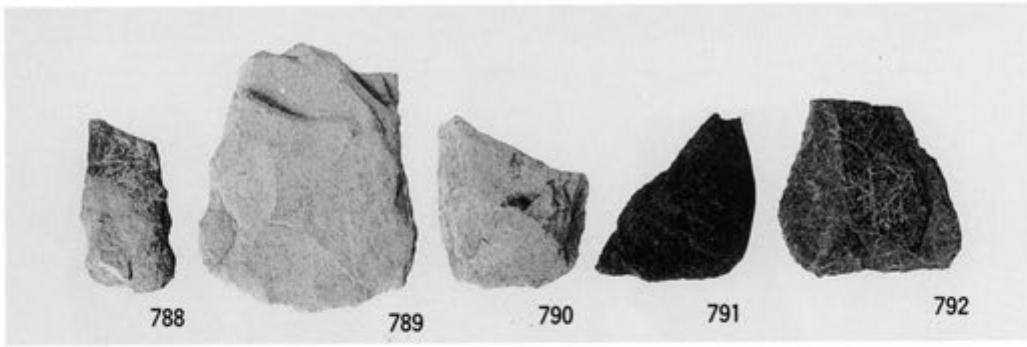
图版74



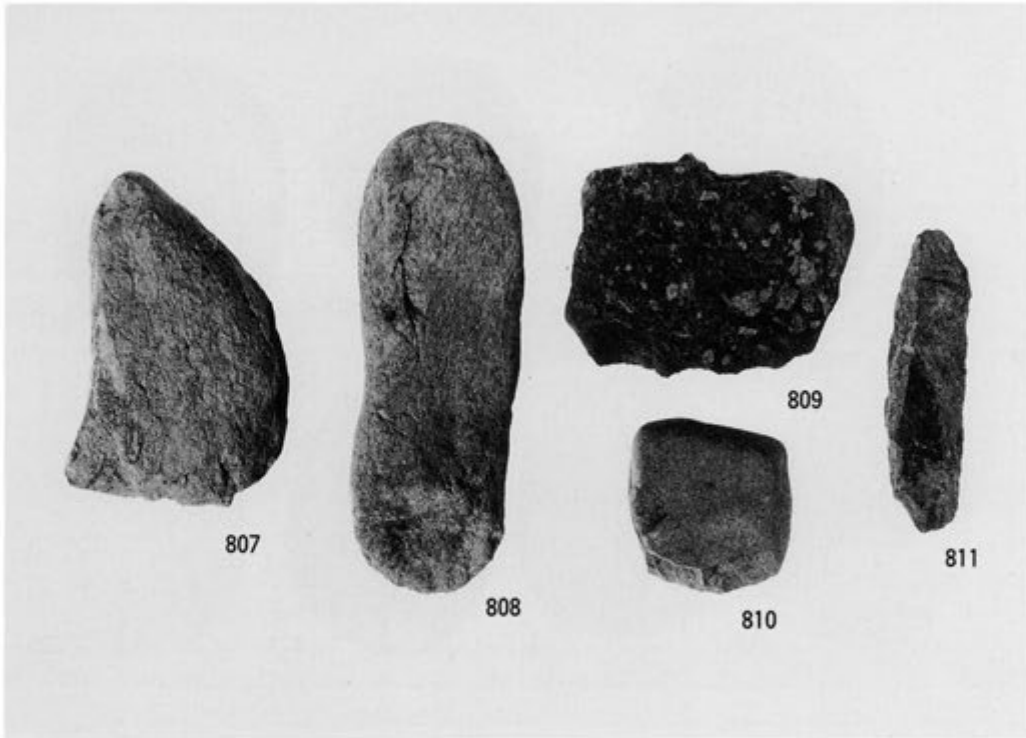
Ⅲ層出土石器(2)



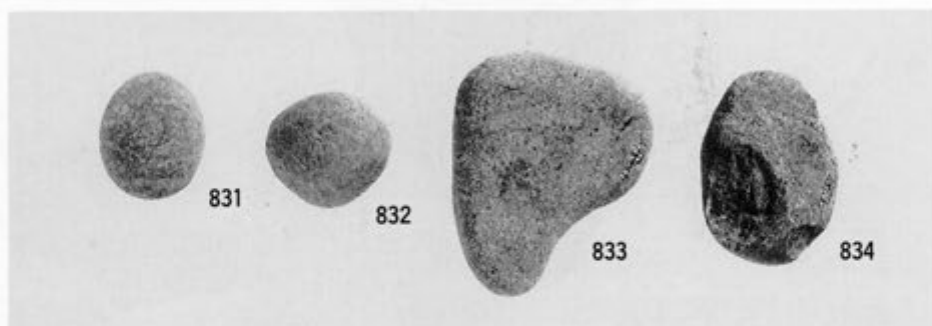
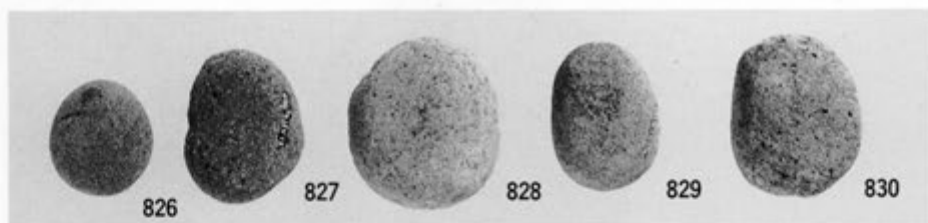
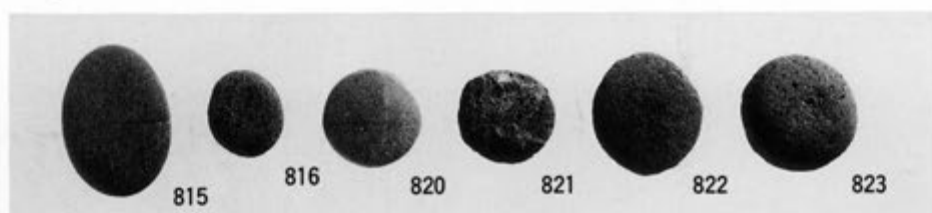
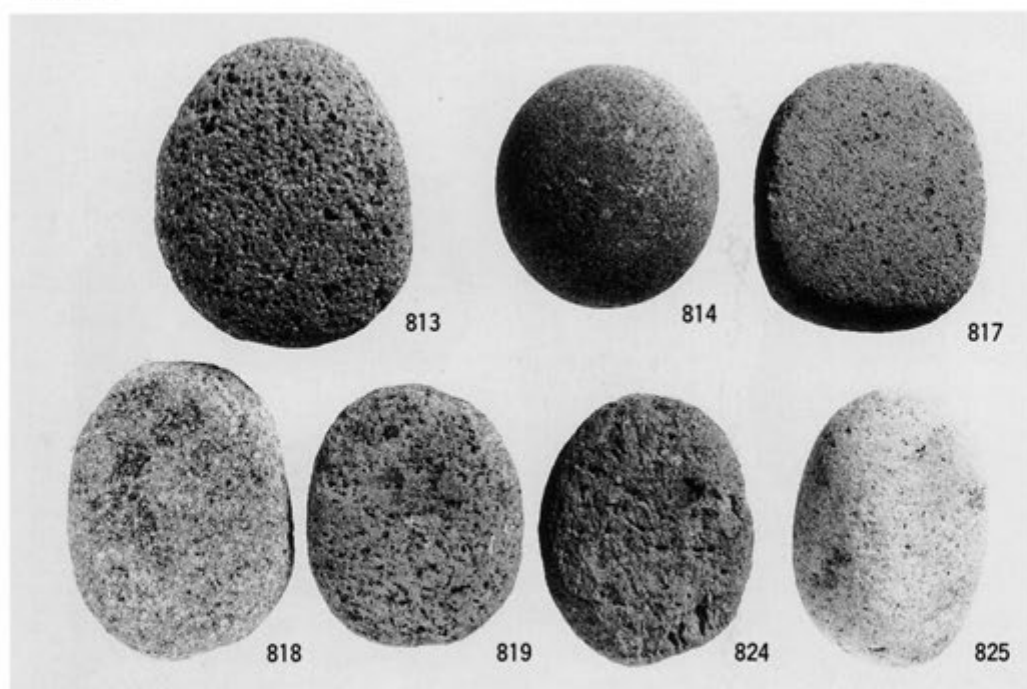
Ⅲ層出土石器(3) (打製石斧)



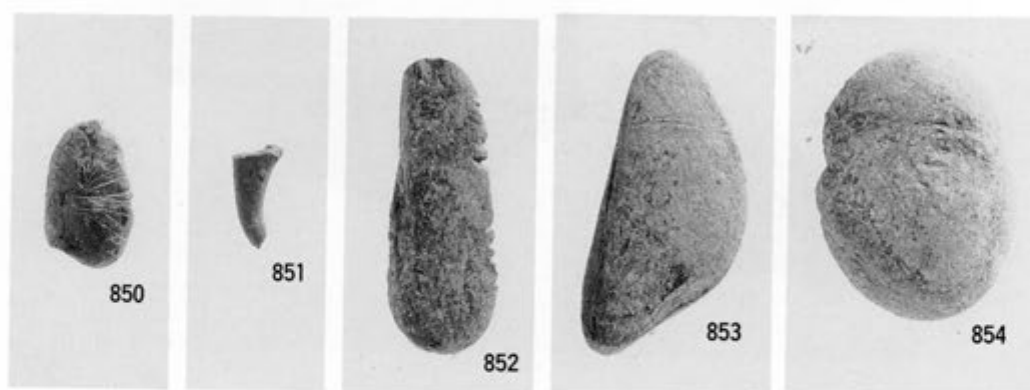
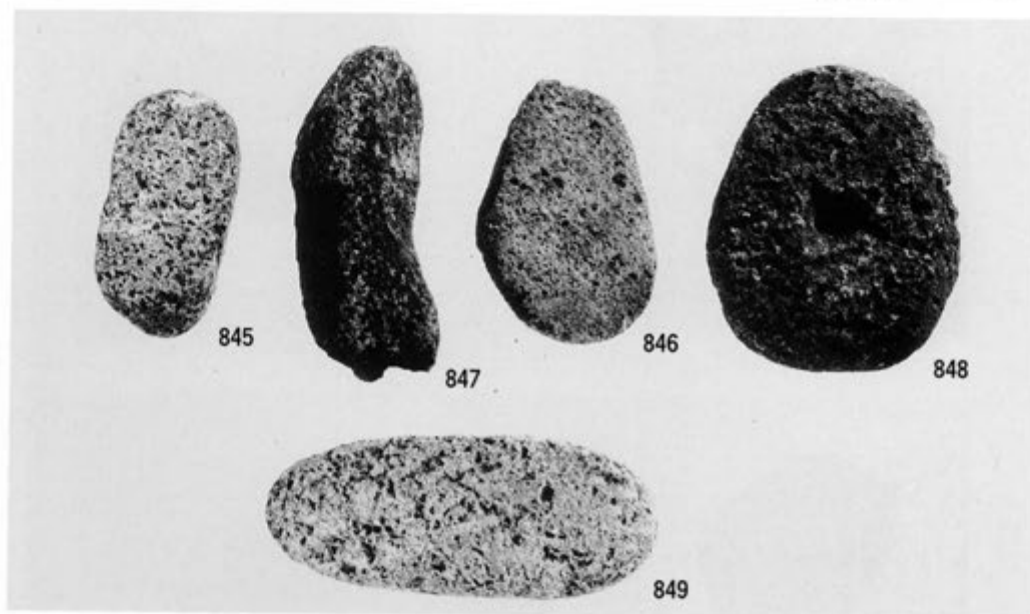
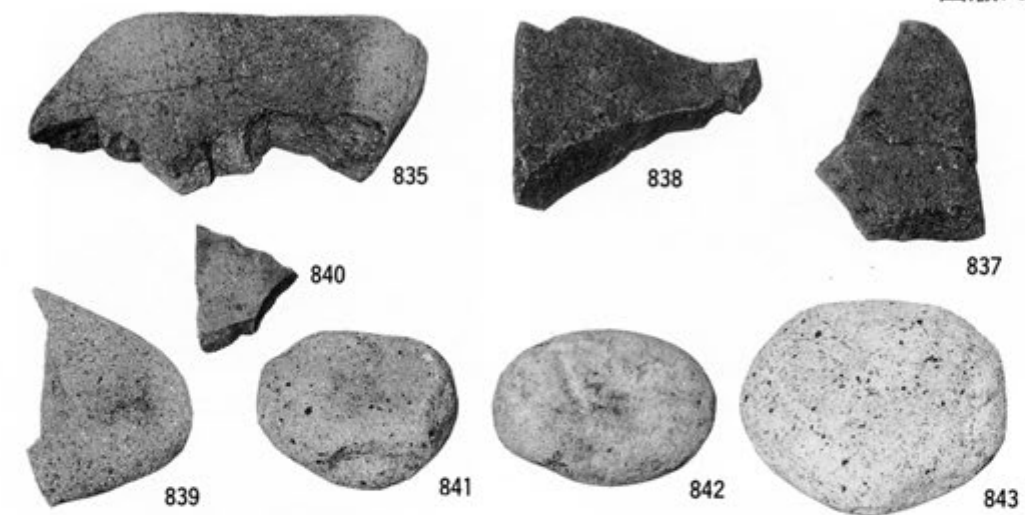
Ⅲ層出土石器(4)



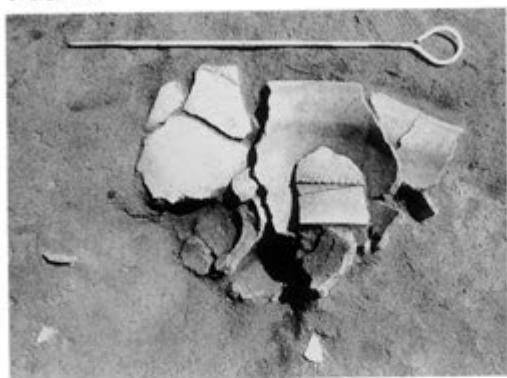
Ⅲ層出土石器(5) (礫器)



Ⅲ層出土石器(6) (磨石・敲石)



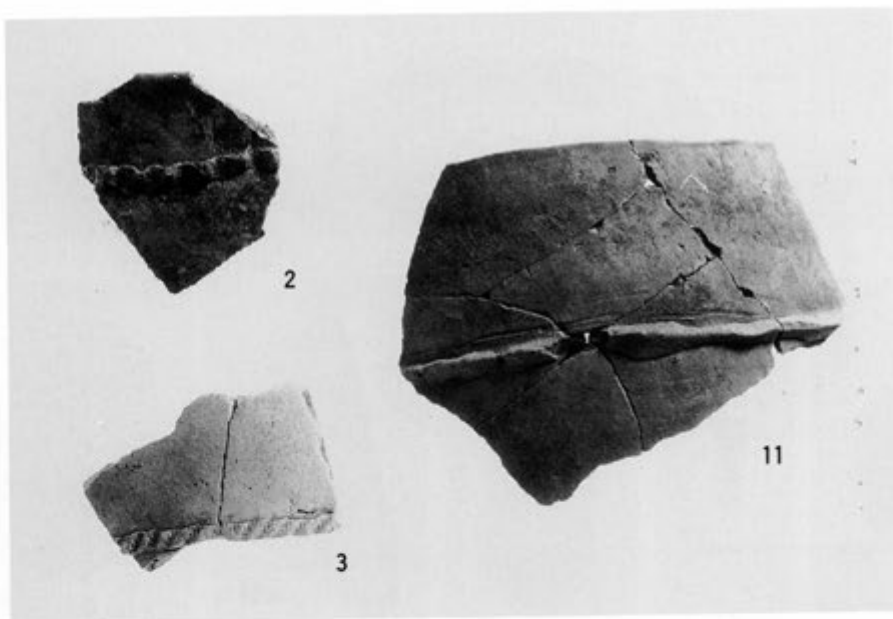
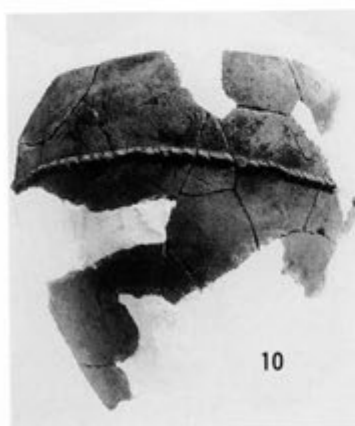
Ⅲ層出土石器(7) (土製品・石製品)



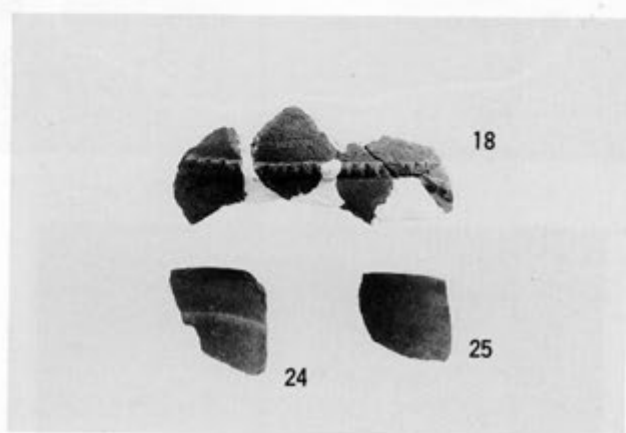
古墳時代の土器出土状況(1)



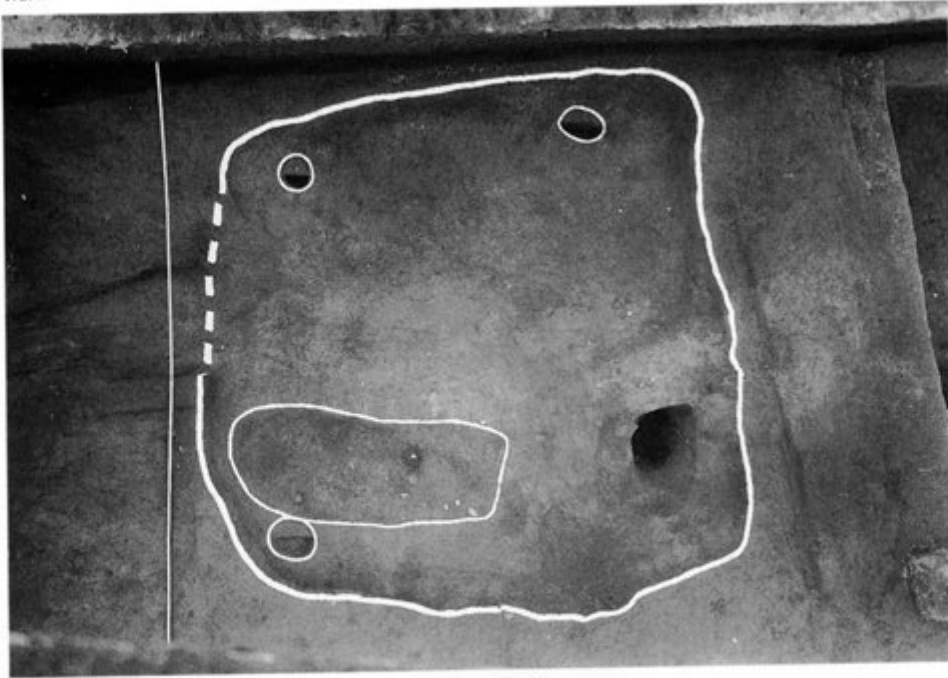
古墳時代の土器出土状況(15)



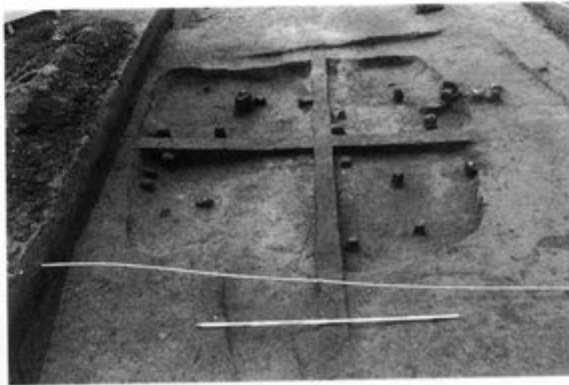
古墳時代の土器(1)



古墳時代の土器(2)



竪穴住居跡

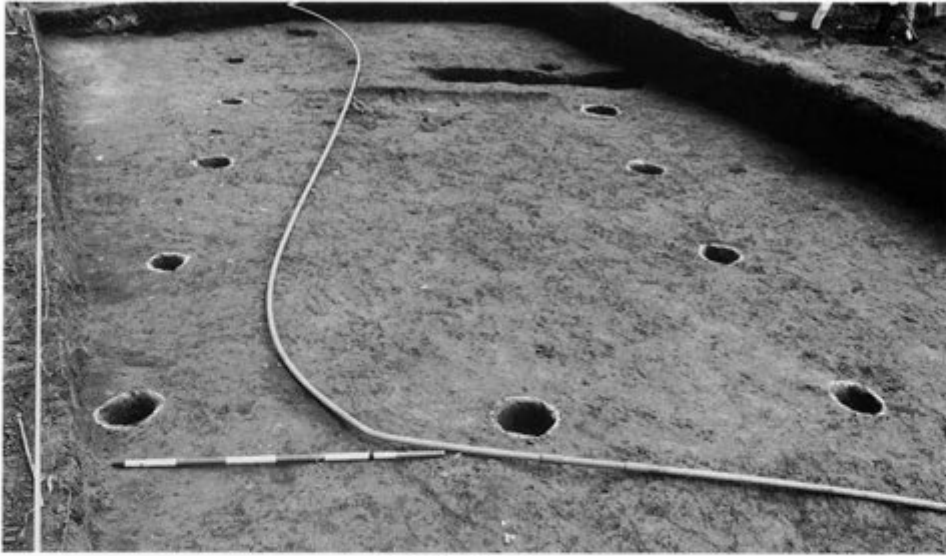


竪穴住居跡



竪穴住居跡
刀子出土状況

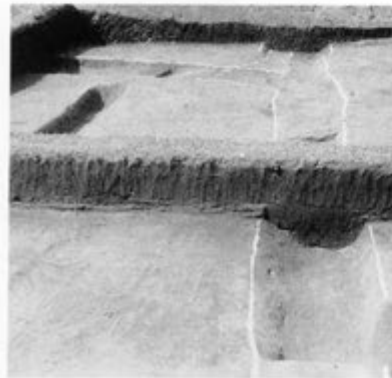
奈良・平安時代の竪穴住居跡



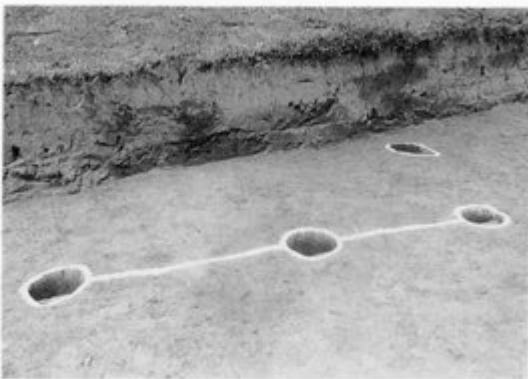
掘立柱建物跡 3



掘立柱建物跡 4



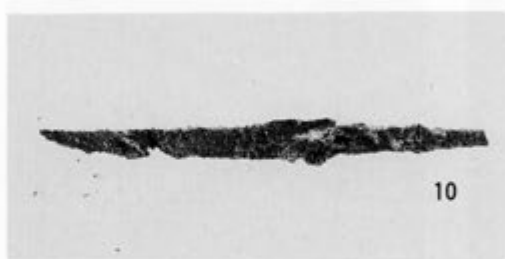
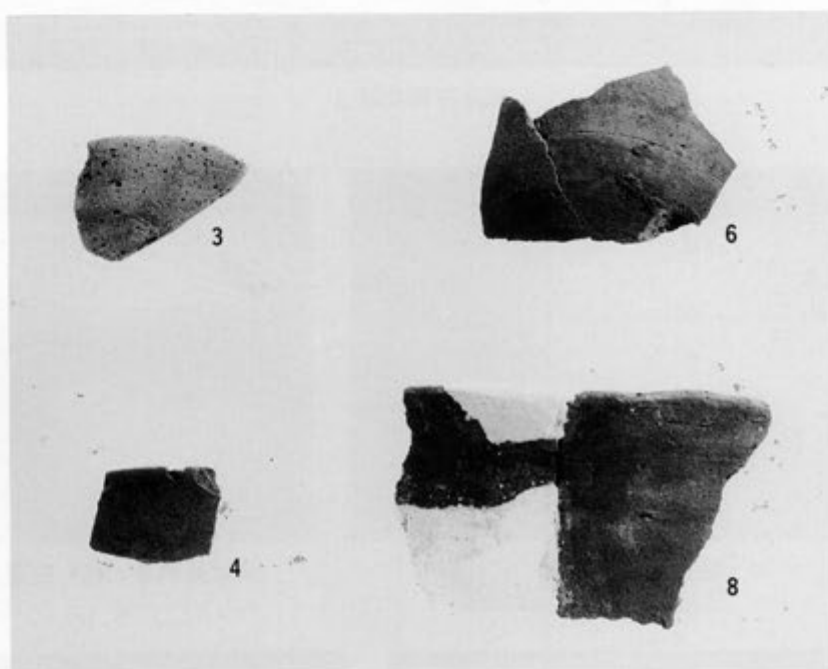
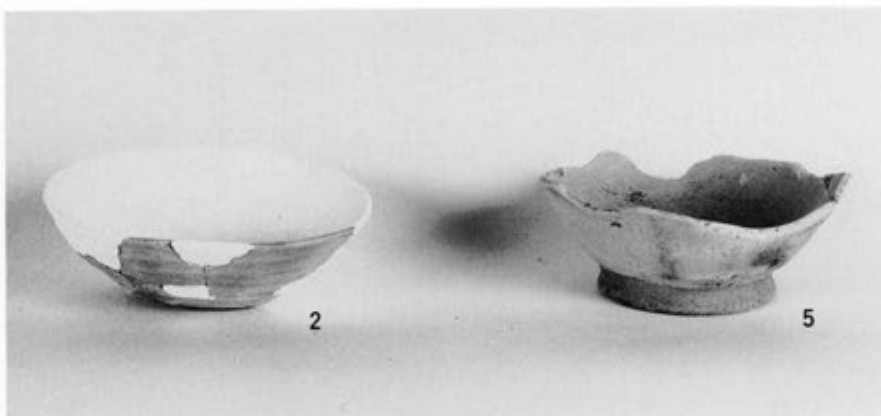
溝状遺構 2 及び 古道 3



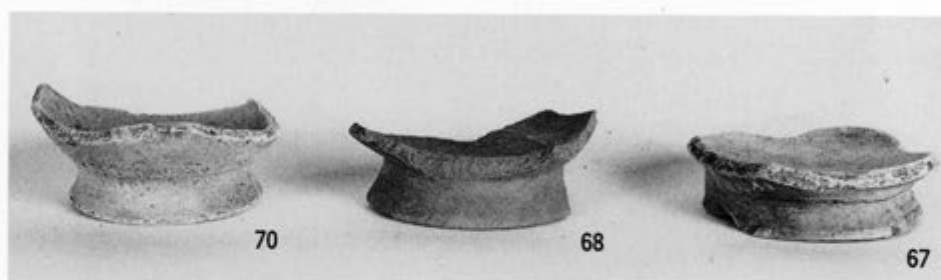
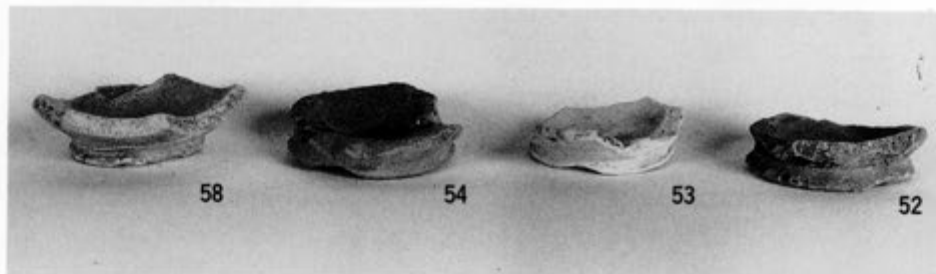
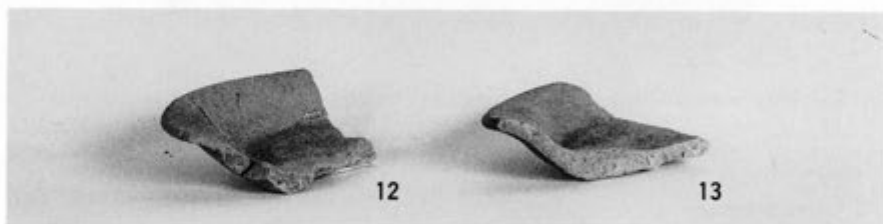
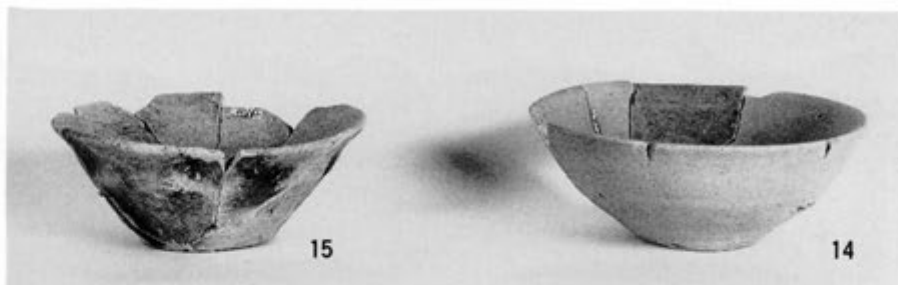
掘立柱建物跡 2



溝状遺構 1・2 及び 古道 1・2

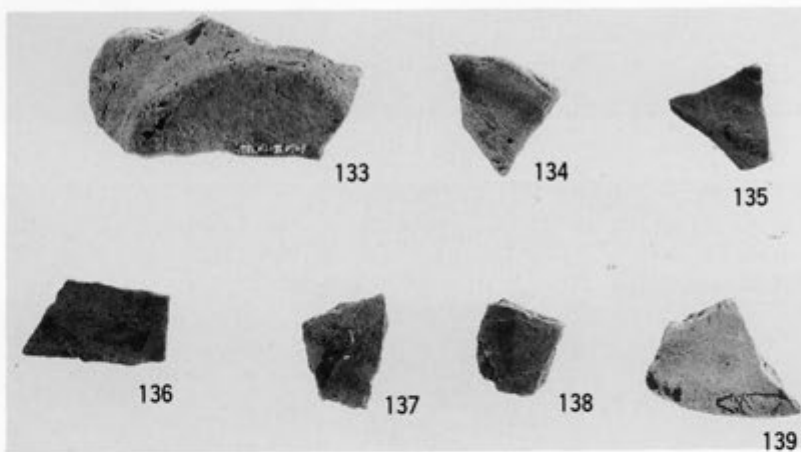
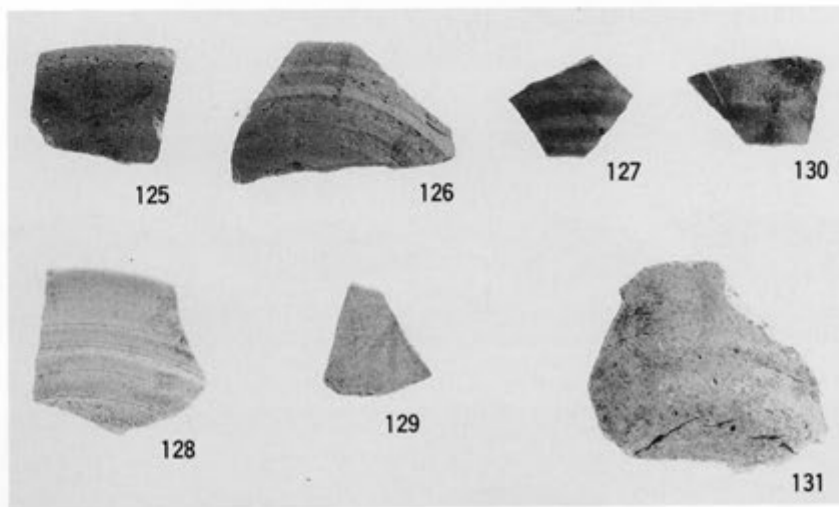
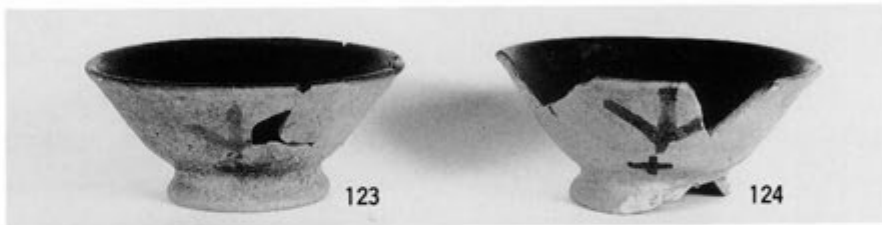


竪穴住居跡の出土遺物

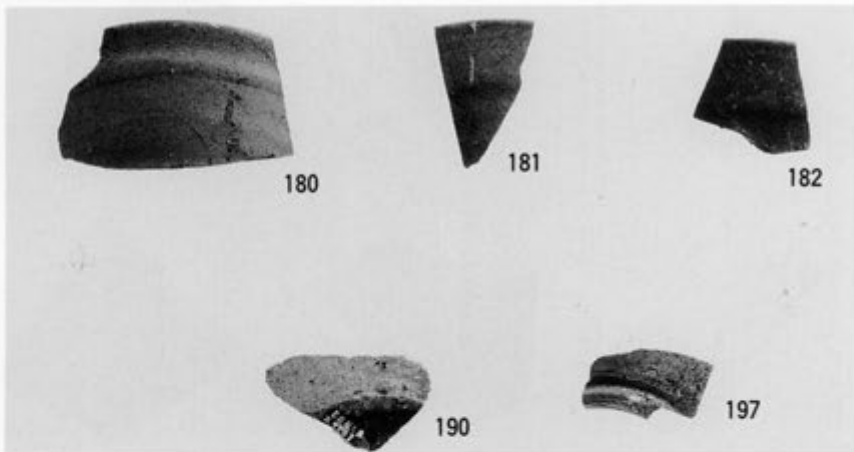
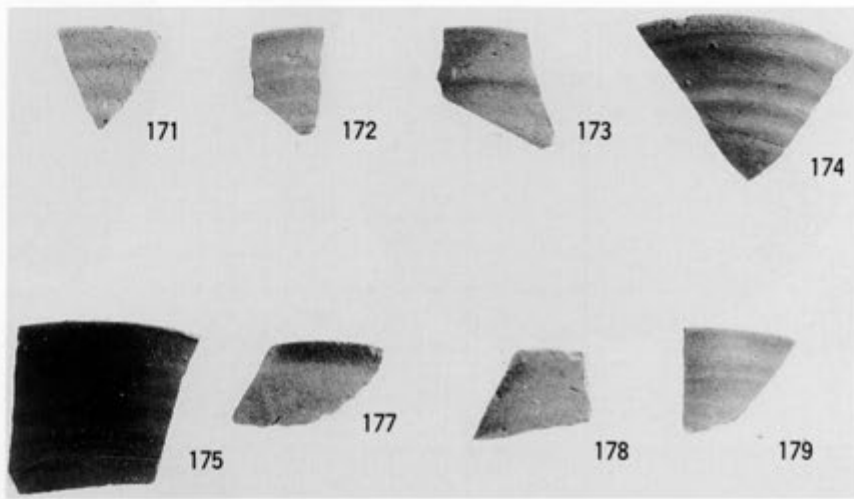
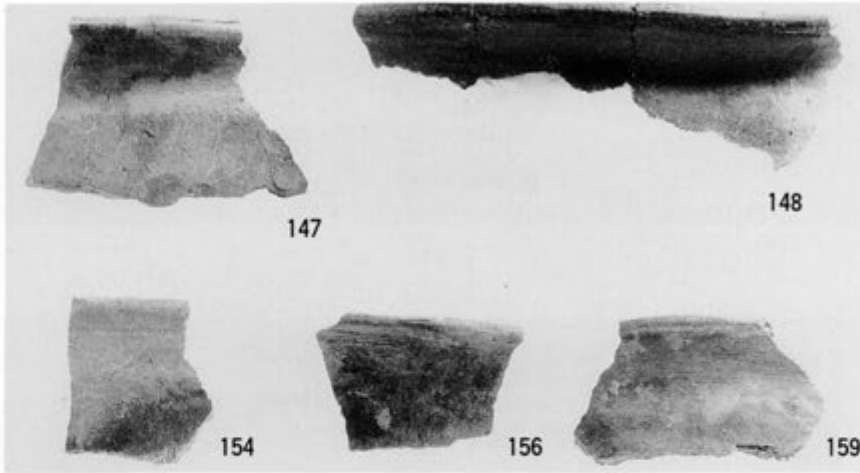


奈良・平安時代の出土遺物(1)

図版86

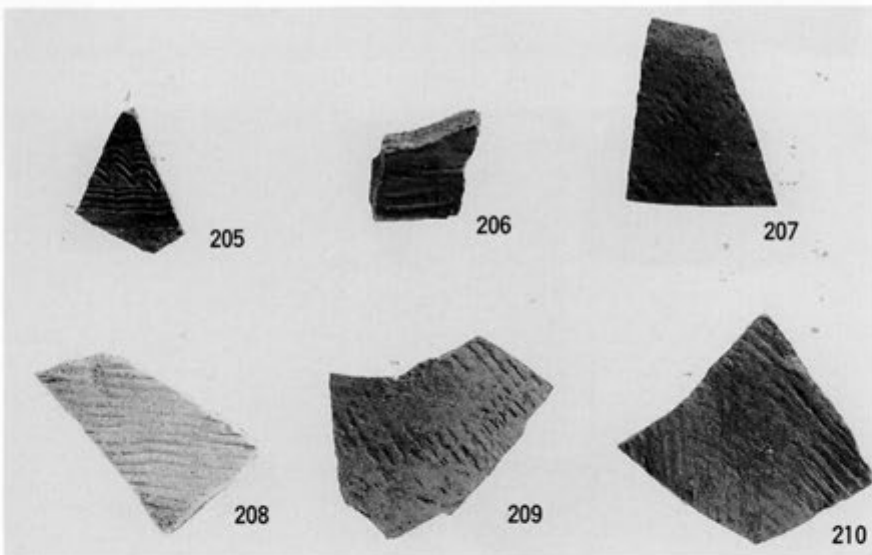
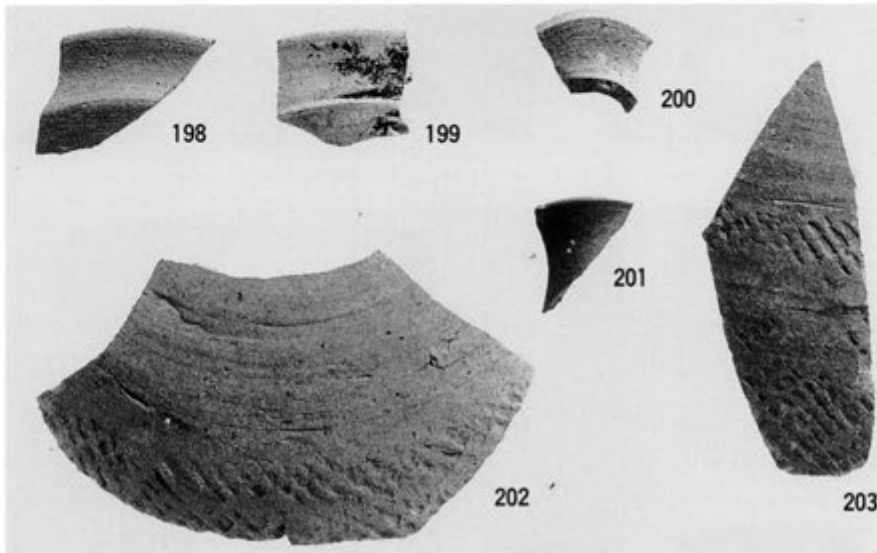


奈良・平安時代の出土遺物(2)

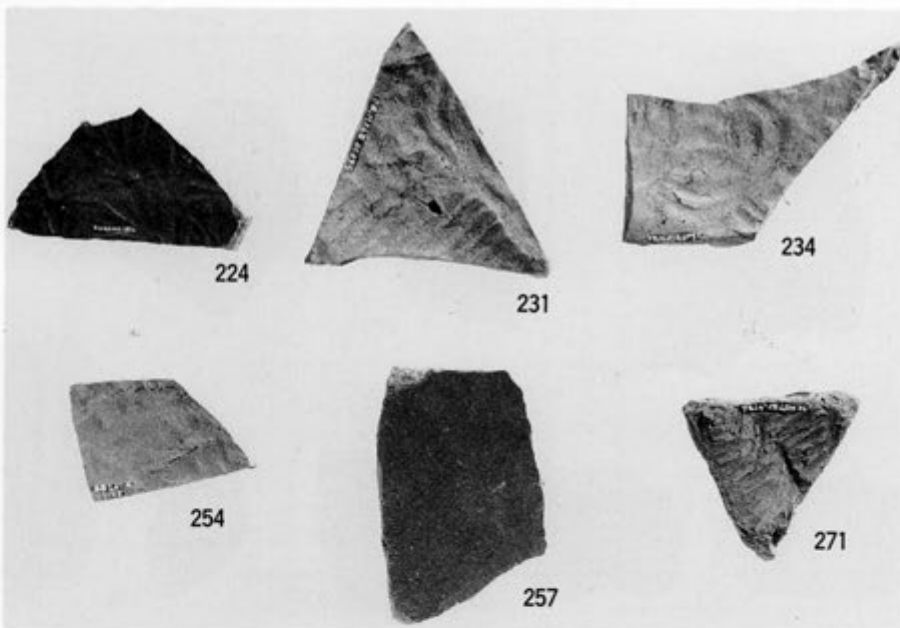
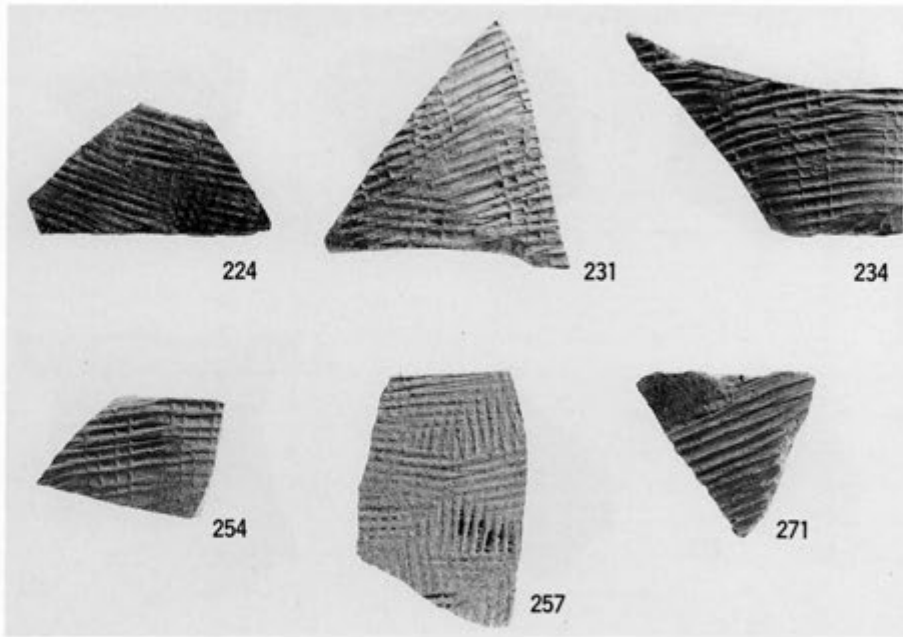


奈良・平安時代の出土遺物(3)

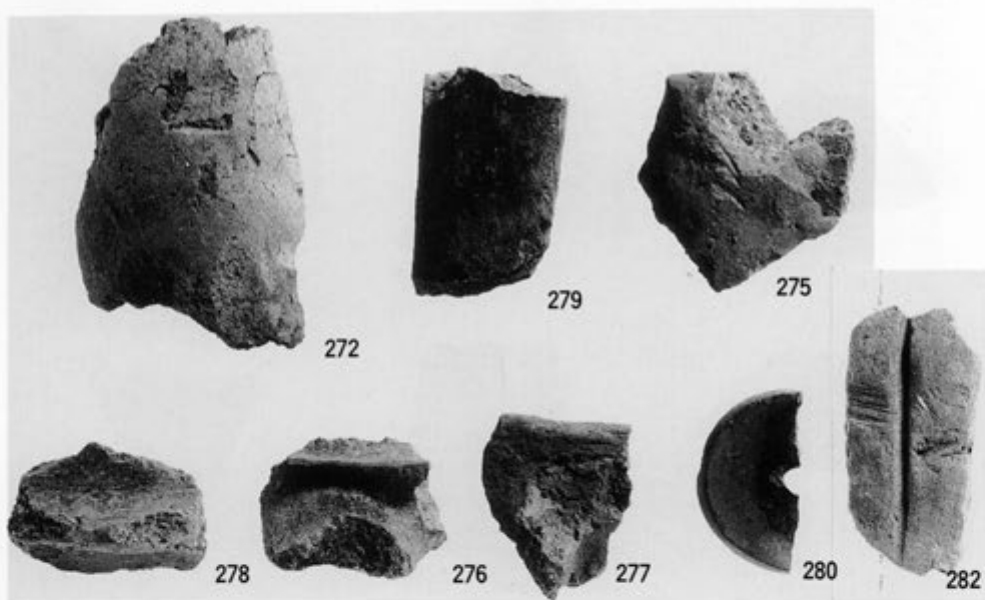
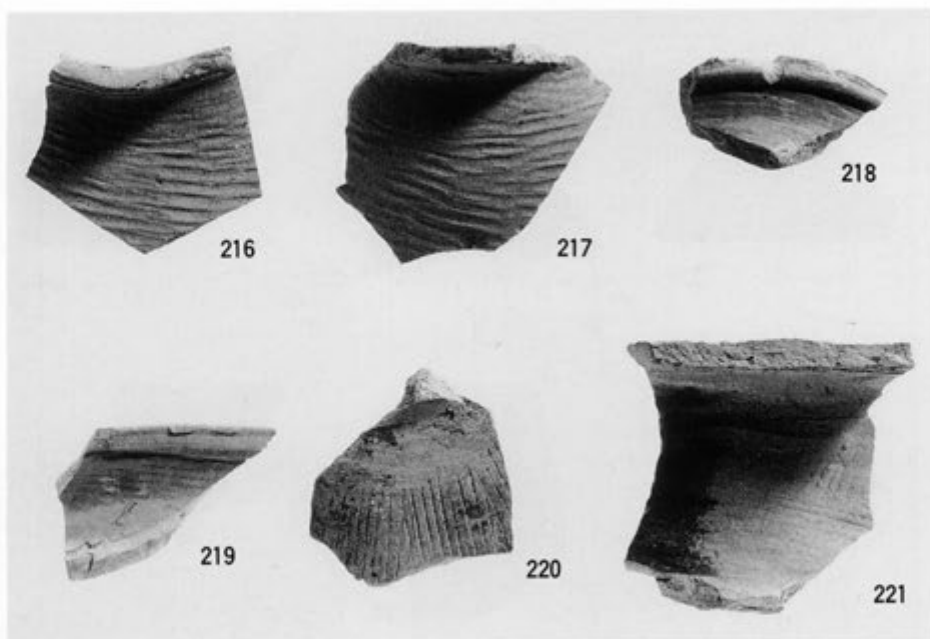
図版88



奈良・平安時代の出土遺物(4)



奈良・平安時代の出土遺物(5)



奈良・平安時代の出土遺物(6)



土壌採取状況



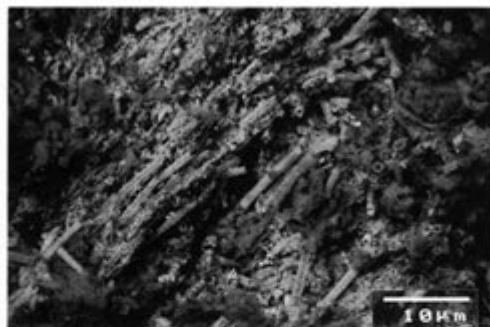
胎土分析を行った土器



遺跡見学会



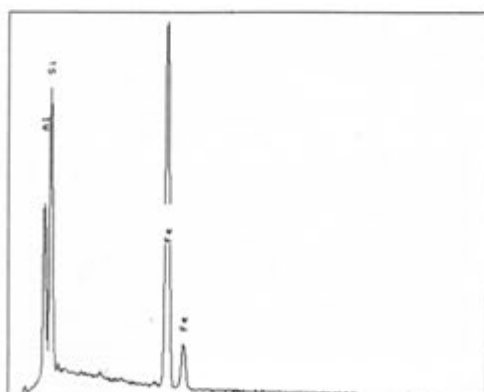
調査参加者



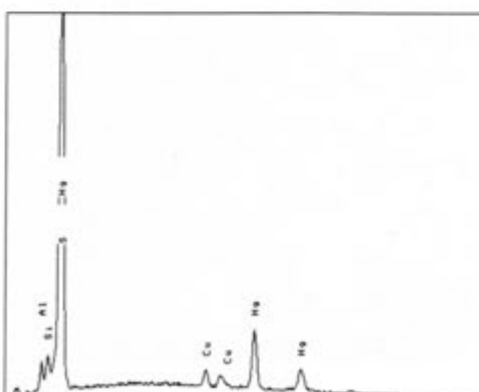
試料2のSEM像
縄文晩期粗製浅鉢に付着したベンガ
ラのパイプ状粒子



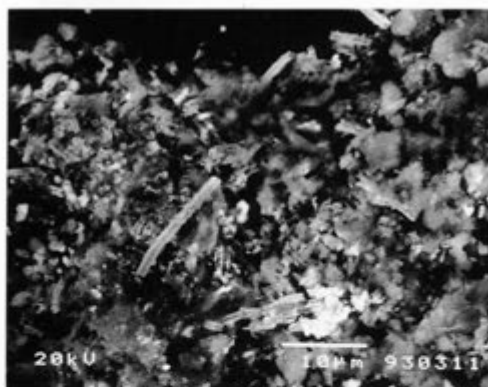
試料5のSEM像
古墳時代土器に付着したベンガラの
パイプ状粒子



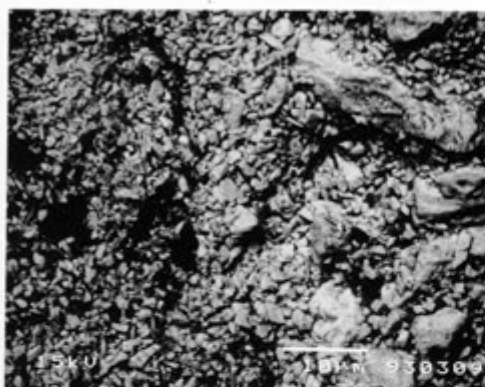
試料3のX線分析スペクトル図
No.676の外面に付着していた赤色顔
料Feの顕著なピークが検出され、ベ
ンガラであると思われる。



試料4のX線分析スペクトル図
No.676の内面に付着していた赤色顔
料HgとSの顕著なピークが検出さ
れ、水銀朱であると思われる。



試料3のSEM像
ベンガラのパイプ状粒子



試料4のSEM像
水銀朱の粒子

赤色顔料のSEM像とX線スペクトル図

あとがき

旧石器時代から奈良・平安時代までの膨大な量の遺物を前に1年間で報告書ができるだろうかという不安を抱いたのが4月当初のことであった。この不安をいただいたまま月日は確実に過ぎてゆき、あとがきを書く時期が来てしまった。

資料の細かい検討・分析は十分できなかつたが、なるだけ多くの遺物の掲載と事実報告に努めたつもりである。調査中や整理作業中に多くの方々に指導・助言をいただいたが、とくに縄文時代晩期についてはそれらを十分に生かしえなかつたことを反省している。

発掘調査や整理・報告書作成作業にあたり、多くの方々に御協力いただいた。心より感謝いたします。

発掘作業

野元為行、本白水時則、立本末盛、森山進、塩満照夫、寺園満清、森山幸男、柳田寅光、郷原秀行、森山芳男、大須板志、森山早苗、山口益男、森山安盛、森山幸雄、川崎和人、野元ツルエ、野元サナエ、野元フジ子、長友ツル、野元ミヨ子、小園サダ子、本白水時江、本白水ナツエ、小薄正子、久保田タヅ子、森山キリエ、小薄礼子、小薄敏子、山本幸子、紺屋フジエ、小迫サヨ子、豊崎キミエ、寺田キミエ、有村ユミ、寺田チエ、有村シズ子、芝原久子、大津タツエ、東吉セツ子、東吉ムツ子、瀬戸ロノブ、本白水ユミ、小薄キミ子、諏訪なみ子、垣内ムツ子、立本みよ子、郷原てる子、切江サキ、佐藤利江、東小野みち子、東貞子、山元春子、堂園とし子、栗脇文字子、大窪美津子、吉元美代子、郷原キヨ子、森山キヨ、森山サチエ、郷原テル子、郷原フミ子、郷原ミチエ、郷原スギ、郷原キヨ、吉元キクエ、川井田智栄子、郷原フミエ、郷原ハル、前之原キクエ、東トヨ子、森山ムツ子、郷原ヨシミ、郷原シズエ、森山マサエ、森山サエ子、奥村タエ子、奥村ハギエ、郷原ナル、東キヌエ、山口タミエ、新地美代子、蔵ヶ崎美江子、今徳豊子、岩元ハツエ、的場きみ子、大須イネ、西門さき子、大平エミ子、西柳カズエ、郷原サチエ、郷原ヨシエ、郷原多美子、加世田ミヨ子、小薄チエ、小屋ミヤ子、大西ヤエ、土橋イクエ、田中トミ、本白水とし子、山口エミ子、原田ツキ、浜田タマ子、郷原サチ子、郷原カズ子、茅場スミ、岡元キミエ

整理作業

下畠節子、中原己美子、臼井綾子、後堂悦子、竹下マリ子、高倉晴美、春山まり子、東志津子、竹下淳子、早川孝子、沼時子、高木照子、村山尚子

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(4)

榎崎 B 遺跡

発行日 1993年3月31日
発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒890
鹿児島県始良郡始良町平松6252
印刷 株式会社 朝日印刷
〒890 鹿児島市上荒田854-1
TEL 0992-51-2191